

一般国道9号(名和淀江道路)の改築に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ

鳥取県西伯郡名和町

茶畠六反田遺跡 押平弘法堂遺跡

鳥取県西伯郡大山町

富岡播磨洞遺跡 安原溝尻遺跡

2002

財団法人 鳥取県教育文化財団
国土交通省 倉吉工事事務所

鳥取県教育文化財団調査報告書 77

一般国道 9 号（名和淀江道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 II

『茶畠六反田遺跡 押平弘法堂遺跡 富岡播磨洞遺跡 安原溝尻遺跡』

正 誤 表

お手数ですが、以下のとおり訂正の上、御活用ください。

頁 行	誤	正
i 7行目	遺物写真は、独立行政法人～	遺物写真は、X線写真を除き、独立行政法人～
p116 13行目	心と してー」	心としてー」
p118 Fig. 127	土器溜り遺物出土状況図にグリッド記載が無いため、位置が不明確である。	左下隅が平成 12 年度調査の 2 区北西隅に位置する。
p126 Fig. 137	瓦質・陶器	瓦質
p206 Fig. 219	瓦質・陶器	瓦質
p278 Fig. 292	キャプションの位置	土色の下に移動
p281	1. 遺物	1 遺物
p287 Tab. 227	勝間田系	勝間田・亀山系
p292	2. 遺構	2 遺構
PL. 46	鉄関連・鉄X線(3)	鉄関連遺物・鉄X線(3)

一般国道9号(名和淀江道路)の改築に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ

鳥取県西伯郡名和町

茶畠六反田遺跡
押平弘法堂遺跡

鳥取県西伯郡大山町

富岡播磨洞遺跡
安原溝尻遺跡

2002

財団法人 鳥取県教育文化財団
国土交通省 倉吉工事事務所



茶畠六反田遺跡から大山を望む



押平弘法堂遺跡 SK11

序

鳥取県は、北は日本海を隔てて大陸と向かい合い、南は中国山地が日本海側にせまる山地の多い地形の中に、風紋の美しい鳥取砂丘や白砂青松の山陰海岸、その美しい姿から伯耆富士と称される大山など風光明媚な自然環境にかこまれています。また、県内いたるところで温泉が湧き、農林水産資源にも恵まれているところから、毎年多くの観光客が鳥取県を訪れています。

こうした中、来たるべき新しい時代の高速交通道路網の整備に向けて、県土を横断する高規格道路の建設が急がれており、こうした開発事業に伴う埋蔵文化財の発掘件数も増加しています。最近では国指定史跡となった弥生時代の大集落跡『妻木晩田遺跡』^{むきばんだいせき}や日本屈指の弥生資料が発見された『青谷上寺地遺跡』^{あおやかみじせき}など、鳥取県の成り立ちを物語る貴重な遺跡も数多く発見されております。

ところで、当教育文化財団は平成12・13年度事業として一般国道9号（名和淀江道路）の改築工事に伴い、「茶畑六反田遺跡」「押平弘法堂遺跡」^{おひらこうぼうどう}「富岡播磨洞遺跡」「安原溝尻遺跡」の発掘調査を行いました。どの遺跡も当該地域の歴史を解き明かす上で重要な情報を得ることができたと考えています。

今回、これらの調査結果を報告書にまとめることができました。本報告書が広く活用され、郷土の歴史を解き明かす一助になることを期待するとともに、文化財に対する理解がより深まれば幸いと思います。

最後になりましたが、調査に際しまして、多大な御理解と御協力をいただいた国土交通省倉吉工事事務所ならびに地元の方々をはじめとする関係各位に対し、心から感謝するとともに厚くお礼を申し上げます。

平成14年3月

財団法人 鳥取県教育文化財団

理事長 有田 博充

序 文

一般国道9号は、京都市を起点として京都府福知山市を経由し兵庫県から鳥取県に入り、日本海に沿って西走し、島根県益田市から中国山地を越えて山口市、下関市に至る総延長約691kmの幹線道路であり、西日本の日本海沿岸地域の産業・経済活動の大動脈として大きな役割を果たしています。

このうち国土交通省倉吉工事事務所は、東伯郡泊村から米子市（鳥取・島根県境）までの76.6kmを管轄しており、時代の要請に沿った各種の道路整備事業を実施しているところです。

こうしたなか名和淀江道路は、西伯郡名和町から淀江町にかけての国道9号の渋滞等混雑の緩和、冬季などの交通障害等の解消、県内の安全かつ円滑な東西交通ルートの確保、また災害時の緊急輸送の代替道路確保を目的として計画された高規格幹線道路（自動車専用道路）であり、平成8年度から事業に着手しています。

このルートには、多数の「埋蔵文化財包蔵地」がありますが、鳥取県教育委員会と協議を行い、文化財保護法第57条の3の規定に基づき文化庁に通知した結果、事前に発掘調査を実施し、記録保存を行うこととなりました。

このうち平成12年度は「押平弘法堂遺跡」「安原溝尻遺跡」「茶畠六反田遺跡（2・3区）」、平成13年度は「茶畠六反田遺跡（1区）」「富岡播磨洞遺跡」の4遺跡について財団法人鳥取県教育文化財団と発掘調査委託契約を締結し、発掘調査が行われました。

本書はこの調査結果をまとめたものです。この貴重な「記録」が文化財に対する認識と理解を深め、広く活用されることを願うとともに、国土交通省の道路事業が文化財保護に深い関心を持ち、記録保存に努力していることを御理解いただければ幸いに存じます。

おわりに、事前の協議をはじめ、現地での調査から報告書の編集に至るまでご尽力いただいた鳥取県教育委員会及び財団法人鳥取県教育文化財団の関係各位に対し、心から感謝申し上げます。

平成14年3月

国土交通省 倉吉工事事務所長

田 中 雅 次

例　　言

1. 本報告書は、平成12年度(2000)と平成13年度(2001)に調査した一般国道9号(名和淀江道路)の改築に伴う茶畠六反田遺跡、押平弘法堂遺跡、富岡播磨洞遺跡、安原溝尻遺跡の埋蔵文化財発掘調査記録である。
2. 今回調査された全ての遺跡は国土座標第V系に対応し、南北方向はアルファベット、東西方向はアラビア数字で北東杭を基準とする10mグリッドを設定した。方位は座標を基にし、レベルは海拔標高(m)である。押平弘法堂遺跡は調査と報告のグリッドを変更したため、新旧名を座標一覧表に記した。
3. 本報告書は写真図版も含め、第4章3(3)を岡野、第6章を西川、他は八時が執筆・編集した。
4. 遺構写真是調査員が、遺物写真是、独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所の牛嶋 茂氏、杉本和樹氏が撮影した。
5. 出土した石製品の石材鑑定を放送大学鳥取地域学習センター長の赤木三郎氏、鉄製品の鑑定と観察表の作成をたたら研究会委員の穴澤義功氏に依頼し、本文中の記載もこれに基づいている。また、調査地の火碎流堆積物について鳥取大学地域教育科学部教授の岡田昭明氏、須恵器の胎土分析を奈良教育大学前教授三辻利一、中世須恵器の胎土分析を岡山理科大学主任技術員の白石 純氏に依頼し、玉稿をいただいた。
6. 出土遺物に注記した遺跡名は下記の略称を用いた。
茶畠六反田遺跡：茶六、押平弘法堂遺跡：オシ平、富岡播磨洞遺跡：トミオカ、安原溝尻遺跡：安ミゾ
7. 本報告書における遺構・遺物記号は下記のように表す。ピットについては調査時と報告書掲載の遺構名を変更しており、新旧名を一覧表に付した。鉄製品は一括して遺跡毎に通番号を付し、本文の最後に掲載した。
遺構……S I：竪穴住居　　S K：土坑　　S A：棚跡　　S D：溝状遺構　　P：柱穴・ピット
遺物……F：鉄製品　　B：銅製品　　C：錢貨（記号の無いものは土器・陶器・磁器）　W：木製品
8. 数量にみえる場合は推定復元値、△は残存値を示す。遺物実測図は須恵器が断面黒塗り、それ以外は断面白抜きとした。土器にみえるスクリーントーン、石製品にみえる主な記号は下記の通りである。観察表に記載する土器の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修の標準土色帳2000年版に基づいている。また、文章中に述べる土器形式名及び時期（年代観）は、各文末の注・参考文献に記した。
9. 出土遺物・図面・写真是鳥取県埋蔵文化財センターが保管している。
10. 現地調査及び報告書作成に当たり下記の方々・組織に御指導・御協力をいただきました。記して感謝いたします。
池澤俊幸 井上貴央 宇野隆夫 岡崎雄二郎 横田正徳 古代土器研究会 佐伯純也 澤田正明
重金誠 烏根県教育委員会 武田恭彰 日本中世土器研究会 辻信広 土橋理子 中野晴久
西尾克己 西尾秀道 丹羽野裕 根鉢輝雄 能登健 東森晋 平石充 平尾政幸 広江耕史
松江市教育委員会 間野大悉 村上勇 目次謙一 百瀬正恒 山口剛 山中敏史 吉岡康暢
吉田和彦 渡邊晶（五十音順、敬称略）

目 次

第1章 調査の経緯

1 調査に至る経緯	1
2 調査の経過と方法	1
3 調査体制	2

第2章 歴史的環境

第3章 茶畑六反田遺跡の調査

1 茶畑六反田遺跡の立地と層序	7
2 第2・第3遺構検出面の調査	
(1) 積穴住居跡	13
(2) 据立柱建物跡	13
(3) 土坑	15
(4) 蝦状遺構	18
(5) 溝状遺構	18
(6) ピット群	23
(7) 遺構外出土遺物	30
3 第1遺構検出面の調査	
(1) 据立柱建物跡	31
(2) 土坑	53
(3) 横跡	76
(4) ピット群	79
(5) 溝状遺構	95
(6) 耕作痕	116
(7) 土器溜まり	120
(8) 集石	121
(9) 包含層出土遺物	122
(10) 遺構外出土遺物	132
(11) 鉄闇連遺物	139

第4章 押平弘法堂遺跡の調査

1 押平弘法堂遺跡の立地と層序	146
2 第1遺構検出面の調査	
(1) 据立柱建物跡	148
(2) 土坑	167
(3) 溝状遺構	185
(4) 横跡	186
(5) ピット群	187
(6) 包含層・遺構外出土遺物	200
3 第2・第3遺構検出面の調査	
(1) 土坑	208

(2) ピット群	210
(3) 土壙墓群	217
4 鉄関連遺物	228

第5章 富岡播磨洞遺跡の調査

1 富岡播磨洞遺跡の立地と層序	235
2 発掘調査の成果	
(1) 播磨洞古墳群・古墳時代の溝状遺構	235
(2) 古墳以外の溝状遺構	239
(3) 土坑	251
(4) 挖立柱建物跡	260
(5) 櫃跡	260
(6) ピット群	261
(7) 遺構外出土遺物	265
(8) 鉄関連遺物	269

第6章 安原溝尻遺跡の調査

1 調査の経過と方法	270
2 基本層序	270
3 発掘調査の成果	
(1) 土坑	273
(2) 溝状遺構	273
(3) 遺構外出土遺物	277

第7章 考 察

1 遺物	
(1) 在地土器	281
(2) 墓書土器・ヘラ書き土器	284
(3) 中世須恵器・陶器・貿易陶磁器	287
(4) 鉄製品	289
2 遺構	
(1) 平安時代の溝状遺構	292
(2) 中世の集落	292
(3) 中世の埋葬施設	296

第8章 特 論

(1) 岡田 昭明 「名和町茶畠の火碎流堆積物」	303
(2) 三辻 利一 「茶畠六反田遺跡出土土器の蛍光X線分析」	305
(3) 白石 純 「中世亀山・勝間田系須恵器の胎土分析」	308
(4) 渡辺 正巳 「茶畠六反田遺跡における花粉分析」	314
(5) 本吉 恵理子・岡田 文男 「茶畠六反田遺跡出土漆膜の塗膜構造調査」	317
(6) 株式会社古環境研究所 「茶畠六反田遺跡・押平弘法堂遺跡の放射性炭素年代測定」	318
(7) パリノ・サーヴェイ株式会社 「押平弘法堂遺跡土坑内埋土脂肪酸分析」	319
(8) パリノ・サーヴェイ株式会社 「安原溝尻遺跡の自然科学分析」	325

挿図目次

Fig.1	遺跡周辺地形図	1	Fig.39	S B 13・14遺構図	38
Fig.2	遺跡位置図	4	Fig.40	S B 15・16遺構図	39
Fig.3	周辺遺跡分布図	5	Fig.41	S B 17・18遺構図	40
Fig.4	遺跡周辺地質図	5	Fig.42	S B 19・20遺構図	41
茶畠六反田遺跡					
Fig.5	調査区土層図（1）	8	Fig.43	S B 20出土遺物実測図	41
Fig.6	調査区上層図（2）	9	Fig.44	S B 21遺構図	42
Fig.7	第1・第2遺構面遺構全体図（1）	10	Fig.45	S B 22・23遺構図	43
Fig.8	第1・第2遺構面遺構全体図（2）	11・12	Fig.46	S B 24・25遺構図	44
Fig.9	1区第3遺構面遺構全体図	13	Fig.47	S B 26・27遺構図	45
Fig.10	S I 1・S D 3遺構図	14	Fig.48	S B 28・29遺構図	46
Fig.11	S I 1出土遺物実測図	14	Fig.49	S B 30遺構図	47
Fig.12	S B 1遺構図	15	Fig.50	S B 31遺構図	48
Fig.13	S K 1・2・3・4遺構図	16	Fig.51	S B 32・33遺構図	49
Fig.14	S K 1出土遺物実測図	16	Fig.52	S B 34・35遺構図	50
Fig.15	S K 5・6・7・8・65遺構図	17	Fig.53	S B 36・37遺構図	51
Fig.16	畝状遺構・S D 1遺構図	18	Fig.54	S B 38遺構図	52
Fig.17	S D 1出土遺物実測図	18	Fig.55	S K 9・10・11・12遺構図	55
Fig.18	S D 13出土遺物実測図	19	Fig.56	S K 11出土遺物実測図	55
Fig.19	S D 13遺構図	19	Fig.57	S K 13・14・15・16・17遺構図	56
Fig.20	S D 31出土遺物実測図	20	Fig.58	S K 16出土遺物実測図	56
Fig.21	S D 31遺構図	21	Fig.59	S K 18・19・20・21・22・23遺構図	57
Fig.22	S D 32遺構図	21	Fig.60	S K 24・25・26・27遺構図	58
Fig.23	S D 32出土遺物実測図	22	Fig.61	S K 23・24・28・29・31出土遺物 実測図	58
Fig.24	S D 33遺構図	23	Fig.62	S K 28・29・30・31・32遺構図	59
Fig.25	S D 32出土遺物実測図	23	Fig.63	S K 33・34・35遺構図	60
Fig.26	3区ピット群全体図	25	Fig.64	S K 36・37・38遺構図	61
Fig.27	1区第3遺構面ピット群全体図	26	Fig.65	S K 36・37・38出土遺物実測図	61
Fig.28	1・2区第2・3遺構面ピット群全体図	27	Fig.66	S K 39・40・41・42・43遺構図	62
Fig.29	第2・第3遺構面出土遺物実測図	28	Fig.67	S K 44出土遺物実測図	62
Fig.30	黒褐色土包含層出土遺物実測図	29	Fig.68	S K 44遺構図	63
Fig.31	遺構外出土遺物実測図	30	Fig.69	S K 45・46遺構図	64
Fig.32	S B 2遺構図	32	Fig.70	S K 47・48・49遺構図	65
Fig.33	S B 3・4遺構図	33	Fig.71	S K 50・51・52・53遺構図	66
Fig.34	S B 5・6遺構図	34	Fig.72	S K 48・49・51出土遺物実測図	66
Fig.35	S B 7・8遺構図	35	Fig.73	S K 54・55・56・57・58遺構図	67
Fig.36	S B 9・10遺構図	36	Fig.74	S K 57出土遺物実測図	67
Fig.37	S B 11・12遺構図	37	Fig.75	S K 59遺構図	68
Fig.38	S B 12P1出土遺物実測図	37	Fig.76	S K 59出土遺物実測図	68

Fig.77	S K 60・61・62遺構図	69	Fig.117	S D 15・18・19遺構図	109
Fig.78	S K 62出土遺物実測図	69	Fig.118	S D 15出土遺物実測図	111
Fig.79	S K 63・64・66遺構図	70	Fig.119	S D 16・21遺構図	112
Fig.80	S K 63・64・66出土遺物実測図	70	Fig.120	S D 23・24遺構図	113
Fig.81	S K 67・68・69・70・71遺構図	71	Fig.121	S D 23・24出土遺物実測図	113
Fig.82	S K 70出土遺物実測図	71	Fig.122	S D 25・26・27・28遺構図	114
Fig.83	S K 72・73・74・75・76・77・78遺構図	72	Fig.123	S D 30出土遺物実測図	114
Fig.84	S K 79・80・81・82遺構図	73	Fig.124	S D 29・30遺構図	115
Fig.85	S K 77・80・81出土遺物実測図	73	Fig.125	耕作痕平面図(1)、耕作痕断面図	116
Fig.86	S K 80出土遺物実測図	73	Fig.126	耕作痕平面図(2)	117
Fig.87	S K 83・84・85・86遺構図	74	Fig.127	土器溜まり遺物出土状況図	118
Fig.88	S K 85・87出土遺物実測図	75	Fig.128	土器溜まり出土遺物実測図(1)	119
Fig.89	S K 87遺構図	75	Fig.129	土器溜まり出土遺物実測図(2)	120
Fig.90	S A1・2・3遺構図	76	Fig.130	集石1・2遺構図	121
Fig.91	S A4・5・6・7・8遺構図	77	Fig.131	集石1・2出土遺物実測図	121
Fig.92	S A9遺構図	78	Fig.132	包含層出土遺物出土状況図	122
Fig.93	ビット群出土遺物実測図	79	Fig.133	包含層出土遺物実測図(1)	123
Fig.94	P 447・184・130遺構図	80	Fig.134	包含層出土遺物実測図(2)	124
Fig.95	P 800遺構図	81	Fig.135	包含層出土遺物実測図(3)	125
Fig.96	P 800出土遺物実測図	81	Fig.136	包含層出土遺物実測図(4)	125
Fig.97	ビット群全体図(1)	82	Fig.137	茶畑六反田遺跡出土土器・陶器分布図	126
Fig.98	ビット群全体図(2)	83	Fig.138	包含層出土遺物実測図(5)	127
Fig.99	ビット群全体図(3)	84	Fig.139	包含層出土遺物実測図(6)	127
Fig.100	ビット群全体図(4)	85	Fig.140	包含層出土遺物実測図(7)	128
Fig.101	ビット群全体図(5)	86	Fig.141	包含層出土遺物実測図(8)	129
Fig.102	ビット群全体図(6)	87	Fig.142	包含層出土遺物実測図(9)	130
Fig.103	S D 2遺構図	96	Fig.143	包含層出土遺物実測図(10)	131
Fig.104	S D 2出土遺物実測図(1)	96	Fig.144	遺構外出土遺物実測図(1)	132
Fig.105	S D 2出土遺物実測図(2)	97	Fig.145	遺構外出土遺物実測図(2)	133
Fig.106	S D 4遺構図(1)	98	Fig.146	遺構外出土遺物実測図(3)	135
Fig.107	S D 4遺構図(2)	99	Fig.147	遺構外出土遺物実測図(4)	137
Fig.108	S D 4出土遺物実測図	99	Fig.148	遺構外出土遺物実測図(5)	138
Fig.109	S D 5・6・7・8・9遺構図	101	Fig.149	遺構外出土遺物実測図(6)	138
Fig.110	S D 4出土遺物実測図	103	Fig.150	鉄闕連遺物構成図	140
Fig.111	S D 10・11・20遺構図	104	Fig.151	鉄闕連遺物実測図(1)	141
Fig.112	S D 5・8・9・10・11出土遺物実測図	105	Fig.152	鉄闕連遺物実測図(2)	142
Fig.113	S D 12遺構図	106		押平弘法堂遺跡	
Fig.114	S D 12出土遺物実測図	107	Fig.153	第1遺構面全体図	146
Fig.115	S D 14・17・22遺構図	108	Fig.154	第2遺構面全体図	147
Fig.116	S D 14出土遺物実測図	108	Fig.155	調査区土層断面図	148

Fig.156	S B1遺構図	149	Fig.197	S K38・41・42・43・44遺構図	181
Fig.157	S B1出土遺物実測図	149	Fig.198	S K43出土遺物実測図	181
Fig.158	S B2・3遺構図	150	Fig.199	S K45・46・47・48・49・50 ・51・52・53・54遺構図	182
Fig.159	S B2・3出土遺物実測図	150	Fig.200	S K47出土遺物実測図	182
Fig.160	S B4・5遺構図	151	Fig.201	S D1・2・3・4・5遺構図	183
Fig.161	S B6・7遺構図	152	Fig.202	S D1出土遺物実測図	183
Fig.162	S B8遺構図	153	Fig.203	S A1・2・3・4遺構図	184
Fig.163	S B8・9出土遺物実測図	153	Fig.204	S A5遺構図	185
Fig.164	S B9・10遺構図	154	Fig.205	S A6・7遺構図	186
Fig.165	S B11遺構図	155	Fig.206	ピット群遺物出土状況図(1)	187
Fig.166	S B12遺物出土状況図	156	Fig.207	ピット群遺物出土状況図(2)	188
Fig.167	S B12出土遺物実測図	156	Fig.208	ピット群出土遺物実測図	188
Fig.168	S B12遺構図	157	Fig.209	第1遺構面ピット群全体図(1)	190
Fig.169	S B13・14遺構図	158	Fig.210	第1遺構面ピット群全体図(2)	191
Fig.170	S B15・16遺構図	159	Fig.211	第1遺構面ピット群全体図(3)	192
Fig.171	S B17・18遺構図	160	Fig.212	第1遺構面ピット群全体図(4)	193
Fig.172	S B19・20遺構図	161	Fig.213	包含層出土遺物実測図(1)	200
Fig.173	S B21・22遺構図	162	Fig.214	包含層遺物出土状況図	201
Fig.174	S B23・24遺構図	163	Fig.215	包含層出土遺物実測図(2)	203
Fig.175	S B23・24出土遺物実測図	164	Fig.216	包含層出土遺物実測図(3)	204
Fig.176	S B25出土遺物実測図	165	Fig.217	包含層出土遺物実測図(4)	205
Fig.177	S B25遺構図	165	Fig.218	包含層出土遺物実測図(5)	206
Fig.178	S B26遺構図	166	Fig.219	押平弘法堂遺跡出土土器・ 陶磁器分布図(包含層)	206
Fig.179	S B26出土遺物実測図	166	Fig.220	遺構外出土遺物実測図	207
Fig.180	S K1・2・3出土遺物実測図	167	Fig.221	1区第2遺構面遺構全体図	208
Fig.181	S K1・2・3遺構図	168	Fig.222	S K27・55・56・57・58遺構図	208
Fig.182	S K4・5遺構図	169	Fig.223	S K59遺構図	209
Fig.183	S K5・7出土遺物実測図	169	Fig.224	S K59出土遺物実測図	209
Fig.184	S K6・7・8遺構図	170	Fig.225	S D6・7・8・9遺構図	209
Fig.185	S K9・10遺構図	171	Fig.226	第2遺構面ピット群全体図(1)	210
Fig.186	S K9・10出土遺物実測図	171	Fig.227	第2遺構面ピット群全体図(2)	211
Fig.187	S K11遺構図(1)	172	Fig.228	第2遺構面ピット群全体図(3)	212
Fig.188	S K11遺構図(2)	174	Fig.229	第2遺構面ピット群全体図(4)	213
Fig.189	S K11出土遺物実測図	175	Fig.230	土壙墓群遺構分布図	217
Fig.190	S K12・13遺構図	176	Fig.231	S K28・29・30遺構図	218
Fig.191	S K14・15・16・17・18・19遺構図	177	Fig.232	S K31・32・33・34・35遺構図	219
Fig.192	S K13・15・19出土遺物実測図	177	Fig.233	S K36遺構図	220
Fig.193	S K20・21遺構図	178	Fig.234	S K39遺構図	221
Fig.194	S K21・22・25・37出土遺物実測図	178	Fig.235	S K39出土遺物実測図	222
Fig.195	S K22・23遺構図	179			
Fig.196	S K24・25・26・37遺構図	180			

Fig.236	S K40遺構図	223	Fig.273	2区ピット群全体図(1)	258
Fig.237	S K40遺物出土状況図	224	Fig.274	2区ピット群全体図(2)	259
Fig.238	S K40出土遺物実測図(1)	225	Fig.275	2区ピット群全体図(3)	260
Fig.239	S K40出土遺物実測図(2)	226	Fig.276	2区ピット群全体図(4)	261
Fig.240	遺構外出土遺物実測図	226	Fig.277	遺構外出土遺物実測図(1)	264
Fig.241	鉄閥連遺物構成図	228	Fig.278	遺構外出土遺物実測図(2)	265
Fig.242	鉄閥連遺物実測図(1)	229	Fig.279	鉄閥連遺物構成図・実測図	266
Fig.243	鉄閥連遺物実測図(2)	230	Fig.280	鉄閥連遺物X線写真	269
Fig.244	鉄閥連遺物実測図(3)	231		安原溝尻遺跡	
	富岡播磨洞遺跡		Fig.281	安原溝尻遺跡周辺地形図	270
Fig.245	調査区全体図(1)	236	Fig.282	安原溝尻遺跡遺構全体図	271
Fig.246	調査区全体図(2)	237	Fig.283	調査区南東壁土層断面図	272
Fig.247	1号墳遺構図	238	Fig.284	S K-1遺構図	273
Fig.248	2号墳遺構図	239	Fig.285	S D-1出土遺物実測図	274
Fig.249	3号墳遺構図	240	Fig.286	S D-1・4土層断面図	274
Fig.250	1・2・3号墳出土遺物実測図	240	Fig.287	S D-2・3・5遺構図	275
Fig.251	4号墳遺構図	241	Fig.288	S D-2・3土層断面図	276
Fig.252	4号墳出土遺物実測図	243	Fig.289	S D-2出土遺物実測図	276
Fig.253	S D4・5・6・7・15遺構図	244	Fig.290	S D-3出土遺物実測図	276
Fig.254	S D7・15出土遺物実測図	244	Fig.291	S D-3・4土層断面図	277
Fig.255	S D9・10・11・14遺構図	245	Fig.292	S D-4土層断面図	278
Fig.256	S D6・9・11・14出土遺物実測図	246	Fig.293	S D-5出土遺物実測図	278
Fig.257	S D12遺構図	247	Fig.294	遺構外出土遺物実測図	279
Fig.258	S D12・13出土遺物実測図	249		考察	
Fig.259	S D13遺構図	250	Fig.295	遺跡位置図	281
Fig.260	S K1・2・3遺構図	251	Fig.296	古代・中世の土器(1)	282
Fig.261	S K1出土遺物実測図	251	Fig.297	古代・中世の土器(2)	282
Fig.262	S K4・5・6・7・8遺構図	252	Fig.298	土師質皿・杯の法量推移図	283
Fig.263	S K9・10・11・12・13遺構図	253	Fig.299	伯耆出土の墨書き土器(1)	285
Fig.264	S K14遺構図	254	Fig.300	伯耆出土の墨書き土器(2)	286
Fig.265	S K14出土遺物実測図	254	Fig.301	胎土分析資料実測図	288
Fig.266	S K15・16・17遺構図	255	Fig.302	山陰中世の鉄製品(1)	290
Fig.267	S K17出土遺物実測図	255	Fig.303	山陰中世の鉄製品(2)	291
Fig.268	S B1・S A1遺構図	256	Fig.304	名和町条里推定図(岩永案)	292
Fig.269	S A2・3・4・5遺構図	256	Fig.305	名和町条里復元図(案)	293
Fig.270	3区ピット群全体図	258	Fig.306	掘立柱建物規模・主軸一覧	295
Fig.271	P 290遺物出土状況図	258	Fig.307	集落概念図	295
Fig.272	P 206・290出土遺物実測図	258	Fig.308	伯耆における中世墓の変遷	296
			Fig.309	伯耆における中世の埋葬施設	298

挿表目次

茶畠六反田遺跡

Tab.1 周辺遺跡一覧表	6	Tab.39 S B20出土遺物観察表	41
Tab.2 グリッド座標一覧表(1)	9	Tab.40 S B21ピット一覧表	42
Tab.3 グリッド座標一覧表(2)	10	Tab.41 S B22ピット一覧表	43
Tab.4 S I 1ピット一覧表	14	Tab.42 S B23ピット一覧表	43
Tab.5 S I 1出土遺物観察表	14	Tab.43 S B24ピット一覧表	44
Tab.6 S B1ピット一覧表	15	Tab.44 S B25ピット一覧表	44
Tab.7 第2・3遺構面土坑一覧表	15	Tab.45 S B26ピット一覧表	45
Tab.8 S K1出土遺物観察表	16	Tab.46 S B27ピット一覧表	45
Tab.9 S K65ピット一覧表	17	Tab.47 S B28ピット一覧表	46
Tab.10 S D1出土遺物観察表	18	Tab.48 S B29ピット一覧表	46
Tab.11 第2・3遺構面溝状遺構一覧表	19	Tab.49 S B30ピット一覧表	47
Tab.12 S D13出土遺物観察表	20	Tab.50 S B31ピット一覧表	48
Tab.13 S D31・32出土遺物観察表	22	Tab.51 S B32ピット一覧表	49
Tab.14 第2・3遺構面ピット一覧表(1)	24	Tab.52 S B33ピット一覧表	49
Tab.15 第2・3遺構面ピット一覧表(2)	26	Tab.53 S B34ピット一覧表	49
Tab.16 第2・3遺構面出土遺物観察表	28	Tab.54 S B35ピット一覧表	49
Tab.17 黒褐色土包含層出土遺物観察表	29	Tab.55 S B36ピット一覧表	51
Tab.18 遺構外出土遺物観察表	30	Tab.56 S B37ピット一覧表	51
Tab.19 据立柱建物一覧表	31	Tab.57 S B38ピット一覧表	52
Tab.20 S B2ピット一覧表	32	Tab.58 第1遺構面上坑一覧表	53
Tab.21 S B3ピット一覧表	33	Tab.59 S K11出土遺物観察表	55
Tab.22 S B4ピット一覧表	33	Tab.60 S K16出土遺物観察表	56
Tab.23 S B5ピット一覧表	34	Tab.61 S K23・24・28・29・31出土遺物 観察表	58
Tab.24 S B6ピット一覧表	34	Tab.62 S K36・37・38出土遺物観察表	61
Tab.25 S B7ピット一覧表	35	Tab.63 S K44出土遺物観察表	62
Tab.26 S B8ピット一覧表	35	Tab.64 S K48・49・51出土遺物観察表	66
Tab.27 S B9ピット一覧表	36	Tab.65 S K57出土遺物観察表	67
Tab.28 S B10ピット一覧表	36	Tab.66 S K59出土遺物観察表	68
Tab.29 S B11ピット一覧表	38	Tab.67 S K62出土遺物観察表	69
Tab.30 S B12ピット一覧表	38	Tab.68 S K63・64・66出土遺物観察表	70
Tab.31 S B13ピット一覧表	38	Tab.69 S K70出土遺物観察表	71
Tab.32 S B14ピット一覧表	38	Tab.70 S K77・80・81出土遺物観察表	73
Tab.33 S B15ピット一覧表	39	Tab.71 S K85・87出土遺物観察表	75
Tab.34 S B16ピット一覧表	39	Tab.72 S A1ピット一覧表	76
Tab.35 S B17ピット一覧表	40	Tab.73 S A2ピット一覧表	76
Tab.36 S B18ピット一覧表	40	Tab.74 S A3ピット一覧表	76
Tab.37 S B19ピット一覧表	41	Tab.75 S A4ピット一覧表	77
Tab.38 S B20ピット一覧表	41		

Tab.76	S A5ピット一覧表	77	Tab.116	遺構外出土遺物観察表(5)	138
Tab.77	S A6ピット一覧表	77	Tab.117	遺構外出土遺物観察表(6)	138
Tab.78	S A7ピット一覧表	77	Tab.118	鉄闇連遺物観察表(1)	143
Tab.79	S A8ピット一覧表	77	Tab.119	鉄闇連遺物観察表(2)	144
Tab.80	S A9ピット一覧表	78	Tab.120	鉄闇連遺物観察表(3)	145
Tab.81	ピット群出土遺物観察表	79		押平弘法堂遺跡	
Tab.82	P 800出土遺物観察表	81	Tab.121	グリッド座標一覧表	147
Tab.83	第1遺構面ピット一覧表(1)	88	Tab.122	掘立柱建物一覧表	148
Tab.84	第1遺構面ピット一覧表(2)	89	Tab.123	S B1ピット一覧表	149
Tab.85	第1遺構面ピット一覧表(3)	90	Tab.124	S B1出土遺物観察表	149
Tab.86	第1遺構面ピット一覧表(4)	91	Tab.125	S B2ピット一覧表	150
Tab.87	第1遺構面ピット一覧表(5)	92	Tab.126	S B3ピット一覧表	150
Tab.88	第1遺構面ピット一覧表(6)	93	Tab.127	S B2・3出土遺物観察表	150
Tab.89	第1遺構面ピット一覧表(7)	94	Tab.128	S B4ピット一覧表	151
Tab.90	第1遺構面溝状遺構一覧表	95	Tab.129	S B5ピット一覧表	151
Tab.91	S D2出土遺物観察表	97	Tab.130	S B6ピット一覧表	152
Tab.92	S D4出土遺物観察表(1)	100	Tab.131	S B7ピット一覧表	152
Tab.93	S D4出土遺物観察表(2)	102	Tab.132	S B8・9出土遺物観察表	153
Tab.94	S D5・8・9・10・11出土遺物観察表	105	Tab.133	S B8ピット一覧表	153
Tab.95	S D12・14出土遺物観察表	107	Tab.134	S B9ピット一覧表	155
Tab.96	S D15出土遺物観察表(1)	110	Tab.135	S B10ピット一覧表	155
Tab.97	S D15出土遺物観察表(2)	111	Tab.136	S B11ピット一覧表	155
Tab.98	S D23・24出土遺物観察表	113	Tab.137	S B12ピット一覧表	156
Tab.99	S D30出土遺物観察表	114	Tab.138	S B12出土遺物観察表	156
Tab.100	土器溜まり出土遺物観察表(1)	119	Tab.139	S B13ピット一覧表	158
Tab.101	土器溜まり出土遺物観察表(2)	120	Tab.140	S B14ピット一覧表	158
Tab.102	集石出土遺物観察表	121	Tab.141	S B15ピット一覧表	159
Tab.103	包含層出土遺物観察表(1)	123	Tab.142	S B16ピット一覧表	159
Tab.104	包含層出土遺物観察表(2)	124	Tab.143	S B17ピット一覧表	160
Tab.105	包含層出土遺物観察表(3)	125	Tab.144	S B18ピット一覧表	160
Tab.106	包含層出土遺物観察表(4)	125	Tab.145	S B19ピット一覧表	161
Tab.107	包含層出土遺物観察表(5)	127	Tab.146	S B20ピット一覧表	161
Tab.108	包含層出土遺物観察表(6)	128	Tab.147	S B21ピット一覧表	162
Tab.109	包含層出土遺物観察表(7)	129	Tab.148	S B22ピット一覧表	162
Tab.110	包含層出土遺物観察表(8)	130	Tab.149	S B23ピット一覧表	164
Tab.111	包含層出土遺物観察表(9)	131	Tab.150	S B24ピット一覧表	164
Tab.112	遺構外出土遺物観察表(1)	132	Tab.151	S B23・24出土遺物観察表	164
Tab.113	遺構外出土遺物観察表(2)	133	Tab.152	S B25ピット一覧表	164
Tab.114	遺構外出土遺物観察表(3)	134	Tab.153	S B25出土遺物観察表	164
Tab.115	遺構外出土遺物観察表(4)	136	Tab.154	S B26ピット一覧表	166

Tab.155	S B26出土遺物観察表	166	Tab.194	鉄関連遺物観察表(2)	232
Tab.156	土坑一覧表	167	Tab.195	鉄関連遺物観察表(3)	233
Tab.157	S K1・2・3出土遺物観察表	167	Tab.196	鉄関連遺物観察表(4)	234
Tab.158	S K5・7出土遺物観察表	169	富岡播磨洞遺跡		
Tab.159	S K9・10出土遺物観察表	171	Tab.197	古墳一覧表	235
Tab.160	S K11出土遺物観察表	173	Tab.198	グリッド座標一覧表(1)	236
Tab.161	S K13・15・19出土遺物観察表	177	Tab.199	グリッド座標一覧表(2)	237
Tab.162	S K21・22・25・37出土遺物観察表	178	Tab.200	1・2・3号墳出土遺物観察表	240
Tab.163	S K43出土遺物観察表	181	Tab.201	4号墳出土遺物観察表	242
Tab.164	S K47出土遺物観察表	182	Tab.202	古墳以外の溝一覧表	242
Tab.165	S D1・2・3・4・5一覧表	183	Tab.203	S D7・15出土遺物観察表	245
Tab.166	S D1出土遺物観察表	183	Tab.204	S D6・9・11・14出土遺物観察表	246
Tab.167	S A1ピット一覧表	184	Tab.205	S D12出土遺物レベル一覧表	247
Tab.168	S A2ピット一覧表	184	Tab.206	S D12・13出土遺物観察表	248
Tab.169	S A3ピット一覧表	184	Tab.207	土坑一覧表	251
Tab.170	S A4ピット一覧表	184	Tab.208	S K1出土遺物観察表	251
Tab.171	S A5ピット一覧表	185	Tab.209	S K14出土遺物観察表	254
Tab.172	S A6ピット一覧表	186	Tab.210	S K17出土遺物観察表	255
Tab.173	S A7ピット一覧表	186	Tab.211	S B1ピット一覧表	256
Tab.174	ピット群出土遺物観察表	189	Tab.212	S A1ピット一覧表	256
Tab.175	第1遺構面ピット群一覧表(1)	194	Tab.213	S A2ピット一覧表	257
Tab.176	第1遺構面ピット群一覧表(2)	195	Tab.214	S A3ピット一覧表	257
Tab.177	第1遺構面ピット群一覧表(3)	196	Tab.215	S A4ピット一覧表	257
Tab.178	第1遺構面ピット群一覧表(4)	197	Tab.216	S A5ピット一覧表	257
Tab.179	第1遺構面ピット群一覧表(5)	198	Tab.217	ピット群出土遺物観察表	259
Tab.180	第1遺構面ピット群一覧表(6)	199	Tab.218	ピット群一覧表(1)	262
Tab.181	包含層出土遺物観察表(1)	200	Tab.219	ピット群一覧表(2)	263
Tab.182	包含層出土遺物観察表(2)	202	Tab.220	ピット群一覧表(3)	264
Tab.183	包含層出土遺物観察表(3)	204	Tab.221	遺構外出土遺物観察表(1)	264
Tab.184	包含層出土遺物観察表(4)	205	Tab.222	遺構外出土遺物観察表(2)	265
Tab.185	包含層出土遺物観察表(5)	206	Tab.223	鉄関連遺物観察表(1)	267
Tab.186	遺構外出土遺物観察表	207	Tab.224	鉄関連遺物観察表(2)	268
Tab.187	S K59出土遺物観察表	209	安原溝尻遺跡		
Tab.188	第2・3遺構面ピット群一覧表(1)	214	Tab.225	土器・石器観察表	280
Tab.189	第2・3遺構面ピット群一覧表(2)	215	考察		
Tab.190	土坑・土壙墓群一覧表	216	Tab.226	伯耆出土の墨書き器一覧表	284
Tab.191	S D6・7・8・9一覧表	216	Tab.227	中世須恵器・陶磁器一覧表	287
Tab.192	S K39・S K40・遺構外 出土遺物観察表	227	Tab.228	伯耆の中世墓集錦(1)	299
Tab.193	鉄関連遺物観察表(1)	231	Tab.229	伯耆の中世墓集錦(2)	300
			Tab.230	伯耆の中世墓集錦(3)	301
			Tab.231	伯耆の中世墓集錦(4)	302

第1章 調査の経緯

1 調査に至る経緯

国道9号は京都市から兵庫県、鳥取県、島根県を通り山口県下関市まで続く総延長約671kmの幹線道路である。このうち国土交通省倉吉工事事務所では東伯郡泊村から米子市までの76.6kmを管轄し、米子～淀江間はすでに高規格幹線道路（自動車専用道路）が開通・運用されている。

またその一環として、名和淀江道路が計画されており、これは名和町から淀江町にかけての国道9号の渋滞混雑の緩和や災害時の緊急輸送の代替道路確保などを目的としている。

道路の建設予定地となる名和町・大山町は県内でも有数の「埋蔵文化財包蔵地」であり、名和町では茶塚六反田遺跡・押平弘法堂遺跡、大山町では富岡播磨洞遺跡・安原溝尻遺跡などの遺跡や散布地があるため、建設に先立ち、遺跡の状況を把握するために試掘調査が行われ、それぞれの遺跡で遺構や遺物が出土した。

（名和町教育委員会 1999. 3 「茶畠山道跡」、大山町教育委員会 2000. 3 「大山町内遺跡発掘調査報告書」）～「大山町内開発事業及び高規格道路建設」に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書～

その結果を受け、国土交通省倉吉工事事務所は、鳥取県教育委員会文化課と協議を行い、文化財保護法第57条の3の規定に基づき文化庁に通知した結果、事前に発掘調査を実施するよう指示を受け、記録保存を行うことを決定した。

2 調査の経過と方法

茶畠六反田遺跡

茶畠六反田遺跡は名和町大字茶畠字塚田・六反田・菅造に所在する。3つの地区に分かれ、西から1区・2区・3区とした。調査は3区から開始し、2・3区を平成12年4月から9月、1区を平成13年4月から7月まで調査した。その結果、弥生時代中期後半の住居、平安時代の溝状遺構、鎌倉時代の集落や耕作痕跡、近世の遺構などが検出できた。主な遺構面・包含層は、弥生時代の遺構検出面、縄文～弥生時代の包含層、平安～鎌倉時代の遺構検出面、平安～鎌倉時代の遺物包含層があり、順次掘り下げながら調査した。

押平弘法堂遺跡

押平弘法堂遺跡は名和町大字押平字塚田・前塚田の阿弥陀川の東側、茶畠六反田遺跡の約300m南西に位置する。調査区は東西方向を流れる水路を挟んで1区と2・3区の調査区に分けた。1区は平成12年8月から12月まで、2・3区は平成12年9月から12月まで並行して調査した。その結果、弥生時代中期後半の墓、鎌倉時代の集落、平安時代や江戸時代の遺構などが検出された。層序はほぼ茶畠六反田遺跡と同様で、弥生時代の遺構検出面、縄文～弥生時代の包含層、鎌倉時代の遺構検出面、鎌倉時代以降の遺物包含層など、順次掘り下げながら調査した。

富岡播磨洞遺跡

富岡播磨洞遺跡は大山町大字富岡字播磨洞・文殊ノ前に所在する。平成13年7月から10月まで調査した。調査区は丘陵部の2区を挟み東側の低地を1区、西側の低地を3区と設定した。遺構検出面は基本的に1面であるが、部分的に縄文～古墳時代の包含層を検出した。2区で播磨洞古墳群を発見し、4基の古墳を調査した。そのほか掘立柱建物、土坑、溝状遺構、横跡、ピット群を、1区では奈良時代の溝と縄文～弥生時代の土器を含む自然流路、3区では鎌倉時代のピット群を調査した。

安原溝尻遺跡

安原溝尻遺跡は大山町大字安原字溝尻に所在し、淀江平野の南東端、富岡播磨洞遺跡の約350m南西に位置する。平成12年4月から6月まで調査を行い、擾乱が著しいものの、縄文土器を含む自然流路を検出した。

3 調査体制

平成12年度 ○調査主体 財團法人鳥取県教育文化財団

理事長 有田 博 充（鳥取県教育委員会教育長）
常務理事 関 敏 之（鳥取県教育委員会事務局次長）
事務局長 岡山 宏 德
鳥取県埋蔵文化財センター

所長 古井 喜 紀（県埋蔵文化財センター所長）
次長 八木谷 昇
調整係長 山桥 雅 美
文化財主事 高垣 陽 子
主任事務職員 矢部 美 恵
事務職員 小林 順 子

○調査担当 西部埋蔵文化財名和調査事務所

所長 西村 成 徳
主任調査員 八峠 興
主任調査員 西川 薫
調査員 松本 哲 郎
調査員 手島 尚 樹
調査員 岡野 雅 则
整理員 小椋 美 佳
山崎 福 子

平成13年度 ○調査主体 財團法人鳥取県教育文化財団

理事長 有田 博 充（鳥取県教育委員会教育長）
常務理事 関 敏 之（鳥取県教育委員会事務局次長）
事務局長 岡山 宏 德
鳥取県埋蔵文化財センター

所長 中村 登（県埋蔵文化財センター所長）
次長 小林 勉（6月退職）
次長 加藤 隆 昭
調整係長（兼） 加藤 隆 昭
文化財主事 高垣 陽 子
主任事務職員 矢部 美 恵
事務職員 小林 順 子

○調査担当 西部埋蔵文化財名和調査事務所

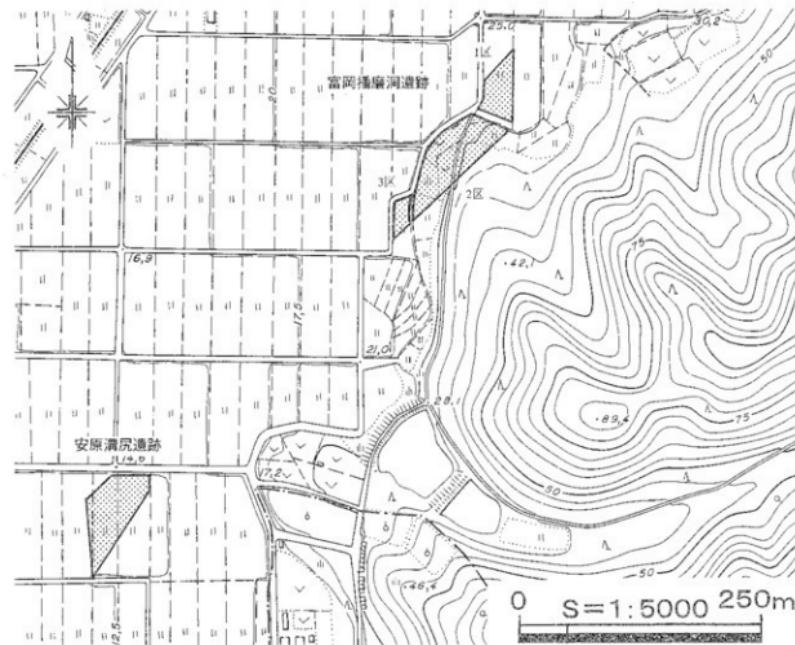
所長 西村 成 徳
主任調査員 八峠 興
調査員 手島 尚 樹
調査員 小谷 郁 夫
整理員 中田 真 理

○調査指導 鳥取県教育委員会事務局文化課、鳥取県埋蔵文化財センター

○調査協力 名和町教育委員会、大山町教育委員会



名和町の2,500分の1図「地形図No.11・12」(平成7年)を5,000分の1に縮小



大山村の5,000分の1図「平面図その3」(昭和53年)

Fig. 1 遺跡周辺地形図

第2章 歴史的環境

旧石器時代の遺構は県内では確認されていないが、大山山麓では旧石器が発見されている。

縄文時代は早期の押型文土器が名和町の36.上大山第1遺跡、27.角塚遺跡から、大山町の42.大這原遺跡、44.塚田遺跡から確認されている。後期になると大山町の43.原郷遺跡、名和町の17.古御堂遺跡、8.南川遺跡があり、南川遺跡から石組炉をもつ住居跡が確認されている。安原溝尻遺跡では時期は不明ながら縄文時代の可能性のある溝状遺構が検出されている。

弥生時代は前期の遺跡が大山町の39.上野遺跡、名和町の15.大塚岩田遺跡があり、ここから環濠の可能性のある溝状遺構が検出されている。中期になると集落はやや丘陵側で検出される。大山町では41.新田原遺跡、名和町では20.茶畑山道遺跡とその南隣に位置する茶畑六反田遺跡がある。後期にはさらに丘陵の上側に名和町の24.東高田遺跡や大山町から淀江町にかけて48.妻木晩田遺跡がある。ここからは850棟以上の建物跡や住居のほか四隅突出型埴丘墓や環濠が検出されている。弥生末～古墳時代初めには淀江町の49.徳森方墳がある。

古墳時代の遺跡は群集墳を中心となる。中期から後期にかけて、今回新たに播磨洞古墳群の確認された大山町の富岡播磨洞遺跡、ほかに名和町の7.ハンボ塚古墳がある。後期になると淀江町の長者ヶ平古墳や56.岩屋古墳など大規模な古墳を含む47.向山古墳群をはじめ46.平古墳群、52.源平山古墳群、53.宮内古墳群、54.向原古墳群、55.蔵岡古墳群などがある。名和町では6.积迦堂古墳、11.坪田古墳群、12.宮長古墳群、22.茶畑古墳群、25.門前古墳群、33.高田古墳群、45.客尾山古墳群などが造られる。

白鳳時代には寺院の建立がはじまり、淀江町の57.上淀廐寺跡では彩色壁画片が出土した。奈良時代にかけて律令制が施行され伯耆国・丹波國の国守や山陰道の駅などが整備された。遺跡地付近は汗入郡に該当し、和奈駅（奈和の訛記か）が置かれていた。28.柄原遺跡では須恵器の窯跡が調査されており、汗入郡の郡衙推定地に比較的近いことから、これに供給していたことも考えられる。奈良時代には名和町で軒丸瓦が出土した32.高田原遺跡がある。大山町の富岡播磨洞遺跡でも溝状遺構が検出されている。

平安時代は前期の様相は不明瞭であるが、中期には名和町の茶畑六反田遺跡で綠釉陶器や墨書き土器を含む溝状遺構が検出されている。また16.大塚塚根遺跡でも建物跡や綠釉陶器が出土しており、南隣の18.大塚巣敷遺跡では建物跡が調査されている。この時期は条里制が整備され、淀江平野は耕者にみられる。

鎌倉時代になると名和町では扇状地に集落がみられるようになる。茶畑六反田遺跡は21.茶畠本村遺跡の北隣にあり、同一の集落を営む。西側には主兵城の集落の中に巣敷墓が検出された押平弘法堂遺跡が、南側には耕作痕跡の調査が行われた14.文殊領巣敷遺跡があり、次第に集落の様子が明らかになりつつある。

中世後期以降の様相は明らかではないが、茶畑六反田遺跡では耕作痕跡が確認されている。また名和町の13.門前鍾石群では鍾石建物が検出されている。

近から現代までは集落の位置も固定し、現代に至ると考えられる。



Fig.2 遺跡位置図

周辺遺跡分布図

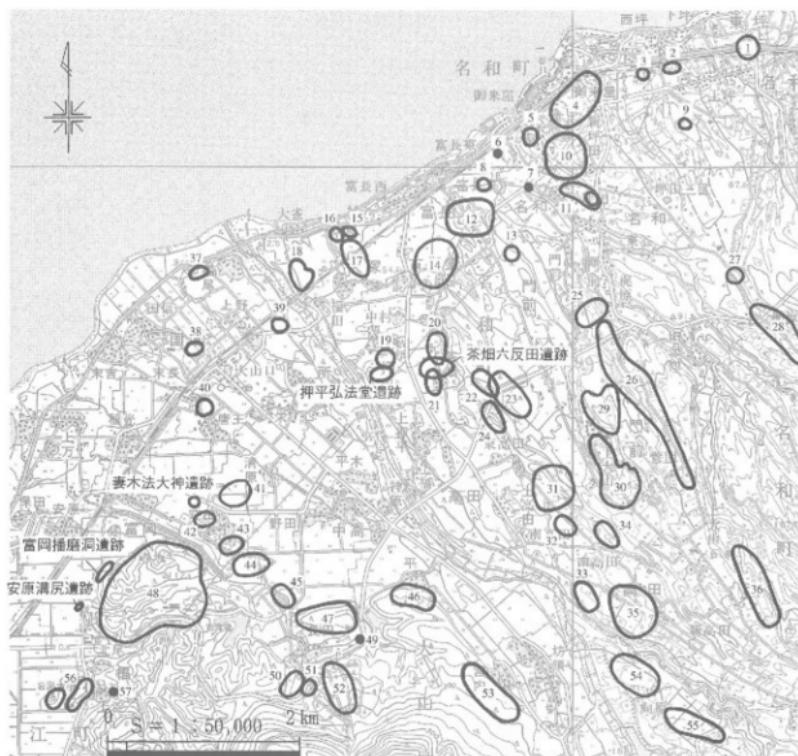


Fig.3 周辺遺跡分布図 國土地理院発行 5万分の1地形図「美保間」「糸子」「赤崎」「大山」



g 球 C 1 砂岩物 L 3 大山上部火成岩 Sg 3 中山輝石 Dn 名和町石流 L 2 大山中層火成岩 Da 大山安山岩類 Pv 3 稲吉安山岩

Dk 孝當山安山岩 L 1 大山下部・幾下部火成岩 Sg 1 羽柴組輝石 Ds 外輪山沿岸 Dm 清口豪灰角砾岩

図集：農林水産省中国国際貿易局調査部 調査者：赤木三郎、岡田昭明（鳥取大学教育学部） 1981 農業用地地下水調査利用基礎調査鳥取地区（その2）『鳥取県水理地質図』 1:100,000を1:200,000に縮小

Fig.4 遺跡周辺地質図

Tab. 1 周辺遺跡一覧表

遺跡名	古石	縄文	弥生時代		古墳時代		歴史時代			備考	
			前期	中期	後期	中期	後期	飛奈	平安		
茶畠六反田遺跡		○	△	○					○	○	○ 本報告書
押平弘法堂遺跡			△		○				△	○	○ 本報告書
富岡捕鹿制遺跡			△					●	○	○	○ 本報告書
安原溝尻遺跡			○						○		○ 本報告書
妻木大神遺跡		○	○								調査中
1 能光寺遺跡										○	
2 東坪第2・西坪第1遺跡			△								
3 西坪東山土遺跡											散布地
4 御米屋所在遺跡											散布地
5 朝瀬谷遺跡								●			散布地
6 船道堂古墳			△								
7 ハンボ塚古墳							●				
8 南川遺跡			○								後期住居
9 西坪人頭遺跡											散布地
10 長者原遺跡								○	○		
11 坪田遺跡・古墳群							●	△	○		
12 富長古墳群						●	●				散布地
13 門前篠石群											
14 文殊御屋敷遺跡								○	○		
15 大塚岩田遺跡			○								○ 敷地
16 大塚根根遺跡			○	○	○	○	○	○	○		
17 古碑堂遺跡			○								
18 大塚屋敷遺跡								●			
19 沢平天王屋敷遺跡					○			○	○		
20 茶畠山道遺跡											
21 茶畠本村遺跡											
22 茶畠古墳群							●				
23 茶畠遺跡・茶畠第2遺跡		○									
24 東高田遺跡						○					
25 円前古墳群								●		○	
26 門前第3遺跡			○?								
27 角塚遺跡		△									
28 楠原遺跡		△									須恵器窯
29 常岡第1遺跡		△									
30 下大山第6遺跡		△				○					
31 高田古墳群								●			
32 高田原遺跡								●			
33 高山古墳群								●			
34 高田第4遺跡			△								
35 高田第10遺跡			△			○					
36 上天山第1遺跡			△			○					
37 福尾第1遺跡											散布地
38 国信第1遺跡			△								
39 上野遺跡				○	○	○	○			○	散布地
40 唐玉遺跡											
41 新田原遺跡		△				○	○	○			散布地
42 大道原遺跡		△									
43 原瀬遺跡		△									
44 塚田遺跡		△				○	○				
45 容尾山古墳群							●				
46 平古墳群		△				○	○	○	○	△	
47 肉山古墳群								●			
48 妻木晚田遺跡		○		○	○	○	○	○	○		集落・墓
49 慶栗方墳							■				
50 大清水遺跡											散布地
51 大新田遺跡								○	△	△	散布地
52 通平山古墳群								●			
53 宮内古墳群		△				○		△	●	△	
54 向原古墳群								●			
55 藏岡古墳群			△			○	○	○	●		
56 岩瀬古墳								●			
57 上渡魔寺跡							○	○	○		

○○: 遣構・遺物あり

△: 主に遺物あり

■: 古墳

第3章 茶畠六反田遺跡の調査

1 茶畠六反田遺跡の立地と層序 (Fig 5・6, PL 5)

茶畠六反田遺跡は大山の北西に位置し、阿弥陀川の東側に蛇の川という小河川があるが、この左岸の台地上に立地する。大山から日本海に向けて稻作が広がるが、これは大山から放射状に流下する水系により分断されて北または東方向に緩やかに下る地形となる。調査地の現況は、地形を利用して棚田が営まれており、1区の西端が最も標高が高く、北に1段、東に3～4段の棚田が形成されていた。そのため斜面の上側の遺構は掘削されていることが予想された。

調査区の層序は、大山の崩壊地で、いずれも火山噴出物を中心とした堆積層である。下層から、①褐色土、②黒褐色土、③黒色土、④やや明るい黒色土、⑤やや明るい灰褐色土、⑥暗茶褐色土である。①は礫や石を多量に含む層で、②はいわゆる①と③との漸移層、③は通称クロボク(1)と呼称される層である。⑥層上面が第1遺構検出面、⑦層上面が第2遺構検出面、⑧層上面が第3遺構検出面となる。調査地内では概ね1区では3面、2区では2面、3区では1～2面の遺構検出面を確認した。

第1遺構検出面はやや明るい灰褐色土もしくは暗茶褐色土の上面で、表面は鉄分が沈着しており、橙色がかっており硬い。この層が堆積しているのは主に2区の西側と1区である。この面の上では平安時代と鎌倉時代の遺構、一部近世の遺構も存在する。2区および1区の東側ではやや明るい灰褐色土除去後に黒色土の第2遺構検出面があるが、1区の西端では第1と第2遺構検出面の間に1mもの堆積層がある。この層は自然の堆積層なのか人工的に客土されたものかは判断できないが黒色系、灰白色系、褐色系の土が互層に堆積している。

第2遺構検出面は黒色土上面であるが、はっきりと検出できたのは1区西側のS D31・32で、埋土が灰色砂のためである。2・3区では遺構は確認できていない。この黒色土は火山堆積物や腐植物などを含む層で、調査区のほぼ全面を覆っており、厚いところでは50cmある。第3遺構検出面と同様に1区の中央付近から緩やかに東西あるいは北方向に向かい下る。部分的に縄文から弥生時代の遺物を含むが、密度は低く、いずれも住居やピット群など下層で遺構が検出された箇所に集中する。またこの黒色土の上面に明るい白色のシルト層が部分的に見られるが、とくに火山灰を多量に含む層ではなく、自然堆積によるものであろう(2)。

第3遺構検出面は黒色土の下にある褐色系の粗い土あるいは真砂の層で、いわゆる地山と呼称される。II地形を復元すると、1区中央付近の標高が最も高く、東西あるいは北に向かい緩やかに下る。付近は東に蛇の川、西に阿弥陀川が位置することから、これらの川に向かい地形が東西ともに傾斜しているとみられる。遺構は1区の西側で溝状遺構 S D33が、1区と2区西側ではピット群が、3区では堅穴住居 S T 1や落とし穴とみられる上坑 S K 3・4・5などが確認されているが、いずれも理土は黒色土系である。ただしこれらの土坑はS T 1と異なり、埋土は黒色よりも淡く、暗褐色を基調にしていることから、調査では確認できなかったものの、弥生時代の黒色土中位の遺構と、縄文時代の暗褐色土上面の遺構面が想定できよう。

また茶畠六反田遺跡付近では、小河川の際に位置する立地であり、当初から旧石器の存在が推定されたため、河川に最も近い3区の東端にトレントを設定した。トレントの位置から50～60m程北側にある蛇の川へ下る道の切り通しでは、厚さ5mもの灰色の火山層がある。

トレントの層序は、下層から⑦淡黄褐色粘質土(ローム層)、⑧・⑨・⑩灰色疊(火碎流層)、⑪淡黄褐色土で、遺物は出土していない。⑦層の炭化物は火碎流の倒木が炭化したものである。この層が清水原火碎流なのかも和火碎流なのかも問題となる。清水原火碎流は名和川を中心に堆積し、弥山火碎流の一つである。調査区の東側に位置する蛇の川付近が西限とされ、切り通しを観察すると5m以上の火碎流層が認められ、この層と⑦・⑧・⑩層が一致する可能性がある。これらが同一層とすると、3区の東端から蛇の川に向かい火碎流層は徐々に厚く堆積していると考えられる。この層の時期は大山が活動を休止して以降であるが、遺物が含まれている可能性

は低いものとみられる。また、③黒色土の中位にガラス質が比較的多く入る部分がある。しかしガラス質は長石や黒雲母中にも含まれており一概に火山灰とは断定することはできない。

今回調査した茶畑六反田遺跡や押平弘法堂遺跡では黒色土層に造構面があるものと考えられるが、茶畑山道遺跡では弥生時代中期後葉の遺物、大塚塚根遺跡(3)では平安時代中期の遺物が出土しており、黒色土層の時期を特定することはできない。また調査区の西端付近では黒色土が厚く、間に灰白色土などのシルト質の層が入ることがある。ただしこの層には火山ガラスは含まれておらず、二次的な堆積層と考えられる。

H=60.0

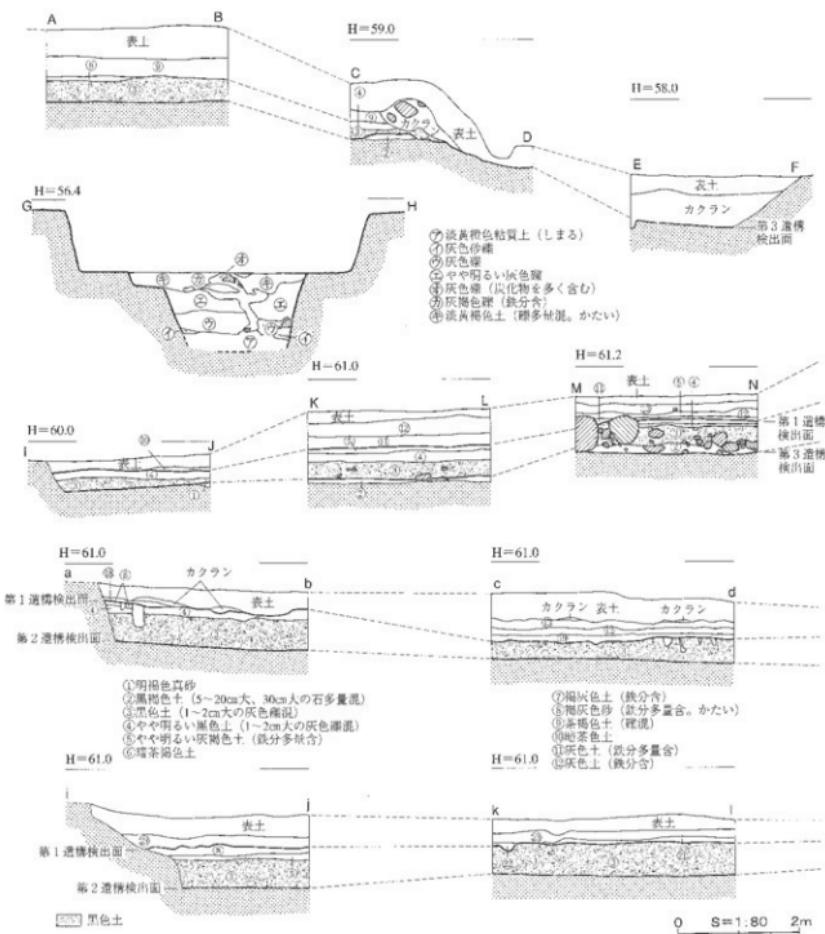


Fig.5 調査区土層図(1)

注

- (1) クロボクの形成については火山噴出物によるものや空気中のダストの堆積、スキキ科などの植物の腐朽したものなどの考えがある。二次的に移動した堆積でも見分けにくい。
- (2) 渡辺正巳氏の教示による。
- (3) 財団法人鳥取県教育文化財団 国土交通省倉吉工事事務所 2001『大塚岩田遺跡 大塚塚根遺跡』

参考文献

- 岡田昭明 1983 「大山火山灰層の層序」
『鳥取大学教育学部研究報告』32巻
- 岡田昭明 1995 「大山テフラと森山原」
『野外研究資料』日本地質教育学会第49回全
国大会実行委員会

Tab.2 グリッド座標一覧表(1)

座標名	X	Y	座標名	X	Y
D3	-57310.000	-77210.000	I6	-57260.000	-77180.000
D4	-57310.000	-77200.000	I7	-57260.000	-77170.000
E3	-57300.000	-77210.000	I8	-57260.000	-77160.000
E4	-57300.000	-77200.000	J3	-57250.000	-77210.000
E5	-57300.000	-77190.000	J4	-57250.000	-77200.000
F3	-57290.000	-77210.000	J5	-57250.000	-77190.000
F4	-57290.000	-77200.000	J6	-57250.000	-77180.000
F5	-57290.000	-77190.000	J7	-57250.000	-77170.000
F6	-57290.000	-77180.000	J8	-57250.000	-77160.000
F7	-57290.000	-77170.000	J9	-57250.000	-77152.000
G3	-57280.000	-77210.000	J10	-57250.000	-77140.000
G4	-57280.000	-77200.000	J11	-57250.000	-77130.000
G5	-57280.000	-77190.000	J12	-57250.000	-77120.000
G6	-57280.000	-77180.000	K5	-57240.000	-77190.000
G7	-57280.000	-77170.000	K6	-57240.000	-77180.000
G8	-57280.000	-77160.000	K7	-57240.000	-77170.000
H3	-57270.000	-77210.000	K8	-57240.000	-77160.000
H4	-57270.000	-77200.000	K9	-57240.000	-77150.000
H5	-57270.000	-77190.000	K10	-57240.000	-77140.000
H6	-57270.000	-77180.000	K11	-57240.000	-77130.000
H7	-57270.000	-77170.000	K12	-57240.000	-77120.000
H8	-57270.000	-77160.000	K13	-57240.000	-77110.000
I3	-57260.000	-77210.000	K14	-57240.000	-77100.000
I4	-57260.000	-77200.000	K15	-57240.000	-77090.000
I5	-57260.000	-77190.000	K16	-57240.000	-77076.000

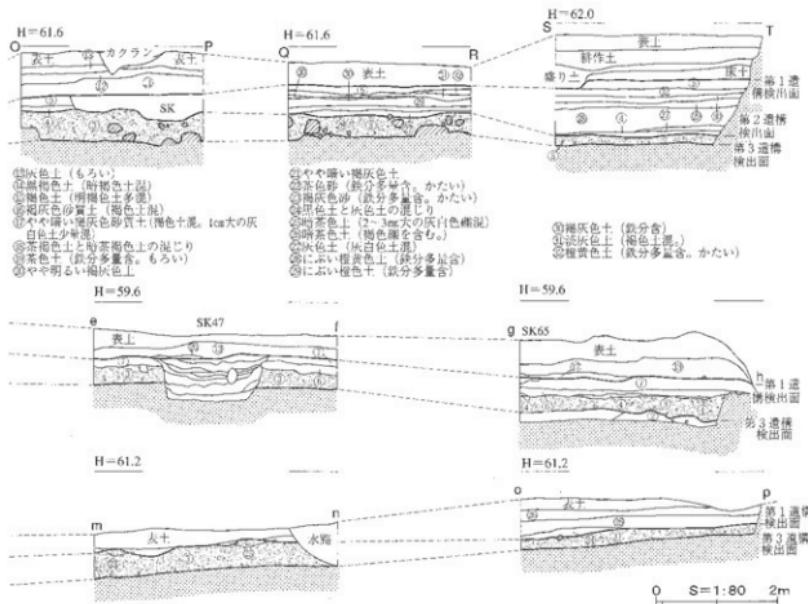


Fig.6 調査区土層図(2)

Tab.3
グリッド座標一覧表(2)

座標名	X	Y
L8	-57230.000	-77160.000
L9	-57230.000	-77150.000
L10	-57230.000	-77140.000
L11	-57230.000	-77130.000
L12	-57230.000	-77120.000
L13	-57230.000	-77110.000
L14	-57230.000	-77100.000
L15	-57230.000	-77090.000
L16	-57230.000	-77080.000
L17	-57230.000	-77070.000
L18	-57230.000	-77060.000
M9	-57220.000	-77150.000
M10	-57220.000	-77140.000
M11	-57220.000	-77130.000
M12	-57220.000	-77120.000
M13	-57220.000	-77110.000
M14	-57220.000	-77100.000
M15	-57220.000	-77090.000
M16	-57220.000	-77080.000
M17	-57220.000	-77070.000
M19	-57220.000	-77060.000
M20	-57220.000	-77040.000
N11	-57210.000	-77130.000
N12	-57210.000	-77120.000
N13	-57210.000	-77110.000
N14	-57210.000	-77100.000
N15	-57210.000	-77090.000
N16	-57210.000	-77080.000
N17	-57210.000	-77070.000
N18	-57210.000	-77060.000
N19	-57210.000	-77050.000
N20	-57210.000	-77040.000
N21	-57210.000	-77030.000
N22	-57210.000	-77020.000
O13	-57200.000	-77110.000
O14	-57200.000	-77100.000
O15	-57200.000	-77090.000
O16	-57200.000	-77080.000
O18	-57200.000	-77060.000
O19	-57200.000	-77050.000
O20	-57200.000	-77040.000
O21	-57200.000	-77030.000
O22	-57200.000	-77020.000
P15	-57190.000	-77090.000
P17	-57190.000	-77070.000
P18	-57190.000	-77060.000
P19	-57190.000	-77050.000
P20	-57190.000	-77040.000
P21	-57190.000	-77030.000
P22	-57190.000	-77020.000
Q17	-57180.000	-77070.000
Q18	-57180.000	-77060.000
Q19	-57180.000	-77050.000
Q20	-57180.000	-77040.000
Q21	-57180.000	-77030.000
R19	-57170.000	-77050.000
R20	-57170.000	-77040.000
R21	-57170.000	-77030.000
R22	-57170.000	-77020.000
S21	-57160.000	-77030.000
S22	-57160.000	-77020.000
S23	-57160.000	-77010.000
T22	-57150.000	-77020.000

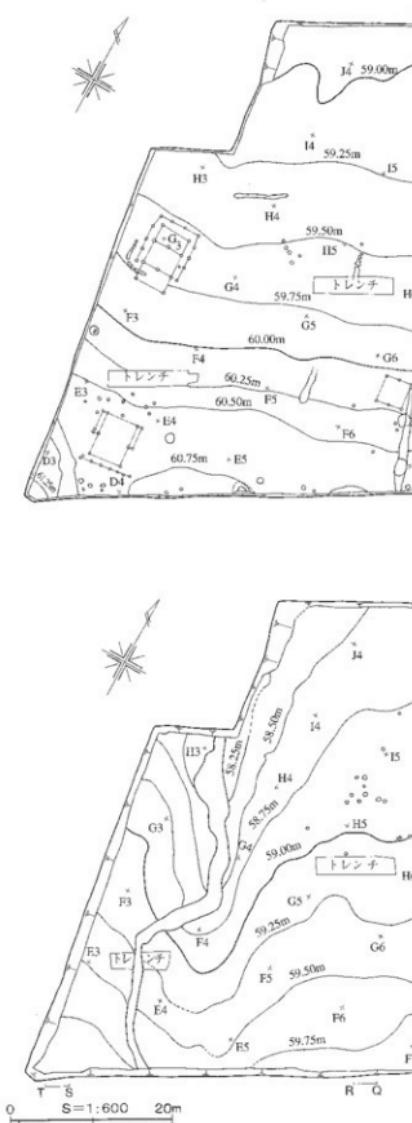
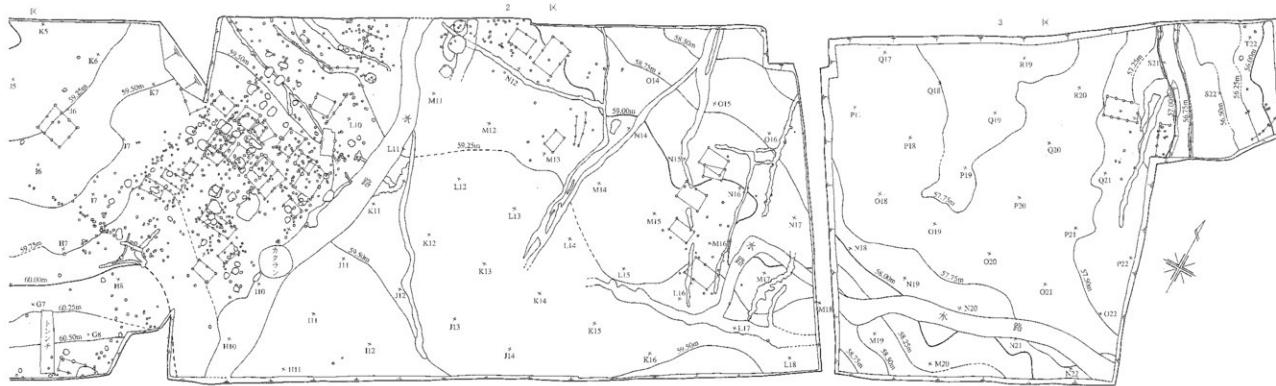
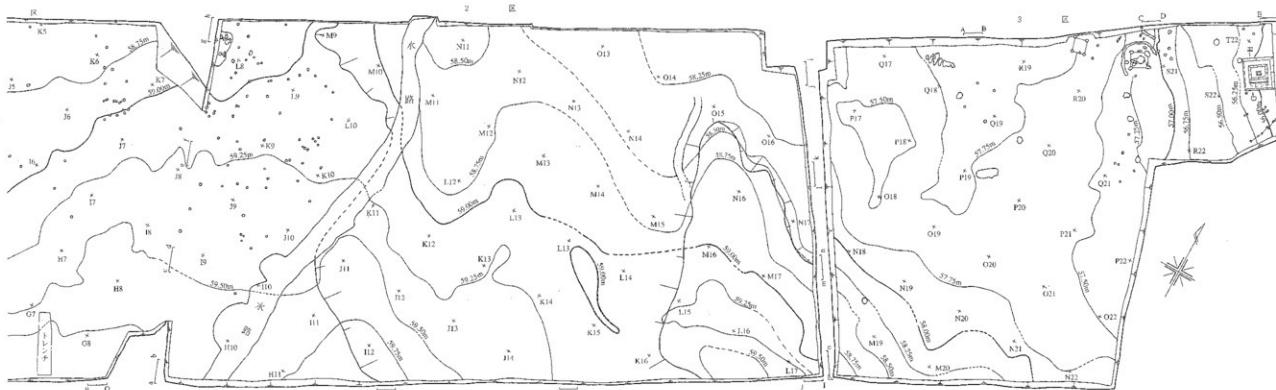


Fig.7 第1・第2遺構面遺構全体図(1)



第1 遺構検出面



第2 遺構検出面

0 S=1:600 20m

Fig.8 第1・第2 遺構面遺構全体図 (2)

2 発掘調査の成果

第2・第3遺構検出面の調査

(1) 堪穴住居跡

S I 1 (Fig.10・11 Tab.4・5 PL.3・19)

3区S・T21グリッドで検出した。検出時にはすでに上面は掘削され、わずかに周溝と柱穴のみ検出した。付近は北東方向に緩やかに下る斜面である。

周溝の南西側は現代の耕作により掘削されていて不明であるが、平面形は円形もしくは隅丸方形、P 1～4の4本が主柱穴と考えられる。周溝や主柱穴の埋土は黒褐色系の土壤で、本来ならば上層の黒色土中から掘り込まれていたと推測できる。また床面は東方向に向かい緩やかに傾いているが、これは掘削されている可能性が高く、したがって貼床の有無は不明である。床面規模は、推定で東西約6m、南北約6.5m、床面積約31m²を測る。検出面および柱穴内から弥生土器が出土した。いずれも細片であるが、壺形土器（以下形土器省略）1、底部2～4、高杯脚部5・6で、1・2は中央ピットとみられるP 5からの出土である。1は、頭部から体部まで的小片で、同時期の壺にはネクタイと呼称される頸部に指頭圧痕貼付突帯をもつものも遺構外から出土している。付近から出土した遺物はSD 2から平安時代の上師質土器が出土した他は、時期的には大きな幅ではなく、いずれも弥生時代中期後半（1）の所産である。これらのことから遺構の時期は弥生時代中期後半で概ね大過ないとみられ、遺構の形状とも矛盾しない。

(2) 掘立柱建物跡

S B 1 (Fig.12 Tab.6)

3区S20グリッドで検出した。検出した範囲では1間×1間であるが、調査区の北端に位置しているため、さ

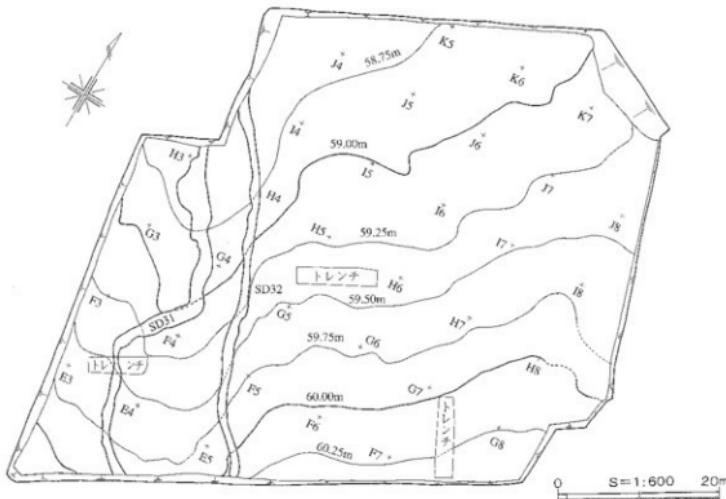


Fig.9 1区第3遺構面遺構全体図

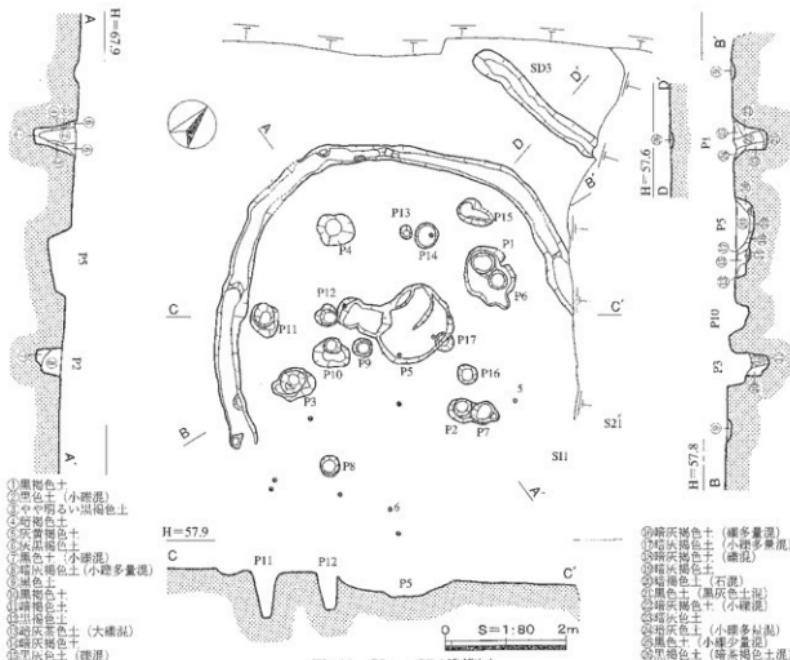
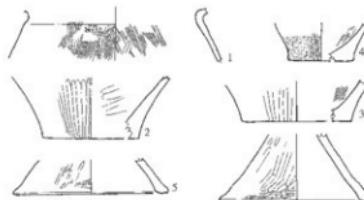


Fig.10 SI1・SD3断面構造図



番号	規格 (cm)	備考	番号	規格 (cm)	備考
P1	43×35-57		P9	31×30-23	
P2	40×35-52		P10	62×47-27	
P3	72×53-66		P11	55×50-78	
P4	63×60-70		P12	35×32-60	
P5	136×107-37	中央ピット	P13	21×18-18	
P6	46×44-60	素・高环	P14	42×38-11	
P7	45×40-40		P15	61×41-17	
P8	35×34-47		P16	34×32-39	
			P17	31×30-13	

Tab.4 SI1 ピット一覧表

Fig.11 SI1出土遺物実測図

Tab.5 SI1出土遺物観察表

No.	Fig. Pl.	遺構名	出土位置	器種	法蓋 (cm)	特徴	地上	色調	備考
1 2	Fig.11 PL.10	S.I.1 P.2	跡上中	弥生土器 腰盤	径△ 43	外縁脚部内方側のナギ、以下底面の内方側な砂粒 ハケ口、笠付茎、内面底方向ハケ口、を含む。	外) にぶい褐色色7SYR4/4 内) にぶい褐色7SYR6/4	前1/8残存	
2	Fig.11 PL.19	S.I.1 P.5	底面上	弥生土器 底盤	△ 51	外縁脚部内方側のみがさ。内面斜め方側の 1cm以上の砂粒を含む。	外) 黒褐色10YR3/1 内) にぶい褐色色10YR6/3	L/12以下残存	
3	Fig.11 PL.19	S.I.1 検出面上	弥生土器 底盤	器高 底盤	△ 34	外縁脚部内方側のみがさ。底面の内方側 0.5cm以上の砂 粒を含む。	灰青褐色10YR6/2	前1/4残存	
4	Fig.11 PL.19	S.I.1 検出面上	弥生土器 底盤	器高 底盤	△ 30 径△ 52	外縁脚部内方側のみがさ。一部に素 地あり、内面底方向のナギ、内面斜め 方向のハケ口後ナギ。	にぶい褐色7SYR6/4	前1/8残存	
5	Fig.11 PL.19	S.I.1 堆中	弥生土器 高杯脚盤	器高 脚盤	△ 34 径△ 125	外縁脚部内方側のみがさ。内面斜め 方向のナギ、内面底方向のみがさ。 内面剥落が著 しい。	にぶい褐色7SYR5/4	前1/6残存	
6	Fig.11 PL.19	S.I.1	埋土中	弥生土器 高杯脚盤	径△ 55 径△ 124	外縁脚部内方側のみがさ。内面剥落が著 しい。腰方向のナギ。外縁脚部内 近に黒斑があり。	外) にぶい褐色7SYR7/4 内) 黑褐色23Y6/1	前1/6残存	

らに北側に規模が広がる可能性はある。遺存状況は悪いが、P3には柱痕が確認できた。

黒色土の下で検出していること、規模および東側にS1があること、埋土が茶褐色系の土であること、遺構の北側に位置する茶畠山道遺跡から検出された弥生時代中期の掘立柱建物跡と規模が似ていることなどから弥生時代の遺構と判断した。ただし建物のプランはほぼ正方形をなしており、中央ピットは存在していないものの竪穴住居の主柱穴となる可能性も否定できない。

(3) 土坑

SK1 (Fig.13・14 Tab.7・8

PL.2・43)

Q20グリッドに位置する。平面形は不整な椭円形状をしており、底面は平坦ではなく、凹凸が著しい。検出時には風倒木痕と判断したが、掘り下げ中に石皿S1が出土したため、遺構と判断した。

S1は遺構の中央やや南側で、凹面を上方に向けた状態で出土した。底面よりも大きく浮いた状態である。半分程度欠損している。土層をみると中央に向かい徐々に堆積しており、いわゆる流れ込んだ様相を呈す。

遺物の時期については、弥生時代のものととらえることができる。北東側には弥生時代中期後半の竪穴住居S1があり、時期差は大きくないであろう。

SK2・7・8 (Fig.13・15 Tab.7)

SK2はS21、SK7はQ19・R19、

SK8はN19グリッドに位置する。いずれも断面形状は皿状を呈する。底面は平坦で、土層は中央に向かい徐々に堆積した状況がうかがわれる。埋土は黒色土で、さらに深い遺構であった可能性も否定できない。

SK3・4・5・6 (Fig.13・15 Tab.7 PL.4)

底面上にピット状の掘り込みをもつ土坑で、周辺ではいわゆる落とし穴(2)と呼称されている。これは底面のピットに逆巻木状の杭を立てたとするものである。今回の調査ではSK4・SK5が同様の形状をもつ。いずれも平面形は長方形～椭円形を基本としており、断面形は逆台形である。

SK3はT22グリッドに位置する。周辺は褐色土のいわゆる地山土となり、本来の遺構検出面から大きく掘

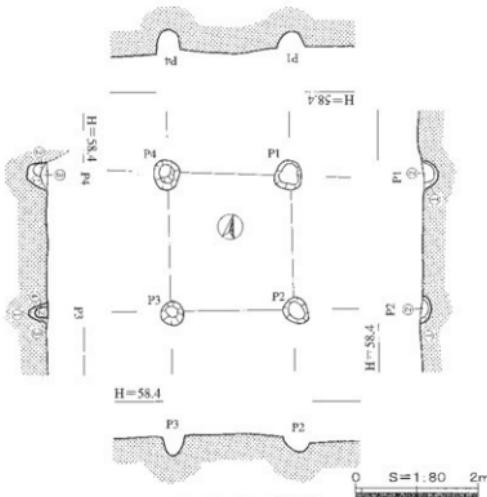


Fig.12 SB1 遺構図

- P 1
①淡茶褐色土（小粒少泉混）
- P 2
②茶褐色土（小穢混）
- ③茶褐色土（小粒多量混）
P 3
- ④淡茶褐色土
- ⑤茶褐色土（小穢混）
- ⑥淡茶褐色土（大穢混）
- ⑦灰褐色土（小穢混）
- ⑧茶褐色土（小穢少量混）

Tab.6 SB1 ピット一覧表

S B 2	長軸 ピット番号	短軸 (cm)	深さ (cm)
P 1	46	42	23.2
P 2	42	38	17.7
P 3	38	34	25.0
P 4	48	42	37.9

Tab.7 第2・3 遺構面土坑一覧表

S K 番号	グリッド名	平面形	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (cm)
SK1	Q20	不整な椭円形	3.60	1.30	44
SK2	S21	不整な椭円形	1.02	0.68	20
SK3	T22	椭円形	0.94	0.68	60
SK4	S21	椭円形	1.02	0.78	112
SK5	Q20	不整な長方形	0.96	0.78	96
SK6	R22	椭円形	0.80	0.72	62
SK7	Q19, R19	不整な椭円形	1.12	0.84	12
SK8	N19	椭丸形	1.02	0.82	18
SK65	L8, M8	方形?	2.80	-	34

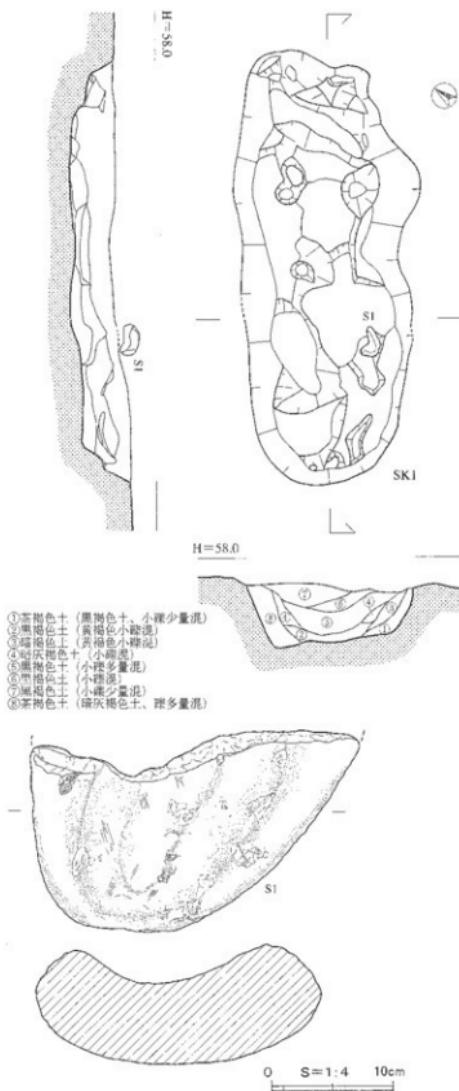


Fig.14 SK 1出土遺物実測図

Tab.8 SK 1出土遺物観察表

Na	Fig. PL	遺構名	出土位置	特徴	石材	備考
SI	Fig.14 PL.43	SK1	検出面7	石製品 石軋 扁平な裏面を加工したもの。断面U字状の握りをもつ。	黒雲母角閃石英安山岩	約1/2残存

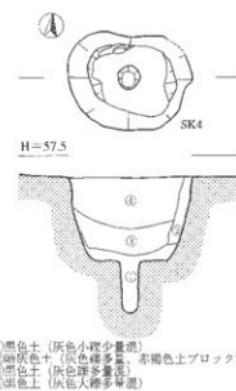
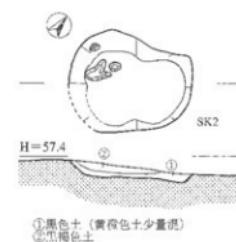


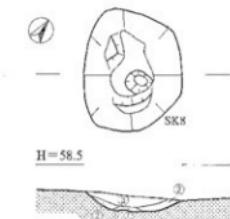
Fig.13 SK 1・2・3・4 遺構図

削されている。平面形は不整な橢円形である。土層はほぼ単層である。中央付近にピットがみられる。

SK 4 は S21 グリッドに位置する。土層は底付近からほぼ水平に堆積している。やはり中央にピットがみられる。

SK 5 は Q20 グリッドに位置する。112cm の深さがある。中央にあるピット状の掘り込みの底部には石が検出できた。この石が意図的に入れられたかは判然としないが、中央立て杭の押さえとして使用されたと考えることも可能である。SK 6 は R22 グリッドに位置する。上面を SD 2 に切られる。底面にピットは無いが断面形状は落とし穴状遺構に類似する。

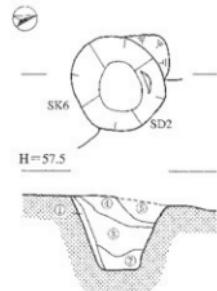
これらの落とし穴状遺構は、SK 3 - SK 4 間が約 16m、SK 4 - SK 5



①暗褐色土 (灰白色膠泥。しまる)
②暗褐色土 (灰白色膠、粘土質土ブロック混)
③黑色土 (灰白色膠泥)

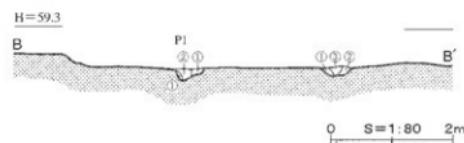
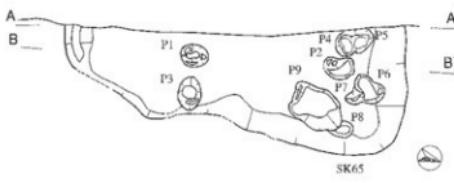


①黑色土上 (小塊混)
②黒色土上 (褐色土ブロック混)
③黒色土 (小塊混量混)
④黒色土 (褐色膠混)
⑤黒色土
⑥黒色土 (灰白色膠混)
⑦黒色土 (赤褐色土ブロック混)
⑧黒色土 (小塊多量混)
⑨黒色土 (やや明るい小塊混)



①水褐色粘質土 (灰色膠泥、砂混)
②暗茶褐色土 (灰白色膠少量混)
③やや褐色がかる黒色土 (灰色膠連)
④やや褐色がかる黒色土 (暗灰色膠混)
⑤黒色土 (灰色膠連)

O S=1:40 1m



Tab.9 SK65ピット一覧表

SK65 ピット番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P 1	47	37	16.5
P 2	53	36	12.7
P 3	55	39	28.4
P 4	67	40	10.6
P 5	63	46	25.7
P 6	54	35	16.2
P 7	32	21	22.2
P 8	43	30	3.7
P 9	100	65	17.3

- ①黒色土と暗褐色土の混じり
- ②黒色土と暗褐色土の混じり (褐色土ブロック多量混)
- ③黒色土と暗褐色土の混じり (褐色土ブロック多量混)
- ④黒色土と暗褐色土の混じり (褐色土ブロック少量混)
- ⑤黒色土と暗褐色土の混じり
- ⑥黒色土 (暗褐色土少量混)
- ⑦黒色土 (褐色土上混)
- ⑧黒色土 (灰褐色土上混)
- ⑨黒色土

Fig.15 SK 5・6・7・8・65 遺構図

5間が約18mで、やや屈曲しながら北東-南西方向に延びる。調査区の東側には蛇の川が北流し、川に向かう動物の捕獲を目的としたのかもしれない。

S K 6 5 (Fig.15 Tab.7・9)

2区第3竪構面、L・M8グリッドに位置する。調査区端にあるため、西側が検出できていない。黒色土除去後に平面形がやや不整な方形の土坑を検出した。立ち上がりは浅く、深いところでも12cm程度である。底面にピット状の掘り込みを7基検出したが不規則な位置である。

(4) 犬状遺構 (Fig.16 PL.4)

R18・19グリッドで検出した。付近は表土から約140cm程掘り下げた黒色土の下面から検出されている。南北方向に連続する溝が連続して検出しているものの遺存状況は悪い。道状遺構の可能性があるが、面が硬化していないこと、埋土が比較的多いこと、形状が比較的不整なことから犬状遺構としておきたい。

(5) 溝状遺構

S D 1・3 (Fig.16・17 Tab.10・11 PL.19)

S D 1はQ・S22グリッドに位置し、平安時代の溝状遺構 S D 2に隣接する。上面に存在する黒色土は掘削されており、褐色土上面から検出された。遺構検出中に遺物が出土している。いずれも弥生土器で、7・8の壺の口縁部、9の底部で、遺物の時期は弥生時代中期後半の所産である。これらは検出面からやや浮いた状況での出土であるため、遺構の時期の特定には至らない。

S D 3は3区のT21グリッドに位置し、竪穴住居 S I 1の周溝に隣接している。

S D 1 3 (Fig.18・19 Tab. 11・12 PL.20・43)

2区N・O15・16グリッドに位置する。黒色土を掘り下げ中に、灰色の砂を基調にした層を検出し、中から弥生土器が出土した。遺存状況は悪く、遺構として確認された範囲の延長部からも遺物が出土しており、付近には弥生時代の遺構も見られないことから S D 13のものとして取り上げた。溝の埋土は砂を基調とした砂利層で、この中に遺物が混入していた。出土遺物はいずれも弥生土器で、石器や鉄器は確認していない。漆形土器(以下形上器を省略)は10~12で、10は直11壺の口縁部である。壺は13~20で、20は指頭圧痕貼り付け突帯をもつ。底部は21~27で、25は外側から内側に向けて穿孔されている。いずれ

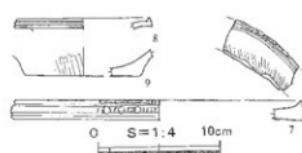


Fig.17 SD 1 出土遺物実測図

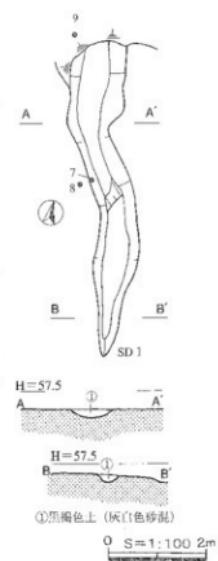
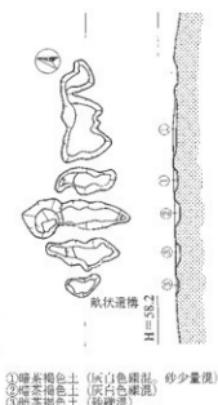


Fig.16 犬状遺構・SD 1 遺構図

Tab.10 SD 1 出土遺物観察表

No.	Fig. PL.	遺構名	出土位置	器種	法量(cm)	特徴	出土	色調	備考
7	Fig.17 PL.19	S D 1	侵出面上 底層底部	円筒 器底 器蓋	径23.4 △ 1.6	下垂する壺部。下表面には2条の凹筋 と凸筋に別れ目貝、中央凸筋に円形浮 きを助ける付帯	1mm程度の長 さ。石英を 多量に含む。	明赤褐色5YR5/6	1/12以下残存
8	Fig.17 PL.19	S D 1	遺構付 近底層 底部	円筒 器底 器蓋	径10.8 △ 1.0	下垂する壺部。下表面には文様なし。	1mm以下の微細 な白英を含む。	褐色7.5YR7/6	1/12以下残存
9	Fig.11 PL.19	S D 1	秋川面上 底層	弥生土器 底盤	径23.3 △ 9.4	外腹側方向のみがき。腹面不定方向の ナメ。内腹不定方向のナメ。	細かな石(石 英)を含む。 内: 深色5YR6/6	約1/6残存	

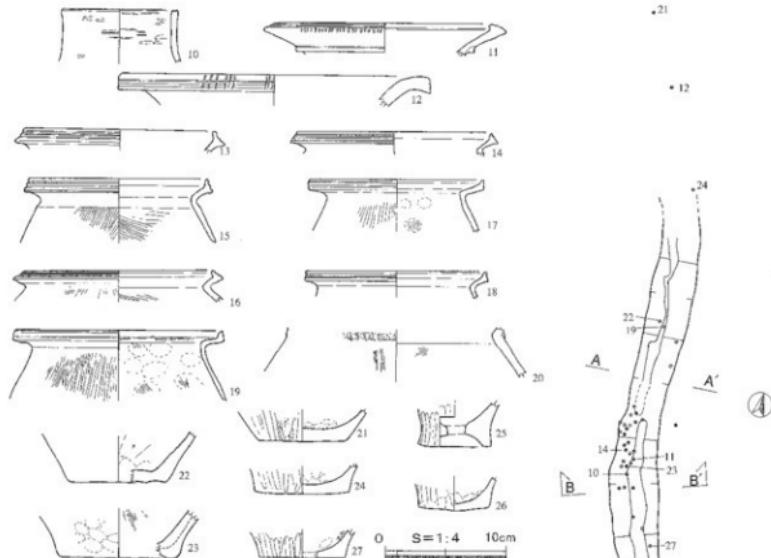


Fig.18 SD13出土遺物実測図

Tab.11 第2・3遺構面溝状造構一覧表

SD番号	グリッド名	主軸	長さ (m)	最大幅 (m)	深さ (cm)
SD 1	S21・22	N-17° - W	43	1.2	35
SD 3	T21	N-91° - W	2.5	0.4	4
SD 13	N15・16 O15	N-42° - W N-13° - W N-50° - E N-13° - E	11.4	1.5	30
SD 31	E4~14 E5G5	N-33° - E	42.7	2.5	50
SD 32	F5~H5 F6I4	N-46° - W N-41° - W N-35° - W N-26° - W	49.5	1.4	75
SD 33	E4~14 E5G5	N-35° - E N-31° - W	46.9	3.7	45

も弥生時代中期後半の所産と考えられる。扁平片刃石斧S 2も出土している。遺構の時期は、これよりも新しい時期の遺物は出土していないことから、遺物の時期から大きく下ることはないものと判断される。砂や砂利が認められることから水の流れたことは認められるが、人為的なものか自然の流路なのかは明らかではない。

SD 31・32 (Fig.20~23・25 Tab.11・13 PL.2・19・20・43)

いずれも黒色土上面、第2遺構検出面上から検出された遺構である。SD 31は1区E 5グリッドほかに位置する。南から東方向に蛇行している。幅は一定であるが深さは浅いところと十坑状の深い部分とがあり、一定しない。埋土には砂や砂利を多く含み、流水で石が移動した痕跡と考えられる。遺物は弥生土器28~34・36が出土した。遺物は細片でいわゆ



①やや深い茶色土 (2~5cm大の灰色ブロック混)

②灰色砂利 (数多量含。土器片混)

③やや明るい灰色土 (砂ブロック、黒色セブロック混)

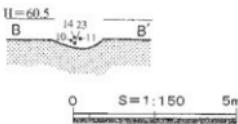


Fig.19 SD13遺構図

Tab.12 SD13出土遺物観察表

No.	Fig. PL.	遺構名	出土位置	器種	法長(cm)	特徴	鉄土	色調	備考
10	Fig.18 PL.20	SD13	埋土上層 壁部	陶生土器 壺形	口径 約 9.6 器高 △ 3.3	外腹横方向のナギ。内腹横方向のケズ リ付ナギ。	1mm以下の砂 鉄を多く含む。	橙色SYR6/8	1/12以下残存
11	Fig.18 PL.20	SD13	検出面上 壁部	陶生土器 壺形	口径 約 22.2 器高 △ 2.1	口縁部分が上方に拡張し、面に3本の 凹縫文を有す。端部の下端には刺込み目 状の修理を施す。	0.5~1mmの大 きな砂鉄を含む。	浅黄色25Y7/3	約1/8残存
12	Fig.18 PL.20	SD13	秋田面上 壁部	陶生土器 壺形	口径 約 25.2 器高 △ 2.5	口縁部分が上方に拡張し、面に3本の 凹縫文を有す。端部の下端には刺込み目 状の修理を施す。	0.5mm以下の 砂鉄を多く含む。	外) 橙褐色25YR5/6 内) 斑状褐色10YR6/2	約1/8残存
13	Fig.18 PL.20	SD13	埋土中 壁部	陶生土器 壺形	口径 約 15.4 器高 △ 1.7	口縁部分が上方に拡張し、面に3本の 凹縫文を有す。端部の下端には刺込み目 状の修理を施す。	0.5mm以下の 砂鉄を含む。	内) 黄褐色10YR7/4	約1/10残存
14	Fig.18 PL.20	SD13	検出面上 壁部	陶生土器 壺形	口径 約 15.5 器高 △ 2.5	口縁部分が上方に拡張し、面に3本の 凹縫文を有す。端部は外腹面とともに斜 方削りで穿たる。	0.5~1mmの大 きな砂鉄を含む。	灰褐色7.5YR5/2	約1/6残存
15	Fig.18 PL.20	SD13	埋土中 壁部	陶生土器 壺形	口径 約 14.6 器高 △ 3.2	口縁部分が上方に拡張し、面に3本の 凹縫文を有す。端部は外腹面とともに斜 方削りで穿たる。	0.5~1mm人の 髪丝の砂鉄を多く (外) に含む。橙色7.5YR7/3 (内) 斑色7.5YR7/6	約1/8残存	
16	Fig.18 PL.20	SD13	検出面上 壁部	陶生土器 壺形	口径 約 15.6 器高 △ 2.6	口縁部分が上方に拡張し、面を強くナ ギする。腹部以下内外腹面とともに横 方向のハケ付ナギ。	0.5mm以下の砂 鉄を含む。	外) 橙褐色7.5YR6/8 内) 斑状褐色10YR4/1	約1/8残存
17	Fig.18 PL.20	SD13	埋土中 壁部	陶生土器 壺形	口径 約 14.4 器高 △ 2.2	口縁部分が上方に拡張し、面に2本の 凹縫文を有す。端部は外腹面とともに斜 方削りで穿たる。	0.5~1mmの大 きな砂鉄を含む。	黄褐色10YR5/3	約1/10残存
18	Fig.18 PL.20	SD13	検出面上 壁部	陶生土器 壺形	口径 約 14.8 器高 △ 2.2	口縁部分が上方に拡張し、面に2本の 凹縫文を有す。端部は外腹面とともに斜 方削りで穿たる。	0.5mmの大 きな砂鉄を含む。	黄褐色7.5YR7/8	約1/10残存
19	Fig.18 PL.20	SD13	埋土下層 壁部	陶生土器 壺形	口径 約 19.0 器高 △ 5.8	口縁部分が上方に拡張し、面に3本の 凹縫文を有す。端部は外腹面とともに斜 方削りで穿たる。	0.5mm以下の砂 鉄を含む。	褐色7.5YR6/8	約1/5残存
20	Fig.18 PL.20	SD13	埋土中 壁部	陶生土器 壺形	口径 約 4.3	口縁部分が上方に拡張し、面に3本の 凹縫文を有す。端部は外腹面とともに斜 方削りで穿たる。	1mm程度の長 さと、6mmを 超える。	内) に含む。黄褐色10YR7/4	約1/8残存
21	Fig.18 PL.20	SD13	検出面上 底部	陶高足 底盤	高さ △ 2.6 底径 約 7.2	立ち上がりが内腹面に於けるのみに複数の 凹縫文を有す。底盤は内腹面とともに丁寧なナギ。 内腹面ともに直面には刺込み目状の修理を施す。	0.5~3mmの大 きな砂鉄を含む。	内) に含む。黄褐色10YR7/4	約1/3残存
22	Fig.18 PL.20	SD13	埋土下層 底盤	陶高足 底盤	高さ △ 3.9 底径 約 8.5	立ち上がりが内腹面に於けるのみに複数の 凹縫文を有す。底盤は内腹面とともに丁寧なナギ。 内腹面ともに直面には刺込み目状の修理を施す。	0.5~1mmの大 きな砂鉄を含む。	内) に含む。黄褐色10YR5/3 外) 黄褐色7.5YR4/6	約1/4残存
23	Fig.18 PL.20	SD13	埋土中層 底盤	陶高足 底盤	高さ △ 4.0 底径 約 5.8	立ち上がりが内腹面に於けるのみに複数の 凹縫文を有す。底盤は内腹面とともに丁寧なナギ。 内腹面ともに直面には刺込み目状の修理を施す。	1~2mmの砂鉄 を多く含む。	内) 黄褐色7.5YR6/8 外) 黄褐色7.5YR6/4	約1/4残存
24	Fig.18 PL.20	SD13	検出面上 底盤	陶生土器 底盤	口径 1.3 底径 △ 7.8	外腹立上がりが内腹面のみにあり、底 面は丁寧なナギ。内腹は斜め方角付の ナギ。	0.5mm以下の砂 鉄を多く含む。	褐褐色2.5YR5/8	底部のみ完存
25	Fig.18 PL.20	SD13	不明 付近	不明	口径 約 3.7	外腹立上がりが内腹面のみにあり、底 面は成形時に抉る。内腹は斜め方角付の ナギ。	1mm以下の砂 鉄を多く含む。	内) に含む。赤褐色5YR5/4	底部のみ完存
26	Fig.18 PL.20	SD13	検出面上 底盤	陶生土器 底盤	底径 约 6.0	外腹立上がりが内腹面のみにあり、底 面は丁寧なナギ。内腹は斜め方角付の ナギ。	1mmの大 きな砂鉄を 多く含む。	黄褐色2.5Y4/1	底部のみ完存
27	Fig.18 PL.20	SD13	中層 底盤	陶生土器 底盤	口径 約 2.3 底径 约 7.0	外腹立上がりが内腹面のみにあり、底 面は丁寧なナギ。内腹は斜め方角付の ナギ。	1mm以上の砂 鉄を多く含む。	外) オリーブ色5YV3/1 内) 蓝色7.5YR7/6	約1/6残存
S2	Fig.20 PL.43	SD13	不明 付近	不明	高さ 5.1 頂 3.9 厚さ 1.0 重さ : 426g	片側の刃を研ぎ出す。	石材: 四長石	月桂石	月桂石

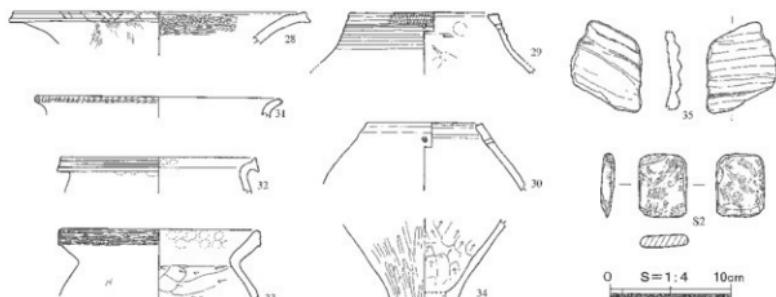


Fig.20 SD13出土遺物実測図

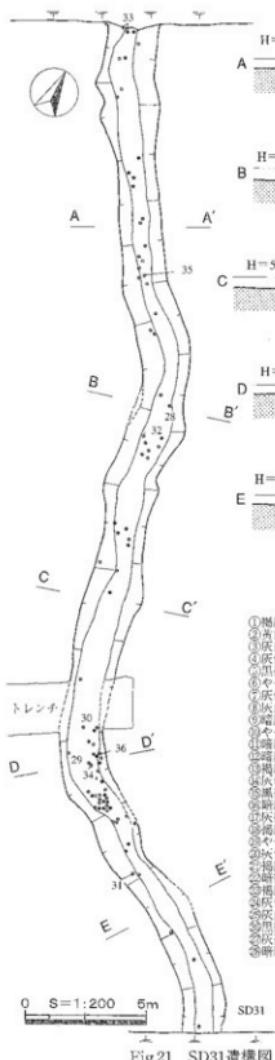


Fig.21 SD31遺構図

る流れ込みの状況を呈する。28は壺、29・30は無頸壺、31～33は壺、34は底部、36は高杯である。31は弥生時代前期、33は弥生時代後期中葉、他は弥生時代の中後期後半の所産であろう。35は押型文土器の体部である。

S D32は[4グリッドほか、S D31の東側に位置する。ほぼ直

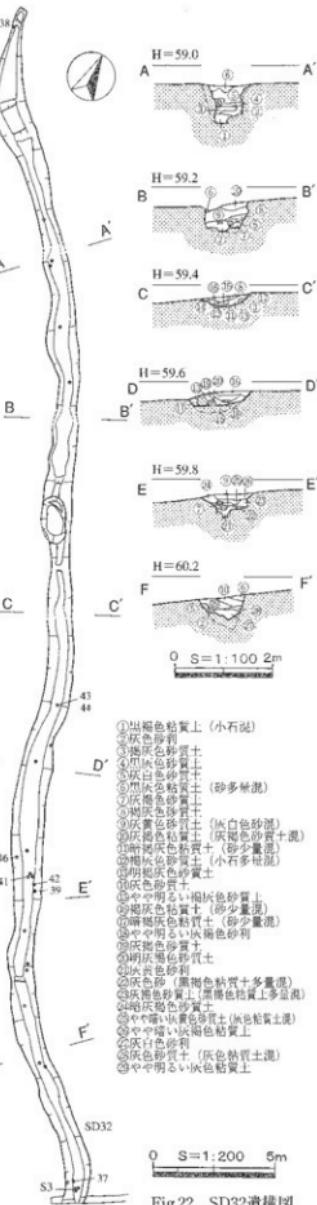


Fig.22 SD32遺構圖

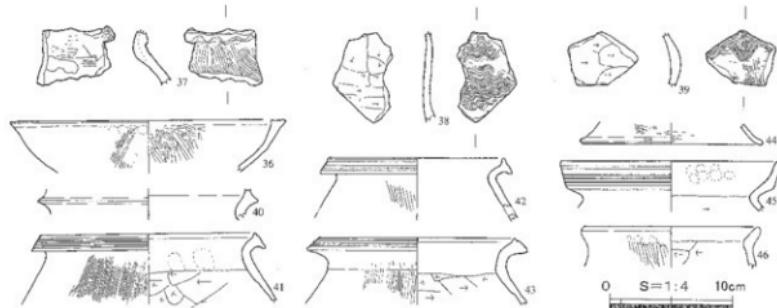


Fig.23 SD32出土遺物実測図

Tab.13 SD31・32出土遺物観察表

No.	Fig. PL.	遺物名	出土位置	器種	法長(cm)	特徴	船上	色調	備考
28	Fig.20 PL.20	弥生土器 壺口部器	壁上下層	弥生土器 壺口部器	径24.8 高さ△ 2.7	口縁部は大きめ外反し、腹部はわずかに内側へ凹む。側面には斜めの文を施す。	1cm以下の砂粒を多く含む。 2mm人字型。	褐色7.5YR6/6	約1/3残存
29	Fig.20 PL.20	弥生土器 無壺口部器	底面上	弥生土器 無壺口部器	径12.9 高さ△ 4.9	口縁部は内傾し、平底面をもつ。外面と底面の下には多くの凹窓文。腹部とその下の内側には斜めの凹窓文。側面には斜めの文を施す。	0.5~1cmの砂粒を多く含む。	に赤い黄褐色10YR7/3	約1/10残存
30	Fig.20 PL.20	弥生土器 口口部器	底面上I	弥生土器 口口部器	口径△ 9.6	口縁部は内傾し、平底面をもつ。外側から内側に向かい凹窓文があり、側面には斜めの凹窓文。	1cm以下の砂粒を含む。	外) 褐色2.5YR6/8 内) 淡黄褐色7.5YR8/4	約1/8残存
31	Fig.20 PL.20	弥生土器 口口部器	底面上I	弥生土器 口口部器	口径△ 9.6	口縁部は大きめ外反し、底方内の断面V字状の削り目を有する。	2mm以下の砂粒を含む。	淡黄褐色7.5YR	1/12以下残存
32	Fig.20 PL.20	弥生土器 壺口部器	底面上II	弥生土器 壺口部器	径14.0 高さ△ 2.8	口縁部は上部に向かい底張りし、3つの凹窓文。	1cm以上の砂粒を多く含む。	明褐色7.5YR5/8	約1/6残存
33	Fig.20 PL.20	弥生土器 変口部器	底面上	弥生土器 変口部器	口径△ 16.6 高さ△ 5.6	口縫部を1回ナットで外接する形をとる。口縫部は器が弱い。内面底部は南北方向の凹窓文。	0.5~1.5mmの砂粒を多量。	黒褐色10YR3/2	約1/4残存
34	Fig.20 PL.20	弥生土器 底張	底面上	弥生土器 底張	径△ 6.2 高さ△ 5.6	外側張方向のみがき。内面張方向のケズリ。	0.5~1.5mmの砂粒を多量。	外) に赤い黄褐色10YR6/3 内) 淡黄褐色10YR6/8	約1/6残存
35	Fig.20 PL.20	弥生土器 体部	壁上下層	弥生土器 体部	高さ△ 7.5	横張り型。外面には押突による凸凹が連続する。内部はナガ。縦横時代早期。	1mm大の砂粒を多く含む。	に赤い黄褐色10YR7/3	-
36	Fig.23 PL.19	弥生土器 壺口部器	底面上	弥生土器 壺口部器	口径△ 22.8 高さ△ 5.6	腹部と外側に肥厚し水平方向の凹窓文をもつ。外側ともとて斜め方向の凹窓文。	1mm以下の砂粒を含む。	に赤い黄褐色7.5YR7/4	約1/8残存
37	Fig.23 PL.19	弥生土器 壺部	中層	弥生土器 壺部	高さ△ 4.3	頭部に頭頂圧痕張りを施すをもつ。外側張りめ、内面張り方向のハゲツリ。	2mmの砂粒を多く含む。	外) に赤い變形7.5YR6/3 内) に赤い黄褐色10YR6/4	約1/8残存
38	Fig.23 PL.19	弥生土器 壺部	底面上	弥生土器 壺部	高さ△ 7.3	脇の内側が11~12番手位の形状を呈す。	1.5cm以下の砂粒を多く含む。	褐色5YR6/4	-
39	Fig.23 PL.19	弥生土器 体部	底面上I	弥生土器 体部	高さ△ 4.3	横張り型の体部。外側張り方向のハゲツリ。	0.5~1cmの砂粒を多く含む。	褐色5YR6/8	-
40	Fig.23 PL.19	弥生土器 壺口部器	底面上I	弥生土器 壺口部器	高さ△ 2.5	口縫部は下に下張りする。内外面ともに斜め方向のナガ。	1mm以下の砂粒を多く含む。	後變形色10YR8/3~ 黃褐色7.5YR7/4	約1/10残存
41	i PL.19	弥生土器 壺口部器	壁上上層	弥生土器 壺口部器	口径△ 17.6 高さ△ 5.8	口縫部は上口に下張りし、4本の門限をもつ。外側張り方向、内面張り方向のケズリ。	1mm大の砂粒を含む。	明赤褐色10YR5/8	約1/5残存
42	Fig.23 PL.19	弥生土器 壺口部器	底面上層	弥生土器 壺口部器	口径△ 14.4 高さ△ 5.8	口縫部は下に下張りし、2回張りの凹窓文をもつ。外側張り方向のハゲツリ、内面張り方向のナガ。	褐色5YR6/6	1/12以下1残存	
43	Fig.23 PL.19	弥生土器 脚部	底面上層	弥生土器 脚部	口径△ 16.0 高さ△ 4.4	口縫部は下に下張りし、3回張りの凹窓文をもつ。外側張り方向のハゲツリ、内面張り方向のケズリ。	1mm大の砂粒を多く含む。	に赤い黄褐色10YR7/4	約1/4残存
44	Fig.23 PL.19	弥生土器 脚部	壁上上層	弥生土器 脚部	口径△ 18.6 高さ△ 5.6	内面張りともに模様の唐草みあき。	東洋な砂粒を含む。	に赤い赤褐色5YR5/4	約1/12残存
45	Fig.23 PL.19	弥生土器 壺口部器	壁中	弥生土器 壺口部器	口径△ 18.0 高さ△ 4.1	口縫部は器部が厚く、先端に弱い凹窓文となる。口縫部には4~5本の凹窓文を施す。	1~2mmの砂粒を多く含む。	褐色7.5YR7/6	約1/8残存
46	Fig.23 PL.19	弥生土器 壺口部器	底土上層	弥生土器 壺口部器	口径△ 12.8 高さ△ 3.2	外側張り方向のみがき。内面張り方向のケズリ。	1~2mmの砂粒を多く含む。	淡黄褐色7.5YR8/6	約1/12残存
53	Fig.25 PL.43	石核	底面上	石核	長さ△ 7.3 幅△ 3.5~4.3 厚さ△ 3.1~3.4	表面三筋状の筋状。	右軸: 頂端右	-	-

線状に北流する。部分的に深い箇所がみられる。遺物は溝の北側の何カ所かにまとまる。弥生土器の頭部37、体部38・39、壺40~43で、脚部が44、弥生時代後期の壺45、時期不明の壺46である。下限は弥生時代後期の壺45で、出土位置も埋土の下層で、これが造構の最終時期に近いと考えられる。黒曜石の石核S 3もある。検出

面からすると同時期の可能性がある。

SD33 (Fig.24・25 Tab.11 PL.43)

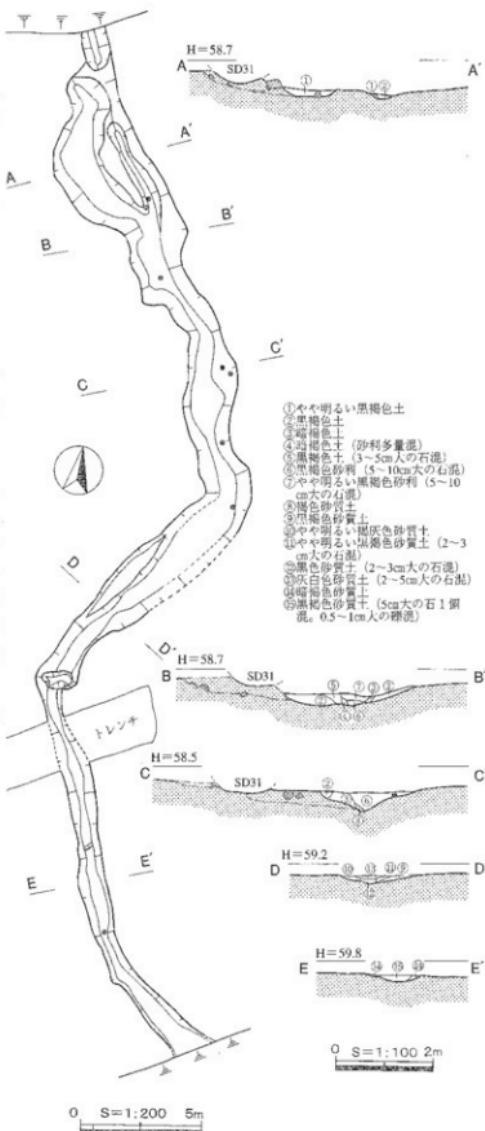
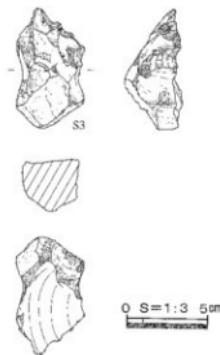
黒色土下の暗褐色土上面、第3遺構検出面上から検出された。SD31と重なる部分が多くあり、古い路跡と考えられる。極端に浅い部分と深い部分があり、深い部分は石が抜けたような穴が存在する。溝は大きく屈曲している。遺物は弥生土器が出土した。

(6) ピット群

(Fig.26~28 Tab.14・15)

1区48基、2区69基、3区46基のピットを検出した。いずれも第2遺構検出面と呼称する黒色土を除去後のやや暗い褐色土上面での検出である。埋土は黒褐色である。他の遺構と同様に立ち上がりは不明ながらも黒褐色土中に遺構面は存在するとみられる。

1区では調査区の北側から東側、2区の調査区西側にかけてピット群を形成する。ピットの分布には粗密があり、黒褐色土中からは縄文から弥生時代前期にかけての土器も若干出土しており、層の掘削状況からみれば円形状の建物跡も想定する必要もあるが、いずれも建物跡を復元するには



Tab.14 第2・3遺構面ピット一覧表(1)

新番号	旧番号	グリッド	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	備考	新番号	旧番号	グリッド	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	備考
1	48	Q19	26	24	12.3		24	20	R22	28	28	13.2	
2	49	Q19	46	40	24.0		25	21	R22	18	18	19.2	
3	46	Q19	32	28	18.7		26	22	R22	24	24	15.5	
4	47	Q19	36	32	8.6		27	23	R22	28	28	25.5	
5	28	S20	28	28	9.0		28	24	R22	26	20	20.6	
6	29	S20	30	28	12.6		29	25	R22	26	18	12.6	
7	30	S20	30	24	7.6		30	26	R22	32	28	15.1	
8	31	S20	24	20	8.0		31	27	R22	30	24	17.2	
9	32	S20	32	32	12.5		32	17	S22	42	28	15.2	
10	33	S20	32	26	14.0		33	18	S22	24	22	9.4	
11	34	S20	28	26	20.0		34	SB3P10	S22	18	18	13.8	
12	35	S20	32	22	21.0		35	16	T22	40	38	34.3	
13	36	S20	32	32	14.1		36	11	U22	30	24	8.9	
14	41	S20	28	26	27.1		39	1	T22	30	24	18.7	
15	37	T21	28	28	23.4		40	2	T22	30	26	16.1	
16	12	T21	48	30	15.0		41	3	T22	30	22	17.0	
17	13	T21	34	26	9.3		42	4	T22	18	18	16.8	
18	14	T21	52	46	23.6		43	7	T22	22	20	14.2	
19	15	T21	42	40	8.1		44	8	T22	70	58	39.0	
20	45	T21	28	24	18.9		37	5	S23	18	18	13.0	
21	44	T21	20	18	13.8		38	6	S23	22	22	14.5	
22	43	T21	24	18	8.6		45	9	U23	40	34	20.9	
23	19	R22	32	26	14.8		46	10	U23	44	44	8.9	
598	634	L8	16	16	9.3		634	641	M9	90	46	9.4	
599	630	L8	54	32	17.5		635	659	M9	38	30	7.1	
600	615	L8	26	20	15.6		636	652	M9	32	26	16.7	
601	692	L8	*38	28	12.1		637	636	M9	26	24	10.4	
602	612	L8	22	20	14.1		638	654	M9	38	32	22.8	
603	635	M8	28	22	34.4		639	656	I10	22	18	11.4	
604	637	M8	28	24	9.7		640	616	J10	24	20	16.5	
605	640	M8	38	28	6.8		641	621	J10	18	16	8.0	
606	639	M8	32	28	26.0		642	622	J10	18	18	11.0	
607	632	I9	20	18	11.0		643	629	J10	24	22	6.2	
608	633	I9	22	20	5.4		644	694	J10	28	24	16.6	
609	697	J9	28	18	11.3		645	657	J10	52	40	5.6	
610	672	J9	42	36	30.7		646	676	K10	38	30	22.9	
611	693	K9	26	26	14.3		647	680	K10	38	34	30.9	
612	673	K9	28	22	12.6		648	689	K10	24	22	16.3	
613	691	K9	28	26	23.9		649	698	K10	22	18	12.3	
614	695	K9	26	22	20.8		650	675	K10	34	26	20.1	
615	696	K9	28	22	22.1		651	671	K10	30	24	14.1	
616	611	K9	26	24	9.3		652	674	K10	28	26	22.4	
617	613	L9	32	26	5.5		653	690	L10	34	28	34.4	
618	614	L9	28	24	16.3		654	684	L10	18	18	10.8	
619	617	L9	24	22	9.0		655	681	L10	38	36	14.6	
620	618	L9	*34	24	5.5		656	677	L10	36	36	22.9	
621	688	L9	30	30	19.6		657	678	L10	26	24	20.0	
622	619	L9	32	28	7.6		658	686	L10	22	20	17.4	
623	620	L9	26	22	5.7		659	682	L10	28	26	11.4	
624	624	L9	22	20	6.3		660	683	L10	26	24	9.7	
625	650	L9	50	40	11.0		661	685	L10	28	20	18.1	
626	625	L9	30	24	8.6		662	679	L10	34	26	13.5	
627	626	L9	30	24	11.5		663	687	L10	46	34	12.4	
628	627	L9	30	24	3.2		664	700	L10	24	24	14.8	
629	631	L9	20	18	5.4		665	669	M10	22	18	8.0	
630	699	L9	26	24	34.0		666	666	M10	26	22	15.3	
631	646	M9	24	20	7.5		667	665	M10	36	36	6.9	
632	645	M9	24	22	10.9		668	655	M10	38	28	10.9	
633	642	M9	28	18	10.1								



Fig.26 3区ピット群全体図

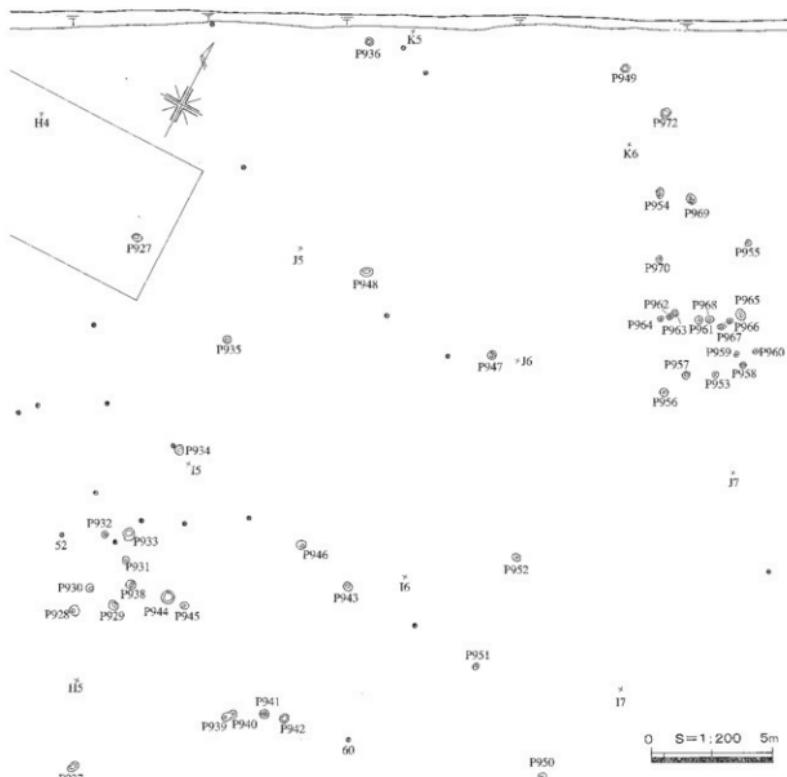


Fig.27 1区第3遺構面ビット群全体図

Tab.15 第2・3遺構面ビット一覧表(2)

新番号	旧番号	グリッド	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	備考	新番号	旧番号	グリッド	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	備考
927	1054	H5	32	20	9.0		951	1042	J7	24	18	14.9	
928	1062	I5	38	32	20.6		952	1043	J7	20	20	19.2	
929	1052	I5	38	30	27.7		953	1077	K7	22	22	22.9	
930	1053	I5	34	30	20.6		954	1049	K7	40	26	21.9	
931	1057	I5	24	22	6.9		955	1079	K7	22	22	11.0	
932	1064	I5	24	22	10.0		956	1066	K7	30	28	19.5	
933	1058	I5	52	44	13.3		957	1065	K7	26	22	16.7	
934	1063	J5	32	26	12.7		958	1078	K7	26	22	14.5	
935	1050	J5	26	26	14.8		959	1073	K7	22	20	14.5	
936	1080	K5	28	26	19.7		960	1044	K7	20	18	9.8	
937	1048	H6	46	34	15.4		961	1072	K7	30	30	14.3	
938	1056	I6	34	30	34.7		962	1082	K7	*24	22	16.5	
939	1038	I6	30	30	21.7		963	1083	K7	30	*26	35.1	
940	1039	I6	28	26	17.3		964	1041	K7	22	20	29.2	
941	1046	I6	36	32	24.5		965	1076	K7	46	32	19.8	
942	1067	I6	36	30	20.5		966	1075	K7	22	20	16.6	
943	1061	I6	32	30	16.4		967	1074	K7	32	22	14.4	
944	1059	I6	60	46	12.4		968	1037	K7	28	24	22.9	
945	1060	I6	30	26	20.6		969	1068	K7	38	32	25.4	
946	1070	I6	30	28	23.8		970	1055	K7	22	22	21.7	
947	1045	J6	32	30	13.3		971	1086	L7	36	28	38.7	
948	1081	K6	44	32	12.1		972	1071	L7	36	32	11.6	
949	1084	L6	30	26	11.4		973	1069	K8	32	30	5.7	
950	1040	I7	28	22	16.8		974	1047	J9	40	36	10.6	

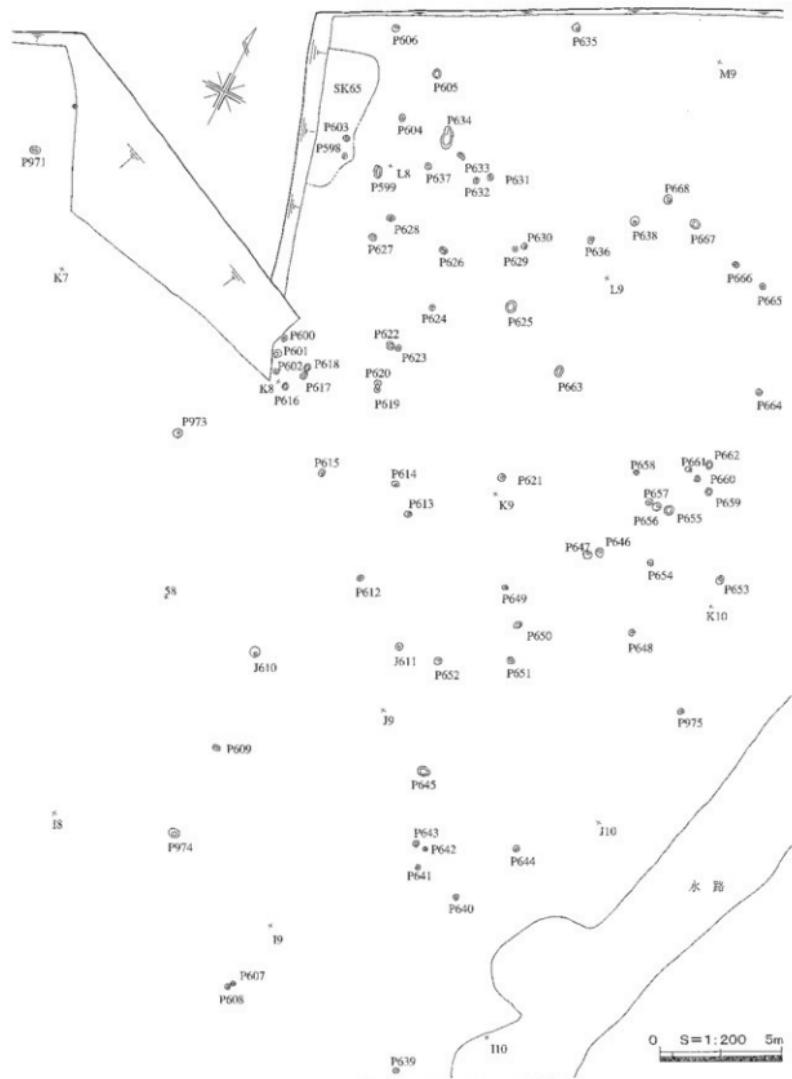


Fig.28 1・2区第2・3構造面ビット群全体図

至らない。出土遺物は1区のP927から弥生土器片が1点出土しているのみである。

3区についても調査区の北東側にピットは集中している。ただし、埋土中からは遺物は全く出土していない。南側には平安時代の溝状遺構S D 2やS B 1・2の建物跡があり、これと同様の時期であることも否定できない。しかしがピットの埋土は基本的に黒褐色のよくしまる単層で、黒褐色土の置存する箇所ではこの層の下面

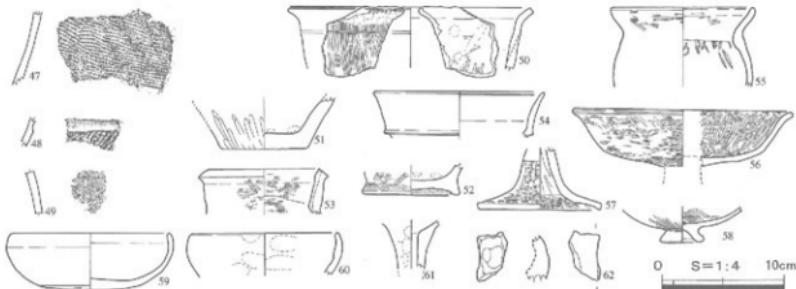


Fig.29 第2・3号構造出土遺物実測図

Tab.16 第2・3号構造出土遺物観察表

No.	Fig. PL.	アラフ若 H.4	出土位置 第2・3号 構造出土面上	器種 縄文土器 陶器	法量(cm) 器高△ 6.3	特徴 外側は縄文、内側はナデ。中～後期か。	出土 1～2cmの砂層 多量。	色調 淡黄色25Y7/3	備考
47	Fig.29 PL.19	H.4	第2・3号 構造出土面上	縄文土器 陶器	器高△ 6.3	外側は縄文、内側はナデ。中～後期か。	1～2cmの砂層 多量。	淡黄色25Y7/3	—
48	Fig.29 PL.19	2区	第2・3号 構造出土面上	縄文土器 陶器	器高△ 2.5	縄文系。外側は縄文と横方向の直い ナデ。後期型。	1～3cmの砂層 が混じる。	に赤い黄褐色10YR7/3	—
49	Fig.29 PL.19	G.7	第2・3号 構造出土面上	縄文土器 陶器	器高△ 3.6	外側は縄文、内側はナデ。中～後期か。	1～2cmの砂層 を含む。	橙色7.5YR6/6	—
50	Fig.29 PL.19	2区	第2・3号 構造出土面上	弥生土器 陶器	器高△ 20.1	口縁部は織やかに外反し、底面には1 条の凹線。下端部には新皿目。外側体 面は腹に向のハケ且後横方向の1条の 縫隙を有す。	2～3cmの砂層 を多く含む。	に赤い復色7.5YR6/4	約1/12残存
51	Fig.29 PL.19	G.7	第2・3号 構造出土面上	弥生土器 陶器	器高△ 4.2	立ち上がりは内外面ともに縱方向のみ がち。底面内外面ともにナデ。	1～2cmの石英 を多く含む。	橙色7.5YR6/6	底部完存
52	Fig.29 PL.19	2区	第2・3号 構造出土面上	弥生土器 陶器	器高△ 2.4	台付の底盤。底面は内外面ともにナ デ。外側面にわざりに赤彩柄。	0.5～1cmの 砂層を有す。	に赤い黄褐色10YR7/3	底部完存
53	Fig.29 PL.19	F.7	第2・3号 構造出土面上	弥生土器 陶器	口径△ 9.2 器高△ 3.7	縄文系。口縁部は織り出し、三角形をなす。内外面ともにナデ。 織文時代中期。	1cm以上の砂層 を多く含む。	橙色7.5YR7/6	約1/5残存
54	Fig.29 PL.19	G.7	第2・3号 構造出土面上	弥生土器 陶器	口径△ 14.0	板合口。内外面ともにヨコナタ。	0.5cm以上の砂層 を多く含む。	外) 淡黄色25Y6/2 内) 淡黄色25Y8/2	1/12以下残存
55	Fig.29 PL.19	H.8	第2・3号 構造出土面上	土器	口径△ 11.6	口縁部は外反する。内縫状の縫隙を有す。	1cm以下の石 英を含む。	浅黃褐色2.5Y7/3	約1/6残存
56	Fig.29 PL.21	F.6	第2・3号 構造出土面上	土器	口径△ 18.0	縫隙部は外反する。内縫状の縫隙を有す。 また、外縫状部付近は放射状のハケ且み があり、口縁部は内縫方向の縫隙がある。	1cm以上の砂層 を多く含む。	橙色2.5YR7/6	約1/3残存
57	Fig.29 PL.21	2区	第2・3号 構造出土面上	土器	口径△ 5.1	外縫部は内縫方向の凹み、内縫部は外縫方 向の凸み。軽微な放射状縫隙の切り込みが ある。	0.5cm以上の砂層 を多く含む。	に赤い黒褐色5YR5/4	約1/2残存
58	Fig.29 PL.21	2区	第2・3号 構造出土面上	土器	口径△ 2.9	底部は小さい。内外面ともに放射状の 縫隙がある。	1cm以下の石 英を含む。	に赤い黄褐色10YR7/4	調査部ほぼ全存 底部付近1/6残存
59	Fig.29 PL.21	G.6	第2・3号 構造出土面上	土器	口径△ 13.4 器高△ 4.8	1cm内部の内面ともに横方向。内縫面は 不定方向のナデ。底面一方のカズ 手。	1～2cmの砂層 を多く含む。 (±)の場合は 砂層。	橙色7.5YR7/6	約1/2残存
60	Fig.29 PL.21	2区	第2・3号 構造出土面上	土器	口径△ 16.0 器高△ 3.5	手づくねによる成形。	0.5cm以上の砂 層を含む。	橙色7.5YR7/6	約1/10残存
61	Fig.29 PL.21	2区	第2・3号 構造出土面上	土器	口径△ 4.0	脚部は円錐状となる。新落著しく調整 不明確。	青	黃褐色10YR8/8	脚部約1/4残存
62	Fig.29 PL.21	G.8	第2・3号 構造出土面上	土器	口径△ 4.1	円筒状の底部。調落著しく調整不明確。	2mm以下の砂 英を含む。	に赤い黄褐色10YR6/4	—
63	Fig.30 PL.21	2区	黒褐色土 上	縄文土器 陶器	器高△ 4.2	外側には縄文系。外側は横方向の直い ナデ。縄文時代中期。	無鉛。	に赤い黄褐色10YR4/4	—
64	Fig.30 PL.21	3区	黒褐色土 上	縄文土器 陶器	口径△ 16.0 器高△ 3.8	口縁部は内側に肥厚し、底部に1条の 直いナデはいる。底部口縁部付近に2 本の縫隙がある。下位に斜め方向の擦痕あり。 織文時代後期。	1～3cmの砂 英を含む。	に赤い黄褐色10YR6/3	約1/8残存
65	Fig.30 PL.21	2区	黒褐色土 上	突帯文土器 陶器	口径△ 22.4 器高△ 4.5	口縁部はやや下さりがきの瓶形二角形 状の突起を貼り付け、V字状の縫隙を 有す。体部内外面ともに横方向の直い ナデ。	0.5～1.5cmの 砂層を含む。	浅黃褐色10YR8/3	1/12以下残存
66	Fig.30 PL.21	2区	黒褐色土 上	突帯文土器 陶器	口径△ 4.9	口縁部は外反し、口縁でわらる。面に は浅いV字の凹線を2つ。体部内外面に2 本の縫隙がある。下位に斜め方向の擦痕あり。 織文時代後期。	1～2cmの砂 英を多く含む。	に赤い黄褐色10YR6/3	約1/10残存
67	Fig.30 PL.21	2区	黒褐色土 上	弥生土器 陶器	口径△ 11.0 器高△ 11.0	L字縫隙部は外反し、口縁でわらる。面に は浅いV字の凹線を2つ。体部内外面に2 本の縫隙がある。下位に斜め方向の擦痕あり。 織文時代後期。	2～3cmの大 の砂層を多く含 む。	浅黃褐色7.5YR8/6	約1/10残存
68	Fig.30 PL.21	2区	黒褐色土 上	弥生土器 陶器	口径△ 1.4 器高△ 9.0	外底面ナデか。内底面底部ナデ。指頂压 痕あり。	1.5cm以上の砂 英を多く含む。	橙色7.5YR6/6	底面ほぼ完存

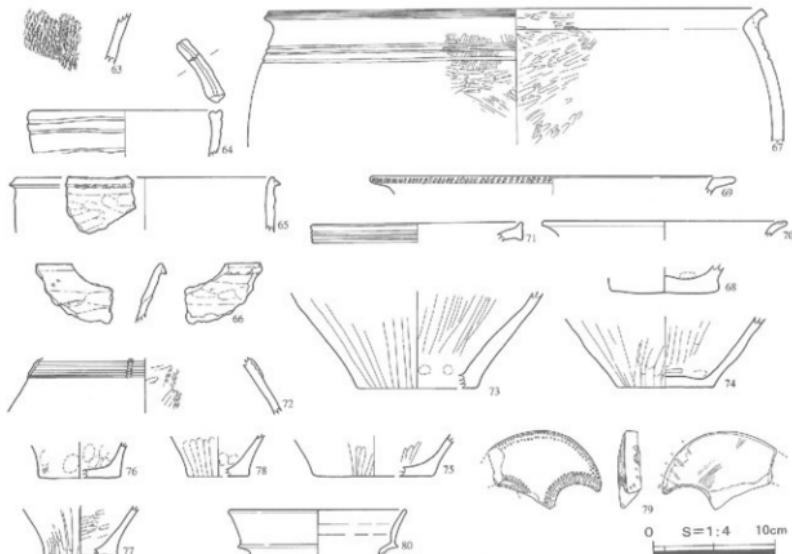


Fig.30 黒褐色土包含層出土遺物実測図

Tab.17 黒褐色土包含層出土遺物観察表

No.	Fig. PL	グリッド	出土位置	器種	法長(cm)	特徴	出土	色調	備考
69	Fig.30 PL.20	3区	黒褐色土 高砂川上流部	弥生土器 口徑	中 3.0 △ 2.0	口縁裏面に削め方向の工具による削 鉗を含む。	1mm以下の砂 粒を含む。	に赤い黄褐色10YR5/4	1/6残存
70	Fig.30 PL.21	G 7	黒褐色土	弥生土器 口徑	中 2.00 △ 1.2	口縁部は縦やかに外反する。	0.5~1mmの大 きな砂粒を含む。	橙色5YR7/8	1/12以下残存
71	Fig.30 PL.21	3区	黒褐色土	弥生土器 口徑	中 2.12 △ 1.6	口縁部は上下に抵張し、面には2本以 上の凹縫をもつ。	織縫や砂紋を 含む。	に赤い黄褐色10YR7/4	1/12以下残存
72	Fig.30 PL.21	3区	黒褐色土	弥生土器 口徑	中 1.70 △ 1.6	外側面部には4本の凹縫み。棒状浮文に 加えを施す。内面のみがきか。	1.5mm以下の砂 粒を含む。	外) 橙色7.5YR6/8 内) 明黄色10YR5/6	1/12以下残存
73	Fig.30 PL.21	3区	黒褐色土	弥生土器 底径	△ 2.8	内外面ともに縱方向の引きがき。	1.5mm以下の砂 粒を含む。	に赤い黄褐色10YR6/4	1/4残存
74	Fig.30 PL.23	3区	黒褐色土	弥生土器 底径	△ 5.6	立ち上がりは外側ともに縦方向のみ がき。底面外側縫ともがき。	1mm以下の砂 粒を含む。	外) に赤い黄褐色10YR7/3 内) 明黄色5YR7/6	約1/5残存
75	Fig.30 PL.23	3区	黒褐色土	弥生土器 底径	△ 3.5 ※ 9.8	立ち上がりは外側ともに縦方向のみ がき。底面外側縫ともがき。	砂粒を含む。	外) 橙色7.5YR5/3 内) 橙色7.5YR6/4	1/12以下残存
76	Fig.30 PL.23	3区	黒褐色土	弥生土器 底径	△ 29 ※ 6.8	立上がり上部が縦方向、底面は一方 のみがき。内面縫のみがき。	1mm以下の砂 粒を含む。	外) 黄色7.5YR4/9 内) 橙色7.5YR7/6	約1/4残存
77	Fig.30 PL.23	3区	黒褐色土	弥生土器 底径	△ 4.2	立上がり上部が縦方向、底面は一方 のみがき。内面縫のみがき。	1mm以下の砂粒 を含む。	外) に赤い黄褐色10YR7/3 内) 明黄色10YR5/2	約1/6残存
78	Fig.30 PL.23	3区	黒褐色土	弥生土器 底径	△ 3.4	縫合がきつい。外側立上がりは複数 縫合のみがき。	1mm以下の砂 粒を含む。	外) 橙色7.5YR6/8 内) 明黄色10YR7/6	約1/12残存
79	Fig.30 PL.23	3区	黒褐色土	分割粘土器品 厚さ	長 3 △ 6.5 ※ 9.2	表記2列の円形軸突文化が縫合をめぐり、 びれ部では研究の間に4本の縫合が 加わる。	1mm程度の 石斧を埋 合む。	淡黃褐色10YR8/4	約1/2~1/3残存
80	Fig.30 PL.23	N 13	黒褐色土	土器器 口徑部	口徑 1.16 △ 3.8	内外面ともにヨコナギ。	織縫を砂粒を わずかに含む。	に赤い黄褐色10YR7/4	約1/10残存

から遺構が検出されていることから、1・2区の第2遺構検出面上のピット群に対応するものと判断した。

これらと同様の遺構面に対応するピット群は押平弘法堂遺跡で検出されている。ここから弥生中期後半の土壤あるいは木棺墓が検出されており、これは茶煙六反田遺跡のS 1とはほぼ同時期である。このことからこれらのピット群は同時期の生活の痕跡と考えるのが妥当であろうが、遺物が出土していないため、断定は難しい。

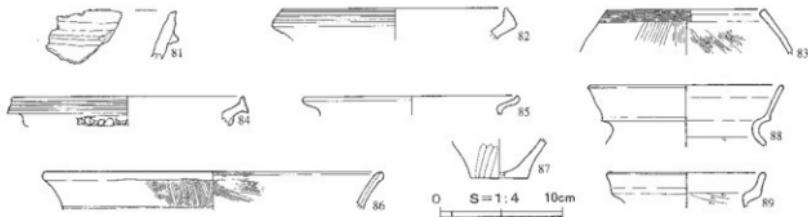


Fig.31 遺構外出土遺物実測図

Tab.18 遺構外出土遺物観察表

No.	Fig. PL	遺構名	出土位置	器種	法量(cm)	特徴	粘土	色調	備考
81	Fig.31 PL.23	3区 水路	-	突文土器部 体口部	口径△144 器高△39	口縁部が外側にこまびらかる。断面やや小窓な「内形容」の突き出で、断面がくわやく下がった笠部に貼り付けられる。	0.5mm~1mmの 石英を多量 に含む。	にぶい黄褐色10YR6/4	約1/8残存
82	Fig.31 PL.23	3区 水路	-	弥生土器 底部	口径△183 器高△25	口縁部は下垂し凹みをもつ、3条の開縫をもつ。	1mm以下の砂 粒を含む。	にぶい黄褐色10YR7/3	約1/10残存
83	Fig.31 PL.23	3区 水路	-	弥生土器 底部	口径△130 器高△37	外側方向への密な縦き裂口縁部は被 る瓦礫を多く含み、抜草孔があり、 内面側約1/3のハサク後、口縁部は付 近傾向のナナ。	微細な砂粒 を含む。	にぶい黄褐色10YR6/4	約1/12残存
84	Fig.31 PL.23	3区 水路	-	弥生土器 体口部	口径△174 器高△15	口縁部は上方につまみ上げられる 形の内形容を有する。	1mm以下の砂 粒を含む。	外)にぶい黄褐色7.5YR6/4 内)にぶい黄褐色10YR7/4	1/12以下残存
85	Fig.31 PL.23	3区 水路	-	弥生土器 底部	口径△192 器高△24	口縁部は下に拡張し、側には3本 の粗筋文を有す。外縁部に貼り付け 瓦礫、瓦片V字状に含む。	1~1.5mm程度 の砂粒を含 む。	浅黄色7.5YR8/4	約1/12残存
86	Fig.31 PL.23	3区 水路	-	弥生土器部 口部	口径△28.0 器高△20	外縁部、内面横方向のハケ日。	0.5mm~1mm 4mm人の細胞 を含む。	外) 黒色2.5Y2/1 内) にぶい黄褐色10YR6/4	約1/10残存
87	Fig.31 PL.23	3区 水路	-	弥生土器 底部	口径△33	外縁立ち上がりは傾方向の窪き。	1mm以下の砂 粒を含む。	灰白色10YR7/1	1/12以下残存
88	Fig.31 PL.23	2区 水路	-	上部	口径△16.0	口縁部内側ともにヨコナダ。内面側 底部	0.5mm~1mm の砂粒を含む。	橙色7.5YR6/6	約1/8残存
Fig.31 PL.23	3区 水路	-	下部	口径△11.0	口縁部内側ともにヨコナダ。	1mm人の砂粒 を含む。	褐色5YR7/6	約1/12残存	

(7) 遺構外出土遺物 (Fig.29~31 Tab.16~18 PL.19・21・23)

黒色土は軽ではあるが包含層であり、掘り下げ中に繩文～古墳時代の土器が出土した。1区ではS D31・32を検出した第2遺構検出面は、弥生時代後期と考えられているが、2区では黒色土中から古墳時代前期の甕80が出土していることから、黒色土の堆積は古墳時代まで下る可能性もある。

1区の出土遺物は、繩文土器部47・48・49、弥生土器の甕50、底部51・52、II縁部53、弥生土器の甕口部54、小型壺55、高杯56・57、低脚杯58、碗59・60、土師器の脚部61、土師器の体部62がある。

2区の出土遺物は、調査区企版ではなく、1区との境の西側に散在して出土している。繩文土器63、鉢64、突文土器鉢65・66、弥生土器甕67、底部68である。

3区の出土遺物は、西側ではなく、東側から出土しているが、ここには弥生時代中期後半の竪穴住居S I 1が3区の北東部から検出されている。

弥生土器の高杯II縁部69、甕II縁部70、壺口縁部71、肩部72、底部73~78、分銅形土製品79、土師器甕II縁部80である。時期は繩文時代後期・晩期、弥生時代前期・中期後半・終末期、古墳時代前期・中期に大別される。分銅形土製品(3)は黒色土直上からの出土である。茶畠山道遺跡からも6点出土している。

注

- (1) 清水真一 1992「弥生土器の様式と編年」山陰・山陽編
- (2) 楠田孝司 1993「西日本の繩文時代落とし穴」『論苑考古学』坪井清足さんの古稀を祝う会編 天山舎
- (3) 勝部智明・松本岩旗・守岡正司 2000「山陰地方 分銅形土製品集成」『古代文化研究 第8号』鳥根県立文化センター編

3 第1遺構検出面の調査

(1) 挖立柱建物跡

調査時にピット群は検出した。遺構面が層序でいう灰色土の上面であること、埋土がいずれも同様の土で、出土する遺物は鎌倉時代のものには限られていることなどから、これらのピット群は鎌倉時代の遺構と考えられた。これをもとに、これらのピットの中から掘立柱建物跡を復元した。検出したピットは密度が高く、どのピットが対応するのかはつきりと断定することは困難である。そのため、比較的密度の低い場所での建物跡の主軸、規模などを、密度の高い部分においても適用した。またピットの平面的な規模、深さ、柱穴間距離が同程度のピットを中心にして現地において判断したが、建物跡によっては柱穴が多少ずれていているものも存在する。これらの事象を前提に復元した。

傾向としては1区～2区付近の建物跡がきわめて密集する部分と、調査区の東側部分、さらに西側の建物群に分かれること、密集する部分では1間×1間もしくは1間×2間程度の建物跡が中心で、主軸もほぼ一定している。建物跡は東西方向に連なる傾向がある。

調査区の東側では建物跡は3～4棟程度のまとまりをもつ傾向がみられる。また、調査区の西側では比較的規模の大きな建物跡が単体で存在するような傾向がある。

Tab.19 掘立柱建物一覧表

S B 番号	グリッド名	間数	主軸	長軸 (m)	短軸 (m)	床面積 (m ²)
S B 1	S20	1 × 1	N -14° - W	2.08	2.00	4.16
S B 2	R21・S21	2 × 4	N -20° - W	5.40	2.96	15.98
S B 3	R22・S22	2 × 3	N -20° - W	※5.20	-	-
S B 4	I9・I0	1 × 2	N -10° - E	3.32	1.92	6.37
S B 5	J10	1 × 1	N -20° - E	2.96	1.80	5.33
S B 6	J9・I0	1 × 2	N -11° - E	5.48	2.92	16.00
S B 7	K10・I11	1 × 1	N -13° - E	2.60	1.16	3.02
S B 8	K10	2 × 2	N -16° - E	4.92	4.56	22.44
S B 9	K10	1 × 1	N -10° - E	2.96	2.12	6.28
S B 10	K9	1 × 1	N -11° - E	3.16	2.72	8.60
S B 11	K9	1 × 2	N -9° - E	3.32	2.28	7.57
S B 12	K9	1 × 2	N -13° - E	3.56	1.36	5.55
S B 13	L10	1 × 2	N -9° - E	3.84	2.80	10.75
S B 14	L9	1 × 1	N -14° - E	2.16	1.64	3.54
S B 15	L9	1 × 1	N -10° - E	2.88	2.76	7.95
S B 16	L9	1 × 1	N -14° - E	2.36	2.96	6.99
S B 17	L10・M10	1 × 1	N -0°	3.20	2.60	8.32
S B 18	K10～L11	2 × 2	N -5° - E	4.80	3.48	16.70
S B 19	L9・I0	1 × 1	N -26° - E	2.84	2.56	7.27
S B 20	K9	1 × 1	N -10° - E	2.92	1.88	5.49
S B 21	K10・L10	1 × 2	N -6° - E	2.84	2.20	6.25
S B 22	O13	2 × 2	N -8° - E	5.16	3.32	17.13
S B 23	O12・I3	1 × 2	N -9° - E	3.60	2.44	8.78
S B 24	O16	1 × 1	N -2° - E	3.92	2.72	10.66
S B 25	N16・O16	1 × 1	N -19° - W	3.12	1.88	5.87
S B 26	N16	1 × 2	N -3° - E	4.04	2.80	11.31
S B 27	M16・N16	1 × 1	N -6° - E	3.56	2.16	7.69
S B 28	M16・I7	1 × 1	N -12° - E	4.60	2.96	13.62
S B 29	N14	1 × 1	N -1° - E	2.84	1.92	5.45
S B 30	E4	1 × 2	N -5° - W	5.32	3.80	20.22
S B 31	G3～H4	1 × 3	N -2° - W	7.36	3.68	27.08
S B 32	G7	1 × 2	N -6° - W	3.28	3.24	10.63
S B 33	G8・9	1 × 3	N -14° - W	5.48	2.08	11.40
S B 34	K8・L8	2 × 2	N -37° - E	4.04	2.72	10.99
S B 35	J6・7	2 × 3	N -13° - E	4.84	4.28	20.72
S B 36	J8・9	1 × 2	N -0°	3.68	2.04	7.51
S B 37	J8	1 × 2	N -8° - E	3.68	1.64	6.04
S B 38	K9	2 × 1	N -9° - E	2.04	1.44	2.94

S B 2・3

(Fig.32・33 Tab.19～21)

S B 2 は 3 区の R・S 21 グリッドに位置し、東側に S D 2 がある。総社になるものは不明瞭である。埋土は黒色土に灰色土あるいは茶色土が混入したものが主体で、よくしまっており、北西側に位置する弥生時代の堅穴住居 S 1 1 の周溝埋土の黒褐色土などとは明らかに異なる。

また茶畠山道遺跡から掘立柱建物跡が確認できているが、いずれの建物跡とも柱穴の規模、距離等が異なる。ただし付近は掘削が著しく、遺構は表土直下で検出されたため、時期的にどう可能性も否定できない。

S B 3 は 1 間 × 4 間以上の建物跡であるが、東側は掘削が著しく、南側についても今回の調査範囲外となるため、明確な規模は特定できない。ただし柱穴の規模や形態、主軸などから判断して S B 2 との関係が考えられる。

SB 4・5・6 (Fig.33・34 Tab.19・22~24 PL. 6)

やや離れているものの、SB 4・5・6 でひとつの建物群を構成すると考えられる。

SB 4 は J 10 グリッドに位置する。P 1 - P 2 間についてでは、中位にピットが確認できないために 5 本柱としている。位置的には 1・2 区集落群の南端に位置する。耕作のため遺構の遺存状況は悪い。建物跡はさらに北側に 1 間程度広がる可能性もあり、その場合は純柱建物となるが、いずれにしろ柱は不整な並びである。

SB 5 は J 10 グリッドに位置する。1 間 × 1 間の掘立柱建物跡である。南側の柱間がやや狭いため不整な形状である。

SB 6 は K 9・10 グリッドに位置する。1 間 × 2 間の建物跡で、長軸は東西方向である。P 4 は SK 45 と重複し、これよりも新しい。P 3・7 は建て直しの痕跡が認められる。

SB 7・8・9・10 (Fig.35・36 Tab.19・25~28 PL. 8)

いずれも K 9・10 グリッド付近に位置する。

SB 7 はやや不整な形状である。長軸の柱間に SK 20 が位置する。柱穴は浅いが掘方はほぼ一定している。

SB 8 は P 1 ~ 7 の 1 間 × 2 間の建物跡と、柱穴間の狭い P 8 ~ 10 が並行している。柱穴の掘方は一定していない。P 8 ~ 10 が浅くないため、疵的なものと考えずに 1 棟の建物跡として設定した。同様の形状は SB 35 にもある。P 7 に柱痕跡が確認できる。遺物は P 6 から中世須恵器片が出土しているが同化し得ない。

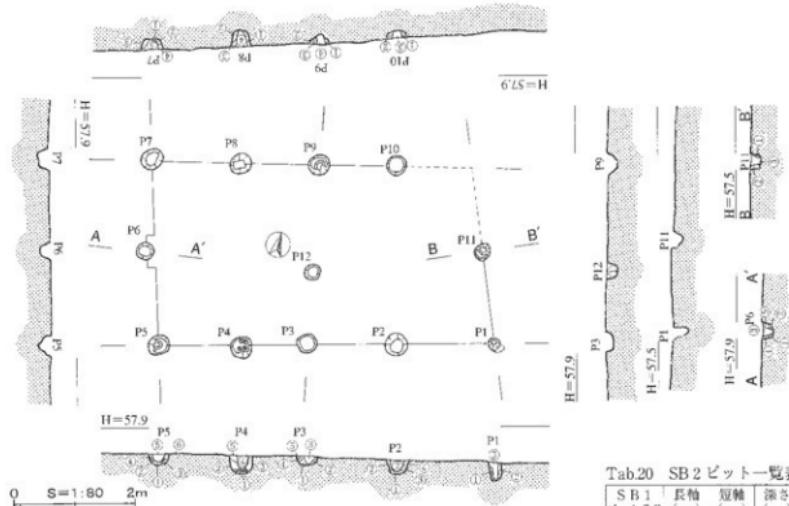


Fig.32 SB 2 遺構図

Tab.20 SB 2 ピット一覧表

ピット番号	長幅 (cm)	短幅 (cm)	深さ (cm)
P 1	20	20	29.0
P 2	36	36	23.9
P 3	34	34	13.2
P 4	36	34	30.5
P 5	36	34	21.3
P 6	30	28	17.9
P 7	36	34	21.1
P 8	32	32	28.6
P 9	34	32	15.8
P 10	32	32	13.6
P 11	28	26	18.2
P 12	38	36	19.9

- P 1
 ①暗褐色土
 P 2
 ①稍灰褐色土
 ②暗灰茶褐色土 (小砾混)
 ③暗灰褐色土 (小砾混)
 P 3
 ①暗灰褐色土 (小砾混)
 ②暗灰茶褐色土 (小砾混)
 ③暗灰褐色土 (小砾混)
 P 4
 ①暗褐色土
 ②黑褐色土
 ③暗灰褐色土
 ④暗灰褐色土 (小砾混)
 ⑤暗黄茶褐色土 (暗灰褐色土混。小砾混)
 ⑥暗灰茶褐色土 (小砾混)
 P 5
 ①暗茶褐色土 (小砾混)
 P 6
 ①暗灰褐色土
 ②暗灰茶褐色土 (黄色小砾混)
 ③茶黄褐色土 (砾混)
 ④暗灰茶褐色土 (黄色・白色小砾多量混)
 P 7
 ①暗灰茶褐色土 (小砾少量混)
 ②暗灰褐色土 (小砾混)
 P 8
 ①暗灰褐色土
 ②暗灰褐色土 (小砾混)
 ③黄褐色土
 ④褐色土
 P 9
 ①暗茶褐色土

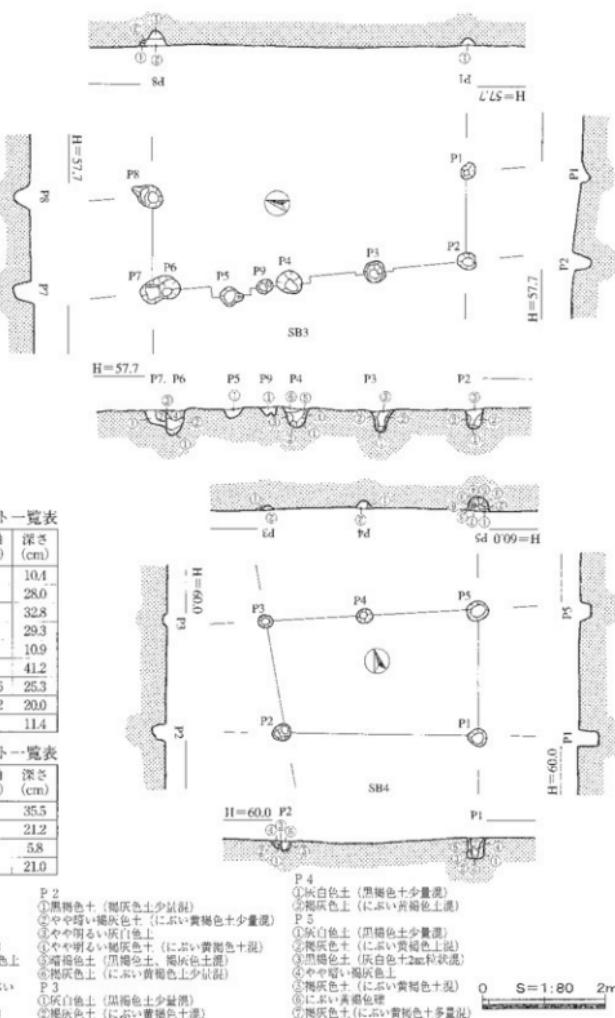
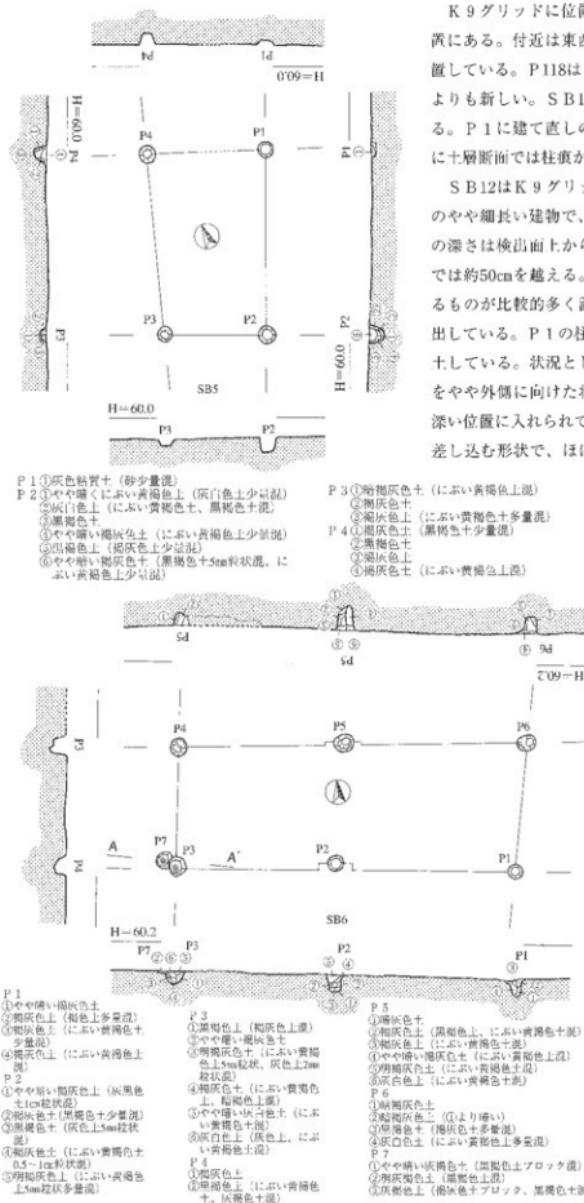


Fig.33 SB 3・4 造構図

S B 9 は柱穴間は北側のP 1 - P 4 がやや広い不整形をしている。1間×1間の建物跡である。掘方はいづれも比較的しっかりしており、深さ40cm以上である。P 4 から土器片が出土している。

S B 10 はP 2 がS K 46と重複しており、これよりも古い。1間×1間で、柱穴間は南側のP 2 - P 5 が北側に比べやや狭く、不整である。掘方はP 2 が20cmとやや浅い。



K 9 グリッドに位置する。S B12と重複した位置にある。付近は東西に連なる建物群の西端に位置している。P 118はS K 28と重複しており、これよりも新しい。S B11は1間×2間の建物跡である。P 1に建て直しの痕跡があり、P 1・2・6に土層断面では柱痕が認められる。

S B12はK 9 グリッドに位置する。1間×2間のやや細長い建物で、S K 28よりも新しい。柱穴の深さは検出面上から最低でも約30cm、深いものでは約50cmを越える。土層断面で柱痕が認められるものが比較的多く認められ、P 1・2・5で検出している。状況としては柱痕跡に沿うように刃をやや外側に向けた状態で、柱穴の中でもかなり深い位置に入れられている。整F5は、袋部に柄を差し込む形状で、ほぼ完存の状況で出土した。本

Tab.23 SB 5 ピット一覧表

S B 5 ピット番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P 1	26	24	78
P 2	30	30	252
P 3	24	24	103
P 4	28	24	197

Tab.24 SB 6 ピット一覧表

S B 6 ピット番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P 1	24	22	26.7
P 2	26	26	28.8
P 3	32	38	20.6
P 4	30	26	27.9
P 5	34	30	42.0
P 6	32	26	30.0
P 7	30	28	25.2

Fig.34 S B5・6 遺構図

Tab.25 SB7ピット一覧表

S B 7 ピット番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P 1	28	26	9.4
P 2	30	26	6.8
P 3	28	26	7.6
P 4	36	32	5.9

Tab.26 SB8ピット一覧表

S B 8 ピット番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P 1	30	26	40.3
P 2	24	24	15.1
P 3	24	24	12.3
P 4	34	26	18.2
P 5	44	40	10.7
P 6	34	30	20.8
P 7	62	34	122.0
P 8	28	24	44.6
P 9	28	26	13.3
P 10	30	28	18.8

S B 7 P 1

- ①やや暗い灰褐色土
②灰褐色土
③褐色土
④やや明るい灰褐色土(鉄分含)
⑤灰褐色土
⑥灰褐色土
⑦やや明るい灰褐色土
⑧灰褐色土(黒褐色土ブロック層)
⑨灰褐色土(黒褐色土ブロック層)
⑩灰褐色土

S B 8 P 1

- ①灰褐色土(褐灰色土上混)
②灰褐色土(にぼい黄褐色土上混)
③灰褐色土(にぼい黄褐色土上混)
④灰褐色土(にぼい黄褐色土上混)
⑤灰褐色土(褐灰色土上混)
⑥灰褐色土(褐灰色土上混)
⑦灰褐色土(にぼい黄褐色土上混)
⑧灰褐色土
⑨明るい褐色土(褐灰色土多量)
⑩やや明るい褐色土
⑪灰褐色土(にぼい黄褐色土+0.5~1cm軟化状)

P 3

- ①灰褐色土(もろい)
②灰褐色土とやや樹木の根
③灰褐色土(黒褐色土少量含)
④灰褐色土(黒褐色土少量含)
⑤灰褐色土(黒褐色土少量含)
⑥灰褐色土(黒褐色土少量含)
⑦灰褐色土(黒褐色土少量含)
⑧灰褐色土(黒褐色土少量含)
⑨灰褐色土(黒褐色土少量含)
⑩やや明るい灰褐色土(黒褐色土少量含)

P 6

- ①やや暗い褐灰色土と黒褐色土の混じり
②やや暗い黄褐色土(黒褐色土上混)
③灰褐色土
④やや明るい黄褐色土(かたくしまる)
⑤やや明るい灰褐色土(黒褐色土少量含)

P 7

- ①やや明るい灰褐色土(にぼい黄褐色土混
もろい)
②灰褐色土(にぼい黄褐色土上混、もろい)
③細粒褐色土(にぼい黄褐色土上混、もろい)
④細粒褐色土(にぼい黄褐色土多量、もろい
土の軟化状)

P 8

- ①灰褐色土と灰褐色土の混じり
②黒褐色土(黒褐色土ブロック層)
③灰褐色土(鉄分含)

P 9

- ①灰褐色土とやや暗い灰褐色土の混じり

- ②やや暗い灰褐色土(黒褐色土ブロック層)
③やや明るい灰褐色土(鉄分含)

P 10

- ①やや暗い灰褐色土(黒褐色土ブロック層)

- ②やや明るい灰褐色土(鉄分多量含)

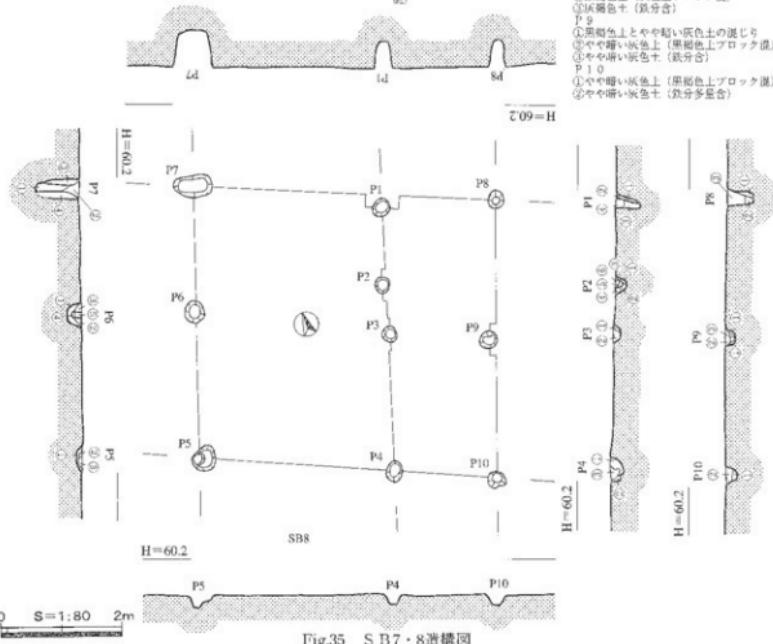
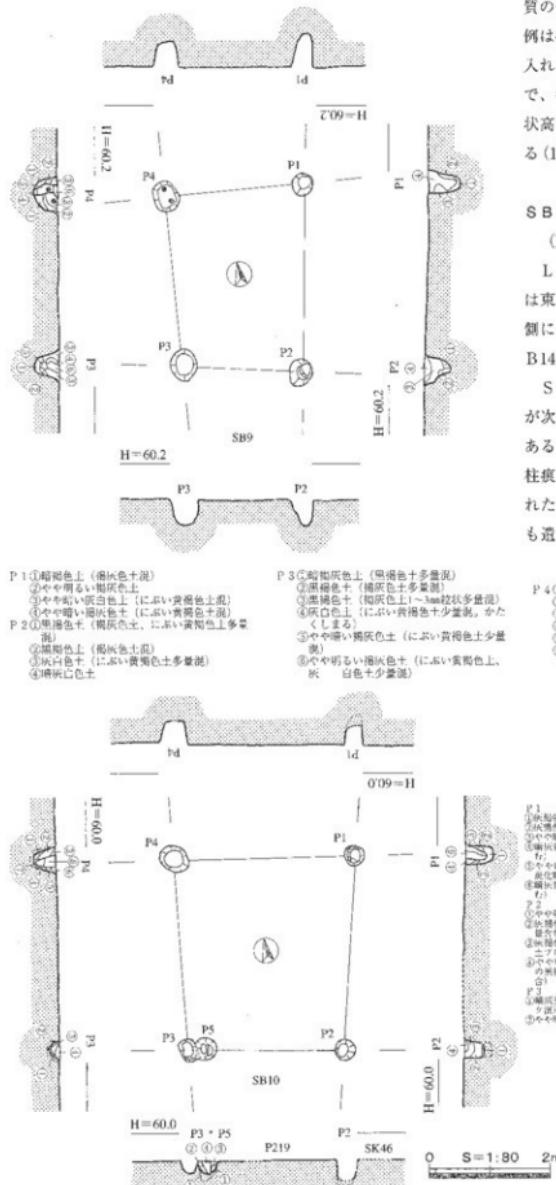


Fig.35 S B 7・8構造図



P 1 ①褐色土上 (褐色土多量)
②やや明るい褐色土上
③やや暗い灰褐色土上 (にほい・黄褐色土混)
④やや暗い褐色土上 (にほい・黄褐色土混)
P 2 ①黒褐色土 (褐灰色土、にほい・黄褐色土多量)
②褐色土上 (褐色土多量)
③褐色土上 (にほい・黄褐色土多量)
④暗褐色土上

P 3 ①褐色灰白色土上 (褐色土多量混)
②褐褐色土上 (褐色土多量混)
③褐褐色土上 (褐色土上) ~3mm粒状多量混
④灰白色土上 (にほい・黄褐色土少量混。かな
くしまる)
⑤やや暗い褐褐色土上 (にほい・黄褐色土少量
混)
⑥やや明るい褐褐色土上 (にほい・黄褐色土上、
純白色土少量混)

P 4 ①やや明るい褐色灰白色土上 (にほい・黄褐色土少量)
②やや暗い褐色土上
③明褐色土上 (にほい・黄褐色土多量)
④褐褐色土上 (褐色土多量、にほい・黄褐色土混)
⑤褐褐色土上 (褐色土多量、にほい・黄褐色土多量混)
⑥やや明るい褐色土上

Tab.27 SB9ピット一覧表

S B 9 ピット番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P 1	34	33	54.6
P 2	44	38	42.7
P 3	52	46	42.0
P 4	50	42	41.6

P 1 ①やや暗い灰褐色土上 (2cmの層)
②やや暗い褐色土上 (褐色土多量)
③やや明るい褐色土上 (褐色土少量)
④褐色土上 (褐色土少量)
⑤やや暗い褐褐色土上 (褐色土少量)
⑥やや明るい褐色土上 (褐色土少量)
P 2 ①褐色土上 (褐色土少量)
②やや暗い褐色土上 (褐色土少量)
③褐色土上 (褐色土少量)
④やや明るい褐色土上 (褐色土少量)
⑤やや暗い褐色土上 (褐色土少量)
⑥やや明るい褐色土上 (褐色土少量)
P 3 ①やや暗い褐色土上 (褐色土少量)
②褐色土上 (褐色土少量)
③褐色土上 (褐色土少量)
④やや暗い褐色土上 (褐色土少量)
⑤やや明るい褐色土上 (褐色土少量)
⑥やや暗い褐色土上 (褐色土少量)
P 4 ①やや暗い褐色土上 (褐色土少量)
②やや明るい褐色土上 (褐色土少量)
③褐色土上 (褐色土少量)
④やや暗い褐色土上 (褐色土少量)
⑤やや明るい褐色土上 (褐色土少量)
⑥やや暗い褐色土上 (褐色土少量)

Tab.28 SB10ピット一覧表

S B 10 ピット番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P 1	34	32	44.4
P 2	34	32	44.8
P 3	38	28	20.0
P 4	50	42	39.5
P 5	36	36	32.6

Fig.36 S B 9・10構造図

質の部分は錆が付着している。同様の例は押平弘法堂遺跡のS B12でも鉈が入れられ、出雲市の出雲大社境内遺跡で、宇豆柱の柱下から上部質土器の柱状高台とともに手斧2点が出土している(1)。

S B 13・14・15・16

(Fig.39・40 Tab.19・31~34)

L 9・10グリッドに位置する。付近は東西方向に連なる北側の建物群の西側に位置し、北には土坑群がある。S B14とS B15は隣接する。

S B13は北側のP 1~P 6間の柱間が次第に広くなる、やや不整な形状である。土層断面をみると、P 3・6で柱痕跡を検出したが、P 1は抜き取られた可能性もある。掘方は深いものでも遺構検出面から30cm程で、比較的浅

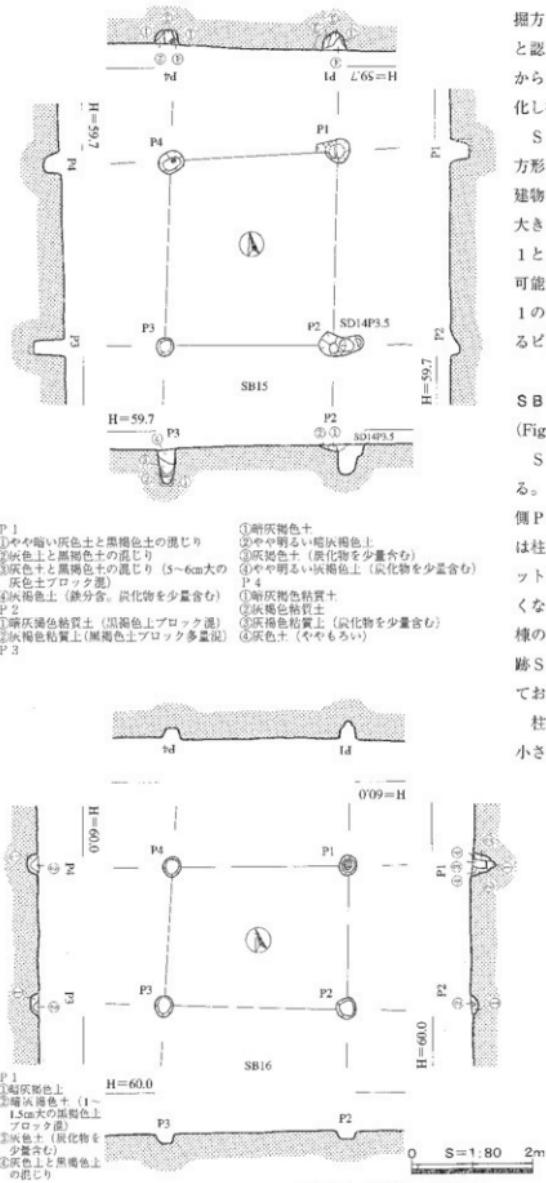


Fig.40 SB15・16遺構図。

S B15は形状はほぼ正方形に近い。掘方はP 3が極端に深い。明確に柱痕と認められるものはない。遺物はP 4から土師質器片が出土しているが同化し得ない。

S B16は1間×1間で、形状はほぼ正方形である。S B15の西縁で、北側の建築群の西縁にあたり、規模がさらに大きくなる可能性も否定できない。P 1とP 4の外側にそれぞれ建て直しの可能性のあるP 173、P 182がある。P 1のみ極端に深いものの、他に対応するピットは検出できなかった。

S B17・18

(Fig.41 Tab.19・35・36)

S B17はL・M10グリッドに位置する。1間×1間であるが、わずかに西側P 3-P 4間が短く、P 4については柱の規模も極端に小さい。周辺はピットの密度が粗く、さらに規模が大きくなるような柱穴は認められない。1棟のみ単独で存在している。東側に横跡S A 5があるが、やや主軸を異にしており、関連があるかは不明瞭である。

柱穴の規模は、P 1の規模が極端に小さい。

Tab.33 SB15ピット一覧表

S B15 ピット番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P 1	40	40	35.1
P 2	36	34	18.5
P 3	30	30	60.5
P 4	42	34	28.4

Tab.34 SB16ピット一覧表

S B16 ピット番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P 1	32	30	32.9
P 2	34	30	14.2
P 3	36	30	17.0
P 4	32	30	15.0

- P 2
 ①暗褐色土
 ②暗褐色土と黒褐色土の混じり
 P 3
 ①暗褐色土
 ②暗褐色土 (灰化物を少量含む)
 P 4
 ①暗褐色土
 ②暗褐色土 (灰化物を少量含む)

Tab.35 SB17ビット一覧表

SB17 ビット番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P 1	42	28	25.2
P 2	40	40	14.5
P 3	40	32	26.5
P 4	22	20	10.5

Tab.36 SB18ビット一覧表

SB18 ビット番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P 1	26	24	24.0
P 2	42	34	23.1
P 3	34	32	10.9
P 4	38	34	25.5
P 5	42	40	24.2
P 6	32	28	9.6
P 7	26	24	45.1
P 8	24	18	23.2

- P 1
 ①灰褐色粘土質土(灰褐色土粘土)
 ②灰褐色土
 ③
 ④赤褐色土(黒褐色土)、(赤褐色土少量含む)
 ⑤灰褐色土(灰褐色土少量含む)
 ⑥灰褐色土
 P 3
 ①赤褐色土質土(黒褐色土)ブロック少量
 ②灰褐色土(1~2cmの大いな赤褐色土ブロック含む)、灰化
 物少含む
 ③灰褐色土
 ④灰褐色土と黄褐色土の混じり
 ⑤やや細かい灰褐色土
 ⑥灰褐色土
 ⑦赤褐色土(1~1.5cmの大いな赤褐色土)ブロック
 P 5
 ①赤褐色土(後壁土)多量、1~2cmの大いな小粒多
 ②灰褐色土(灰褐色土少量含む)少含む
 ③灰褐色土(1~2cmの大いな赤褐色土少量含む)
 ④灰褐色土(1~2cmの大いな赤褐色土少量含む)
 ⑤灰褐色土(1~2cmの大いな赤褐色土少量含む)
 ⑥灰褐色土(1~2cmの大いな赤褐色土少量含む)
 ⑦灰褐色土(1~2cmの大いな赤褐色土少量含む)
 ⑧灰褐色土(1~2cmの大いな赤褐色土少量含む)
 ⑨灰褐色土(1~2cmの大いな赤褐色土少量含む)
 ⑩灰褐色土(1~2cmの大いな赤褐色土少量含む)
 ⑪灰褐色土(1~2cmの大いな赤褐色土少量含む)
 ⑫やや細かい灰褐色土(1~2cmの大いな赤褐色土少量含む)
 ⑬灰褐色土
 P 7
 ①灰褐色土(灰褐色土、に赤褐色土少量)
 ②灰褐色土(1~2cmの大いな赤褐色土少量含む)
 ③やや細かい灰褐色土(1~2cmの大いな赤褐色土少量含む)
 ④灰褐色土(1~2cmの大いな赤褐色土少量含む)
 ⑤灰褐色土(1~2cmの大いな赤褐色土少量含む)
 ⑥灰褐色土(1~2cmの大いな赤褐色土少量含む)
 ⑦灰褐色土(1~2cmの大いな赤褐色土少量含む)
 ⑧灰褐色土(1~2cmの大いな赤褐色土少量含む)
 ⑨灰褐色土(1~2cmの大いな赤褐色土少量含む)
 ⑩灰褐色土(1~2cmの大いな赤褐色土少量含む)
 ⑪灰褐色土(1~2cmの大いな赤褐色土少量含む)
 ⑫やや細かい灰褐色土(1~2cmの大いな赤褐色土少量含む)
 ⑬灰褐色土
 ⑭灰褐色土(1~2cmの大いな赤褐色土少量含む)

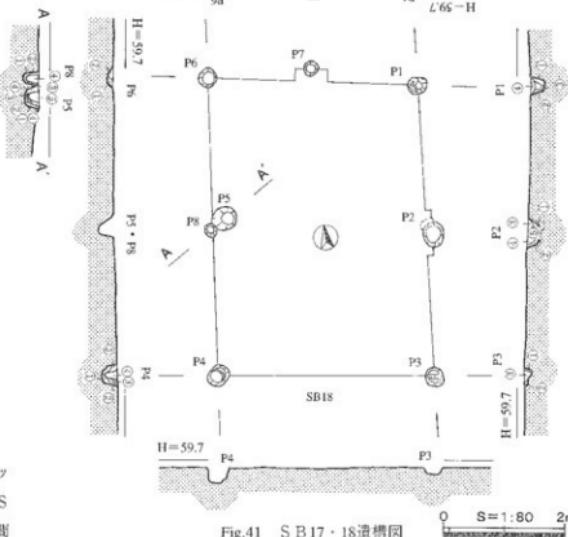


Fig.41 SB17・18遺構図

S B18はK10・11グリッド
下に位置する。北西隅でS
B21と重なる。1間×2間
の掘立柱建物跡である。北

側のP 1～P 6間にP 7が位置しているものの、P 3～P 4間ににはこれに相当するようなビットは確認できない。柱穴の深さは深いものと浅いもののが大きい。柱痕はP 2・P 4・P 8にみられる。P 1は抜き取られたと考えられる。

(1) 積立遺物跡

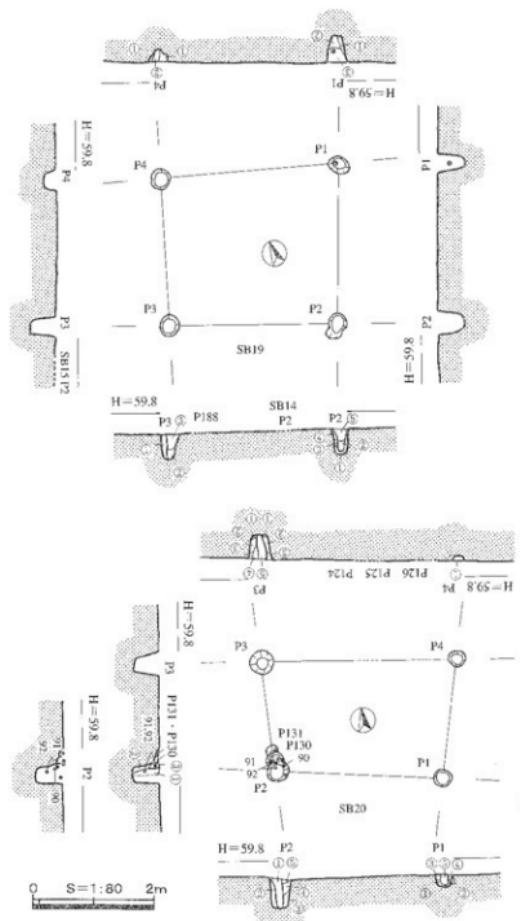


Fig.42 S B19・20遺構図



Fig.43 S B20出土遺物実測図

Tab.39 S B20出土遺物観察表

No.	Fig. PL	遺構名	出土位置	器種	法量(cm)	特徴	断面	色調	備考
90	Fig.43 PL.22	S B20 P 2	中層	土師器か 瓦器部	口径 △13.8 厚さ △1.6	内外面ともに横方向のナサ。 口径と底径の差は小さい。外底面に 凹状成形。	縦断 △13.8 △1.6 △1.6 △1.6	褐灰色7.5YR5/1 △1.6 △1.6 △1.6 △1.6	1/10以下残存
91	Fig.43 PL.22	S B20 P 2	中層	土師質器 部	口径 △13.8 厚さ △1.6	口径と底径の差は大きい。外底面に 凹状成形。	縦断 △13.8 △1.6 △1.6 △1.6	△1.6 △1.6 △1.6 △1.6	1/5以下残存
92	Fig.43 PL.22	S B20 P 2	中層	土師質器 部	口径 △13.8 厚さ △1.6	口径部は内溝する。外底面に同軸系切 底。	縦断 △13.8 △1.6 △1.6 △1.6	△1.6 △1.6 △1.6 △1.6	1/6以下残存

Tab.37 SB19ピット一覧表

ピット番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P 1	36	28	44.7
P 2	44	30	42.6
P 3	36	32	42.6
P 4	34	32	19.4

- P 1
 ①暗褐色土
 ②暗褐色土上(に多い黄褐色土層)
 ③褐色土(に多い黄褐色土多量)
 P 2
 ①赤褐色土(褐色土)
 ②灰褐色土とやや暗褐色土の混じり(灰
化物を含む)
 ③やや暗い灰褐色土
 ④やや暗い灰褐色土(灰化物を含む)
 ⑤褐色土(に多い黄褐色土ブロック混
入)
 P 3
 ①褐色土(に多い黄褐色土多量)
 ②やや暗い灰褐色土(に多い黄褐色土少
量)
 ③灰褐色土(褐色土、灰褐色土、に多い
黄褐色土混入)
 P 4
 ①褐色土(に多い黄褐色0.5~1cm粒状、褐
色土、土)
 ②暗褐色土(褐色土、に多い黄褐色土混入)

Tab.38 SB20ピット一覧表

ピット番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P 1	30	28	20.9
P 2	34	34	49.0
P 3	40	38	42.1
P 4	30	26	7.2

- P 1
 ①暗褐色土(褐色土多量)
 ②褐色土、褐色土上、に多い黄褐色土多
量
 ③やや明るい褐色土(に多い黄褐色土少
量)
 ④灰褐色土(に多い黄褐色土、黒褐色土
混入)
 ⑤褐色土と黒褐色土の混じり(黒褐色土
小粒、褐色土混入)
 P 2
 ①やや暗い褐色土(に多い黄褐色土混入)
 ②褐色土、黒褐色土(に多い黄褐色土、
褐色土1~2cm粒状多量)
 ③黒褐色土(褐色土1cm粒状)
 ④褐色土(に多い黄褐色土混入、かたくし
まる)
 ⑤褐色土(褐色土多量、かたくしまる)
 P 3
 ①褐色土上(に多い黄褐色土層)
 ②褐色土上(に多い黄褐色土多量、しま
りがある)
 ③灰褐色土(褐色土混入)
 ④やや明るい褐色土(に多い黄褐色土混入)
 ⑤やや暗い褐色土(に多い黄褐色土1~2
cm粒状多量、に多い黄褐色土混入)
 P 4
 ①明褐色土(に多い黄褐色土5mm粒状、
黒褐色土、灰褐色土混入)

Tab.40 SB21ピット一覧表

S B21 ピット番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P 1	30	28	13.8
P 2	30	20	10.8
P 3	30	※26	10.2
P 4	28	※26	14.1
P 5	34	※22	11.3
P 6	50	32	23.4
P 7	34	※28	38.2
P 8	30	※26	21.6
P 9	34	32	20.4

- P 2 ①暗褐色土(鉄分含)
②やや暗い灰褐色土(炭化物を斑状に含む)
③やや暗い灰褐色土(炭化物を含む)
④褐色土(少分量含)、鉄化物を筋状に含む、2~3cm
⑤褐色土(少分量含)、鉄化物を筋状に含む、2~3cm
⑥やや暗い灰褐色土(炭化物の大の炭化物プロック含)
⑦炭化物
⑧褐色土(鉄化物を少量含)
⑨やや明るい灰褐色土(鉄分含)
⑩褐色土(鉄化物を少量含)
⑪やや暗い灰褐色土(炭化物を少量含)
⑫褐色土(2~3cmの黒褐色土含)
⑬やや暗い灰褐色土(鉄分含)
- P 7・P 8 ①暗褐色土と黒褐色土の混じり
②やや暗い灰褐色土
③やや暗い灰褐色土(黒褐色)
④褐色土(少分量含)、鉄化物を筋状に含む、2~3cm
⑤やや暗い灰褐色土(炭化物の大の炭化物プロック含)
⑥やや暗い灰褐色土(炭化物含)
⑦より灰色が強い
⑧褐色土(鉄化物を少量含)
⑨褐色土(鉄化物プロック)
⑩褐色土
⑪やや暗い灰褐色土(炭化物を少量含)
⑫褐色土(鉄分含)
⑬褐色土(2~3cmの黒褐色土含)

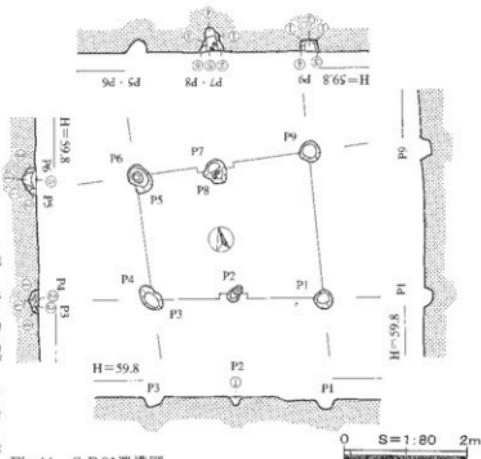


Fig.44 S B21遺構図

S B1 9 (Fig.42 Tab.19・37)

L 9グリッドに位置する。1間×1間の建物跡である。土層断面を観察すると柱痕とみられる痕跡がP 4で認められるものの、他はいずれも柱は抜き取られたかあるいは折り取られた様相が認められる。P 1から上師質土器片が出土した。

S B2 0 (Fig.42・43 Tab.19・22・38・39 PL.22)

K 9グリッドに位置する。1間×1間の建物跡である。北側のP 3-P 4間が南側よりもやや広い。S B12の南隣に位置し、東西建物群の南側の西側に位置する。P 4の規模が極端に小さいものの、S B11やS B12と主軸がほぼ重なる。土層断面ではいずれの柱穴からも柱痕が確認された。遺物はP 2から90・91・92、P 3から上師質土器片が出土した。90・91はいずれも土師質土器の口縁部で、口縁部は緩やかに内済する。92は口縁部と底径の差が小さく、立ち上がりが短い皿である。いずれも鎌倉時代の所産である。出土した位置はP 1では柱が抜き取られた後の層で検出されており、建物跡の廃絶に伴うものであろう。

S B2 1 (Fig.44 Tab.19・40)

L 10グリッドに位置する。1間×2間の建物跡である。西側のP 3-P 6間がやや狭い。ピットの規模は、P 2がやや小さいが、P 1-P 3の中間に位置する柱である。P 6は2段に掘り込まれるが、土層断面から判断すると、抜き取られた可能性がある。P 7・P 9は柱痕が確認できた。出土遺物はP 8から上師質土器片が出土しているものの図化できない。出土位置は柱痕に沿った位置であることから、柱を立てるかあるいは立て直す際に入り込んだと推測する。

S B2 2・2 3 (Fig.45 Tab.19・41・42)

O 12・13グリッドに位置する。SB22は、1間×2間の建物跡であるが、P 1-P 6の中間にP 7が位置する。西隣にS B23があり、主軸もほぼ同じであることから、これらの建物で一つの群をなすと考えられる。周辺は耕作土を約60cm程除去した位置であるが、埋土が褐灰色系で掘立柱建物跡と類似し、よくしまっていること、主軸が同様の方向を向いていることから、同時期の建物としてとらえている。柱穴の遺存状況は悪く、深いものでも20cmに満たない。

P 1

- ①暗褐色土 (黒褐色土上層) 黒褐色土少部分
②灰褐色土 (黒褐色土層)
- P 2
- ①暗灰色土 (黄褐色土・青褐色土層)
②深灰色土 (黒褐色土・小粒混)
P 3
- ①暗褐色土 (ややかき土)
②褐色土 (黒褐色土層)
- P 4
- ①暗褐色土 (黒褐色土ブロック)
②暗褐色土 (黒褐色土・黄褐色土小粒混)
P 5
- ①暗褐色土 (黄褐色土・黄褐色土層)
②灰褐色土 (黒褐色土層)
- P 6
- ①やや暗い・褐褐色土・黄褐色土・少部分
②褐色土 (黒褐色土・小粒・灰褐色土層)

Tab.41 SB22ピット一覧表

S B22	長軸	短軸	深さ
ピット番号	(cm)	(cm)	(cm)
P 1	26	24	8.8
P 2	22	20	19.0
P 3	24	18	16.1
P 4	22	20	15.0
P 5	24	20	8.3
P 6	22	20	9.0
P 7	30	26	9.0

P 1

- ①灰褐色土 (黒褐色土ブロック)
②やや明るい灰褐色土 (黄褐色土小粒混、灰褐色土層)
③灰褐色土 (黒褐色土・黄褐色土小粒混)
④灰褐色土 (黒褐色土ブロック)
⑤やや明るい灰褐色土 (黄褐色土・黄褐色土ブロック)
P 3
- ①灰褐色土 (黒褐色土・黄褐色土層)
P 4
- ①やや暗い灰褐色土 (灰分含)
②灰白色土
③灰褐色土
- P 5
- ①やや暗い灰褐色土 (黒褐色土層)
②やや暗い灰褐色土
③灰褐色土 (黒褐色土・小粒多量混)

Tab.42 SB23ピット一覧表

S B23	長軸	短軸	深さ
ピット番号	(cm)	(cm)	(cm)
P 1	28	24	16.3
P 2	46	22	24.2
P 3	16	16	6.9
P 4	20	18	10.9
P 5	15	18	8.1
P 6	24	22	16.0

S B23はほぼ正長方形である。調査区の北壁の際に位置している。P 3・5・6の掘方はやや浅い。P 1・2・6で柱痕を確認した。

SB 24・25・26・27・28

(Fig.46~48 Tab.19・43~47)

M~O16グリッドに位置する。これらが南北方向に建物群を形成している。

S B24はほぼ整長方形である。真南にS B26があり、これとつながる可能性もあるが、柱の間隔が広くなるために、別の建物跡として設定している。P 3がやや浅いものの、深さは比較的一定している。P 1・2で柱痕、P 4で抜き取りとみられる上層を検出した。

S B25は建物群の中では軸が西に振れている。

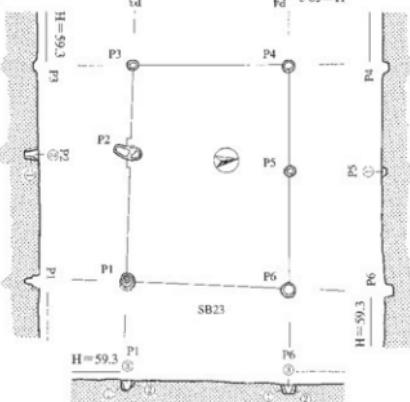
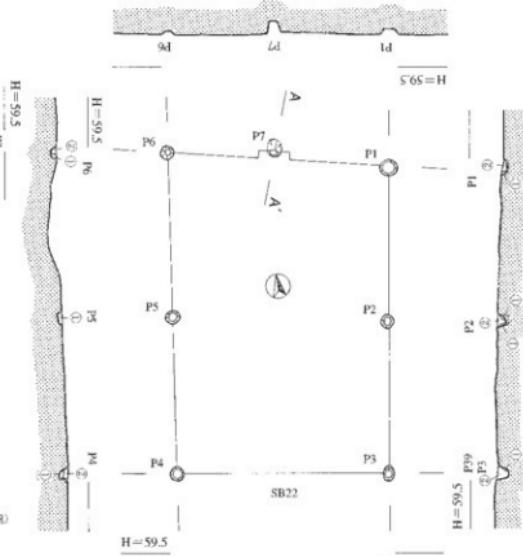


Fig.45 S B22・23構造図

- P 1
 ①やや明るい黒褐色土
 ②灰褐色土
 ③やや暗い褐灰色土 (炭化物を含む)
 ④やや暗い褐色土
 ⑤茶褐色土と灰褐色土の剥じり (炭化物を含む)
 P 3
 ⑥茶褐色土上に灰褐色土が水平方向に層状に混
 ⑦灰褐色土 (炭化物を少含む)

- P 4
 ⑧茶褐色土上 (褐灰色土ブロック混)
 ⑨茶褐色土 (1~2mm大の白色砂粒混)
 ⑩やや暗い灰褐色粘質土 (灰褐色土ブロック混。
 粘合分)
 ⑪灰褐色土

南側のP 2 - P 3 間がやや狭い。柱の深さはおよそ7~13cmで浅い。付近は南東から緩やかに下る斜面で、耕田の上側にあるため、田の区画の中でも近年の耕作が及んでいる部分で、大きく掘削されている。

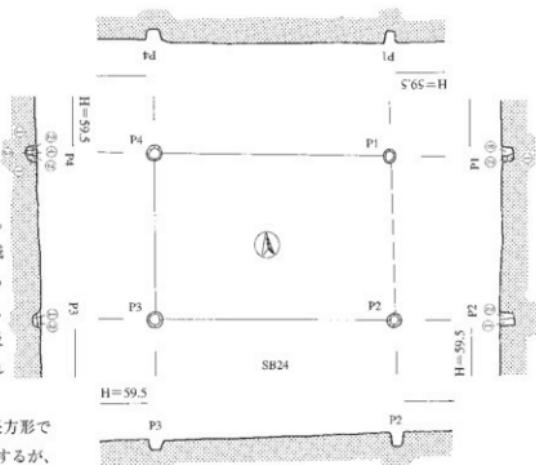
S B26は1間×1間ではほぼ整長方形である。P 1 - P 4 間にP 5 が位置するが、P 2 - P 3 間にはピットは確認できない。柱穴の深さはいずれも20cm前後で比較的一定している。埋土は全て単層である。

S B27は1間×1間の建物であるが、P 1 - P 4 、P 2 - P 3 間が約3.5mとやや広い。付近にはピットが少なく、他の並びが見つけにくいくこと、建物の軸は周辺の建物群と共通することから建物跡として復元した。遺存状況は悪く、P 2 は浅い。埋土はP 1 を除き全て単層で、ややしまりのない土が目立つ。

S B28は1間×2間の建物跡で、南北の建物群の中では最も南側に位置する。P 1 - P 6 間の距離が比較的長いが、これを除けばほぼ整長方形となる。柱の深さは浅いものでも20cmあり、付近は掘削の著しい箇所ではあるが、遺存状況は比較的良好。P 1 · 2 · 4 · 5 で柱痕が検出されたが、いずれも外側に位置する柱である。P 3 · 5 は2段掘りの可能性もある。

S B 2 9 (Fig.48 Tab.19 · 48)

S B29の北側にはS A 6 · 7 があるが



Tab.43 SB24ピット一覧表

SB24 ピット番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P 1	22	18	21.7
P 2	22	22	21.3
P 3	24	24	11.3
P 4	24	24	15.3

Tab.44 SB25ピット一覧表

SB25 ピット番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P 1	20	20	9.2
P 2	26	20	12.8
P 3	20	18	11.6
P 4	34	30	6.8

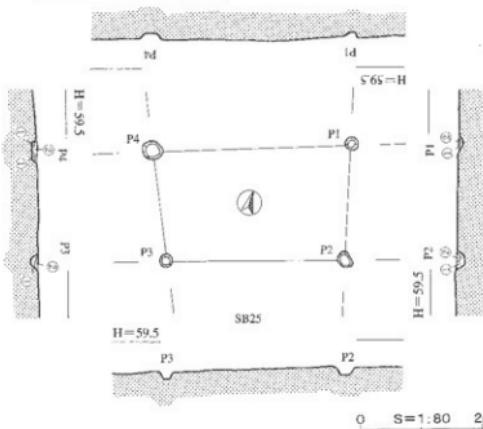


Fig.46 S B24 · 25遺構図

Tab.45 SB26ピット一覧表

S B26 ピット番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P 1	24	16	14.5
P 2	26	24	10.3
P 3	22	20	18.7
P 4	22	20	13.3
P 5	22	18	10.5

Tab.46 SB27ピット一覧表

S B27 ピット番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P 1	18	16	9.9
P 2	24	22	25
P 3	20	20	14.2
P 4	20	20	23.9

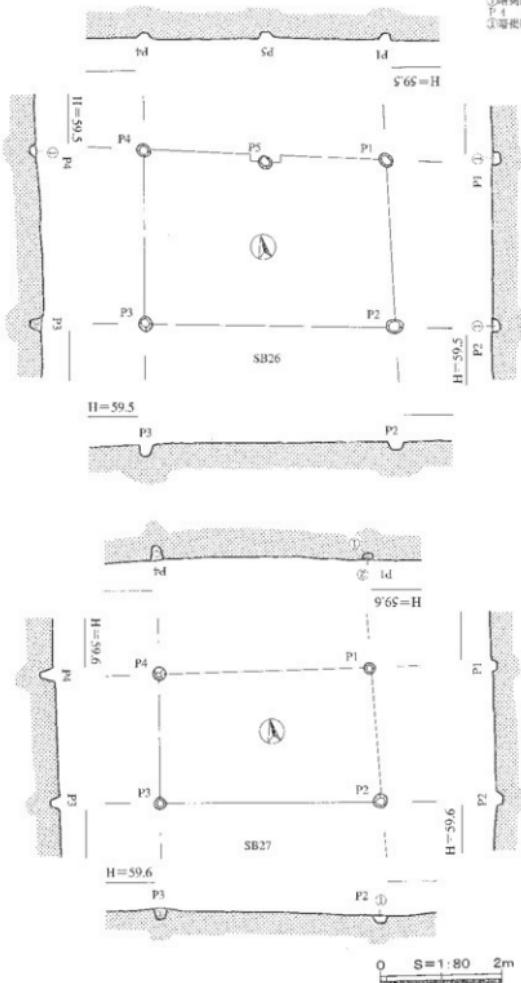


Fig.47 S B26・27遺構図

P 1 やや暗い灰褐色土 (農地物を少し含む)

P 2 やや暗い灰褐色土 (黒褐色土上層)

P 3 やや暗い灰褐色土

P 4 やや暗い灰褐色土 (灰白色上層)

SB 27

P 1 黒褐色土 (やや暗い灰褐色土 (もろい))

P 2 灰褐色土 (灰褐色土上層)

P 3 灰褐色土 (灰褐色土多量泥。しまりがない)

P 4 灰褐色土 (灰褐色土上層)

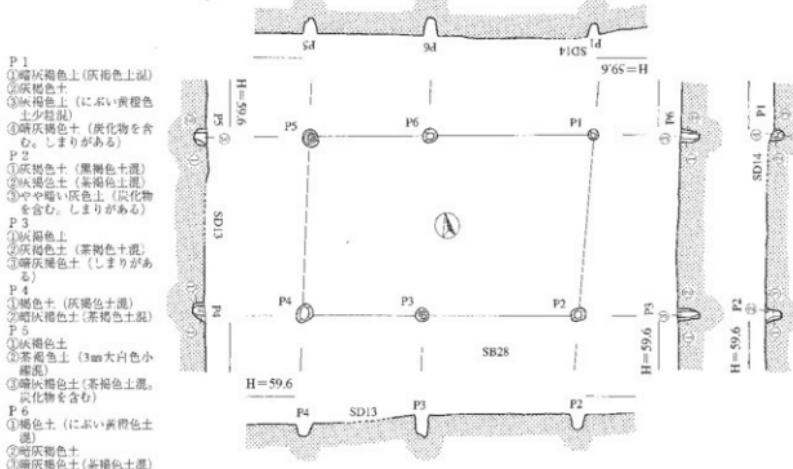
主軸は異なる。ほぼ北方向に主軸をとる。1間×1間の建物跡である。柱の深さはほぼ一定している。P 2で柱痕を確認した。

S B 3 0 (Fig.49 Tab.19・49 PL.10)

S B 30以降は1区の掘立柱建物跡となる。1区は東側では2区の西端の建物群を構成するが、西側では点在する傾向がある。建物跡が廃棄された後には耕作地として使用されている状況がうかがえる。

S B 30はE 4グリッドに位置する。付近は第2遺構面から上の堆積が著しく、弥生時代においては周辺よりも標高が下がるのに対し、中世面ではむしろ周辺よりも標高が高い。この間の層は、黒色土、灰色土、灰褐色土などの互層で、部分的に白色シルトが混入する。付近のトレーニチによると、下層の第2遺構面までの深さは1 mにもなる。この土がどのように堆積したのかは不明瞭であるが、基本的に水平堆積がなされているため、人為的な土地改良というよりも自然堆積の可能性が高い。

これらの層の上面からS B 30の柱穴は掘り込まれている。規模は1間×2間で、P 1-P 2の外側に並行してP 7-P 8



Tab.47 SB28ピット一覧表

S B28 ピット番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P 1	16	14	21.6
P 2	24	22	26.9
P 3	22	22	37.0
P 4	32	26	21.9
P 5	40	26	25.9
P 6	22	22	32.0

Tab.48 SB29ピット一覧表

S B29 ピット番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P 1	※18	14	10.8
P 2	20	18	18.8
P 3	22	20	11.2
P 4	18	16	11.2

が、P 5 - P 6 に並行して P 9 - P 10 が建物から近い位置にあり、柱に並行していることなどから、これは建物の一部で、底あるいは縁創的な施設と想像しておく。

土層断面をみても P 7 ~ P 10 はいずれも掘方は他の柱穴に比べて浅い。主柱穴は深い P 1 では 60cm を越えている。いずれも柱痕跡または抜き取り痕とみられる。

SB31 (Fig.50 Tab19・50 PL.7)

G ~ H 4 グリッドに位置する。1間 × 3間の純柱建物である。付近は耕作痕が遺者に遺存しており、P 1 - P 8 などは、耕作痕の埋土を除去した際に柱穴を検出しており建物の廃絶した後に耕作が行われたことがうかがわれる。図には示されていないが、これを囲むような標跡 S A 9 が検出されている。

SB31 の柱穴は浅いもので P 1 の 26cm であるが、他は概ね 40cm 以上、深いものでは P 6 の 80cm をこえるものも見受けられる。また、中央に位置するピットは、いずれも 50cm 以上と深い。ほとんどの柱穴で柱痕跡もしくは抜

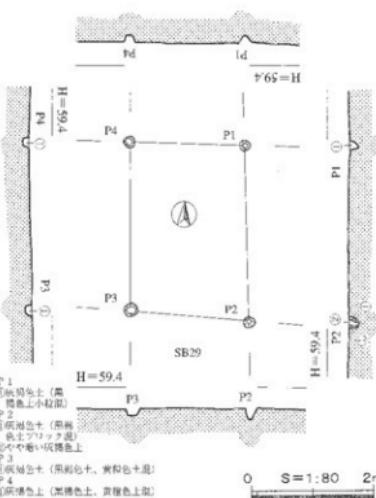


Fig.48 SB28・29 遺構図

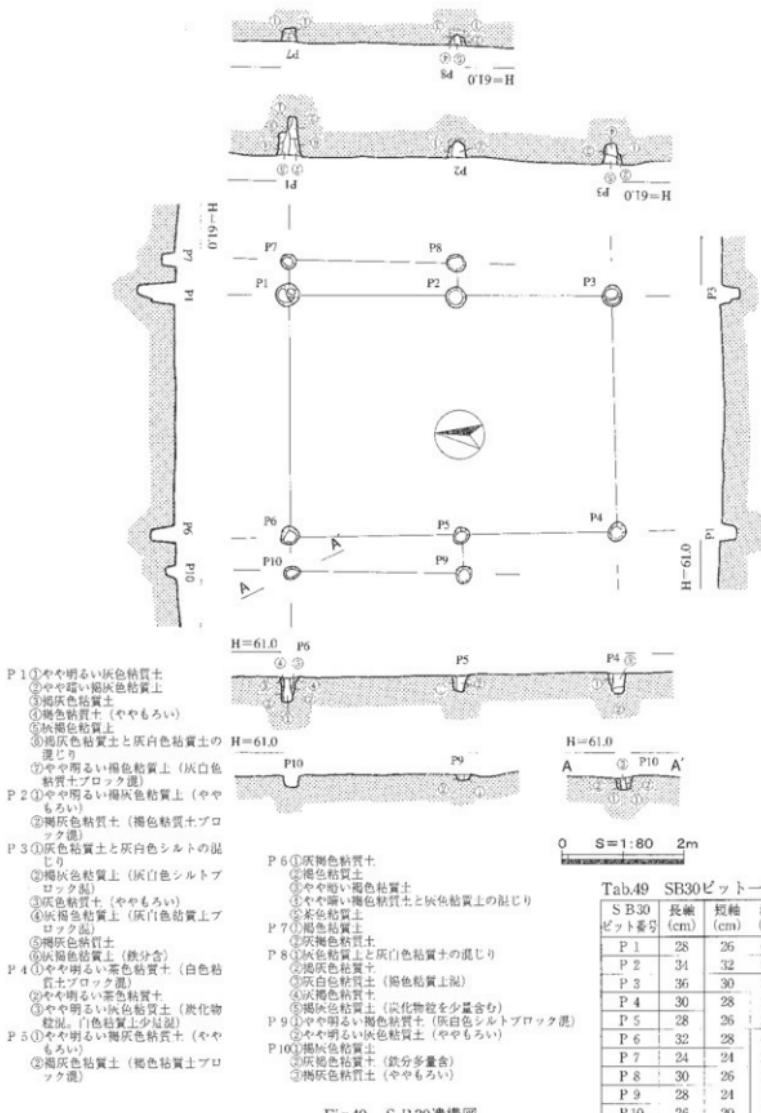
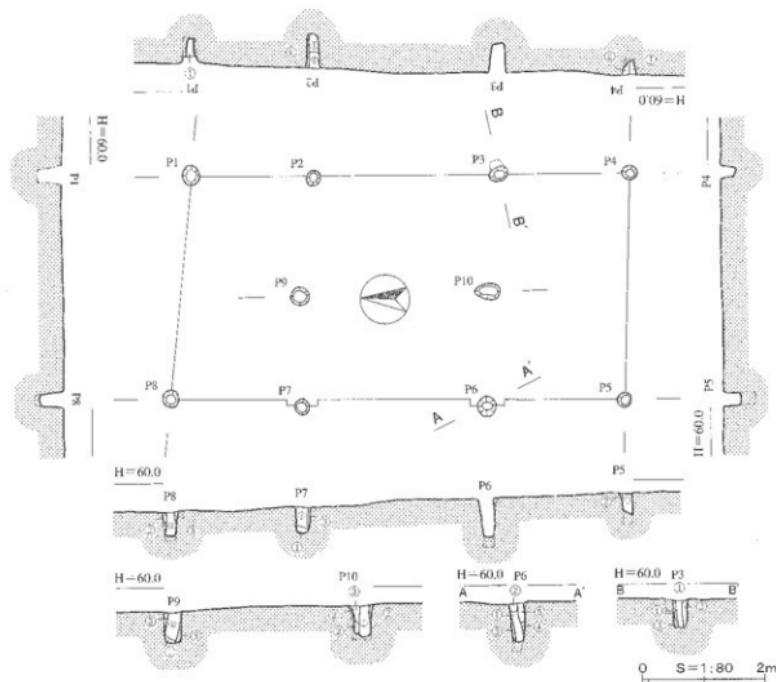


Fig.49 SB 30遺構図

き取りの痕跡が確認できた。総柱建物であり、調査区内ではこのような建物跡はみられないため、性格が異なる建物であることが考えられる。



- P 1 ①炭褐色粘質土（ややもろい）
- ②炭褐色粘質土（灰白色上多粘混。もろい）
- ③炭褐色粘質土
- ④炭褐色粘質土
- P 2 ①炭褐色粘質土（灰白色上多粘混。もろい）
- ②炭褐色粘質土
- ③炭褐色粘質土
- ④炭褐色粘質土
- P 3 ①炭褐色粘質土（灰白色上多粘混。もろい）
- ②炭褐色粘質土（にぶい黄褐色上混）
- ③やや硬い炭褐色粘質土
- ④炭褐色粘質土（もろい）
- P 4 ①炭褐色粘質土
- ②炭褐色粘質土（黄褐色上ブラック混）
- P 5 ①炭褐色粘質土（にぶい黄褐色上多粘混。もろい）
- ②やや硬い炭褐色粘質土（にぶい黄褐色上多粘混）
- P 6 ①炭褐色粘質土（灰白色上多粘混。もろい）
- ②炭褐色粘質土（灰白色上混）
- ③炭褐色粘質土（もろい）
- ④炭褐色粘質土（もろい）
- ⑤炭褐色粘質土

- P 7 ①炭褐色粘質土（灰褐色土混。もろい）
- ②炭褐色粘質土
- ③やや硬い炭褐色粘質土
- P 8 ①炭褐色粘質土
- ②炭褐色粘質土
- ③やや硬い炭褐色粘質土（鉄分少量含）
- P 9 ①炭褐色粘質土（もろい）
- ②炭褐色粘質土
- ③やや明るい炭褐色粘質土（端灰白色混）
- P 10 ①炭褐色粘質土（灰褐色土混。もろい）
- ②炭褐色粘質土
- ③やや明るい炭褐色粘質土（端灰白色混）

Fig.50 S B31構造図

Tab.50 SB31 ピット一覧表

SB31 ピット番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P 1	42	28	40.7
P 2	22	22	55.4
P 3	36	30	49.2
P 4	26	22	26.5
P 5	26	22	52.4
P 6	32	30	80.4
P 7	28	26	43.5
P 8	30	28	46.7
P 9	30	26	52.6
P 10	40	28	58.8

S B 3 2 (Fig.51 Tab.19・51)

G 7グリッドに位置する。付近に建物は無く、ピットも粗である。南側にS D23があるが、近世の遺構であり、切り合ひ関係はみられない。1間×2間の建物跡であるが、南北方向のP1-P2、P4-P5間の距離が大きい。当初耕作痕を掘り下げた後にP1・5・6を検出していたが、遺構の埋土と基盤層の土色が類似していたため、P2・3・4の存在を確認できずに掘り下げた。第2遺構検出面の黒色土上面まで掘り下げた後に、P2～P4を検出したが、埋土から第1遺構検出面での遺構であろう。平面形はP3・P6がやや外側にはずれるものの、ほぼ整った方形となる。柱穴の深さは大きな差はないものとみられる。P1・P3で柱痕が確認できた。

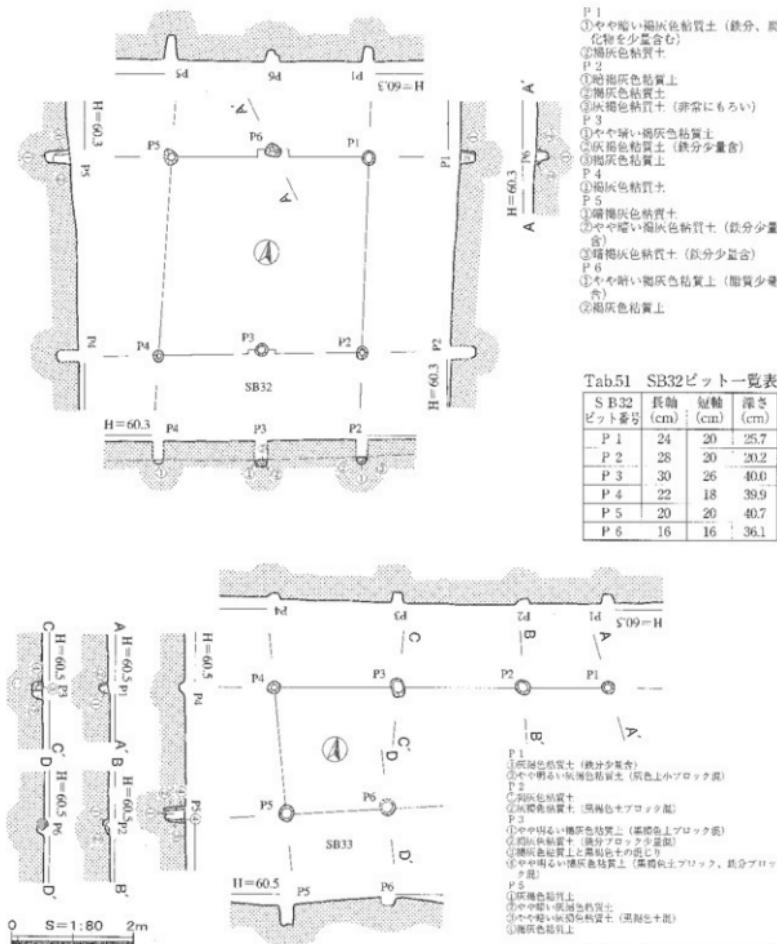
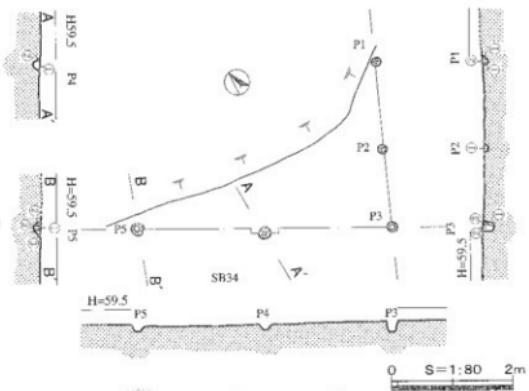


Fig.51 S B32・33造構図

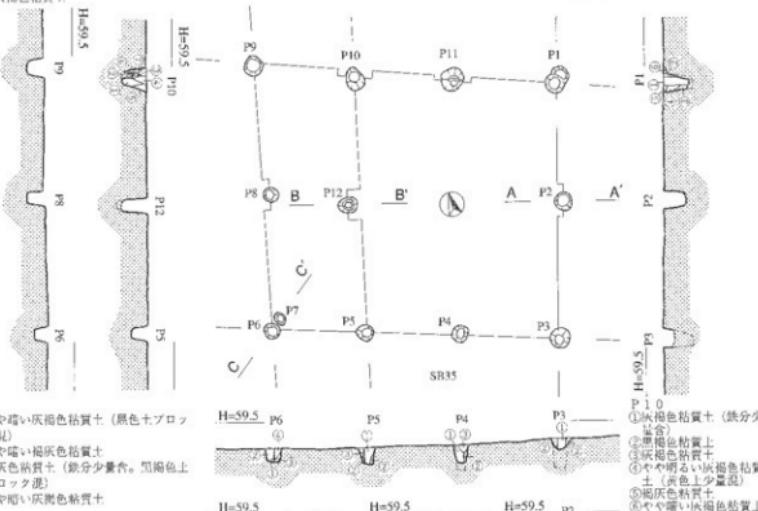
Tab.53 SB34ピット一覧表

S B34 ピット番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P 1	14	14	9.1
P 2	16	14	7.3
P 3	16	16	26.1
P 4	22	18	9.5
P 5	22	20	9.1

- P 1
 ①灰褐色粘質土（灰褐色粘質土混）
 ②灰褐色粘質土（灰褐色少量混）
 P 2
 ①褐灰色粘質土（にぶい黄褐色土小ブロック、
 黄褐色土小ブロック多量混）
 P 3
 ①灰褐色粘質土（灰褐色粘質土混）
 ②灰褐色粘質土（褐色土、灰白色土混）
 ③やや暗い灰褐色粘質土（褐色土混）
 P 4
 ①灰褐色粘質土（黒褐色土小ブロック多量混）
 ②やや暗い灰褐色粘質土（黒褐色土少量混）
 P 5
 ①褐灰色粘質土（にぶい黄褐色土少量混、黒
 褐色土ブロック混）
 ②灰褐色粘質土
 ③灰褐色粘質土



- P 1
 ①灰褐色粘質土（黒褐色土ブロック少量混、
 鉄分少量含）
 ②灰褐色粘質土
 ③やや暗い灰褐色粘質土（鉄分少量含）
 ④褐灰色粘質土
 ⑤灰褐色粘質土（黒褐色土ブロック混）
 ⑥暗褐色粘質土



- P 2
 ①やや暗い灰褐色粘質土（黑色土ブロック
 ブロック）
 ②やや暗い褐灰色粘質土
 ③褐灰色粘質土（鉄分少量含、黒褐色土
 ブロック混）
 ④やや暗い灰褐色粘質土
 P 3
 ①褐灰色粘質土（鉄分少量含）
 ②やや明るい褐灰色粘質土（鉄分含）
 P 4
 ①灰褐色粘質土とやや暗い灰褐色粘質土
 の混じり
 ②褐灰色粘質土
 ③灰褐色粘質土（鉄分、鉛質
 少量含）
 P 5
 ①やや明るい褐灰色粘質土（鉄分、鉛質
 少量含）
 ②褐灰色粘質土（ややもろい）
 ③暗褐色粘質土（灰褐色土粘質土少量
 含）

- P 6
 ①灰褐色粘質土
 ②褐灰色粘質土（褐色土
 ブロック混）
 ③やや明るい褐灰色粘質土
 （鉄分少量含）
 ④褐灰色粘質土（黒褐色土小
 ブロック混）
 P 7
 ①褐褐色土（黑色土ブロック混）
 P 9
 ①灰褐色粘質土（鉄質少量含）
 ②褐灰色粘質土
 ③灰褐色粘質土
 ④灰褐色粘質土（褐色土土
 質）
 ⑤やや暗い灰褐色粘質土
- P 11
 ①灰褐色粘質土（鉄分少
 量含）
 ②やや暗い灰褐色粘質土
 ③褐灰色粘質土
 ④やや暗い灰褐色粘質土
 とややもろい褐色土の
 の混じり
- P 12
 ①褐褐色粘質土
 ②灰褐色粘質土（褐色土
 ブロック混）
 ③灰褐色粘質土（黑色土
 ブロック混）

Fig.52 SB34・35遺構図

Tab.55 SB36 ピット一覧表

S B36 ピット番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P 1	20	16	60.0
P 2	30	22	62.9
P 3	26	22	38.3
P 4	18	16	26.9
P 5	38	28	16.2
P 6	78	42	39.2

- P 3
 ①褐色色粘質土とやや暗い褐色
 色粘質土の混じり
 ②やや暗い褐色色粘質土
 ③褐色色粘質土（鉄分少含）
 P 2
 ①褐色色粘質土（ややもろい）
 ②やや柔らい褐色色粘質土
 ③褐色色粘質土（灰色粘質土ブ
 ロック混）
 ④褐色色土（ややもろい）

Tab.56 SB37 ピット一覧表

S B37 ピット番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P 1	22	16	31.1
P 2	20	18	29.8
P 3	34	24	57.8
P 4	16	14	30.2
P 5	22	20	31.3
P 6	28	22	28.2

- P 1
 ①褐色色粘質土（炭化物を少含む）
 P 2
 ①褐色色粘質土とやや暗い褐色色粘質土の
 混じり
 ②褐色色粘質土
 P 3
 ①褐色色粘質土（鉄分少。炭化物を含む）
 ②褐色色粘質土（もろい）
 ③灰褐色粘質土（もろい）
 ④灰褐色粘質土（鉄分少）

S B 3 3 (Fig.51 Tab.19・52)

G 8・9 グリッドに位置する。SK70 に切られているため、規模は不明であるが、1間×3間以上の規模をもつものとみられる。名和町の調査では、これよりも南側で鎌倉期とみられるピット群や上坑が確認されており、茶畑木本遺跡として登録されている。付近には目立った建物跡はみられず、位置的にはさらに南側に建物跡が展開していることが予想できる。柱穴は耕作により埋されており、遺存状況は悪い。P 3 からは柱痕が確認できた。

S B 3 4 (Fig.52 Tab.19・53)

K・L 8 グリッドに位置する。北側が

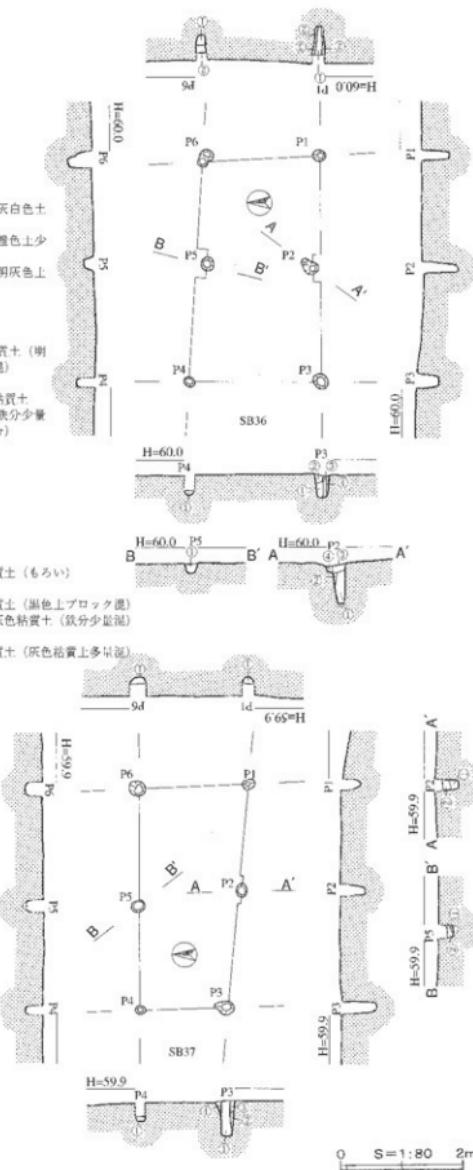


Fig.53 SB36・37 漢構図

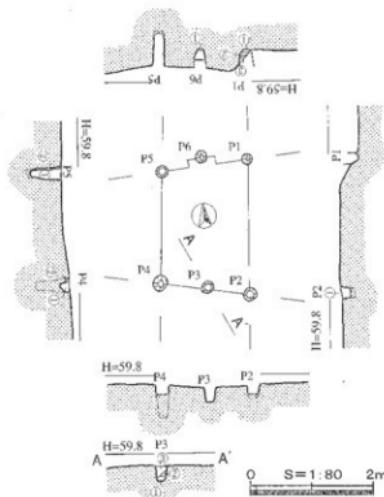


Fig.54 SB38遺構図

Tab.57 SB38ピット一覧表

S B 38 ピット番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P 1	18	18	15.6
P 2	22	20	23.4
P 3	20	18	21.9
P 4	26	24	55.5
P 5	22	18	57.7
P 6	20	18	30.3

- P 1
 ①やや暗い灰色粘質土
 ②褐色粘質土
 ③明灰色粘質土 (鉄分ブロック混)
 P 2
 ①褐色粘質土 (黒褐色土混)
 ②褐色粘質土
 ③やや明るい灰色粘質土 (鉄分ブロック少量混。鉄化物粒を含む)
- P 4
 ①褐色粘質土上 (鉄分ブロック混)
 ②灰色粘質土 (鉄分ブロック少量混)
 P 5
 ①やや暗い褐色粘質土 (ややもろい)
 ②やや暗い灰褐色粘質土
 P 6
 ①灰褐色粘質土 (灰褐色土少量混)

調査範囲外であるが、少なくとも 2 間 × 2 間以上の規模をもつ。ただし柱穴の規模は他の建物跡に比べ小さい。主軸も東に振れており、S B19 と類似する向きで、この 2 株については別の時期、性格の建物跡と考えることもできる。柱痕は P 1・P 3・P 5 に認められる。

S B 3 5 (Fig.52 Tab.19・54)

J 6・7 グリッドに位置する。2 間 × 2 間と 1 間 × 2 間の建物が組み合わされたような形状で、2 区の S B 8 に類例を見付けることができる。したがってこれは 1 棟の建物跡で、総柱ではなく何らかの仕切りのための間取りであると推測する。柱穴の平面形、深さはほぼ一定しているが、P 7～P 9 の西側の柱穴の深さが若干浅い。

柱穴の埋土は灰褐色を中心としており、第 1 遺構検出面の基盤層に類似しているため、一部の柱穴についてトレンチで掘削したり、第 2 遺構検出面である黒色土上で検出したものもある。柱痕を残すものは P 1・P 5・P 9・P 11・P 12 である。遺物は P 7 から土師質土器片が出土しているが、小片で固化し得ない。

S B 3 6・3 7・3 8 (Fig.53・54 Tab.19・55～57 PL.10)

J 8・J～K 9 グリッドに位置する。1 区の東端に位置しており、建物群としてのまとまりをもつ。

S B36 は 1 間 × 2 間の規模をもつが、P 2・P 5 がやや内側に入り込んでいる。深さは P 5 が極端に浅い他は、概ね 40cm 前後以上である。明確な柱痕はないが、抜き取られた可能性のある堆積は認められる。P 6 から遺物が出土しているが固化し得ない。

S B37 平面形は P 3～P 4 間がやや狭く不整な長方形となる。柱の深さは概ね一定している。周辺にはピットが多く検出されている。P 3 からは柱痕を確認したが、他は単層と考え、ある程度掘り下げた後に分層している。

S B38 は 1 間 × 1 間の建物跡である。周辺には多くのピットがあるが、等間隔で並ぶものはないため、これ以上の規模の設定はしていない。S B36 の北隣に位置し、主軸はほぼ直交方向になる。柱穴は比較的のしっかりとしており、P 5 には柱痕が認められる。

注

(1) 大社町教育委員会 2001『山家大社境内遺跡』

(2) 土坑

1区で23基、2区で56基の土坑を検出した。時期は、古墳時代の土師器高杯が出土した土坑SK59があるものの、他は概ね鎌倉時代の遺物が出土している。ただし遺物が出土していない土坑も多く認められ、必ずしも全てが鎌倉時代の遺物とばかりは断定しかねる。ただし、掘立柱建物跡やピット群の集中する付近に上坑が検出されることが多く、同時期の遺物が出土しており、埋土も灰色もしくは灰褐色系の土が認められるものが多い。また、これらの土坑は、建物の中あるいは柱と柱の間に位置するもの、土坑群としてある程度まとまりが認められるものがあり、前者については建物との関係を、後者については建物群との関係をそれぞれ想定する必要がある。

土坑の形状は、円形、梢円形、方形、隅丸方形と様々である。ただしこれらの中には井戸のように木組みや石組みをもつものや、底にピットをもつものはみられない。断面長方形のいわゆる墓的な形状をもつ土坑は認められるが、骨や副葬品等は出土しておらず、性格は不明瞭である。

出土遺物は上師質土器の杯や皿、中世須恵器の勝間田・亀山系須恵器、国産陶器の常滑焼や越前焼がある。そのほか木製の容器や釘などの鉄製品が出土しているが、いずれも完存しているものは少なく点数も多くはない。

Tab.58 第1遺構面土坑一覧表

SK番号	グリッド名	平面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(cm)	SK番号	グリッド名	平面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(cm)
SK9 I10		不整な円形	1.00	0.98	16	S K48	K11	不整な円形	2.02	1.56	36
SK10 I10		円形	1.12	0.94	20	S K49	M9	隅丸長方形	1.60	1.00	40
SK11 I10・J10		不整な円形	1.14	1.06	26	S K50	L9	不整な梢円形	1.08	0.74	38
SK12 J10		不整な円形	1.06	1.02	18	S K51	M10	円形	0.94	0.84	58
SK13 J9		やや梢円形	1.16	0.84	30	S K52	M9	隅丸長方形	1.86	0.86	16
SK14 J9		不整な円～梢円形	1.16	1.00	8	S K53	M9	不整な梢円形	1.12	0.66	18
SK15 J9		不整な円形	1.06	0.94	30	S K54	M10	梢円形	0.62	0.56	8
SK16 J9		長梢円形	1.32	0.90	22	S K55	N11・12	不整な円～方形	2.08	2.02	68
SK17 J9・K9		不整な円形	2.19 ¹	2.06	30	S K56	K10・11	不整な梢円形	0.68	0.56	14
SK18 J9・K10		長方形	1.50	1.10	14	S K57	K10・11	不整な梢円形	0.62	0.50	18
SK19 K10		不整な長方形	1.39	1.10	8	S K58	J9, K9	不整な方形	1.26	1.24	36
SK20 K10		不整な長方形	1.28	1.08	40	S K59	N10～N12	不整な円形	3.04	2.94	92
SK21 K10・11		不整な長方形	1.98	1.50	6	S K60	O11	不整な円形	2.22	1.80	48
SK22 L11		不整な梢円形	0.98	0.88	26	S K61	N14・O14	不整形	2.42	1.36	18
SK23 K9		不整な長方形	1.98	1.58	36	S K62	I10・J10	不整な梢円形	1.62	0.96	16
SK24 K9		不整な梢円形	1.38	0.82	18	S K63	L11	不整な円～方形	1.14	1.08	14
SK25 K9		不整な円形	0.82	0.72	46	S K64	L11	不整な梢円形	1.06	0.34	12
SK26 K9		不整な梢円形	2.52	0.96	22	S K66	E5	不整な円形	1.28	1.12	10
SK27 K9		不整な円形	1.26	0.98	21	S K67	G8	円形	1.00	0.98	18
SK28 K9		不整な梢円形	1.34	1.14	22	S K68	G9	梢円形	0.76	0.60	28
SK29 K9		方形	1.38	1.34	26	S K69	G9	円形	0.60	0.60	24
SK30 L9		方形～長方形	#0.82	0.78	6	S K70	G9	不整な円形	3.56	2.92	36
SK31 K9・L9		方形	2.20	2.06	20	S K71	H8	不整な円形	0.80	0.72	8
SK32 K9・L9		長方形	1.68	1.06	32	S K72	I8	長梢円形	1.20	0.84	16
SK33 L9		隅丸長方形	1.96	1.54	30	S K73	I8	円形	1.08	0.98	16
SK34 L9		不整な梢円形	1.44	1.00	8	S K74	H9	不整な梢円形	0.84	0.74	10
SK35 L9		不整な梢円形	1.66	1.24	10	S K75	I8	梢円形	0.64	0.60	34
SK36 L9・M9		隅丸長方形	1.72	1.16	42	S K76	J8	不整な梢円形	1.40	1.04	36
SK37 L9・M9		隅丸長方形	1.84	1.28	26	S K77	J8	梢円形	1.56	0.92	8
SK38 L10		不整な円形	0.84	0.82	28	S K78	J8	円形	0.90	0.88	16
SK39 M10		不整な円形	0.80	0.78	28	S K79	K8	不整な梢円形	#0.88	0.80	40
SK40 L10		不整な円形	0.86	0.66	12	S K80	K8	不整な円形	1.80	1.68	44
SK41 L11		不整な梢円形	1.32	1.04	4	S K81	F7	不整な梢円形	1.98	1.36	38
SK42 L11		不整な梢円形	0.80	0.64	4	S K82	J8	不整形	1.04	0.74	30
SK43 M10・11		不整な梢円形	1.82	1.56	14	S K83	E6	円形	0.82	0.80	8
SK44 K10・J10		不整形	4.64	2.84	22	S K84	J6	円形	0.72	1.56	138
SK45 J9		不整形	2.40	2.30	39	S K85	F3	円形	1.02	1.00	18
SK46 K9		不整な長方形	1.02	0.84	22	S K86	E6	方形	#0.96	#0.50	80
SK47 K9		長方形	1.86	1.78	78	S K87	F8	不整な円形	0.60	0.56	36

出土する遺物は土師質土器をはじめ、瓦質土器、国産陶器などがあるが、いずれもほぼ鎌倉期を中心とするもので、時期的には大きな隔たりは無いように見受けられる。このことから、土坑の多くは掘立柱建物跡を中心とした集落の存在した時期に造られたと考えられる。

S K 9・10・11・12 (Fig.55・56 Tab.58・59 PL.22)

S K 9・10は I 10グリッド、S K 11・12は I 10～J 10グリッドに位置する。S B 4・5の東側に位置し小群をなす。東側は現代まで使用されていた用水路がある。付近は掘削が著しく、遺存様態は悪い。いずれも平面形は不整な円形～椭円形で、断面形は逆台形状である。

S K 9はP222と重複し、これよりも古い。埋土はほぼ水平堆積である。北側の浮いた位置から須恵器壺体部片が出土した。

S K 10は、埋土はブロックが多く混入しており、人為的に埋められた可能性を有する。

S K 11は南側でP224と重複し、これよりも新しい。土層の堆積状況はブロック状の層が不規則に堆積しており、S K 10と同様、人為的に埋められた可能性がある。遺物は須恵器壺体部片、土師質土器片など出土している。図化し得たのは93で、遺構の中央やや西側で、底面からかなり浮いた状態で出土した。壺の口縁部で、時期は平安期と考えられるが、遺構の時期を示すのかについては即断はできない。

S K 12の底面は東に向かい傾斜しており、埋土は単層である。

S K 13 (Fig.57 Tab.58)

J 9グリッドに位置する。S K 4・5・14の間に位置しており、単独で検出された。P 67と重複し、これよりも古い。平面形はやや椭円形で断面形は逆台形状である。上師質土器片が底面から浮いた状況で出土している。

S K 14・15 (Fig.57 Tab.58)

J 9グリッドに位置する。S B 6の内側で、並んで検出された。S K 14はP62と重複しており、これよりも古い。S K 15はS K 45と重複しており、これよりも新しい。

S K 14は、平面形は不整な円形～椭円形、断面形は逆台形状である。堆積は不整であるが、①・②層の堆積した後、再度土坑を掘り直している状況がうかがえる。S K 14の中央やや南の中位から土師質土器片が出土しているが図化し得ない。

S K 15は不整な円形である。上層は単層で浅い皿状である。遺物は出土していない。

S K 16・17・58 (Fig.57・58・73 Tab.58・60 PL.14・22)

3回にわたり重複している。最も古いのは外側に位置する不整な方形の土坑S K 58である。これが1・2により堆積した後に北側の不整な円形の土坑S K 17が掘り込まれる。さらにS K 17の④～⑥層が堆積した後にS K 16が掘り込まれる。遺物はS K 16の掘り下げ中に出土した。中世須恵器鉢94、瓦質の鉢95、土師質土器片である。いずれも鉢である。土坑の位置は建物の内側ではなく、使用の目的についてははっきりとしない。遺物の時期はいずれも鎌倉時代で、遺構の時期と大きな差はないものと推測する。在土器の編年観では須恵器鉢が瓦質鉢に遡る。

S K 18 (Fig.59 Tab.58)

J 10～K 10グリッドに位置する。東側にはS K 44、西側にはS K 16・17・58がある。ビットなどとの重複関係はなかった。平面形は長方形で明瞭な隅をもつ。断面形は浅い逆台形状である。掘り下げ中に土師質土器片が出土したが、いずれも小片で図化し得ない。

SK19・20・21 (Fig.59 Tab.58)

K10~11グリッドに位置する。南北方向に連なり、平面形はいずれも不整な長方形である。

SK19は、埋土は単層で浅い。ピットなどとの重複関係はない。理土中から遺物は出土していない。

SK20は遺存状況はよい。埋土には比較的のブロックが多く含まれる。中央や東側から上部質土器片が出土しているが、固化し得ない。SK21は埋土は単層で浅い。SK56・57と重複しているが、これよりも新しい。

SK22

(Fig.59 Tab.58)

K11グリッドに位置する。平面形は不整な橢円形状である。断面形は底面が平坦ではない。人頭大の石を多く含む河原状の堆積層を掘り込む。

S B18のP1に重複しており、これよりも古い。このような砂が入り込んだ土坑はSK55・59・60などがあり、これは時期的には遅るものとみられる。建物を建てるために意図的に埋めるのであれば砂質土を入れることを考えにくいため、この土坑は時期がやや遅る可能性がある。ただし、埋土から遺物は出土していないため、時期は不明である。

SK23 (Fig.59 Tab.59)

・61 PL22)

K9グリッドに位置する。P101・P109・P110重複しており、これよりも新しい。平

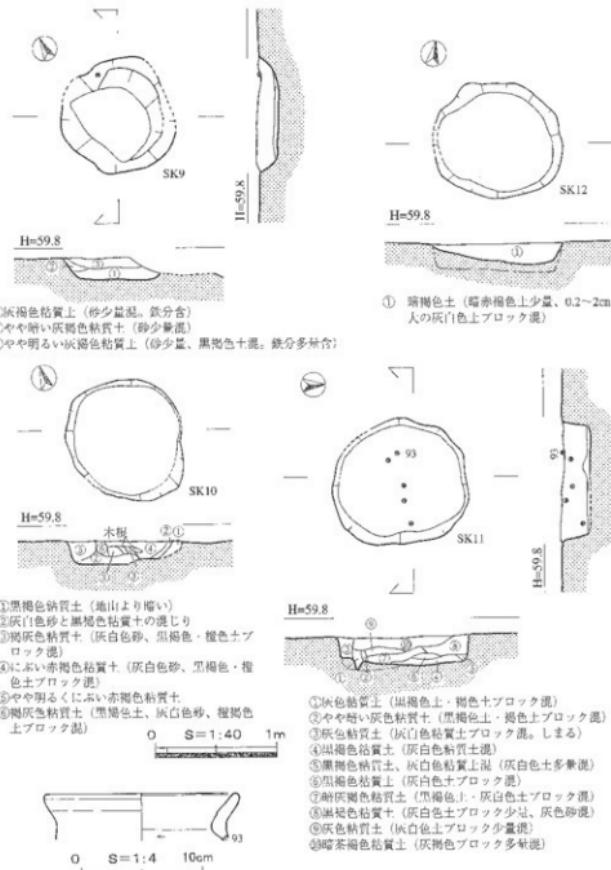


Fig.56 SK11出土遺物実測図 Fig.55 SK9・10・11・12遺構図

Tab.59 SK11出土遺物観察表

No.	Fig. PL	遺構名	出土位置	器種	法量(cm)	特徴	胎土	色調	備考
93	Fig.56 PL22	SK11	埋土上層 要口部	土器質土器 口径△16.0 深さ△39 厚さ△10mm	16.0 △39 △10mm	くの字型の口縁部。薄葉により調整不能で多く含む。	1~3mmの砂を多く含む。	褐色10YR4/6	1/12以下残存

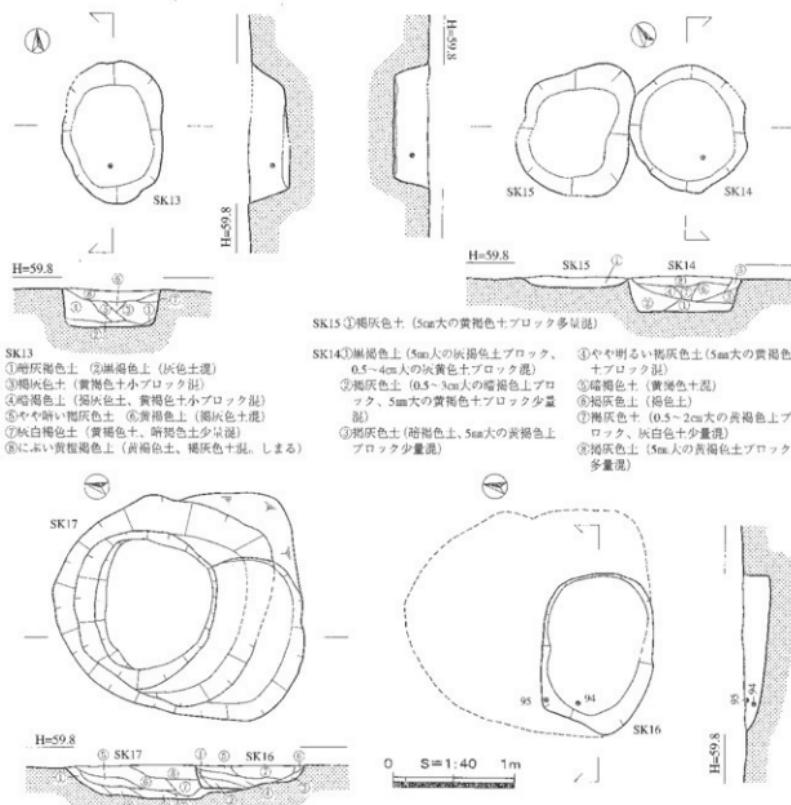
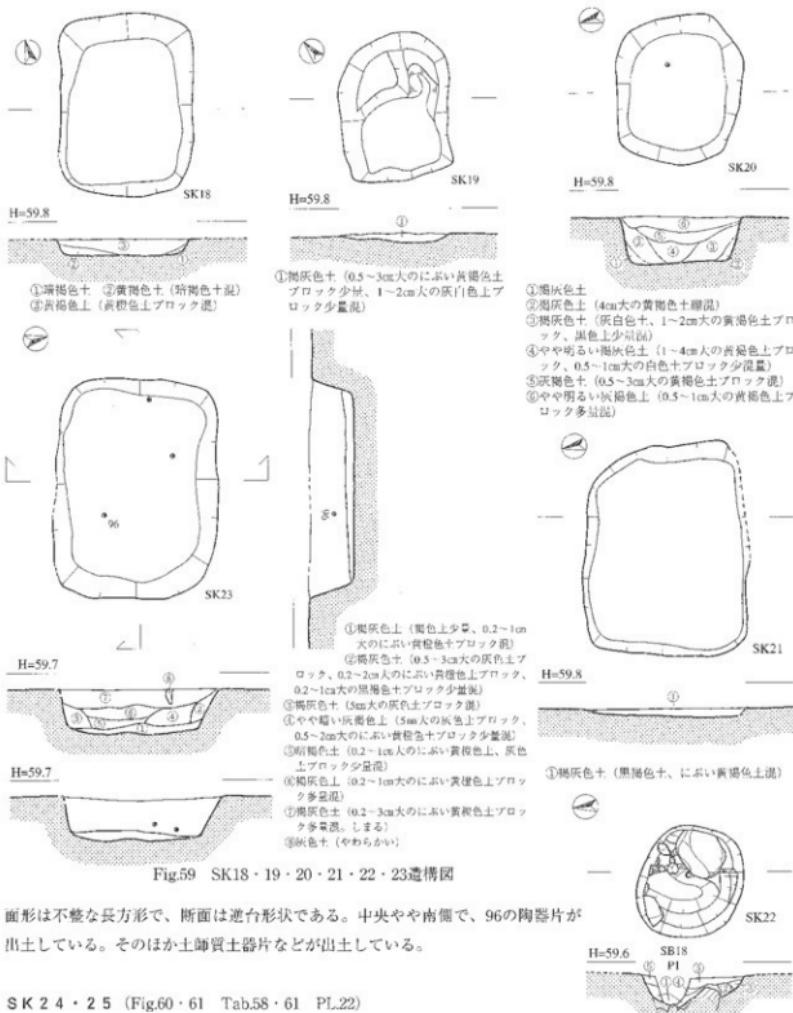


Fig.57 SK13・14・15・16・17遺跡図

Fig.58 SK16出土遺物実測図

Tab.60 SK16出土遺物観察表

No.	Fig. PL.	遺構名	出土位置	器種	法皇(cm)	特徴	船上	色調	備考
94	Fig. PL.22	SK16	堆土上層	須彌器 鉢口縁部	口径△32.0 容積△90	LH縫隙部外側に1条の沈窓あり。無い 2~4mm大の 横方向のナヘが断面に残る。		灰褐色10Y3/1	約1/10残存
95	Fig. PL.22	SK16	堆土上層 底底部	堆土 底底部	△4.6 容積△200	外面上に指擦痕有。焼付土。	1cm以上の 砂粒を含む。	黑色10Y2/1	1/12以下残存 船上付焼付材料 茶加10・在地盤



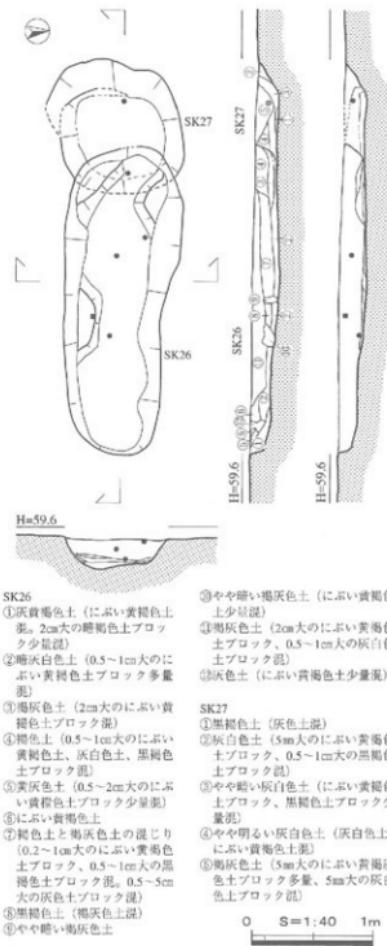
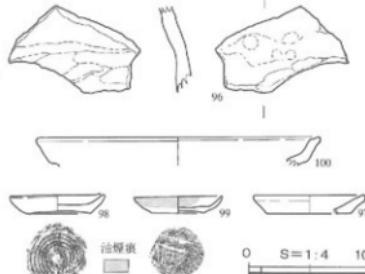
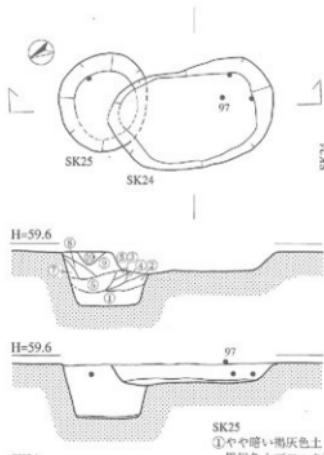
SK 24・25 (Fig.60・61 Tab.58・61 PL.22)

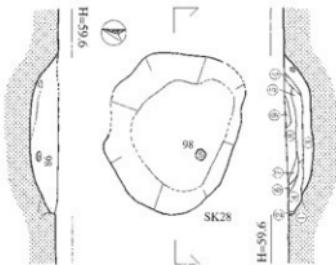
K 9 グリッドに位置する。SK 24とSK 25は重複しており、SK 24が新しい。またSK 24はP 103と重複しており、P 103よりも古い。

SK 24は不整な梢円形状で、断面形状は浅い逆台形状である。堆積は不整である。中央やや南側から土師質土器が出土している。実測したのは97の土師質土器の皿で、底径と口径の差が小さい。

SK 25は不整な円形で、比較的深い。ただし堆積状況をみても柱を建てたとは考えにくい。①層が堆積した段階で再度掘り直され、何回か使用されていた状況

O S=1:40 1m





- ①灰色粘質土(塊状)
 ②黒褐色粘質土と灰色粘質土の混じり
 ③灰白色粘質土(黒褐色土ブロック混)
 ④褐色粘質土(鉄分多量含)
 ⑤灰色粘質土(灰白色土ブロック少量混)
 ⑥灰色粘質土(灰白色土ブロック少量混)
 ⑦灰色砂質土(鉄分含)

がうかがえる。中央やや東側からかなり浮いた状況で土師質土器片が出土している。

SK 26・27 (Fig.60 Tab.58)

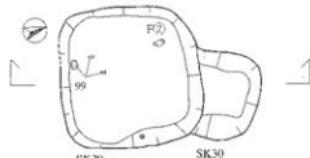
K 9 グリッドに位置する。SK 26 と SK 27 は重複おり、SK 26 が新しい。南側で SK 25 に接するが重複関係はない。このほか、ピットとも多数重複しており、SK 26 は P 99・104 よりも古く、SK 27 は P 111・112 よりも古い。周辺は東西方向に連なる建物群の間に位置し、遺構が密集する箇所である。

S K 26 は不整な椭円形状である。底面は比較的平坦で、部分的にテラス状の箇所もある。ただしこれが埋葬施設なのかは不明瞭である。遺構内から須恵器甕部片や墨壺石の剥片が出土しているが、いずれも小片であり固化し得ない。

S K 27 は不整な円形である。底面は平坦ではない。埋土中から弥生土器または土師質土器片が出土しているが固化し得ない。

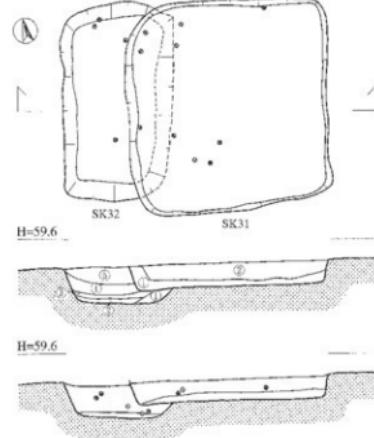
SK 28・29・30 (Fig.61・62 Tab.58・61 PL.12・22)

K 9～L 9 グリッドに位置する。東西に連なる建物群の間に位置し、最も遺構が密な箇所にある。SK 29・30 は重複しており、SK 29 が新しい。掘立柱建物跡やピットとの重複もあり、SK 28 は S B11 の P 6、S B12 の P 7 と重複しており、これらよりも



- SK29 ①灰白色粘質土(黒褐色土ブロック少量混)
 ②黒褐色粘質土(黒褐色土ブロック多量含)
 ③黒褐色粘質土と灰色粘質土の混じり(鉄分含)
 ④灰色粘質土
 ⑤灰色粘質土(黒褐色土ブロック混)
 ⑥やや暗い灰色粘質土(灰白色土ブロック混)
 ⑦やや暗い灰色粘質土(灰白色土ブロック多量、黒褐色土ブロック少量混)

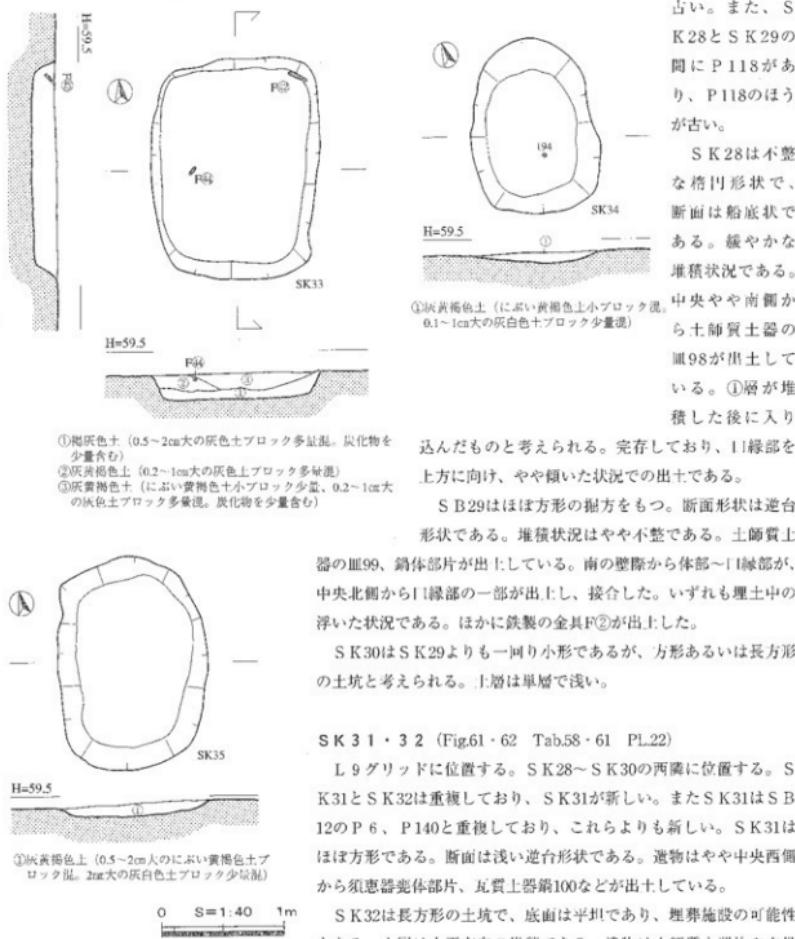
SK30 灰褐色粘質土(黒褐色土ブロック混、鉄分含)



- SK31 ①灰黄褐色土(1～6cm人の黒褐色土ブロック混)
 ②やや暗い褐灰色土(黒褐色土少量混)
 ③灰褐色土(5cm大の黄褐色土ブロック混)
 ④黒褐色土
 ⑤灰黄褐色土(1～3cm大の黄褐色土、クレバ)
 ⑥0.5～4cm人の灰褐色土ブロック少量混)
 ⑦黒褐色土
 ⑧やや暗い灰黄褐色土(1cm大の黒褐色土混)
 ⑨灰白色土ブロック少量混)
 ⑩やや明るい灰黄褐色土(0.1～2cm大の灰白色土ブロック多量、にぶい黄褐色土混)

O S=1:40 1m

Fig.62 SK28・29・30・31・32 遺構図



S K 31・32 (Fig.61・62 Tab.58・61 PL.22)

L 9グリッドに位置する。S K 28~S K 30の西隣に位置する。S K 31とS K 32は重複しており、S K 31が新しい。またS K 31はS B 12のP 6、P 140と重複しており、これらよりも新しい。S K 31はほぼ方形である。断面は浅い逆台形である。遺物はやや中央西側から須恵器底部片、瓦質土器100などが出土している。

S K 32は長方形の土坑で、底面は平坦であり、埋葬施設の可能性もある。土層は水平方向の堆積である。遺物は土師質土器片や中世須恵器片が不規則に入り込んでいる。

S K 33・34・35 (Fig.63 Tab.58 PL.47)

L 9グリッドに位置する。S B 14~16の北側に位置し、さらに北側の土坑とともに群をなす。いずれも長方形ないし隅をもつような橢円形である。周辺の遺構は密度が低く、重複関係は認められない。

S K 33は、断面は浅い逆台形で、西側と東側の壁付近から鉄釘F④・F⑤が出土している。いずれも埋土の浮いた状況である。

S K 34・S K 35の断面形はいずれも皿状で浅い。遺物はS K 34の埋土中から土師質土器片が出土しているが同化し得ない。S K 34・S K 35はいずれも埋土は単層で浅い。

占い。また、S K 28とS K 29の間にP 118があり、P 118のはうが古い。

S K 28は不整な橢円形で、断面は船底状である。緩やかな堆積状況である。

中央やや南側から土師質土器の皿98が出土している。①層が堆積した後に入り込んだものと考えられる。完存しており、口縁部を上方に向かって、やや傾いた状況での出土である。

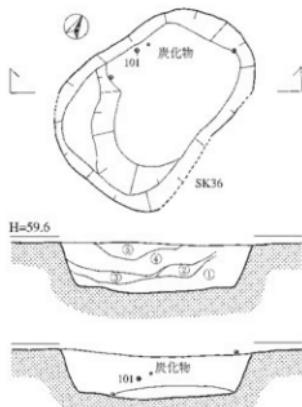
S K 29はほぼ方形の掘方をもつ。断面形状は逆台形である。堆積状況はやや不整である。土師質土器の皿99、鍋体部片が出土している。南の壁際から全体部へ口縁部が、中央北側から口縁部の一部が出土し、接合した。いずれも埋土中の浮いた状況である。ほかに鉄製の金具F②が出土した。

S K 30はS K 29よりも一回り小形であるが、方形あるいは長方形の土坑と考えられる。土層は単層で浅い。

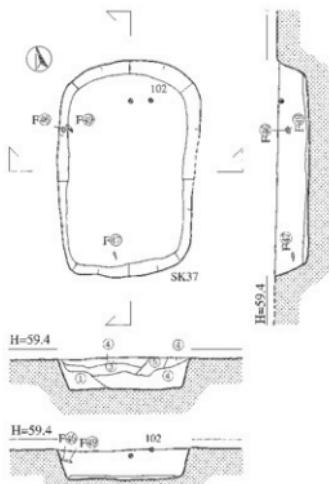
S K 31・32 (Fig.61・62 Tab.58・61 PL.22)

L 9グリッドに位置する。S K 28~S K 30の西隣に位置する。S K 31とS K 32は重複しており、S K 31が新しい。またS K 31はS B 12のP 6、P 140と重複しており、これらよりも新しい。S K 31はほぼ方形である。断面は浅い逆台形である。遺物はやや中央西側から須恵器底部片、瓦質土器100などが出土している。

S K 32は長方形の土坑で、底面は平坦であり、埋葬施設の可能性もある。土層は水平方向の堆積である。遺物は土師質土器片や中世須恵器片が不規則に入り込んでいる。



- ①灰色土と黒褐色土の混じり (1~3cm大の炭化物を含む)
- ②やや暗い灰色土
- ③やや暗い灰色土と黒褐色土の混じり
- ④やや明るい灰色土 (灰白色土少量混。鉄分多量含)
- ⑤灰褐色土 (鉄分多量含)



- ①黒褐色土 (0.2~2cmの灰白色土ブロック多量混。0.5~3cm大の炭化物を含む)
- ②やや明るい黒褐色土 (0.2~1cm大の灰白色土ブロック多量混。1cm大のにぶい黄褐色土ブロック少量混。0.5~2cm大の炭化物を含む)
- ③灰白色土 (にぶい黄褐色土少量混)
- ④灰白色土 (黒褐色土少量混)
- ⑤黒褐色土と褐灰色土の混じり (0.5~1cm大の褐灰色土ブロック、1cm大のにぶい黄褐色土ブロック少量混。0.5~2cm大の炭化物を含む)

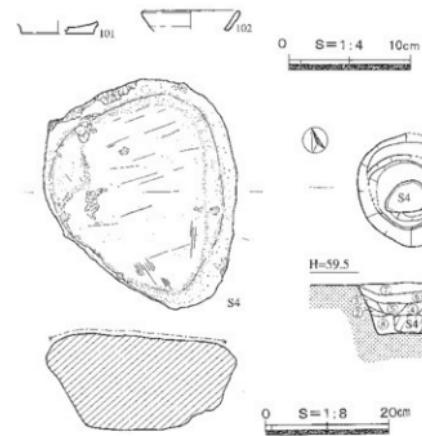


Fig.65 SK36・37・38出土遺物実測図

Tab.62 SK36・37・38出土遺物観察表

No.	Fig. PL	遺構名	出土位置	器種	法華 (cm)	特徴	面上	色調	備考
101 Fig.65 PL22	S K36	埋土上層	土器内外 断面	底径 高径	△1.6 6.6	外底面に鋸歯状切り落とし。	微細な砂粒 を含む。	にぶい黄褐色10YR7/4	約1/4残存
102 Fig.65 PL22	S K37	埋土上層	土器内外 断面	底径 高径	△1.7 6.7	横方向のナデ。	粗粒な砂粒を わずかに含む。	褐色5YR6/6	1/12以下残存
S4 Fig.65 PL43	S K38	底面上	石片	長さ: 28.0 側: 31.6 厚さ: 15.2 重さ: 23.9kg	半角錐であるが、平坦面は使用されたため、滑らか。	石片: 開縫岩			ほぼ完存

SK36・37 (Fig.64・65 Tab.58・62 PL10・22・47)

L 9 ~ M 9 グリッドに位置する。付近には土坑が集中する。SD7と重複し、これよりも新しい。また、SK

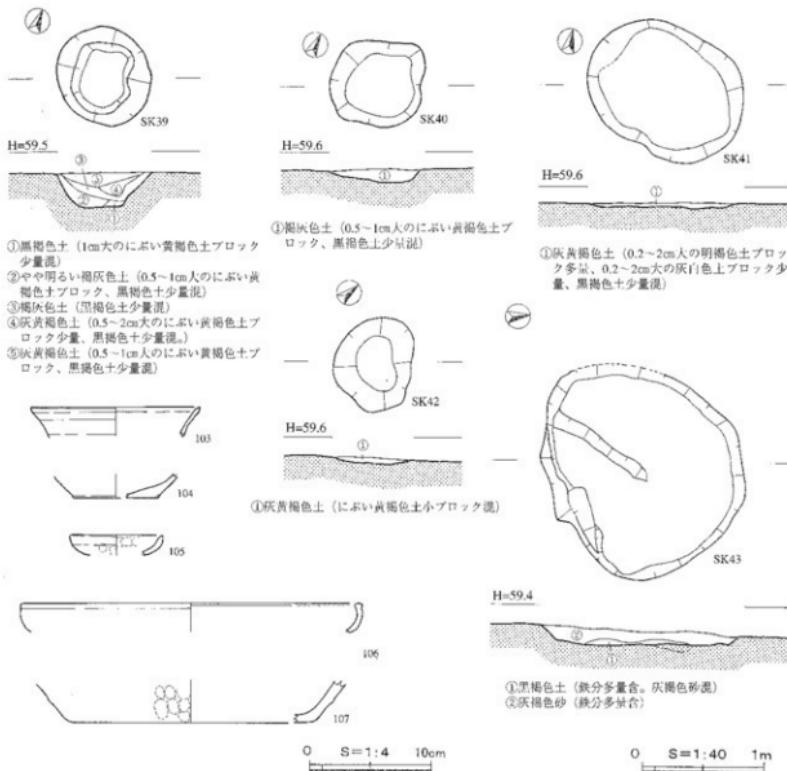


Fig.67 SK44出土遺物実測図

Tab.63 SK44出土遺物観察表

No.	Fig. PL.	遺構名	出土位置	基準	法量(cm)	特徴	地土	色調	備考
103	Fig.67 PL.22	SK44	堆土下層	土師質上器 唇口縫部部分	口径 △ 14.0 唇高 △ 2.4	口縫部横方向のナデ。 0.5mの砂粒 を含む。	明赤褐色5YR5/6	1/12以下残存	
104	Fig.67 PL.22	SK44	堆土上層	土師質土器 底部	口径 △ 19.0 底径 △ 7.0	底面が滑り、外底裏は糸引で粗か。 窓	に付い褐色7.5YR7/4	約1/4残存	
105	Fig.67 PL.22	SK44	堆土上層	土師質土器 底部	口径 △ 7.8 底径 △ 1.7	手づくね。底面に指痕压。内面には 0.5~1.5mの 砂粒を含む。	に付い黄褐色10YR7/3 外) 黑色10YR1.7/1	1/12以下残存	
106	Fig.67 PL.22	SK44	堆土上層	瓦質土器 底部	口径 △ 28.0 底径 △ 2.3	受け口。外面上に複数箇所に付着。 窓	5.5mの砂粒 を多量に含む。	1/12以下残存	
107	Fig.67 PL.22	SK44	堆土下層	瓦質土器 底部	△ 3.4 △ 20.0	底面は平坦。立ち上がりの際に指痕压。 底面が頭著に残る。	灰色5Y5/1	1/12以下残存 地土分析試料 系種3、在施灰	

37、P 213は重複しており、SK 37が新しい。いずれもやや不整な隅丸長方形で、断面は逆台形状である。

S K 36の西壁付近から土師質土器の皿101、上師質土器の鍋または甕の口縫部片が出土している。いずれも底面からやや浮いた状況である。そのほか、埋土中から比較的多く炭化物が出土している。

S K 37では遺構の西端と南端付近などから鉄釘F@~F@が、ほかに須恵器片、土師質土器皿102が出土している。

S K 3 8 • 3 9 • 4 0 (Fig.64~66 Tab.58・62 PL.10・43)

L 10~M10グリッドに位置する。土坑群の中でも円形を基本とした形状である。

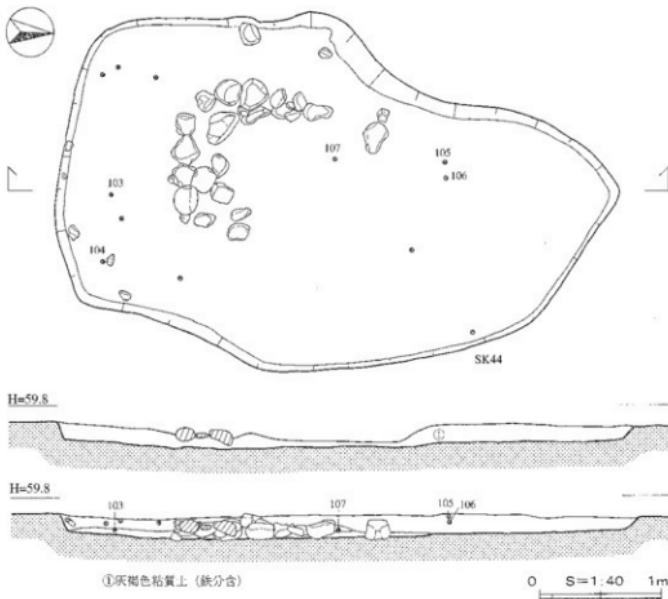


Fig.68 SK44遺構図

S K 38は不整な円形で、北側に一部テラス状の段をもつ。東西方向の上層に現れていないため、掘り直しの可能性は低いとみられる。底とみられる位置で石S4が出土した。水平方向に面をもち、面は使用されたために平滑となる。上層断面を観察すると、一旦土坑を掘り、石を埋えた様子がうかがえる。石は閃緑岩の亜角砾で、阿弥陀川の上流部で産出される石であり、河床のものが持ち込まれたものとみられる。他には類似する土坑はないことから、柱を建てたとは考えにくく、何らかの作業目的のための土坑であるとみられる。埋土中からはこれ以外の遺物は出土していない。

S K 39は S K 38と平面形、断面形ともに類似するが、石は埋め込まれていない。

S K 40は、平面形は不整な方形で、単層である。遺存状態はよくない。

S K 41・42・43 (Fig.66 Tab.58)

S K 41・42はL11グリッドに位置する。いずれも不整な楕円形状である。遺存状況は悪く、上層は単層で浅い。

S K 43はM10~11グリッドに位置する。平面は不整な楕円形状である。西側には柵跡 S A 3・4などがある。P418・489・490と重複しており、これよりも古い。断面形は浅い皿状である。

S K 44 (Fig.67・68 Tab.58・63 PL.9・22)

K 10~J 10グリッドに位置する。P303と重複しており、これよりも古い。南側は長方形であるが、北側に尖る不整な形状である。南側に石組が残る。石組は中央付近には石がなく、中央の空間を囲むように南側に石が配置される。また土坑の縁付近にも数少ないものの石が出土している。北側については掘削しているため不明瞭である。付近には焼土面や炭化物などは検出していない。

遺物は石組とは離れた位置から出土している。土師質土器の杯103・104、皿105、瓦質土器の鍋106、底部片

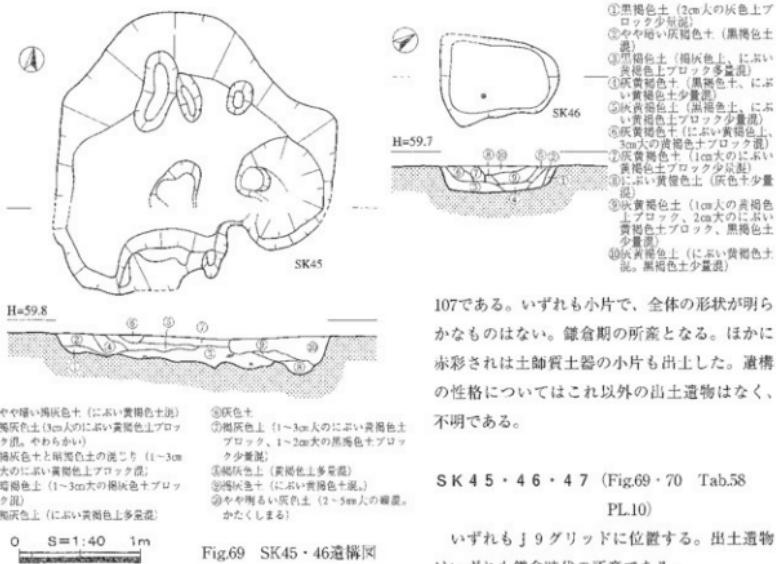


Fig.69 SK45・46遺構図

S K 45はS B 6のP 4と重複しており、これよりも新しい。周辺には大型の土坑が集中する箇所である。またS K 15と重複しており、これより古い。平面形は不整で、底面も凹凸が多く平坦ではない。土層も東側で不明瞭な堆積がみられる。

S K 46はS B 10のP 2と重複しており、これよりも新しい。平面はやや不整な長方形で、断面は逆台形状である。中央や東側から土師質土器鍋片が出土しているが図化し得ない。

S K 47は、これよりも西側にSK79・80があり、一つの小群をなしている。平面は比較的整った長方形で、断面は垂直方向に立ち上がる。堆積は灰褐色土が主で、船底状の堆積で、掘り直しが認められる。埋土上層から瓦質土器鍋片が出土している。

S K 48 (Fig.70・72 Tab.58・64 PL.22・47)

H 10グリッドに位置する。S D 4と重複しており、これよりも新しい。平面形は不整な円形で、断面はU字形、部分的にテラス状となる。底面は黑色土下の褐色土から出土する人頭大の石がみえる。埋土は砂質土である。遺物は土器片の他に鉄釘F 15が出土している。いずれも土坑の中央に近い位置で、底面からはかなり浮いている。上器は底面附近から土師質土器の皿108・109、鍋片が出土している。どちらも口径と底径の差は小さく、短く立ち上がるタイプである。時期は鎌倉時代の所産で、建物群とも一致する。

S K 49 (Fig.70・72 Tab.58・64 PL.22)

K 11グリッドに位置する。周囲には土坑が集中しているものの、周辺のピットの密度は低い。平面形は隅丸長方形で、断面は逆台形状である。上層断面では①層堆積の後に再度利用された可能性がある。形状は埋葬施設に類似するが、その可能性は低いとみられる。遺物は遺構の東側に細片が散在している。底面近くのものもあるが、浮いている遺物も多い。図化し得たものは須恵器の杯口縁部の110と土師質土器の杯口縁部の111である。時期は鎌倉時代の所産で、建物群とも一致する。

107である。いずれも小片で、全体の形状が明らかなものはない。鎌倉期の所産となる。ほかに赤彩され土師質土器の小片も出土した。遺構の性格についてはこれ以外の出土遺物ではなく、不明である。

S K 45・46・47 (Fig.69・70 Tab.58 PL.10)

いずれもJ 9グリッドに位置する。出土遺物はいずれも鎌倉時代の所産である。

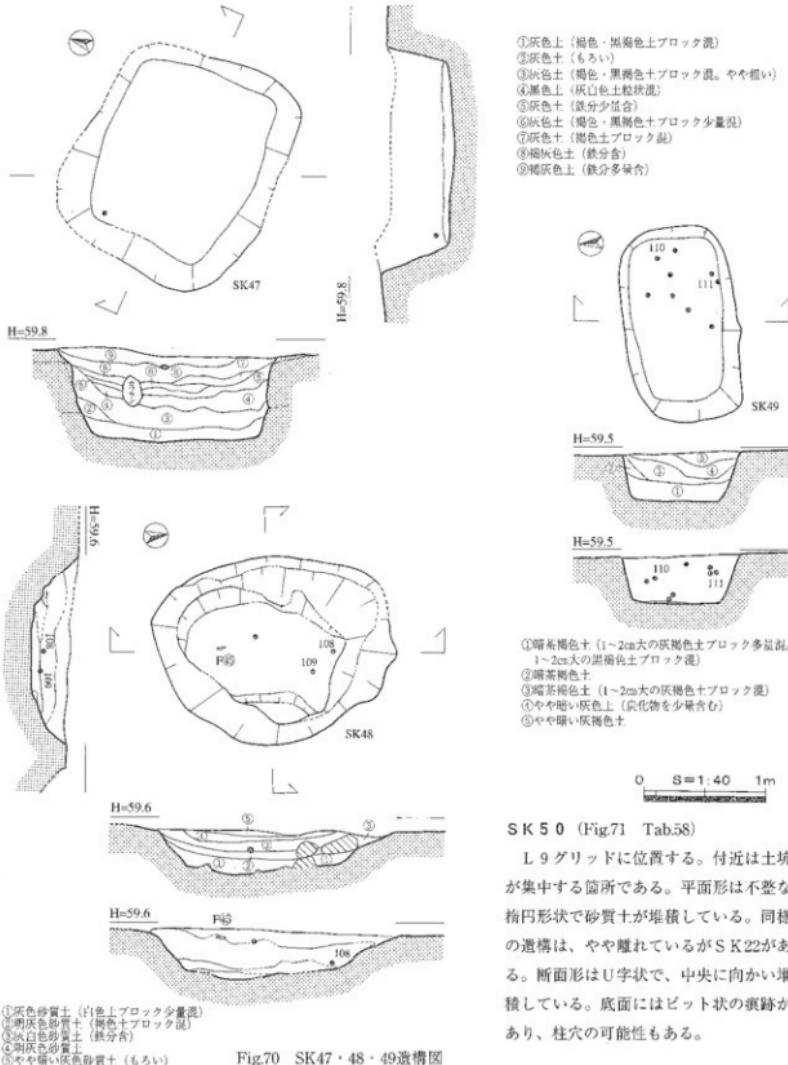


Fig.70 SK47・48・49遺構図

SK51・54 (Fig.71~73 Tab.58・64 PL.22)

M10グリッドに位置する。SD12と重複しており、これよりも新しい。

SK51は平面形は円形で、断面は逆台形状である。112・113が出土しているものの、SD12との境付近もしくは検出面からもやや浮いた状況である。112は須恵器の杯、113は土師質土器の杯で、いずれも平安中期の所産である。須恵器の壺体部片も出土している。SK54は、やや梢円形状で、土層は单層で浅い。

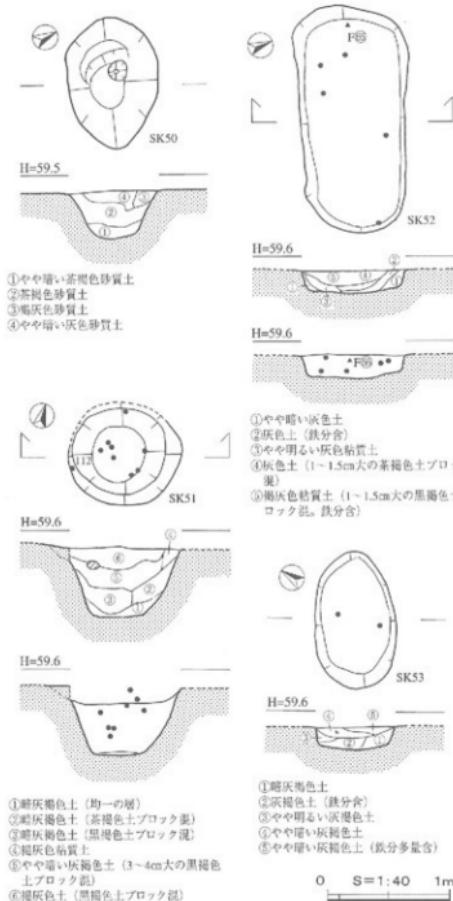


Fig.71 SK50・51・52・53構造図

SK52・53 (Fig.71 Tab.58)

M9グリッドに位置する。ただしSK52はP209と重複しており、これよりも新しい。

SK52は平面形隅丸長方形、底面は平坦で、形状は埋葬施設に類似する。土層は中央に向かい緩やかに堆積している。遺物は中央もしくは西側から須恵器及び土師質土器片が出土している。

SK53は東側が尖る不整な梢円形状で、断面は浅い逆台形状である。土層は中央に向かい互層に堆積している。遺物は中央付近から土師質土器の小片が出土している。

SK55 (Fig.73 Tab.58)

N11・12グリッドに位置する。P498と重複しており、これよりも古い。平面形は不整な円形～方形、断面は逆台形状である。北側のSK59・60とともに一群をなしており、検出時には広く砂で覆われていた。埋土はほとんど砂で、一部砂利も含まれておらず、東側のSD4と何らかの関係がうかがえる。土師質土器片が出土した。

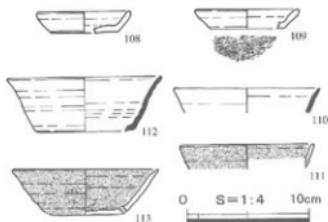
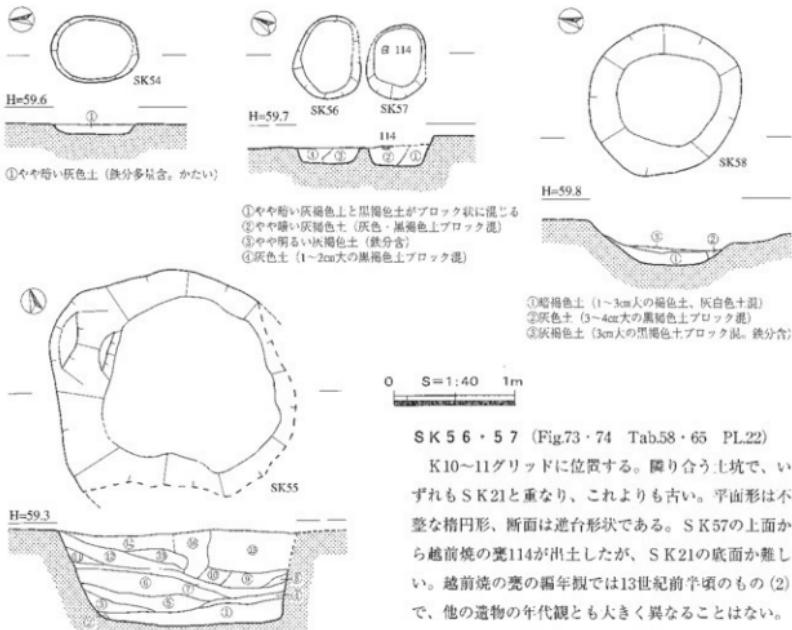


Fig.72 SK48・49・51出土遺物実測図

Tab.64 SK48・49・51出土遺物観察表

No.	Fig. PL.	遺構名	出土位置	器種	法徑(cm)	特徴	胎土	色調	備考
108	Fig.72 PL.22	SK48	底面上	土師質土器 裏	L1径 約 9.2 厚高 約 1.6 底径 約 6.5	外底面赤み切がり	密	褐色YR7/8	約1/4残存
109	Fig.72 PL.22	SK48	底面上	土師質土器 裏	口径 約 7.8 厚高 约 1.8 底径 约 5.5	口縁周部はやや尖る。外底面赤み切り後 底部は削平	密	褐色25YR7/6	約1/4残存
110	Fig.72 PL.22	SK49	底面上層	刷毛型 灰口部	口径 约 12.0 厚高 约 2.0 底径 约 10.0	内外面ともにコヨナダ。口縁端部外面 形状に灰化色化する。	密	にぶい黄褐色10YR7/3	1/12以下残存
111	Fig.72 PL.22	SK49	底面上層	土師質土器 灰口部	口径 约 11.0 厚高 约 1.9	胎壁は薄い。内外面ともに赤色微弱。	0.5mmの砂粒 を含む	褐色25YR6/8	1/12以下残存
112	Fig.72 PL.22	SK51	底面上	刷毛器 杯	口径 约 12.8 厚高 约 4.4 底径 约 7.3	内外面ともにコヨナダ。口縁端部外面 および内外面輪郭に赤色化する。	1mm以下の砂 粒を含む。	灰青色25YR7/2~灰 3YS/1	約1/6残存
113	Fig.72 PL.22	SK51	檢査面上	土師質土器 灰口部	口径 约 11.8 厚高 约 3.8 底径 约 6.4	外底面斜面へラ切り後底辺粗か。内 底底部不均方向のナデ。内外面ともに 赤色微弱。	砂粒なし。	浅黄色25Y7/3	約1/3残存



- ①灰色細砂（均一の層）
- ②灰色細砂と黒褐色土の混じり
- ③灰色砂
- ④茶褐色砂（鉄分多量含。均一の層）
- ⑤灰色砂疊（5~7cm大の鉄分多量疊）
- ⑥茶褐色砂疊（上面に0.7~1cm大の鉄分多量疊）
- ⑦小石多量疊
- ⑧灰褐色細砂
- ⑨明灰色砂疊（5~7cm大の鉄分多量疊）
- ⑩茶褐色細砂（鉄分含）
- ⑪やや暗い茶褐色砂（鉄分多量含）
- ⑫やや暗い茶褐色砂（0.7~1cm大の鉄分多量疊）
- ⑬やや暗い茶褐色砂（小石多量疊）
- ⑭茶褐色砂疊
- ⑮やや暗い茶褐色砂（8~10cm大の鉄分多量疊）
- ⑯やや暗い灰褐色土（8~10cm大の鉄分多量疊）

SK56・57 (Fig.73・74 Tab.58・65 PL22)

K10~11グリッドに位置する。隣り合う土坑で、いずれもSK21と重なり、これよりも古い。平面形は不整な楕円形、断面は逆台形状である。SK57の上面から越前焼の壺114が出土したが、SK21の底面が難しい。越前焼の壺の編年観では13世紀前半頃のもの(2)で、他の遺物の年代観とも大きく異なることはない。

SK59・60 (Fig.75~77 Tab.58・66

PL14・22・23)

N11~12グリッドに位置する。SK55、SD4とともに砂の堆積下から検出された。SK59はSD4・10と重複しており、これらよりも新しい。また、付近からピットが密に検出されており、SK59はP493・494・495と、SK60はP503・504・505・506と重複しており、年代観とも新しくなっている。また、付近からピットが密に検出されており、SK59はP493・494・495と、SK60はP503・504・505・506と重複しており、年代観とも新しくなっている。

Fig.73 SK54・55・56・57・58遺構図
において、いずれのピットよりも古い。平面形はいずれも不整な円形→方形を呈する。埋土はいずれも砂が基本で、堆積の途中に横方向の筋状の線や砂利の層が認められ、水が入り込んでいた様子が観察できた。これは東側のSD4と何らかの関係を示すものであろう。掘り下げ中に、ほぼ中央の埋土中層から高杯117が出土した。正位置であり頗りいていないことから、意図的に掘えられた可能性がある。古墳時代後期の所産で、SD4は平安時代中期であることから、年代にも大きな隔たりがある。しかし古墳時代の遺構は周辺ではなく、検出面、埋土の状況からみてもこの遺構はSD4と大きな時期差はないと考えられ、遺物の年代観と矛盾が生じている。ここでは



Fig.74 SK57出土遺物実測図

Tab.65 SK57出土遺物観察表

No.	Fig. PL	遺構名	出土位置	器種	法量(cm)	特徴	埋土	色調	備考
114	Fig.74 PL22	SK57	検出面上	両器	口径 約38.2 器高 △ 54	口縁端部がほぼ垂直に立ち上がる。	密	灰褐色	1/12以下残存 熱脛皮

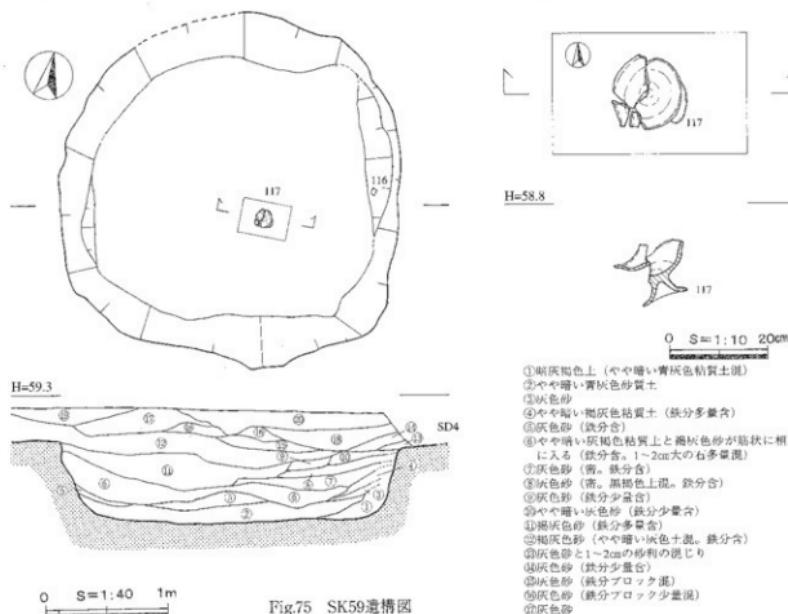


Fig.75 SK59遺構図

- ①漸灰褐色土（やや暗い青灰色粘質土混）
- ②やや暗い青灰色砂質土
- ③灰色砂
- ④やや暗い褐灰色粘質土（鉄分多量含）
- ⑤灰褐色（鉄分含）
- ⑥やや暗い灰褐色粘質土と褐灰色砂が筋状に相間に入る（鉄分含）
1~2cmの右多量混
- ⑦灰褐色（青、鉄分含）
- ⑧灰色砂（褐、褐褐色上混。鉄分含）
- ⑨灰褐色（鉄分少量含）
- ⑩やや暗い灰色砂（鉄分少量含）
- ⑪褐褐色砂（鉄分多量含）
- ⑫褐色砂（やや暗い灰色土混。鉄分含）
- ⑬灰褐色と1~2cmの砂利の混じり
- ⑭灰褐色（鉄分少量含）
- ⑮灰褐色（鉄分ブロック混）
- ⑯灰褐色（鉄分ブロック少量混）
- ⑰灰褐色
- ⑱やや暗い灰褐色
- ⑲灰褐色と1~2cmの灰色砂利の混じり
- ⑳やや暗い灰色砂

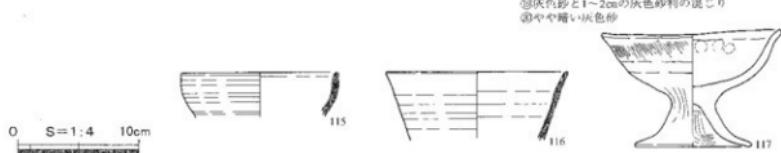


Fig.76 SK59出土遺物実測図

Tab.66 SK59出土遺物観察表

No.	Fig. PL.	遺構名	出土位置	基盤	法量(cm)	特徴	断士	色調	備考
115 Fig.76 PL.22	S K59	埋土上層	須恵器 杯上部	口径△ 東13.0 器高△ 3.6	口縁端部がわずかに外輪に突出する。	1m以下の砂 を含む。	黄褐色23YR5/1	約1/6残存	
116 Fig.76 PL.22	S K59	埋土上層	須恵器 杯中部	口径△ 東15.0 器高△ 5.6	口縁部の裏やかに外反する。内外面ともにヨコナデ。	0.5m以下の 砂を含む。	黄褐色23YR7/2	約1/8残存	
117 Fig.76 PL.23	S K59	埋土中層	十輪器 高杯	14.8 器高△ 9.9 脚径△ 9.7	杯内部外側ともに横方向のナデ。瓶部 横方向のナデ。瓶部 底面外側は斜状のハ ケ目。内部と脚部の接合部あり。	0.5~1.5m大 人の砂を含 む。	明赤褐色5YR5/6	ほぼ完存	

遺構の状況を考え、平安時代の遺構と考えておきたい。その他、上層から須恵器杯115・116が出土しているが、時期的な幅は大きい。SK60は北隣に位置し、規模はやや小さい土坑である。堆積状況は類似しており、切り合い関係は確認できないが、同様の性格で、あるいは前後関係があることも想定したい。

SK61・62 (Fig.77・78 Tab.58・67 PL.48)

SK61はO14グリッドに位置する。形状は不整形で、底面も平坦ではない。溝状造構SD8とSD9の間に位置しており、埋土は砂であることから、これらの溝により形成された溜まり状土坑の可能性がある。

S K62はI・J 10グリッドに位置する。平面形は不整な楕円形状で、底面は平坦ではなく、西側にテラス状の段をもつ。東側に現代まで使用されている用水路があり、遺存状況は悪い。土層は細かな層の堆積がみられ、砂質土も含まれていた。中央やや西側の底面にはほぼ接するような位置から砥石S5が出土した。使用痕跡が顕著である。石材は細粒花崗岩（アブライト）で、阿弥陀川もしくは大山から持ち込まれたと考えられる。

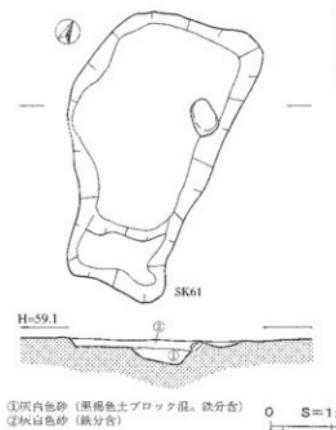
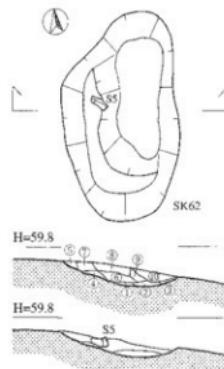
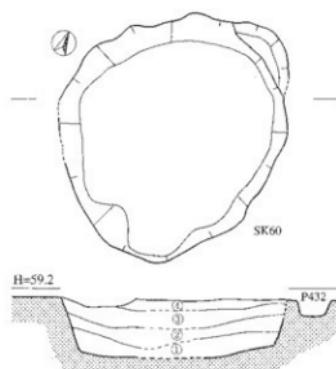


Fig.77 SK60・61・62遺構図

Tab.67 SK62出土遺物観察表

No.	Fig. PL	遺構名	出土位置	種類	法量(cm)・特徴	石材	備考
S5	Fig.78 PL48	SK62	底面上	砥石	長さ: 14.7 幅: 7.5 厚さ: 5.9 重さ: 780 g 3方向に研面を有する。	石材: 細粒花崗岩（アブライト）	ほぼ完存

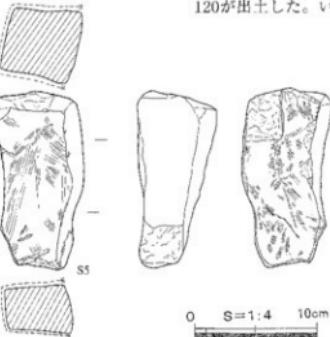
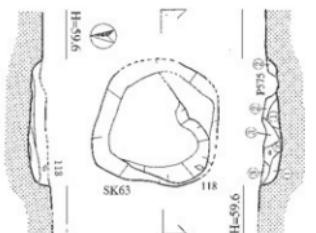
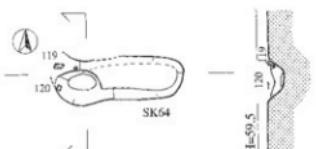


Fig.78 SK62出土遺物実測図

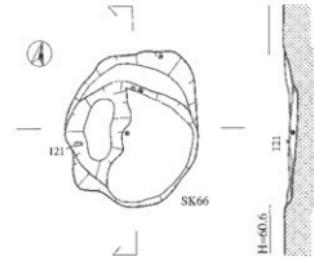


①褐色灰土 (にぶい黄褐色土、暗褐色土少量混)
②やや暗い褐灰色土 (にぶい黄褐色土、暗褐色土少量混)
③にぶい黄褐色土、褐灰色土 (かたくしまる)



①褐相灰色土
②暗褐色土 (暗褐色土多量混)
③にぶい黄褐色土 (やや暗い褐灰色土少量混)
④やや暗い褐灰色土 (暗褐色土、暗灰白色土混)
⑤褐灰色土 (灰白色土少量混)

Fig.79 SK63・64・66造構図



①明褐色灰土質土 (にぶい黄褐色土多量混)
②灰褐色粘質土 (厚さ1~2cmの黒褐色土、褐色土、明褐色土混。耕植土か)
③やや明るい灰褐色粘質土 (にぶい黄褐色土少量混)
④褐灰色粘質土 (灰褐色土混)

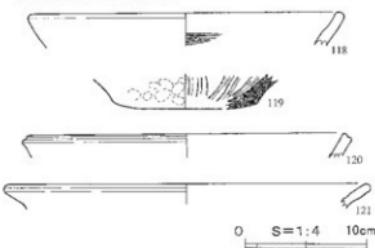


Fig.80 SK63・64・66出土遺物実測図

Tab.68 SK63・64・66出土遺物観察表

No	Fig. PL.	造器名	出土位置	基層	法量(cm)	特徴	断面	色調	備考
118	Fig.80 PL.22	SK63	埋土上層	土師質土:器 鉢	口径 ▲ 26 高さ ▲ 27 分が付角。	横方向のハケ目。外壁には底面より鉢 身が付角。	青	淡黄褐色7.5YR8/6	L/12以下残存
119	Fig.80 PL.24	SK64	埋土上層	須恵器 鉢	器高 ▲ 28 直径 ▲ 32.0	横方向に5条半径の縦目が斜状に人 る。	0.5m以下の 砂粉少量混。	灰白色2.5Y7/1	1/12以下残存
120	Fig.80 PL.24	SK64	埋土上層 鉢上部	上部質土層 鉢上部	口径 ▲ 27.0 高さ ▲ 2.0	口縁端面が円錐状に済む。 内側質土層	1mm以下の砂 少量混。	にぶい黄褐色10YR6/3	1/12以下残存
121	Fig.80 PL.24	SK66	埋土上層	瓦質土器?	口径 ▲ 30.0 高さ ▲ 2.0	口縫部内外面ともに横方向のナデ。 口縫部内外面ともに横方向のナデ。	0.5mmの大 砂粉有り。	淡黄褐色10YR8/3	約1/12残存

も底面からは浮いた状態であり、造構の時期を示すものではない。須恵器の鉢と土師質土器の鉢は、ある程度の時期的な差があるのか、あるいは生産地が異なるのかは判断できないが、119は須恵器といいながらも軟質で焼きが甘い。これは須恵器生産の最終段階のもので、産地は不明ながら鎌倉期の所産であり、土師質の鉢と大きな時期差はないものととらえておきたい。

SK66 (Fig.79・80 Tab.58・68 PL.24)

SK65については2区の第2造構検出面での調査、SK66以降は1区の調査となる。SK66は1区のE5グリッドに位置する。西側にS30があるものの、他に造構はない。平面は不整な円形で、底面は西側がさらに深くなる。遺存状況は悪い。西端から瓦質土器の鍋口縁部121などが出土した。鎌倉時代の所産と考えられる。

SK67・68・69・74 (Fig.81・83 Tab.58)

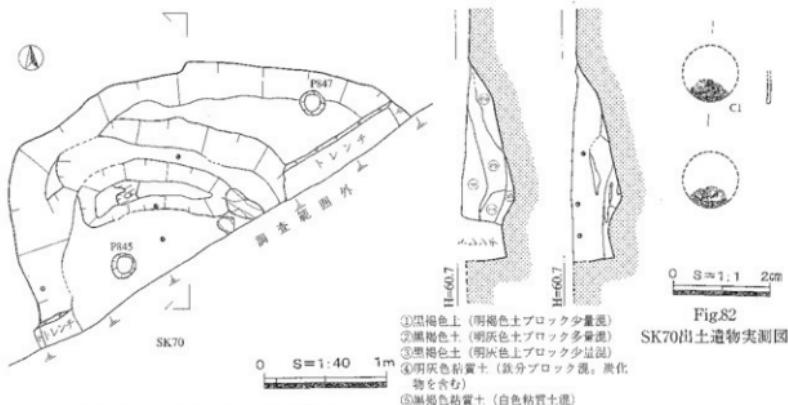
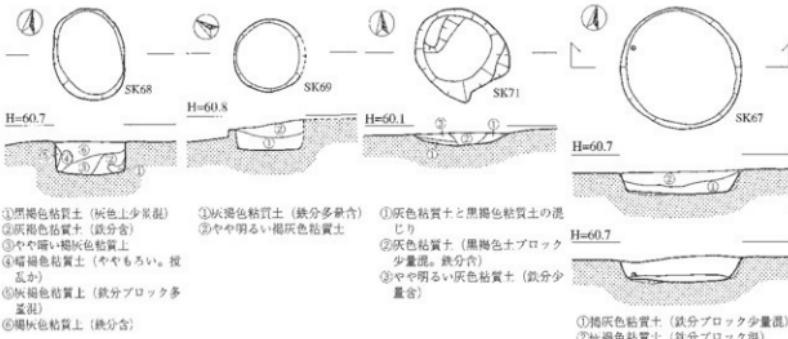


Fig.81 SK67・68・69・70・71遺構図

Tab.69 SK70出土遺物観察表

No.	Fig. PL.	遺構名	出土位置	種別	法量(cm)・特徴	材質	備考
C4	Fig.82 PL.13	S K70	検出面上	銭貨	重さ0.1g 2文字形に「元」が見える。銘種:不明。 北宋錢とみられる。	銅	約1/4残存

H 9 グリッドに位置する。いずれも円形～楕円形状で、直径も60～100cmと類似する。ただし断面形状は、SK67が逆台形状、SK74が皿状、SK68・69はほぼ垂直方向に立ち上がる。いずれも性格不明の土坑である。柱穴としても並びがなく、掘立柱建物を構成する柱穴とも規模が異なるため、土坑として設定した。堆積状況はSK67・69が水平堆積、他は不整な堆積である。SK67からは土師質土器小片が出土した。

SK70 (Fig.81・82 Tab.58・69 PL.43)

G 9 グリッドに位置する。南側が調査区外であり、全体の形状は不明であるが、不整な円形を呈すると考えられる。底面は3段にわたり掘り込まれる。P903・919と重複し、これよりも新しい。検出面上から「元」の文字のある銭貨C1が出土した。銭貨は、C1の銘種は断定ができないものの、中国北宋からの輸入かあるいは国内

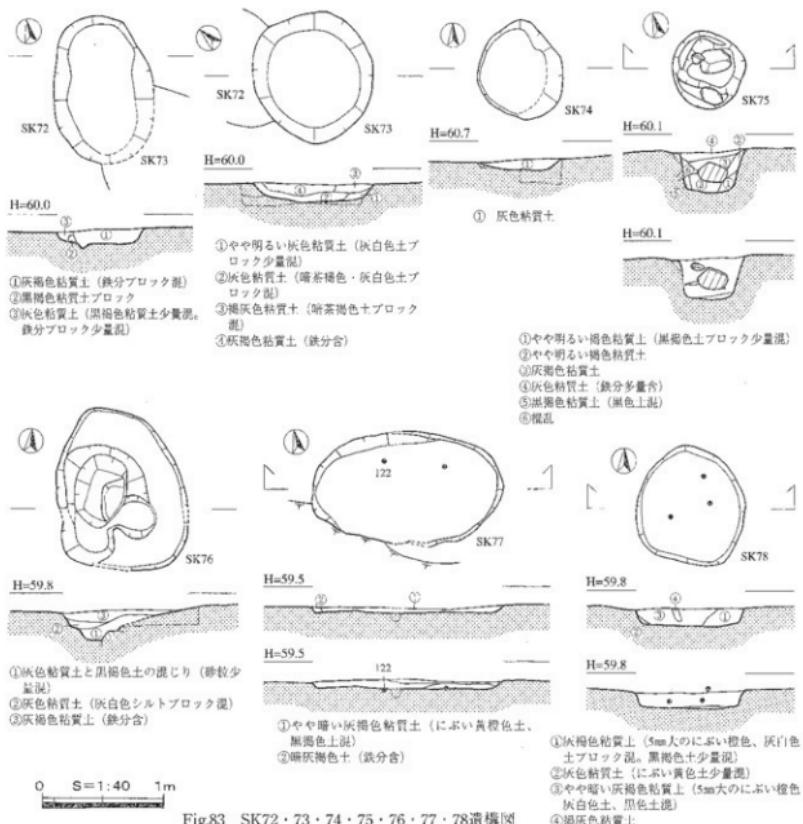


Fig.83 SK72・73・74・75・76・77・78遺構図

の模造鏡とみられる。このほか、掘り下げ中に須恵器片、土師質土器片が出土した。

S K 7 1 ・ 7 2 ・ 7 3 ・ 7 5 (Fig.81・83 Tab.58)

H-I 8 グリッドに位置している。S K71は断面形が皿状で中央が窪んだ堆積である。S K72とS K73は重複しており、S K73が新しい。いずれも断面形は深い皿状～逆台形状である。S K75はS D29と重複しており、これよりも新しい。またS K75の断面は逆台形状で、埋土中央にはやや傾いた状態で石が認められる。

S K 7 6 ・ 7 7 ・ 7 8 (Fig.83・85 Tab.58・70 PL.24)

いずれもJ 8 グリッドに位置する。S K76は平面形が不整な橢円形状、断面形は2段にわたり掘り込まれる。底には下層の褐色土中に石が認められる。S K77はS B37の範囲内にあり、平面形は橢円形状で断面形は皿状である。中央や北側の埋土中から土師質土器122や瓦質土器片が出土している。遺物自体は平安中期の所産である。

S K78はS B36の範囲内にある。平面形は円形状である。断面形は浅い逆台形状である。遺構中央や北側の検出面付近から土師質土器片が出土した。

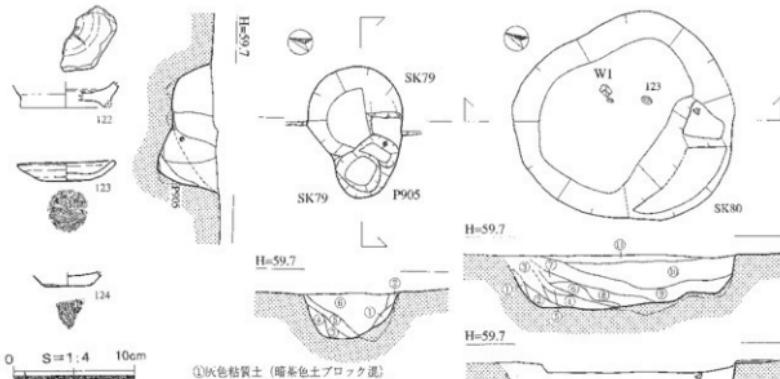


Fig.85 SK77・80・81
出土遺物実測図

- ①灰土粘質土 (暗茶色土ブロック混)
- ②褐色粘質土 (褐色土ブロック混)
- ③やや明るい灰色粘質土 (鉄分ブロック混)
- ④灰色粘質土 (鉄分ブロック混)
- ⑤やや暗い灰色粘質土 (鉄分ブロック混)
- ⑥やや暗い灰色粘質土 (褐色土ブロック多量混)

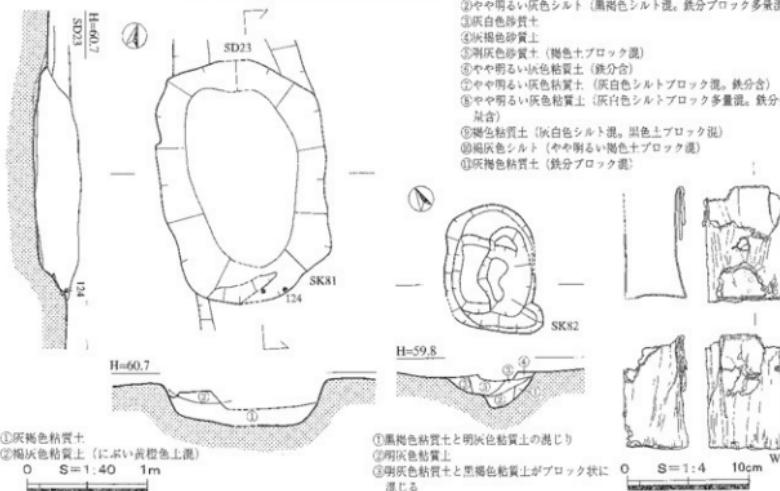


Fig.84 SK79・80・81・82遺構図

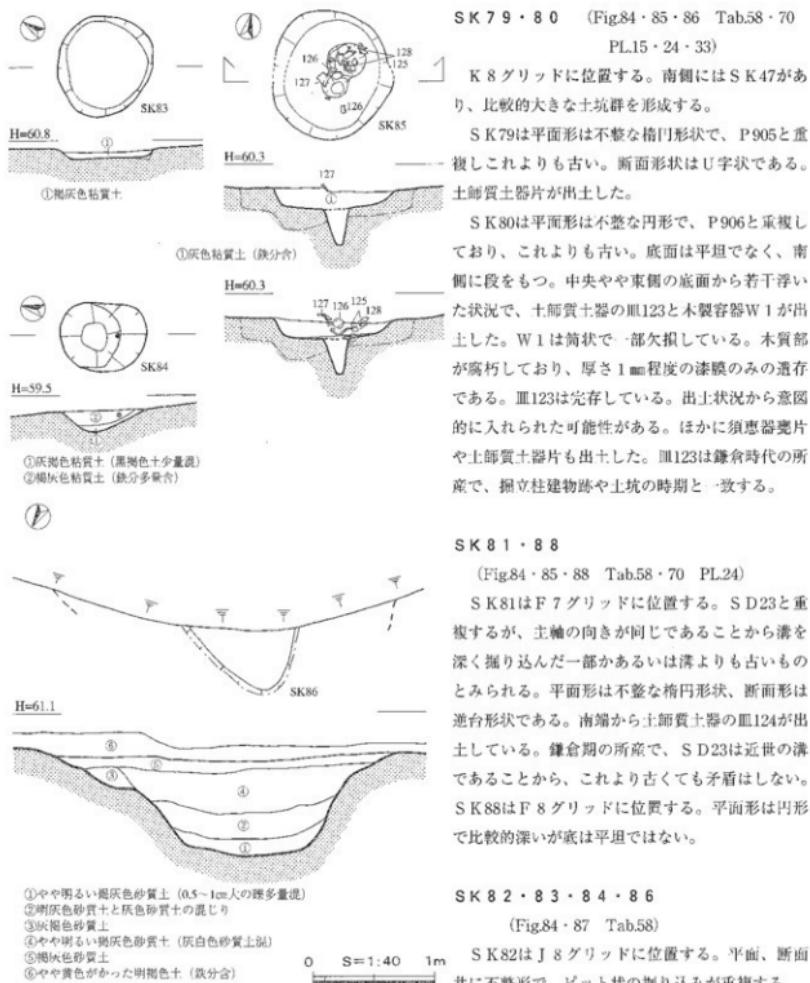
- ①灰褐色粘質土
- ②褐色粘質土 (にぶい黄褐色土混)
- ③灰褐色粘質土 (灰白色シルト混)
- ④灰褐色粘質土 (鉄分ブロック混)
- ⑤灰褐色粘質土 (鉄分ブロック多量混)
- ⑥灰褐色粘質土 (褐色土ブロック混)
- ⑦灰褐色粘質土 (褐色土ブロック混)
- ⑧灰褐色粘質土 (褐色土ブロック多量混)
- ⑨灰褐色粘質土 (鉄分ブロック混)

Fig.84 SK79・80・81・82遺構図

Fig.86 SK80出土遺物実測図

Tab.70 SK77・80・81出土遺物観察表

No.	Fig. PL.	遺構名	出土位置	器種	法長(cm)	特徴	地層	色調	備考
122	Fig.85 PL.24	S K77	底面上	十脚骨十筋 萬古杵高麗 底盤	高さ:3.1 底盤にレ-ズのハラ巻き。	外底面を切り抜き面を貼り付ける。内 部に内底面を貼り付ける。	0.5m 大の移 動を含む。	浅黄褐色10YR8/3	約1/4残存
123	Fig.85 PL.21	S K80	堆土下層	十脚骨十筋 萬古杵高麗 底盤	高さ:6.1 口縁と底盤の差は大きい。 底盤は鉄 板で作成。	外底面を貼り付ける。	無	褐色7.5YR7/6	完存
124	Fig.85 PL.24	S K81	堆土上層	十脚骨十筋 萬古杵高麗 底盤	高さ:1.2 底盤は同軸系である。	外底面を貼り付ける。	無	褐色7.5YR7/6	約1/12残存
W1	Fig.86 PL.33	S K80	底面付近	木製品 容器	幅6.5 器高:9.3 底盤:6.1	円筒状で、内外面に漆を塗り重ねる。 ただし木質部は剥離しているため不明。	木質部は剥離しているため不明。	褐色	ほぼ完存



SK 85 (Fig.87・89 Tab.58・71 PL.10・23・24・38)

F 3 グリッドに位置する。平面形は円形で、断面形は深い皿状である。掘り下げ中に土師質土器の杯125、皿126、窓127、陶器の鉢128が出土した。皿126の内面には縦横方向の焼成後線刻がみられる。調査区内では土師

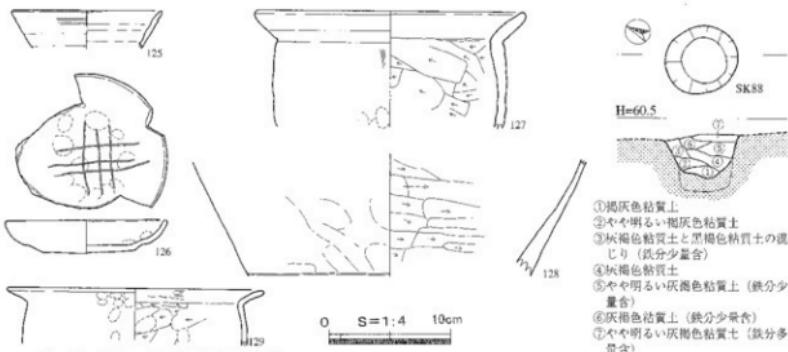


Fig.89 SK85・87出土遺物実測図

Tab.71 SK85・87出土遺物観察表

No.	Fig. PL.	施場名 遺物位置	器種	法量 (cm)	特徴	地土	色調	備考
125	Fig.89 PL.24	SK85 残土トド壁 上部裏面	土器質手斧	口径 13.2 厚さ 4.0	内外面ともに横刃方向の面削ナメ。	重砂が少く 多い	赤褐色 10YR7/4	約1/12残存
126	Fig.89 PL.24	SK85 残土トド壁 下部裏面	口斧	口径 13.3 厚さ 2.7	外側は四隅へと張り、裏面には押抜。内 側は刃端部に沿う様子の面削。	重砂が多 い	赤褐色 10YR7/4	約1/12残存
127	Fig.89 PL.24	SK85 残土上層 土器質手斧	口斧	口径 22.0 厚さ 5.4	口縁部は口の字形に形成する。外側ナメ、内 側は刃端部に沿う様子の面削。	0.5~2mmの砂粒 が散在。	黄褐色 2.5YR5/3	約1/2残存
128	Fig.89 PL.24	SK85 地上～下層 鉢	鉢	△ 9.8	外削ナメ。内面削方向のズレ。	0.5mmの砂粒 多く含む。	黄褐色 2.5YR5/6	—
129	Fig.89 PL.24	SK87 中層	土器質手斧	口径 25.1 厚さ 3.6	口内斜状の刃縁部。 各面ナメ。内面削面部 は口内斜状の刃縁部。	1~2mmの砂粒 を多く含む。	褐色 2.5YR6/6	約1/8残存

質土器の皿は出土が少ない。また遺物の下にはピット状の掘り込みが確認できた。性格は不明であり、遺物も126・127はいずれも平安中期の所産であるが、陶器の鉢128は鎌倉期のものである。遺構検出面とも矛盾しないが、遺物の時期差についてはさらには検討する必要がある。

SK87

(Fig.88・89 Tab.58・71 PL.24)

G7グリッドに位置する。第1遺構面を掘り下げ中に検出した。平面形は円形であるが、大石の周辺が部分的に深くなる、あるいは溜まり状の遺構ともみえる。周辺は人頭大以上の石が密に堆積しており、いわゆる河原の河床状の場所である。遺物は土器質土器の壺129が遺構の東側から出土していることから時期的に遡る可能性もある。

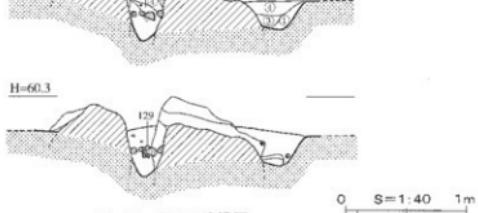
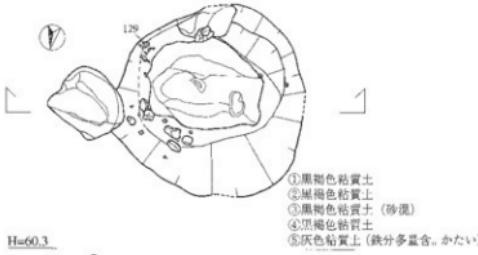


Fig.88 SK87遺構図

注

- (1) 越前焼の壺の縁年は、第2回北陸中世土器研究会資料「1989『北陸における越前陶の諸問題』による。胎土はやや暗い灰色で精緻であり、表面は明るい黄褐色である。これに対応する体部は出土していない。ただし同時期の常滑焼片は茶畠六反田遺跡・押平弘法堂遺跡ともに出土している。

(3) 横跡

S A 1 (Fig.90 Tab.72)

3区S・T23グリッドに位置する。柱穴間はやや不規則ではあるが、ほぼ直線状に並んでいる。東側、西側は調査範囲外である。付近は東下がりの斜面で、平安時代以降の建物跡が付近にあるが、遺物は出土していない。

S A 2 + 3 + 4 + 5 (Fig.90・91 Tab.73~76)

2区L・N10グリッドに位置する。直線状に並び、対応するピットも確認できることから、横跡として設定した。

S A 2 は4本の列で東西方向に並ぶ。軸は掘立柱建物に類似する。

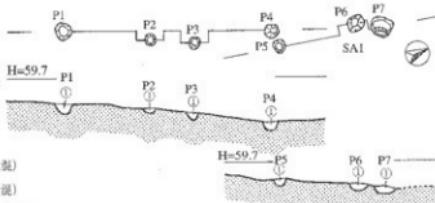
S A 3 は5本の列で南北方向に並ぶ。建物群の主軸からやや西側に振れる。S A 2 と一部交差する。

S A 4 はS A 3 よりも南側に位置し、4本の列が東西方向に延びる。建物群の主軸とは異なりやや北方向に振れる。

S A 5 は4本の列でS B17の東隣に位置し、主軸がやや東方向に振れる。P 1 から土器片が出土した。

S A 8 + 9 (Fig.91・92 Tab.79・80 PL.7)

S A 8 はE 4 グリッド、S B30の南側に位置し、7本の列が東西方向に並ぶ。建物跡に並行してお

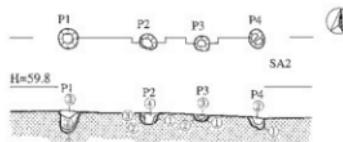


Tab.72 SA1ピット一覧表

S A 1 ピット番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P 1	28	24	16.4
P 2	18	16	8.0
P 3	20	18	13.6
P 4	24	20	18.8
P 5	22	18	10.9
P 6	28	24	14.0
P 7	34	30	16.0

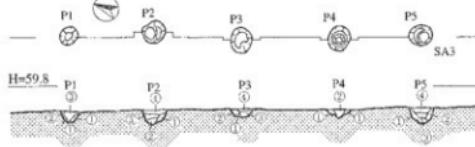
- P 1
①黄褐色土（薄黄色土、灰白色土混）
②黄褐色土（にれい、黄褐色土少量混、炭化物を少し含む。しまる）
③褐褐色土（黄褐色土混）
P 2
①褐褐色土（褐灰色土、黄褐色土混）
P 3
①褐褐色土（褐灰色土、少量混）
②褐褐色土（黄褐色土少量混）
③やや暗い黄褐色土（黄褐色土多量、灰褐色土少量混）
P 4
①黄褐色土（褐灰色土、少量混）
②褐褐色土（黄褐色土少量混）
③やや暗い黄褐色土（黄褐色土多量、灰褐色土少量混）

- P 1
①黄褐色土（褐灰色土多量黄褐色土混）
②褐褐色土（黄褐色土少粒状）
P 2
①褐褐色土（黄褐色土少粒状）
②褐褐色土（黄褐色土少量混）
③褐褐色土（黄褐色土混）
P 3
①黄褐色土（褐灰色土少量混）
②やや暗い黄褐色土（褐灰色土底）
③やや暗い黄褐色土（褐灰色土底）



Tab.73 SA2ピット一覧表

S A 2 ピット番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P 1	34	32	35.6
P 2	30	26	18.9
P 3	38	26	10.6
P 4	30	24	20.5



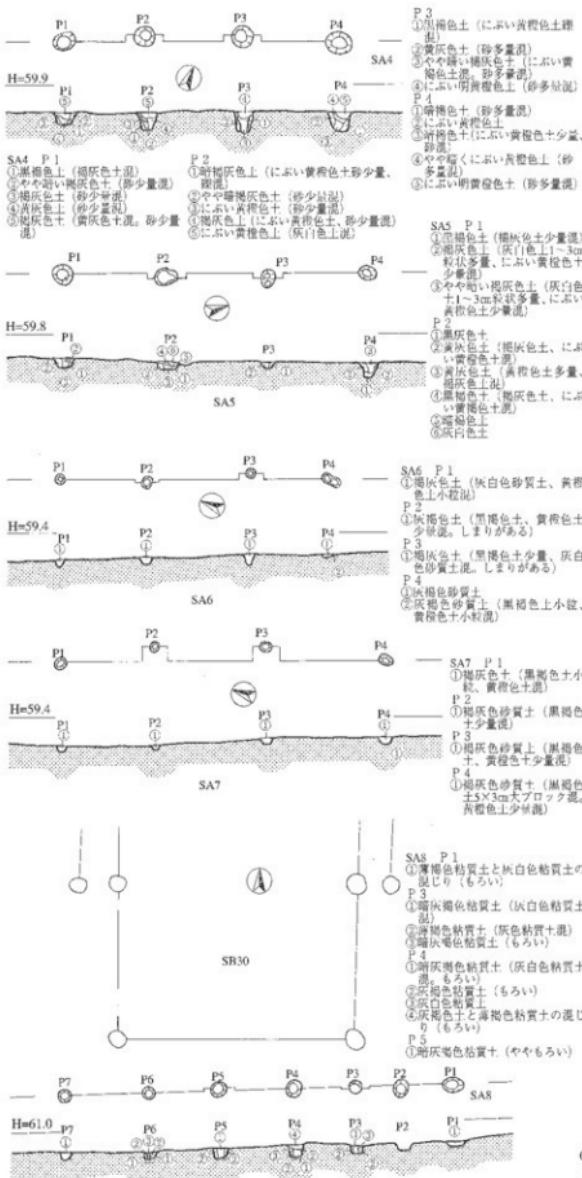
Tab.74 SA3ピット一覧表

S A 3 ピット番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P 1	30	28	16.8
P 2	40	34	24.4
P 3	38	32	18.2
P 4	40	34	18.3
P 5	38	34	27.6

- P 1
①やや暗い黒褐色土（灰白色土混）
②黒褐色土
③灰白色土（もろい）
P 2
①やや暗い黒褐色土（灰白色土混）
②黒褐色土（灰白色土混）
P 3
①やや暗い黒褐色土（灰白色土混）
②褐褐色土（褐灰色土少量混）
③褐褐色土（褐灰色土混）
P 4
①褐褐色土（褐灰色土多量混）
②やや暗い褐褐色土（灰白色土、褐色土混）

- P 5
①褐褐色土（褐灰色土少量混）
②褐褐色土（褐灰色土少量混）
③褐褐色土（褐灰色土混）
④褐褐色土
⑤褐褐色土

Fig.90 SA 1 + 2 + 3 遺構図



Tab.75 SA4ピット一覧表

S A 4	長軸 ピット番号 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P 1	38	※28	21.3
P 2	34	32	35.9
P 3	38	36	36.6
P 4	44	36	37.3

Tab.76 SA5ピット一覧表

S A 5	長軸 ピット番号 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P 1	34	32	18.3
P 2	38	28	14.2
P 3	32	22	10.8
P 4	30	22	24.2

Tab.77 SA6ピット一覧表

S A 6	長軸 ピット番号 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P 1	16	14	10.8
P 2	18	16	12.2
P 3	16	16	17.9
P 4	※32	12	5.6

Tab.78 SA7ピット一覧表

S A 7	長軸 ピット番号 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P 1	22	18	11.1
P 2	16	14	9.3
P 3	20	16	10.2
P 4	22	16	10.0

Tab.79 SA8ピット一覧表

S A 8	長軸 ピット番号 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P 1	34	24	12.6
P 2	30	24	11.6
P 3	22	20	14.0
P 4	28	26	22.8
P 5	26	24	19.8
P 6	22	20	17.7
P 7	24	20	12.0

②暗灰褐色粘質土（灰白色粘質土混）
P 6
①暗灰褐色粘質土
灰白色粘質土
②暗灰褐色粘質土（灰白色粘質土混）
P 7
①暗灰褐色粘質土
（もろい）復讐

Fig.91 SA4・5・6・7・8遺構図

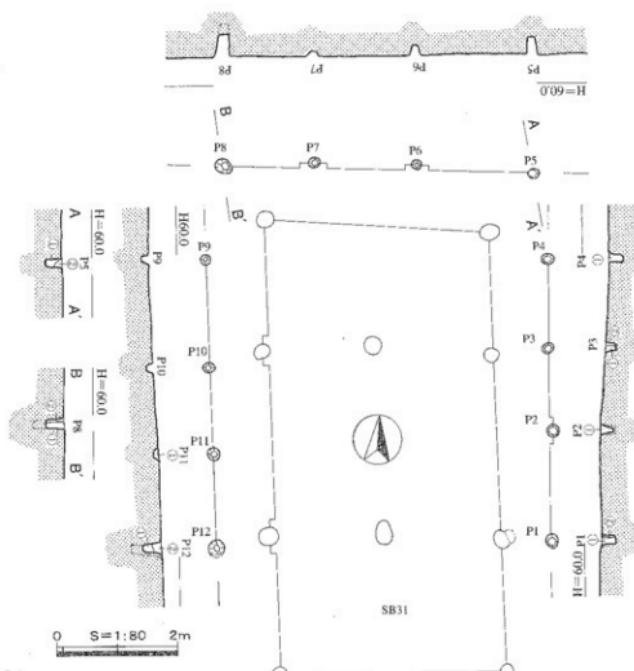


Fig. 92 SA9遺構図

- P 1
①やや暗い褐色粘質土
②褐灰色粘質土(黄褐色土ブロック混)
P 2
①やや暗い灰褐色粘質土
P 3
①褐灰色粘質土
②やや暗い褐灰色粘質土
P 4
①やや暗い灰褐色粘質土
P 5
①灰褐色粘質土
②褐灰色粘質土(鉄分含)
P 8
①灰褐色粘質土
②褐褐色粘質土(薄褐色土混)
P 11
①やや暗い灰褐色粘質土
P 12
①やや暗い褐灰色粘質土
②褐灰色粘質土

Tab. 80 SA9ピット一覧表

SA 9 ピット番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	SA 9 ピット番号		
				長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P 1	24	20	25.0	P 7	20	16
P 2	20	18	27.3	P 8	28	22
P 3	20	14	20.7	P 9	18	12.5
P 4	20	16	22.5	P 10	20	16
P 5	18	18	27.7	P 11	22	20
P 6	18	14	16.4	P 12	30	26

当初から建物を囲むように3方向のみ柵跡が建てられていたことが分かる。

これら以外にも柵跡としては設定していないものの、J 8～K 8グリッド付近に南北方向に、H 8～I 8グリッド付近には東西方向のピットの密集がみられる。これらはいずれも建物群の北側と南側にあたり、区画あるいは防風などの役割が想定できよう。とくに付近は季節風の影響が大きい。これ以外にも集落の北側には建物や柵として設定していないが東西方向にピットが並ぶように見える。ただしこれらはあくまでも個別の遺構であり、埋土は類似するもの同時に柵跡や建物を構成していたという確認はない。そのため、あくまでも現地において復元した遺構をもとにしている。

り、これに伴うとみられるが、風対策などであれば向きが逆である。さらに南方向に建物のある可能性もあるが、調査区外となる。ただし、位置的にはSB30に隣接しているため、これに伴う遺構であろう。

SA 9はSB31の東西と北側を囲むようある。この建物は柱柱建物跡であり、他の建物跡とは性格が異なるとみられる。東西辺の柵の延長上よりも北辺柵の端が内側に位置することから、この部分はつながりがなく、開けられた可能性がある。耕作痕跡を探り下げた後に検出されており、柵跡や建物の廃絶後には耕作地として使用されていることが分かる。また、南側には柵跡は確認されておらず、

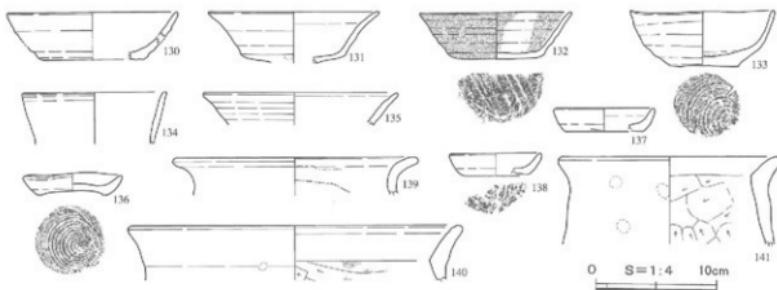


Fig.93 ピット群出土遺物実測図

Tab.81 ピット群出土遺物観察表

No.	Fig. Pl.	造形名	出土位置	器種	法徴(cm)	特徴	鉢土	色調	備考
130	Fig.93 PL24	ピット群 P555	埋土下層	土師質土器 杯	口径 14.0 基高 △ 3.9 底径 □ 8.3	内外面ともに剥落が著しい。外底面削 部へ切りか。	砂粒なし。	橙色5YR7/6	口縁部、底部と ともに約1/8残存
131	Fig.93 PL24	ピット群 P467	埋土中	土師質土器 杯	口径 14.0 基高 △ 4.2	口縁部は外反する。底部は回転へ切 りか。内面に炭化物付着。	1mm以下の砂 粒を含む。	ない橙色7.5YR6/4	約1/12残存
132	Fig.93 PL24	ピット群 P467	埋土中層	土師質土器 杯	口径 12.6 基高 △ 3.7 底径 □ 8.0	外底面は回転へ切り後一方方向ナデ。 外面部および内部の部に赤鉄色斑。	1~2mm人の 砂粒を含む。	明赤褐色2.5YR5/8	約1/4残存
133	Fig.93 PL23	ピット群 P184	埋土上層	土師質土器 杯	口径 12.0 基高 △ 4.6 底径 □ 5.5	口縁部は内済しながら立ち上がる。外 底面に回転系切り痕。	1.5mm以下の 砂粒を含む。	桺色7.5YR7/6	口縁部約2/3欠損
134	Fig.93 PL24	ピット群 P195	埋土下層	土師質土器 杯(口縁部 壊)	口径 12.0 基高 △ 4.2	内外面ともに側方向のナデ。	0.5mm程度の 砂粒を含む。	ない閑色7.5YR5/4	1/12以下残存
135	Fig.93 PL24	ピット群 P447	埋土中層	土師質土器 杯(口縁部 壊)	口径 17.0 基高 △ 2.6	外表面は側面にナデによる深い凹凸あ り。内面に炭化物付着。	1.5mm以下の 砂粒を含む。	ない閑色10YR6/3	約1/6以下残存
136	Fig.93 PL24	ピット群 P130	埋土上層	土師質土器 皿	口径 8.2 基高 △ 1.8 底径 6.0	口縫は底辺の差が小さい。外底面に回 転系切り痕。	0.5mm程度の 砂粒を少し含む。	淡黄褐色7.5YR5/6~ 7.5YR7/6	ほぼ完存
137	Fig.93 PL24	ピット群 P130	埋土上層	土師質土器 皿	口径 8.4 基高 △ 6.6	口縫と底辺の差が小さい。外底面に回 転系切り痕。	寄	浅黄褐色4.0YR8/4	約1/4残存
138	Fig.93 PL24	ピット群 P130	埋土上層	土師質土器 皿	口径 7.4 基高 △ 1.8 底径 □ 5.4	口縫と底辺の差が小さい。外底面に回 転系切り痕。	寄	浅黄褐色10YR8/4	約1/3残存
139	Fig.93 PL24	ピット群 P131	理土上層	土師質土器 皿	口径 30.0 基高 △ 3.0	口縫部は外反する。内面底部以下横方 向のナズリ。	0.5~1mm大 きな砂粒を含む。	淡褐色5YR8/3~淡赤褐色 2.5YR7/4	約1/8残存
140	Fig.93 PL24	ピット群 P447	埋土中層	土師質土器 皿(口縁部 壊)	口径 27.4 基高 △ 4.4	口縫部は外反する。外面上に炭化物付着。 内面底部以下左方向のナズリ。わず かに赤鉄色斑あり。	0.5mm以下の 砂粒を含む。	明黄褐色10YR2/6	約1/8残存
141	Fig.93 PL24	ピット群 P442	埋土上層	土師質土器 皿(口縁部 壊)	口径 18.3 基高 △ 7.2	外面上に底部を強ナズリする。炭化物付着。 内面底部以下右方向のナズリ。	0.5mm以下の 砂粒を含む。	褐色7.5YR4/3	約1/8残存

(4) ピット群 (Fig.93・97~102 Tab.81・83~88)

1区250基、2区550基のピットを検出した。1・2区のピットはいずれも第1遺構面上から検出できた。埋土はほとんどが灰色もしくは褐灰色土で、第1遺構検出面の地山と類似した土質である。したがって検出面から掘り込まれたことが予想できる。埋土は多くのものは鉄分が混入したやや暗褐色がかった土で、はっきり遺構と判別できるものが多い。ただし中には調査後、第2遺構検出面である黒色土まで掘り下げ中もしくは掘り下げ後に土色の違いかから確認できるものも比較的多く認められた。遺物を包含していることは多くはない。また意図的に遺物を入れていることもあり、土師質土器の杯や皿、鉄製の轍などが出土したものもみられた。

これは同時期とみられる勝の押平弘法堂遺跡でも確認されており、この時期、鎌倉時代にこのようなことが行われていた様相がうかがわれる。以下、主な遺構について記す。

P 4 4 7 • 1 8 4 • 1 3 0 (Fig.94 Tab.81 PL23・24)

P447はN16グリッドに位置する。ピットとしているが浅い土坑状の遺構である。土師質土器の杯131・132・135、壺140が出土した。いずれも平安時代中期の所産である。

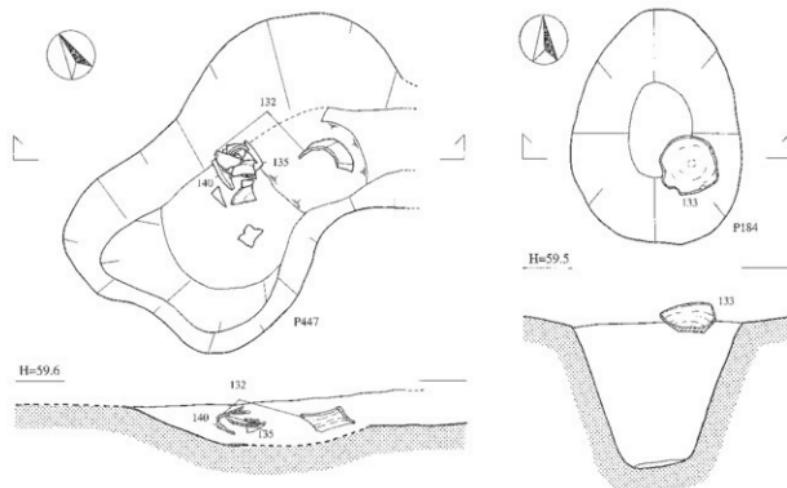


Fig.91 P 447・184・130遺構図

P 184はL11グリッドに位置する。掘方は29cmと比較的深い。遺構上面から土師質上器133が出土した。平面的な位置は底面からやや南側にはずれている。133の底部は回転式切り痕が明瞭に残り、体部は内湾する。器高に対し口径がやや小さいので、平安末～鎌倉時代はじめ頃の所産であろう。ほぼ完形で出土している。

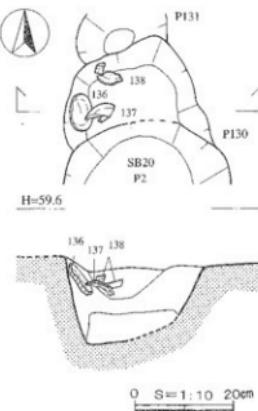
P 130はK 9グリッドに位置する。掘方は不整形でやや浅い。土師質上器の皿が、3基のピットが重なる中央のピットから出土した。いずれも遺構の西端付近から出土し、136はほぼ完存しており、斜めの位置で、137・138も近くから出土した。口径と底径の差が小さく立ち上がりが短いことから、時期は鎌倉時代の所産と考えられる。

P 800 (Fig.95・96 Tab.82 PL.13・25)

J 8グリッドで検出した。ピットの中に土師質土器の杯3点、皿10点が一括して埋納されている。このような遺構は今回の調査では例をみない。掘方は浅く、柱穴ではなく、埋納を目的としているとみられる。

方法を復元すると、北底に144が伏せられ西辺には152が正位置で重ねられる。南底には154・153の順に正位置で積まれる。それらと重なりながら東側に142が正位置に、西側に下から151・143が伏せられた状態で置かれ、これらの上に下から150・149・148が伏せた状態で重ねられる。最終的には東に147、南に145、西に146が正位置に置かれる。

このように検出面での皿の配置は東西南北の四方に1点ずつ置かれ、北方向は伏せられ、重ねられている状況で、何らかの意図をもつことがうかがわれる。杯は浅く口縁部は内湾すること、皿は口径と底径の差が小さいことなどから鎌倉時代の所産で、集落に関する何らかの儀礼的な埋納であると推測したい。



O S=1:10 20cm

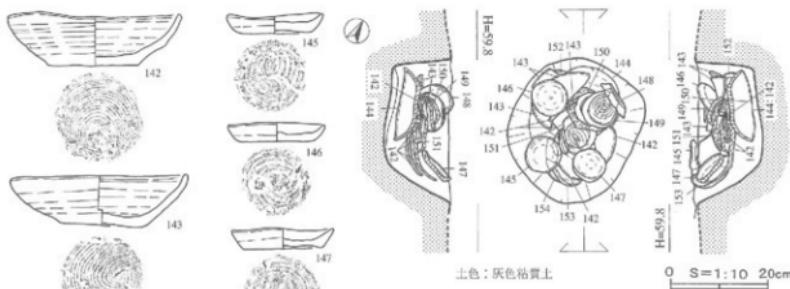


Fig.95 P 800遺構図

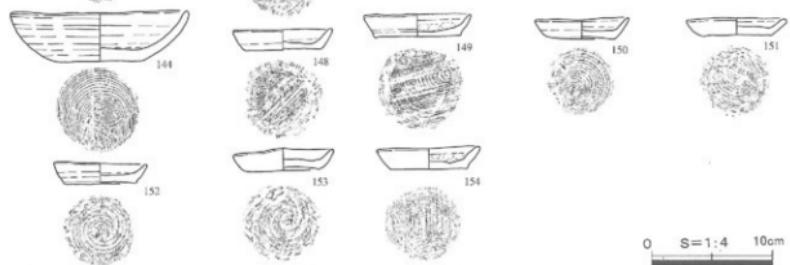


Fig.96 P 800出土遺物実測図

Tab.82 P 800出土遺物観察表

No.	Fig. PL.	遺構名	出土位置	器種	法量 (cm)	特徴	地土	色調	備考
142	Fig.96 PL.25	P 800	堆土中層	土師質土器 杯	口径 身高 底径 144 7.4 7.4	口縁部は内側して丸くおわる。内外面ともに回転ナギ。外底面は回転系切り	0.5m以下の 砂疊をわすかに含む。	にぶい黄褐色10YR7/4	完存
143	Fig.96 PL.25	P 800	堆土中層	土師質土器 杯	口径 身高 底径 146 4.35 7.0	口縁部は内側して丸くおわる。内外面ともに回転ナギ。外底面は回転系切り	審	橙色5YR7/6—蘭灰色 7.5YR6/1	完存
144	Fig.96 PL.25	P 800	堆土下層	土師質土器 杯	口径 身高 底径 146 4.1 7.0	口縁部は内側して丸くおわる。内外面ともに回転ナギ。外底面は回転系切り。	審	にぶい黄褐色10YR7/3	完存
145	Fig.96 PL.25	P 800	堆土上層	土師質土器 皿	口径 身高 底径 8.0 1.6 6.2	口径と底径の差は小さい。口縁部は回転ナギ。外底面は回転系切り。	審	灰白色10YR7/1	口縁部1/6欠損
146	Fig.96 PL.25	P 800	堆土中層	土師質土器 皿	口径 身高 底径 8.0 1.6 5.4	口径と底径の差は大きい。口縁部は回転ナギ。外底面は回転系切り。	0.5m以下の 砂疊を含む。	浅黃褐色10YR8/4	完存
147	Fig.96 PL.25	P 800	堆土中層	土師質土器 皿	口径 身高 底径 17 6.4	口径と底径の差は小さい。口縁部は回転ナギ。底面はややむし。外底面は回転系切り。	0.5m以下の 砂疊をわすかに含む。	浅黃褐色10YR8/3	ほぼ完存
148	Fig.96 PL.25	P 800	堆土中層	土師質土器 皿	口径 身高 底径 8.2 2.1 6.3	口径と底径の差は小さい。口縁部は回転ナギ。内底面立ち上がり部が器が底面に沈み、底面は不規則方向の凹凸。外底面が削ぎ落とされている。	審	橙色5YR7/6	完存
149	Fig.96 PL.25	P 800	堆土中層	土師質土器 皿	口径 身高 底径 8.8 2.1 7.0	口径と底径の差は小さい。口縁部は回転ナギ。内底面立ち上がり部が器が底面に沈み、底面は不規則方向の凹凸。外底面が削ぎ落とされている。	審	橙色5YR7/6	ほぼ完存
150	Fig.96 PL.25	P 800	堆土中層	土師質土器 皿	口径 身高 底径 7.8 1.8 5.7	口径と底径の差は小さくやや小皿。口縁部は回転ナギ。外底面は回転系切り。	0.5m以下の 砂疊を少しあむ。	浅黃褐色10YR8/3	口縁部わずかに欠損
151	Fig.96 PL.25	P 800	堆土中層	土師質土器 皿	口径 身高 底径 8.3 1.4 6.0	口径と底径の差は小さい。口縁部は回転ナギ。やや浅く立ち上がる。内底面立ち上がり部が器底に沈み、底面に輪状の工具の痕跡。外底面は回転系切り。	0.5m以下の 砂疊を少しあむ。	橙色5YR7/6	完存
152	Fig.96 PL.25	P 800	堆土下層	土師質土器 皿	口径 身高 底径 7.7 1.8 6.0	口径と底径の差は小さくやや小皿。口縁部は回転ナギ。外底面は回転系切り。	0.5m以下の 砂疊を少しあむ。	浅黃褐色10YR8/3	口縁部わずかに欠損
153	Fig.96 PL.25	P 800	堆土中層	土師質土器 皿	口径 身高 底径 8.2 1.6 6.0	口径と底径の差は小さい。口縁部は回転ナギ。内底面立ち上がり部が器底に沈み、底面は回転系切り。	審	にぶい黄褐色10YR7/2	口縁部削り1/6欠損
154	Fig.96 PL.25	P 800	堆土中層	土師質土器 皿	口径 身高 底径 8.6 1.8 6.2	口径と底径の差は小さい。口縁部は回転ナギ。内底面立ち上がり部が器底に沈み、底面は回転系切り。	1m以下の砂疊を含む。	にぶい褐色7.5YR6/3	口縁部わずかに欠損

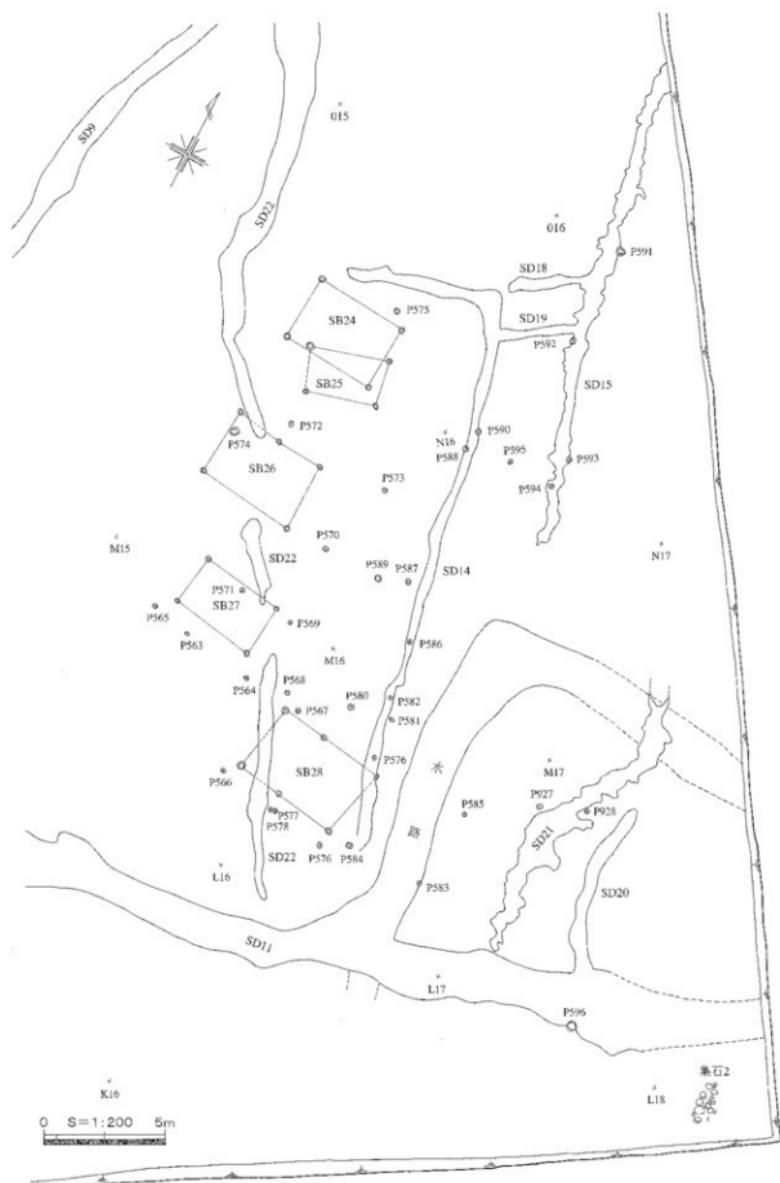


Fig.97 ピット群全体図(1)

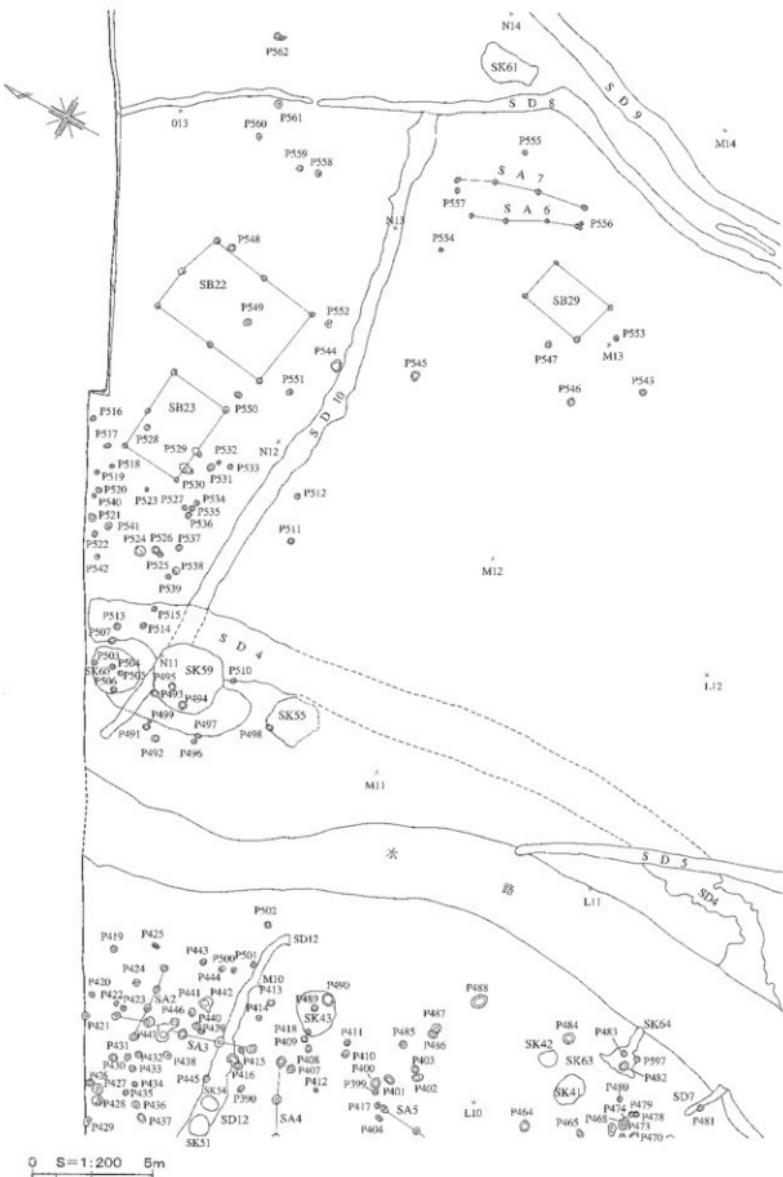


Fig.98 ピット群全体図 (2)

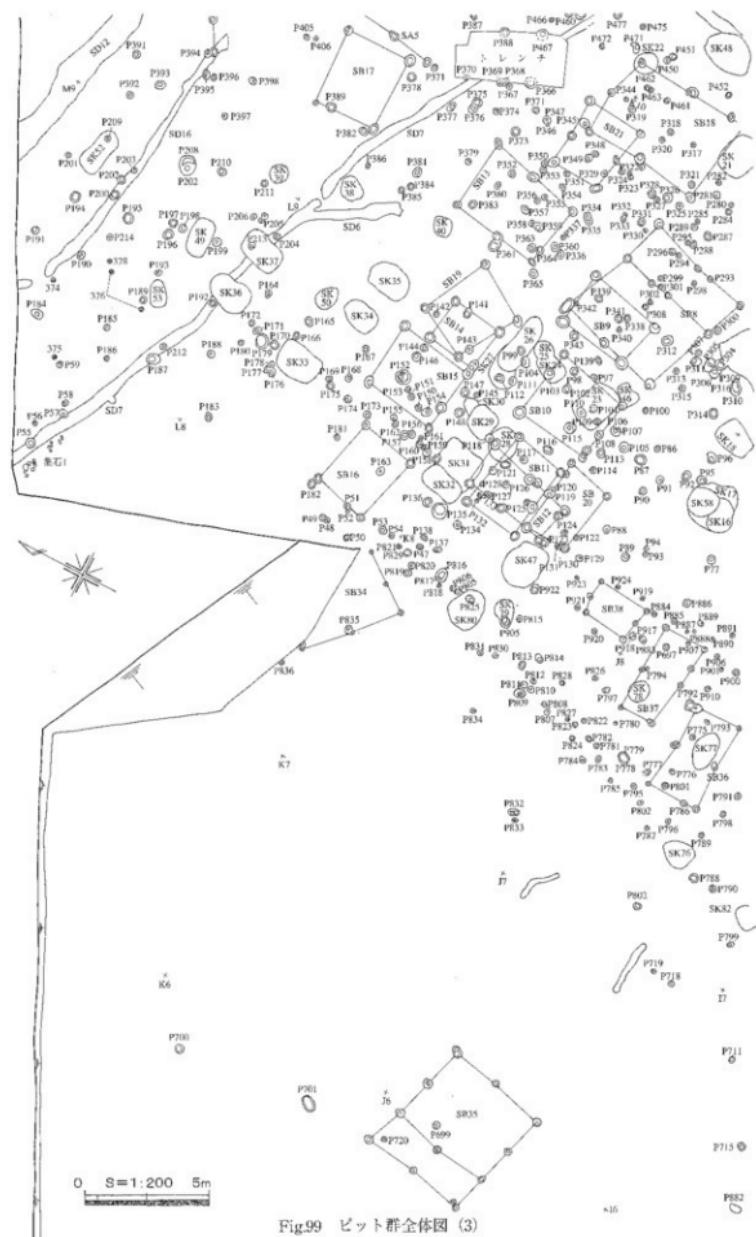


Fig.99 ピット群全体図(3)

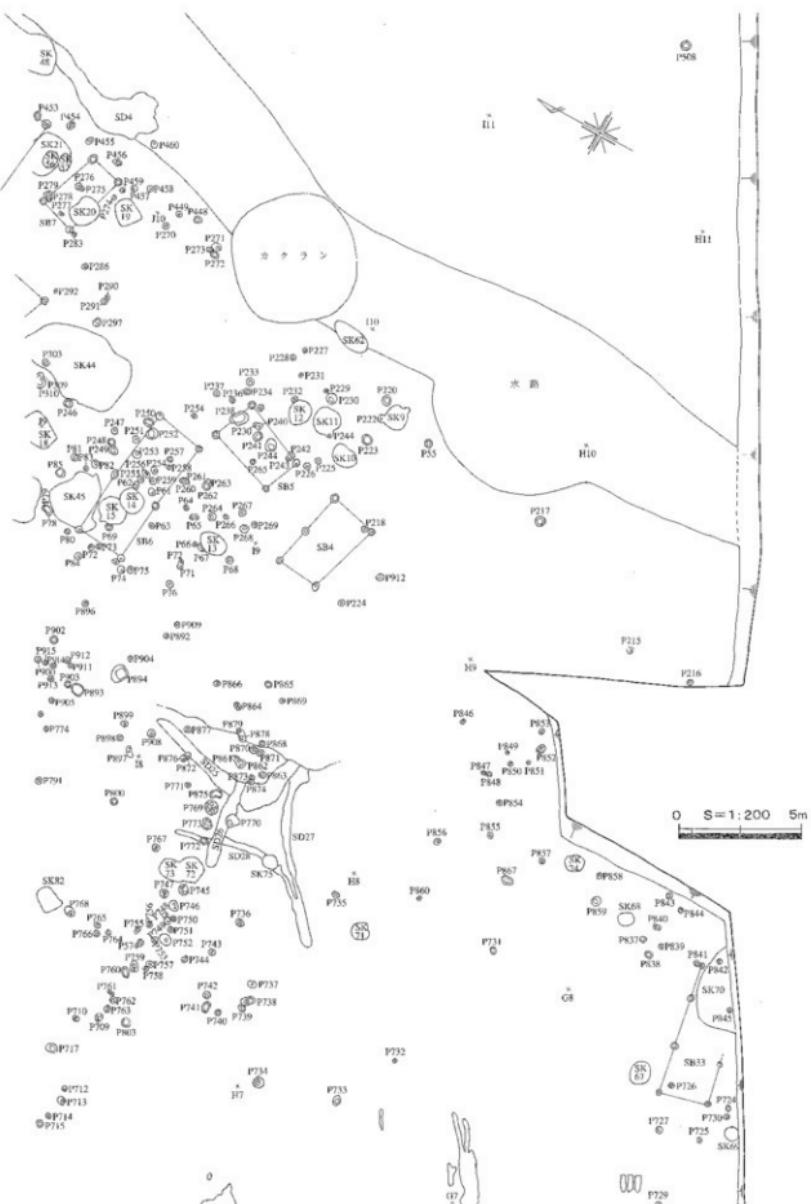


Fig.100 ピット群全体図 (4)

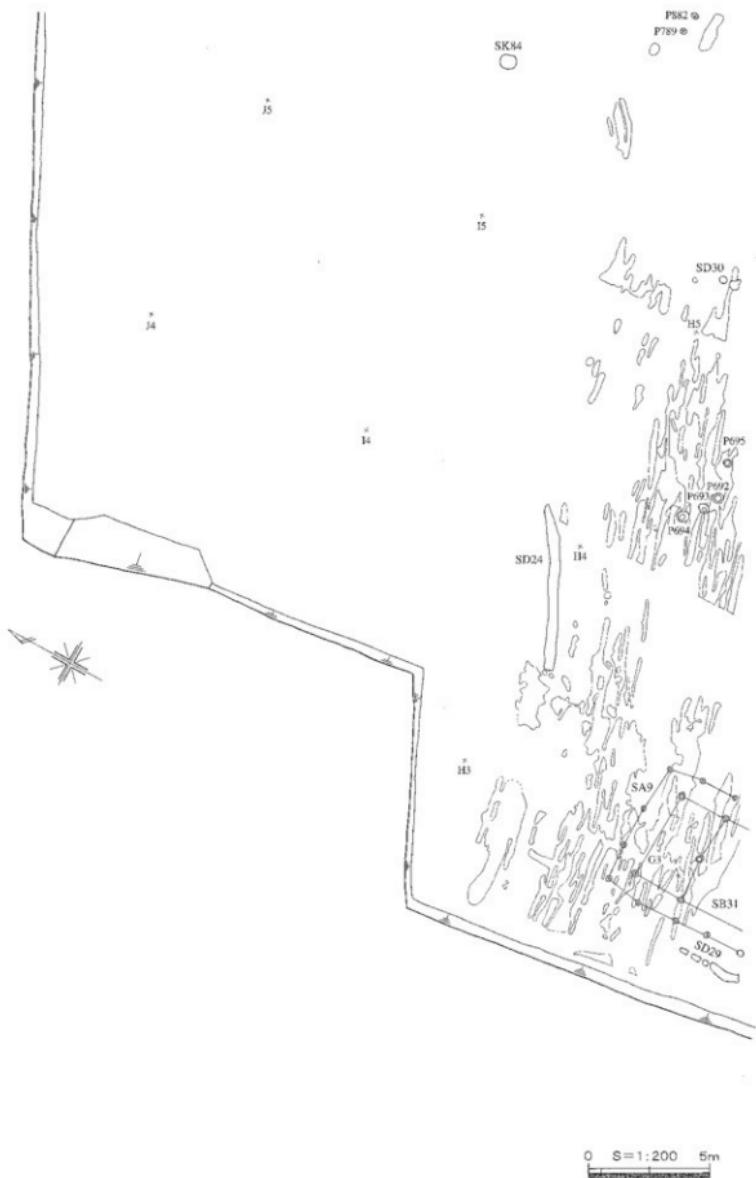


Fig.101 ピット群全体図 (5)



Fig.102 ピット群全体図 (6)

Tab.83 第1遺構面ピット一覧表(1)

新番号	旧番号	グリッド	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	備考	新番号	旧番号	グリッド	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	備考
47	395	K8	24	20	5.4		107	150	K9	34	※24	22.5	
48	399	L8	28	24	12.9		108	219	K9	32	30	19.3	
49	400	L8	※26	22	8.9		109	383	K9	28	24	7.4	
50	398	L8	26	24	34.7		110	382	K9	38	28	38.0	
51	403	L8	24	※20	16.4		111	166	K9	28	26	20.6	
52	402	L8	※20	18	6.0		112	410	K9	34	32	57.9	
53	396	L8	30	28	22.7		113	127	K9	32	30	31.9	
54	397	L8	22	20	4.8		114	154	K9	26	20	46.2	
55	576	M8	40	36	39.6	上師質片	115	148	K9	46	42	41.5	
56	582	M8	20	20	14.5		116	152	K9	40	30	37.6	
57	584	M8	36	28	37.2	上師質片	117	165	K9	22	20	12.4	
58	585	M8	26	20	17.0		118	164	K9	26	24	22.2	
59	588	M8	24	24	21.7		119	124	K9	38	※24	7.0	
60	52	J9	20	18	6.5		120	125	K9	30	20	11.7	
61	97	J9	30	26	19.3		121	158	K9	32	26	22.3	
62	556	J9	32	20	10.0		122	117	K9	22	18	14.6	
63	96	J9	18	18	11.1		123	122	K9	26	24	31.4	
64	83	J9	※34	26	14.7		124	123	K9	28	24	39.8	
65	78	J9	36	20	12.3		125	156	K9	※26	22	19.0	
66	84	J9	24	18	6.8		126	157	K9	24	22	12.4	
67	85	J9	※28	※24	25.5		127	160	K9	30	24	27.8	
68	74	J9	30	28	15.0	F③b	128	159	K9	16	12	7.2	
69	95	J9	26	24	22.9		129	115	K9	24	16	13.6	
70	86	J9	26	20	14.5		130	120	K9	※34	30	15.6	136~138
71	87	J9	※18	※18	5.2		131	121	K9	※18	18	6.4	139
72	93	J9	32	26	35.0		132	162	K9	16	16	13.2	上師質片
73	94	J9	20	20	30.1		133	161	K9	16	16	7.0	
74	90	J9	30	26	17.3		134	163	K9	30	28	15.6	
75	89	J9	26	22	16.1		135	119	K9	66	60	6.6	
76	88	J9	28	28	16.7		136	225	K9	34	28	15.0	
77	155	J9	30	26	45.2		137	228	K9	22	12	4.4	
78	384	J9	※36	32	29.3		138	394	K9	24	16	10.5	
79	385	J9	30	※24	28.8		139	376	K9	34	22	10.8	
80	386	J9	24	22	27.0		140	168	L9	32	28	44.9	
81	389	J9	28	28	12.2		141	190	L9	40	26	47.5	
82	391	J9	30	30	3.4		142	189	L9	22	22	19.8	
83	390	J9	22	20	15.9		143	188	L9	32	30	20.1	
84	92	J9	30	26	5.7		144	187	L9	30	26	34.7	
85	388	J9	38	24	12.7		145	476	L9	20	18	12.9	
86	132	K9	24	22	32.5		146	568	L9	36	34	35.2	
87	129	K9	46	40	58.1		147	186	L9	36	32	26.8	
88	116	K9	30	24	17.1		148	185	L9	30	28	22.4	
89	114	K9	32	28	26.0		149	184	L9	40	20	45.7	上師質片
90	130	K9	34	32	58.5		150	183	L9	30	24	6.4	
91	131	K9	28	26	29.3		151	182	L9	18	18	5.0	
92	112	K9	34	30	23.8		152	180	L9	58	56	46.2	
93	113	K9	22	20	17.8		153	181	L9	26	26	7.5	F②
94	387	K9	24	20	18.1		154	466	L9	42	30	28.0	
95	111	K9	32	28	18.2		155	407	L9	22	20	18.1	
96	110	K9	36	※34	11.1		156	404	L9	32	※26	38.6	
97	377	K9	22	20	8.0		157	405	L9	※32	28	33.5	
98	146	K9	28	26	25.2		158	169	L9	30	22	24.7	
99	153	K9	34	30	23.0		159	170	L9	20	14	5.2	
100	379	K9	24	16	9.6		160	171	L9	24	22	15.3	
101	381	K9	※28	※26	13.2		161	172	L9	14	14	6.6	
102	147	K9	36	34	43.6		162	406	L9	30	22	3.6	
103	409	K9	44	42	33.6		163	173	L9	30	24	28.7	
104	167	K9	40	38	41.2		164	336	L9	30	24	33.3	
105	128	K9	38	36	30.8	上師質片	165	272	L9	38	30	12.0	
106	149	K9	32	※26	21.6		166	273	L9	28	24	17.9	

Tab.84 第1造構面ピット一覧表(2)

新番号	旧番号	グリッド	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	備考	新番号	旧番号	グリッド	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	備考
167	408	L9	24	22	15.6		227	572	J10	22	18	18.4	
168	179	L9	26	24	17.9		228	541	J10	26	24	19.6	
169	177	L9	26	22	21.9		229	58	J10	20	14	12.8	
170	274	L9	28	20	16.7		230	59	J10	46	44	14.0	
171	276	L9	32	24	26.1		231	542	J10	12	10	11.3	
172	277	L9	20	20	7.1		232	543	J10	18	16	7.4	
173	174	L9	32	30	28.9		233	573	J10	30	30	9.7	
174	178	L9	24	24	12.6		234	544	J10	30	18	13.0	
175	176	L9	32	30	20.4		235	66	J10	22	20	24.1	
176	411	L9	30	22	19.6		236	546	J10	20	18	12.7	
177	412	L9	*30	24	33.8		237	547	J10	20	20	11.7	
178	413	L9	*28	20	32.8		238	67	J10	66	46	18.4	
179	275	L9	52	50	10.6		239	68	J10	18	*16	8.2	
180	279	L9	18	16	15.4		240	69	J10	24	*22	18.4	
181	175	L9	24	22	18.2		241	70	J10	34	32	21.6	
182	401	L9	34	28	20.3		242	63	J10	*22	20	27.1	
183	628	L9	30	28	35.7		243	64	J10	22	20	12.5	
184	465	M9	48	36	32.2	133	244	65	J10	50	44	7.9	
185	590	M9	24	22	21.6		245	393	J10	20	18	11.5	
186	589	M9	20	18	12.0	須忠器要 土師質片	246	548	J10	30	30	17.4	
187	414	M9	54	46	18.6		247	107	J10	20	20	25.6	
188	335	M9	28	26	44.5		248	392	J10	32	30	26.0	
189	280	M9	26	26	13.0		249	108	J10	34	30	25.1	
190	333	M9	28	24	24.0		250	105	J10	42	30	18.9	
191	592	M9	34	32	35.6		251	106	J10	60	*26	19.7	
192	452	M9	30	30	14.5		252	104	J10	46	44	6.2	
193	334	M9	30	20	30.0		253	109	J10	30	30	24.7	
194	332	M9	42	36	57	上師質坪	254	99	J10	24	20	18.0	
195	330	M9	46	42	14.5	134	255	100	J10	30	28	5.4	
196	281	M9	38	36	15.9		256	101	J10	36	26	3.0	
197	282	M9	32	30	9.9		257	103	J10	20	20	11.7	
198	283	M9	30	28	37.9		258	102	J10	16	16	12.8	
199	597	M9	40	36	33.2		259	98	J10	28	24	20.1	
200	591	M9	42	38	34.1		260	82	J10	*32	24	13.2	
201	331	M9	22	22	26.0		261	81	J10	24	*20	12.2	
202	593	M9	36	34	31.7		262	79	J10	30	28	33.2	
203	594	M9	28	28	19.0		263	80	J10	28	*20	15.7	
204	278	M9	24	22	21.4		264	77	J10	32	26	10.9	
205	337	M9	44	32	18.3		265	71	J10	20	16	-	
206	338	M9	26	20	7.7		266	76	J10	16	*12	3.6	
207	339	M9	64	48	43.5		267	75	J10	26	22	13.6	
208	340	M9	62	*50	9.2		268	73	J10	30	26	12.6	
209	600	M9	24	22	9.0		269	72	J10	24	22	17.6	
210	595	M9	34	34	33.8		270	510	J10	26	22	14.1	
211	596	M9	30	26	33.6		271	447	J10	34	30	29.6	
212	649	M9	26	24	*69.8		272	453	J10	30	26	12.2	
213	651	M9	28	22	*41.7		273	493	J10	20	20	15.5	
214	658	M9	26	26	*44.6		274	533	K10	14	14	5.5	
215	610	H10	*26	*24	21.6		275	362	K10	*24	20	32.0	
216	50	H10	26	24	18.1		276	363	K10	*26	22	12.0	
217	51	I10	42	36	12.0		277	553	K10	22	18	15.5	
218	54	I10	24	20	12.5		278	365	K10	*30	18	10.5	
219	53	I10	30	18	14.9		279	364	K10	26	*18	6.8	
220	56	I10	34	34	4.4		280	366	K10	18	16	6.9	
221	55	I10	30	32	33.3		281	554	K10	32	26	30.9	
222	609	I10	*26	24	26.3		282	545	K10	18	16	9.3	
223	57	I10	42	40	6.4		283	367	K10	18	16	11.0	
224	60	I10	30	30	8.3		284	230	K10	28	28	26.2	
225	61	I10	20	18	22.2		285	415	K10	22	20	24.2	
226	62	I10	22	20	20.2		286	229	K10	20	20	12.5	

Tab.85 第1遺構面ピット一覧表 (3)

新番号	旧番号	グリッド	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	備考	新番号	旧番号	グリッド	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	備考
287	226	K10	32	30	17.0		347	583	L10	*30	30	21.4	
288	224	K10	36	26	22.8		348	560	L10	24	20	32.0	
289	416	K10	26	14	9.1		349	561	L10	30	26	32.5	
290	231	K10	*28	22	9.9		350	202	L10	24	24	49.9	
291	346	K10	*26	22	10.1		351	204	L10	20	16	7.8	
292	550	K10	14	14	12.4		352	198	L10	24	24	21.2	
293	551	K10	20	20	15.3		353	203	L10	*26	24	48.6	
294	218	K10	20	18	31.0		354	205	L10	26	22	16.5	
295	417	K10	18	14	8.2		355	206	L10	22	20	19.3	
296	378	K10	26	24	12.0		356	207	L10	26	24	13.8	
297	232	K10	34	28	11.6		357	208	L10	36	28	17.4	
298	552	K10	18	14	4.0		358	209	L10	*26	26	39.8	
299	141	K10	22	20	19.0		359	210	L10	*42	34	49.5	
300	549	K10	26	24	24.8		360	215	L10	32	30	16.3	
301	140	K10	20	16	4.0		361	193	L10	36	*34	44.7	
302	380	K10	22	20	8.2		362	709	E4	30	*28	47.5	
303	538	K10	34	26	24.3		363	211	L10	30	26	13.7	
304	599	K10	*50	46	19.3		364	212	L10	30	30	28.1	
305	598	K10	60	*36	20.7		365	213	L10	30	30	39.0	
306	587	K10	*44	40	58.3		366	357	L10	34	*24	21.5	
307	139	K10	22	22	26.9		367	358	L10	*28	18	9.4	
308	142	K10	20	20	21.3		368	359	L10	*18	14	22.4	
309	135	K10	*30	*28	14.5		369	360	L10	28	*24	19.1	
310	134	K10	*48	42	16.0		370	361	L10	18	*16	9.1	
311	555	K10	48	30	15.3		371	345	L10	28	24	25.3	
312	138	K10	46	36	9.8		372	351	L10	26	20	25.0	
313	137	K10	24	20	14.4		373	196	L10	34	34	31.4	
314	133	K10	34	32	46.2		374	258	L10	26	18	13.4	
315	136	K10	22	20	30.1		375	259	L10	*38	36	30.2	F⑤
316	586	K10	*30	*30	26.0		376	260	L10	30	*28	31.9	
317	233	K10	18	18	6.5		377	261	L10	36	28	41.0	
318	234	K10	20	20	15.8		378	262	L10	32	30	29.5	
319	237	K10	24	24	54.8		379	195	L10	20	16	6.8	
320	235	K10	20	18	9.8		380	197	L10	24	20	12.0	
321	227	K10	22	22	16.7		381	344	L10	36	30	26.2	
322	350	K10	*18	16	10.2		382	342	L10	36	26	4.3	
323	221	K10	22	18	9.8		383	194	L10	28	28	4.5	
324	349	K10	22	22	20.4		384	270	L10	26	26	16.1	
325	558	K10	22	22	18.5		385	271	L10	22	22	9.6	
326	223	K10	36	32	14.9		386	343	L10	18	18	12.7	
327	368	K10	22	14	20.0		387	354	L10	20	18	4.9	
328	220	K10	32	32	24.3		388	355	L10	34	*32	17.4	
329	348	K10	22	20	26.6		389	269	M10	30	28	13.2	
330	370	K10	14	12	6.8		390	297	M10	28	22	21.5	
331	369	K10	28	22	26.6		391	327	M10	30	26	17.1	
332	371	K10	14	14	4.9		392	329	M10	26	26	15.5	
333	372	K10	24	18	9.2		393	328	M10	40	30	15.5	
334	191	K10	*28	28	23.5		394	287	M10	30	28	36.2	
335	217	K10	*22	22	13.0		395	286	M10	40	26	31.8	
336	214	K10	36	26	23.7		396	285	M10	28	20	20.1	
337	216	K10	18	14	9.4		397	307	M10	28	22	14.3	
338	143	K10	26	26	18.1		398	487	M10	34	22	28.8	
339	373	K10	28	26	29.3		399	264	M10	24	20	17.9	
340	145	K10	20	20	12.2		400	263	M10	46	36	16.1	
341	144	K10	28	24	12.7		401	341	M10	42	30	19.7	
342	374	K10	18	18	7.2		402	256	M10	42	30	22.3	
343	375	K10	30	30	13.0		403	255	M10	30	30	19.0	
344	238	L10	22	20	22.5		404	266	M10	26	24	17.2	
345	347	L10	44	34	41.9		405	267	M10	24	16	21.1	
346	562	L10	*18	18	16.2		406	268	M10	20	16	6.0	

土師質片

Tab.86 第1遮構面ピット一覧表(4)

新番号	旧番号	グリッド	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	備考	新番号	旧番号	グリッド	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	備考
407	308	M10	42	40	45.8		467	356	L11	42	※28	21.7	
408	288	M10	26	24	10.0		468	515	L11	※30	※30	12.2	
409	289	M10	30	24	12.7		469	249	L11	24	22	10.9	
410	498	M10	28	28	13.0		470	248	L11	48	36	29.3	
411	499	M10	22	20	5.3		471	563	L11	46	28	19.5	
412	539	M10	16	14	3.4		472	245	L11	20	20	20.9	
413	293	M10	26	22	9.1		473	516	L11	32	※30	16.5	
414	294	M10	20	20	10.4		474	514	L11	20	20	16.5	
415	295	M10	28	22	26.4		475	564	L11	20	20	21.2	
416	296	M10	44	※28	16.9		476	567	L11	50	30	9.5	
417	265	M10	24	-	18.0		477	244	L11	34	30	15.3	
418	290	M10	24	20	8.4		478	247	L11	24	24	13.5	
419	303	N10	28	26	20.2		479	455	L11	※20	18	17.1	
420	309	N10	22	18	9.2		480	250	L11	22	20	20.2	
421	326	N10	28	26	13.8		481	566	L11	26	20	25.0	
422	305	N10	20	14	14.8		482	574	L11	40	36	15.5	
423	306	N10	24	22	26.9		483	575	L11	24	20	11.4	
424	304	N10	28	26	22.1		484	251	L11	44	38	12.6	
425	302	N10	28	18	6.8		485	254	M11	26	26	20.8	
426	319	N10	34	26	20.7		486	284	M11	40	36	6.9	
427	321	N10	44	42	30.5		487	253	M11	42	38	6.1	
428	322	N10	44	42	34.0		488	252	M11	58	44	5.4	
429	320	N10	38	26	32.2		489	291	M11	26	22	15.2	
430	318	N10	30	30	10.6		490	292	M11	56	46	16.2	
431	311	N10	24	22	18.5		491	428	N11	26	20	17.7	土師質片
432	317	N10	26	26	17.5		492	429	N11	28	26	16.0	
433	312	N10	24	22	7.3		493	426	N11	32	24	27.0	
434	313	N10	20	20	10.8		494	427	N11	32	30	21.8	
435	316	N10	22	18	5.9		495	608	N11	※30	28	13.5	土師質片
436	314	N10	34	28	27.7		496	431	N11	24	24	26.3	
437	315	N10	40	30	12.4		497	430	N11	24	20	22.5	
438	482	N10	30	26	25.4		498	433	N11	28	24	25.6	
439	324	N10	24	22	9.6		499	606	N11	10	10	4.8	
440	323	N10	32	30	22.9		500	300	N11	20	16	7.9	
441	483	N10	30	28	9.5		501	299	N11	24	20	10.5	
442	569	N10	58	56	19.3	141	502	298	N11	28	26	23.2	
443	310	N10	24	22	10.3		503	422	O11	20	20	16.1	
444	301	N10	26	20	24.1		504	424	O11	22	20	9.2	
445	325	N10	30	28	14.5		505	425	O11	22	20	15.1	
446	570	N10	38	28	11.5	1313213516	506	423	O11	22	20	11.3	
447	571	N10	50	44	7.0		507	432	O11	28	26	15.7	
448	496	J11	42	38	43.7		508	604	I12	38	38	9.3	
449	509	J11	24	24	11.1		509	605	I12	28	22	8.3	
450	242	K11	28	26	18.1		510	607	N12	20	18	14.6	土師質片
451	243	K11	24	22	18.7		511	459	N12	24	22	19.5	
452	199	K11	22	22	17.2		512	540	N12	22	22	9.4	
453	200	K11	30	28	23.8		513	420	O12	24	26	24.1	
454	201	K11	30	26	19.6		514	418	O12	24	24	11.1	土師質片
455	246	K11	30	24	14.6		515	419	O12	20	18	13.8	
456	534	K11	34	24	12.0		516	462	O12	20	20	5.2	
457	489	K11	24	22	15.1		517	461	O12	22	14	6.7	
458	517	K11	22	20	15.2		518	451	O12	16	16	16.4	
459	530	K11	14	12	3.8		519	506	O12	18	18	7.9	
460	236	K11	※32	18	16.4		520	445	O12	26	22	7.7	
461	239	K11	20	16	5.2		521	504	O12	32	26	26.2	
462	241	K11	20	18	6.8		522	503	O12	26	24	24.4	
463	240	K11	※20	20	12.8		523	446	O12	12	10	18.1	
464	257	L11	32	30	18.2		524	436	O12	46	42	7.0	
465	353	L11	※30	22	17.2		525	437	O12	※24	20	21.3	
466	352	L11	20	20	21.0		526	438	O12	※32	28	28.0	

Tab.87 第1遺構面ピット一覧表(5)

新番号	旧番号	グリッド	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	備考	新番号	旧番号	グリッド	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	備考
527	443	O12	20	20	18.0		563	456	M16	16	14	21.0	
528	454	O12	24	24	20.1		564	491	M16	20	16	4.3	
529	449	O12	※46	34	29.2		565	508	M16	20	18	16.1	
530	448	O12	※22	18	32.5		566	460	M16	18	18	11.3	
531	450	O12	30	28	33.2		567	512	M16	20	20	11.9	
532	457	O12	14	12	12.4		568	500	M16	20	20	14.6	
533	458	O12	20	18	6.2		569	492	N16	16	14	9.8	
534	444	O12	22	20	5.0		570	497	N16	22	20	11.3	
535	442	O12	26	22	21.4		571	495	N16	16	14	5.7	
536	441	O12	24	22	24.7		572	502	N16	22	20	8.2	
537	439	O12	26	22	31.2		573	520	N16	18	16	14.8	
538	434	O12	32	26	30.8		574	501	N16	※36	30	—	
539	421	O12	20	16	18.9		575	513	O16	22	20	9.5	
540	505	O12	18	14	14.6		576	478	M17	18	18	8.0	
541	440	O12	28	26	17.9		577	484	M17	20	20	16.2	
542	435	O12	18	16	4.4		578	485	M17	16	14	10.5	
543	475	M13	24	22	18.6		579	532	M17	16	14	10.5	
544	470	N13	50	44	13.0		580	529	M17	22	20	23.0	
545	471	N13	36	34	7.2		581	531	M17	20	12	7.8	
546	473	N13	26	26	19.9		582	528	M17	※16	14	8.1	
547	474	N13	24	20	5.9		583	536	M17	18	16	9.6	
548	469	O13	28	26	7.0		584	535	M17	16	16	19.8	
549	464	O13	32	32	22.2		585	537	M17	18	14	8.4	
550	463	O13	30	22	16.7		586	488	N17	20	18	13.6	
551	467	O13	22	18	20.9		587	511	N17	20	20	12.4	
552	468	O13	32	※22	14.6		588	519	N17	18	18	7.9	
553	479	M14	22	20	6.4		589	521	N17	26	24	11.9	
554	481	N14	14	12	6.9		590	518	O17	22	18	12.0	
555	486	N14	16	16	8.3	130	591	523	O17	42	38	8.6	上師質片
556	494	N14	16	14	4.3		592	524	O17	24	22	22.7	
557	490	N14	16	12	6.1		593	525	O17	20	16	7.4	
558	581	O14	26	24	10.6		594	526	O17	16	16	11.0	
559	580	O14	※40	24	25.9		595	527	O17	16	16	13.4	
560	579	O14	28	22	7.6		596	701	L18	36	34	37.4	
561	578	O14	30	32	16.8	土師質片	597	472	L11	21	21	12.4	
562	577	O14	30	※28	14.4								

669	1030	F3	26	24	41.7		691	1033	H5	48	44	51.3	
670	1031	F3	32	18	31.0		692	1034	H5	44	44	64.0	
671	977	D4	42	32	78.0		693	1035	H5	40	38	63.0	
672	978	D4	36	24	76.7		694	1036	H5	48	46	68.6	
673	979	D4	62	50	72.9	土師質片	695	1051	H5	30	30	78.5	
674	981	D4	60	32	82.3		696	975	F6	52	46	51.0	
675	982	D4	22	22	79.0		697	788A	I6	28	20	20.2	
676	702	E4	24	22	17.0		698	789A	I6	26	24	22.5	
677	703	E4	30	24	42.2		699	1037	J6	30	26	53.3	
678	704	E4	26	26	9.3		700	917	K6	38	32	9.7	
679	706	E4	24	14	8.5		701	918	K6	70	42	7.4	
680	707	E4	28	26	37.5		702	941	F7	30	24	28.3	
681	708	E4	32	28	30.8		703	976	F7	38	36	37.3	
682	898	E4	24	22	20.6	上師質片	704	912	G7	24	22	20.0	
683	710	F4	32	30	30.4		705	913	G7	28	28	29.9	土師質片
684	711	F4	36	32	33.0		706	938	G7	18	18	36.2	
685	713	F4	18	16	11.1		707	942	G7	36	30	40.1	
686	723	F4	22	22	15.9		708	732	H7	24	22	32.5	
687	897	F4	28	26	19.2		709	781	I7	40	28	12.2	
688	724	G4	20	16	9.1		710	782	I7	26	20	6.5	
689	725	E5	30	22	35.0		711	783	I7	24	20	11.8	
690	726	E5	26	20	30.9		712	784	I7	20	20	9.5	

Tab.88 第1造構面ピット一覧表(6)

新番号	旧番号	グリッド	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	備考	新番号	旧番号	グリッド	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	備考
713	785	I7	46	28	11.8		774	811	J8	20	16	21.5	
714	786	I7	18	14	17.8		775	812	J8	18	18	35.2	
715	787	I7	30	28	9.7		776	814	J8	20	18	31.4	
716	929	I7	20	18	34		777	815	J8	30	22	54.2	
717	1020	I7	46	34	23.9		778	816	J8	20	18	31.4	
718	790	J7	24	22	13.7		779	817	J8	56	40	23.0	
719	791	J7	16	14	15.2		780	818	J8	12	10	17.4	
720	1028	I7	22	20	25.8		781	819	J8	22	20	26.1	
721	920	F8	50	48	68.7		782	820	J8	26	22	25.6	
722	934	F8	22	20	3.7		783	821	J8	28	18	26.7	
723	935	F8	20	18	15.9		784	822	J8	26	24	34.0	
724	727	G8	24	22	16.0		785	825	J8	20	18	35.2	
725	729	G8	20	20	21.4		786	826	J8	26	22	38.2	
726	730	G8	26	22	18.0		787	828	J8	14	12	26.9	
727	731	G8	26	24	47.4		788	829	J8	36	36	15.6	
728	921	G8	26	22	39.0		789	830	J8	22	16	26.3	
729	922	G8	26	20	26.3		790	831	J8	42	26	20.0	
730	940	G8	20	18	※38.2		791	960	J8	32	24	45.0	
731	902	H8	28	20	6.4		792	966	J8	68	32	3.5	
732	936	H8	18	14	17.8		793	967	J8	18	14	20.1	
733	1008	H8	42	32	21.3		794	985	J8	18	16	25.1	
734	1032	H8	46	46	49.4		795	988	J8	20	18	27.5	
735	734	I8	28	22	4.0		796	989	J8	20	18	31.0	
736	736	I8	34	28	1.8		797	991	J8	28	20	39.9	
737	737	I8	46	32	12.8		798	997	J8	20	16	31.6	
738	738	I8	58	32	23.9		799	1000	J8	28	22	28.7	
739	740	I8	30	28	7.5		800	1001	J8	28	26	27.9	
740	741	I8	22	20	21		801	1002	J8	28	22	35.3	
741	742	I8	44	30	7.8		802	1004	J8	30	26	19.0	
742	743	I8	30	28	20.8		803	1006	I8	36	24	12.5	
743	744	I8	26	22	8.9		804	1007	J8	18	12	38.1	
744	745	I8	30	24	5.0		805	735	K8	18	14	11.3	
745	746	I8	46	34	26.7		806	806	K8	22	22	15.8	
746	750	I8	40	32	22.5		807	834	K8	24	20	32.1	
747	751	I8	36	30	40.5		808	835	K8	18	18	28.4	
748	752	I8	24	22	16.2		809	836	K8	48	36	56.4	
749	753	I8	28	24	33.4		810	837	K8	30	26	41.8	
750	754	I8	24	21	14		811	838	K8	26	26	52.0	
751	755	I8	24	18	6.2		812	839	K8	20	18	22.9	
752	756	I8	42	32	13.5		813	840	K8	38	24	25.5	
753	759	I8	24	22	19.3		814	841	K8	36	28	35.3	F③
754	760	I8	32	24	19.6		815	846	K8	24	18	12.2	
755	761	I8	34	20	6.0		816	847	K8	22	22	57.6	
756	762	I8	22	20	※10.7		817	848	K8	46	22	47.8	
757	763	I8	32	26	15.7		818	849	K8	18	16	18.3	
758	764	I8	20	12	7.1		819	850	K8	32	30	14.5	
759	765	I8	48	34	17.9		820	851	K8	22	22	35.8	
760	766	I8	46	32	9.2		821	852	K8	20	16	41.6	
761	767	I8	28	16	4.0		822	899	K8	22	18	35.1	
762	768	I8	30	24	12.2		823	900	K8	20	18	23.0	
763	770	I8	26	26	26	※17.0	824	901	K8	20	20	28.5	
764	771	I8	22	20	11.6		825	906	K8	34	30	24.5	
765	772	I8	26	18	19.0		826	992	K8	20	18	68.7	
766	773	I8	22	20	8.1		827	993	K8	20	16	57.2	
767	774	I8	28	26	9.8		828	996	K8	18	18	34.5	
768	908	I8	48	26	19.7		829	1010	K8	32	30	53.7	
769	950	I8	56	52	35.5		830	1017	K8	16	14	34.5	
770	951	I8	60	50	24.8		831	1019	K8	18	14	38.5	
771	952	I8	22	20	22.8		832	1025	K8	44	28	57.6	
772	983	I8	30	22	13.7		833	1026	K8	22	18	50.8	
773	1022	I8	30	24	36.2		834	1027	K8	18	18	38.6	

土脚質片

Tab.89 第1遺構面ピット一覧表(7)

新番号	旧番号	グリッド	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	備考	新番号	旧番号	グリッド	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	備考
835	1023	L8	38	26	47.7		882	788	J9	24	24	45.3	
836	1029	L8	18	16	52.5		833	789	J9	24	22	33.2	
837	874	G9	26	24	9.5		884	795	J9	20	18	16.5	
838	875	G9	32	30	6.7		885	797	J9	22	20	33.0	
839	876	G9	22	20	8.1		886	798	J9	30	24	27.8	土師質片
840	877	G9	44	22	12.9		887	799	J9	18	14	19.0	
841	878	G9	26	22	28.3		888	800	J9	10	10	19.0	
842	903	G9	20	20	17.0		889	801	J9	24	22	34.7	
843	907	G9	24	22	43.1		890	802	J9	20	14	24.5	
844	910	G9	22	14	36.8		891	803	J9	18	16	8.9	
845	919	G9	22	20	6.2		892	804	J9	20	18	17.3	
846	857	H9	18	16	32.8		893	805	J9	54	52	4.6	
847	858	H9	18	16	25.9		894	810	J9	80	46	8.6	
848	859	H9	22	22	25.6		895	855	J9	10	6	15.5	
849	860	H9	12	10	17.7		896	856	J9	30	28	49.1	
850	861	H9	18	18	35.8		897	957	J9	48	22	30.0	
851	862	H9	12	12	27.0		898	958	J9	26	24	38.5	
852	863	H9	38	28	45.3		899	959	J9	26	24	39.1	
853	864	H9	24	20	40.4		900	961	J9	26	24	22.0	
854	866	H9	22	18	39.1		901	962	J9	20	16	22.7	
855	867	H9	26	22	31.8		902	963	J9	30	26	36.8	
856	868	H9	26	22	30.2		903	968	J9	26	22	25.8	
857	871	H9	22	14	27.0		904	969	J9	20	18	34.3	
858	872	H9	24	20	35.8		905	971	J9	20	18	56.7	
859	873	H9	42	32	23.9		906	973	J9	18	18	24.0	
860	984	H9	18	16	9.8		907	974	J9	20	16	19.2	
861	775	I9	30	24	18.4		908	1011	J9	30	30	34.7	
862	776	I9	40	34	15.5		909	1012	J9	24	20	38.1	
863	777	I9	30	28	7.9		910	1018	J9	20	16	21.4	
864	778	I9	44	26	16.5		911	782a	J9	16	16	25.0	
865	779	I9	28	28	11.1		912	783a	J9	26	24	47.6	
866	780	I9	28	20	38.7		913	784a	J9	22	22	40.7	
867	869	I9	48	30	19.8		914	785a	J9	22	18	15.4	
868	933	I9	30	26	24.5		915	786a	J9	20	18	23.0	
869	943	I9	22	20	38.7		916	787a	J9	24	18	39.6	
870	944	I9	32	24	36.0		917	790a	J9	26	12	16.6	
871	945	I9	28	26	38.4		918	791a	J9	32	28	10.6	
872	946	I9	32	22	35.7		919	796	J9	18	16	29.9	
873	947	I9	22	18	19.6		920	842	J9	24	20	22.4	
874	948	I9	24	18	24.9		921	844	J9	24	22	26.7	
875	949	I9	52	28	20.4		922	845	K9	16	10	20.8	
876	953	I9	30	22	40.9		923	853	K9	16	10	20.8	
877	954	I9	26	24	45.1		924	1021	K9	22	18	23.7	
878	955	I9	34	24	20.5		1048	905	K8	41	30	52.0	
879	956	I9	34	22	20.6		1049	923	G8	40	24	-	
880	1013	I9	26	18	12.2		1050	623	M18	24	14	11.3	
881	1014	I9	40	30	40.9		1051	638	M18	20	14	6.1	

ピット群全体から出土した遺物であるが、ほとんどが小片である。図化できた遺物は、土師質土器の杯130・134・135、土師質土器皿139、土師質土器壺140・141である。このほか、須恵器片などが出土している。傾向としては、集落の時期としてはやや遅い時期の遺物がみられるが、付近に平安時代中期の溝状遺構が存在しているため、上限を示すに留まる。下限は土師質土器の皿や瓦質土器の鍋などが出土している時期で、鎌倉時代（13世紀頃）と考えられる。この時期、掘立柱建物跡を中心とした集落が形成されるが、建物は、1間×1間または1間×2間が主体を占めている。

ピット群について、建物跡の一部や構造などの目的が想定されるが、平面上では無秩序としか認識できない。中世の遺物跡について構造を明らかにし、復元することが必要であると考えられる。

(5) 溝状遺構

第1遺構検出面上から確認・調査した溝状遺構は28条である。遺構の多くは埋土が砂もしくは砂質土で、部分的に褐色の鉄分が沈着する。鎌倉時代における掘立柱建物・土坑・ピット群などの埋土はいずれも灰褐色粘質土であり、溝状遺構とは異なる。出土した遺物は、弥生土器・土師器・須恵器・近世の陶磁器などあるが、鎌倉時代の遺物はなく、遺物がみられない遺構も多い。

溝状遺構のうち、SD 2・4・12・15・30はいずれも並行あるいは直交方向にあり、規則性が認められる。須恵器・土師質土器・黒色土器・綠釉陶器などが出土しており、これらは平安時代中期の所産である。これ以外の溝状遺構は埋土あるいは出土遺物から判断して近世あるいは時期不明の遺構であり、鎌倉時代の集落と同時期と断定できる遺構はない。

SD 2 (Fig.103~105 Tab.90・91 PL.15・23・27・38)

Q～S22グリッドに位置する。南から北方向に向かいほぼ直線状に延びる。SD 15にはほぼ並行し、約54～55mの間隔である。SK 6と重複しており、これよりも新しい。北側は掘削により切られている。埋土は砂が多く、石はみられない。また遺構の南側では現代の用水路と重なり、これに塹されているため、溝がどこまで続くのかははつきりとしない。ただし、用水路の中からはSD 4と同時期の遺物が点在している。単層で底面は平らである。遺物は全体に散らばるのではなく、部分的にある程度のまとまりをもつ。土師質土器杯156～161、高台付杯155・162～166、甕167～170がある。杯はいずれも底面は回転糸切り痕をもつ。内面に「レ」状のヘラ記号をもつものは、155・157・160・161・163・164である。いずれも杯の内面に焼成前に記されたものである。また高台付杯の高台部は別々に出土しており、打ち欠かれた可能性がある。土師質土器甕はいずれも「く」の字状に屈曲する口縁をもち、頸部直下までケズりが著しい。170の外腹体部には縱方向のハケ目が施される。いずれも平安時代中期の所産である。ほかに弥生土器甕部171、甕口縁部172がある。北側には弥生時代の堅穴住居S I 1が位置しており、これらと時期は同じである。

SD 4 (Fig.106～108・110 Tab.90・92・93

PL.16・26～28・38・39)

L～O12グリッドに位置する。南から北方向に向かうが、現在まで使用されている用水路と重なる部分が多い。北側を除き遺存状況は悪い。北側でSD 10と重複しており、これよりも古い。検出時には溝の北側部分はSK 59・60とともに平面ドーナツ状に砂が堆積していた。溝の南部分は現代の用水路と重複する。

底面は凸凹が多く、石の抜けたような穴が多くみられた。断面は不整で両側にテラス部をもつ2段掘り状で、掘り直しの状況も観察できる。ただし掘り下げ中

Tab.90 第1遺構面溝状遺構一覧表

SD番号	グリッド名	主軸	長さ (m)	最大幅 (m)	深さ (cm)
SD 2	Q～S22	N-11° -W	44.5	2.3	20
SD 4	L12.N12 O12	N-10° -E	33.1	3.1	50
SD 5	J13 K～M12	N-28° -W	37.6	1.5	20
SD 6	L10	N-32° -W	16.1	0.5	15
SD 7	L9～11 M8・9	N-70° -W	3.8	0.5	15
SD 8	L～O14 P13	N-5° -E N-30° -W	41.5	1.5	15
SD 9	L～N14 N～P15	N-5° -E N-16° -E	41.2	1.4	30
SD 10	N11～13 O14	N-89° -E	29.6	1.1	38
SD 11	L15～L17 M18.N19	N-79° -E	35.0	2.4	40
SD 12	M9～11 N9～11	N-85° -E N-77° -W	16.6	1.5	16
SD 14	O16・17 M・N17	N-13° -W N-70° -E	30.7	1.1	20
SD 15	N～P17	N-14° -W	39.4	2.5	40
SD 16	M9・10	N-82° -W	12.3	0.6	8
SD 17	N15～Q15 N16	N-17° -W	9.8	0.6	15
SD 18	O16・17	N-56° -E	6.1	1.1	20
SD 19	O17	N-57° -E	6.1	0.8	20
SD 20	M18	N-20° -W	8.3	0.9	10
SD 21	M・N18	N-6° -W N-9° -E	13.1	2.0	28
SD 22	L17.M16 M17.N16	N-28° -W	26.6	1.5	45
SD 23	F7.G7	N-23° -W	12.8	1.2	24
SD 24	H4.I4・5	N-65° -E	7.4	0.5	20
SD 25	I9	N-65° -W N-15° -E	7.4	1.1	16
SD 26	I8・9	N-85° -E	3.6	0.6	8
SD 27	I8・9	N-83° -E	7.0	0.4	4
SD 28	I8	N-10° -W	8.2	0.4	8
SD 29	G3・4	N-48° -W	28.0	1.6	50
SD 30	G・H6	N-5° -W	5.5	1.0	5

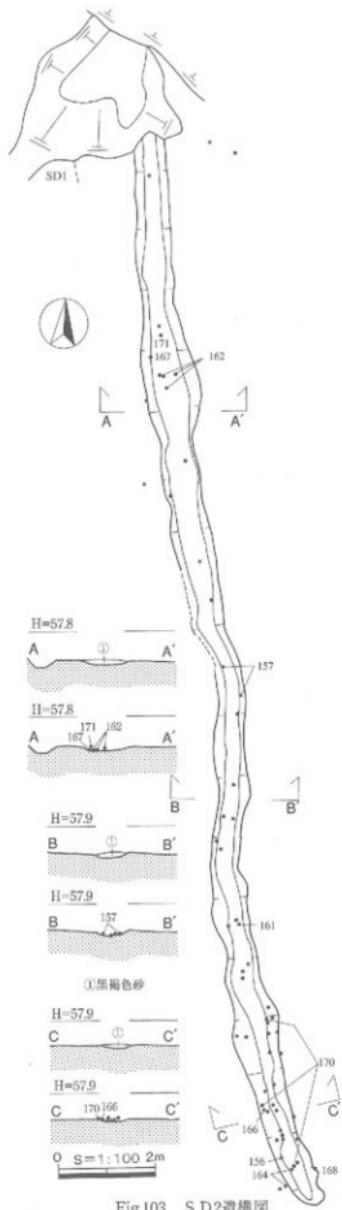


Fig.103 S D2構造図

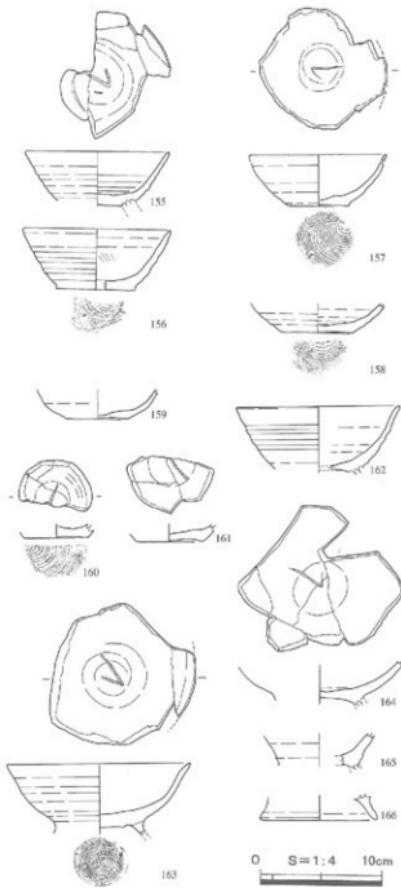


Fig.104 S D2出土遺物実測図 (1)

は砂の堆積を掘り下げるため、層序による遺物の取上げはなされていない。

埋土中から須恵器杯蓋173、杯174～181、高台付杯182～185、盤186、皿187、壺188・189、壺？190・192、長頸壺191、壺底部193・194、短頸壺195、小型壺底部196、甕口縁部197が出土した。

土師質土器は、蓋198、杯199～208、高台付杯209～215、壺216～223、綠釉陶器224、製塩土器？225・226が出土した。須恵器は173～176がやや時期が遡る。その他の杯は口縁部端部に重ね焼きの痕跡が環状に残り、軟質のもの

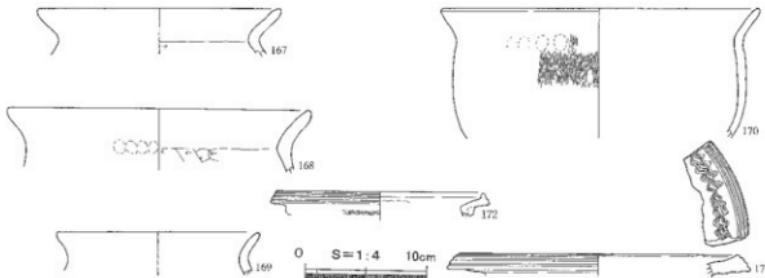


Fig.105 S D2出土遺物実測図 (2)

Tab.91 S D2出土遺物観察表

No.	Fig. PL.	遺構名	出土位置	器種	法量 (cm)	特徴	出土	色調	備考	
155	Fig.104 PL.23	遺構付近	土師質上器 高台付杯	口径 身幅 底径	φ11.8 5.0 4.5	L型縁部外側に横方向の深いナデ痕が連続する。底面に圓板条切り痕あり。内面底部にL字形のヘラ書き有り。	1mm以上の 砂粒を含む。	褐色5YR6/8	口縁部1/12残存 高台部欠損	
156	Fig.104 PL.38	S D 2	底面上	土師質上器 杯	口径 身幅 底径	φ12.0 5.0 4.5	外縁横方向のナデが深張りにみられる。 底面には圓板条切り痕。	微細な砂粒 少量含む。	灰褐色7SYR4/2	約1/5残存
157	Fig.104 PL.23	S D 2	堆土下層	土師質上器 杯	口径 身幅 底径	φ11.2 4.2 4.9	L型縁部わずかに外反。底面には圓板条切り痕。	1mm程度の長 石・石灰斑。	に赤い黃褐色10YR7/4	約1/2残存
158	Fig.104 PL.27	S D 2	遺構付近	土師質上器 杯底盤	口径 身幅 底径	φ24 5.8	内面とともに輪状のナデ。底面には圓板条切り痕。	1mm以下の砂 粒を多く含む。	④)に赤い黃褐色10YR7/4 に赤い黃褐色10YR7/4- 2SYR6/5	約1/2残存
159	Fig.104 PL.27	S D 2	遺構付近	土師質上器 杯底盤	口径 身幅 底径	φ25 5.0	外縁面に圓板条切り痕。	もう1つ、圓盤 的な砂粒少見。	褐色5YR6/8	約1/2残存
160	Fig.104 PL.27	S D 2	遺構付近	土師質上器 杯底盤	口径 身幅 底径	φ11 5.2	外縁面に圓板条切り痕。	圓盤な砂粒 を含む。	褐色5YR6/8	約1/2残存
161	Fig.104 PL.27	S D 2	堆土下層	土師質下器 杯底盤	口径 身幅 底径	φ14 5.4	外縁面に圓板条切り痕。内面底に一直 線状のヘラ書き有り。	微細な砂粒 を含む。	浅黃褐色10YR8/4	約1/2残存
162	Fig.104 PL.23	S D 2	堆土下層 高台付杯	口径 身幅 底径	φ13.4 5.5	外縁に横方向のナデが深張りに残る。高 台部欠損。	1mm以下の砂 粒を含む。	褐色7SYR2/6	口縁部1/12残存 底盤約1/2残存	
163	Fig.104 PL.23	S D 2	遺構付近	土師質上器 高台付杯	口径 身幅 底径	φ15.0 5.8	L型縁部外縁に横方向のナデ痕が連続する。底 面底部にL字形のヘラ書き有り。	1mm程度の砂 粒を多量に 含む。	に赤い黃褐色10YR7/3	口縁部1/12残存 高台部欠損
164	Fig.104 PL.23	S D 2	底面上	土師質上器 高台付杯 底部	口径 身幅 底径	φ3.5 7.3	外縁に横方向のナデ痕が深張りに残る。高 台部欠損。ただし剥離部は断続が著し い。	1-2mmの砂 粒を多く含む	浅黃褐色7SYR8/4	高台部欠損
165	Fig.104 PL.27	S D 2	埋土上器	高台付杯	口径 身幅 底径	φ26	外縁に横方向のナデ痕が深張りに残る。高 台部欠損。	1mm以下の砂 粒を含む。	褐色5YR6/8	約1/6残存
166	Fig.104 PL.27	S D 2	埋土上器 高台付杯 高台部	口径 身幅 底径	φ19 9.6	内面底とともに横方向のナデ。接合面で 削離する。表面は認められない。	1-1.5mmの砂 粒を含む。	褐色5YR6/6	1/12以下残存	
167	Fig.105 PL.27	S D 2	埋土上器 高台付杯	口径 身幅 底径	φ20 3.7	口縁部はやや歪め。内面底部以下横方 向のケツリ。	1-4mmの砂粒 を多量含む。	に赤い黃褐色7SYR5/4	1/12以下残存	
168	Fig.105 PL.27	S D 2	底面上	土師質上器 皿口縁部	口径 身幅 底径	φ24.8 5.0	内面底は歪や少々外反する。外縁部頭 部は圓盤状。	3-4mm程度 の砂粒をわ ずかに含む。	褐色7SYR6/6	1/12以下残存
169	Fig.105 PL.27	S D 2	埋土上器	土師質上器 皿口縁部	口径 身幅 底径	φ16.6 3.4	L型縁部は底や少々外反する。外縁部頭 部のナデ。頭部たる横方向のナデ。	1-5mmの砂 粒を含む。	灰褐色10YR5/2	1/12以下残存
170	Fig.105 PL.27	S D 2	底面上	土師質上器 皿口縁部	口径 身幅 底径	φ26.0 5.0	L型縁部は底や少々外反する。外縁部頭 部のナデ。頭部たる横方向のナデ。	1-5mmの砂 粒を含む。	に赤い黃褐色7SYR5/3	口縁部1/12以下残存 底盤約1/2残存
171	Fig.105 PL.27	S D 2	埋土下器	造生土器 皿口縁部	口径 身幅 底径	φ23.0 5.8	L型縁部が上方に延びて直線化し、面に3条の 凹縫文を施す。外縁部頭部に脇り付け突 起後平面方形の鉢突尖をもつ。	1mm程の石英 少量と黑墨粉 が点在する。	褐色7SYR7/6	約1/8残存
172	Fig.105 PL.27	S D 2	瓶土中	陶生土器 皿口縁部	口径 身幅 底径	φ16.8 1.9	口縁部が上方に延びて直線化し、面に3条の 凹縫文を施す。外縁部頭部に脇り付け突 起後平面方形の鉢突尖をもつ。	1mm程の石英 少量と黑墨粉 が点在する。	褐色7SYR7/6	1/12以下残存

がほとんどである。

土師質上器の杯は高台を有するものと無高台のものがあり、無高台のものは底部が回転ヘラ切りで切り離し、後に板などに押し当てる200・201・205と回転条切りによる切り離しの203・204・206に分けられる。口縁部が内湾する203があるが、他はいずれも直線状に外傾する。また、高台をもつものは、わずかに三日月状となる

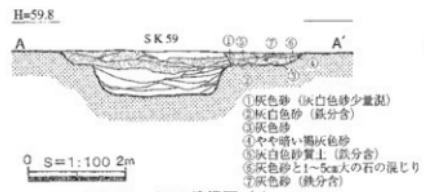
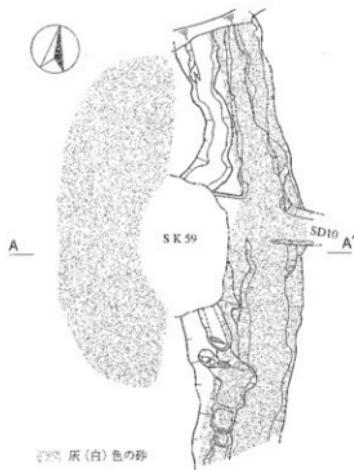
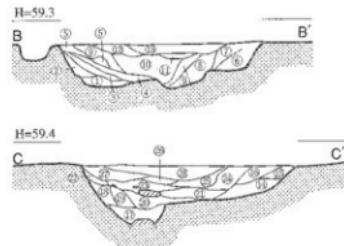


Fig.106 S D4造構図 (1)



- ⑧灰白色砂トヨー3cmのもの混じり
⑨灰白色砂 (炭化物を含む。灰白色砂少量混)
⑩灰黑色砂 (鉄分含)
⑪灰黑色砂 (鉄分含)
⑫灰白色砂とやや明るい灰白色砂の混じり
⑬やや明るい灰白色 (灰白色砂ブロック層)
⑭灰白色砂上
⑮灰白色砂 (1~1.5cmの炭化物層)
⑯灰白色砂 (1~2cm大的の炭化物)
⑰やや明るい灰白色 (鉄分多量含)
⑱1~2cm大的の炭化物層
⑲灰白色砂
⑳やや明るい灰白色砂
㉑灰白色砂 (鉄分含。灰白色砂混)
㉒灰白色砂 (鉄分含。灰白色砂混)

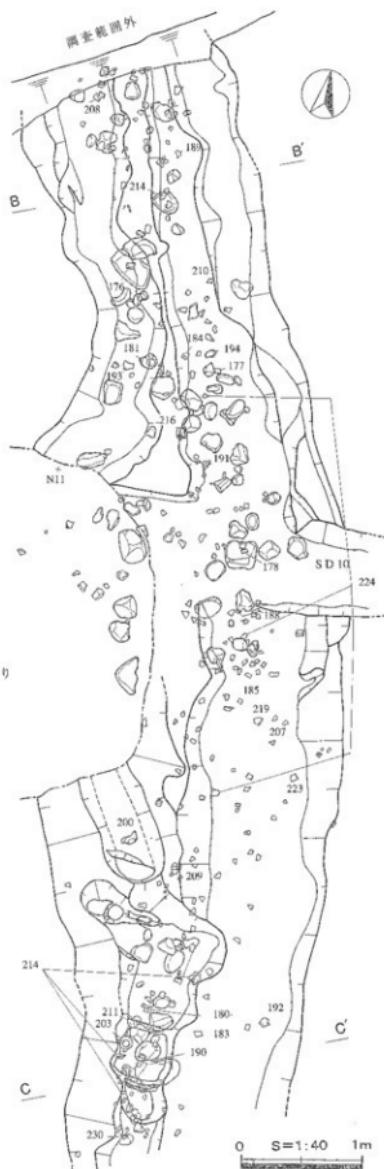


Fig.106 S D4造構図 (1)

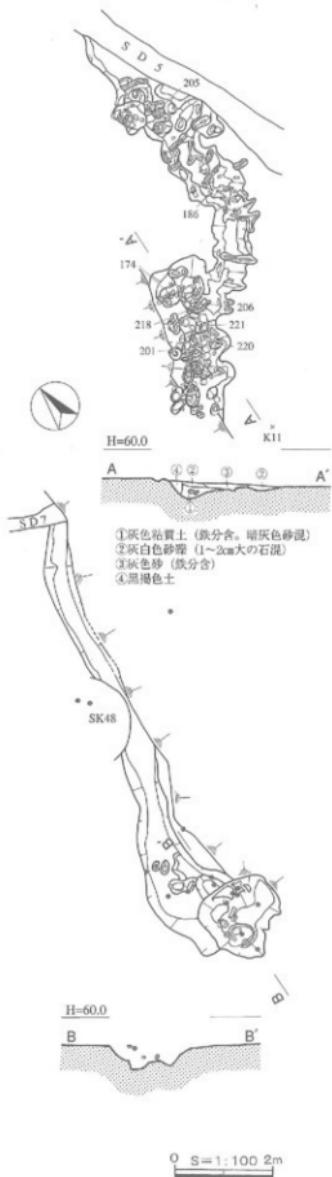


Fig.107 SD4遺構図(2)

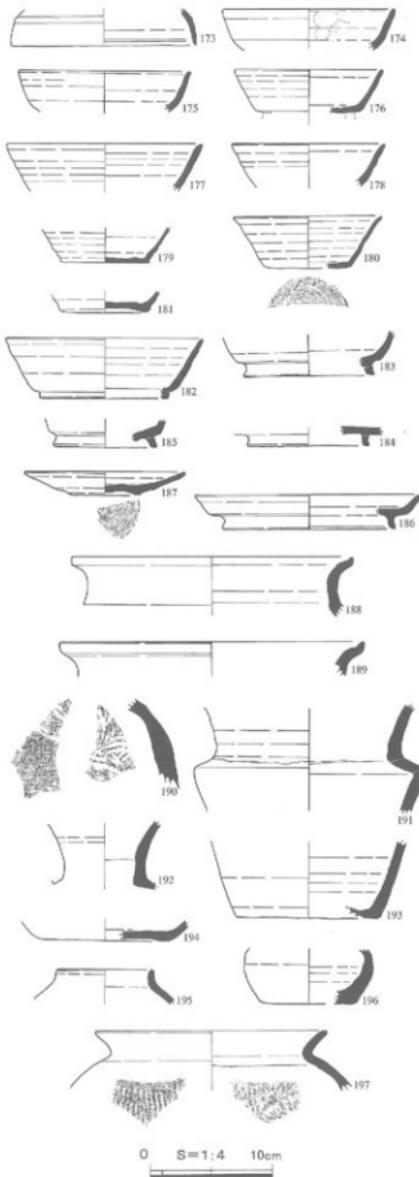


Fig.108 SD4出土遺物実測図

Table.92 SD 4 出土遺物観察表 (1)

No.	Fig. PL.	遺物名	出土位置	器種	法身(cm)	特徴	附注	色調	備考
173	Fig.106 PL.26	S D 4	底面上	須恵器 杯	口径 △ 29 高さ △ 29	内面面ともに回転ナデ。唇部が削り出されている。	砂紋なし。	灰褐色23Y5/2 内に紅褐色23Y3/2無鉛6%	約1/10残存
174	Fig.108 PL.26	S D 4	底土下層	須恵器 杯	口径 △ 34 高さ △ 34	鏡や蓋に内溝しながら立ち上がる。	1mm以下の白い砂混じる。	灰オリーブ色7.5YR5/2	約1/10残存
175	Fig.109 PL.26	S D 4	底面上	須恵器 杯	口径 △ 34 高さ △ 34	口縁がわずかに外反する。外表面は縦縞模様で凹凸が強烈で灰化色。	1mm以下の白い砂混じる。	暗灰黄色23Y5/2	約1/12残存
176	Fig.109 PL.26	S D 4	底面上	須恵器 杯	口径 △ 36 高さ △ 36	口縁部は直線状で外側する。外底面に凹凸がある。	砂紋なし。	灰褐色5Y5/1	約1/6残存
177	Fig.108 PL.26	S D 4	埋土下層	須恵器 杯	口径 △ 38 高さ △ 38	外表面は縦縞模様で頗る凹凸がある。	1mm以下の白い砂混じる。	灰褐色5Y5/1	約1/8残存
178	Fig.109 PL.26	S D 4	埋土下層	須恵器 杯	口径 △ 26 高さ △ 26	内面面ともに酒井ナデ。外表面は縦縞模様で付着有り灰化色。	1mm大の砂粒をわずかに含む。	灰褐色5Y5/1	約1/8残存
179	Fig.108 PL.26	S D 4	埋土中層	須恵器 杯	口径 △ 28 高さ △ 28	外表面は回転ナデの凹凸が大きい。外底面に凹凸があり。	砂紋なし。	灰褐色7.5Y6/1	約1/4残存
180	Fig.108 PL.26	S D 4	埋土中層	須恵器 杯	口径 △ 42 高さ △ 42	口縁ははくずかに外反する。外表面は縦縞模様でミヤナギによる凹凸が大きい。底面に凹凸があり。	1mm以下の白い砂混じる。	外) ミヤナギ色5Y3/2 内) 灰褐色23Y7/2	約1/5残存
181	Fig.108 PL.26	S D 4	埋土中層	須恵器 杯	口径 △ 62 高さ △ 62	外表面は回転ナデの凹凸がある。	1mm以下の白い砂混じる。	灰褐色5Y7/1	約1/2残存 羅山産
182	Fig.108 PL.26	S D 4	埋土中層	須恵器 高台付杯	口径 △ 49 高さ △ 49	断面四角形の高台を貼り付ける。断面は直立する。	砂紋なし。	灰褐色7.5Y5/1	約1/12残存
183	Fig.108 PL.26	S D 4	埋土中層	須恵器 高台付杯	口径 △ 10.5	断面四角形の高台を貼り付ける。	砂紋なし。	灰褐色5Y6/2	約1/12残存
184	Fig.108 PL.26	S D 4	埋土中層	須恵器 高台付杯	口径 △ 10.7	断面四角形の高台を貼り付ける。	1mm以下の白い砂混じる。	灰褐色7.5Y5/1	約1/5残存
185	Fig.108 PL.26	S D 4	底面上	須恵器 高台付杯	口径 △ 22 高さ △ 22	断面四角形の高台を直立状に貼り付ける。	砂紋なし。	灰褐色25Y7/4	約1/10残存
186	Fig.108 PL.26	S D 4	埋土中層	須恵器 杯	口径 △ 25 高さ △ 25	比較的高いハの字状の高台を貼り付ける。	砂紋なし。	灰褐色25Y7/3	約1/3残存
187	Fig.108 PL.26	S D 4	屋土中	須恵器 直	口径 △ 19 底径 △ 19	外表面は回転ナデ。	0.5mm以下の砂紋を含む。	灰褐色5Y6/1	約1/12残存
188	Fig.108 PL.26	S D 4	埋土中層	須恵器 直	口径 △ 49 底径 △ 49	口縁部がやや上方にしまり上げられ、底面は丸みがある。	0.5mm大の砂粒を含む。	灰褐色10Y6/1	約1/10残存
189	Fig.108 PL.26	S D 4	埋土下層	須恵器 口絞部付	口径 △ 28 底径 △ 28	口縁部が縦縞模様に灰化色。	0.5mm以下の砂粒を含む。	灰褐色5Y5/1	口縫部約1/10残存
190	Fig.108 PL.26	S D 4	底面上	須恵器 直	口径 △ 7.4 底径 △ 7.4	底面は丸みがある。外側面はタタキ、内面は直立状の凹凸がある。	砂紋なし。	灰褐色25Y6/2	底部1/6残存
191	Fig.108 PL.26	S D 4	底土下層	須恵器 直	口径 △ 8.7 底径 △ 8.7	内面面ともに回転ナデ。口縁部を外側に突出させる。	1mm以下の砂粒を含む。	灰褐色N6/0	肩部約1/8残存
192	Fig.108 PL.26	S D 4	埋土下層	須恵器 直	口径 △ 5.5 底径 △ 5.5	内面面ともに回転ナデ。口縁部を外側にして接合する。	砂	灰褐色25Y6/1	肩部約1/2残存
193	Fig.108 PL.26	S D 4	埋土中層	須恵器 直	口径 △ 5.2 底径 △ 5.2	内面面ともに回転ナデ。	0.5mm以下の砂粒を含む。	灰褐色N5/1	1/12以下残存
194	Fig.108 PL.26	S D 4	埋土中層	須恵器 直	口径 △ 11.6 底径 △ 11.6	内面面ともに回転ナデ。	砂	灰褐色10Y4/1	約1/3残存
195	Fig.108 PL.26	S D 4	底面上	須恵器 直	口径 △ 18 底径 △ 18	外表面は回転ナデ。	0.5mm以下の砂粒を含む。	灰褐色5Y5/1	約1/8残存
196	Fig.108 PL.26	S D 4	埋土中	須恵器 直	口径 △ 4.5 底径 △ 4.5	内面面ともに回転ナデ。内面は回転ナデの凹凸がある。	0.5mm大の砂粒を含む。 3mm以上の砂粒有り。	灰褐色5Y4/1	約1/10残存
197	Fig.108 PL.26	S D 4	埋土上層	須恵器 直	口径 △ 4.8 底径 △ 4.8	口縁部は内側して接合する。外表面は方向の平行タタキ。内面平行の凹凸がある。	0.5mm以下の砂粒を含む。 3mm大の砂粒有り。	灰褐色7.5Y5/1	約1/9残存

209、逆の三日月状となる210・213、三角形状の212、直立する足高台の211、ハの字状に大きく開くわゆる足高台となる215がある。214は不整な高台である。また198の蓋、199の杯はいずれも濃い赤彩が施され、時期はやや遅るとみられる。土師質土器の蓋は県内では鳥取市の古市遺跡(1)がある。京都産の綠釉陶器224も出土しており、公的な施設あるいは莊園などからの出土が多い。

この224は層年代を推定させるもので、京都では9世紀後半(2)の年代が当たられ、これは近年における他の遺物の年代観とも矛盾しない。また、同じく畿内から搬入された遺物としては、181の須恵器の杯がある。これは篠山産の須恵器で10世紀前半(3)頃のものである。したがって、S D 4 の遺物の年代観は、搬入品から考えて、10世紀の前半まで下ることが予想される。ただしこれらが10世紀後半以降まで下るのかについては、該当する搬入品がないこと、これまでの在地土器の年代観が搬入品を中心としていることから今の段階ではっきりとはし

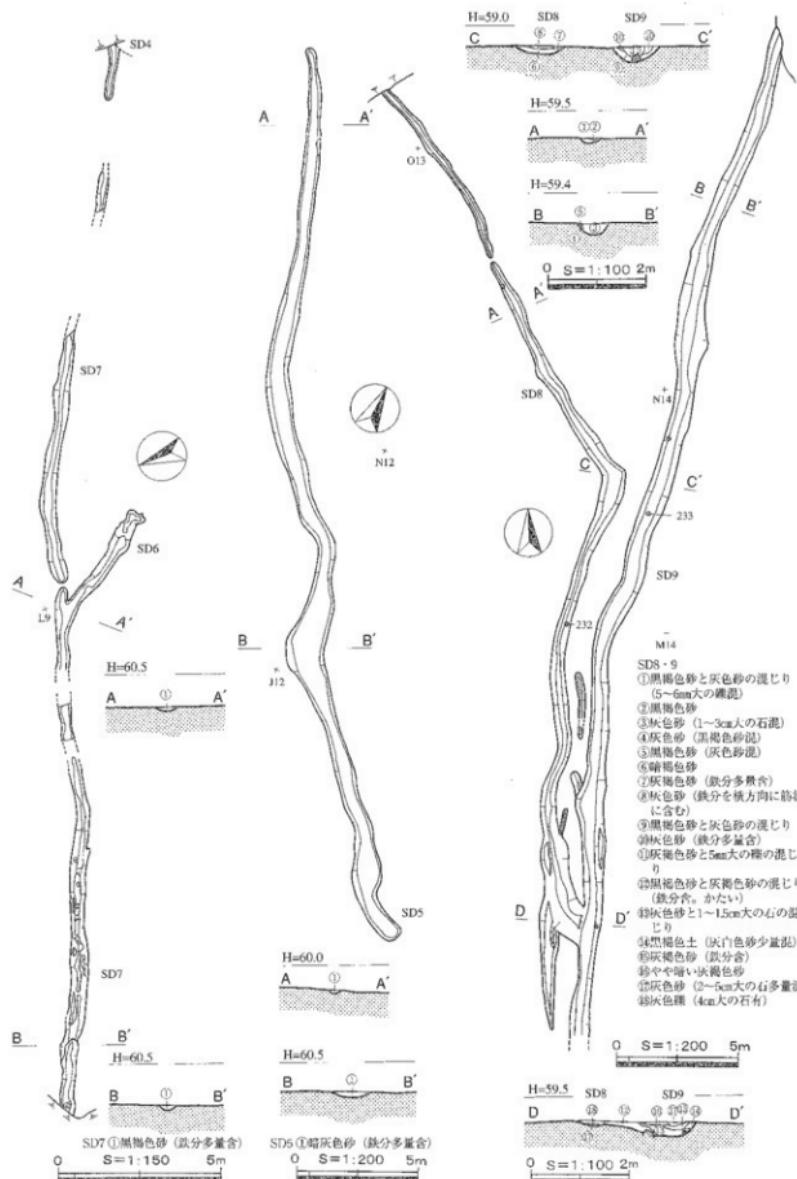


Fig.109 S D 5 · 6 · 7 · 8 · 9 遷移図

Tab.93 SD 4 出土遺物類表 (2)

No.	Fig. PL.	遺物名	出土位置	器種	法度(cm)	特徴	船上	色調	備考
198	Fig.110 PL.28	S D 4	埋土中	土師質土器 口径 蓋高	径15.6 △ 1.6	内外面赤茶。	1mの砂粒混 じる。	浅黄褐色10YR8/3	約1/8残存
199	Fig.110 PL.28	S D 4	埋土中	土師質土器 口径 蓋高	径13.4 △ 3.0	I縫部内外面赤茶。	砂粒なし。 に赤・黄褐色10YR5/3	I縫部1/2以下残存	
200	Fig.110 PL.27	S D 4	埋土下層	土師質土器 口径 蓋高	径15.0 △ 4.4 9.5	外底面輪軸へラ切り後板目。全体に輪 軸が著しい。	1m以下砂 粒混じる。	黄褐色10YR5/6	口縫部1/3欠損
201	Fig.110 PL.27	S D 4	埋土下層	土師質土器 口径 蓋高	径12.0 △ 3.8 2.5	外底面輪軸へラ切り後板目。輪底压痕 あり。内底面一方削ナデ。	0.5m大の砂 粒少量。	褐色7.5YR6/6	口縫部1/2欠損
202	Fig.110 PL.27	S D 4	埋土中層	土師質土器 口径 蓋高	径12.0 △ 6.4	山縫部は外傾する。外底面輪軸へラ切り 後板目か。内底面一方削ナデ。	黒緑色砂粒を含む。	褐色5YR7/8	完存
203	Fig.110 PL.27	S D 4	埋土上層	土師質土器 口径 蓋高	径10.7 △ 4.3 4.4	山縫部内溝する。外底面に輪軸系切 込み。	1~2m大の 砂粒を多量に 含む。	外) 明褐色2.5YR5/8 内) 明褐色2.5YR5/8~ 灰褐色2.5YR5/1	口縫部わずかに欠損
204	Fig.110 PL.27	S D 4	砂層中	土師質土器 口径 蓋高	径10.6 △ 6.2 1.9	外側ナデによる凹凸が顕著。表面に輪 軸系切込み。内底面にレ、ア状のへ き裂がある。	0.5~1mの砂 粒を含む。	浅黄褐色5YR8/6	口縫部1/3欠損
205	Fig.110 PL.28	S D 4	埋土中層	土師質土器 口径 蓋高	径15.0 △ 4.9 10.4	外底面輪軸へラ切り後板目。	1~2m大の 砂粒を含む。	に赤い黄褐色10YR7/3	約1/6残存
206	Fig.110 PL.28	S D 4	埋土下層	土師質土器 口径 蓋高	径14.2 △ 5.0 7.8	内外面輪軸に後にナデの擦が入る。	1~2m大の 砂粒を含む。	黄褐色10YR8/6	約1/3残存
207	Fig.110 PL.28	S D 4	埋土上層	土師質土器 口径 蓋高	径10.9 △ 3.4	外底面ナデによる凹凸が顕著。	黒緑色砂粒を含む。	褐色2.5YR6/6	約1/10残存
208	Fig.110 PL.28	S D 4	埋土中層	土師質土器 口径 蓋高	径12.7 △ 7.2	外底面輪軸系切込み。	0.5mの砂粒 を含む。	褐色7YR6/6	約1/5残存
209	Fig.110 PL.28	S D 4	埋土中層	土師質土器 口径 蓋高	径14.8 △ 5.5	外底面輪軸へラ切り。断面ハの字状 の高台で隠す付ける。	1mの凸い砂 粒混じる。	に赤い黄褐色7.5YR5/4	約1/6残存
210	Fig.110 PL.28	S D 4	埋土中層	土師質土器 口径 蓋高	径14.8 △ 5.5 7.0	底部は輪軸へラ切りから断面三角形状 が隠す付ける。高台で隠す付ける。	1m以下白い 粒混じる。	に赤い黄褐色10YR7/4	約1/2残存
211	Fig.110 PL.28	S D 4	埋土上層	土師質土器 口径 蓋高	径3.8 △ 3.7	外底面輪軸系切込み。断面ハの字状の やや高い高台を隠す付ける。	1m以下の砂 粒を含む。	明褐色10YR6/6	高台部約1/3欠損 底面はほぼ完存
212	Fig.110 PL.28	S D 4	埋土中	土師質土器 口径 蓋高	径2.1 △ 7.3	立ち上がりは黒刷毛。外底面に断面ハ の字形の高台を隠す付ける。	1mの砂粒 を含む。	褐色10YR4/4	高台部約1/8残存
213	Fig.110 PL.28	S D 4	埋土中	土師質土器 口径 蓋高	径3.0 △ 6.4	外底面輪軸系切込み断面ハの字形の高 台を隠す付ける。	1m以下砂粒 を含む。	に赤い黄褐色10YR6/4	高台部約1/6残存
214	Fig.110 PL.28	S D 4	埋土上層	土師質土器 口径 蓋高	△ 3.8	殆り付け部あり。	1m以下砂粒 を含む。	に赤い黄褐色10YR7/4	-
215	Fig.110 PL.27	S D 4	埋土中層	土師質土器 口径 蓋高	径13.4 △ 8.5	断面ハの字状の貼付け高台。内底面が 磨り上げる。口縫部の輪軸ナデが断 面に残る。	1~5m大の 砂粒を含む。	浅黄褐色10YR8/4	約1/2残存
216	Fig.110 PL.28	S D 4	埋土上層	土師質土器 口径 蓋高	径23.0 △ 5.1	口縫部は外反する。内外面ともに横 方向のナデ。内面輪軸部以下ケツリ。器 底が薄い。	1m以下の砂 粒を含む。	褐色10YK4/4	約1/8残存
217	Fig.110 PL.28	S D 4	埋土中	土師質土器 口径 蓋高	径32.6 △ 5.1	口縫部は外側ともに横方向のナデ。	1m以下の砂 粒を多量に含む。	に赤い黄褐色10YK4/4	約1/10残存
218	Fig.110 PL.28	S D 4	埋土下層	土師質土器 口径 蓋高	径34.0 △ 5.4	口縫部は外反する。外側ともに横方 向のナデ。内面輪軸部以下ケツリ。	1m以下の砂 粒を多量に含む。	外) 黑褐色10YR7/4 内) 明褐色10YR6/4	約1/10残存
219	Fig.110 PL.28	S D 4	底面	土師質土器 口径 蓋高	径28.4 △ 5.0	口縫部は外側ともに横方向のナデ。	1mの砂粒 を含む。	褐色10YR4/4	約1/10残存
220	Fig.110 PL.28	S D 4	埋土上層	土師質土器 口径 蓋高	径34.0 △ 4.9	口縫部は外側ともに横方向のナデ。	1m大の砂粒 を多く含む。	に赤い黄褐色10YR6/4	約1/10残存
221	Fig.110 PL.28	S D 4	埋土上層	土師質土器 口径 蓋高	径32.2 △ 4.3	外底面輪軸部以下トケツリ。口縫部は内 面輪軸部以下トケツリ。外輪門輪軸に厚く泥 付着性。	1~2m大の 砂粒を含む。	に赤い黄褐色10YR7/3	約1/8残存
222	Fig.110 PL.28	S D 4	埋土中	土師質土器 口径 蓋高	径30.0 △ 4.5	外底面輪軸部以下方向のハケ日。炭化物 付着。内面輪軸方向のハケ日。	0.5~1m大の 砂粒を多く含む。	外) 黑褐色10YR2/3 内) 明褐色7.5YR5/8	約1/8残存
223	Fig.110 PL.28	S D 4	底面	土師質土器 口径 蓋高	径26.0 △ 4.9	口縫部はやや外反する。内底面が 磨り上げる。口縫部は内底面に厚く泥付 着性。	2mの大砂 粒を多く含む。	外) 黑褐色10YR2/1 内) に赤い黄褐色10YR5/4	約1/5残存
224	Fig.110 PL.39	S D 4	埋土中層	土師質土器 口径 蓋高	径15.6 △ 4.5	山廻転とび斜面部分付近にハ ニカタ。身上は上部は赤、下部は褐色の輪 軸がかかる。輪高古とされる。	灰褐色5YR6/1	約1/5残存 京都産	
225	Fig.110 PL.28	S D 4	底面 I	製塗土器 蓋高	△ 2.6	一次底面開拓者で加工さる。あるいは は要塗工で加工。	2~4cmの砂 粒を含む。	に赤い黄褐色10YR6/4 内) 明褐色10YR8/2	約1/8残存
226	Fig.110 PL.28	S D 4	埋土中	製塗土器 蓋高	△ 2.6	手づくね成形。	1m以下の砂 粒を含む。	褐色7.5YR7/6	約1/6残存
227	Fig.110 PL.28	S D 4	底面 II	土師質土器 蓋高	△ 2.6	口縫部は下に低張し、3本以上の 輪底孔で支えられる。	1mの砂粒 を含む。	に赤い黄褐色10YR6/3	約1/10残存
228	Fig.110 PL.28	S D 4	埋土中	土師質土器 蓋高	径17.4 △ 2.5	口縫部下に下に低張し、上部には3 本以上、下部はやや斜めに突出して、所 に3つの開洞孔を持つ。	1m以下の砂 粒を含む。	褐色5YR7/6	1/12以下残存
229	Fig.110 PL.28	S D 4	埋土中	土師質土器 蓋高	△ 4.5	口縫部は下に低張し、面上には2 本以上、蓋高はもつて、表面が著しく輪軸は不 規則。	1m以下の砂 粒を多く含む。	に赤い黄褐色7.5YR7/4~ 7.5YR8/6	約1/8残存
230	Fig.110 PL.28	S D 4	埋土下層	土師質土器 蓋高	△ 4.9	複数口縫と、口縫部は内底面とともに口 縫部は内底面に輪軸が付着する。	1m以下の砂 粒を多く含む。	褐色7.5YR7/6	約1/8残存

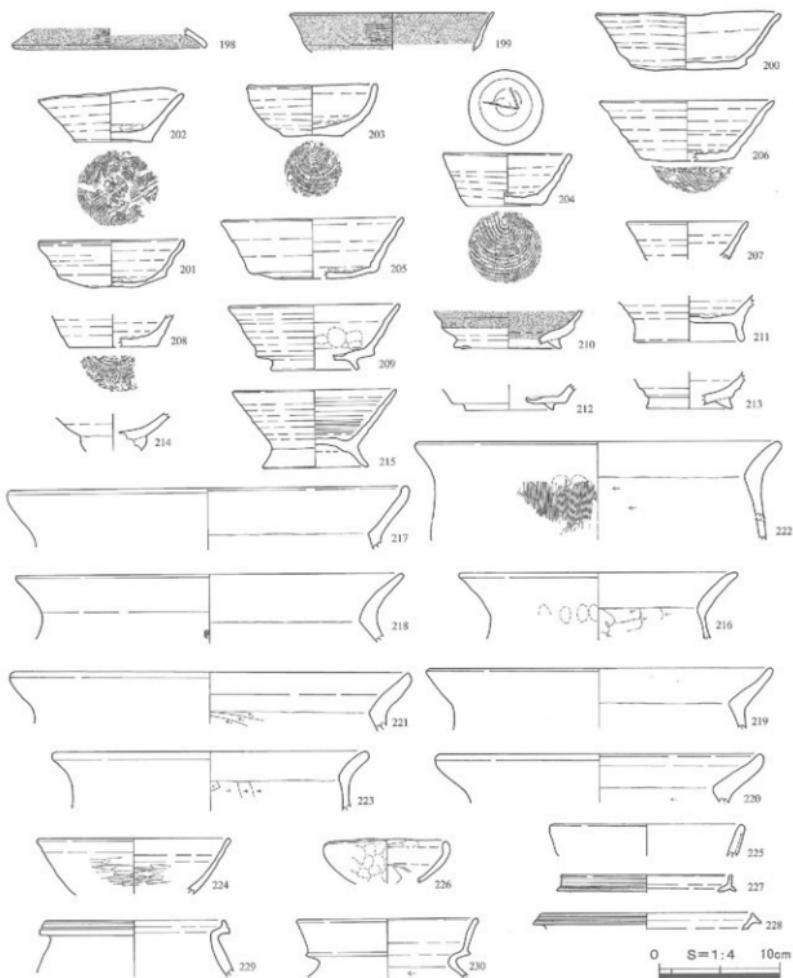
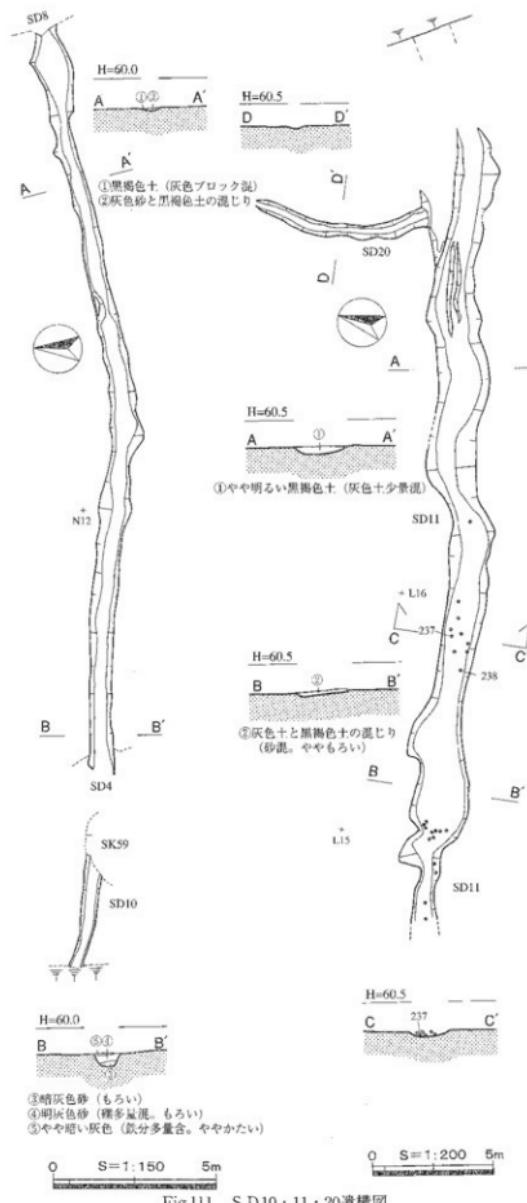


Fig.110 S D 4 出土遺物実測図

ない。ただし、10世紀後半の近江産縫結陶器は県内でも出土があり、これがみられないこと、これまでの在地土器の年代観などから、11世紀までは下らないと推測しておきたい。また製塩土器の可能性のある225・226もある。いずれも二次焼成が顯著な土器であるが、225は不明ながら226は泊村の寺戸第1遺跡のS S 1 P 1から出土した焼塩土器(4)に類似する。この土器の時期は8世紀頃と他の遺物の年代よりも古いが、赤彩されている土師質土器198・199もあり、これらと時期的には合致する。遺物の性格から考えてもこれが焼塩土器でも矛盾はないが、小片であるため、現段階では類例の増加を待ちたい。これ以外に、時期が遅る遺物として、弥生時代中期後半の甕227~229、古墳時代前期の土師器壺230がある。弥生時代中期後半のものは第2遺構検出面での時期であるが、



古墳時代前期のものは、遺構は確認できていない。今後、付近から確認できる可能性を示す。

遺物の出土状況は、いずれも凹凸の大きい砂質の埋土中に小片として混入していた。したがって、この溝に水が流れていたことは疑いがない。この溝は S D 15 の約 54~55m 西側に並行し、同じ程度東には S D 2 が位置する。またこれに直交する方向にやはり縄文陶器片が出土した S D 12 があり、同時期と考えられる。したがって S D 4 は実際に水が流れおり、水路としての役割と推測される。

S D 5 (Fig.109 · 112 Tab.90 · 94 PL29)

M12~K13グリッドに位置する。S D 4 と重複し、新しい。埋土は単層で暗灰色の砂を主体とする。ほぼ直線状ではあるが、南側では緩やかに東に向かう。遺物は土師質土器の高台付杯231が出土した。断面三角形形状に低い高台が貼り付けられる。平安時代中期の所産である。他の溝に比べると出土遺物が少ないと認め、断定はできないが、平安時代中期以降の遺構であろう。

S D 6 · 7 (Fig.109 Tab.90)

M 9 ~ L 11 グリッドに位置する。S K 36 · 37 などと重複するが、これらよりも古い。S D 12 · 16 とほぼ並行する。ただし遺物が出土していないため、これらの溝と同時期かについては判断ができない。

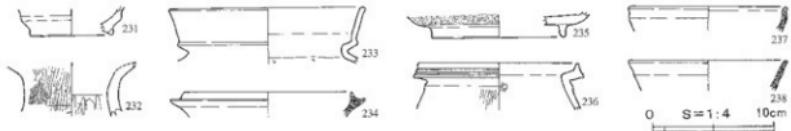


Fig.112 S D5・8・9・10・11出土遺物実測図

Tab.94 S D5・8・9・10・11出土遺物観察表

No.	Fig. PL.	遺物名	出土位置	器種	法蓋(cm)	特徴	地上	色調	備考
231	Fig.112 PL.29	S D 5	埋土中	土師質土器 高台付杯 蓋部	基高 △ 23 底径 幅 6.6	外腹立ち上がりはナデによる凹凸が著 しい。	0.5m以下の 砂紋を含む。	褐色5YR6/8~灰褐色N6/0	1/12以下残存
232	Fig.112 PL.29	S D 8	表面土	弥生土器 高杯柱部	基高 △ 4.4	外腹弧曲のやや低いハテ日。縫合よ び斜め方円の縫割。内面統り良。有 縫合部に麻斑。	微細な砂紋 をわずかに含む。	灰褐色7.5YR5/4	約1/8残存
233	Fig.112 PL.29	S D 9	後出土面	十輪器 蓋上部	口径 基高 16.0 蓋高 △ 4.6	複合口部。内外縁ともに横方にナデ。 内面縫割以下右方向のケズリ。	2mm以下の砂紋 を多く含む。	褐色7.5YR6/8	約1/10残存
234	Fig.112 PL.29	S D 10	表面土	土師質 杯身	口径 基高 16.0 蓋高 △ 2.1	内外縁ともにヨコナデ。	0.5m以下の 砂紋を含む。	灰褐色5YR6/1	1/12以下残存
235	Fig.112 PL.29	S D 10	表面土	土師質土器 高台付盤	基高 △ 18 高台付盤か 高台埋堆11.0	直立の高台が貼り付けられる。外腹立 ち上部に縫割が見受けられる。	0.5m以下の 砂紋を含む。	褐色7.5YR6/8	約1/6残存
236	Fig.112 PL.29	S D 10	底面上	弥生土器 蓋上部	口径 基高 13.0 蓋高 △ 3.8	縫割部が上方に延び、両に2本の 縫割文を残す。内外縁ともに横方向の ハテ日。	1mm以下の砂 紋を含む。	灰褐色7.5YR6/4	1/12以下残存
237	Fig.112 PL.29	S D 11	底面上	須恵器 杯	口径 基高 13.0 蓋高 △ 2.0	外腹面縫割部を強くナデして、屈曲さ せる。	微細な砂紋を わずかに含む。	灰褐色5YR5/1	約1/10残存
238	Fig.112 PL.29	S D 11	表面土	須恵器 杯	口径 基高 △ 2.5	口縁部は直線状に外傾する。内外縁と てもヨコナデ。	微細な砂紋を わずかに含む。	灰褐色7.5YR6/1	1/12以下残存

S D 8・9 (Fig.109・112 Tab.90・94・109・112 PL.18・29)

L 14～P 13グリッドに位置する。調査区の中央付近ではS D 8が西側、S D 9が東側ではば並行しているが、N 14グリッド付近でS D 8は西側に方向を変える。いずれも断面は不整形形状で凹凸が多い。埋土は灰色砂で、水が流れていた様相を呈する。遺物はS D 8から弥生土器の高杯柱部232、S D 9からは土師器の堀口縁部233が出土した。232は弥生時代中期後半、233は古墳時代前期の所産である。232については下層の第2遭検出面で該当する時期の遺構が検出されているが、233については該当する遺構は検出されていない。遺構の時期は古墳時代以降と考えられる。

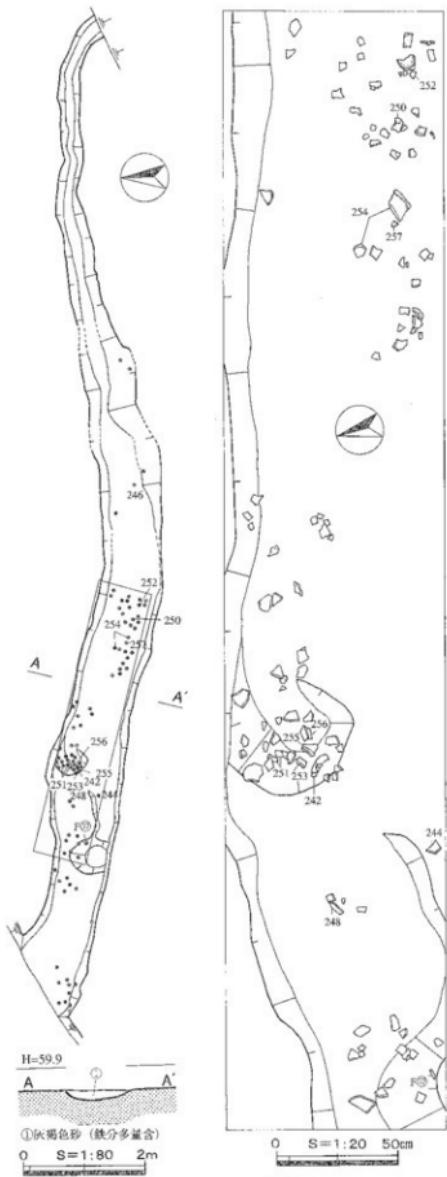
S D 10・11・20 (Fig.111・112 Tab.90・94 PL.29)

S D 10はN 11～O 14グリッドに位置する。東端でS D 4・8、S K 59と重複している。S D 8との新旧関係は不明であるが、S D 4、S K 59よりも古い。S D 12と主軸方向は類似する。断面は逆台形状で比較的深い。遺物は須恵器杯身234、土師質土器の高台付盤235、弥生土器蓋236が出土した。236は弥生時代中期後半、234はかえりが短く、T K 209併行の古墳時代末(5)とみられる。235は概ね奈良時代の所産であろう。

S D 11・20はL 16～M 18グリッドに位置する。S D 11は東西方向、S D 20はそれに直交するが、直接の重複関係はみられない。付近は上面が大きく掘削されており、遺存状況は悪い。遺物は溝の西側と中央付近にある程度まとまりがみられる。図化し得たものは少なく、須恵器の堀口縁部237・238である。237は高広Ⅲ期(6)、238は高広Ⅲ期の所産である。Ⅲ期は7世紀中葉～末、Ⅲ期は7世紀末～8世紀前葉に比定されている。S D 11は時期的にはS D 4やS D 12よりも遅るとみられる。

S D 12 (Fig.113・114 Tab.90・95 PL.18・29・39)

N 9～14グリッドに位置する。東西方向を向ぐが、S K 51・54、P 415・445と重複する以外は、溝との重複関係はみられない。遺存状況は悪い。埋土は単層で、砂が堆積している。遺物は溝の数ヶ所からかなり細片で広がる状況で出土している。図化し得た遺物は、須恵器杯239～243、壺底部244・245、土師質土器杯246～251、高台付杯252・253、壺254～256、縫割陶器片257である。須恵器の杯は口縁端部に重ね焼きの痕跡が環状にみえ



るもので、焼成が悪い軟質のものである。外面に回転台整形のナデ痕跡が顕著に残る。243をみると底面は回転糸切り痕跡が顕著に残る。これに対し、土師質上器の杯は、底面が回転ヘラ切り後板に押し当てて底面を平坦にしている。これは伯耆国序の第2様式期(7)に類似がある。高台付杯は、比較的高い高台の高い252と三角形状の低い高台をもつ253がある。甕は、口縁部がいずれもくの字状に外反するタイプで、254は口縁部が長く端部に凹線状の窪みをもつ。瀬戸内付近によくみられる(8)。体部まで遺存しているものはないが、比較的短胴の255・256は口縁部が短く外反するもので、甕の口縁部が退化したような形状である。体部は比較的長めで、甕の口縁部を退化させたような形状である。歴年代に近い資料は緑釉陶器257で、土師質の胎土に薄い黄緑色の釉薬がかかるもので、京都産の9世紀半ば頃の年代が与えられる。在地土器をみてこの年代よりも下る遺物はみられないことから、上記の年代で大過はないと考えられる。SD 4と重複関係はないが、向きはほぼ直交していることや時期的にほぼ近いことなどから、SD 4と同様に水が流れおり、区画の役割をなしていたと考えたい。

SD 14・17・22

(Fig.115・116 Tab.90・95 PL43)

M17~O15グリッドに位置する。

SD 14は北部分で西方向に向きを変え、連続せずに途切れながら遺存する。遺構の西側から黒曜石の石器S 6が出土した。

SD 17・22は南から北方向に流れる。北側で2本の流れになる。また西側からSD 9がSD 22と重複しているが、切り合い関係は確認し得ず、ほぼ同時の遺構である可能性がある。遺構には比較的深い部分と浅い部分があり、一定しない。埋土は灰白色の砂を中心で、水の流れている様子がうかがえる。

時期の手がかりになる遺物はS 6のみで、遺構面からしても時期は不明瞭である。

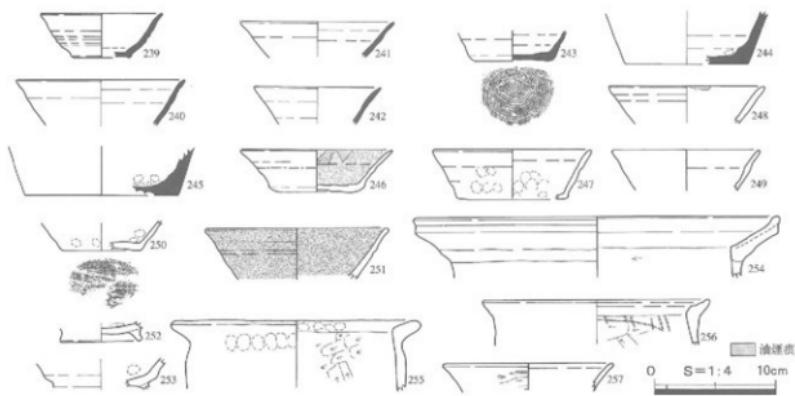


Fig.114 S D12出土遺物実測図

Tab.95 S D12・14出土遺物観察表

No.	Fig. PL.	遺物名	出土位置	器種	法長(cm)	特徴	鉢上	色調	備考
239	Fig.114 PL.29	燒造器 杯	堆土下層	口徑 器高 底径	約10.0 3.7 約4.7	口縁部がわずかに外反する。外面部 縁部にコナゲが顯著に残る。外面部 縁部に灰化色。	1mm以下の砂 粒をわずかに含む。	灰青色25YR7/2	1/12以下残存
240	Fig.114 PL.29	燒造器 杯口盤部	堆土下層	口徑 器高 底径	約10.0 4.7 △ 2.9	口縁部が外傾する。外面部 縁部にコナゲが顯著に残る。外面部 縁部に灰化色。	1mm以下の砂 粒を含む。	灰色5Y6/1	1/12以下残存
241	Fig.114 PL.29	燒造器 堆土下層	口徑 器高 底径	約12.6 5.0 △ 2.9	1mmの砂粒がわずかに外反する。外面部 縁部にコナゲが顯著に残る。 外面部縁部状に灰化色。	織紋な砂粒 を含む。	灰白色25Y7/1	1/12以下残存	
242	Fig.114 PL.29	燒造器 堆土下層	口徑 器高 底径	約10.4 5.0 △ 3.1	1mmの砂粒はわずかに外反する。外面部 縁部にコナゲが顯著に残る。	1.5mm以下の 砂粒を含む。	灰白色2.5Y7/1~灰色 5Y5/1	1/6残存 胎土分析試料	
243	Fig.114 PL.29	燒造器 堆土下層 底盤部	器高 底径	△ 2.6 6.0	外底盤に圓弧系切り目。口縁部内外面 ともにコナゲ。	0.5mm以下の 砂粒を含む。	灰黄色25YR7/2 内) 燃色7.5YR6/8	約1/2残存	
244	Fig.114 PL.29	燒造器 堆土下層 底盤部	器高 底径	△ 4.3 10.2	内底面ともに横方向のナデ。	1mm以下の砂 粒を含む。	灰白色25YR7/1	約1/4残存 胎土分析試料	
245	Fig.114 PL.29	燒造器 堆土下層 底盤部	器高 底径	△ 4.0 10.2	内底面ともに横方向のナデ。	0.5mm以下の 砂粒を含む。	灰黑色25YR6/1	約1/5残存	
246	Fig.114 PL.29	堆土上層 杯	口徑 器高 底径	約12.5 約12.0 △ 7.8	外底部斜面へ切り後板目。内底面 内底面基準に他の痕跡無。	1mm以下の砂 粒を含む。3mm の粗粒を有り。	外) にぶい黄褐色10YR7/2 内) 淡褐色10YR6/8	約1/4残存 胎土分析試料	
247	Fig.114 PL.29	堆土上層 杯口盤部	口徑 器高 底径	約12.8 約13.0 △ 7.4	内底面ともに横方向のナデ。盤部に油 脂痕は無いが外面部の凹凸や大きさ は底盤部は軽く厚めか。	1mm以下の砂 粒を含む。	外) にぶい黄褐色10YR7/4 内) 淡褐色10YR6/6	約1/6残存	
248	Fig.114 PL.29	堆土下層 杯口盤部	口徑 器高 底径	約12.8 約13.0 △ 7.4	内底面ともに横方向のナデ。盤部に油 脂痕は無いが外面部の凹凸や大きさ は底盤部は軽く厚めか。	0.5mm以下の 砂粒を含む。	黄褐色7.5YR7/8	約1/5残存	
249	Fig.114 PL.29	堆土下層 杯口盤部	口徑 器高 底径	約12.2 約13.0 △ 7.8	内底面ともにやや大きい横方向のナデ。 盤部は滑らかがやや凸凹大きい。	0.5mm以下の 砂粒を含む。	明赤褐色5YR5/6	約1/5残存	
250	Fig.114 PL.29	堆土下層 杯口盤部	口徑 器高 底径	△ 2.5 約6.0 △ 6.0	内底面斜面へ切り後板目。内底面一 方向のナデ。	1.5mm以下の砂 粒を含む。	外) にぶい黄褐色7.5YR5/4 内) にぶい黄褐色10YR4/3	約1/3残存	
251	Fig.114 PL.29	堆土下層 土師質土器 杯	口徑 器高 底径	約15.0 約15.0 △ 4.2	1mmの砂粒はわずかに外反。内底面ともに 横方向のナデ。	3mm以下の砂 粒を含む。	明赤褐色5YR5/8	1/12以下残存	
252	Fig.114 PL.29	堆土下層 土師質土器 底盤付杯	器高 底径	△ 1.6 6.8	外底面ハの字状の凸台を添り付ける。 内底面に滑溜感有。	1.5mm以下の 砂粒を含む。	底盤約1/2残存 胎土分析試料	底盤約1/2残存 胎土分析試料	
253	Fig.114 PL.29	堆土下層 土師質土器 底盤付杯	器高 底径	△ 2.6 6.8	内底面立ち上がりは横方向のナデによる 凹凸大きい。内底面滑舌により調整不 用。	3mm以下の砂 粒を含む。	黒褐色7.5YR3/1 内) 褐色7.5YR6/6	約1/6残存	
254	Fig.114 PL.29	堆土下層 土師質土器 底盤付杯	口徑 器高 底径	約3.0 約3.0 △ 3.0	1mmの砂粒に走るも、中央部がくぼむ。 内底面底部以下アズキ、外底面には浮き槽。	2mm以下の砂 粒を含む。	外) 黑褐色2.5YR2/1 内) にぶい黄褐色30YR6/4	約1/10残存 胎土分析試料	
255	Fig.114 PL.29	堆土下層 土師質土器 底盤付杯	口徑 器高 底径	約2.0 約3.8 △ 3.8	外底面横筋方向の凹凸大きい。内底面 底盤部底面に灰化色。底盤方 面のケズリ、外底面灰化色付着。	1mm以下の砂 粒を含む。	褐化25YR4/4	約1/10残存	
256	Fig.114 PL.29	堆土下層 土師質土器 底盤付杯	口徑 器高 底径	約18.6 約3.7	土器部の模成施用の青緑色の動植物を 含む。	1.5mm以下の砂 粒を含む。	灰黃褐色10YR6/2	約1/10残存	
257	Fig.114 PL.39	堆土下層 綠釉陶器	口徑 器高 底径	約13.8 約3.5 △ 3.5	土器部の模成施用の青緑色の動植物を 含む。	青	浅黃褐色10YR8/4	1/12下層 京都産	
56	Fig.116 PL.63	遺物の端	石器			片側に滑溜な細縦溝を有す。	石材: 黒曜石	完存	

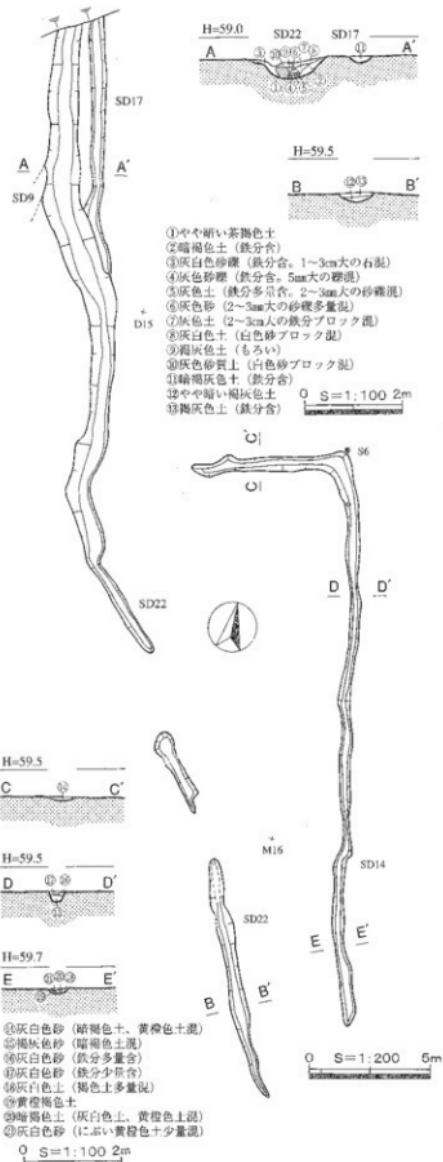


Fig.115 S D 14・17・22遺構図

SD 15・18・19 (Fig.117・118 Tab.90)

· 96・97 PL.17・30・31・33・38

N ~ P 17グリッドに位置する。2区のSD4と3区のSD2の中間に位置し、SD4 - SD15、SD2 - SD15間はともに54~55mを測る。断面は浅い皿状ではあるが、部分的な凹凸は大きく、石が抜けたようである。基本的に砂の層の単層であるが、遺物は完存の土器や墨書き土器が出土している。

須恵器は、杯258~269、壺270、土師質土器杯271~287、高台付杯288・289、壺290、鉢291である。須恵器・土師質土器はSD2・4・12のいずれも大きな差はない。異なる点は、須恵器では264のような浅い杯または皿や270のような壺が出土していること、267のような墨書き土器がみえることである。この墨書きは内底面に記され、「□□田」という3文字が判読できる(9)。二字目は「イ」と考えられるが、つくりが欠損する。

これらの須恵器は西は松江市の古曾志窯跡群(10)、東は郡家町の山田窯(11)にその類例を求めることができる。胎土分析で比較したところ、古曾志窯跡群とかなり近い値で、搬入された可能性が高いという結果を得た。(第8章 特論(2)三辻利一「茶畠六反田遺跡出土土器の蛍光X線分析」参照)

これらの遺物の年代観は古曾志窯跡群では相対的に10世紀の前後とされており、本遺跡の年代観とも大きく異ならないと考えられる。時期の異なる遺物としては291で、南側の遺構の延長上からの出土である。292・293は弥生土器で、292は弥生時代中期後半、第2遺構後出面での遺構と同じ時期である。

S D 18・19はいずれもSD15の西側でSD14との間にあり、東西方向に並行する。いずれも断面は浅い皿状である。

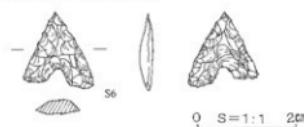


Fig.116 S D 14出土遺物実測図

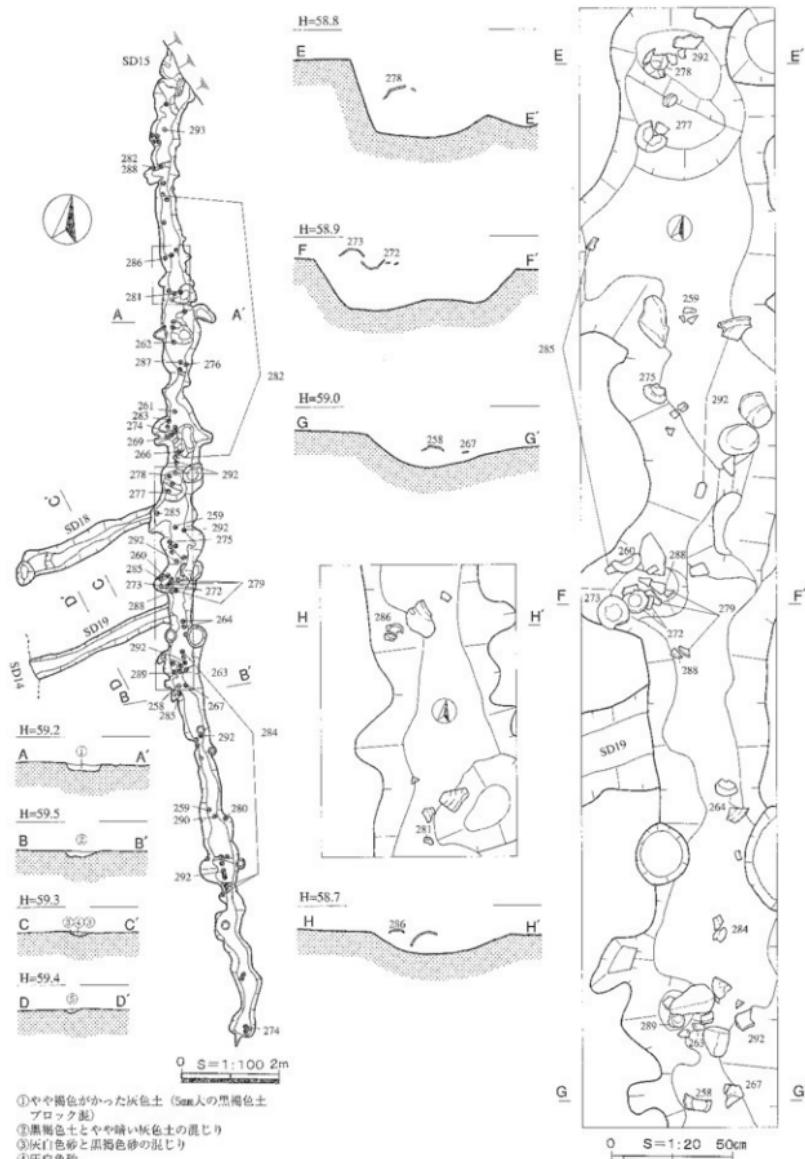


Fig.117 SD 15・18・19遺構図

Tab.96 S D15出土遺物観察表(1)

No.	Fig. FL	遺構名	出土位置	器種	法面(cm)	特徴	地上	色調	備考
258	Fig.118 PL.31	S D15	埋土下層	須恵器 杯	口径 縦高 底径 7.6	口縁部は器やかに外反する。外腹はやや強いヨコナマ復元。底部に四脚を少叢含む。	1mm以下の砂粒を少叢含む。	灰黄色25Y7/2	約1/4残存 粘土分析試料
259	Fig.118 PL.31	S D15	埋土下層	須恵器 杯	口径 縦高 底径 7.5	口縁部は直線状に外反する。外腹はやや強いヨコナマ復元。底部に四脚を少叢含む。内腹底部近付近内外面灰白色化。	1~2mm程度の長石を少含む。	灰黄色25Y6/2	約1/3残存 粘土分析試料
260	Fig.118 PL.31	S D15	埋土下層	須恵器 杯	口径 縦高 底径 7.8	口縁部は直線状に外反する。底部四脚を少叢含む。器底内外面は灰白色化。	1mm以下の砂粒を少叢含む。	灰黄色25Y7/2	約1/2残存 粘土分析試料
261	Fig.118 PL.30	S D15	埋土下層	須恵器 杯	口径 縦高 底径 7.4	口縁部が器やかに外反する。内外面灰白色化。	無駄な砂粒を含む。	灰白色25YR7/1	約1/10残存 粘土分析試料
262	Fig.118 PL.30	S D15	埋土中	須恵器 杯	口径 縦高 底径 7.8	口縁部が器やかに外反する。外腹は縦縫が強烈・灰白色。	1~2mmの砂粒を含む。	灰褐色3Y5/1	約1/6残存
263	Fig.118 PL.30	S D15	埋土下層	須恵器 杯	口径 縦高 底径 7.5	口縁部が器やかに外反する。外腹は縦縫が強烈・灰白色。	0.5mm以下の砂粒を含む。	灰黄色2.5Y7/2	約1/10残存
264	Fig.118 PL.31	S D15	埋土下層	須恵器 杯	口径 縦高 底径 7.4	口縁部は器やかに外反する。外腹は縦縫が強烈・灰白色。	10mmの砂粒を含む。2~3mmの砂粒。	灰白色5YR7/1	約1/2残存 粘土分析試料
265	Fig.118 PL.30	S D15	埋土中	須恵器 杯	口径 縦高 底径 7.7	口縁部が器やかに外反する。外腹は縦縫が強烈・灰白色。	無駄な砂粒を含む。	灰褐色2.5Y6/1	約1/10残存
266	Fig.118 PL.30	S D15	埋土下層	須恵器 杯	口径 縦高 底径 7.6	口縁部が器やかに外反する。外腹は縦縫が強烈・灰白色。	無駄な砂粒を含む。	灰褐色2.5Y7/1	約1/2残存 粘土分析試料
267	Fig.118 PL.30	S D15	埋土下層	須恵器 杯	口径 縦高 底径 7.8	口縁部が器やかに外反する。外腹は縦縫が強烈・灰白色。	無駄な砂粒を含む。	灰褐色2.5Y6/1	約1/6残存
268	Fig.118 PL.30	S D15	埋土下層	須恵器 杯	口径 縦高 底径 7.5	口縁部が器やかに外反する。外腹は縦縫が強烈・灰白色。	無駄な砂粒を含む。	灰褐色2.5Y7/1	約1/8残存
269	Fig.118 PL.30	S D15	埋土下層	須恵器 杯	口径 縦高 底径 7.6	口縁部が器やかに外反する。外腹は縦縫が強烈・灰白色。	無駄な砂粒を含む。	灰褐色2.5Y7/1	約1/10残存
270	Fig.118 PL.31	S D15	埋土下層	須恵器 杯	口径 縦高 底径 7.6	口縁部が器やかに外反する。外腹は縦縫が強烈・灰白色。	無駄な砂粒を含む。	灰褐色2.5Y6/1	約1/6残存 粘土分析試料
271	Fig.118 PL.30	S D15	埋土中	土師質土器 杯	口径 縦高 底径 7.8	口縁部は圓形へ切り後傾目。内底面は縦縫が強烈のナチュラル。	3~4mmの砂粒を含む。	明赤褐色5YR5/8	約1/6残存 粘土分析試料
272	Fig.118 PL.31	S D15	埋土下層	土師質土器 杯	口径 縦高 底径 7.5	口縁部は圓形へ切り後傾目。内底面は縦縫が強烈のナチュラル。	砂粒を含む。	明赤褐色25YR5/8	口縁部が1/10残存 粘土分析試料
273	Fig.118 PL.31	S D15	埋土下層	土師質土器 杯	口径 縦高 底径 7.4	口縁部は圓形へ切り後傾目。内底面は縦縫が強烈のナチュラル。	4mm以上の砂粒を含む。	橙色5YR6/8	口縁部が1/4残存 粘土分析試料
274	Fig.118 PL.30	S D15	埋土下層	土師質土器 杯	口径 縦高 底径 7.2	口縁部は圓形へ切り後傾目。内底面は縦縫が強烈のナチュラル。	3mm以下の砂粒を多量に含む。	明褐色7.5YH5/6	約1/6残存 粘土分析試料
275	Fig.118 PL.30	S D15	埋土下層	土師質土器 杯	口径 縦高 底径 7.6	外腹面は圓形へ切り後傾目。内底面は一方向ナチュラル。外腹面を除く。	0.5~4mmの砂粒を含む。	褐色7.5YR7/6	約1/4残存 粘土分析試料
276	Fig.118 PL.30	S D15	埋土下層	土師質土器 杯	口径 縦高 底径 7.5	外腹面は圓形へ切り後傾目。内底面は一方向ナチュラル。	無駄な砂粒が4mmの大砂粒。	赤褐色2.5YR4/8	約1/8残存
277	Fig.118 PL.31	S D15	埋土下層	土師質土器 杯	口径 縦高 底径 7.8	口縁部は器やかに外反する。外腹面は圓形へ切り後傾目。内底面は一方向ナチュラル。	4~9mmの砂粒を多く含む。	褐色7.5YR6/6	口縁部が1/10残存 粘土分析試料
278	Fig.118 PL.31	S D15	埋土下層	土師質土器 杯	口径 縦高 底径 7.4	口縁部は圓形へ切り後傾目。内底面は縦縫が強烈のナチュラル。	4mm以上の砂粒を多く含む。	褐色7.5YR6/6	口縁部が1/10残存 粘土分析試料
279	Fig.118 PL.31	S D15	埋土下層	土師質土器 杯	口径 縦高 底径 7.4	外腹面は圓形へ切り後傾目。内底面は一方向ナチュラル。	3~5mmの砂粒を含む。	に赤褐色7.5YH7/4	約1/4残存 粘土分析試料
280	Fig.118 PL.31	S D15	埋土下層	土師質土器 杯	口径 縦高 底径 7.0	口縁部は外側に折れ込む。外腹面は圓形へ切り後傾目。内底面は縦縫が強烈のナチュラル。	3mm以下の砂粒を2~3mmの砂粒を含む。	に赤褐色10YR6/4	完存
281	Fig.118 PL.30	S D15	埋土下層	土師質土器 杯	口径 縦高 底径 6.5	外腹面は圓形へ切り後傾目。内底面は一方向ナチュラル。	1~3mm程度の砂粒を多く含む。	に赤褐色7.5YR6/4	約1/12残存
282	Fig.118 PL.30	S D15	埋土下層	土師質土器 杯	口径 縦高 底径 8.4	外腹面は圓形へ切り後傾目。内底面は一方向ナチュラル。	2mm以下の砂粒を多く含む。	橙色7.5YR6/8	約1/8残存
283	Fig.118 PL.31	S D15	埋土下層	土師質土器 杯	口径 縦高 底径 8.4	外腹面は圓形へ切り後傾目。内底面は一方向ナチュラル。	3mm以下の砂粒を多く含む。	橙色5YR6/6	約1/6残存
284	Fig.118 PL.30	S D15	埋土下層	土師質土器 杯	口径 縦高 底径 7.4	口縁部は器やかに外反する。外腹面は圓形へ切り後傾目。内底面は一方向ナチュラル。	0.5~3mmの砂粒を多く含む。	橙色5YR6/6	約1/5残存
285	Fig.118 PL.30	S D15	埋土下層	土師質土器 杯	口径 縦高 底径 7.6	外腹面は圓形へ切り後傾目。内底面は一方向ナチュラル。	1~2mmの砂粒を多く含む。	外)褐色5YR6/8 内)赤褐色2.5YR5/8	約1/2残存
286	Fig.118 PL.30	S D15	埋土下層	土師質土器 杯	口径 縦高 底径 7.6	外腹面は圓形へ切り後傾目。内底面は一方向ナチュラル。	0.5~2mmの砂粒を多く含む。	に赤褐色10YR6/3	底部完存
287	Fig.118 PL.30	S D15	埋土下層	土師質土器 杯	口径 縦高 底径 7.6	外腹面は圓形へ切り後傾目。内底面は一方向ナチュラル。	0.5~2mmの砂粒を多く含む。	に赤褐色5YR6/4	1/12以下残存
288	Fig.118 PL.31	S D15	埋土下層	土師質土器 杯	口径 縦高 底径 7.0	外腹面に断面の手抜きを切り付ける。内底面は圓形へ切り後傾目。	0.5~2mmの砂粒を含む。	に赤褐色7.5YR6/4	約1/4残存 粘土分析試料
289	Fig.118 PL.30	S D15	埋土下層	土師質土器 杯	口径 縦高 底径 5.6	外腹面に断面の手抜きを切り付ける。内底面は圓形へ切り後傾目。	1mm以下の良石、石英を多く含む。	藍部完存 粘土分析試料	

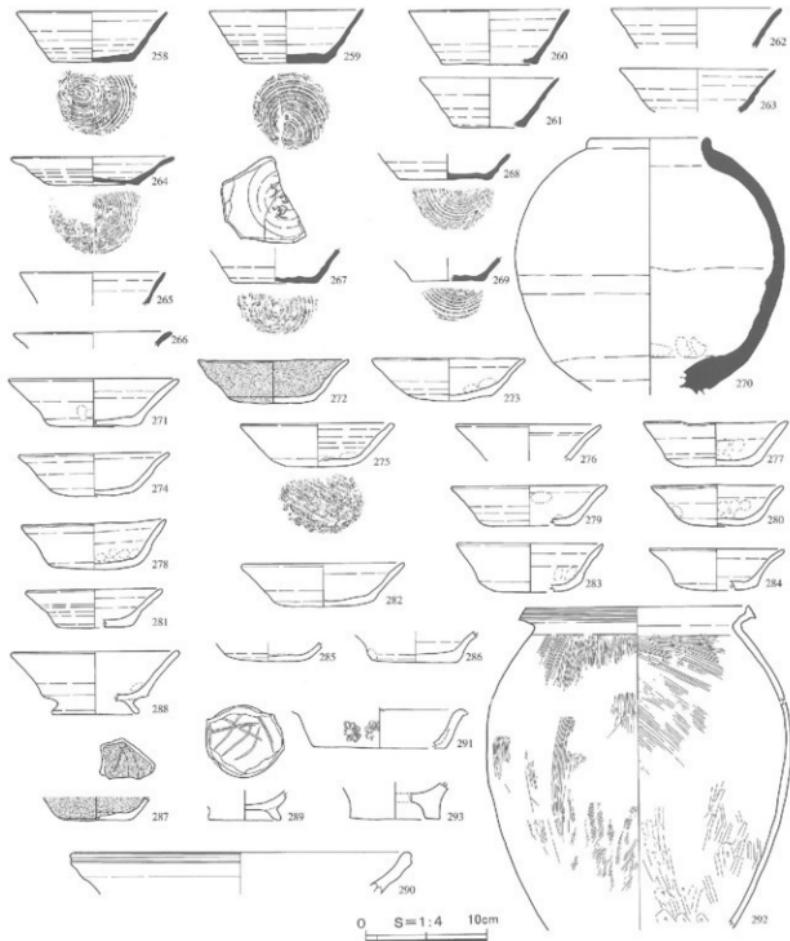


Fig.118 S D15出土遺物実図

Tab.97 S D15出土遺物観察表 (2)

No.	Fig. PL	遺構名	出土位置	形種	法算 (cm)	特徴	粘土	色調	備考
290	Fig.118 PL.30	S D15	埋土下層	土師質土器 甌口縫部	口径 ▲28.0 器高 ▲3.4	口縫部は面をもち中央部がわずかに くぼむ。	2mm以下の砂 粒を含む。	に赤い褐色7.5YR6/3	1/123下残存 断土分析試料
291	Fig.118 PL.30	S D15	埋土下層	土師質土器 鉢か 盆底	口径 ▲22.0 器高 ▲3.2 底径 ▲10.8	口縫部は外反する。肩部のスタンプ 文様あり。	1mm以下の砂 粒を含む。	褐色2.5YR6/6~淡黃褐 色10YR8/3	約1/8残存
292	Fig.118 PL.33	S D15	埋土下層	強生土器 甌	口径 ▲18.2 器高 ▲35.5 底径 ▲25.0	口縫部は上に拡張し面上には3条の凹 溝文を施す。肩部付近横方向のハケ目、 底辺付近縱方向のケリ。内面下手斜め 方向のケリ。	1mm以下の砂 粒を含む。	外) 淡黃褐色10YR5/2 内) に赤い褐色7.5YR6/4	約1/3残存
293	Fig.118 PL.30	S D15	埋土下層	強生土器 底盤	器高 ▲3.0 底盤径 ▲7.4	底盤前に外底面に高台状にする。 底部径率 7.4 内底面ハケ且底盤す。	1mm以下の砂 粒を含む。	褐色2.5YR6/8	約1/2残存

SD 16 (Fig.119 Tab.90)

M 9・10グリッドに位置する。SD 12とSD 6・7のはば中間に位置し、ほぼSD 12に並行する。調査区の西際付近で一旦途切れ、調査区外に続く。断面は浅い皿状で、遺存状況はきわめて悪い。底面は平坦で、凹凸はみられない。

SD 21 (Fig.119 Tab.90)

M・N 18グリッドに位置する。東隣にSD 20が並行する。南側・北側ともに暗渠による擾乱に接する。底面は不整で凹凸が大きく、石の抜けたような部分が連続する。土師質土器片が出土しているが同化し得ない。

SD 23 (Fig.120・121 Tab.90・98

PL.32・39)

SD 23以降は1区の調査となる。F・G 7グリッドに位置し、SK 81・87と重複する。南北に直線状に延びる。埋土は暗茶褐色系でややもろい。遺構の南端から遺物が出土している。294は肥前系の磁器染付碗、295は龍泉窯系の青磁碗、296は陶器の擂鉢である。295は鎌倉期で集落の時期と矛盾しない。ただし埋土は中世の集落跡とは異なり、294も出土していることから、近世中期の遺構である。

SD 24 (Fig.120・121 Tab.90・98

PL.18・32)

H・I 4グリッドに位置する。耕作痕の北端付近に位置するが、これとは重複関係は認められない。東西方向に延びる溝である。断面はU字状でやや深い。埋土はビット群と同様、褐灰色系の粘質土で、やや浮いた位置ではあるが、土師質土器の皿297が出土している。これは上坑やビットのものと類似し、鎌倉期と考えられ、ビット群と溝はほぼ同時期の遺構であると考えられる。

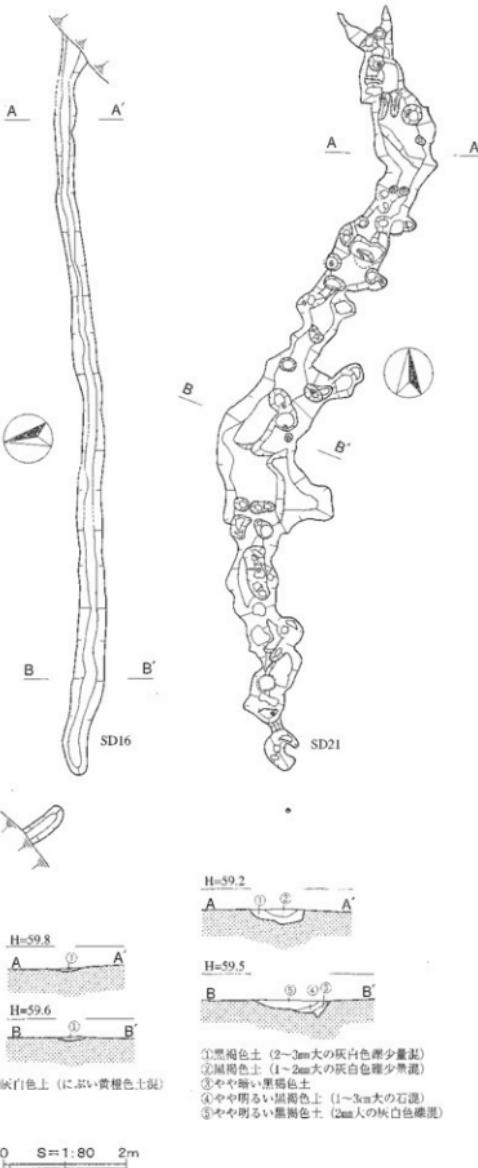
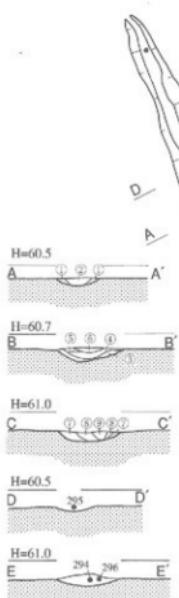


Fig.119 SD 16・21遺構図



- ①灰褐色粘質土
②褐灰色粘質土
③やや明るい灰褐色粘質土
④褐灰色粘質土
⑤褐灰色粘質土（黑色土層）
⑥灰褐色粘質土（鉛分ブロック混）
⑦やや明るい灰褐色粘質土
⑧褐褐色粘質土
⑨褐灰色粘質土

0 S = 1:80 2m

Fig.120 S D 23・24遺構図

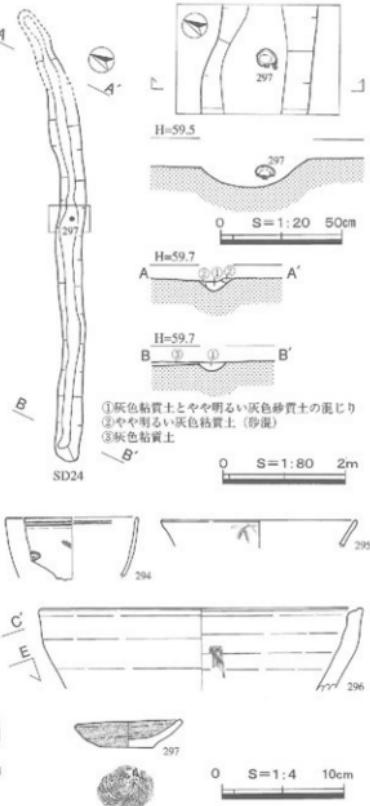


Fig.121 S D 23・24出土遺物実測図

Tab.98 S D 23・24出土遺物観察表

No.	Fig. PL.	遺構名	出土位置	器種	法量 (cm)	特徴	粘土	色調	備考
294	Fig.121 PL.39	S D 23	堆土上層	直筒 鋸口縁部	口径 ※10.8 器高 △ 4.9	口縁部はほぼ直立し、鋸歯付近に内外面ともに2重の腹線をもつ。外面に草花の文様か。	密	灰褐色75YR7/1	約1/8残存
295	Fig.121 PL.39	S D 23	堆土下層	青磁 鋸口縁部	口径 ※16.0 器高 △ 2.1	外面に新羅文文あり。	砂疊なし。	灰褐色75YR7/1	約1/12残存 僅量空器底弁有
296	Fig.121 PL.32	S D 23	堆土下層	直筒 縁部	口径 ※26.6 器高 △ 6.7	口縁端面に1条の凹線。	1m以上下の砂疊	に近い黄褐色10YR5/3	1/12以下残存
297	Fig.121 PL.32	S D 24	堆土中層	直筒 土器底	口径 8.9 器高 24 底径 4.4	口径と底径の差は大きい。外底面に鋸歯あり。内底面ともに薄い赤彩釉あり。	0.5m 以下の砂疊を含む。	浅黃褐色10YR8/4～ 褐色5YR6/8	ほぼ完存

S D 25 (Fig.122 Tab.90)

I 9 グリッド付近に位置する。S D 26と重複しており、これよりも古い。北側は途切れ、南側は東方向に屈曲する埋土はほぼ単層で、遺存状況は悪い。遺物は遺構の中央付近から出土しているが固形化し得ない。

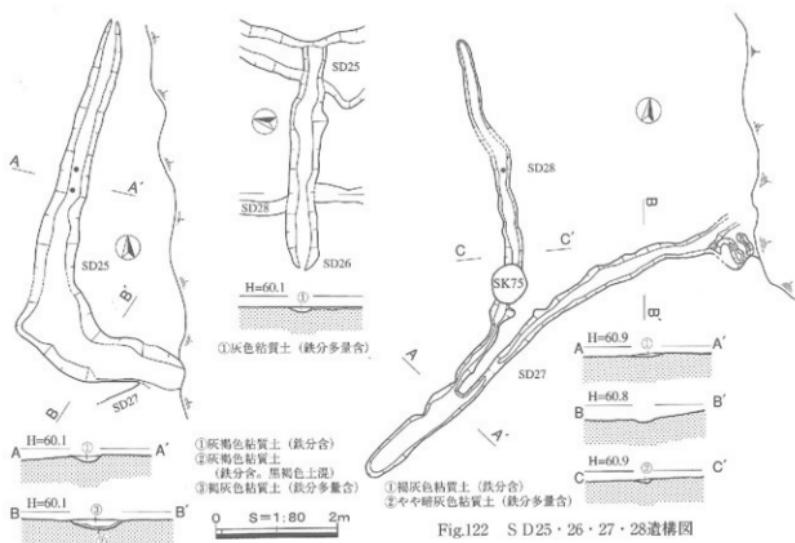


Fig.122 S D 25・26・27・28遺構図

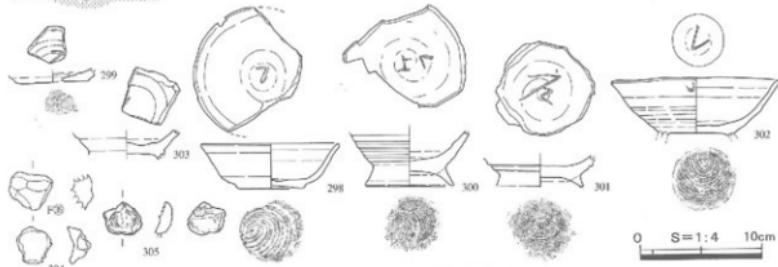


Fig.123 S D 30出土遺物実測図

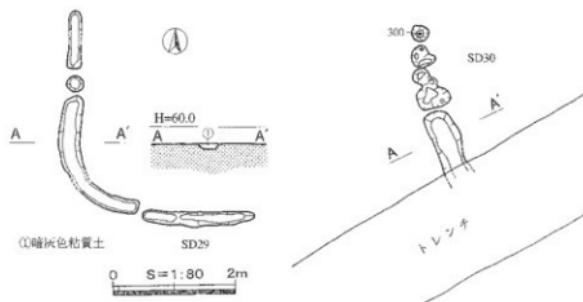
Tab.99 S D 30出土遺物観察表

No.	Fig. PL.	遺構名	出土位置	器種	法線(cm)	特徴	粘土	色調	備考
298	Fig.123 PL.33	S D 30	底面上	上部質土器	口径 △ 11.4 器高 3.7 底径 5.6	口部は内削する。外底部は鋸歯状切り。内底面に「レ」字状のハラ昔き。	10mmの大妙粒を含む。	明赤褐色2SYR5/6 外) 淡赤褐色10YR8/3 内) 橙色5YR7/6	口縁部2/3欠損
299	Fig.123 PL.33	S D 30	埋土中	上部質土器	器高 △ 1.0 底径 △ 6.0	外底部は内削無し。内底面に「レ」字状のハラ昔き。	青	外) 淡赤褐色10YR8/3 内) 橙色5YR7/6	-
300	Fig.123 PL.33	S D 30	埋土下剥	土質質土器 高台付杯底部	器高 △ 3.5 高台 7.2	面削ハの字状のやや高い台面を貼り付ける。体部は内削し、底面は立ち上がりに内削無し。内底面に「レ」字状のハラ昔き。	0.5mmの大妙粒を多く含む。	橙色5YR6/6	高台部1/2残存 底部付近完存
301	Fig.123 PL.33	S D 30	底面上	土質質土器 高台付底部	器高 △ 2.5	面削ハの字状のやや高い台面を張り付ける。内底面に「レ」字状のハラ昔き。内底面に「石」字状のハラ昔き。笠另あり。	0.5mmの大妙粒を多く含む。	明赤褐色2SYR5/8	高台部欠損 底部付近完存
302	Fig.123 PL.33	S D 30	埋土上層	土質質土器 高台付杯	口径 △ 13.9 器高 △ 4.8	口部は根元から内削した後斜部は内削無し。外底部は鋸歯状切り。内底面に「レ」字状のハラ昔き。	1~2mm 大の妙粒を含む。	明赤褐色2SYR5/8	口縁部1/3欠損 高台部欠損
303	Fig.123 PL.33	S D 30	底面上	土質質土器 高台付杯底部	器高 △ 2.3	外底部は内削無し。内底面は妙粒の痕跡有。	白い妙粒が	黄橙色7SYR7/8	高台部欠損 底部残存
304	Fig.123 PL.33	S D 30	埋土中	縫合口 接合部	Tash.119 39~40	底口先端部の殘片。縫合部付着。	青	淡黃褐色7SYR8/3	-
305	Fig.123 PL.33	S D 30	埋土下剥	土質器 体部	器高 △ 2.5	手づくね形成か。	白い粗妙粒が 多く混じる。 内) 明赤褐色5YR5/6	-	-

SD 26

(Fig.122 Tab.90)

I 8・9グリッドに位置する。SD 25・28と重複しており、SD 28よりも新しい。SD 25とは重複する箇所で遺構が終わることから、同時期に存在している可能性がある。埋土は単層である。



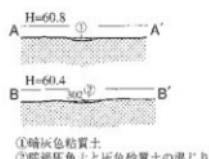
SD 27・28 (Fig.122 Tab.90)

I 8・9グリッドに位置する。南西側では同一であるが、SD 27はやや湾曲しながら東方向に、SD 28は大きく湾曲しながら西方向に向きをかえる。付近は集落の南端付近にあたり、さらに南5m付近からやや遺構の密度が高くなる。北側には東西方向に密にピットがある。SD 27・28ともに埋土は単層で、遺存状況は悪い。SD 28は屈曲部付近でSK75と、弓状に屈曲する中央付近でSD 26と重複しており、いずれよりも古い。いずれの遺構からも遺物は出土していないが、時期的には鎌倉期以前の遺構となる。



SD 29 (Fig.124 Tab.90)

G 3グリッドに位置する。畠跡の最も西側付近に位置する。緩やかに北方向から西方向に湾曲する。埋土は単層で、畠跡と同一で耕作痕の可能性もあるが、このような溝状の形状をもつ遺構は確認されないため、溝状遺構として設定した。同じ名和町内の文珠領脛敷遺跡(12)では、同時期の耕作痕が検出されている。



SD 30 (Fig.123・124 Tab.90・99 PL.32・45)

G・H 6グリッドに位置する。軸はやや異なるものの、SD 4から約54~55m西に位置しており、南北方向を基準にしていること、平安時代中期の遺物が出土していることから、土地区分に関係する可能性がある。埋土は砂または砂利で、遺構の中央や南北両側は確認できないが、遺物が出土する状況もSD 4と類似する。実測し得たものは、土師質土器の杯298・299、高台付杯300~303、縁口304(39)、手づくねの土師器部片305である。杯の内底面にはヘラ書きがあり、300は「比カ」、301は「石カ」、302は「レ」である。

いずれも底面には回転糸切り痕を残し、貼り付け高台である。底部の切り離しは他の土器よりもやや新しい傾向があるが、土器の形状からはSD 4の下限よりも大きく下ることはなく、平安時代中期の範疇に収まるであろう。305は内面に布目痕跡は認められないが、製塙土器の可能性(13)も考えられる。

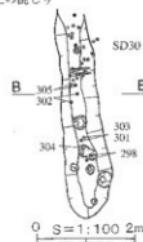


Fig.124 SD 29・30遺構図

注

- (1)財團法人鳥取市教育福祉振興会 1999『古市遺跡II』
 (2)高橋照彦 1995『3.縁軸陶器』『概説中世の土器・陶磁器』真陽社
 (3)石井清司『5.縁麻須恵器』同上文献。
 (4)財團法人鳥取県教育文化財団・建設省倉吉工事事務所 1998『石脇第3遺跡－森木地区・操り地区－・石脇8・9号墳・寺戸第1遺跡・寺戸第2遺跡・石脇第1遺跡』
 (5)出迎昭三 1981『須恵器大成』角川書店
 (6)島根県教育委員会 1984『高広遺跡発掘調査報告書』
 (7)巽淳一郎 1983『古代窯業生産の展開－西日本を中心として－』『文化財論叢』
 (8)池澤俊幸氏教示。
 (9)概ね3文字であろう。須恵器杯の外面ではなく、内底面に墨書きされており、これはヘラ書きの土師質土器と同様である。使い分けの可能性も考えられる。
 (10)島根県教育委員会 1989『古曾志遺跡群発掘調査報告書』
 (11)郡町教育委員会 1987『山田窯跡群』
 (12)名和町教育委員会 2001『大塚塚根遺跡・文珠領屋敷遺跡・古御堂遺跡発掘調査報告書』
 (13)内田律雄 1994「第IV部 山陰～北陸 3.島根県・島根県近藤義郎編『日本上器製塩研究』青木書店

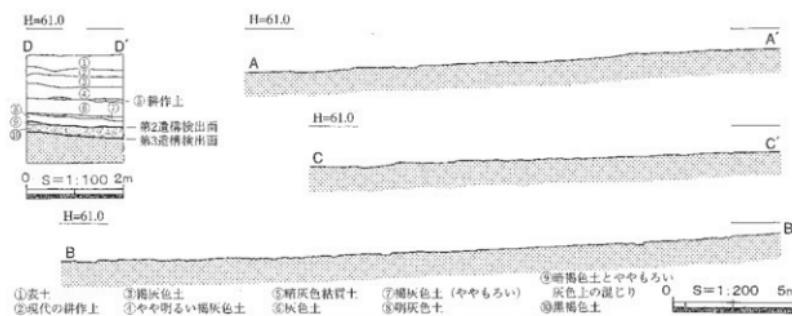


Fig.125 耕作痕平面図(1)、耕作痕断面図

(6) 耕作痕 (Fig.125・126 Tab.90 PL.11)

1区の第1遺構接出面を調査中に西側で耕作痕を検出した。平面形は不整形で、細い溝状の跡が連続する箇所もあるが、約1.5mという幅広い箇所もある。断面形状は非常に浅く、深い部分でも10cmに満たず、遺存状況は悪い。南北方向に延びる、主軸はN-75°-Eをとり、調査区北側、中央、南側の大きく分けて3箇所のまとまりがみられる。また北側では主軸が異なる東西方向のまとまりがある。

花粉分析によると、遺構の埋土中の花粉に特に大きな傾向はみられないものの、プラント・オパールではイネ科の植物の痕跡がみられ、これは上層からのものではないとみられることから、この耕作痕はイネを栽培している可能性が高いとみられる。これが水田あるいは畠に伴うものかははっきりとはしないが、中世前期の集

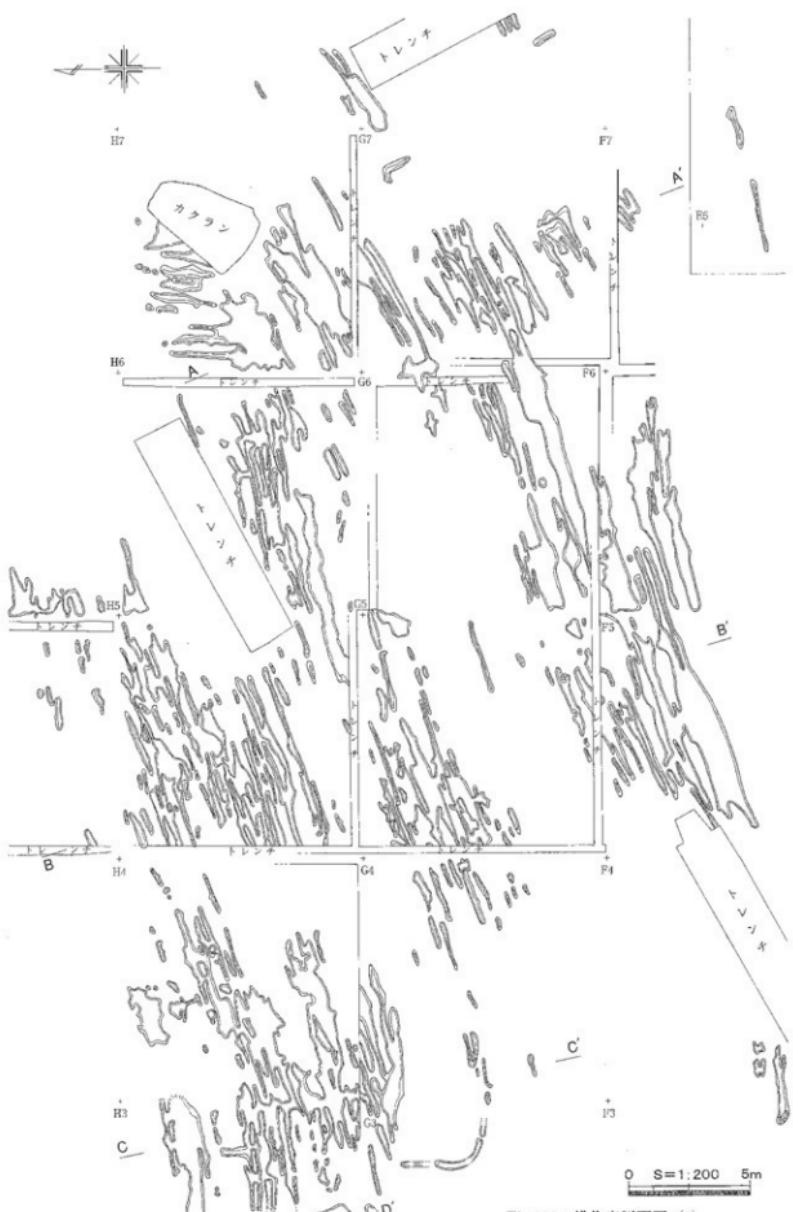


Fig.126 耕作痕平面図 (2)

落が廃絶した後、現代まで耕作地として利用されており、この痕跡は耕作の痕跡であるとしても矛盾はない。

遺構の時期は、これを覆う包含層の時期は下限を示す遺物が中世後期にまで下り、その上に近世の包含層があり、その上に現代の水田の床土があることから、耕作痕は中世前期の集落よりも新しく、近世よりも古いと考えられる。

中世の耕作痕の例は多くはないが、水田のはか、近年では「はたけ」の研究が進展しており、この事例は関東や東北地方でその類例を見ることができる(1)。

鳥取県内では水田の耕作痕跡は確認できていないが、畠の痕跡はいくつか確認できる。羽合町の長瀬高浜遺跡(2)、米子市の錦町第1遺跡(3)などである。これらはいずれも砂丘遺跡で、クロズナと呼称される有機物を多量に含んだ黒色砂層上面に畠が営まれている。この耕作痕跡が消える前に重砂により周囲の白色の砂に覆われたとみられている。これらの埋没時期は、長瀬高浜遺跡で概ね鎌倉~室町時代、錦町第1遺跡では最も新しい遺物は常滑の壺とされており、いずれも中世の範疇で収まる。

本遺跡では集落の癡絶後に耕作が営まれたとみられるが、西側に位置する押平弘法堂遺跡でも、やはり鎌倉期の集落が検出されているが、いずれも13世紀代で終焉を迎えており、これを覆う③層の包含層が室町時代、概ね15~16世紀で、これよりも古い段階での耕作痕とみることができる。

文献等の裏付けはないが、今後同時期の遺構の広がりと終焉は周辺に広がることが予想できる。また、溝状遺構としているS D 29

は、名和町の文殊領屋敷遺跡の耕作痕に類似する。この耕作痕跡については、これが築の痕で、時期は出土遺物から鎌倉時代と考えられている。

いずれの遺構も平面・断面ともにはっきりと遺構が確認できており、これらの痕跡が何らかの生産に伴うものである蓋然性は高いと考えられる。

調査地の西側に位置する押平弘法堂遺跡との関係をみても、いずれもほぼ同時期に集落があり、継続期間が比較的短いことから、集落の移動と耕作地の展開は、ある程度広い範囲での土地利用として考えていく必要がある。

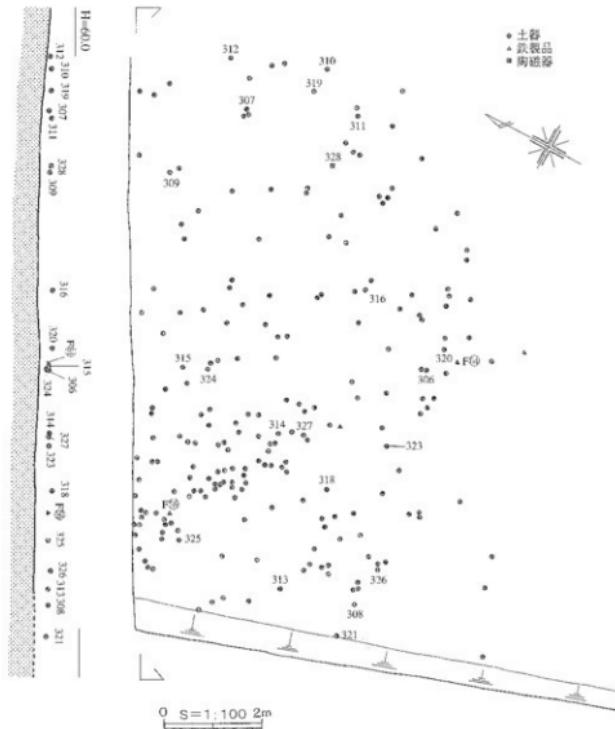


Fig.127 土器溜まり遺物出土状況図

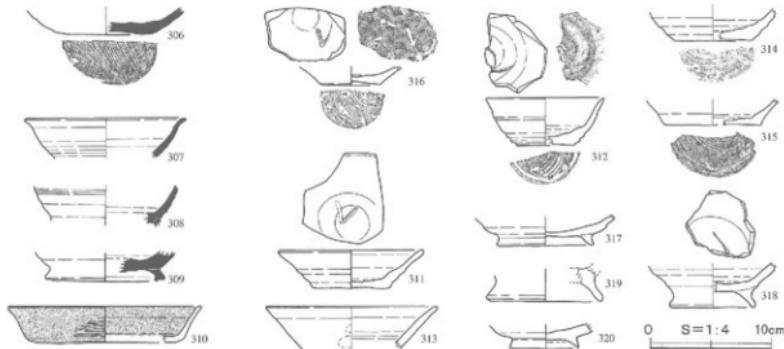


Fig.128 土器窯より出土遺物実測図 (1)

Tab.100 土器窯より出土遺物観察表 (1)

No.	Fig. PL	遺構名	出土位置	器種	法量(cm)	特徴	胎土	色調	備考
306	Fig.128 PL32	土器窯 まり	検出面上	須彌器 里か 底径	△ 22 64	外底面停止系切り痕。	砂粒なし。	灰褐色SY5/Y1	約1/2残存
307	Fig.128 PL32	土器窯 まり	検出面上	口徑器 杯底器	△ 32 △ 33	口縁消済は外反する。	砂粒なし。	灰白色SY7/Y1	約1/12残存
308	Fig.128 PL32	土器窯 まり	検出面上	高台付 組合器	器高 △ 32	断面八の字状の高台を立ち上がりの部に貼り付ける。	1mm以下の白い 砂粒を混じる。	灰褐色SY6/Y1	約1/8残存
309	Fig.128 PL32	土器窯 まり	検出面上	組合器	器高 △ 23	断面八の字状の高台を立ち上がりの部に貼り付ける。	1mm以下の白い 砂粒を混じる。	灰褐色SY6/Y1	約1/8残存
310	Fig.128 PL32	土器窯 まり	検出面上	土器質土器 基	口徑 底径 △ 15.9 △ 11.4	外底面底板ヘラ切り後延板ヘラケズリ か。外面部ともに赤色塗飾および模方の規定。	1mm以下の白い 砂粒少量 混じる。	灰褐色NS-0	約1/6残存
311	Fig.128 PL32	土器窯 まり	検出面上	土器質土器 基	口徑 底径 △ 32 △ 27	外底面縁部はチリの凹凸あり。底部は へたりりか。内底面に「レ」字状のヘラ 記。	1mm以下の白い 砂粒を混じる。	オリーブ褐色2.5Y4/4	口縁垂直/12以下段 底部約1/8残存
312	Fig.128 PL32	上器窯 まり	検出面上	上部質土器 杯底器	L口 底径 △ 98 △ 65	外表面縁部は強いナガによる凹凸あり り。内底面は底板系切り痕。内底面にヘ ラ記。	1mm以下の砂 粒を多く 混じる。	褐色7.5YR6/6	口縁部約1/12残存 底部約1/4残存
313	Fig.128 PL32	上器窯 まり	検出面上	上部質土器 杯底器	L口 底径 △ 13.0 △ 35	内外面ともに後方向のナガ。外表面縁 部付近に漫付。	砂粒なし。	褐色SYR6/6	約1/10残存
314	Fig.128 PL32	上器窯 まり	検出面上	上部質土器 杯底器	春高 底径 △ 26 △ 64	外表面縁部は強ナガによる凹凸あり り。底部は底板系切り痕。内底面にヘ ラ記。	0.5~1mm大 きの砂粒を含 む。	明褐色7.5YR5/6	約1/2残存
315	Fig.128 PL32	土器窯 まり	検出面上	土器質土器 杯底器	口径 底径 △ 21 △ 78	外底面に圓弧底切り痕。	1mm以下の砂 粒を含む。	外) にぶく黄褐色10YR5/4 内) 黄褐色SY5/E	約1/3残存
316	Fig.128 PL32	土器窯 まり	検出面上	土器質土器 杯底器	春高 底径 △ 15 △ 50	外底面に縦板底切り痕。内底面にヘラ 記。	砂粒なし。	褐色SYR6/6	約1/2残存
317	Fig.128 PL32	上器窯 まり	検出面上	上部質土器 高台付杯底器	春高 底径 △ 24 △ 75	外底面縁部ヘラ切り痕か、断面八の字 状の砂粒を貼り付ける。	0.5mmの白い 砂粒少量 混じる。	外) 棕褐色SYR6/8 内) 明黃褐色10YR5/8	約1/2残存
318	Fig.128 PL32	土器窯 まり	検出面上	土器質土器 高台付杯底器	春高 底径 △ 3.5 △ 6.8	外底面に大きくハの字状に開く高台を 貼り付ける。内底面に「レ」字状のヘラ 記。	1mm以下の砂 粒多量に混じ る。	褐色7.5YR6/6	約1/3残存
319	Fig.128 PL32	土器窯 まり	検出面上	土器質土器 高台付杯底器	春高 底径 △ 2.7 △ 9.6	外底面に大きくハの字状に開く高台を 貼り付ける。	0.5mmの大 きな砂粒を含む。	褐色7.5YR7/6	約1/4残存
320	Fig.128 PL32	土器窯 まり	検出面上	土器質土器 高台付杯底器	春高 底径 △ 2.0 △ 6.5	断面三角形状の高台を貼り付ける。	1mmの砂粒が 多量に混じ る。	明黃褐色10YR6/8	高台部完存

注

(1) 日本考古学協会 2000 「はたけの考古学」 『日本考古学協会2000年度鹿児島大会資料 第1集』

また花粉分析の結果、穀を栽培していた可能性が高いとみられる。第8章 特論(4)渡辺正巳「茶烟六反田遺跡における花粉分析」参照

(2) 財团法人鳥取県教育文化財団・建設省倉吉工事事務所 1997 「長瀬高浜遺跡Ⅶ」

財团法人鳥取県教育文化財団・建設省倉吉工事事務所 1999 「長瀬高浜遺跡Ⅷ・Ⅸ第6遺跡」

(3) (財) 米子市教育文化事業団 1996 「錦町第1遺跡」

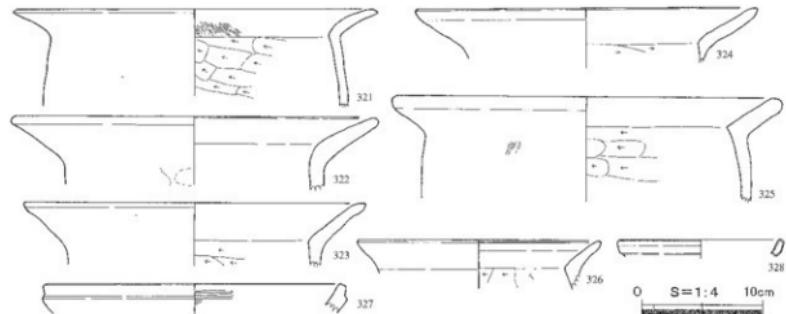


Fig.129 土器溜まり出土遺物実測図 (2)

Tab.101 土器溜まり出土遺物観察表 (2)

No.	Fig. PL.	遺物名	出土状況	特徴	法量 (cm)	特徴	粘土	色調	備考
321	Fig.129 PL.32	土器溜 まり	検出面上 に	土師質土器 口径 △ 30.0 器高 △ 7.9	内面底面部以下右方向のケズリ。外面 に赤褐色付着。	1~3mmの砂質 多く含む。 内に赤褐色7YR5/4 3mm以下の砂粒 内に赤褐色7YR5/4 多く含む。	外) に赤褐色10YR5/4 多く含む。 内)に赤褐色7.5Y5/3 約1/6残存	約1/6残存	
322	Fig.129 PL.32	土器溜 まり	検出面上 に	土師質土器 口径 △ 30.0 器高 △ 7.9	外面底面部付左端傾く底。内面底面部 以上2ヶ所。	3mm以下の砂粒 内に赤褐色7YR5/4 多く含む。	内)明褐色7.5Y5/6 約1/12残存		
323	Fig.129 PL.34	土器溜 まり	檢出面上 に	土師質土器 口径 △ 32.0 器高 △ 5.8	口縁部は大きく外反する。外面部 に炭化物付着。内面部部は右方向の ケズリ。	1mm以下の砂 多量に混 じる。	に赤褐色10YR4/3 約1/8残存	約1/8残存	
324	Fig.129 PL.34	土器溜 まり	検出面上 に	土師質土器 口径 △ 28.0 器高 △ 4.5	口縁部は大きく外反する。外面部 に炭化物付着。内面部部以下ケズリ。	0.5mm以下の砂 混じる。	に赤褐色10YR5/4 約1/8残存		
325	Fig.129 PL.34	土器溜 まり	検出面上 に	土師質土器 口径 △ 32.0 器高 △ 8.4	内面底面部以下右方向のケズリ。	0.5~3mmの砂 多量に含む。	オリーブ褐色2.5Y4/6 約1/10残存		
326	Fig.129 PL.34	土器溜 まり	検出面上 に	土師質土器 口径 △ 24.6 器高 △ 4.0	口縁部外側と上に横方向のナデ。内 面部部以下右方向のケズリ。	1~3mmの砂 多量に混じる。	に赤褐色7.5Y3E/4 約1/10残存		
327	Fig.129 PL.34	土器溜 まり	検出面上 に	土師質土器 口径 △ 24.6 器高 △ 2.4	外面口縁部を残すナデ。炭化物付 着部底面が凸状。	1mmの砂 少量に混 じる。	に赤褐色10YR6/3 1/22下残存		
328	Fig.129 PL.39	土器溜 まり	検出面上 に	白陶 口縁部	器高 △ 1.4	口縁部はわざかに玉様状となる。	砂粒なし。	灰白色2.5Y7/1 約1/10残存 吉野鉢が	

(7) 土器溜まり (Fig.127~129 Tab.100・101 PL.13・34・39)

M 8・9グリッドに位置する。土器溜まりと呼称しているが、実際には灰土色の最上層付近に細片が散乱している状況である。したがって接合関係は少なく、口縁部など、特徴のある部分のみ実測している。付近は南から北方向に向かう緩やかな斜面である。断面図をみると、黒色土から1層浮いた状況で遺物が出土しており、溜まりというよりもむしろ密な包含層というような状況である。

図化し得た遺物は、須恵器皿306、杯307、高台付杯308、底部309がある。土師質土器は皿310、杯311~316、高台付杯317~320、壺321~327である。また同じレベルで白磁碗328がある。

遺物の傾向としてはS D 4やS D 12などと比較してもやや古い傾向がある。須恵器は、306の底面は静止系切り痕が残る。309はしっかりとした高台がつく。土師質土器の皿310は赤色塗彩後横方向の磨きが施されており、いずれもやや時代が遡る。ただし、杯311・312・316・318の内底面には「レ」字状の焼成前のヘラ記号があり、これはS D 2・4と同じものである。いずれも口縁部は直線状に外傾する。また高台付杯318・319はいわゆる足高高台と呼称されるものである。壺は327を除き口縁部が長く外傾する。口縁端部は丸いがわずかに尖る。327については口縁端部に段をもつものである。328は口縁部が玉様状となる白磁碗類である。大宰府の編年によると唐年代は12世紀後半から13世紀前半頃である。土器溜まりの時期幅が比較的大きく、ほとんどが平安時代中期の遺物であり、鎌倉時代まで下るものは327や328などわずかである。付近にはS D 12があるが、これは遺物が多いにも関わらず底面がわずかに遺存している程度で、遺構の上面が掘削されて西側に均されたことが想定できる。しかしそれを裏付けるような接合関係は確認できていない。

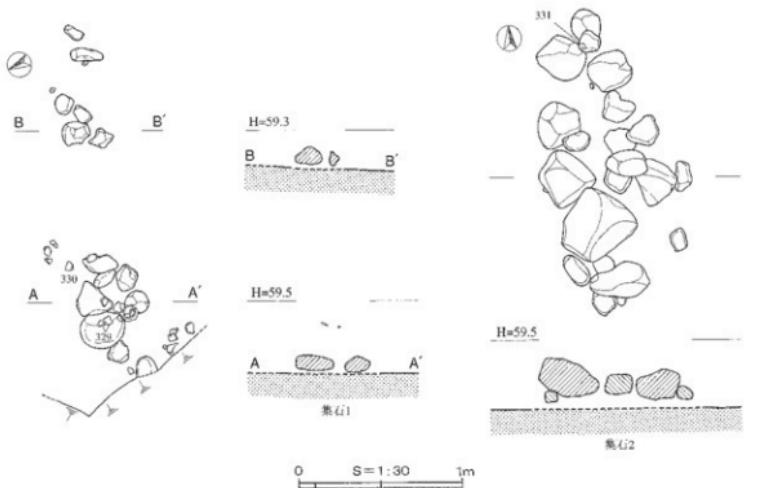


Fig.130 集石1・2遺構図



Fig.131 集石1・2出土遺物実測図

Tab.102 集石出土遺物観察表

No.	Fig. PL.	遺物名	出土位置	断面	法量 (cm)	特徴	断土.	色調	参考
329	Fig.131 PL.34	集石1	検出面上	上端質上部 杯口縁部	口径 △12.0 器高 △4.0	内外面ともに横方向のナデ。 0.5cm以下の砂粒を含む。	明黄褐色10YR6/8	約1/3残存	
330	Fig.131 PL.34	集石1	検出面上	上端質上部 杯口縁部	口径 △16.2 器高 △3.5	外面口縁部に擦付着。内底頭部以下横 方向のケズリ。 1mm以下の砂 粒を含む。	黄褐色10YR5/6	約1/8残存	
331	Fig.131 PL.34	集石2	検出面上	上端質上部 杯口縁部	口径 △12.0 器高 △3.5	内外面ともに横方向のナデ。	黒	外) 深色7.5YR7/6 内) 浅黄褐色7.5VR8/3	約1/8残存

(8) 集石

調査区の2箇所で集石を確認した。ただしこれを覆う土は表土であり、遺構の下限は押さえられない。後にS K44から検出したが、これは遺構に伴うものである。

集石1 (Fig.130・131 Tab.102 PL.34)

M 8グリッドに位置する。西側にやや大ぶりな石が、東側にはやや小さな石のまとまりがある。これらの石の上面から土器が出土している。いずれも土師質土器で、杯329と甕330を図化した。329は口縁部が直線状に傾く。330は口縁部の屈曲があまく退化傾向にあり、いずれも平安時代の所産である。

集石2 (Fig.130・131 Tab.102 PL.13・34)

L・M19グリッドに位置する。やや縱長の石のまとまりで、こちらは大石と小石がやや密な状況で出土している。石の下から土師質土器の甕331が出土した。口縁部が内湾しており、329よりも時期が下ることが予想できる。鎌倉時代の所産であろう。

(9) 包含層出土遺物

1区の第1追構検出面上から出土した遺物のほか、耕作痕を覆う③層とその上層の②層、部分的に①層の遺物包含層を検出した。堆積状況は基本的に水平方向で、きわめて整った堆積状況を示す。そのため包含層としてまとまっており、それぞれ古い時期の遺物は混入しているものの、概ね堆積の時期幅は限られている。ただし、遺



Fig.132 包含層遺物出土状況図

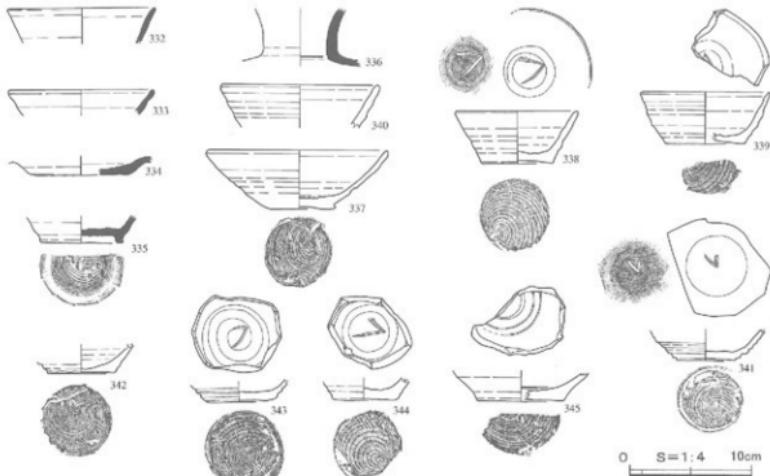


Fig.133 包含層出土遺物実測図 (1)

Tab.103 包含層出土遺物観察表 (1)

No.	Fig. PL	タリット名	出土位置	器種	法長 (cm)	特徴	地土	色調	備考	
332	Fig.133 PL.34	H 8	第1道橋 後端面上	瓦器 杯口深部 杯口深部	口径高 △ 12.0 △ 2.9	外面部縁溝部付近外面灰化。内面口 縁部下に墨染じる。	灰色	7.5Y6/1	約1/4残存	
333	Fig.133 PL.34	H 5	第1道橋 後端面上	瓦器 杯口深部 杯口深部	口径高 △ 12.0 △ 2.7	内外面ともに回転ヨコナズ。口縁溝部 内外面間に墨染付。	褐色	5YR6/8	約1/12残存	
334	Fig.133 PL.34	F 5	第1道橋 後端面上	瓦器 杯口深部 杯口深部	口径高 △ 1.4 △ 8.5	L字縁は大きく外反する。内外面とも に回転ヨコナズ。	灰色	7.5Y6/1	約1/5残存	
335	Fig.133 PL.34	K 7	第1道橋 後端面上	瓦器 高台杯底部 高台杯底部	高台合 6.5	内外面ともに回転ヨコナズ。外表面は 縫合部切り。	灰色	7.5Y6/1	約1/2残存	
336	Fig.133 PL.34	G 8	第1道橋 後端面上	瓦器 深部	高台 △ 47	脇部から頭部にかけて貼り付け痕あ る。	灰色	7.5Y5/1	約1/3残存	
337	Fig.133 PL.34	G 7	第1道橋 後端面上	土器 土器上部 杯	口径 △ 47 △ 48	口縁部が内凹する。口縁部外側に横方 向の切欠ナギによる門凸がある。外底 部は縫合部切り。	1段目 下の白い 砂粒混じ る。	明褐色	7.5YR5/6	底部完存 口縁部約1/12残存
338	Fig.133 PL.34	2区	第1道橋 後端面上	土器 土器上部 杯	口径 △ 100 △ 43 △ 45	外縁部は縫合ナギの凸凹あり。底 部高 43 底径 58 のうきあ	1段目 下の白い 砂粒混じ る。	褐色	7.5YR7/6	口縁部2/3欠損
339	Fig.133 PL.34	G 4	第1道橋 後端面上	土器 土器上部 杯	口径 △ 10.0 △ 52 △ 64	外縁部は縫合。底いのうきあより 底底は回転系切り。内底部に「レ」字状 のかきあ。	白色	7.5YR7/8	約1/4残存	
340	Fig.133 PL.34	H 4	第1道橋 後端面上	土器 土器上部 杯	口径 △ 12.9 △ 35	口縁部付近をややくずす。	白色	7.5YR7/3	口縁部1/12以下残存	
341	Fig.133 PL.34	2区	第1道橋 後端面上	土器 土器上部 杯	器高 △ 26 △ 49	外面部は底いナギによる凹凸あり。 底底は回転系切り裏。内底部に「レ」字 状のかきあ。	1段目 下の白い 砂粒を多 量に含む。	に赤い 褐色	7.5YR5/4	底部完存
342	Fig.133 PL.34	I 4	第1道橋 後端面上	土器 土器上部 杯	器高 △ 23 △ 56	外面部に上がり付高。底いナギによる 凹凸あり。外底底は回転系切り。	白色	7.5YR7/4 に赤い 褐色	に赤い 褐色	
343	Fig.133 PL.34	H 5	第1道橋 後端面上	土器 土器上部 杯	器高 △ 17 △ 53	外底底は回転系切り。内底底に「レ」字 状のかきあ。	白色	7.5YR6/4	底部のみは完存	
344	Fig.133 PL.34	H 4	第1道橋 後端面上	土器 土器上部 杯	器高 △ 18 △ 53	外面部は底いナギによる凹凸あり。底部 は回転系切り。内底底に「レ」字状 のかきあ。	0.5段目 下の白い 砂粒が 少量見じる。	に赤い 褐色	10YR7/4	底部完存
345	Fig.133 PL.34	H 4	第1道橋 後端面上	土器 土器上部 杯	器高 △ 24 △ 72	外底底に回転系切り裏。内底底にナ チの腹があり。	白色	7.5YR7/8	約1/2残存	

跡の範囲内では人々の生活の痕跡を有する時期幅が非常に限られ、かつ断続的であるため、詳細な土器編年を設定することは難しい状況である。そのため、これらの遺物の編年観は既存の編年観による。大まかな時期とは、平安時代中期（9世紀半ば～10世紀半ば）、鎌倉時代中期（12世紀後半～13世紀半ば）、鎌倉時代後期（13世紀半ば～14世紀前葉）、室町時代末～近世初頭（16世紀末～17世紀）、近世末（18世紀後半以降）である。

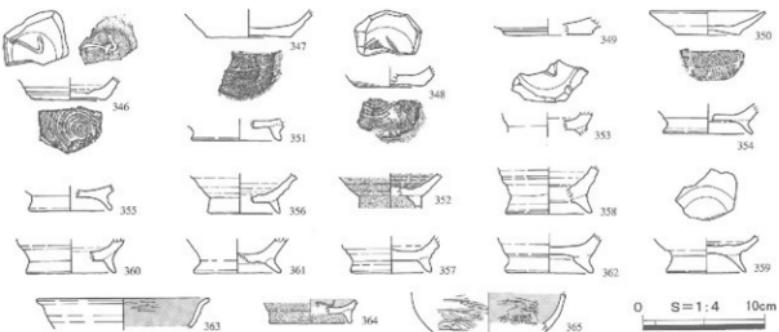


Fig.134 包含層出土遺物実測図 (2)

Tab.104 包含層出土遺物観察表 (2)

No.	Fig. PL.	グリッド名	出土位置	器種	法長(cm)	特徴	胎土	色調	備考
345	Fig.134 PL.35	H 4	第1遺構 焼成面上	土師質土器 杯底部	器高 □ 18 底径 62	外表面は深いナデによる凹凸があり。底部は削面で切り痕。内底面に「レ」字状のへ書き。	白い粗砂 泥混じる。	褐色SYR6/8	約1/2残存
347	Fig.134 PL.35	K 5	第1遺構 焼成面上	土師質土器 杯底部	器高 □ 23 底径 70	外底面は鉢底角切。	砂なし。	に赤い黄褐色10YR7/4	約1/3残存
348	Fig.134 PL.35	I 8	第1遺構 焼成面上	土師質土器 杯底部	器高 □ 17 底径 58	外底面は鉢底角切。内底面にヘラ書き。	6.5cm以下の白い 砂混じる。	に赤い黄褐色10YR7/4	約1/4残存
349	Fig.134 PL.35	H 4	第1遺構 焼成面上	土師質土器 杯底部	器高 □ 14 底径 72	外底面に回転角切り板。	粗砂が少 量混じる。	褐色7YR7/6	約1/4残存
350	Fig.134 PL.35	K 5	第1遺構 焼成面上	土師質土器 器高	器高 □ 92 底径 52	口径と底径の差は大きい。外底面は刃 部底面。	白い粗砂 が少量混じる。	に赤い黄褐色10YR7/4 底部約1/2残存 □部約1/1残存	
351	Fig.134 PL.35	T 6	第1遺構 焼成面上	土師質土器 高台付高台部	器高 □ 18	断面ハの字状の高台を貼り付ける。	白い粗砂 混じる。	に赤い黄褐色10YR6/6	約1/5残存
352	Fig.134 PL.35	H 4	第1遺構 焼成面上	土師質土器 高台付高台部	器高 □ 28	断面逆台形状の貼り付け高台か。内底 面に「レ」字状のへ書き。	1mm以下の白い 砂が混じる。	に赤い黄褐色9YR6/4	約1/4残存
353	Fig.134 PL.35	H 4	第1遺構 焼成面上	土師質土器 高台付高台部	器高 □ 20	断面逆台形状の貼り付け高台か。内底 面に「レ」字状のへ書き。	白い粗砂 少量混じる。	に赤い黄褐色10YR7/3	約1/4残存
354	Fig.134 PL.35	K 5	第1遺構 焼成面上	土師質土器 高台付高台部	器高 □ 24	断面ハの字状のやや高い高台を回転角 切り後に貼り付ける。外底立ち上がり 付近、強いナデによる凹凸。	0.5mm以下の 白い砂粒が混 じる。	に赤い黄褐色10YR5/3	約1/4残存
355	Fig.134 PL.35	G 7	第1遺構 焼成面上	土師質土器 高台付高台部	器高 □ 29	断面ハの字状のやや高い高台を貼り付 ける。外底立ち上がり付近、強いナデによ る凹凸。	細砂が少 量混じる。	に赤い黄褐色10YR7/4 底部約1/2残存 高台部約1/1残存	
356	Fig.134 PL.35	H 5	第1遺構 焼成面上	土師質土器 高台付高台部	器高 □ 32 高台径 ■ 70	断面ハの字状のやや高い高台を回転角 切り後に貼り付ける。外底立ち上がり 付近、強いナデによる凹凸。	1mm以下の砂 粒が少量混 じる。	明赤褐色5YR5/6	約1/3残存
357	Fig.134 PL.35	I 4	第1遺構 焼成面上	土師質土器 高台付高台部	器高 □ 30 高台径 ■ 64	立上り付近に強 い凹凸。	白い粗砂 混じる。	褐色5YR6/6	約1/2残存
358	Fig.134 PL.35	G 5	第1遺構 焼成面上	土師質土器 高台付高台部	器高 □ 39 高台径 ■ 70	断面ハの字状のやや高い高台を貼り付 ける。外底立ち上がり付 近、強いナデによる凹凸。	0.5mm以下の 白い砂粒が混 じる。	外)に赤い黄褐色7.5YR5/4 内)褐色5YR6/6	約1/8残存
359	Fig.134 PL.35	G 6	第1遺構 焼成面上	土師質土器 高台付高台部	器高 □ 28 高台径 ■ 66	断面ハの字状のやや高い高台を回転角 切り後に貼り付ける。外底立ち上がり 付近、強いナデによる凹凸。	白い粗砂 混じる。	明赤褐色5YR5/6	約1/4残存
360	Fig.134 PL.35	H 5	第1遺構 焼成面上	土師質土器 高台付高台部	器高 □ 29 高台径 ■ 72	断面ハの字状のやや高い高台を回転角 切り後に貼り付ける。外底立ち上がり 付近、強いナデによる凹凸。	白い粗砂 少量混じる。	に赤い黄褐色5YR6/4	約1/6残存
361	Fig.134 PL.35	2 K	第1遺構 焼成面上	土師質土器 高台付高台部	器高 □ 27 高台径 ■ 68	外底面に大きさの字状の高台を貼り付 ける。	1mm 背後の 白い砂粒混 じる。	外)褐色SYR6/6 内)褐色7.5YR6/6	約1/4残存
362	Fig.134 PL.35	H 4	第1遺構 焼成面上	二段式土器 高台付高台部	器高 □ 32 高台径 ■ 70	大型の断面三角形の高台を貼り付 ける。	白い粗砂 少量混じる。	に赤い黄褐色10YR6/4 高台部完存	
363	Fig.134 PL.35	J 7	第1遺構 焼成面上	黑色土器 杯底部	口径 □ 140 器高 □ 24	回転部は外反する。外底面ともに燒 結物のみがみる。	明褐色7.5YR5/6	約1/12残存	
364	Fig.134 PL.35	1 K	第1遺構 焼成面上	黑色土器 高台付高台部	器高 □ 20 高台径 ■ 65	断面ハの字状の高台を貼り付ける。外底 立ち上がり付近、強いナデによる凹凸。	白い粗砂 混じる。	明赤褐色5YR5/6	約1/3残存
365	Fig.134 PL.35	H 6	第1遺構 焼成面上	黑色土器 杯底部	器高 □ 37	内面縦繩または横、外面部方向の密なみ きを施す焼。	細砂が少 量混じる。	に赤い褐色7.5YR5/4	-

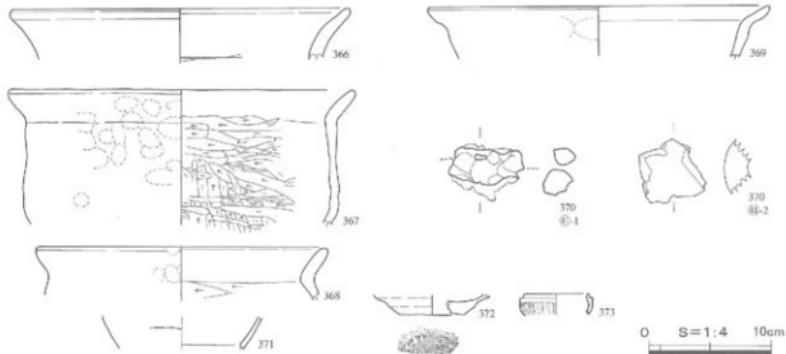


Fig.135 包含層出土遺物実測図 (3)

Tab.105 包含層出土遺物観察表 (3)

No.	Fig. PL.	グリッド番	出土位置	器種	法算 (cm)	特徴	粘土	色調	備考
366	Fig.135 PL.35	H 5	第1造構 横高面上 縫口部上	口杯 縫口部 器高 △ 2.4	口縫部は大きく外反する。内外面ともに横方向のナデ。	1~2mmの砂 粒多混入。	外) 黄褐色10YR5/4 (内) にふい黄色5YR6/4	約1/12残存	
367	Fig.135 PL.35	H 5	第1造構 横高面上 縫口部上	土師質土器 縫口部上	口径 器高 △ 2.2	外側指痕陶質が顯著。内面縫面部以下 横方向の窓口ナデ。	1~3mmの砂 粒が多混入。	外) 黄褐色10YR5/6 (内) にふい黄色10YR6/3	約1/6残存
368	Fig.135 PL.35	G 4	第1造構 横高面上 縫口部上	土師質土器 縫口部上	口径 器高 △ 2.4	口縫部は内外縫ともに横方向のナデ。 内側縫底部以下横方向の窓口ナデ。	2~4mmの白 砂多混入。	外) 黄褐褐色10YR5/2 (内) にふい褐色7.5YR5/3	約1/12残存
369	Fig.135 PL.35	J 8	第1造構 横高面上 縫口部上	土師質土器 縫口部上	口杯 器高 △ 2.5	この字状の口縫部。内面横方向のナデ。	1mmの砂粒が 少量混入。	明黄褐色10YR6/6	約1/12残存
370	Fig.135 PL.45	I 6	第1造構 横高面上	總	Tab.119 41-2	内面は著しく施絵、外面は施解物が付 着する。	白	淡黄褐色7.5YR8/3	-
371	Fig.135 PL.39	2 IX	第3造構 横高面上	白磁 縫下部	器高 △ 2.6	外面下部施絵となる。	白	淡白色7.5YR8/2~ 灰黄褐色10YR5/2	約1/10残存 約1/8残存
372	Fig.135 PL.39	2 IX	白磁 横高面上	白磁 底座 成形	器高 △ 1.6 底径 △ 5.4	底座は能の目形状高台。軸を括き取る。	精細な粘土	灰白色7.5YI/1	約1/6残存
373	Fig.135 PL.39	G 3	第1造構 横高面上	合子身口器	口杯 器高 △ 1.8	外側口縫部は露胎。外間に施絵。	砂粒なし。	灰白色N7/1	約1/4残存

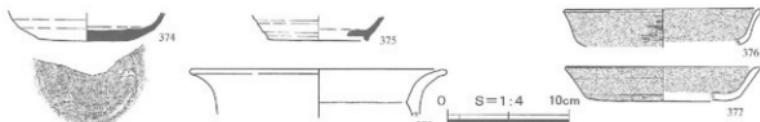


Fig.136 包含層出土遺物実測図 (4)

Tab.106 包含層出土遺物観察表 (4)

No.	Fig. PL.	グリッド番	出土位置	器種	法算 (cm)	特徴	粘土	色調	備考
374	Fig.136 PL.35	2 IX	第3造構 横高面上 底座部	頸束器 底座部	器高 △ 2.3 底径 △ 7.5	外側口縫部に回転系切り直し。	砂粒なし。	灰色NA4/0	約1/2残存
375	Fig.136 PL.35	2 IX	第3造構 横高面上	頸束器 高台付杯	器高 △ 2.0 底径 △ 8.2	断面ハの字状の高台を立ち上がりの顎 に貼り付ける。	砂粒なし。	灰色5Y6/1	約1/6残存
376	Fig.136 PL.35	2 IX	第1造構 横高面上	土師質土器 縫口部上	口杯 器高 △ 1.62	外側面回転ハカリ切り張型ヘラケアセリ か。内外面とともに赤色余彩台および横方 面の施絵。	砂粒なし。	にふい黄褐色10YR6/4	1/12以下残存
377	Fig.136 PL.35	2 IX	第1造構 横高面上	土師質土器 縫口部上	口杯 器高 △ 2.8 底径 △ 12.3	口縫部は外反する。外底座は回転ヘラ ケアセリか。内底面みがきか。内外面と ともに赤彩跡される。	1mm以下の砂 粒を含む。	にふい黄褐色10YR6/4	約1/3残存
378	Fig.136 PL.35	2 IX	第1造構 横高面上	土師質土器 縫口部上	口杯 器高 △ 2.7	口縫部は大きく外反する。内面底部 に横方向の窓口ナデ。	0.5mm以下の白 砂粒を含む。	外) 灰黄褐色2.5Y5/2 内) にふい黄色3YR5/3	約1/12残存

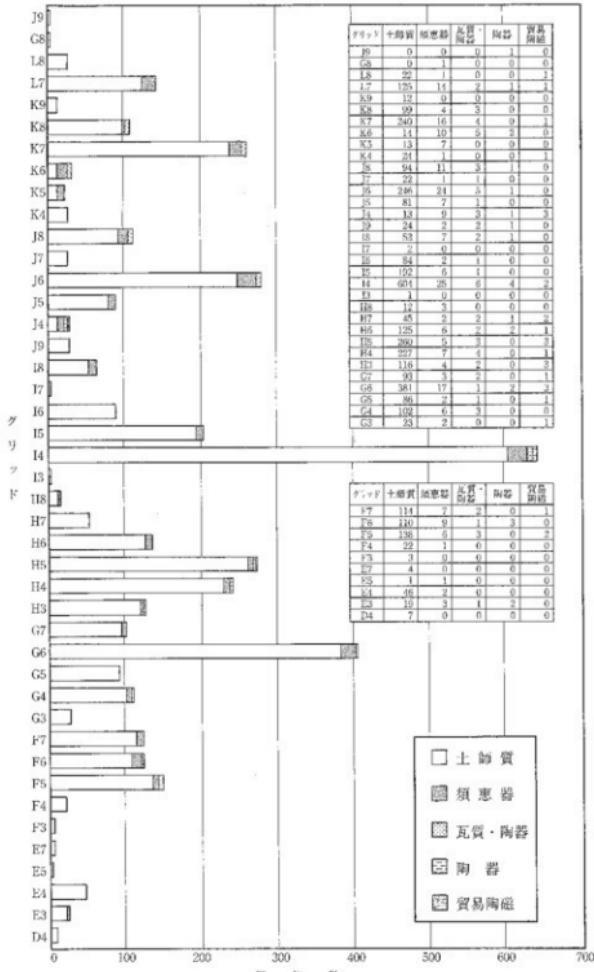
大きな傾向としては、平安時代中期の遺物がこの層においてもかなりの割合を占めていることである。そのため、包含層の時期がやや古くなりがちである。これは、平安時代の溝状造構が部分的に検出されているが、これを壊した際に散乱した破片と考えられる。そのため、これにとらわれず、数は多くなくとも最も時期の下る遺物で時期の決定をした。

第1 遺構検出面上 (Fig.132~137 Tab.103~106 PL.34・35・39・45)

遺構検出面上の遺物である。平安時代中期のものがほとんどであるが、この面からは平安時代以降、中世、近世の遺構が検出されている。1区のM8~9付近からまとまって出土している。2区の土器層よりとしているものもこれに含まれているが、そのほか須恵器皿374、高台付杯375、土師質土器杯376・377、壺378がある。

須恵器は、杯332~334、高台付杯335、壺の頸部336、上師質土器は、杯337~349、皿350、高台付杯351~362、黒色土器363~365、甕または鍋366~369、繩羽口片370、白磁碗371、白磁底部372、青白磁合子373である。このうち、338・341・343・344・346・353は内底面に「レ」字状のヘラ記号が描かれる。その他にも欠損しているもののがヘラ記号の痕が認められるものがあり、これらはいずれも平安時代中期の所産である。また土師質土器の皿350は口縁部と口径の差がやや大きく、鎌倉期の集落から出土するものとは形状が異なる。黒色土器はいずれも内面のみ黒色化するいわゆる内黒黑色土器である。ただし365は外面も横方向に密に磨かれている。甕または鍋は、367が鍬で、口縁部が短く体部が四角で、これが集落の時期に最も近い。

また、曆年代を想定させる遺物として、貿易陶磁器がある。371は外面下部は露胎になるとみられ、大宰府分類のIV頸碗とみられる。373は青白磁の合子身で、上層出土のものと接合した。曆年代は概ね12世紀後半から13世紀頃とみられ、ピット中から出土する遺物に比べやや古い。これは遺構検出面ではあるが、灰色土という基盤層の最上部に若干薄い包含層がある可能性を示唆するものであろう。



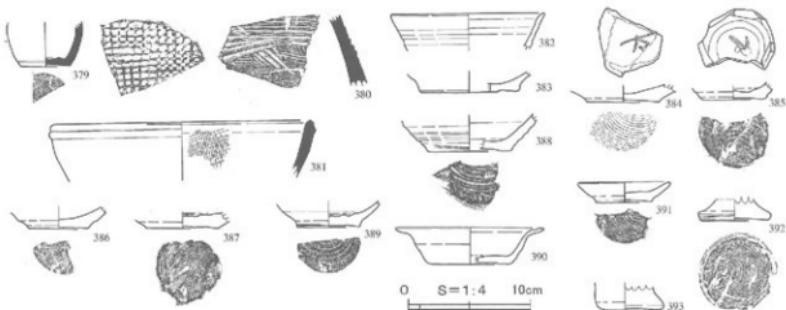


Fig.138 包含層出土遺物実測図(5)

Tab.107 包含層出土遺物観察表(5)

No.	Fig. PL	ゲリッド名	出土位置	器種	法蓋(cm)	特徴	鉢土	色調	備考
379	Fig.138 PL.36	G 6	③層	土師器 小形直底盤	口高△3.6 径幅△4.0	内面がちと上り坂を強く輪状にテナる。 外底面は回転条切り。	白い細砂混じる。	灰褐色10YR6/4 (内)に赤い基色5YR5/3	1/12以下残存
380	Fig.138 PL.36	H 6	③層	土師器 要部部	口高△5.7	外縁格子状のタキ痕。内面削・新め方 向のカキ目。	砂粒なし。	灰褐色7SYR6/1	粘土分析試料 基組1・勝間田産
381	Fig.138 PL.36	G 6	③層	土師器 鉢L縁部	口径△21.0 径幅△4.7	口縁基部は三線状。内面は横後縦方向 のカケ目。あるいは捕食跡。	砂粒はない が粗い。	灰褐色5YR6/1	約1/12残存 粘土分析試料 基組8・勝間田産
382	Fig.138 PL.36	F 5	③層	土師器 杯L縁部	口径△12.5 径幅△2.8	外縁隙縫部に連続する強いナデ。	砂粒はない が粗い。	外)に赤い薄黄色30YR7/3 (内)に赤い薄黄色30YR7/4	1/12以下残存
383	Fig.138 PL.36	D 4	③層	土師器 杯L縁部	口径△1.8 径幅△0.8	内外面ともに落窓により調節不明瞭。	砂粒はない が粗い。	内)に赤い薄黄色30YR7/3 と白い縫合部。	約1/3残存
384	Fig.138 PL.36	2 区	③層	土師器 杯L縁部	口径△1.4 径幅△0.6	外底面は回転条切り痕。内底面に「石」 字で白ら書き文字。	砂粒なし。	陶色7SYR4/6	約1/3残存
385	Fig.138 PL.36	H 3	③層	土師器 杯L縁部	口径△1.3 径幅△0.5	内底面に階状のナデ。外底面は回転条 切り。	砂粒なし。	灰褐色7SYR6/8	約3/4残存
386	Fig.138 PL.36	K 5	③層	土師器 杯L縁部	口径△1.8 径幅△0.6	外底面は回転条切り。	砂粒なし。	灰褐色23Y7/2	約1/4残存
387	Fig.138 PL.36	K 8	③層	土師器 杯L縁部	口径△1.3 径幅△0.6	内底面に階状のナデ痕。外底面は回転 条切り。	砂粒なし。	橙褐色25YR6/6	約3/4残存
388	Fig.138 PL.36	F 5	③層	土師器 杯L縁部	口径△3.0 径幅△0.8	外縁隙縫部に連続する強いナデ。底面 は回転条切り。	砂粒なし。	橙褐色25YR7/6	約1/5残存
389	Fig.138 PL.36	I 6	③層	土師器 杯L縁部	口径△2.1 径幅△0.5	内底面に階状のナデ。外底面は回転条 切り。	砂粒なし。	橙褐色25YR6/8	約1/2残存
390	Fig.138 PL.36	2 区	③層	土師器 皿	口径△12.2 径幅△3.0	口縁部は大きく外反する。外底面回転 条切り後傾か。内底面は不定方向 のカケ目。	0.5mmの砂粒 少々混じる。	内)に赤い薄黄色10YR5/3 と白い縫合部。	約1/3在用 灯明用具
391	Fig.138 PL.36	H 3	③層	土師器 皿	LH高△7.2 径幅△6.8	口縁と底縁の差はやや大きい。外底面 は回転条切り。	白い細砂少 量混じる。	外)に赤い薄黄色30YR6/3 (内)に灰褐色10YR5/1	約1/3残存
392	Fig.138 PL.36	K 7	③層	土師器 杯L縁部	口径△1.7 径幅△0.6	高台基部に内側する面をもつ。面に1~ 2本の魚の骨があり。外底面は回転条切り。	白い細砂少 量混じる。	橙褐色7SYR6/6	底部完存
393	Fig.138 PL.36	G 6	③層	土師器 杯L縁部	口径△2.2 径幅△1.1	大きな柱状高台。外底面は回転条切り。	白い細砂少 量混じる。	内)に赤い薄黄色10YR7/3 柱部のみはば有	石材: 黒曜石
S7	Fig.129 PL.43	K 7	③層	剥片	長さ△5.8 幅△2.9	厚さ△1.5 半円状の剥片。			-

③層 (Fig.137~140 Tab.107~108 PL.36・39・45)

第1構造検出面を覆う包含層である。還構面の直上であるが、1区の南側の斜面上側にいくほど遺存状況は悪い。土坑やピット群から出土する還構から出土する遺物の組成と類似する。

須恵器はわずかで、小型壺379、甕の体部380、鉢381のみである。380は外面が格子状のタキ痕、内面は横方向のカキ目で、これはいわゆる勝間田・亀山系と呼ぶ(1)される中世須恵器に属する。土師質土器は杯382~389、皿390・391である。このうち、384は内底面に「石」、385は「レ」字状の焼成前へら書きがある。皿390は口縁部が大きく外側に張り出すもので、形状から灯明用具の可能性がある。皿391は口径と底

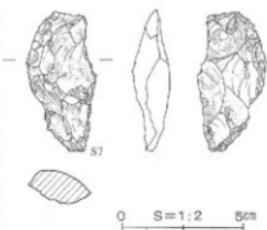


Fig.139 包含層出土遺物実測図(6)

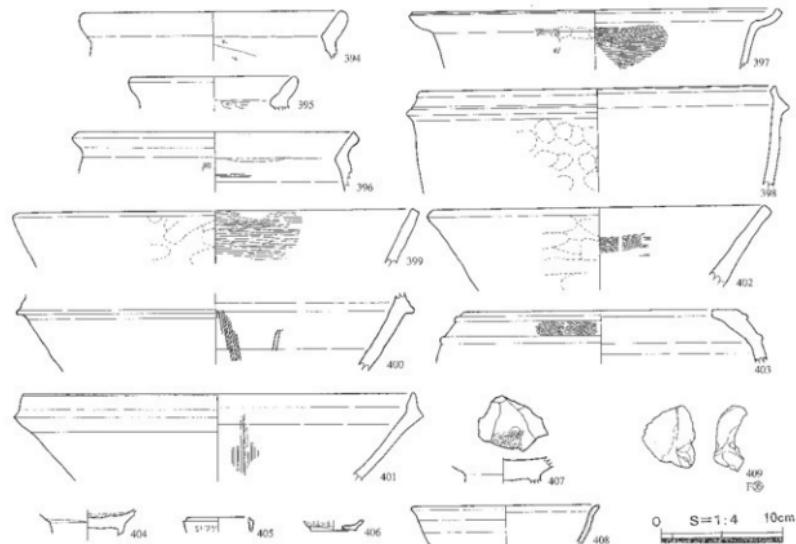


Fig.140 包含層出土遺物実測図(7)

Tab.108 包含層出土遺物観察表(6)

No.	Fig. PL.	グリット名	出土位置	器種	法量(cm)	特徴	胎土	色調	備考
394	Fig.140 PL.36	K 6	③層	土師質十枚 瓦・縁部	口径 器高 △ 21.2 △ 4.0	口縫端部は擦らみ丸くおわる。内外面 ともに横方向のナガ。内面縫部以下 はアズリ。	2mm以下の砂 粒を含む。	に赤い黄褐色10YR6/3	1/12以下残存
395	Fig.140 PL.36	G 5	③層	上縁質土器 瓦・縁部	口径 器高 △ 18.4 △ 2.5	口縫部は「の」字状に彎曲する。内面は 横方向のナガ。	1~2mmの白い 砂粒を含む。	灰黄褐色10YR5-2 に赤い黄褐色10YR6/3 外: 海灰褐色10YY4/1 内: に赤い黄褐色10YR6/3	約1/12残存
396	Fig.140 PL.36	H 3	③層	瓦質土器 縁部	口径 器高 △ 22.6 △ 4.9	口縫部端部やヒザ部から外側する縫をも つ。外縫部ともに横方向のナガ。	白い細砂が 混じる。	約1/12残存	
397	Fig.140 PL.36	F 5	③層	瓦質土器 縁部	口径 器高 △ 30.0 △ 4.8	口縫部は内凹し、半円におわる。内面 は縫部以下横方向のカケロ。	白い細砂混 じる。	黄褐色10YR8/6	約1/8残存 胎土分析試料 基盤 5・在地層
398	Fig.140 PL.36	I 6	③層	瓦質土器 縁部	口径 器高 △ 29.2 △ 4.9	口縫端部は内側する角をもつ。断面 が角形状の細い縫を貼り付けた。内外面 ともに横方向のナガ。	1~3mmの白 い砂粒が多 く混じる。	灰色5Y5/1	1/12以下残存 胎土分析試料 基盤 5・在地層
399	Fig.140 PL.36	I 5	③層	上縁質土器 瓦・縁部	口径 器高 △ 32.4 △ 4.2	口縫端部は平見。内面に横方向のカケ ロ。外縫部以下横方向のカケロ。	0.5mm以下の 砂粒混じる。	淡黄褐色7.5YR6/6	約1/8残存
400	Fig.140 PL.36	I 4	③層	瓦質土器 縁部	口径 器高 △ 32.0	口縫端部は上に突出するとみられる が、上方に欠損する。	白い細砂混 じる。	灰色N4/0	約1/12残存 前削
401	Fig.140 PL.36	K 6	③層	瓦質土器 縁部	口径 器高 △ 32.0 △ 7.0	口縫端部は最も尖い三角形。内面口縫 部の頭面部附近に施塗する横方向の指 揮痕。西隣をあけて横方向の指揮。	砂粒なし。 外: に赤い基盤5.5YR4/3 内: 海灰褐色5.5YR4/1 内: に赤い壁5.5YR4/3	約1/12残存 前削	
402	Fig.140 PL.36	F 6	③層	瓦質土器 縁部	口径 器高 △ 24.6 △ 7.2	口縫端部は平底。内面に横方向のカケ ロ。外縫部以下横方向のカケロ。	1mm以下の砂粒 が多量混じる。	に赤い黄褐色10YR6/3	約1/10残存
403	Fig.140 PL.36	G 6	③層	瓦質土器 瓦質	口径 器高 △ 44	外縫部に施塗状の突介を2条貼り付け て、内面に施塗状の突介を2条貼り付ける。	白い細砂少 量混じる。	に赤い黄褐色10YR6/4	約1/10残存
404	Fig.140 PL.39	H 3	③加	白磁 瓦底部	器高 △ 22	やや細い透明白形状の窓をもつ。内面 はち上がり付近の縫を輪状に接ぎ取 り、その内側に砂が付着する。	黒い細砂が 混じる。	灰白色NB-0	底部約1/2残存 可塑性
405	Fig.140 PL.39	G 6	③層	青白磁 合子身底部	口径 器高 △ 5.0 △ 1.2	内面は縫端部は露胎。外縫に露胎。	砂粒なし。	灰白色N7/0	約1/12残存
406	Fig.140 PL.39	K 4	③層	青白磁 合子身底部	器高 △ 0.9 △ 0.8	外縫部は露胎。外縫に露胎。	砂粒なし。	灰褐色7.5Y6/1	約1/3残存
407	Fig.140 PL.39	K 4	③層	青白磁 合子身底部	器高 △ 21	外縫端部内縫部は露胎。内縫部に花の 模様が2つ入り。	砂粒なし。	灰褐色7.5Y7/1	約1/3残存 葉巻灰褐色
408	Fig.140 PL.39	G 6 ~ F 7	③層	青白磁 瓦底部	口径 器高 △ 15.5 △ 3.3	口縫端部は内縫部に外側に屈曲する。内 縫部ともに横方向。	黒	灰オリーブ色7.5Y6/2	約1/6残存 葉巻灰褐色
409	Fig.140 PL.45	I 5	③層	青白磁 瓦底部	口径 器高 △ 4.0	内面は著しく焼成。外縫は露胎物が付 いてある。	1mm以下の砂粒 が多量混じる。	橙色SYR7/8	接合部約1/5残存

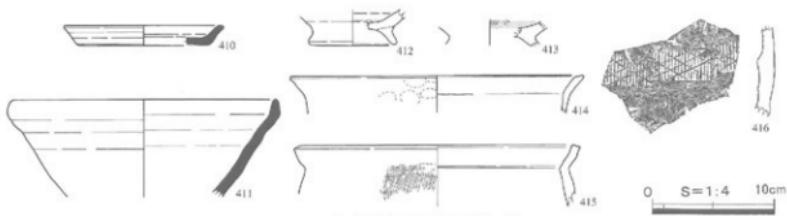


Fig.141 包含層出土遺物実測図 (8)

Tab.109 包含層出土遺物観察表 (7)

No.	Fig. PL.	テリッド番	出土位置	器種	法量 (cm)	特徴	埴土	色調	備考
410	Fig.141 PL.37	J 4	②層	須恵器 皿	口径 △13.0 器高 1.65 底径 △10.8 切り口。	外底面ともに回転模ナデ。外底面は糸妙粒を含む。	0.5mm以下 の妙粒を含む。	灰色5Y6/1	約1/8残存
411	Fig.141 PL.37	J 5	②層	須恵器 鉢口縁部	口径 △21.2 器高 △ 8.0	口縁内面はやや長い三角形形。内外面ともに横方向の意識なナデ。	0.5~2mmの 妙粒多量混入。	灰色7.5Y6/1	約1/10残存
412	Fig.141 PL.37	I 4	③層	土師質土器 高台付杯底部	面積 △ 2.8 裏面 △ 2.8 裏面僅半径台	裏面ハの字状のやや高い高台を貼り付けた。	微細な妙粒 を含む。	橙色25YR6/8	約1/12残存
413	Fig.141 PL.37	J 6	②層	黒色土器 高台付底部	器高 △ 1.9	面積ハの字状の高台を貼り付けた。 面積不定方向のみがき。内面黒色処理。	妙粒が混じる。	橙色5YR6/8	1/12以下残存
414	Fig.141 PL.37	J 7	②層	土師質土器 器口縁部	口径 △24.0 器高 △ 3.0	内外面ともに洞調により彫刻不整明瞭。 横方向のナデ。	1mm以下の白い 妙粒混入。	に赤い黃褐色10YR5/3	約1/10残存
415	Fig.141 PL.37	I 4	③層	土師質土器 器口縁部	口径 △23.4 器高 △ 5.0	口縁内面は平面面をもつ。外面部方向 のみのハケ目。内面ナデ。	0.5mm以上の妙 粒を多く含む。	灰黒褐色10YR6/2	1/12以下残存
416	Fig.141 PL.37	J 6	②層	瓦質土器 火薙	器高 △ 7.5	外面部に菱形の文様を施す。内面横方向 のみのナデ。	1mm以上の妙 粒多量混入。	外)に赤い青磁色10YR5/3 (内)灰白色10YR4/1	—

径の差が小さく立ち上がりが短いもので、鎌倉期の所産であろう。392・393はいわゆる柱状高台と呼称されているもので、上部は皿あるいは杯状になるとみられる。いずれも柱部のみの出土である。同時期の鳥根県の遺跡である石台遺跡(2)や天満谷遺跡(3)からまとめて出土している。そのほか土師質土器の壺394・395、瓦質土器の鍋396・397、羽釜398、土師質土器の鉢399、陶器の鉢400~402、瓦質土器の風呂403、貿易陶磁器の白磁碗404、青白磁合子405・406、青磁碗407・408、罐の羽口片409(F38)がある。曆年代を推定せるものは、備前の鉢400・401が開墾IV B期(4)で15世紀中葉、瓦質土器の風呂403が15世紀頃(5)、白磁罐類碗404はやや時期が遅るもの、青磁碗407・408などいずれも15世紀頃の遺物が主流を占める。在地土器との関係は、394・395は平安・鎌倉期とみられるが、398の羽釜などは羽部の退化が著しく、同様の形状は鳥取市の布勢遺跡の池状遺構(6)でも出土しており、ここでも青磁碗と共に作っている。

これらのことから、③層の包含層は15世紀頃と考えられ、この直接の下面に耕作痕があり、さらに耕作痕よりも深い遺構として集落があると考えられ、集落の遺構内出土遺物は鎌倉期となり、この関係に矛盾は生じない。

②層 (Fig.141・142 Tab.109・110 PL.37・39・48)

概ねJグリッドよりも北側に③層を覆う②層が検出された。これは水平方向の堆積で、安定している。時期的には下限の遺物は近世後期になり、いわゆる近世の耕作にともなう層であるとみられる。

図化し得た遺物は須恵器の皿410、中世須恵器の鉢411、土師質土器の高台付412、黒色土器413、土師質土器の壺414、鍋415、瓦質土器火薙416、陶器碗417、皿418~420、袋物の底部421、鉢422~425である。貿易陶磁器は白磁碗426・427、青磁碗428~430である。染付は431~433で、S 8は砾石である。410は平安初期、412・413は平安中期、414~416は鎌倉期の所産であるが、他はいずれも中世後期から近世のものである。曆年代の比較的明らかなものは417が18世紀、418~420は肥前系でいずれも唐津か。16世紀末。備前の鉢422は口縁部が無いために時期は不明である。425も備前か。423・424は時期は不確定ながら須佐唐津の鉢か。白磁426はII類碗、427はV類碗、428は龍泉窯系割花文碗で青磁はやや下るもの鎌倉期の範囲内。429は雷文の青磁碗、430は無文の碗

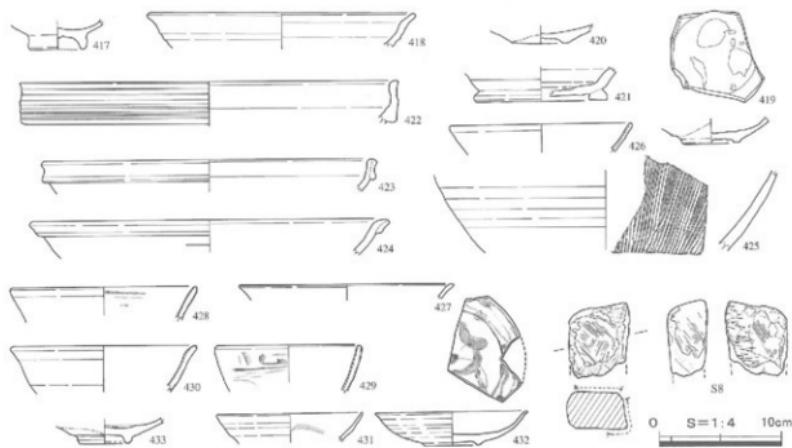


Fig.142 包含層出土遺物実測図 (9)

Tab.110 包含層出土遺物観察表 (8)

No.	Fig. PL.	チャット若	出土位置	器種	法量(cm)	特徴	胎土	色調	備考
417	Fig.142 PL.39	J 4	②層 陶底部 高台後壁面	陶器 高台後壁面以外は高台底部内面も施釉。	器高 △ 2.3 高台 △ 4.4	砂紋なし。	にぶい黄褐色10YR7/2 1/2灰粗 窓透か	高台窓部付近の 1/2灰粗 窓透か	
418	Fig.142 PL.39	J 4	②層 直口縁部	陶器 直口縁部	LH径 △ 22.1 器高 △ 1.4	LH縫合部に段をもつ立ち上がり、 口縁部付近で段をもつ立ち上がり、 内部はやや糊付。	白い縫合と黒い 糊付の2つあるもの が少里見出る。	湖灰色10YR6/1	約1/10残存 肥前系 傷津か
419	Fig.142 PL.39	J 4	②層 直口部	陶器 直口部	器高 △ 2.0 高台 △ 4.5	高台を引き出す。外底部付近は露胎。 内底面に2ヵ所の發目。	砂粒なし。	にぶい黄褐色10YR7/2 1/2灰粗	底部は完全な 肥前系 傷津か
420	Fig.142 PL.39	E 4 -折	②層	陶器 直底部	器高 △ 1.5 高台を削り出す。	砂粒なし。	褐色7.5YR7/6	1/2残存	
421	Fig.142 PL.37	H 4 東6 H 5 -基	②層 袋足底部	陶器 袋足底部	器高 △ 2.7 高台径 △ 10.8	断面圓形形状の厚く轆轤の高台をもつ。 外底部にもに自然割が垂直に付着する。	砂粒なし。	湖灰色10YR6/1	約1/12以下残存 在地か
422	Fig.142 PL.37	J 4	②層 鉢口縁部	陶器 鉢口縁部	口径 △ 31.0	LH縫合部が大きく上方向に張裂し、7 条の凹部をもつ。	黒	灰赤色10R4/2	約1/12残存
423	Fig.142 PL.37	I 4	②層 鉢口縁部	陶器 鉢口縁部	口径 △ 27.2	LH縫合部を折り返して中央を抜くナメ	白い縫合が 見れる。	灰白色NG-0	1/12以下残存
424	Fig.142 PL.37	J 4	②層 鉢口縁部	陶器 鉢口縁部	口径 △ 29.2	口縁部を折り返して中央を抜くナメ	0.5mmの白い縫 合が混じる。	灰色5Y6/1	1/12以下残存
425	Fig.142 PL.37	J 4	②層 鉢口縁部	陶器 鉢口縁部	器高 △ 6.3	内面に隙間少く急速旋の捺目が入 外縁に凹字は船方の文。	白い縫合が 見れる。	にぶい黄褐色10YR7/3	-
426	Fig.142 PL.37	H 7	②層 直口部	陶器 直口部	LH径 △ 15.0 器高 △ 2.4	LH縫合部はやや小さい五線状をなす。 外底部付近は横方的の網目模様。	青	浅黄色2.5Y8/4	約1/12残存 白磁Ⅲ瓶瓶
427	Fig.142 PL.38	G 7	②層 直口部	陶器 直口部	器高 △ 17.6	LH縫合部が外側に屈曲して尖る。	砂粒なし。	淡白色2.5Y7/1	約1/12残存 白磁Ⅲ瓶瓶
428	Fig.142 PL.38	J 4	②層 直口部	陶器 直口部	口径 △ 15.4 器高 △ 2.8	内面に劃文。	黒	オリーブ灰2.5GY6/1	龍泉窑划花碗
429	Fig.142 PL.39	H 7	②層 直口部	陶器 直口部	口径 △ 12.0	外面部に當文帶あり。	黒	灰色5Y6/1	約1/12残存 龍泉窑碗
430	Fig.142 PL.39	H 6 ~	②層 直口部	陶器 直口部	器高 △ 3.8	LH縫合部が近は外側に屈曲する。内外 ともに無文。	黒	オリーブ灰10Y5/2	約1/4残存 薩摩窯黑釉
431	Fig.142 PL.39	I 4	②層 直口部	陶器 直口部	口径 △ 12.0 器高 △ 2.3	内面に半身の文彫を描く。	砂粒なし。	灰白色5Y7/1	約1/12残存 肥前系か
432	Fig.142 PL.39	J 4	②層 染付 直	陶器 直	口径 △ 12.4 器高 △ 2.75	口縁部に段をもつ立ち上がり。 内側に砂粒付。	黒	灰白色5Y7/1	口縫型1~6残存 底部約1/4残存 在地か
433	Fig.142 PL.38	I 4	②層 染付 直	陶器 直	器高 △ 21 高台径 △ 4.0	開口付近高台部付近直角部。内面見込み は輪状に粘を括き取る。わずかに垂め 付けあり。	砂粒なし。	灰白色5Y7/1	約1/2残存
58	Fig.142 PL.48	I 4	②層 灰石	石材	長さ：5.3 幅：5.0 高さ：2.9 重さ：120g 3面の研ぎ面あり。	石材：花崗岩質アブリト(平岡花崗岩)	石材：花崗岩質アブリト(平岡花崗岩)	-	-

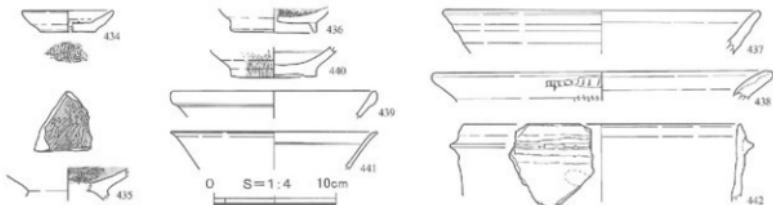


Fig.143 包含層出土遺物実測図 (10)

Tab.111 包含層出土遺物観察表 (9)

No.	Fig. PL	テリッヂ名	出土位置	器種	法量 (cm)	特徴	鉢土	色調	備考
434	Fig.143 PL37	H 4	①層	土師質土器 器高 底径	口徑 △ 7.6 器高 △ 1.7 底径は圓板状切り。	外縁立ち上がりをやや強くナザる。外縁細かな砂粒を含む。	に赤い黄褐色10YR6/3	約1/4残存	
435	Fig.143 PL37	I 4 ~ I 6	①層	黒色土器 高台付瓦底型	器高 △ 1.6	断面ハの字形状の高台を貼り付ける。内面中央付近斜状状、周縁部輪状のみがき。内面黑色處理。	砂粒なし。	褐色2.5YR6/6	高台部大損 底部付近1/4残存
436	Fig.143 PL37	H 5	①層	黒色土器 高台付瓦底型	器高 △ 1.9	断面ハの字形状の高台を貼り付ける。内面不規則ながきがある。内面黑色處理。	微細な砂粒を含む。	外) 棕褐色5YR6/6 内) 黑色10Y2/1	約1/3残存
437	Fig.143 PL37	G 5	①層	土師質土器 裏L1縁部	口徑 △ 26.0	口縁部は大きく外反する。内外面ともにコロナザ。	0.5mm以下の砂粒を少し含む。	褐色5YR6/6	1/12以下残存
438	Fig.143 PL37	H 5	①層	土師質土器 裏L1縁部	口徑 △ 27.5	口縁部は大きく外反する。内外面ともにコロナザ。	砂粒なし。	黒色2.5YR2/1	1/12以下残存
439	Fig.143 PL39	I 4	①層	白磁 綺口縁部	口徑 △ 16.7 器高 △ 2.3	断面部を外側に折り返して玉締をもつ。内面輪状の突起をもつことにより1条の輪状の突起をもつ。	砂粒なし。	灰白色2.5Y7/1	約1/12残存 白磁付属鏡
440	Fig.143 PL39	H 5	①層	白磁 腹底部	器高 △ 2.4 底径 △ 7.0	断面ハ形底の1枚1枚貼り出した高台をもつ。外側底部折れは直角的。	外) 灰白色5Y7/1 内) 灰白色2.5Y7/1	1/12残存 白磁付属鏡	
441	Fig.143 PL39	H 5	①層	白磁 綺口縁部	口徑 △ 13.0	口縁部は外側に稍曲して尖る。内面口縁部からやや下へいった位置に1本の圓錐形をもつ。	砂粒なし。	灰白色2.5Y7/1	約1/12残存 白磁V類鏡
442	Fig.143 PL37	I 4	①層	夾帶文土器 裏L1縁部	口徑 △ 22.8 器高 △ 6.2	口縁部はやや尖る。上面三角形輪状の突起を貼り付ける。外縁横方向のやや粗いナザ。内面L1縁部飾船を強くナザる。	1mm程度の砂粒を含む。	浅黃褐色10YR8/3	約1/12残存

でいずれも15~16世紀。染付の431~433は在地産で近世後期と推定する。

(1) 層 (Fig.143 Tab.111 PL37・39)

②層の上層であるが、②層の範囲よりもさらに北側にある、近世以降の耕作土である。出土した遺物もわずかである。近世以降の遺物が多いが、いずれも細片で、遺構外から出土したものと大きな違いはないため、ここでは中世以前の遺物に限り掲載している。

土師質土器は、434の皿、内里の黒色土器435・436、壺437・438である。貿易陶磁器は439・440の白磁IV類碗、441の白磁V類碗である。442は夾帶文土器である。

注

- ここでは中世須恵器の範疇にし、六古窯などの中世陶器とは区別している。勝間田・亀山系の陶器に関しては、近年もその生産地については明らかではない。
- 鳥根県教育委員会 1986『石台跡』
- 中国電力株式会社鳥根支店・鳥根県教育委員会1987「X天満谷遺跡」「北松江幹線新期工事、北松江連絡線新設工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書」
- 間壁忠彦 1991『備前焼』ニューサイエンス社 考古学ライブラーー60
近年は備前焼きについて、山口県でも類似する焼成構造を検出している。岩崎仁志 1999『防長地域の中世陶器窯』『陶垣』第13号 そのため消費地においては備前焼と断定することは難しく、備前系の名称を使用する。
- 佐藤亞聖 1996『大和における瓦質土器の展開と画期』『中近世土器の基礎研究XⅠ』日本中世土器研究会
- 財団法人鳥取県教育文化財団 1981『布勢遺跡発掘調査報告書』

(10) 遺構外出土遺物

遺構外出土遺物とは、出土遺構・層序が不明な遺物で、擾乱層や現代まで使用されている暗渠、擾乱溝など水路から出土した遺物も含まれる。時期的には弥生時代から近代、現代に至るまでの遺物が出土している。

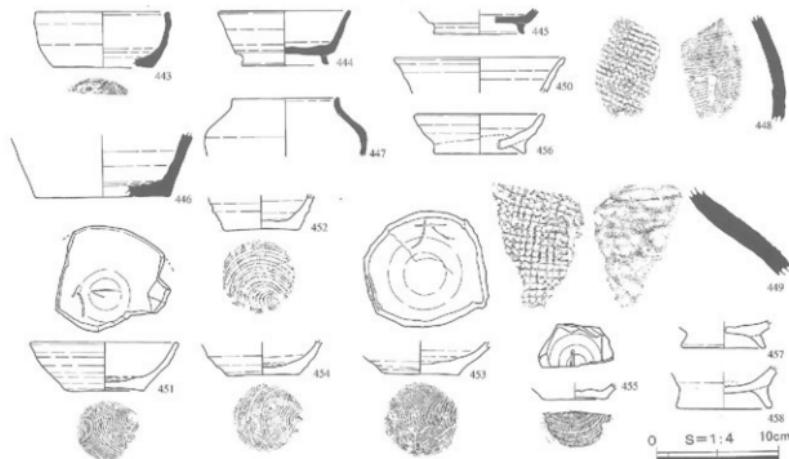


Fig.144 遺構外出土遺物実測図(1)

Tab.112 遺構外出土遺物観察表(1)

No.	Fig. PL.	遺物名	出土位置	特徴	法量(cm)	特徴	地土	色調	備考
443	Fig.144 PL.37	2区西 側水溝	-	傾慈器 杯	口径 □100 器高 □8.1	口縁裏部がわずかに内側に傾く。外面部 器縁付近部が灰褐色化。底面は縦筋 系切。	0.1m大 きな砂粒を含む。	灰褐色N6/1	約1/6残存
444	Fig.144 PL.37	2区東 側水溝	-	傾慈器 高台付杯	口径 □108 器高 □4.4 高台径 □6.8	画面ハの字状の高台が立ち上がりから やや内側に貼り付けられる。	0.5m大 きな砂粒を含む。	灰褐色N6/1	口縁部下1/12以下 残存 底面の1/4残存
445	Fig.144 PL.37	1区	-	傾慈器 蓋付高台付	器高 □21 高台径 □6.4	立ち上がりからやや内側に、断面直角 系切後底付に付ける。	白い繊維が 混じる。	灰色5Y6/1	約1/8残存
446	Fig.144 PL.37	2区	-	傾慈器 蓋底部	器高 □5.1	外底面ナデ。立ち上がりは横方向の丁 字ナデ。	0.5m大 きな砂粒を含む。	灰白色5Y7/1	約1/5残存
447	Fig.144 PL.37	2区	-	傾慈器 底部	口径 □8.5	外面部に自然剥離付着。	黒褐色質 感有。	灰色5Y6/1	体部約1/8残存
448	Fig.144 PL.37	3区 美土	-	傾慈器 底付部	器高 □8.4	外底面字形のタタキ、内面カキ目。燒 成は軟質。	1m大 きな砂粒を含む。	灰褐色25YR6/1 若頬3・海綿4型 斜上分界斜井 基盤2・標水田	土石分界斜井 若頬3・海綿4型 斜上分界斜井 基盤2・標水田
449	Fig.144 PL.37	2区西 側水溝	-	傾慈器 底部	器高 □7.0	外底面字形のタタキ。内面ナデ。	青	外) 灰褐色25Y7/2 内) 灰褐色25Y7/2	
450	Fig.144 PL.37 P.4	1区	-	土師質土器 杯口部	口径 □140 器高 □30	口縁裏部はやや強いナデにより外周 に凹曲する。	1m以上の大 きな砂粒が混じる。	明褐色7.5YR5/6	約1/12残存
451	Fig.144 PL.37	3区 美土	-	土師質土器 底付部	口径 □12.2 底径 □6.5	裏部は内側凹曲する。外底面回転系切り、 内側面「レ」字及び「！」字状のヘラ書き 有。	2m以下の砂 粒を多く含む。	褐色25YR6/6	口縫部のみ1/3欠損
452	Fig.144 PL.37	2区西 側水溝	-	土師質土器 底付部	器高 □29 底径 □6.2	外底面立ち上がりは強いためによる凹凸 が大きい。外底面回転系切り。	1m大 きな砂粒を含む。	褐色25YR6/6	底部完存
453	Fig.144 PL.38	3区 表土	-	土師質土器 底付部	器高 □28 底径 □6.4	外底面回転系切り。内底部に「大」字状 のヘラ書き有。	1m程度の砂 粒を含む。	淡褐色7.5YR8/8	底部完存
454	Fig.144 PL.38	3区 水路	-	土師質土器 底付部	器高 □28 底径 □6.6	口縁部は内側凹曲する。外底面回転系切り。	青	淡黃褐色10YR8/3	底部ほぼ完存
455	Fig.144 PL.38	1区	-	土師質土器 底付部	器高 □13 底径 □5.5	外底面は回転系切り。内底面にへう苔 きがき。	白い繊維が 混じる。	褐色5YR6/6	底部約1/2残存
456	Fig.144 PL.38	1区	-	土師質土器 高台付底付	口径 □106 器高 □32 高台径 □7.4	断面三角形状の低い高台を貼り付ける。 外底面立ち上がり付近、やや強いナデに 由来の凹凸有。	白い繊維が 多量に混じ に付する。	灰褐色10YR6/3	約1/4残存
457	Fig.144 PL.38	3区 表土	-	土師質土器 底付部	器高 □22 底径 □7.8	貼り付け高台部がやや高く高台気泡で、 画面ハの字状を呈する。	1m以下の砂 粒を含む。	褐色25YR6/8	約1/4残存
458	Fig.144 PL.38	3区 表土	-	土師質土器 高台付底付	器高 □35 高台径 □7.8	貼り付け高台部がやや高く高台気泡で、 画面ハの字状を呈する。	粗糲な砂粒 を含む。	淡黃褐色10YR8/4	高台部のみ2/3残存

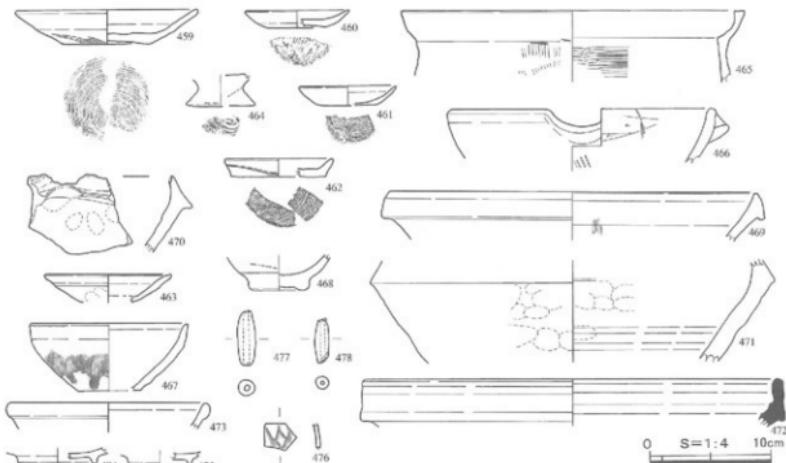


Fig.145 遺構外出土遺物実測図 (2)

Tab.113 遺構外出土遺物観察表 (2)

No.	Fig. PL.	遺構名	出土位置	器種	法量 (cm)	特徴	黏土	色調	備考
459	Fig.145 PL.38	1区東側 木棒付瓦	-	土師質土器 皿	口径 高さ 底径 ※ 15.0 7.2 7.2	口縁部に鋸歯状切り欠き。煤付着。内面底 部斜状にナデる。	0.5mm以下の 砂粒をわず かに含む。	褐色SYR6/8	口縁部4/5欠損
460	Fig.145 PL.38	2区西側 水路	-	土師質土器 皿	口径 高さ 底径 ※ 8.6 4.4 4.4	口縁部は内凹する。外底面に鋸歯状切り 欠きを含む。	0.5mm大の砂 粒を含む。	浅黃褐色SYR8/4	口縁部4/5欠損
461	Fig.145 PL.38	1区	-	土師質土器 皿	口径 高さ 底径 ※ 8.0 4.8 4.8	口縁と底径の差は大きい。外底面は刃 形切り。	砂粒なし。	にぶい褐色SYR7/4	約1/4残存
462	Fig.145 PL.38	2区東側	-	土師質土器 皿	口径 高さ 底径 ※ 9.8 5.8 5.8	口縁と底径の差が小さい。外底面に刃 形切り。	砂粒なし。	褐色SYR7/6	約1/3残存
463	Fig.145 PL.38	1区	-	土師器 皿	口径 高さ 底径 ※ 10.4 5.3 5.3	手づくねによる成形。口縁の先端を1 回ナカでやや外側に留め曲げる。	砂粒なし。	浅黃褐色10YR8/3	約1/5残存
464	Fig.145 PL.38	3区 表土	-	土師質土器 皿	口径 高さ 底径 ※ 8.6 5.6 5.6	高台面間に圓筒状切り振。	1mm程度の砂 粒を含む。	明赤褐色5YR5/8	約1/2残存 口縁部欠損 約1/2残存 胎土分析試料 基準分・在地産
465	Fig.145 PL.38	1区上層 鍋口縁部	-	瓦質土器 片口	口径 高さ 底径 ※ 28.2 △ 5.8 △ 2.3	口縁部は受け口状で、縁部は平頭面を もつ。柄部直下に外腹板方向、内面柄 方向の凹凸。	1mm以下の砂 粒と粗粒が 混じる。	外)にぶい灰褐色10YR5/3 内)黄褐色25Y1/1	
466	Fig.145 PL.38	1区	-	瓦質土器 片口口縁部	口径 高さ 底径 ※ 19.8 △ 3.9 △ 2.3	口縁部は模様や中に内凹して丸くおわ る。内部の一部に留め目あり。外唇は横 方向のナブ。	白い粗粒が 多量に混じる。	にぶい黄褐色10YR7/2	約1/12残存
467	Fig.145 PL.39	2区 南壁裏	-	陶器 鍋口縁部	口径 高さ 底径 ※ 13.0 △ 5.6 △ 5.6	歯付口縁部で灰白色。内面底とも各 部位は黒褐色。口縁部付近は褐色の外 部留め目は無く、輪郭は丸められ。	微細な粗粒 を含む。	灰白色25Y7/1	口縁部約1/3残存
468	Fig.145 PL.39	3区 水路	-	陶器 鍋	口径 高さ 底径 ※ 2.9 4.4 4.4	高台部分は厚く、底付高。内面見込み にはクロ目が開き、透明感をかける。	粗	明黄褐色10YR7/6	高台部約1/2残存
469	Fig.145 PL.38	I 8	-	陶器 鍋口縁部	口径 高さ 底径 ※ 23.6 △ 4.2 △ 2.0	口縁部は繩面三形形状で、下方方に 凹凸がある。	1mm以下の砂 粒を含む。	灰赤色25YR4/2	1/12以下残存
470	Fig.145 PL.38	J 9	-	陶器 鍋口縁部	口径 高さ 底径 ※ 6.5 8.3 8.3	口縁部は上方に強張する。外唇体部 には押捺痕や内側の方向のナブ。	1~3mmの砂 粒が多量。	外)灰赤色25YR4/2 内)陶褐色25Y4/1	1/12以下残存
471	Fig.145 PL.41	2区東側 水路	-	陶器 鍋口縁部	口径 高さ 底径 ※ 8.3 8.3 8.3	口縁部は上方に強張する。外唇体部 には押捺痕や内側の方向のナブ。	1mmの白い砂 粒と白い粗粒 が混じる。	外)灰赤色25YR4/2 内)褐灰色10YR4/1	1/12以下残存 痕跡
472	Fig.145	3区 表土	-	陶器 鍋口縁部	口径 高さ 底径 ※ 34.2 △ 4.0 △ 4.0	口縁部にはほぼ直立する。内面は圓筒状 である。	1mm以下の 砂粒を含む。	褐色N5/0	口縫部約1/12残存
473	Fig.145 PL.29	1区	-	陶器 鍋口縁部	口径 高さ 底径 ※ 16.1 △ 2.0 △ 2.0	口縁部を外側に折り返して立縁をもつ。	砂粒なし。	灰白色NS-0	約1/12以下残存 白磁器類
474	Fig.145 PL.39	3区 水路	-	陶器 鍋	口径 高さ 底径 ※ 11 8.6 8.6	高台内側面ともに難焼。豊作付近には 留め目が付する。	粗	灰白色NN-0	高台部約1/4残存
475	Fig.145 PL.29	1区	-	陶器 鍋底部	口径 高さ 底径 ※ 13 6.4 6.4	高台内側面ともに難焼。	砂粒なし。	灰白色NS-0	約1/6残存
476	Fig.145 PL.39	1区 北壁	-	陶器 子供小皿	口径 高さ 底径 ※ 2.0 1.1 1.1	外側に三角形状の型壓あり。	粗	灰褐色75Y7/1	不明
477	Fig.145 PL.48	2区東側 水路	-	土器	底径 高さ 底径 ※ 4.5 1.4 1.4	中央部がやや膨らむ。	0.5mm以下の 砂粒を含む。	明赤褐色25Y5/6	ほぼ完存
478	Fig.145 PL.48	3区 表土	-	土器	底径 高さ 底径 ※ 4.8 1.1 1.1	中央部がやや膨らむ。	微細な粗粒 を含む。	明赤褐色5YR5/8	西端部欠損

Tab.114 遺構外付土器遺物観察表 (3)

No.	Fig. PL.	遺物名	出土位置	器種	法算(cm)	特徴	胎土	色調	備考
479	Fig.146 PL.40	3区 水路	-	染付 瓶	口径 高さ 底径	11.2 8.0 5.2	陶筋染付。呉付以外は施釉。外面高台に2本の施釉部には風景が描かれる。暗紅色の柄で貴人が多くみられる。	青	明オリーブ灰褐色2.5Y7/1 口縁部1.12以下残存 底部約1/4残存
480	Fig.146 PL.40	3区 水路	-	染付 碗底部	器高 高台径	△3.3 5.2	陶筋染付。呉付以外は施釉。外周全体には風景が描かれる。高台の底入が多くみられる。	青	灰褐色2.5Y5/1 底部約1/3残存
481	Fig.146 PL.40	3区 水路	-	染付 調口底部	口径 底径	12.8 5.1	口縁部はやや内落ちする。外面には草木を描く。内面見込みと口縁部下にそれぞれ模様をもつ。	青	灰白色NB/0 口縁部約1/5残存
482	Fig.146 PL.40 水路	-	染付 高台部	器高 高台径	△2.6 6.0	高い台形が直立する。外面には風景が描かれる。内面見込みには文字がある。	青	灰褐色7/0 底部約1/4残存	
483	Fig.146 PL.40	3区 水路	-	染付 高台部	器高 高台径	△3.5 4.4	小さく低い直向をもつ。裏込みには「支」の文様がある。	青	灰白色2.5Y5/1 底部には完存
484	Fig.146 PL.40 水路	-	染付 高台部	器高 高台径	△3.1 7.8	断面が角形の高台をもつ。外面高台の内側に1本の施釉。内面と口縁部には風景を描く。	青	灰白色7/0 成形約1/3残存	
485	Fig.146 PL.40	3区 水路	-	染付 碗底部	器高 高台径	△6.2 6.8	断面の字状のやや高い高台。底面には使用する。塗装は無地。外周風景、内面見込みに1本の施釉。	青	灰白色NB/0 底部約1/5残存
486	Fig.146 PL.40	3区 水路	-	染付 碗底部	器高 高台径	△4.5 4.4	小さな高台と立ち上がりの間に段をもつ。外周底部に1本の施釉。立ち上がりには草花文様。	青	灰白色NB/0 底部約1/3残存
487	Fig.146 PL.40	3区 表土	-	染付 高台部	器高 高台径	△2.6 5.9	小さな高台から内落ちする。断続は薄い。外周底部に1本の施釉。立ち上がりには草花文様。	青	灰白色NB/0 底部約1/2残存
488	Fig.146 PL.40	3区 水路	-	染付 高台部	器高 高台径	△2.9 3.1	小さな高台から内落ちする。断続は薄い。外周底部に1本の施釉。口縁部には花弁がある。	青	灰白色7/0 底部のみ2/3残存
489	Fig.146 PL.40	3区 水路	-	染付 碗底部	口径 底径	△8.2 5.9	口縁部は内凹した後に直立てておわる。外周には家屋を描く。	青	灰白色2.5Y7/1 口縁部約1/3残存
490	Fig.146 PL.40	3区 水路	-	染付 調口底部	器高 底径	△8.2 5.8	口縁部は直線状で外傾し、施釉は横筋が斜めに施される。外周底部に2本の施釉。口縁部には草花文様。	青	灰黑色(黒褐色) 底内色N7/0 口縁部約1/8残存
491	Fig.146 PL.40	1区	-	染付 底盤	器高 底径	△2.2 8.2	断続の高台で、高台内は施釉地。内面見込みの中央に1本、立ち上がりに2本の施釉。口縁部は内外両ともに草花文様を描く。	青	灰白色NB/0 底部約1/3残存
492	Fig.146 PL.40	3区 水路	-	染付 重	器高 底径	3.7 8.8	断続の高台で、高台内は施釉地。内面見込みの中央に1本、立ち上がりに2本の施釉。中央には草花、内面口縁部は斜筋などと草花、外周底部にも草花。	青	灰白色7/0 約1/8残存
493	Fig.146 PL.40	3区 水路	-	染付 皿底部	器高 底径	△2.7 10.6	断続の月桂樹で、高台内は施釉地。内面見込みの中央に1本、立ち上がりに2本の施釉。口縁部は内外両ともに草花文様を描く。	青	灰白色NB/0 底部約1/5残存
494	Fig.146 PL.40	1区	-	染付 瓶	口径 器高 底径	10.3 5.7 5.7	外周高台に2本、底部下部に2本の施釉。全体には家屋と船、駆船などの風景。内面見込みに淡黄と立ち上がりに1本の施釉。内面見込みには舟と橋などとの風景を描く。	青	明オリーブ灰褐色6/0 口縁部約1/12残存
495	Fig.146 PL.40	3区 水路	-	染付 皿	口径 器高 底径	△10.0 2.8 5.8	内面見込みには舟と橋。外周高内に2本、U形筋柱には舟と橋などの風景を描く。	青	灰白色N7/0 底部深青 口縁部1/12以下残存
496	Fig.146 PL.40	2区西側 水路	-	染付 瓶	口径 器高 底径	△6.9 6.6 4.6	口縁部は直立した後にむき出しにする。外周底部には右下と左上に2本の施釉。口縁部下に2本の施釉を上に開いて、間に2本の施釉を組合せた文様。	青	灰白色NB/0 底部付近1/2残存 (口縁部)1/12残存
497	Fig.146 PL.40	2区西側 水路	-	染付 皿	器高 底径	△1.8 9.1	中央が一段低くなる。内面口縁部に白の施釉標を焼き付ける。外周高内に中央に金色で「ISHA」と花の文様。	青	灰白色NB/0 底部約1/10残存

古代から中世の遺物

須恵器 (Fig.144 Tab.112 PL.37)

須恵器は古墳時代から平安時代まであるが、遺構外から出土したものは奈良から平安時代前期が中心である。平安時代中期の須恵器はほとんどが溝状造構からの出土である。杯443、高台付杯444・445、蘿底部446、短頸甕447がある。443は高広遺跡IVA期に併行する。445・446は同様のIVB期に併行し、奈良から平安時代前期に相当する。中世須恵器はいずれも甕体部片で、448は外面に格子状のタタキ、内面には横方向のカキ目を有する。449の外面は格子状のタタキであるが、内面は粗いナデである。

土師質土器・瓦質土器 (Fig.144・145 Tab.112・113 PL.37・38)

包含層からの出土が主である。時期的には平安時代から鎌倉時代のものが主であるが、一部中世後期の京都系土師質土器皿もみられる。杯はいずれも回転台成形で、底部には明瞭な回転糸切り痕跡をもつ。杯のU縁部450、

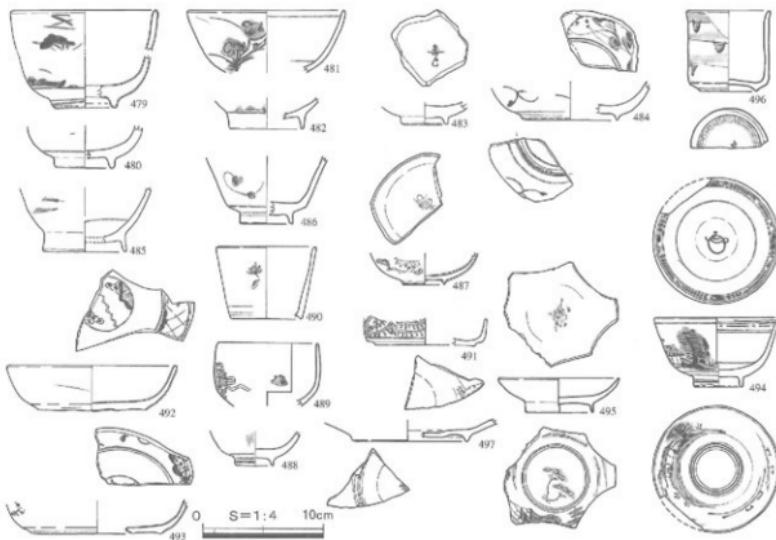


Fig.146 遺構外出土遺物実測図 (3)

無高台の杯451～455、高台付杯456～458である。いずれも口縁部はやや内湾しながら立ち上がる。456は底部が丸く、断面三角形状の低い高台が付く。457・458はいずれも足高状の高台と呼称されるもので、高台が外側に大きく張り出す。451・455は内面底部に「レ」字形状の、453は「大」字のへら書きを有する。

皿は口径が大小あるが、459は口径部が長く、あるいは杯と呼称する方が妥当かもしれない。口縁部は長く、外面に煤が付着している。あるいは灯明用に使用されたものか。皿460～462は外底面に回転糸切り痕をもつ。461の器壁は薄く、やや時期が下る可能性がある。462は口径と底径の差が小さく、立ち上がりが短いもので、押平弘法堂跡で一般的に出土するタイプである。463は手づくねの皿で、口縁端部付近で横方向に屈曲しており、底がやや深い。いわゆる京都系の土師質土器皿で、京都の編年帳によると16世紀前半に出土するものに類似する。何法量があるが、これは小さい部類に入るとみられる。464は柱状高台をもつ杯または皿で、高台の端部はそのままおわり、断面は三角形状となる。底面には明瞭に糸切り痕跡をもつ。

瓦質土器には鍋・羽釜・鉢などがあるが、このうち鍋と鉢が出土している。生産地については明確ではなく、在地の生産が予想されるが、窯跡は確認されていない。鍋465と擂鉢466が出土している。465は口縁部が受け口状になり、体部はわずかに外側に張り出す。体部外面には縱方向、内面は横方向のハケ目をもつものである。466は断面が灰白色で土師質ではない。片口鉢で、内面にわずかに擂目がみえる。

中世陶器 (Fig.145 Tab.113 PL.38・39・41)

中世陶器が遺構外から出土しているものは常滑および備前系の製品が中心である。遺構内や包含層からは常滑や越前が出土している。これらは中世前半の範疇に収まるが、常滑や備前は中世後半のものである。

467・468は天目茶碗である。瀬戸・美濃製品で大窯以前のもので、16世紀を遡るものであろう。

469～472はいずれも備前の鉢である。469・470は口縁部が上下に拡張し、三角形状になるもので、470は拡張面が外側に凸状、471は四状になるものの、いずれも概ね室町IV B期、15世紀頃に相当しよう。471については口縁端部が折損しているものの、やや還元気味の焼成である。細長い破片であり、擂目は確認できていない。472

Tab.115 遺構外出土遺物観察表 (4)

No.	Fig. PL	遺構名	出土位置	種類	法量(cm)	特徴	粘土	色調	備考
498	Fig.147 PL.41	3区 水路	-	陶器 甕口端部	口径 器高 △ 7.1	いわゆる人頭。口縁部は直立し、内側 して正面をなす。外側面ともに模ナゲ が頗るに残る。	1cm以下の砂粒 を多少と白い砂 が混じる。	褐灰色5YR4/2	口縁部約1/12残存
499	Fig.147 PL.42	3区 水路	-	陶器 底	口径 器高 △ 3.2 底径 △ 4.0	LJ型 直筒 底径	底縁部は内湾する。体部の形が同じでケズ り、外側端部上部は黃褐色の物。口縁端 部へ込みを多く内面には青灰色の施。	青	灰白色2.5Y7/1 約1/6残存
500	Fig.147 PL.42	3区 水路	-	陶器 底	口径 器高 △ 3.5 底径 △ 5.0	直筒	比較的小さく、直筒状圓錐形状の両方から 改良されて直筒状に作られる。外側端部 部は黄褐色の物。直筒部は文様か。	青	に近い赤褐色5YR4/4 高台部完全 底部下部約1/1残存
501	Fig.147 PL.39	3区 水路	-	陶器 底	口径 器高 △ 2.6 底径 △ 3.6	直筒	断面は三日月気味の直筒。内外面とも6 瓣状の内湾があり、内面は底に幅約3 cm以上の内湾。	青	に近い黄褐色10YR7/4 底部約1/2残存
502	Fig.147 PL.40	3区 水路	-	陶器 底	口径 器高 △ 2.6	直筒	内面底部は青灰色で波模様。外 面端部は青灰色を施す。	青	に近い赤褐色2.5YR5/3 -
503	Fig.147 PL.42	3区 水路	-	陶器 底	口径 器高 △ 4.9 底径 △ 8.4	直筒	断面は三日月気味の直筒。内面と6 瓣状の内湾があり、内面は底に幅約3 cm以上の内湾。	青	橙色5YR7/6 底部約4/3残存 裏面中央有近次痕
504	Fig.147 PL.41	2区東側 水路	-	陶器 底	口径 器高 △ 2.6 底径 △ 3.6	LJ型 直筒	断面は直筒で直立する突起がつく。い わゆる人頭。内面は黄色の施鉢。 外側は青灰色。底面に直筒切切り。	鉄なし	明赤褐色5YR5/6 約1/3残存
505	Fig.147 PL.41	3区 表土	-	陶器 甕口端部	口径 器高 △ 20.4 △ 4.8	直筒	断面端部は外側に突出して平底部をも つ。直筒部は無施。それ以外は外側面に 直筒部で波模様。外側部は横方向に連続 する斜面に指印がある。	白い細砂 を混じる。	橙色5YR6/6 口縁部約1/12残存
506	Fig.147 PL.42	2区西側 水路	-	陶器 甕口端部	口径 器高 △ 20.1 △ 5.2	直筒	直筒器の船上。内外面ともに青白釉被覆 の地に白施鉢があり、外側部は斜面状に 捺印があり、白色の表面を見る。	青	灰白色2.5Y7/1 口縁部約1/8残存
507	Fig.147 PL.41	3区 水路	-	陶器 甕口端部	口径 器高 △ 29.6 △ 7.2	直筒	断面端部は外側に突出して平底部をも つ。直筒部は外側に斜面があり、内側に波 紋がある。指印は無施。	白い細砂 を混じる。	に近い橙色5YR5/4 口縁部約1/5残存
508	Fig.147 PL.41	3区 水路	-	陶器 甕口端部	口径 器高 △ 28.8 △ 6.5	直筒	断面端部外側に折れ曲げられて一臺 になり、中央部は強くなっている。外側 部には施鉢を施す。内側は口縫部に 施鉢がある。	白い細砂混 じる。	明黄褐色10YR6/6 口縁部約1/12残存
509	Fig.147 PL.41	3区 表土	-	陶器 甕口端部	口径 器高 △ 30.8 △ 6.5	直筒	口縫部が外側に丸く突出する。外側 部には施鉢を施す。内側は口縫部に 施鉢がある。	白い細砂混 じる。	橙色2.5Y6/8 口縁部約1/12残存
510	Fig.147 PL.41	3区 水路	-	陶器 底	器高 △ 3.6 高台部厚 △ 11.8	直筒	底くぼみ・高台をつむ。高台内も一筋線 がかかる。見込みは幅約半分が左から 右までたたずに一気に上げられる。	1cm以下の砂 と白い細砂 が混じる。	に近い黄褐色10YR6/4 底部付近約1/6残存
511	Fig.147 PL.41	2区東側 水路	-	陶器 底	器高 △ 3.5 高台部厚 △ 10.6	直筒	高台は裏面はそのままのまま内面に施鉢 もある。指印は底面から内面やかに上げら れる。無施鉢が混在する。	白い細砂 を混じる。	橙色5YR7/6 底部付近約1/6残存
512	Fig.147 PL.41	3区 水路	-	陶器 底	器高 △ 6.7 高台部厚 △ 8.0	直筒	高い高台をもつ。外側高台付近のみ無 施鉢。内面は底込みから底部まで一貫施 す。大きな施鉢が底に位置する。	青	明赤褐色5YR5/6 底部約1/2残存
513	Fig.147 PL.41	2区東側 水路	-	陶器 底	器高 △ 7.3 底径 △ 11.8	直筒	底部は底でへり切れた。底部は直筒 状に外側に張り出る。縫合部がない。内側は 底に横筋のナギ穴が見える。	白い細砂 を混じる。	明赤褐色5Y5/6 底部付近約1/6残存
514	Fig.147 PL.41	3区 表土	-	陶器 底	器高 △ 3.8 底径 △ 12.6	直筒	底部は底で外側に張り出る。縫合部ない。 外側は青褐色の施鉢。	白い細砂 を少量	に近い橙色5YR6/4 底部約1/4残存
515	Fig.147 PL.42	2区西側 水路	-	陶器 底	器高 △ 4.7	直筒	十脚質。口縁端部は大きく外側に肥厚 する。上面は平坦。外側は直筒端部下部に 1本の凹彎があり。	1cm以下の 白色砂粒を 多く含む。	橙色2.5YR6/6 口縁部約1/12以下 残存

も還元気味の焼成である。口縁端部が細長くなり、間壁V期、16世紀頃の所産であろう。

貿易陶磁器 (Fig.145 Tab.113 PL.39)

貿易陶磁器で遺構外から出土したものはいずれも中国産の白磁・青磁・青白磁である。大宰府の分類によると、473は白磁碗IV類で、口縁端部は折り返して玉縁状になる。474は白磁の高台部であるが、高台部の内外面ともに施釉する。中世後期の所産である。475・476はいずれも青白磁で、475は底部片、476は体部外間に三角形状の型跡が継続する。内湾することから小型の合子身などが想定される。

近世以降の遺物

3区の南東隅から2区にかけて、現代まで使用されていた水路を調査した。ここから近世以降の陶磁器が多数出土している。生産地が比較的明らかなものとして、肥前系の染付・瀬戸・美濃窯の陶磁器、須佐系の鉢類などがある。しかし江戸後期以降については明瞭な区別ができず、在地系として記載している。傾向は、肥前系が瀬戸・美濃を凌駕し、瀬戸・美濃は天目や皿などの特定の器種がみられる。また近世後半には石州系の焼物がみら

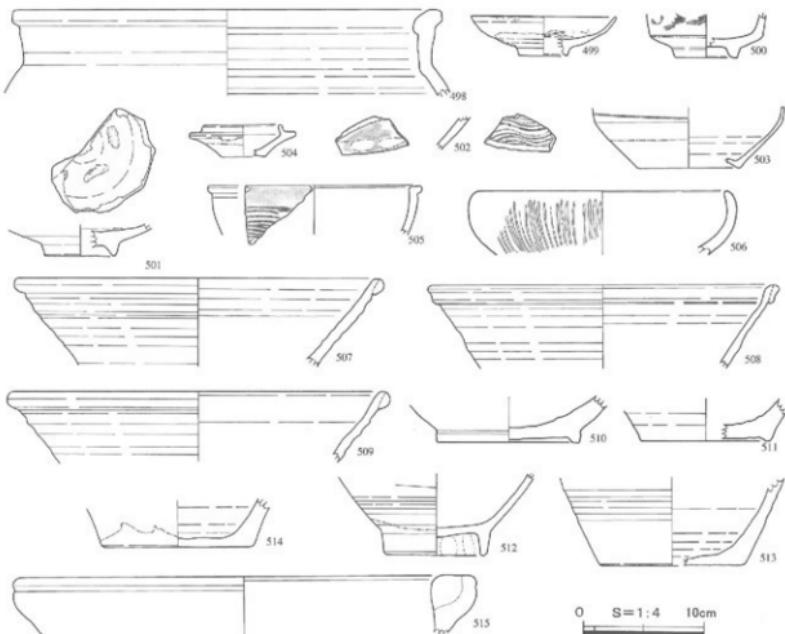


Fig.147 遺構外出土遺物実測図 (4)

れる。この時期の在地の製品は明らかではなく、今後の検討課題となろう。

染付 (Fig.146 Tab.114 PL.40)

肥前系の碗479・480は胎土が陶器質で、やや鼠色の釉調をもつわゆる陶胎染付である。481～483は皿で、482は直立する高い高台をもつ。483は見込みに「寿」の字がみえる。484は皿でいずれも18世紀の所産である。足高でハの字状に聞く碗485、見込みが屈曲し高台との間に段をもつ碗486、見込み中央に蝶の文様をもつ碗487、やや小ぶりの碗488・489、口縁部が直線状に外傾する490がある。また蛸唐草文をあしらう491がある。皿492・493はいずれも蛇の目剥ぎである。18～19世紀頃の所産であろう。幕末以降は生産地が不明である。碗494、高台付の皿495、口縁部の直立する碗496がある。497の皿は近年のものである。

陶器類・その他 (Fig.147 Tab.115 PL.40～42)

碗・皿などの食膳具、壺・鉢などの貯蔵具、調理具などが出土している。498は肥前の壺である。口縁部はほぼ直立し、壠部は外面に橢円形状に拡張する。近世初頭の肥前系の壺と考えられる。

食膳具は、瀬戸・美濃の陶器皿499がある。内面に淡い灰青緑色の釉がかかる。碗500は関西系か。501・502はいずれも肥前系、唐津付近の陶器である。501はやや大ぶりの皿で、内面に胎土目跡を3箇所以上持つ、近世初頭のものである。盤502は内面に茶灰色の縞模様のあるいわゆる刷毛唐津と呼称されるものである。時期は17世紀代であろう。503～506は近世の後期以降のいわゆる在地系とみられる。近代まで下るものもある。

調理具として擂鉢があげられる。507～511は須佐唐津もしくは石見焼きの擂鉢である。焼成は甘く口縁部が折り返され、中央付近は強く撫でられて窪み、低い高台が付く。512～514は擂鉢底部である。堺・明石・備前のも

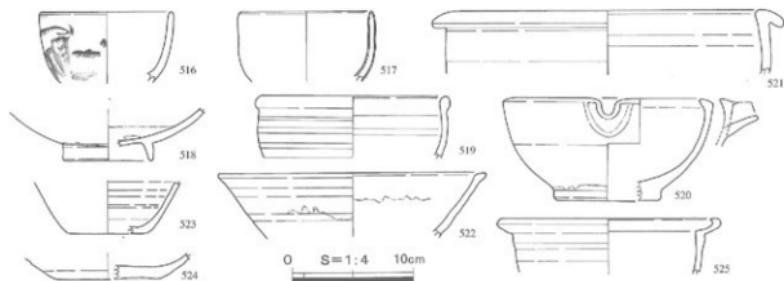


Fig.148 遺構外出土遺物実測図(5)

Tab.116 遺構外出土遺物観察表(5)

No.	Fig. PL	遺物名	出土位置	器種	法量(cm)	特徴	胎上	色調	備考
516	Fig.148 PL.42	網器 鉢口縁部	3区 水路	口沿 器高	径10.6 高5.8	朱面は緩やかに直し、茎部は丸い。外腹に直線により瓦張が施される。内腹面ともに施釉。	窓	暗灰黄色25Y5/2	口縁部約1/4残存
517	Fig.148 PL.42	網器 鉢口縁部	3区 水路	口沿 器高	径10.7 高5.6	朱面は緩やかに直し立し、底部は丸い。内腹面ともに施釉。	窓	灰色N6/0	口縁部約1/4残存
518	Fig.148 PL.42	網器 鉢高台部	3区 水路	口沿 体高台部	径4.2 高4.2	白い直面をもつ。外腹は高台部と内腹は直角。内腹に込み半径直角形状に直線の施釉。底面は施釉で直角に尖らる。内腹に施釉。	窓	灰色5Y6/1	底部約1/2残存
519	Fig.148 PL.42	網器 鉢口縁部	3区 水路	口沿 器高	径15.0 高5.1	口縁部は赤褐色の紋を多く含む。内外面ともに施釉。	窓	灰色5Y5/1	口縁部約1/2以下 残存
520	Fig.148 PL.42	2区西側 水路	-	網器 片口縁	口径 器高 底径 径8.0	口縁部は三角形に内側に彎り出す。片口の内側で先端が彎まる。注口が付く。直面は微細の高台か。外腹ともに施釉。内腹は施釉色の外物が散在される。	窓	浅黄色25Y7/4	約1/3残存
521	Fig.148 PL.42	不明	-	網器 鉢口縁部	口径 器高 径8.2	口縁部は外側に張り出る。内外面施釉されているが、特に内側から下に施釉があり。	0.5mの移動 を含む。	灰黄色25Y7/2	口縁部約1/2残存
522	Fig.148 PL.42	2区西側 水路	-	網器 鉢口縁部	口沿 器高 径8.2	口縁部が外側に張り出る下部に大きくなびきられ、丸くわわる。内腹面ともに施釉。	窓	黄灰色25Y6/1	口縁部約1/4残存
523	Fig.148 PL.42	3区 水路	-	網器 鉢底部	径4.2 高6.6	外腹底部および内腹は無釉。	窓	灰色7.5Y8/1	底面約1/10残存
524	Fig.148 PL.41	2区西側 水路	-	網器 鉢底部	器高 底径 径8.6	底面は平滑で回転釉あり。脚目はない。外腹無釉。内腹茶色の鉢底。	移存なし。	褐色10YR4/1	底面約1/4残存
525	Fig.148 PL.41	3区 水路	-	網器 鉢口縁部	口沿 器高 径4.5	口縁部はかがりに施釉し、基部は内側に彎り込む。内外面ともに施釉の鉢底を施す。	移存なし。	褐色5YR4/2	口縁部約1/2残存



Fig.149 遺構外出土遺物実測図(6)

Tab.117 遺構外出土遺物観察表(6)

No.	Fig. PL	遺物名	出土位置	器種	法量(cm)	特徴	石材・色調	備考
S9	Fig.149 PL.49	石刀	-	磨片芳石斧	長さ:6.5 幅:5.2 厚さ:1.4	片面の刃を研ぎ出す。石材:閃長岩	ほぼ完存	
S10	Fig.149 PL.49	石刀	-	砾石	長さ:6.3 幅:5.3 厚さ:1.6	片面の刃を研ぎ出す。石材:閃長岩	-	
S11	Fig.149 PL.49	石刀	-	砾石	長さ:7.9 幅:5.7 厚さ:1.7	片面の刃を研ぎ出す。石材:閃長岩の石英風化岩	-	
S12	Fig.149 PL.49	石刀	-	砾石	長さ:8.9 幅:5.4 厚さ:1.6	片面の刃を研ぎ出す。石材:細粒花崗岩(アブリト)	-	
S13	Fig.149 PL.49	石刀	-	砾片	長さ:4.0 幅:2.1 厚さ:0.7	片面の刃を研ぎ出す。石材:黑曜岩	-	
C2	Fig.149 PL.41	木頭	-	鍛貨	直徑:2.2 厚さ:0.1 寬さ:3.2g	鍛錬:寛永通宝	銅鐵	完存

のが混在するとみられるが判別できない。512は高台をもち底面から立ち上がりの描目は連續しない。備前であろうか。他は捏鉢で描目をもたない。

火鉢が1点出土している。515は土師質焼成で口縁部が分厚く、端部は水平方向に平坦面をもつ。

石州系陶器 (Fig.148 Tab.116 PL.41・42)

石州系(1)と呼称される陶器が比較的まとまって出土している。石見焼きは近平島根県において窯跡の発掘調査が行われており、その生産状況が次第に明らかになりつつあるが、その流通については未だに注目されることが少ない。碗516・517、鉢518は石州系、片口鉢519・520、鉢521は石見焼きで19~20世紀のものである。捏鉢522、植木鉢523は石州系。鉢524・525は石見焼きで、20世紀のものである。いずれも19~20世紀のものである。近世後期には石見方面から生活用具が搬入されたことがわかる。また石見焼きとは別に石州系といわれる石見焼系統の焼き物が他でも生産されるようになり、生産地の特定はできないが、今後明らかにしていくべき対象となろう。

その他 (Fig.145・149 Tab.113・117 PL.43・48)

そのほか、土鍤477・478、石製品の砥石S 9~12、黒曜石剥片 S 13、錢貨C 2が出土している。土鍤は小型の製品で細長く、中央部がやや膨らむ形状である。中世の遺跡からは一般的に出土するが、時期などは不明瞭である。砥石はいずれも中世の集落から出土しているものに、形状や石材が類似する。C 2は寛永通寶である。

注

(1) 国土交通省浜田工事事務所・島根県教育委員会 2001『石見焼関連遺跡調査報告1』

(11) 鉄関連遺物 (Fig.150~153 Tab.118・119 PL.44~47)

1・2区を中心に多数の鉄製品が出土した。県内では中世集落が調査される例は少なく、中世の鉄製品がまとまって出土する例は稀である。ただし土器と同様に遺構内からの出土は比較的少なく、多くは擾乱部や包含層からの出土で、いずれの鉄製品も錫化が著しい。建物跡の集中する1区の東端から2区の西端にかけては、建物跡と重複して土坑が多く検出され、付近からは鉄製品が多く出土している。

金具類は釘状鉄製品がF⑤~⑦・⑨・⑩・⑪・⑫~⑭・⑮・⑯・⑰・⑱・⑲~⑳・⑳と最も多いが、その他に合い釘F⑬、楔状鉄製品F③・⑪、鐵地金張りの鎧金具F⑮・⑯、留め金具F⑮、鉤状F⑬などがある。とくに土坑から釘が出土している例が多くみられる。

工具類は、刀子F⑬・⑯・⑰・⑱・⑲・⑳・⑳が最も多く、突き盤F①・②、タタキ盤F④・⑤、鎌またはほどこ切りF⑬、絞め具状F⑬、鎌F⑬などがある。とくに工具類を柱穴に入れる行為は、押平弘法堂遺跡SB12で発が、出雲大社で手斧が確認されている。

狩猟具あるいは武具は、雁又鎗F④がある。ただし鎗類はこれ1点のみである。

生活用具類は軸付の紡錘車F⑬がある。鐵鍋F⑩・⑪のような鋳造品も出土している。鐵鍋の口縁部は受け口状で、時期の特定は難しいが概ね鎌倉時代の所産とみられる。

このほか礎の羽口F⑩~⑪や楕形鍛冶淬F⑩~⑪・⑫~⑬、鍛冶淬F⑩~⑪・⑫~⑬なども出土しており、鍛冶遺構や焼土面は確認できなかったものの、いわゆる鍛冶が行われたことがうかがわれる。

これらの遺物は遺構外からの出土が多いものの、その形状から多くは鎌倉時代の所産とみられる。とくに鎌を除き農具がほとんどないことからも、集落廃絶後の土地利用に伴う鉄製品は少ないと考えられる。したがってこれらの遺物は鎌倉時代の集落での鉄製品の状況を示す好例と捉えることができよう。

次に押平弘法堂遺跡における鉄製品であるが、茶畠六反田遺跡とは大きく時期差はないと思われる中世の集落跡であり、出土した鉄製品の組成も類似している。

1区 遺物		2区 遺物		3区 遺物	
遺物種別	遺物名	遺物種別	遺物名	遺物種別	遺物名
骨・貝類・外 合計、重し(克)	グリッド 部位不明	骨・貝類・外 ①-④層	骨・貝類・外 ⑤-⑦層	骨・貝類・外 ①-③層	骨・貝類・外 ④-⑥層
100	1	2	3	4	5
100	6	7	8	9	10
100	11	12	13	14	15
100	16	17	18	19	20
100	21	22	23	24	25
100	26	27	28	29	30
100	31	32	33	34	35
100	36	37	38	39	40
100	41	42	43	44	45
100	46	47	48	49	50
100	51	52	53	54	55
100	56	57	58	59	60
100	61	62	63	64	65
100	66	67	68	69	70
100	71	72	73	74	75
100	76	77	78	79	80
100	81	82	83	84	85
100	86	87	88	89	90
100	91	92	93	94	95
100	96	97	98	99	100
100	101	102	103	104	105
100	106	107	108	109	110
100	111	112	113	114	115
100	116	117	118	119	120
100	121	122	123	124	125
100	126	127	128	129	130
100	131	132	133	134	135
100	136	137	138	139	140
100	141	142	143	144	145
100	146	147	148	149	150
100	151	152	153	154	155
100	156	157	158	159	160
100	161	162	163	164	165
100	166	167	168	169	170
100	171	172	173	174	175
100	176	177	178	179	180
100	181	182	183	184	185
100	186	187	188	189	190
100	191	192	193	194	195
100	196	197	198	199	200
100	201	202	203	204	205
100	206	207	208	209	210
100	211	212	213	214	215
100	216	217	218	219	220
100	221	222	223	224	225
100	226	227	228	229	230
100	231	232	233	234	235
100	236	237	238	239	240
100	241	242	243	244	245
100	246	247	248	249	250
100	251	252	253	254	255
100	256	257	258	259	260
100	261	262	263	264	265
100	266	267	268	269	270
100	271	272	273	274	275
100	276	277	278	279	280
100	281	282	283	284	285
100	286	287	288	289	290
100	291	292	293	294	295
100	296	297	298	299	300
100	301	302	303	304	305
100	306	307	308	309	310
100	311	312	313	314	315
100	316	317	318	319	320
100	321	322	323	324	325
100	326	327	328	329	330
100	331	332	333	334	335
100	336	337	338	339	340
100	341	342	343	344	345
100	346	347	348	349	350
100	351	352	353	354	355
100	356	357	358	359	360
100	361	362	363	364	365
100	366	367	368	369	370
100	371	372	373	374	375
100	376	377	378	379	380
100	381	382	383	384	385
100	386	387	388	389	390
100	391	392	393	394	395
100	396	397	398	399	400
100	401	402	403	404	405
100	406	407	408	409	410
100	411	412	413	414	415
100	416	417	418	419	420
100	421	422	423	424	425
100	426	427	428	429	430
100	431	432	433	434	435
100	436	437	438	439	440
100	441	442	443	444	445
100	446	447	448	449	450
100	451	452	453	454	455
100	456	457	458	459	460
100	461	462	463	464	465
100	466	467	468	469	470
100	471	472	473	474	475
100	476	477	478	479	480
100	481	482	483	484	485
100	486	487	488	489	490
100	491	492	493	494	495
100	496	497	498	499	500
100	501	502	503	504	505
100	506	507	508	509	510
100	511	512	513	514	515
100	516	517	518	519	520
100	521	522	523	524	525
100	526	527	528	529	530
100	531	532	533	534	535
100	536	537	538	539	540
100	541	542	543	544	545
100	546	547	548	549	550
100	551	552	553	554	555
100	556	557	558	559	560
100	561	562	563	564	565
100	566	567	568	569	570
100	571	572	573	574	575
100	576	577	578	579	580
100	581	582	583	584	585
100	586	587	588	589	590
100	591	592	593	594	595
100	596	597	598	599	600
100	601	602	603	604	605
100	606	607	608	609	610
100	611	612	613	614	615
100	616	617	618	619	620
100	621	622	623	624	625
100	626	627	628	629	630
100	631	632	633	634	635
100	636	637	638	639	640
100	641	642	643	644	645
100	646	647	648	649	650
100	651	652	653	654	655
100	656	657	658	659	660
100	661	662	663	664	665
100	666	667	668	669	670
100	671	672	673	674	675
100	676	677	678	679	680
100	681	682	683	684	685
100	686	687	688	689	690
100	691	692	693	694	695
100	696	697	698	699	700
100	701	702	703	704	705
100	706	707	708	709	710
100	711	712	713	714	715
100	716	717	718	719	720
100	721	722	723	724	725
100	726	727	728	729	730
100	731	732	733	734	735
100	736	737	738	739	740
100	741	742	743	744	745
100	746	747	748	749	750
100	751	752	753	754	755
100	756	757	758	759	760
100	761	762	763	764	765
100	766	767	768	769	770
100	771	772	773	774	775
100	776	777	778	779	780
100	781	782	783	784	785
100	786	787	788	789	790
100	791	792	793	794	795
100	796	797	798	799	800
100	801	802	803	804	805
100	806	807	808	809	810
100	811	812	813	814	815
100	816	817	818	819	820
100	821	822	823	824	825
100	826	827	828	829	830
100	831	832	833	834	835
100	836	837	838	839	840
100	841	842	843	844	845
100	846	847	848	849	850
100	851	852	853	854	855
100	856	857	858	859	860
100	861	862	863	864	865
100	866	867	868	869	870
100	871	872	873	874	875
100	876	877	878	879	880
100	881	882	883	884	885
100	886	887	888	889	890
100	891	892	893	894	895
100	896	897	898	899	900
100	901	902	903	904	905
100	906	907	908	909	910
100	911	912	913	914	915
100	916	917	918	919	920
100	921	922	923	924	925
100	926	927	928	929	930
100	931	932	933	934	935
100	936	937	938	939	940
100	941	942	943	944	945
100	946	947	948	949	950
100	951	952	953	954	955
100	956	957	958	959	960
100	961	962	963	964	965
100	966	967	968	969	970
100	971	972	973	974	975
100	976	977	978	979	980
100	981	982	983	984	985
100	986	987	988	989	990
100	991	992	993	994	995
100	996	997	998	999	1000

Fig.150 鉄闕遮遺物構成図

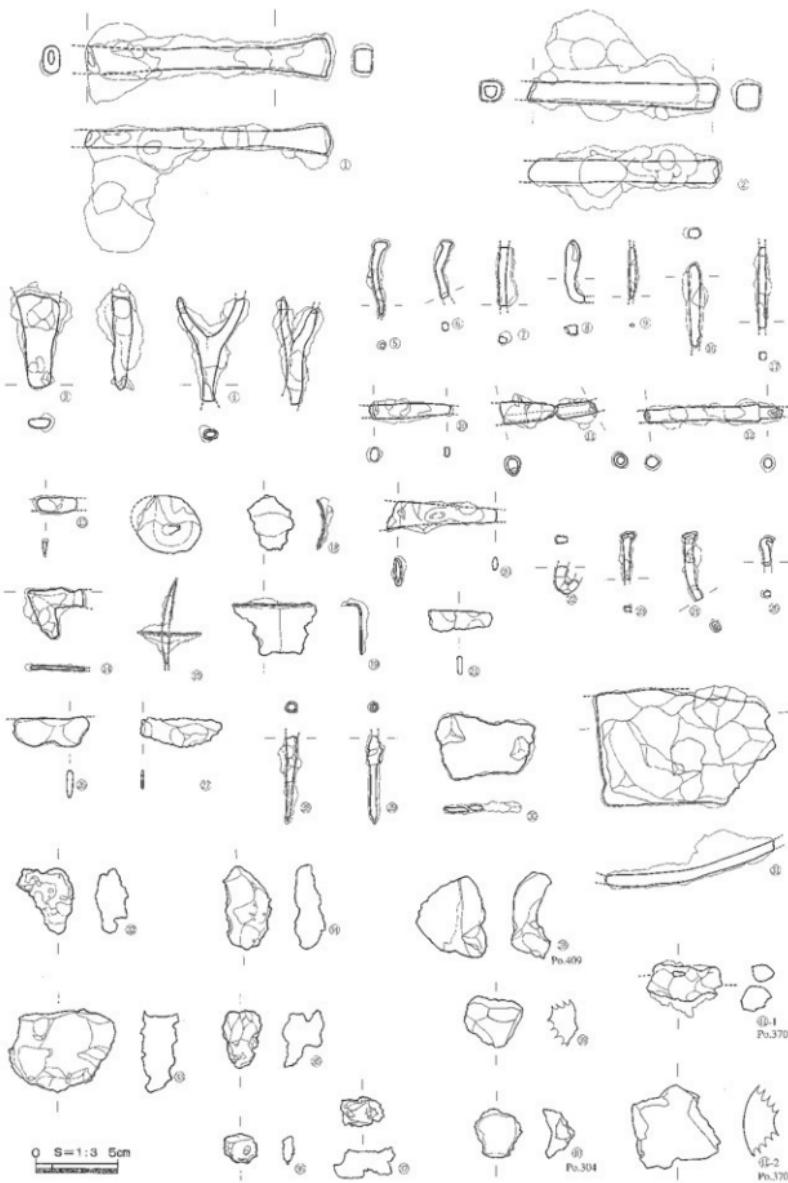


Fig.151 鉄関連遺物実測図 (1)

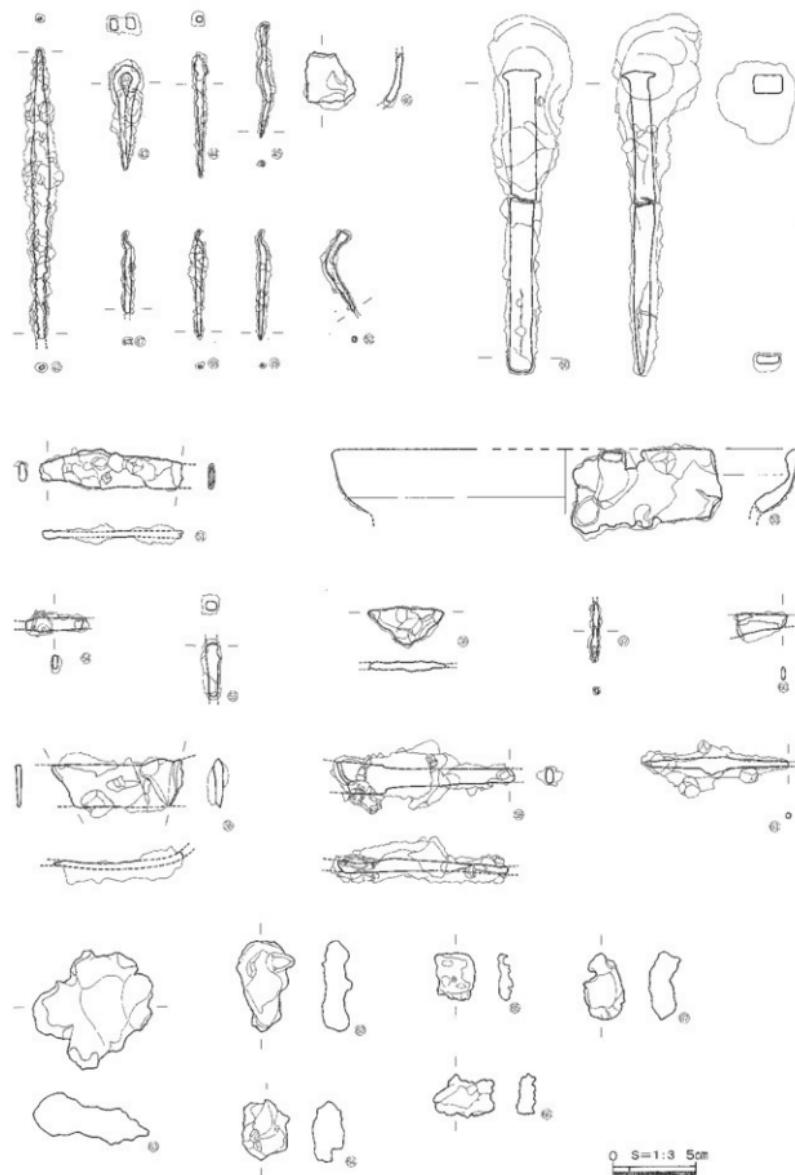


Fig.152 鉄門遺物実測図 (2)

Tab.118 鉄関連遺物観察表 (1)

構成 No.	出土地	層位	遺物名	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	鉛量 度	メタル 度	特徴
①	F 3 グリッド	不明	鉄製品(突き盤)	△ 15.0	2.5	1.8	3060	5	なし (☆)	頭部のみ残存。頭部等はややバチ形に広がり、頭部は強状のえみあり。メタル部は端部に残存。又鉛通透度では鉛通透度は工事。
②	F 3 グリッド	不明	鉄製品(突き盤)	△ 11.4	1.6	1.4	238.0	3	△	又頭部損し、頭部のみ残存。横断面形はやや長方形。X線透通度では棒状のえみの棒をそれぞれ折りあし以上で、合わせて頭部。頭部はわずかに広がり気味。
③	I 4 グリッド	①層	鉄製品(楔状)	△ 5.7	1.6	1.1	595	7	特. (☆)	短い楔状。横断面形は薄い長方形。頭部は短く。X線透通度では頭部が楕円。メタル部は足端部を残す残存。
④	I 4 グリッド	③層	鉄製品(頭又(鑄))	△ 6.5	4.2	1.0	29.6	3	△	横断面とともに残するが、左側は原型に近い。片方(左)に抜み込みのように横断面透通度では頭部。
⑤	T 5 グリッド	不明	鉄製品(釘)	△ 4.5	0.8	0.5	31	2	△	頭部欠落。頭部あり。全体にS字形に曲がる。側端部欠落。X線透通度では頭部。
⑥	I 5 グリッド	不明	鉄製品(釘)	△ 3.5	0.5	0.5	4.1	2	△	F部と頭部。頭部や頭部も相似。頭部欠落。
⑦	I 5 グリッド	不明	鉄製品(釘)	△ 3.6	0.5	0.6	6.9	2	△	頭部、頭部欠落。外端部は酸化土色。横断面形はわずかに菱形。
⑧	L 7 グリッド	①層	鉄製品(金具状不明)	△ 3.8	0.9	0.8	5.1	2	△	頭部を残して鋸り落としたもの。頭部は鋸状に両側に丸みをもつ。頭部は頭部が両側に丸みをもつ。中空気孔。X線透通度では頭部は比較的きれい。
⑨	J 4 グリッド	②層	鉄製品(釘状不明)	△ 2.2	0.4	0.2	1.2	1	△	鋸化したらしい小針状。頭、頭部とも欠落。
⑩	J 6 グリッド	②層	鉄製品(中子状不明)	△ 3.8	0.8	0.6	9.5	4	△	横断面とともに残るが、頭部が頭部で、鋸部が鋸部で、頭部が鋸部で、内部はパイプ状に通じる。外端部は厚い酸化皮膜。初期の手作業の可能性。
⑪	J 8 グリッド	③層	鉄製品(棒状不明)	△ 3.7	1.4	1.1	15.8	2	△	鋸化皮膜にマサモツ工具部。横断面形は方形。マサモツ以外でも本部に残される。頭部欠落。本部の断面形は円形。X線透通度では頭部は「丁字」。
⑫	L 7 グリッド	③層	鉄製品(工具の柄)	△ 8.4	1.0	1.0	22.6	2	△	頭部にマサモツ工具部。横断面形は方形。マサモツ以外でも本部に残される。頭部欠落。本部の断面形は円形。X線透通度では頭部は「丁字」。
⑬	I 4 グリッド	②層	鉄製品(刀子状)	△ 2.6	0.9	0.3	1.3	2	△	頭部品の表面の剥離物。刃子の頭部が頭部か?
⑭	G 6 グリッド	③層	鉄製品(板状不明)	△ 3.4	3.5	0.2	6.3	2	△	鋸く2枚の板を接着させたもの。用途、名称不明。頭部?
⑮	I 5 グリッド 第1造橋後前面上	鉄製品(鋸歯状) 純付	△ 3.2	4.0	0.2	18.6	2	△	鋸く1枚の頭部を複数枚接合させたもの。頭部は頭部に重なる。円筒部は頭又(鑄)形で、鋸歯部の一部が欠落。平面形は不規則四角形。頭部部は鋸歯部。	
⑯	K 7 グリッド 第1造橋後前面上	鉄製品(釘状不明)	△ 3.1	0.8	0.7	10.0	3	△	頭部部欠落。横断面形はやや長方形気味。釘又は柄部か? X線透通度では「丁字」・「菱形」。	
⑰	1区 第1造橋後前面上	鉄製品(釘状)	△ 3.0	0.5	0.5	5.6	3	△	鋸れい的な頭部断面。頭部部欠落。表面のやや長い頭部か? X線透通度では「丁字」。	
⑱	C 5 グリッド ②層	舞金具(鉢底金張り) 表鉢錆	△ 3.3	2.6	0.05	3.6	3	△	刀の外装部の被覆物。刃子の頭部が頭部か?	
⑲	E 3 グリッド ③層	舞金具(鉢底金張り) 表鉢錆	△ 3.0	3.2	0.05	9.9	2	△	横断面とともに残るが、頭部が鋸部で、頭部部は鋸部か? X線透通度では「丁字」。	
⑳	J 5 グリッド ②層	鉄製品(刀子)	△ 1.9	0.5	0.3	19.2	1	△	片マサモツの鋸性の高い刀子の頭部が頭部か? マサモツの頭部が残る。又頭部は頭部で、X線透通度では頭部は頭部か?	
㉑	I 4 グリッド ②層	鉄製品(楔状)	△ 3.8	1.3	0.5	5.0	3	△	大型の鋸く2枚の刀子の「丁字」。左端部は月牙状の頭部があり、その可能性も残る。	
㉒	J 6 グリッド ②層	鉄製品(頭状不明)	△ 1.8	1.5	0.4	1.5	2	△	下端部がU字状に曲げられた頭部の屈曲部。横断面形は長方形。	
㉓	J 6 グリッド ②層	鉄製品(釘)	△ 2.8	0.8	0.5	2.7	3	△	頭部欠落の釘の頭部。頭部部は欠落。X線透通度では頭部は頭部か? 外端部に内部の追走存する良好。	
㉔	J 6 グリッド ②層	鉄製品(釘)	△ 4.2	0.5	0.7	7.2	2	△	頭部より少しぶりりた頭部断面。頭部部は欠落。表面部が頭部か? X線透通度では頭部は頭部か?	
㉕	J 5 グリッド ②層	鉄製品(釘状不明)	△ 6.8	1.7	0.5	1.7	1	△	丸頭部が大きな頭部に広がる鉄製品頭部。横断面形は長方形気味。外端部より内部の追走存する良好。	
㉖	1区 ②層	鉄製品(刀子状不明)	△ 3.6	2.7	0.4	7.3	4	△	頭部状の鉄製品。上部刀子と頭部を除き、外端部は頭部。刀子の刃部中央付近の頭部か。刃部中央は凹門。キズの可能性大。	
㉗	2区 不明	鉄製品(土炒付石、板状不明)	△ 5.0	1.8	0.4	4.5	2	△	万子様の食器化粧部と酸化土色の合体品。	
㉘	K 7 グリッド 不明	鉄製品(釘状不明)	△ 6.2	0.7	0.7	7.4	2	△	頭部円形の釘状の遺物。頭部部は欠落。やや新しい可能性有り。	
㉙	2区内面水路	-	鉄製品(釘状不明)	△ 5.4	0.5	0.5	4.0	2	△	F部とやや似た丸形。頭部部は欠落。縮出頭子品で、やや新しい可能性有り。
㉚	2区京濱水路	-	鉄製品(鉢底品) 頭部部	△ 6.1	4.1	0.5	31.4	3	△	板状の鉢底品複数片。頭部部は全面頭部。X線透通度では頭部が頭部か? 斜面部も頭部と見て鉢底の酸化土色も頭部。
㉛	1区 不明	鉄製品(鉢底品) 頭部部-芯部	△ 10.6	7.2	0.7	27.0	3	△	板状の鉢底品。上部刀子と頭部を除き、外端部は頭部。頭部部はわざかに広がる。J線透通部。頭部と頭部はやや大型の鋸く2枚の頭部か? X線透通部。頭部部は頭部か? X線透通部では頭部は頭部か?	
㉜	J 6 グリッド ②層	楢形鍛治済	△ 4.2	3.4	2.0	21.6	6	なし	中型のしきらした楢形鍛治済。上方から右側面は強直、下部は浅い直面。上面はごく楢形やかな直面。頭部の頭部は上半部に「丁字」。	
㉝	P 8 14	④層	楢形鍛治済	△ 5.0	6.0	2.0	12.0	3	なし	小型な楢形鍛治済。上面の形状は山形にかなり似る。側本下部が生成か。X線透通部は頭部。
㉞	J 6 グリッド ②層	楢形鍛治済	△ 5.2	2.8	1.8	25.6	7	△	小型な楢形鍛治済。上面の形状は山形にかなり似る。側本下部が生成か。X線透通部は頭部。	

Tab.119 鉄関連遺物観察表(2)

構成 No.	出土地	層位	遺物名	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	鉄蓄 度	メタル 度	特徴
⑤ J 6 グリッド	②層		鐵治津	3.6	2.4	2.4	228	6	△	小型の形成が少々ない段気味の疊。下面に実施した洋。上部の左側面は延縫。気孔は微細。
⑥ J 6 グリッド	③層		鐵治津	1.7	2.0	0.7	31	2	△	ごく小型の鐵治津片。背面は下部や右側に斜傾。
⑦ J 6 グリッド	④層		鐵治津(口溶解物付)	1.8	2.6	3.4	128	1	△	表面に残された輪形溶融部の中核部破壊。上面には點状の浮出部立ら。上部部は強め。
⑧ T 5 グリッド	⑤層		羽口	5.0	1.4	1.5	434	2	△	羽口先端部の小破片。ひび割れが走ったまま使用されており、先端側の通常孔部はまだ気味。上面にもひび割れが走り、底の部分が通常孔部にも及ぶ。外側の表面に沿たる部分。船上は切削を況じえる點止付。羽口と同一片か。
⑨ S D30	下層		羽口	2.9	3.5	1.8	15.0	2	△	羽口先端部の小破片。通常孔部はまだ気味。分厚で5mmほど厚い。胎土は鉛性が強く混じた骨質。外層は浮化した。
⑩ S D30	下層		羽口	3.1	2.9	1.4	8.9	2	△	羽口先端部の小破片。通常孔部はまだ気味。胎土は鉛性が強く混じた骨質。又内部に鉛液を含み込む。
⑪ H 5 グリッド	第1堆積後表面		羽口(漆付)	4.7	3.2	1.8	18.8	2	△	羽口先端部と松葉の形。羽口胎土はやや多めのスサを含み、兩側面とは薄い。外部は骨質で内面はF28と類似。漆は完全に失色にてすむ。非漆の羽口の可塑性も有る。
⑫ I 6 グリッド	不明		羽口	4.6	5.0	1.8	45.8	1	△	やや複雑な羽口の先端部寄りの破片である。部芯と上面を「丁」字型に有り。胎土は白色から黒色に掛けて、内側は斜めで外側は直角。漆は見られず。
⑬ SK33	①層		鉄製品(錆又はほぞ切り)	△	1.2	0.6	52.0	3	△	頭部を環状にくり出したため企丸。頭部先端よりの横断面形は五方形ないし台形。芯部は緩やかに膨らむ。裏面に鋸歯状の切り欠きと逆走と見れば可と被定される。マチはなく、ごく手造の幾形の平面形。
⑭ SK29	埋土上層		鉄製品(企丸)	6.5	1.7	0.6	23.2	3	△	頭部を環状にくり出したため企丸。頭部先端よりの横断面形は五方形ないし台形。芯部は緩やかに膨らむ。裏面に鋸歯状の切り欠きと逆走と見れば可と被定される。マチはなく、ごく手造の幾形の平面形。
⑮ SK33	②層		鉄製品(鉗)	7.7	1.9	0.4	6.8	2	△	I型の一部は出土遺物は別ながら。ほぼ同一の一つの織折れの未製品。いずれも頭部が扁平な丸みをもつ形態で、直線にて仕上げられている。頭部のつまはやや中腹の横筋に似る。
⑯ SK48	埋土上層		鉄製品(鉗)	7.0	0.6	0.4	7.3	2	△	つまは裏面と似る。全体中央で横筋。他に北側内筋の跡化が留めている。
⑰ SK27	黒褐色土		鉄製品(管状小明) 工具の袖めんかく	△	3.0	0.6	128	4	△	I型の一部は出土遺物は別ながら。ほぼ同一の一つの織折れの未製品。いずれも頭部が扁平な丸みをもつ形態で、直線にて仕上げられている。頭部のつまはやや中腹の横筋に似る。
⑱ SK27	黒褐色土		鉄製品(鉗)	△	0.7	0.4	3.6	2	△	P25号、I号、S号と同様の頭部と刃の未製品。頭部部は丸み、頭部部は小さな耳状孔。X線透視像で骨筋部がよく見え、頭部の横筋部がよく分かる。
⑲ SK37	黒褐色土		鉄製品(鉗)	6.6	0.7	0.5	4.0	2	△	前記と同様。この頭部品の中では最も両角が高く残り、頭部の横筋部がよく分かる。
⑳ SK37	黒褐色土		鉄製品(鉗)	6.8	0.8	0.4	5.0	2	△	前記と同様。頭部をタケキ子形に成形。頭部折れ前の工具品とすれば、工程に景気がうかがわれる。あるいは特殊な船形軋壓。
㉑ SB12 P 1	埋土下層		鉄製品(タケキ盤、又は盤)	18.8	2.4	0.2	360.0	5	△	頭部頭にこぼれの氧化化物の発達したタケキ盤又は盤。頭部は丸みを有する。長さ2.5cmほどのメタル棒が引き裂かれ先端部に生じて合せ鍛えがうかがわれる。
㉒ P 68	埋土中		鉄製品(刀子)	△ 8.8	2.4	0.5	22.4	3	△	中形式ではない「刀子片」。裏面が延縫な筋状に伸び、頭部は鍛錠形で、難看な金具を持つもの。薙花は全体に通じ、頭部の可動部も残る。
㉓ P 133	埋土中		鉄製品(刀)	△ 5.5	0.6	0.6	6.1	2	△	大きく弓形に反る。曲がった折れ頭封。薙花部は欠落し、横断面形状をやや菱形形。X線透視像ではつくり難い點。
㉔ P 375	埋土中		鉄製品(鍛造品)	△ 8.4	4.0	0.9	133.0	4	△	説明された頃又は焼成状の有段の頭部破片。内部に空孔がやや存在する。在来物か。上層部は丸みを有した長い頭部で、受け部でいったん湾曲になり、有段部にかけては拵みが認められる。下層部は頭部の頭部は丸く尖っている。頭部は1重。
㉕ SD 4	灰色砂層		鉄製品(刀子)	△ 3.6	0.9	0.4	5.5	2	△	方形前面の斜状小刀品。頭部は明らかに前面。鈍化しているが、比較的しっかりした頭部を行かれている。
㉖ SD 4	灰色砂層		鉄製品(刀状不明)	△ 3.3	0.7	0.5	7.9	3	△	頭部不明の薄板状の三角形片。鋸齒の可能性もあるが、断定はしにくい。鋸花は全周断面の可能性大。
㉗ SD 12	埋土中		鉄製品(鉗)	△ 3.6	0.3	0.3	2.0	1	△	頭部を欠落した鉗片。やや横筋で構成してある。頭部部は丸く尖っている。
㉘ 2区西側水路	-		鉄製品(鍛)	△ 8.0	2.7	0.6	51.5	3	△	刃頭部をやや弧状に反る頭部の头部破片。頭部の縫合から脇部は広め。右側の刃頭部には3mmほどの大きな破片を有する。X線透視像ではつきりしない。下面には部分的に複数の頭部が二重に付着する。
㉙ 2区西側水路	-		鉄製品(刀子)	△ 11.0	2.9	0.7	86.0	3	△	外見は刀片を想起する分厚い鍛造化盤から、内部は両刃の刀子又は盤と見らる。非常用の丁寧なつくりで、組織のダメージが認められる。表面も丁寧な仕上げである。頭部は丸く尖っている。頭部は1重で構成され、頭部は小さくなる。

押平弘法堂遺跡では、屋敷墓とみられる SK11出土鉄製品がある。ここには刀F①、刀子F②、刀装金具F③、火打ち金F④がある。また刀子とセットで砥石5(S3)が出土している。これらは主に意図的に墓の中に入れられた鉄関係遺物である。このほか、周辺からも多数の鉄製品が出土している。ただし遺構外出土遺物は、近世の遺構がいくつか検出されていることからやや時期が下るものもある可能性がある。しかし集落の終焉から現在まで主として水田として使用されていたという経緯を見る限り、意図的に鉄製品を廃棄したとは考えにくく、遺物の多くは集落と同時期の可能性が高いと仮定している。遺物の組成は金具類が最も多いが、工具類、生活用具類も定量出土しており、これは茶煙穴・反田遺跡と同様の傾向である。

金具類は、釘状鉄製品はF⑩～⑬・⑪～⑯・⑭～⑯と最も多いが、その他に鏡F⑨、飾り釘F⑧、貯壺金具F⑤、合い釘F⑨、鈎状F⑨などがある。

工具類は、刀子状鉄製品がP②・⑪・⑯、鑿状鉄製品F⑥、斂F⑦、鎌状鉄製品がF⑥・⑨・⑩、鋸F⑩、鉤状鉄製品のF⑨などがある。S B12の柱穴には鑿ではなく、鉤が入れられている。また、比較的鎌状の鉄製品が多い傾向がある。また不明ながら中子状の鉄製品F⑩～⑬・⑯・⑰・⑯がある。

狩猟具あるいは武具は出土していないが、馬具金具の鍔形F⑨がある。また刀F①、刀装金具F③がある。

生活用具類は紡錘車の円盤部F⑩、毛抜き? F⑩、火打ち金F④、火箸? F⑩がある。鋳造品の鉄鍋F⑩も出土している。このほか板状の鉄製品P⑩・⑯・⑯がある。また遺構検出面上から青銅製品ではあるが鈴の小片が出土している。

鍛冶に関わる遺物も出土している。楕形鍛治津F⑩～⑩・⑩～⑩・⑩～⑩、鍛治洋F⑩・⑩・⑩・⑩が出土している。またP539では輪羽口が立てられた状況で、P392では鍛治津と楕形鍛治津が、P412からは1cm程の厚さではあるが炭化物が出土している。鍛冶が行われていたとみられる直接の遺構は検出できていないものの、それを裏付ける遺物は様々な形で出土しており、集落の中で鍛冶が行われていたことが明らかとなった。鍔の羽口は大ぶりの物で、これが小規模の鍛冶のみに使用されていたのかは断定はできないが、中世前期の集落における鉄製品の組成について、良好な資料を提供するものといえよう。

鉄観察表凡例

磁着度は鉄滓分類用の「標準磁石」を用いており、1～8段階で数値が大きいほど磁着度が高い。

メタル度の基準感度は次のとおり。△：銹化がすむ。H(○)：最高感度でごく小さな金属鉄が残る。

M(◎)：標準感度で一般的な大きさや金属鉄を有する。L(●)：低感度でやや大きな金属鉄が残る。

特L(☆)：低感度でL以上の大きな金属鉄が残する。なおFig.と観察表ではF(鉄闇遺物)を省略した。

Tab.120 鉄闇遺物観察表(3)

構成No.	出土地	層位	遺物名	長さ(cm)	幅さ(cm)	厚さ(mm)	重さ(g)	磁着度	メタル度	特徴
⑩	2区西堀水路	-	鉄製品(刀子・中子)	△ 3.2	1.4	0.2	29	3	△	表面に木部が残された刀子・中子である。刀子も骨縫があり、やや大ぶりと予想される。木部は瘤材か、鍛造は瘤材で進む。
⑯	2区西堀水路	-	鉄製品(合い釘)	△ 9.0	1.1	0.3	34.8	4	△	F12・同種外周部に石片を這える分厚い錆化上部が見られ、内部の鉄部は合子・釘、又は錆化である。錆斑がやや粗く、こうした状況とX線CTによる確認から釘としておく。P10と同一の錆化物が付いている。同じ条件での鑄造と想定される。鍛造はかなり進む。
⑩	2区 不明	-	楕形鍛治津	5.6	3.5	1.6	394	4	なし	不要指印をした。鍛治の弱い小部の鍛治津。上面は錆斑が付着するが、不規則。上面全体は半球で部分的に二重の形態。内部には錆斑が気泡。
⑩	2区東堀水路	-	楕形鍛治津	7.3	7.3	2.7	101.5	5	なし	小部を荒削りした。鍛治の弱い小部の鍛治津。上面は錆斑が付着するが、不規則。上面全体は半球で部分的に二重の形態。内部には錆斑が気泡。
⑩	上部埋まり	-	楕形鍛治津	3.8	2.6	1.9	32.6	4	錆化 (△)	小底の楕形鍛治津の錆斑部破片。上面は破れ、下面は不規則な凹凸の上在。錆斑はやや細く、部分的に錆化。
⑩	2区 不明	-	鍛治津	2.9	2.3	0.8	8.5	2	なし	錆斑が付着する。心臓部の一部に錆斑の付着。
⑩	SK52	環土中	鍛治津	3.0	1.1	0.5	12.4	20	なし	錆斑が付着する。心臓部の一部に錆斑の付着。
⑩	2区	-	鍛治津	3.1	2.4	1.4	22.0	5	なし	小ぶりの楕形津。錆斑部の側面の弱い鍛治津。鍛治津がやや細く、部分的に錆化となる。錆斑は不規則で木炭を残す。

第4章 押平弘法堂遺跡の調査

1 押平弘法堂遺跡の立地と層序

押平弘法堂遺跡は阿弥陀川右岸の低い台地上に立地する。南東方向に大山、北には日本海を望む。付近は南から北に向かい緩やかに下る地形で、現代までその地形を利用した棚田が営まれている。

測量区の東側では表土除去後、田の床土とみられる灰色土があり、これを除去すると第1造構検出面がある。3区では第1造構検出面を覆う⑥のやや明るい褐色粘質土と、その上に⑦の灰色粘質土がある。これらはいずれも包含層で、⑦層は包含層で、⑥層と同様の遺物の他に、14世紀後半から15世紀代の遺物が加わる。⑥層は包含層で、13世紀半葉から14世紀頃の遺物を主体とする。

第1造構検出面で検出した造構の埋土は灰色粘質土を主体としており、時期は13世紀から14世紀頃と考えられる。造構検出面直上の遺物も同様である。以下、部分的に④やや明るい褐色土（灰白色シルトブロックを含む）、③黒褐色土と暗茶褐色土の混じりの層を挟み、②黒色土となる。②層には弥生土器が含まれ、除去後に土壌墓と本棺墓などを検出した。これが第2造構検出面で、造構の時期は弥生時代中期後半である。造構の埋土は黒色土を主体とし、本来は②の黒色土中に造構面があるものと推定される。①層のやや暗い褐色土と黒褐色土の混じりは、いわゆる漸移層で、①層の下面から下がやや暗い褐色土となる。

また、第1造構検出面と第2造構検出面との間に1区でのみ溝状造構を検出している。ただしこれは明確な造構でなく、第1造構検出面上から掘り込まれ



Fig.153 第1造構面全体図

Tab.121 グリッド座標一覧表

座標点	旧座標点	X	Y	座標点	旧座標点	X	Y	座標点	旧座標点	X	Y
B4	D3	-57480.000	-77570.000	E4	e3	-57450.000	-77570.000	G6	c5	-57430.000	-77550.000
B5	D4	-57480.000	-77560.000	E5	e4	-57450.000	-77560.000	G7	c6	-57430.000	-77540.000
C3	C2	-57470.000	-77580.000	E6	e5	-57450.000	-77550.000	G8	c7	-57430.000	-77530.000
C4	C3	-57470.000	-77570.000	F3	d2	-57440.000	-77580.000	G9	c8	-57430.000	-77520.000
C5	C4	-57470.000	-77560.000	F4	d3	-57440.000	-77570.000	G10	c9	-57430.000	-77510.000
C6	C5	-57470.000	-77550.500	F5	d4	-57440.000	-77560.000	G11	c10	-57430.000	-77500.000
C7	C6	-57470.000	-77540.000	F6	d5	-57440.000	-77550.000	H7	b6	-57420.000	-77540.000
D5	B4	-57460.000	-77570.000	F7	d6	-57440.000	-77540.000	H8	b7	-57420.000	-77530.000
D6	B5	-57460.000	-77560.000	F8	d7	-57440.000	-77530.000	H9	b8	-57420.000	-77520.000
D7	B6	-57460.000	-77550.000	F9	d8	-57440.000	-77520.000	H10	b9	-57420.000	-77510.000
D8	B7	-57460.000	-77540.000	F10	d9	-57440.000	-77510.000	H11	b10	-57420.000	-77500.000
D9	B8	-57460.000	-77530.000	F11	d10	-57440.000	-77500.000	H10	a9	-57410.000	-77510.000
D10	B9	-57460.000	-77520.000	G5	c4	-57430.000	-77560.000	H11	a10	-57410.000	-77500.000

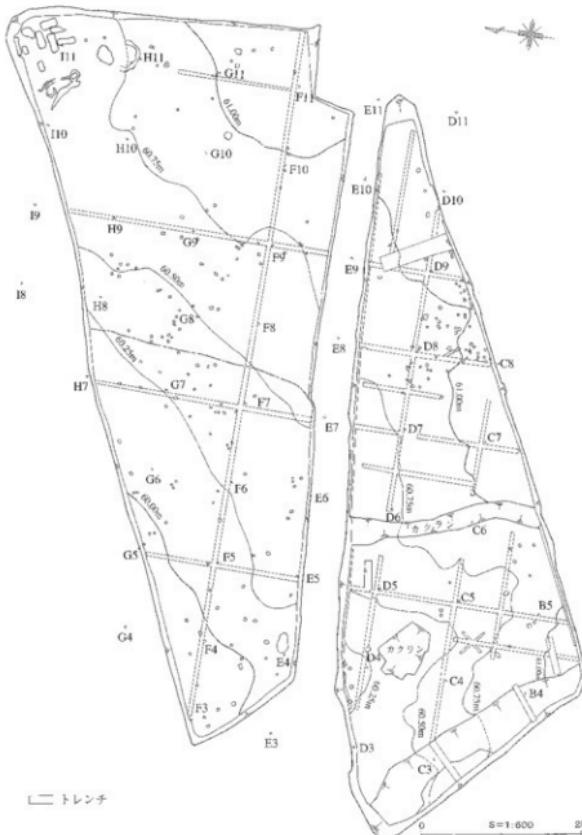


Fig.154 第2遺構面全体図

押平弘法堂遺跡の調査

た可能性があるに留まり、遺構面としてはとらえていない。ただし、茶烟六反田遺跡1区では黒色土上面から古墳時代の溝状遺構が検出されていることから、押平弘法堂遺跡1区においても灰色土中あるいは黒色土上面に遺構が存在する可能性は否定できない。本遺跡の層序は基本的に茶烟六反田遺跡1・2区と同様で遺構検出面もほぼ対応する。付近は部分的に層序の乱れはあるが後世の擾乱も少なく、非常に安定した堆積状況を示しており、遺構の遺存状況も良い。これは扇状地に位置するため、古い層が新たな層により覆われるという、基本的な堆積状況がそのまま遺構の保存につながった結果であろう。

2 第1遺構検出面の調査

(1) 挖立柱建物跡

調査の結果、26棟の掘立柱建物跡を検出した。1区9棟、2・3区17棟である。ほぼ同時期の茶畠六反田遺跡と比較すると、1間×1間の建物跡が主流なのは共通しているが、それとは別に1間×3間の大型の建物跡が存在すること、茶畠六反田遺跡では1間×1間程度の建物跡が東西方向に重複しているのに対し、押平法當遺跡では3~4棟程度の建物跡がひとつのまとまりをなしていることがあげられる。また3区の東側にピットが集中

Tab.122 掘立柱建物一覧表

S B番号	グリッド名	間数	主軸	長軸 (m)	短軸 (m)	床面積 (m ²)
S B 1	G11・H11	1×3	N-5°-W	6.52	3.04	19.82
S B 2	H11	1×1	N-9°-W	3.36	2.24	7.33
S B 3	H11・I11	1×2	N-12°-W	3.08	1.84	5.67
S B 4	H12	1×1	N-11°-E	2.44	2.36	5.76
S B 5	I11	1×1	N-12°-E	2.80	1.56	4.37
S B 6	H11・I12	1×2	N-9°-W	7.76	2.56	19.87
S B 7	F9	1×2	N-3°-W	2.96	1.88	5.56
S B 8	G11・I2	1×2	N-9°-W	3.92	2.68	10.51
S B 9	G9・10	2×2	N-2°-W	4.80	3.60	17.28
S B 10	G6	2×2	N-3°-E	4.16	6.50	27.07
S B 11	G9・F9	1×1	N-10°-W	2.52	2.24	5.64
S B 12	F7・G7	1×3	N-8°-W	8.56	4.20	35.95
S B 13	F5・G5	1×1	N-7°-E	3.76	2.80	10.53
S B 14	I7	1×1	N-8°-W	2.40	2.08	4.99
S B 15	F6	1×1	N-3°-E	3.00	1.88	5.64
S B 16	F10	1×2	N-6°-W	3.44	1.92	6.60
S B 17	H8・9	2×3	N-20°-W	4.48	2.56	11.47
S B 18	E10・I11	1×1	N-9°-E	2.68	1.88	5.04
S B 19	D8	1×3	N-25°-W	5.68	7.24	41.12
S B 20	E7	1×1	N-19°-W	3.08	2.12	6.53
S B 21	E7	1×1	N-17°-W	2.72	2.20	5.98
S B 22	C6	1×2	N-2°-W	2.96	1.96	5.80
S B 23	C5・6	2×3	N-6°-W	5.60	2.88	16.13
S B 24	C5・6	1×1	N-6°-W	3.52	2.04	7.18
S B 25	C5・6,D5・6	3×3	N-4°-W	5.76	4.88	28.11
S B 26	D5・6,E5・6	1×3	N-10°-W	5.60	2.64	14.78

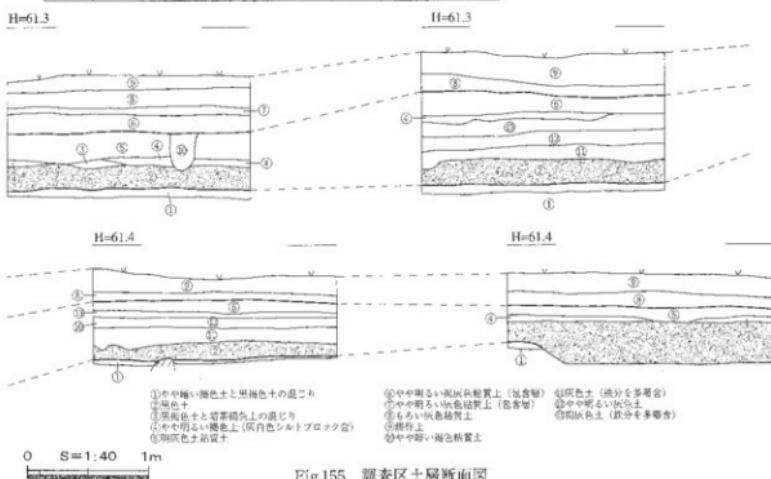


Fig.155 調査区土層断面図

している箇所があるが、不整で建物跡として復元できるものは少ない。その他はピットの密度が低いため建物跡として比較的明確に復元できた。

S B 1 (Fig.156・157)

Tab.122~124 PL62・69) G11~H11グリッドに位置する。北側でS B 2と重複する。付近はS B 3・6・8らとともに建物群を形成する。1間×3間のやや細長い建物跡である。柱の深さは南側程浅くなるがこれは傾斜により、掘削の深さが違うためとみられる。土層断面ではP 3を除き、ほとんど抜き取られ

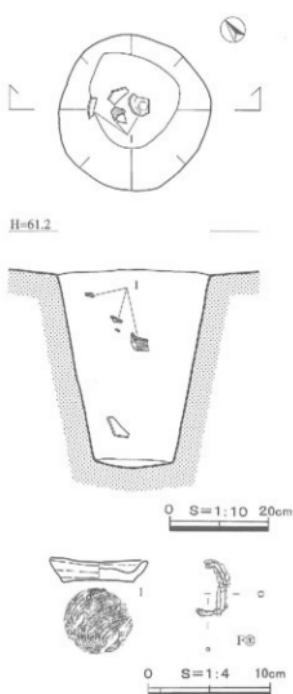


Fig.157 SB 1 出土遺物実測図

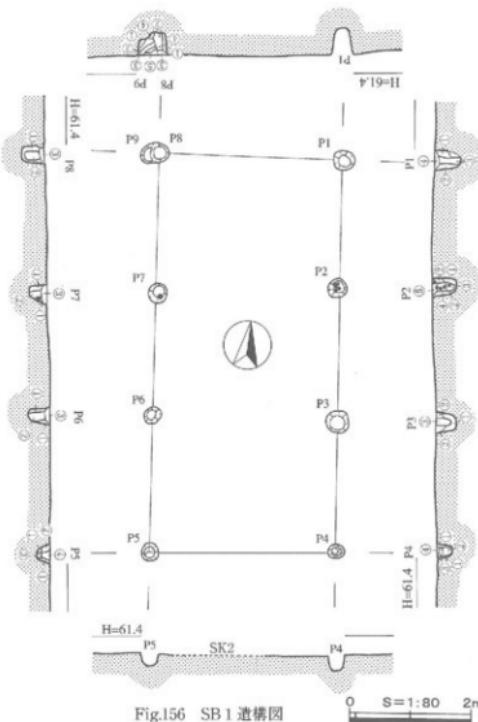


Fig.156 SB 1 遺構図

Tab.123 SB1 ピット一覧表

SB 1 ピット番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P 1	36	32	44.2
P 2	32	32	40.8
P 3	38	28	34.8
P 4	28	24	27.0
P 5	30	30	22.0
P 6	30	28	35.1
P 7	34	32	25.0
P 8	32	30	39.5
P 9	30	18	30.4

- P 1
 ①褐色色土（褐色土多量混。にぶい黄色土混）
 ②褐灰色土（にぶい黄色土混。褐色土少量混）
 ③やや暗い褐灰色土（やわらかい）
 ④にぶい黃褐色土（明褐色土色土）
- P 2
 ①灰土
 ②褐色色土（暗褐色土混）
 ③褐色色土（深褐色土混。やわらかい）
 ④褐色色土（灰白色土混。褐色土少量混。やわらかい）
 ⑤にぶい黃褐色土（褐色土色土）
- P 3
 ①褐色色土
 ②褐褐色土（やわらかい）
 ③褐色色土（にぶい黄色土混。褐色土混）
 ④灰色土（褐色土多量混。①よりやわらかい）
- P 4
 ①褐色色土
 ②褐褐色土（暗褐色土混）
 ③褐色色土（暗褐色土混）
 ④にぶい黃褐色土（褐色土少量混）
- P 5
 ①褐褐色土（暗褐色土混）
 ②やや暗い褐灰色土（暗褐色土混。にぶい黃褐色土混）
 ③褐色色土（やわらかい）
 ④やや明るい褐灰色土（にぶい黃褐色土少量混）
- P 6
 ①褐灰色土（灰土色土・暗褐色土・黃褐色土混）
 ②褐灰色土（やわらかい）
 ③やや明るい褐灰色土（にぶい黃褐色土混）
 ④やや暗い褐灰色土（暗褐色土混）
- P 7
 ①灰土色土
 ②にぶい黃褐色土
 ③やや暗い褐灰色土（にぶい黃褐色土混）
 ④褐色色土（にぶい黄色土混）
- P 9
 ①褐褐色土（暗褐色土混）
 ②にぶい黃褐色土（褐色土少量混。にぶい黃褐色土混）
 ③褐色色土（暗褐色土混）
 ④やや明るい褐灰色土（にぶい黃褐色土少量混）

Tab.124 SB 1 出土遺物観察表

No.	Fig. Pl.	遺構名	出土位置	器種	法量(cm)	特徴	黏土	色調	備考
1	Fig.157 Pl.62	S B 1 P 2	上層	土師質土器 Ⅲ	口径 8.0 器高 20 底径 5.8	口径と底径の差は小さい。底部は厚く、 外径に内輪系切り直し。	1 mm 以下の 砂粒を含む。	桜色2.5YR6/8	ほぼ完存

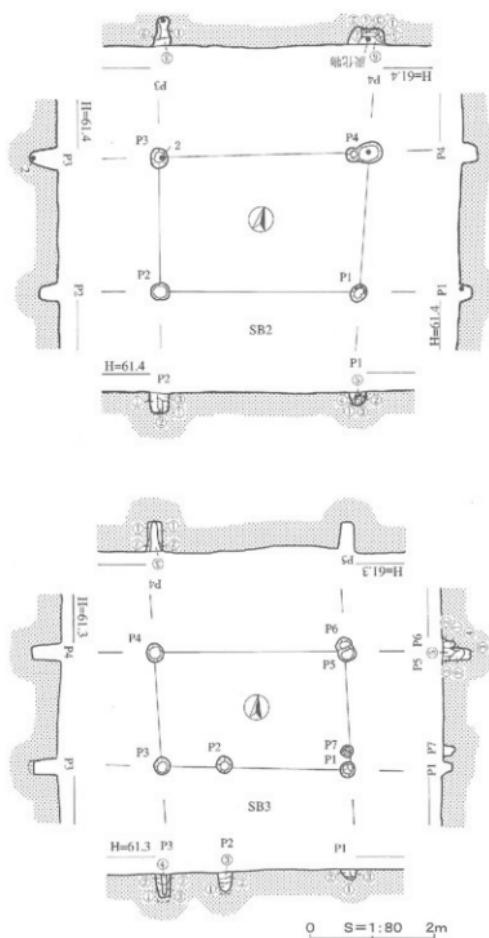


Fig.158 SB2・3遺構図

S B 2
P 1
①細粒黃色土
②細粒灰土 (底少量含む)
③細粒灰土 (少い灰色土少量混)
④細灰土 (底少量含む。細灰灰土多量混)
⑤細灰土 (底少量含む。底白色土混)
P 2
①細硬土 (細灰灰土混)
②灰土 (底少量混)
③細灰土 (底少量含む。底硬土少量混)
P 3
①細硬土 (底白色土混 もろい)
②細灰土 (細硬土混)
③やや粗い細灰土 (底硬土混)
④細硬土 (底細灰土多量混)
⑤細灰土 (底細灰土多量混)
⑥細灰土 (底白土混、底分少量含む。底化物を含む)
⑦底灰土 (底白色土混。底化物を含む)

Tab.125 SB2ピット一覧表

S B 2 ピット番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P 1	30	24	20.6
P 2	32	30	31.9
P 3	32	28	46.6
P 4	60	30	30.1

Tab.126 SB3ピット一覧表

S B 3 ピット番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P 1	26	24	18.7
P 2	28	26	39.1
P 3	30	24	47.1
P 4	30	26	49.5
P 5	30	22	46.9
P 6	26	18	20.6
P 7	20	20	18.6

S B 3
P 1
①細灰灰土 (底
右少量混)
②(底少量含む。
③(底白色土。
④(底白色土。
⑤(底白色土。
⑥(底白色土。
⑦(底白色土。

P 2
①細灰灰土 (底白色土多量混)
②(底少量含む。
③(底白色土。
④(底白色土。
⑤(底白色土。

P 3
①やや粗い細灰土
②(底白色土。
③やや粗い細灰土 (底白色土混)
④(底白色土。

P 4
①細灰灰土
②(底白色土 (底白色土混)
③(底白色土 (底白色土混)
④(底白色土 (底白色土混)
⑤(底白色土 (底白色土混)

P 5
①細灰灰土
②(底白色土 (底白色土混)
③(底白色土 (底白色土混)
④(底白色土 (底白色土混)

P 6
①細灰灰土
②(底白色土 (底白色土混)
③(底白色土 (底白色土混)
④(底白色土 (底白色土混)

P 7
①細灰灰土
②(底白色土 (底白色土混)
③(底白色土 (底白色土混)

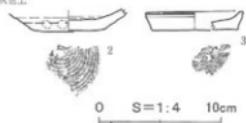


Fig.159 SB2・3出土遺物実測図

Tab.127 SB2・3出土遺物観察表

No.	Fig. PL.	遺構名	出土位置	器種	法量(cm)	特徴	胎土	色調	備考
2	Fig.159 PL.62 P 3	F群	土師質土器 底径 底径	器高△1.9 底径 △5.8	外底面に回転条切り痕。	△5.6mmの移動 を多く含む。	に多い褐色	褐色75YR5/3	約1/3残存
3	Fig.159 PL.62 P 5	埋土中	土師質土器 底	口徑 器高 底径	△8.0 △5.5 △7.2	外底面に回転条切り痕。	青	褐色SYR6/8	約1/5残存

たような状況である。遺物は、P 2から土師質土器の皿1が出土した。これはいくつかに割られた状況で、抜き取られたとみられる柱痕の埋土中からの出土である。時期は口径と底径の差が小さく、立ち上がりが短いことから、鎌倉時代中期～後期の遺物とみられる。また遺構内からではないがP 3検出中に鉄製品の鏃F②が出土した。P 2・7からは土師質土器小片が出土したが図化し得ない。

S B 2 (Fig.158 · 159 Tab.122 · 125 · 127)

H11グリッドに位置する。1メートル×1メートルの建物跡であるが、南側の柱間がやや狭い。P 4に建て直しの痕跡がみられる。P 3から上層質土器杯2が出土した。またP 1から須恵器片が出土した。

S B 3 (Fig.158 · 159 Tab.122 · 126 · 127
PL.62)

H～I 11グリッドに位置する。北側には土坑が3基東西に並ぶ。1間×1間の建物ではあるが、不整な位置に間柱のようなピットを検出した。柱の掘方は概ね40cm以上と深いが、P 1・7は浅く、2本立てたものと推測する。P 5から皿3が出土している。上師質土器で、底面に回転糸切り痕をもち、口径と底径の差が小さく、短く立ち上がる。鎌倉時代の所産である。

S B 4 (Fig.160 Tab.122 - 128)

H12グリッドに位置する。南側でSB 6と重複する。1間×1間のほぼ正方形の建物跡である。P 4に建て直しの痕跡がみられる。

S B 5 (Fig.160 Tab.122 + 129)

Tab.J28 SB4ピット一覧表

S B 4 ビット番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P 1	32	28	26.3
P 2	38	34	29.5
P 3	32	24	36.2
P 4	52	38	34.5

P 1	P 2
①暗褐色土	①やや高い褐色土
②暗色土	②褐色土 (にぶい黄褐色土混)
③褐灰色土	P 3
④褐灰色土 (暗褐色土混)	①褐灰色土 (褐灰色土混)
⑤褐灰色土 (褐灰色土少量混 しまりがある)	②褐灰色土 (褐灰色土多量混 しまりがある)
⑥褐灰色土 (灰白色土混)	③明褐色土 (にぶい黄褐色 土多量混)
⑦褐灰色土 (にぶい黄褐色土多 量混)	P 4
	⑧褐灰色土 (にぶい黄褐色土)

Tab.120 SB5 ピートー監査

S B 5 ピット番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P 1	46	28	28.2
P 2	32	32	22.0
P 3	44	34	14.1
P 4	32	30	8.4

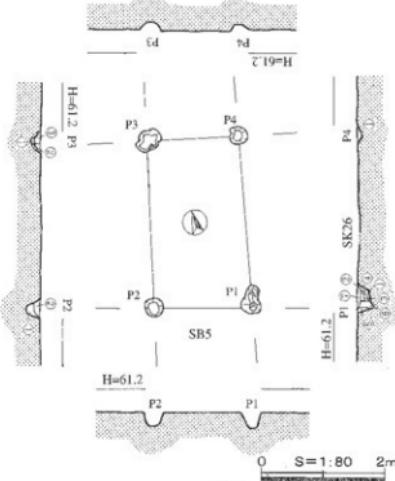
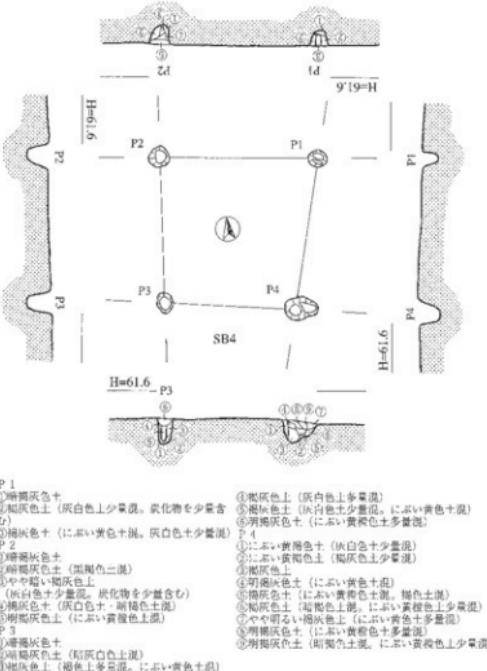


Fig.160 SB4・5遺構図

Tab.130 SB6ピット...覧表

S B 6 ピット番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P 1	30	30	23.4
P 2	42	42	34.0
P 3	38	※32	33.2
P 4	40	※36	48.2
P 5	50	46	42.0
P 6	32	28	27.2

Tab.131 SB7ピット一覧表

S B 7 ピット番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P 1	22	22	33.8
P 2	30	26	36.4
P 3	32	22	32.3
P 4	24	20	36.6
P 5	22	20	34.4
P 6	※22	※22	47.0
P 7	26	※24	38.3

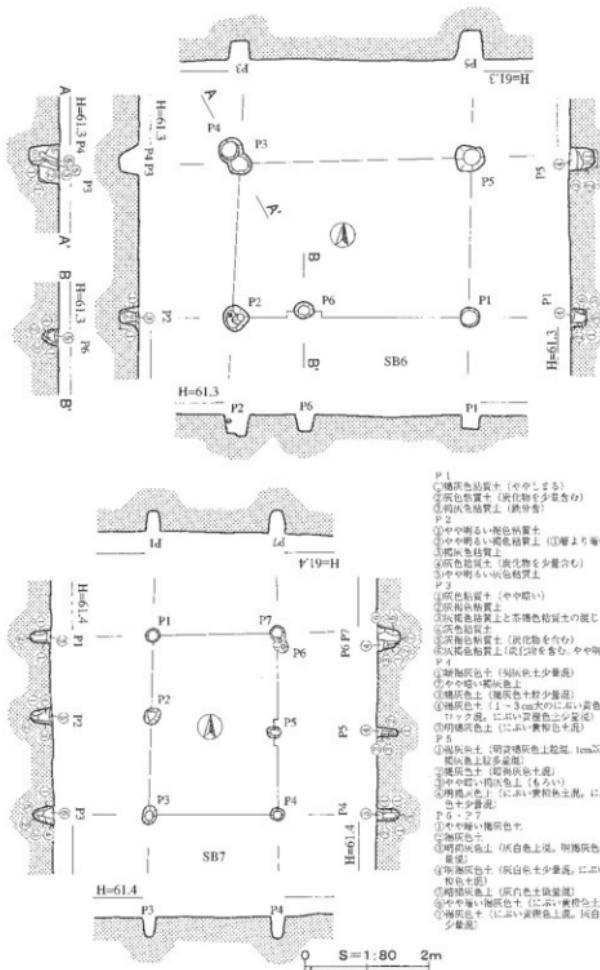


Fig.161 SB6・7断構図

P 1
①暗赤色土 (にいぶ青白土少土質)
②明赤色土 (にいぶ青白土多土質)
③褐色土 (10cm 大さじで水溶性イソラフィット)
④明褐色土 (にいぶ青白土少土質)
⑤暗褐色土 (にいぶ青白土多土質)
⑥暗赤褐色土 (にいぶ青白土十土質)
長白山地
P 2
①暗褐色土 (灰白土少土質, 2mm の黒片少土質)
②暗褐色土 (灰白土多土質, 色が赤)
③暗褐色土 (にいぶ青白土少土質)
④暗褐色土 (にいぶ青白土多土質, 1.5 mm の黒片多土質)
P 3 - P 4
①暗褐色土
②暗褐色土 (にいぶ青白土多土質)
③暗褐色土 (灰白土少土質, 黑粘土, 黑白土, 2~5mm の灰片多)
④暗褐色土 (10cm 大さじの灰片多土質, にいぶ青白土十土質)
⑤暗褐色土 (灰白土少土質, 2~5 mm の灰片多)
⑥暗褐色土 (灰白土少土質, にいぶ青白土少土質)
⑦暗褐色土 (にいぶ青白土少土質, もろい)
P 5
①暗褐色土 (灰白土少土質)
②暗褐色土 (灰白土少土質)
③暗褐色土 (灰白土少土質, 灰白土上質)
④暗褐色土 (灰白土少土質, にいぶ青白土少土質)
⑤暗褐色土
P 6
①暗褐色土
②明褐色土 (暗褐色土上層, にいぶ青白土少土質)
③明褐色土 (暗褐色土上層, にいぶ青白土少土質)
④明褐色土 (暗褐色土上層, にいぶ青白土少土質)
⑤暗褐色土

II 11グリッドに位置しており、南側の建物群とは離れた位置に単独で存在する。主軸はやや東方向に振れている。付近は耕作の際に他よりも深く掘削されており、遺構の遭存状況は悪い。ただし 1 間 × 1 間の比較的整った長方形形状を呈する。P 1 の柱の位置は確認できるが、他はいずれも浅い。

S B 6 (Fig.161)

Tab.122 · 130)

H11~12グリッドに位置する。東側でSB4と重複する。北側のSB3、南側のSB8とは長軸方向が平行し、西側のSB1とは直交し、

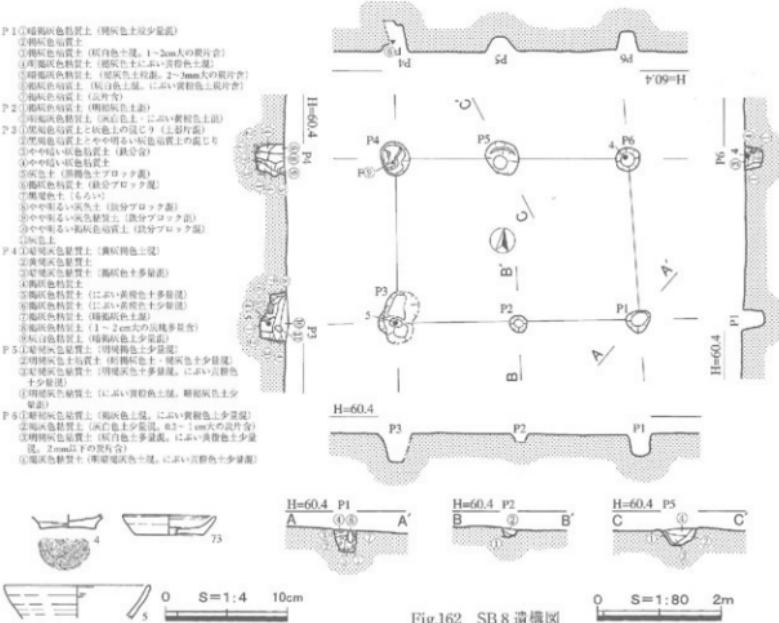


Fig.163 SB 8・9出土遺物実測図

Fig.162 SB 8 造機圖

Tab.132 SB8・9ピット出土遺物観察表

No.	Pig PL	遺構名	出土位置	器種	法量(cm)	特徴	割土	色調	備考
4	Fag163 PL62	S B 6 P 3	上層	土師質瓦片 鉢底	器高 △ 1.2 底径 4.6	外面部に凹凸あり。底 部は内凹する。	密	灰白色10YR8/2	約1/2残存
5	Fag163 PL62	S B 8 P 3	中層	土師質瓦片 碗口縁部	口径 △ 1.6 器高 △ 2.7	口縁部は内凹する。外面部ともに傾斜 の有るナメ。みがきの跡は認められない。 内面のみ黒化。	0.5mm以下の 砂粒を含む。	にふい黄色10YR7/4	1/12以下残存
73	Fag208 PL64	S B 9 P 3 土(3個)	上層	土師質瓦片 鉢底	器高 △ 1.6 底径 4.6	口径と底径の差は小さい。外面部に 凹凸あり。	細少少量 混入	外:にふい白色7.5YR7/4 内:にふい黄色10YR7/4	約1/4残存

これらの建物で群を形成する。1間×1間の建物跡であるが、P1-P2間に間柱的なP6がある。P3とP4は重複しており、P4が新しい。全体的に南側の掘方がやや浅い。柱の位置は特定できるものの、抜き取られたような状況である。

S B 7 (Fig. 161–Tab. 122–131)

F 9 グリッドに位置する。北側に S B11、東側に S B16、北東に S

B 9)があり、これらで建物群を形成する。柱間は1間×2間、柱間は概ね梁行が約3.0m、桁行が1.9mで、小型の建物跡である。柱の掘方は細く深いのが特徴で、概ね30cm以上あり、柱痕も明瞭に遺る。

S B 8 (Fig.162 · 163 Tab.122 · 132 · 133 PL.62)

G 11~12グリッドに位置する。SB 1・6らとともに建物群を形成する。1間×2間の建物跡である。P 2が浅いが他は概ね25cm以上の掘方をもつ。柱痕も残るが、多くは折られるか抜き取られたような状況である。

Tab.133 SB8 ピット一覧表

S B 8 ピット番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P 1	40	34	38.2
P 2	30	28	15.2
P 3	※86	※52	46.3
P 4	54	44	49.7
P 5	60	52	25.0
P 6	40	38	30.7

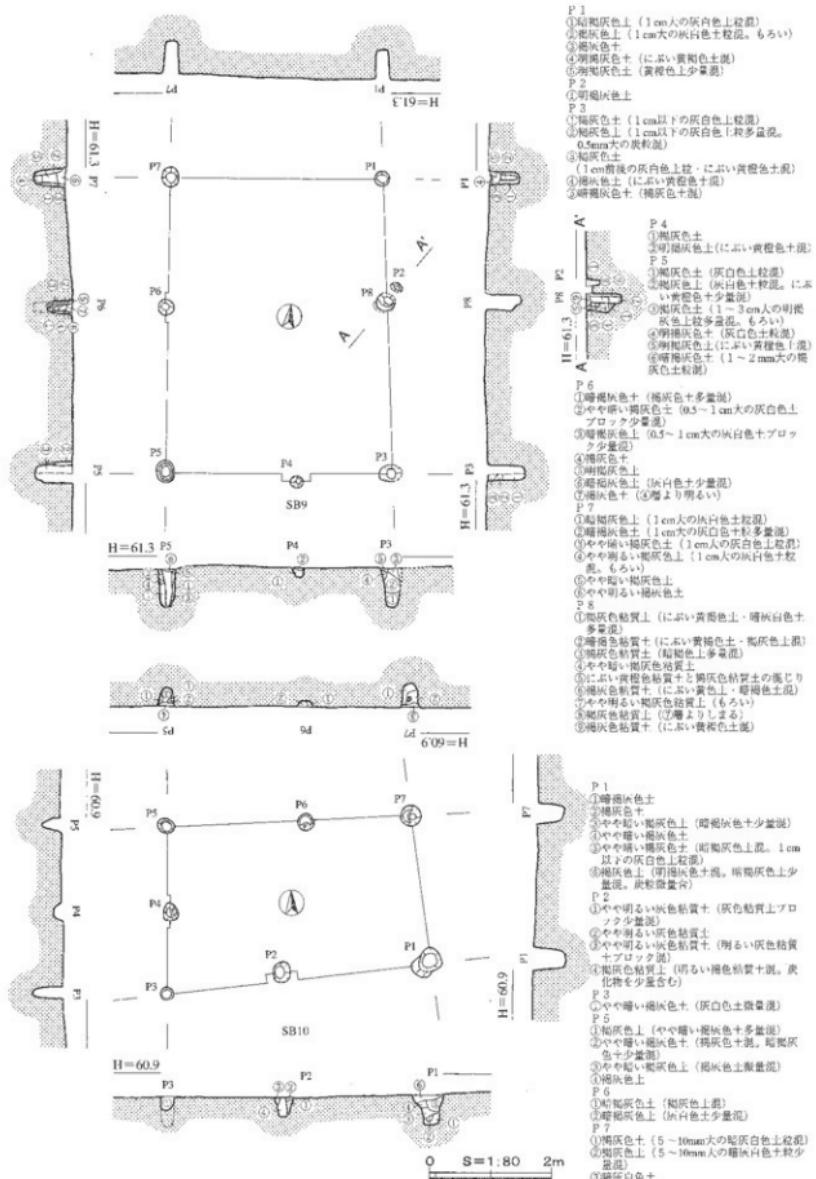


Fig.164 SB9·10遺構圖

Tab.134 SB9ピット一覧表

S B 9 ピット番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P 1	24	22	22.1
P 2	※20	※22	8.0
P 3	28	22	62.8
P 4	20	20	16.0
P 5	34	28	59.8
P 6	26	26	42.0
P 7	32	26	53.4
P 8	30	30	58.2

Tab.135 SB10ピット一覧表

S B 10 ピット番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P 1	50	32	53.3
P 2	34	28	32.2
P 3	22	20	23.0
P 4	30	26	23.8
P 5	26	24	31.3
P 6	26	24	16.0
P 7	34	34	44.1

Tab.136 SB11ピット一覧表

S B 11 ピット番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P 1	46	40	49.2
P 2	30	22	40.2
P 3	32	24	49.8
P 4	36	32	45.0

P 3 から土師質土器の縁の口縁部 5 が出土した。柱痕の位置からの出土で、柱が抜かれた後、入り込んだものと推測する。口縁部が内湾するもので、鎌倉時代の所産。皿の底部 4 は P 6 上層からの出土である。底面には明瞭に回転糸切り痕が残る。

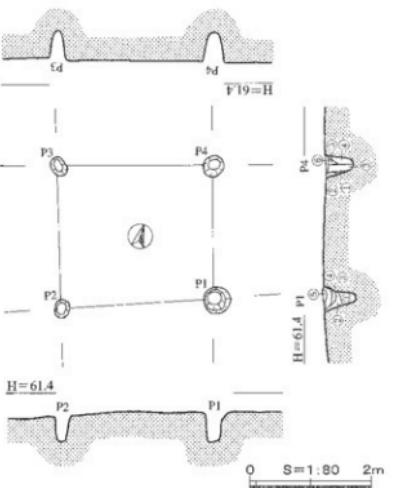


Fig.165 SB11遺構図

S B 9 (Fig.163・164 Tab.122・132・134 PL.64)

G 9～10グリッドに位置する。S B 7・11・16の建物群で最も規模が大きく中心的な存在である。西・北・東側に横跡を伴う。1～2間×2間の建物跡である。梁行の間にP 4、北側柱のやや外側にP 315がある。掘方は概ね50cm以上で深く、柱痕や抜き取りの痕跡が確認できる。P 8 から土師質土器皿73が出土している。

S B 10 (Fig.164 Tab.122・135)

G 6グリッドに位置する。東にS B 12、西にS B 13が位置する。1～2間×2間の建物跡であるが、東に向かい柱間がやや狭くなる。P 2 がやや内側に入る。掘方はP 6 がやや浅いが、他は概ね30cm以上である。多くは柱の位置が明らかであるが、P 1 のように不整な堆積を示すものもある。P 2 から土師質土器片が出土した。

S B 11 (Fig.165 Tab.122・136)

F～G 9グリッドに位置する。S B 9の西、S B 7の北に位置し、建物群の西端にあたる。1間×1間で正方形に近い形状である。掘方はいずれも40cm以上と深いが、柱の位置が明瞭なのはP 3・4である。

S B 12 (Fig.166～168 Tab.122・137・138 PL.52・62・69)

F～G 7グリッドに位置する。隣接する建物跡はないが、北にS B 16、西にS B 10が位置する。他の建物跡と

比較して、大きな掘方をもつ建物跡である。梁行は1~2間、桁行は3間である。P 1・9とP 8・16の間にP 246があるが、P 4・12とP 5・13の間には柱跡は確認できていない。全ての柱で建て替えが行われ、P 1~8の建物跡が古く、これに北北西に沿わせてP 9~16を建てている。掘方はP 1・9・5・13・6・14では柱の深さはあまり変わらないが、P 3・11・7・15では建て替えの柱は浅くなる。建て替え前の柱痕は、P 3に明瞭にみられるが、他では判然としない。これは柱が抜き取られたことを示すものであろう。また建て替えの際にはP 10・14・15のように柱を安定させるためか石を込めているものが多くみられた。これは最初の段階ではみられないことである。建て替えた後のP 9~16にはいずれもはっきりと柱痕が検出されており、最終的には建物跡はいくつかの柱が抜かれていたと想定できる。いずれにしても調査区の範囲、あるいは同時期の中世集落である茶畠六反田遺跡でもこのような大型の建物跡は検出されていないため、そのあり方が検討される。

掘り下げ中に遺物が出土した。6はP 1から掘り下げ中に出土したもので、土師質土器杯の口縁部である。外面に「レ」字状のヘラ記号がみえる。内湾して立ち上がる部から、鎌倉時代の所産である。7・8はいずれもP 12の中層~下層出土である。7は皿の底部で明瞭に回転糸切り痕が残る。8は受け口の鍋口縁部で、焼成は土師質である。県内では泊村の石脇第3遺跡森末地区のS

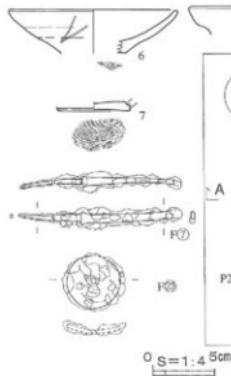


Fig.167 SB12出土遺物実測図

Tab.138 SB12出土遺物観察表

No.	Fig. PL	遺物名	出土位置	器種	法寸(cm)	特徴	断土	色調	備考
6	Fig.167 PL.52	S B12	中層	土師質土器杯	P1径 約14.0 底高 約 3.6 底径 約 5.2	口縁部はやや浅く、内湾する。外側の鋸歯形方向に「レ」字状のヘラ記号あり。	0.6m以下の 砂層をわずかに含む。	橙色25YR6/6	約1/1残存
7	Fig.167 PL.52	S B12	中層	土師質土器皿底	底径 約 4.8	円形に打ち欠く。外側底部に回転糸切痕。	0.5mの大砂粒を含む。	浅黃橙色10YR8/4	約1/2残存
8	Fig.167 PL.52	S B12	下層	土師質土器 鍋口縁部	P1径 約30.0 底高 約 2.3	口縁部は受け口状。内側底部横方向の凹部有り。	2.0mの砂層 有り。	外) 橙色25YR6/8 内) 黒色30YR1/1	約1/6残存 粘土分析試料 押平・在地原

- P 1~8
 ①やや深い灰色質土
 ②明瞭な白色粘土質と灰色粘土質の
 層(?)
 ③灰色粘土質 (灰褐色粘土質)
 ④やや弱い褐色粘土質
 ⑤灰色粘土質 (灰褐色粘土質)
 ⑥灰褐色粘土質
 ⑦やや弱い褐色粘土質
 ⑧明瞭な白色粘土質と灰褐色粘土質の
 レイヤー層(?)
 ⑨灰褐色粘土質 (灰褐色粘土質)
 ⑩灰色粘土質 (灰褐色粘土質)
 ⑪灰色粘土質 (灰褐色粘土質)
 ⑫明瞭な白色粘土質 (灰褐色粘土質)
 ⑬灰色粘土質 (灰褐色粘土質)
 ⑭灰色粘土質 (灰褐色粘土質)
 ⑮やや弱い褐色粘土質 (灰化物
 を含む)
 ⑯明褐色粘土質 (灰分・灰化物含む)

Tab.137 SB12ピット一覧表

S B12 ピット番号	長軸 (cm)	規軸 (cm)	深さ (cm)
P 1	※60	56	84.4
P 2	※80	72	79.4
P 3	100	60	85.2
P 4	24	※22	42.8
P 5	※60	40	70.8
P 6	※80	60	72.0
P 7	56	※44	65.2
P 8	56	※36	67.4
P 9	※88	80	85.2
P 10	※80	68	81.0
P 11	80	※72	48.2
P 12	※84	76	67.7
P 13	※80	56	69.9
P 14	※80	48	76.6
P 15	60	48	60.5
P 16	44	40	53.1

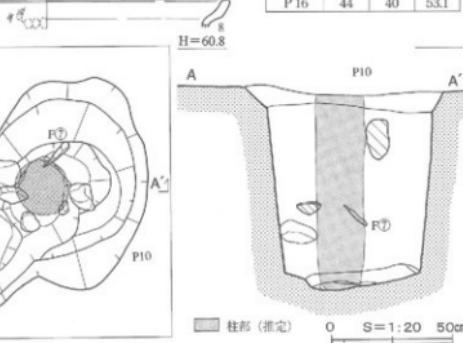


Fig.166 S B12 P 10遺物出土状況図

Tab.138 S B12出土遺物観察表

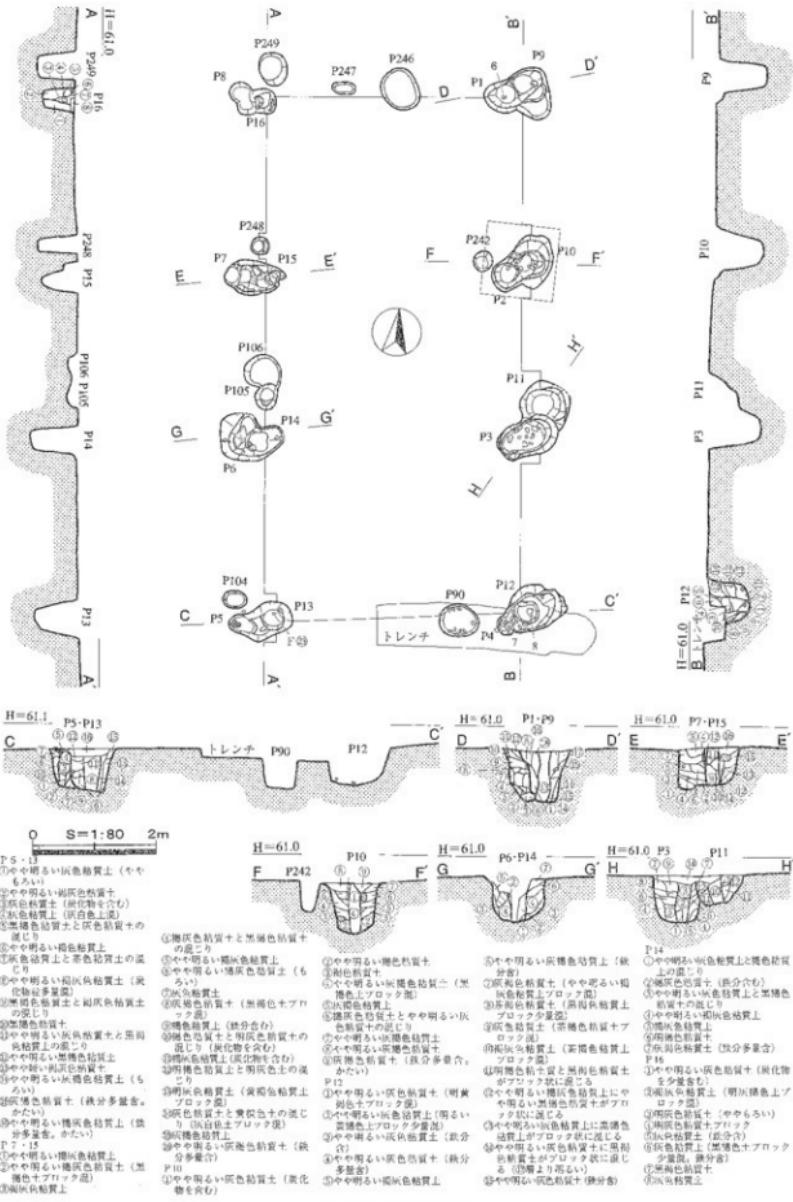


Fig.168 SB122遺構図

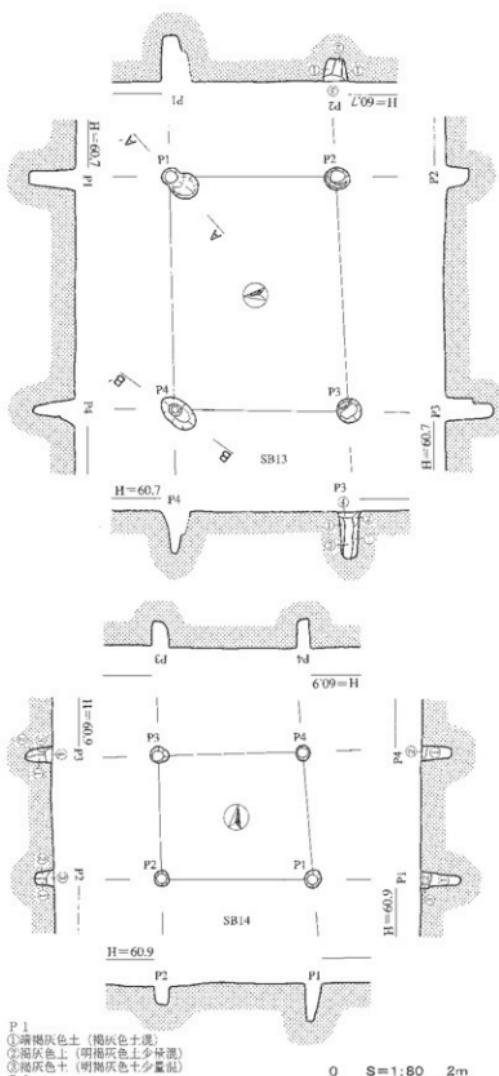


Fig.169 SB13・14構造図

- P1
①明るい褐色土と赤褐色粘質土の混じり (もろい)
②褐色粘質土 (炭化物を少含む)
③やや暗い褐色粘質土と赤褐色粘質土の混じり
④やや明るい褐色粘質土と黒褐色粘質土の混じり (灰白色)
⑤やや暗い褐色粘質土と黒褐色粘質土の混じり (灰白色)
⑥褐色粘質土 (部分プロック面)
⑦褐色粘質土 (鉄分多含む)
P2
①やや暗い赤褐色粘質土 (やや明褐色土混)
②やや暗い褐色粘質土 (鉄分含む)
P3
①赤褐色粘質土 (ややもろい)
②灰褐色粘質土 (鉄分多含む)
③褐色粘質土 (炭化物を含む。ややもろい)
④灰褐色粘質土 (鉄分含む)
P4
①やや明るい褐色粘質土と黒褐色粘質土の混じり
②やや暗い赤褐色粘質土
③赤褐色粘質土
④やや暗い褐色粘質土 (鉄分を少含む)
⑤赤褐色粘質土 (農化物を多く含む。もろい)
⑥褐色粘質土 (農化物を多く含む。もろい)
⑦やや明るい褐色粘質土 (灰白色上プロック面)
⑧灰褐色粘質土 (炭化物少含む)
⑨褐色粘質土 (炭化物を少含む)
⑩より赤色が強い)

Tab.139 SB13ピット一覧表

SB13	長軸 ピット番号	短軸 (cm)	深さ (cm)
P 1	※36	30	78.1
P 2	42	36	35.8
P 3	40	40	77.3
P 4	66	40	70.6

Tab.140 SB14ピット一覧表

SB14	長軸 ピット番号	短軸 (cm)	深さ (cm)
P 1	30	26	66.5
P 2	26	24	33.5
P 3	30	36	53.4
P 4	26	24	46.5

K 9 (1) や、鳥取市の秋里遺跡 D III K 交差点 SK-02 (2) から上部焼成の礎と瓦質の講・羽釜が共伴している土坑があり、時期的には鎌倉時代の範疇に収まると考えられる。

また、P1からはF⑦が出土している。これは礎で、復元であるが、柱を建てる際に柱の周囲に石を込め、それに沿うよう F⑦の礎を切っ先を上にして入れられたことが分かる。同様に茶畑六反田遺跡の SB12でも切っ先を上にした礎が出土している。いずれもこの時

- P 2 ①褐色粘土質土 (3~4mm大の白色礫混)
 ②褐色粘土質土 (鉄分含。ややもろい)
 ③褐色粘土質土 (炭化物を含む)
 ④灰褐色粘土質土
 ⑤灰褐色粘土質土 (灰白色土質。もろい)
 ⑥褐色粘土質土 (炭化物を多量に含む。とてももろい)
 ⑦褐色粘土質土 (褐色土質)
 P 3 ①やや明るい灰褐色粘土質土 (ややもろい)
 ②やや明るい灰褐色粘土質土 (炭化物を少量含む)
 ③やや明るい褐色粘土質土 (炭化物を少量含む)
 ④やや明るい褐色粘土質土 (鉄分ブロック混)
 ⑤やや明るい褐色粘土質土
 ⑥やや明るい褐色粘土質土と灰色粘土質土の混じり
 ⑦やや明るい褐色粘土質土 (炭化物を含む)
 ⑧炭化物と灰色粘土質土の混じり
 P 4 ①褐色粘土質土 (暗褐色粘土質土混。灰色土少量混)
 ②褐色粘土質土
 ③褐色粘土質土 (鉄分含)

Tab.141 SB15ピット一覧表

SB15 ピット番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P 1	34	24	24.0
P 2	34	32	59.9
P 3	48	42	55.8
P 4	34	28	41.3

- P 1 ①やや暗い灰褐色土 (鉄分含)
 ②灰褐色粘土質土 (鉄分含。炭化物を含む)
 ③灰褐色粘土質土 (鉄分含)
 P 2 ①褐色粘土質土 (暗茶褐色土少量混)
 ②褐色粘土
 ③暗茶褐色土
 ④茶褐色土
 P 3 ①灰褐色粘土質土
 P 4 ①灰褐色粘土質土 (明茶褐色土混)
 P 5 ①暗茶褐色土
 ②暗茶褐色土 (灰褐色土混)
 ③やや明るい茶褐色土
 ④灰褐色粘土質土
 ⑤暗茶褐色土

Tab.142 SB16ピット一覧表

SB16 ピット番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P 1	32	30	※50.2
P 2	30	28	※49.9
P 3	22	18	※52.0
P 4	30	26	※77.5
P 5	32	30	※68.0

期、建物を建てる際に何らかの意味をもち、意図的に入れられたと考えられる。その他、P 13から鉄製鍤錐車の円盤部F②が、P 8・10から土師質土器片が出土した。

S B 1 3 (Fig.169 Tab.122・139)

F ~ G 5 グリッドに位置する。やや離れた東側にS B10、南東にS B15がある。1間×1間の平面形はほぼ長方形である。P 2 の掘方は浅いものの概ね35cm以上、P 1・4・5 は70cmを越える。

S B 1 4 (Fig.169 Tab.122・140)

H 7 グリッドに位置する。S B12の北側、S B17の西側に単独で位置する。建物の範囲内には方形のP 400が

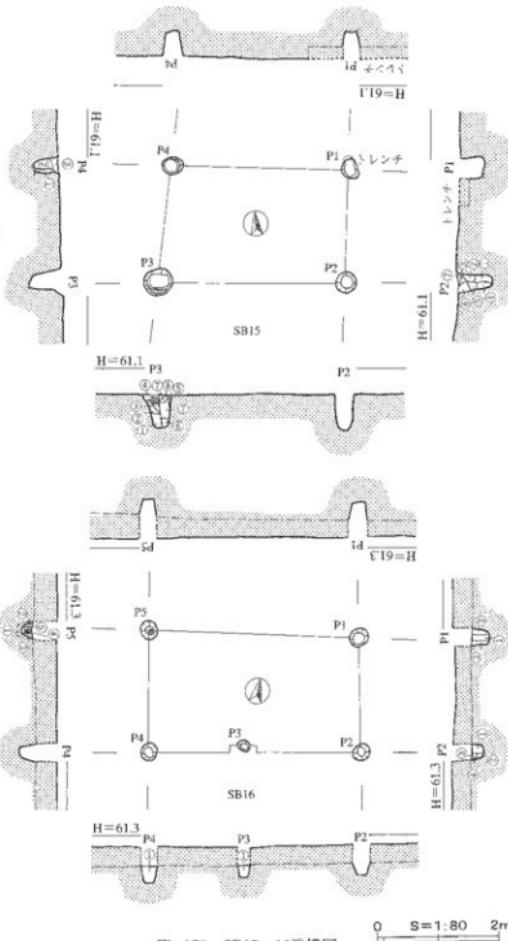
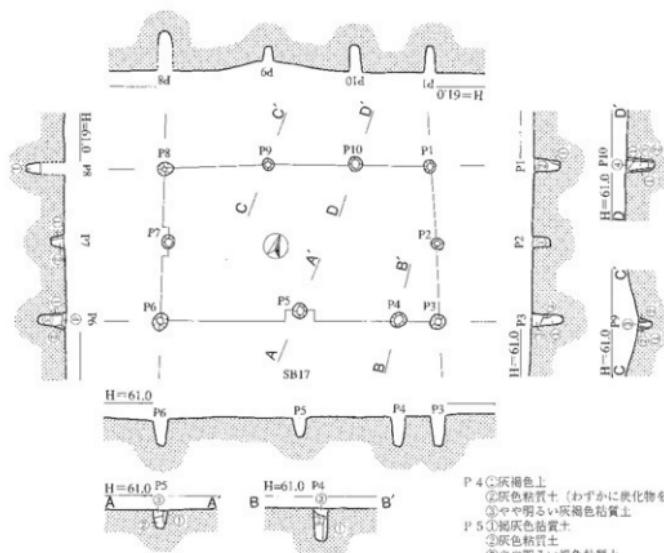


Fig.170 SB15・16遺構図



- P 1 ①灰褐色粘土質土
②灰色粘土質土(炭化物を含む)
P 2 ①褐色粘土質土
P 3 ①褐色粘土質土
②やや明るい褐色粘土質土
③やや明るい褐色粘土質土(褐色土上少混。灰白色土を少量混)

- P 4 ①灰褐色土
②灰褐色粘土質土(わずかに炭化物を少含む)
③やや明るい灰褐色粘土質土
P 5 ①褐色粘土質土
②灰褐色粘土質土
③やや明るい褐色粘土質土
P 6 ①やや明るい褐色粘土質土
②灰褐色粘土質土と褐色粘土質土の混じり
③褐色粘土質土(炭化物を含む)
P 7 ①やや明るい褐色粘土質土(鉄分含)
P 8 ①やや明るい褐色粘土質土
②褐色粘土質土
P 9 ①褐色粘土質土(褐色土上混)
②褐色粘土質土
P 10 ①やや明るい灰褐色粘土質土(しまりがある)
②やや明るい褐色土
③灰褐色粘土質土
④灰褐色粘土質土(鉄分含)

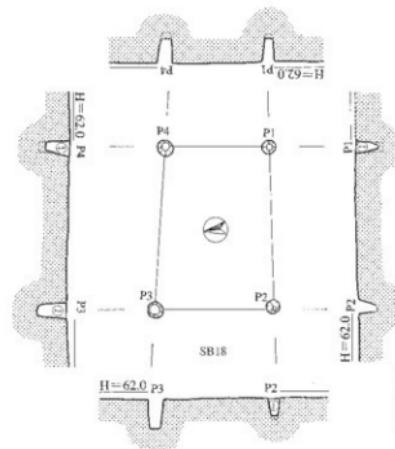


Fig.171 SB17・18造構図

Tab.143 SB17ピット一覧表

S B17 ピット番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P 1	20	20	42.8
P 2	20	18	29.5
P 3	24	24	52.7
P 4	26	24	53.8
P 5	24	24	32.1
P 6	28	26	48.8
P 7	22	20	26.6
P 8	26	20	36.7
P 9	20	20	43.1
P 10	26	24	45.9

- P 1 ①褐色粘土
P 2 ①茶褐色粘土
P 3 ①褐色粘土
P 4 ①褐色粘土

Tab.144 SB18ピット一覧表

S B18 ピット番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P 1	26	26	38.0
P 2	22	20	30.0
P 3	22	22	46.5
P 4	28	26	40.0

- P 1 ①暗灰褐色粘砂土
 P 2 ①暗褐色粘砂土
 P 3 ①暗灰褐色粘砂土・(黒色土・灰色土ブロック混)
 ②褐色粘砂土・(灰色土小ブロック混)
 P 4 ①暗褐色粘砂土
 P 5 ①暗褐色粘砂土
 P 6 ①暗灰褐色シルト
 P 7 ①暗灰褐色粘砂土
 P 8 ①暗褐色粘砂土

Tab.145 SB19ピット一覧表

SB19 ピット番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P 1	26	22	43.6
P 2	20	20	40.2
P 3	44	38	49.5
P 4	22	20	36.0
P 5	22	20	46.7
P 6	24	22	45.7
P 7	22	22	38.5
P 8	22	22	38.7

Tab.146 SB20ピット一覧表

SB20 ピット番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P 1	42	32	60.0
P 2	32	28	49.0
P 3	30	30	64.7
P 4	32	28	49.3

ある。1間×1間のはば正方形の建物跡である。規模は小さい。P 2がやや浅いが、他は概ね50cm以上と深い。柱痕は確認できなかった。

SB15 (Fig.170 Tab.122・141)

F 6グリッドに位置する。北にSB 10・13が位置するがやや離れている。1間×1間の建物跡であるが、P 2がやや外側に出ている。掘方はP 1がやや浅いものの、他は概ね40cmを越える。柱痕は確認できていないが、P 3では込められた石を検出した。

SB16 (Fig.170 Tab.122・142)

F 10グリッドに位置する。SK 9の南、SB 7の東にあり、これらと建物群を形成する。1間×2間の規模をもつ。埋土が灰色系で検出面との区別が困難で、黒色土上面で検出した。P 1・2では柱の位置が確認できる。深さは推定でP 3を除き概ね30cm以上であろう。

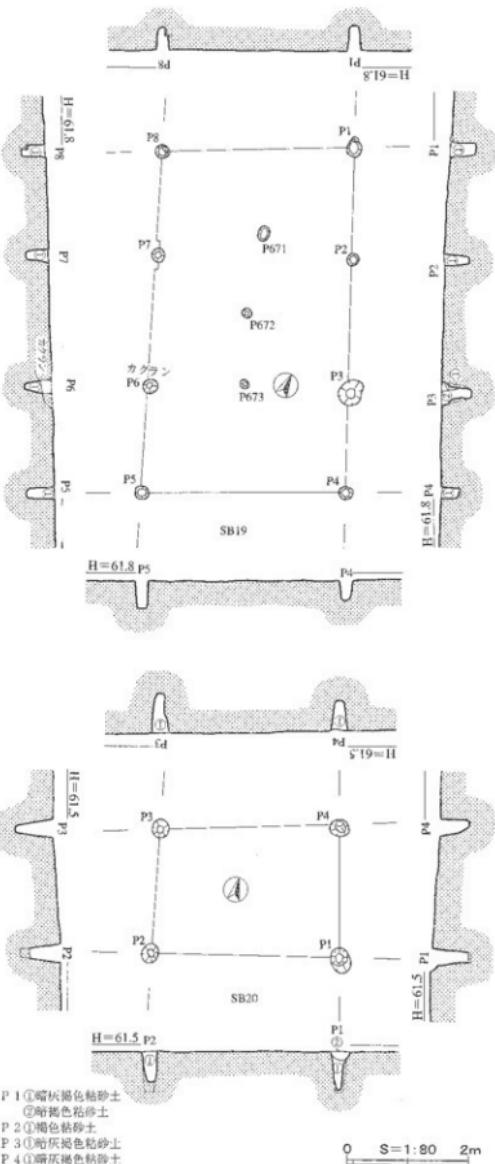


Fig.172 SB19・20造構図

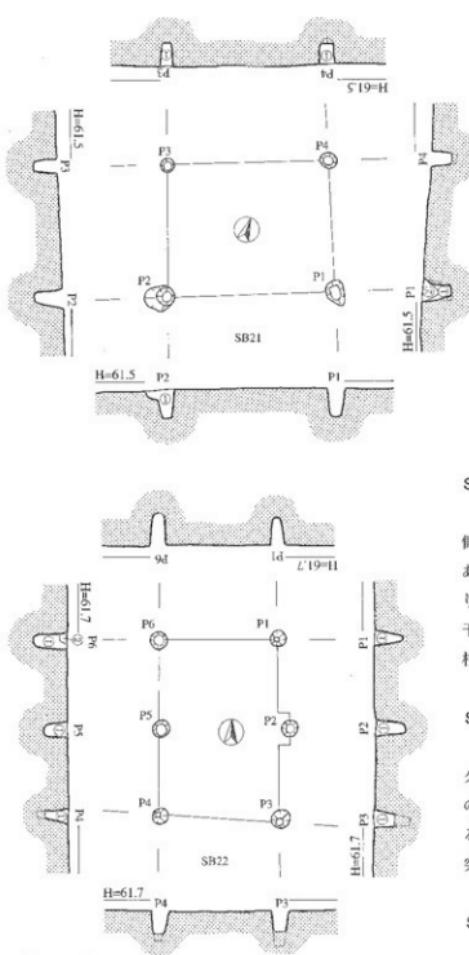


Fig.173 SB21・22遺構図

S B 2 0 • 2 1 (Fig.172・173 Tab.122・146・147 PL.62)

E 7 グリッドに位置する。南側に列状にビットが検出されている。S B21とほぼ重複しており、S B21が西側になる。新旧関係は分からぬが建て替えの可能性が高い。ともに1間×1間の建物跡である。

S B20は西側の柱間がやや狭い。掘方は最低でも約50cmを測る。P 1では柱痕も確認できた。

- P 1 ①暗灰褐色粘砂土
- ②暗灰褐色粘砂土 (①層より赤みが強い)
- P 2 ①暗褐色粘砂土
- P 3 ①暗灰褐色粘砂土
- P 4 ①暗灰褐色粘砂土

Tab.147 SB21ビット一覧表

S B21 ビット番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P 1	44	30	49.9
P 2	50	42	47.8
P 3	24	22	38.6
P 4	28	26	35.0

Tab.148 SB22ビット一覧表

S B22 ビット番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P 1	26	26	46.6
P 2	26	24	49.7
P 3	32	30	35.0
P 4	28	24	52.2
P 5	30	28	39.3
P 6	26	26	55.9

S B 1 7 (Fig.171 Tab.122・143)

H 8～9グリッドに位置する。S B14の東側に単独で存在する。2間×3間の建物跡である。主軸はN-20°-Wで、他の建物跡よりも若干北に振れる。柱の深さは、間柱が若干浅いものの、四隅はいずれも35cm以上ある。柱痕も遺存している。

S B 1 8 (Fig.171 Tab.122・144)

これ以降1区の調査範囲となる。E 10～11グリッドで、調査区の南端に位置する。周辺の調査区は近く付近の建物跡は不明瞭である。1間×1間であるが、P 3がやや北側に突出する。柱の深さは20cm以上である。

S B 1 9 (Fig.172 Tab.122・145)

D 8グリッドに位置する。周辺にはビットは少ない。北西にS A 7があるがやや離れる。1間×3間の建物跡である。長軸の南東に向かい、わずかながら柱穴が広くなる。P671～673は屋内柱跡の可能性がある。

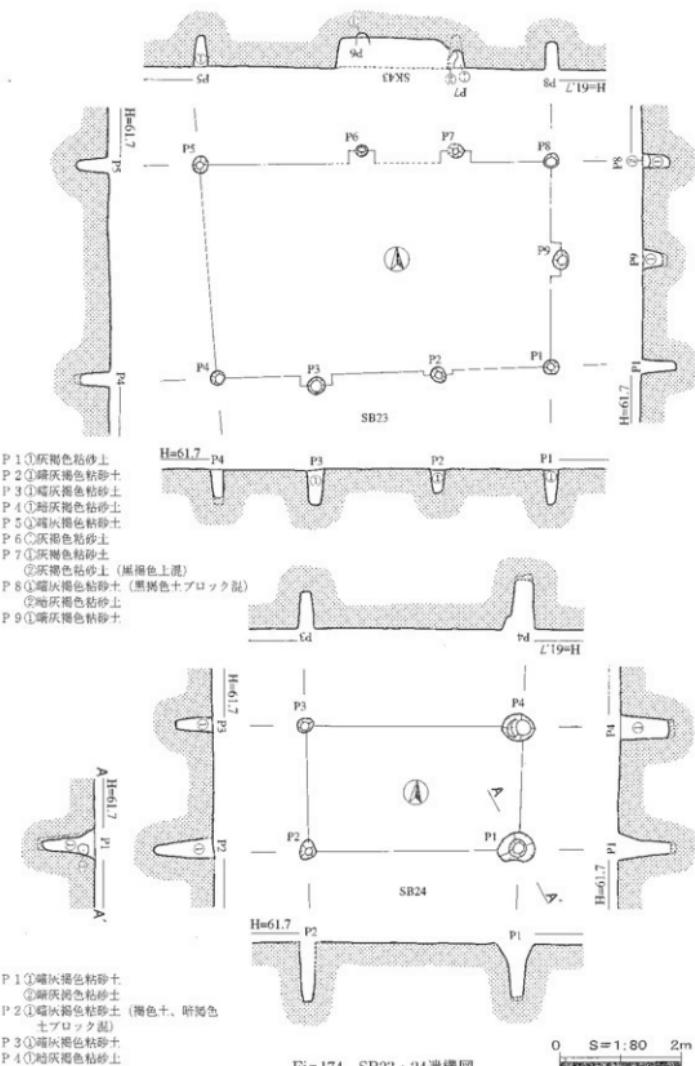


Fig.174 SB23・24造様図

S B21はほぼ整長方形である。掘方は概ね30~50cmで一定している。P 1は抜き取られたと考えられる。

S B22・23・24 (Fig.173~175 Tab.122・148~151 PL.49・52・62)

C 5~6グリッドに位置する。S B23の内側にS B24があり、ともに東西方向に長軸をもつ。東側で南北方

Tab.149 SB23ピット一覧表

ピット番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P 1	22	22	44.6
P 2	32	26	41.6
P 3	24	24	56.0
P 4	30	22	46.0
P 5	28	28	57.5
P 6	24	22	56.9
P 7	28	24	30.0
P 8	20	16	44.6
P 9	32	24	41.6

Tab.150 SB24ピット一覧表

ピット番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P 1	60	46	38.0
P 2	32	28	97.7
P 3	26	24	63.1
P 4	54	44	81.0

Tab.151 SB23・24出土遺物観察表

No.	Fig. PL.	遺構名	出土位置	器種	法量(cm)	特徴	地上	色調	備考
9	Fig.175 PL.62	S B23	埋土中	土師質土器 底盤部	器高 □8.0 径深 □5.0	外側底部に回転糸切り痕あり。	1 cm以下の 砂粒多量混入	明褐色7.5YR5/8	約1/8残存
10	Fig.175 PL.62	S B24	埋土中	須恵器 杯口盤部	口径 □14.0 器高 □2.4	外側面ともに回転糸切り痕ナシ。	砂粒なし。	灰色N6/0	1/12以下残存

向を長軸としたSB22と重複するが、新旧関係は不明である。埋土はほとんどが単層で、柱痕は確認できない。柱穴内から平安時代の遺物が出土しているが、付近から鎌倉時代の溝状造構が検出されていること、北隣に位置するSB8と主軸が揃うことから、ここでは鎌倉時代の造構としてとらえておきたい。

SB22は1間×2間で、P2はやや東側に突出する。北側でP6・7がSK43と重複しており、これよりも新しい。間柱はやや浅いが四隅は概ね46~60cmと深い。P3から弥生土器片が出土したが固化し得ない。下層の遺物とみられる。

SB23は1~2間×3間の建物跡である。P2が浅いが他は概ね37cm以上である。P5掘り下げ中に土師質土器の皿9が出土した。円盤状の高台をもち、外面には明瞭に回転糸切り痕を残す。

平安時代以降で鎌倉時代の可能性もあるが、小片であり判断は難しい。ほかにもP3やP6から土器片が出土している。

SB24は1間×1間の建物跡である。東側のP1・4は、二段気味に掘り込まれる。P3が浅いものの概ね63cm以上である。P2掘り下げ中に須恵器の杯10が出土した。平安時代の所産であるが、付近から同時期の遺物が出土していること、柱の埋土がSB22・23と類似し、建物の主軸もほぼ一致することから、SB22・23と大きな時期差はないものと推定される。

SB25 (Fig.176・177 Tab.122・152・153 PL49・50・65)

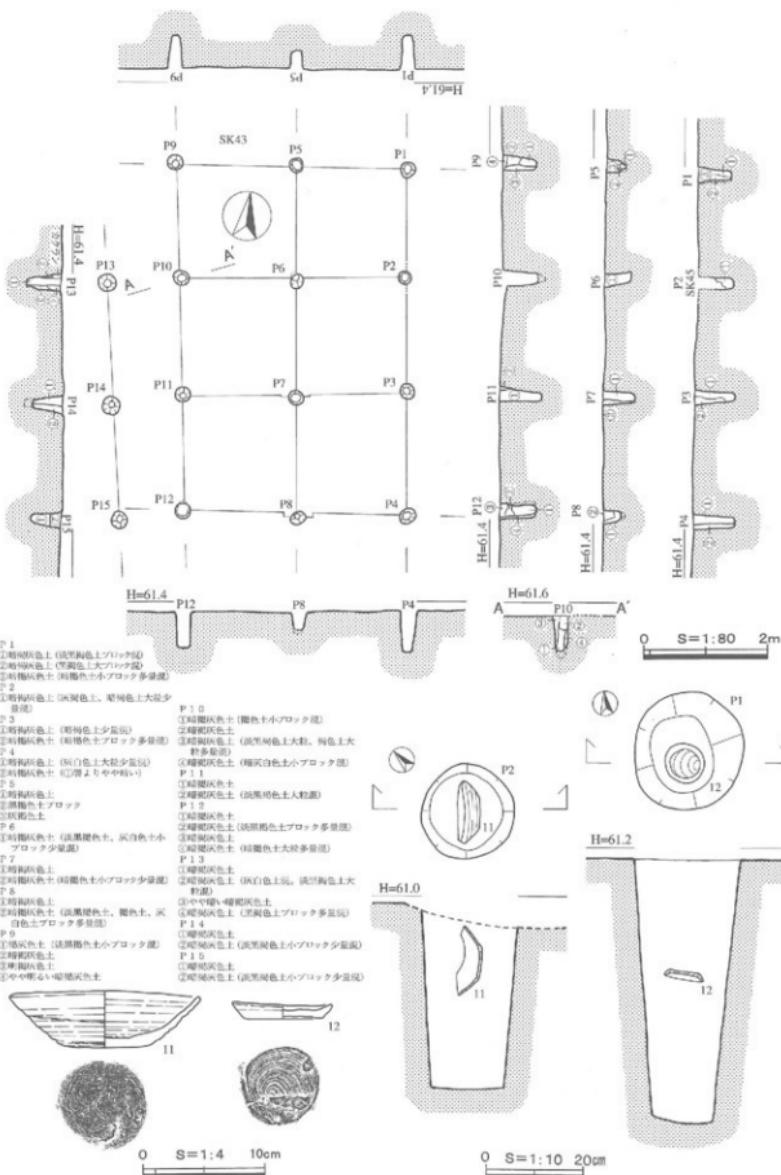
C5~D6グリッドに位置する。南側にSB22・23・24、北側にSB26がある。またP2がSK45、P10がSK52と重複しており、これらよりも新しい。2間×3間の総柱建物跡で、西側のP10~12の外側にはP13~15があるが、これが底状になるのか、あるいは衝状になるのかは不明瞭である。ここではややずれがあるものの対応関係があると判断した。柱痕はP4・7・9・10・11・13・14で確認できた。他はいずれも抜き取られたような堆積である。遺物はP2から11が、P1から12が出土した。いずれも土師質土器である。11は杯で口縁部

Tab.152 SB25出土遺物観察表

ピット番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P 1	26	22	55.0
P 2	20	20	39.4
P 3	24	24	65.0
P 4	30	22	68.7
P 5	24	22	33.0
P 6	26	20	43.7
P 7	24	22	54.1
P 8	28	20	30.0
P 9	26	26	56.0
P 10	26	24	40.0
P 11	24	24	71.6
P 12	28	26	59.7
P 13	30	30	56.7
P 14	30	30	63.2
P 15	28	28	52.2

Tab.153 SB25出土遺物観察表

No.	Fig. PL.	遺構名	出土位置	器種	法量(cm)	特徴	地上	色調	備考
11	Fig.176 PL.65	S B25 P 2	埋土中	土師質土器 底盤	口径 13.3 器高 4.7 底径 7.3	口縁と底盤の差は大きい。口部は直線状に外側に、ナデによる凹凸があり。底部外側に回転糸切り痕。	1 cm前後の 砂粒を多量 に含む。	橙色7.5YR6/5	ほぼ完存
12	Fig.176 PL.65	S B25 P 1	埋土中	土師質土器 底盤	口径 8.0 器高 1.4 底径 6.3	口縁と底盤の差は小さい。	0.5 mm以下の 白い砂粒混 じる。	橙色7.5YR7/6	ほぼ完存



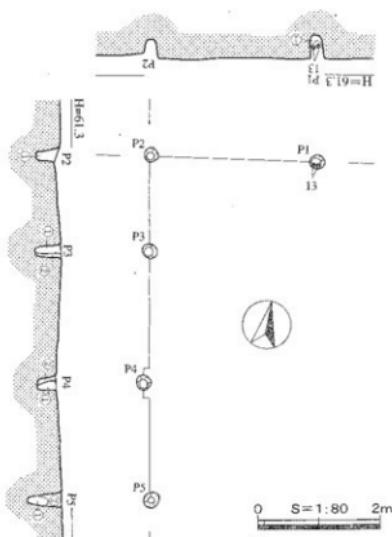


Fig.178 SB26遺構図

Tab.154 SB26ピット一覧表

S B26 ピット番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P 1	24	22	39.7
P 2	24	22	37.3
P 3	26	22	43.5
P 4	24	22	30.5
P 5	26	24	57.0

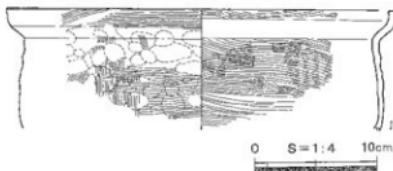


Fig.179 SB26出土遺物実測図

る。ただしこれは主に低地での建物で、今回調査が行われた茶畠六反田遺跡や押平弘法堂遺跡のような層状地に位置する遺跡は少ない。

北陸中世土器研究会 1993『中世北陸の家・屋敷・暮らしと歴史』第6回北陸中世土器研究会

は内済し、体部には内外面とともに横ナデの痕跡が明瞭に残る。12は皿で、口径と底径の差が小さく、口縁部が短く立ち上がる。いずれも鎌倉時代の所産である。11は柱穴中央、19cm程浮いた状況で横方向の出土。12は同じく柱穴中央、30cm程浮いた状況で底面を上にした状況での出土である。いずれも柱を抜いた後に入れられたものと判断でき、これが遺構の下限を示す遺物であろう。遺構の性格は、純粋建物ではあるが、底状の遺構があることから、直ちに蔵などの保管庫的な用途とは限らず、他の地域でみられる(3)のような居住を目的とした建物と考えておきたい。

S B 2 6 (Fig.178・179 Tab.122・154・155 PL.62)

D 5 ~ E 6 グリッドに位置する。S B 25 の北側にある。1間 × 3間の柱穴を検出したが、遺存状況が悪いため、これよりも広がるのかどうかは明らかではない。P 1 から上師質土器の鍋13が出土した。柱穴の底面から16cm程浮いた状況である。形状は受け口で、外縁又は横方向のハケ目、内面は口縁部まで横方向のハケ目が顕著に残り、鎌倉時代の所産である。

注

(1) 第3章 茶畠六反田遺跡 3 (5) 注(4)文献。土師質土器の鍋、甕、瓦質土器の鍋、羽釜、把手付の鍋などが土坑から一括で出土しており、土師質土器の杯も1点ある。これにより、ほぼ同時期に使用されていたことが推測できる。

(2) 財團法人鳥取市教育振興会 1996『秋里遺跡』ここからは土師質土器の鍋とともに、畿内産とみられる三足をもつ瓦質の鍋が出土している。畿内の年代観から概ね13世紀の前半頃とみられる。

古代の土器研究会編 1994『古代の土器研究3都城の土器集成Ⅲ』

(3) 北陸地方などでは居住を目的とした純粋建物があ

Tab.155 SB26出土遺物観察表

No.	Fig. PL	遺構名	出土位置	器種	法量(cm)	特徴	地土	色調	備考
13	Fig.179 PL.62 P 1	S B26	埋土中	十脚質土器 湯口付鉢 器高△100	口径 ※32.0 高さ△100	口縁部は受け口形になる。U字部内外 面ともに横方向のハケ目で内面のみナ デ。底面皿以下内面横方向、外縁横方 向のハケ目後指輪状痕。	1mm以下の 青い浮きが 見渡る。	にびい黄褐色10YR7/4	約1.5段存

Tab.156 土坑一覧表

SK番号	グリッド名	平面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(cm)
SK1	G11	円形	1.92	1.80	36
SK2	H11	円形	1.88	1.74	32
SK3	I11	やや不整な円形	1.92	1.78	48
SK4	I11	やや不整な円形	1.42	1.20	18
SK5	I11	やや不整な円形	1.52	1.42	22
SK6	J11・12	不整な長方形	0.94	0.54	46
SK7	G10	やや不整な円形	1.34	1.14	16
SK8	H11	不整な長方形	1.24	1.13	63
SK9	H10・11	楕円形	2.18	1.66	42
SK10	G10	不整な方形	1.64	1.68	46
SK11	G10・H10	長方形	※1.85	1.02	47
SK12	J12	やや不整な楕円形	0.96	0.72	30
SK13	I11・J11	不整な円形	1.48	1.30	60
SK14	F9	やや不整な円形	※1.14	※1.12	14
SK15	H8	不整な長方形	0.98	0.52	40
SK16	G9	楕円形	0.74	0.60	20
SK17	H7	楕円形	0.98	0.76	24
SK18	G8	不整な楕円形	0.96	0.82	26
SK19	G5	不整な楕円形	0.76	0.62	14
SK20	G9	円形	1.04	※1.00	22
SK21	F7	不整な楕円形	0.90	0.64	24
SK22	G7	不整な方形	1.66	1.52	24
SK23	F8	不整形	※1.60	1.46	42
SK24	F5	不整な円形	0.94	0.74	46
SK25	H10	長方形	0.92	0.76	32
SK26	I11	長方形	1.48	0.56	142
SK27	G11	不整な円形	0.86	0.86	22
SK28	G12	不整形	0.74	0.60	16
SK41	D8	円形	0.90	0.86	22
SK42	C6	不整な楕円形	0.48	0.34	10
SK43	C6	長方形	1.98	1.20	56
SK44	E7	不整形	2.24	1.20	14
SK45	D6	楕円形	0.92	0.74	30
SK46	C5	不整な円形	1.12	1.00	24
SK47	C5	不整な円形	0.60	0.58	32
SK48	C5	不整な円形	※0.72	0.64	24
SK49	C5	不整形	※0.88	0.84	10
SK50	C5	楕円形	※0.68	0.36	10
SK51	C5・D5	不整な円形	0.76	0.56	24
SK52	D5	円形	0.56	※0.48	10
SK53	C5	やや不整な円形	※1.00	0.92	22
SK54	C4	不整形	2.00	0.80	52

Tab.157 SK1・2・3出土遺物観察表

No.	Fig. PL.	遺物名	出土位置	断面	法量(cm)	特徴	地土	色調	備考	
14	Fig.180 PL.62	SK 1	底面上	中世漆器 底部	漆高△6.4	外側桔子状のタタキ。内面縮または横 方向のカキメ。	白い砂紋少 量混じる。	外) 灰色N5/0 内) 灰色N6/0	地土分析試料 押平2・勝間田産	
15	Fig.180 PL.62	SK 1	上肩	土師質土器 底部	口径 底高 底径	9.8 1.9 7.8	口縁と底縁の差は小さく、短く立ち上 がる。外腹底部に凹輪底部系切り痕。内面 に内輪状の板あり。	白い砂紋少 量含む。	外) にいわゆる75YR7/4 内) にいわゆる75YR6/4	約1/4残存
16	Fig.180 PL.62	SK 2	中肩	土師質土器 杯底部	漆高△1.7	外腹底部に凹輪系切り痕。	0.5mm以下の 白い砂紋少 量混じる。	浅黄褐色10YR8/4	約1/3残存	
17	Fig.180 PL.62	SK 2	下肩	土師質土器 底部	口径 底高 底径	7.2 1.3 5.8	口縁部は短く立ち上がる。外腹底部に 内輪状の板あり。	外) にいわゆる10YR7/4 内) 浅黄色25Y7/4	底面約1/2残存	
18	Fig.180 PL.62	SK 2	中肩	土師質土器 柱状高台 高台部	漆高△3.3	柱の端部はやや高く面をもつ。外腹部 に内輪底部系切り痕あり。	縦脊などな し。	外) 棕色7.5YR7/6 内) 棕色7.5YR6/6	高台および柱部 約2/3残存	
19	Fig.180 PL.77	SK 2	埋土	白磁 碗	口径 高さ	19.2 1.8	口縁部は外反する。	灰白色N8/0	約1/12残存 白磁V削製	
20	Fig.180 PL.62	SK 3	埋土	土師質土器 盤	口径 高さ	30.4 1.2	L字縫は内溝する。	縦脊少 量混じる。	にいわゆる10YR7/4	約1/12残存
21	Fig.180 PL.62	SK 3	中世漆器 修復部	漆器	6.7	外腹部に複数の平行タタキ。内面無文の 円形の内側で真ちゅう。	1mm以下の砂 紋を含む。	外) 灰色10YR7/1 内) 関東式10YR6/1	地土分析試料 押平1・角山産	
22	Fig.180 PL.62	SK 3	上肩	瓦質土器 鍋	口径 高さ	24.8 2.1	内面の下半に傾方向のハケ目。面部 は面取り状にやや強くナデる。外腹部 に黒化付着。	白い砂紋混 じる。	外) 黑褐色5Y3/1 内) にいわゆる30YR7/3	1/2以下残存

(2) 土坑

第1土壤検出面では41基の土坑を検出した。この中には鎌倉時代のみならず近世の土坑も4基含まれる。形状は円形、楕円形が中心であるが、長方形のものもある。掘立柱建物跡の近くに集中する。

SK 1 (Fig.180・181 Tab.156・157 PL.62)

G 11グリッドに単独で位置する。平面形

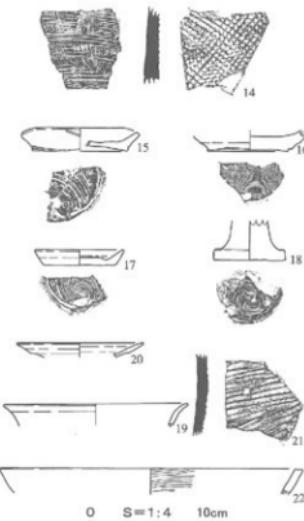
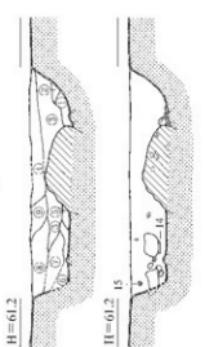
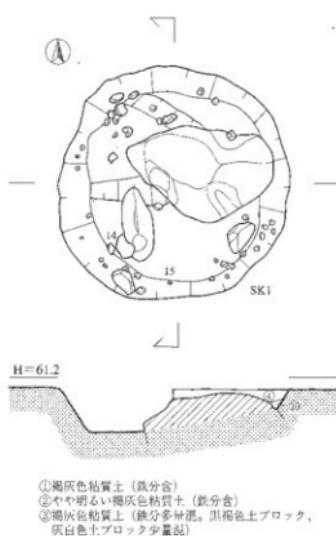
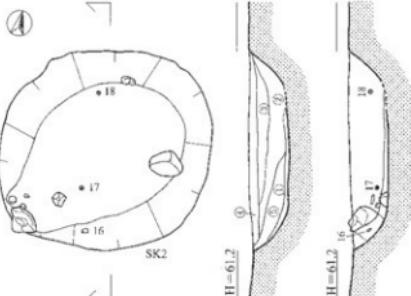
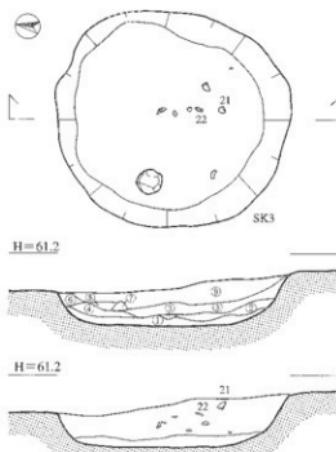


Fig.180 SK1・2・3出土遺物実測図



- ④灰色粘質土(黒褐色土ブロック少量含む)
- ⑤褐色粘質土(鉄分含む)
- ⑥褐色粘質土
- ⑦褐色粘質土
- ⑧灰褐色粘質土(鉄分多量含む)
- ⑨褐色粘質土(鉄分多量含む)
- ⑩やや明るい茶褐色土(灰褐色土ブロ
ック少量見)



- ⑤褐色粘土(炭化物を少量含む)
- ⑥やや明るい茶褐色土
- ⑦灰色土
- ⑧灰褐色土(鉄分多量含む)
- ⑨灰褐色土(鉄分多量含む)黑褐色土ブ
ロック少量混入。炭化物を少量含む

0 S=1:40 1m

Fig.181 SK1・2・3構造図

は円形である。中央やや東側に地山の石がみられ、これにより掘るのを止めている。断面をみると底は平坦で埋土には石が多く含む。掘り下げ中に須恵器・土師質土器が出土した。固形化したものは、14の中世須恵器の体部と15の土師質土器の皿である。14は底面上からの出土で、外面上に格子目状のタタキ、内面カキメで、勝間田・亀山系と呼称されている。15はやや大きめの皿で、鎌倉時代の所産である。

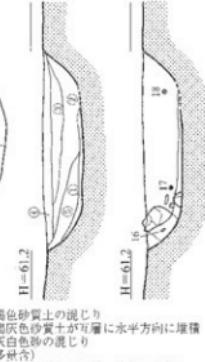
SK2 (Fig.180・181)

Tab.156・157 PL62・75・77)

H11グリッドに位置する。

S B 1 の南側の築行の間にあ

るが切り合い関係はない。平面形は円形、底面は平坦で緩やかな堆積である。掘り下げ中に土師質土器が出土した。16は杯底部で17は皿である。18は柱状高台で、茶烟六反出跡からも出土している。裾端部が一段高くなるタイプ(1)のものである。19は白磁V類碗の口縁部である。概ね12世紀後半~13世紀代の豚年代があつて、概ね在地土器の年代観とも矛盾しない。



- ①灰色砂質土と黒褐色砂質土の混じり
- ②灰褐色砂質土と褐褐色砂質土が互層に水平方向に堆積
- ③褐褐色砂質土と灰白色砂の混じり
- ④灰褐色土(鉄分多量含む)
- ⑤茶褐色砂質土と褐褐色砂質土が互層に斜状に堆積

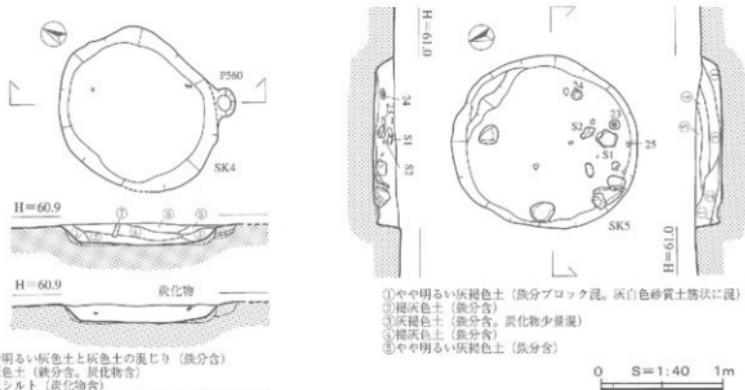


Fig.182 SK4・5遺構図

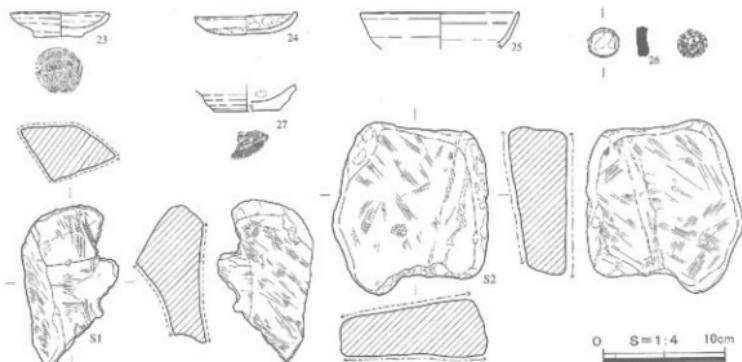


Fig.183 SK5・7出土遺物実測図

Tab.158 SK5·7出土遺物觀察表

No.	Fig. PL	遺構名	出土位置	認種	法蓋(cm)	特徴	出土上	色調	備考
23	Fig.183 PL ₅₆	S K 5	下層	土師質土器 直腹	口徑 底高 直徑 8.3 2.1 4.1	底径は小さく、口縁は大きく立ち上がる。 外腹部に削除条があり。	密	橙色7SYR7/6	完存
24	Fig.183 PL ₆₂	S K 5	下層	土師質土器 直腹	口徑 底高 直徑 9.62 1.9 5.9	手くぼねによる成形。口縁部は一段ナ 字型。	1mm以下 の砂粒を含む。	橙色SYR6/8	完存
25	Fig.183 PL ₆₂	S K 5	下層	土師質土器 斜口直腹	口径 底高 直徑 13.0 3.0 8.0	口縁部に内溝がある。	0.5mm以下の砂 粒を多く含む。	浅い黄褐色10YR7/4	約1/12残存
26	Fig.183 PL ₆₂	S K 7	中層	猪頭器 直腹	高さ 直徑 2.4 3.0	円形に行き丸く、外腹は猪子状のタタ キ状。	2.3mmの砂 粒有り。	深白色5Y6/1	完存か
27	Fig.183 PL ₆₃	S K 7	上層	土師質土器 直腹	高さ 直徑 2.2 2.4	外腹全体の凸が大きい。外腹底部に 削除条がある。	細粒。	橙色7SYR7/6	約1/4残存
S1	Fig.183 PL ₆₁	S K 5	下層	石器	長さ 幅 厚さ 13.5 7.9 2.5~5.1	直角の刃と頭部が研磨の跡があり。	石材: 門谷安山岩	—	—
S2	Fig.183 PL ₆₃	S K 5	下層	石器	長さ 幅 厚さ 14.2 8.2 4.8	直角の刃と頭部が研磨の跡があり。頭部石器。	石材: 龍谷石	—	—

S K 3 · 4 · 5 (Fig.180~183 Tab.156~158 PL.53 · 62 · 65)

I 11グリッドに位置する。S B 3 の北西側で東西に並ぶ。いずれもやや不整な円形で底面は平坦、上層は緩やかな堆積状況を示す。いずれからも土師質土器が、S K 5 からは砥石 S 1 と台石 S 2 が出土している。

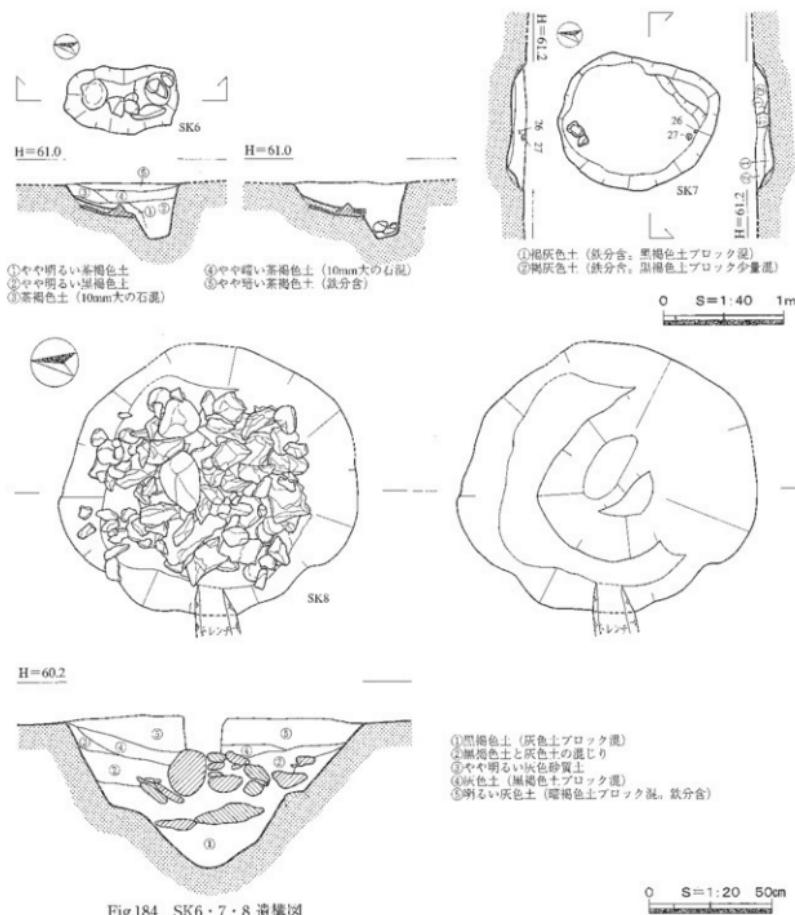


Fig.184 SK6・7・8 遺構図

SK3はP557・P558と重複しており、これらよりも新しい。20は土師質土器皿(2)の口縁部で、手づくね整形とみられる。21は中世須恵器の体部で、外面平行タタキで東撓磨(3)のものとみられる。22は瓦質土器の鍋で、これらはいずれも鎌倉時代の所産である。

SK4はP559・P560と重複しており、これよりも新しい。土師質土器片が出土した。

SK5には上師質土器23~25があり、皿23が回転台による成形、24が手づくねによる成形である。いずれも完存しており、土坑の南端の下層から出土している。ほかに土師質土器片が出土しているが同化し得ない。回転台成形の皿と手づくね成形の皿が同一遺構で検出された例は、県内では倉吉市の広瀬廃寺跡(4)、遺構外では米子市の錦町第1遺跡(5)と佐治村の大井家ノ下モ蓮跡(6)などがあり、錦町第1遺跡は12世紀頃、他は13世紀半ば~14世紀前半で、後者は本遺跡の年代と合致する。

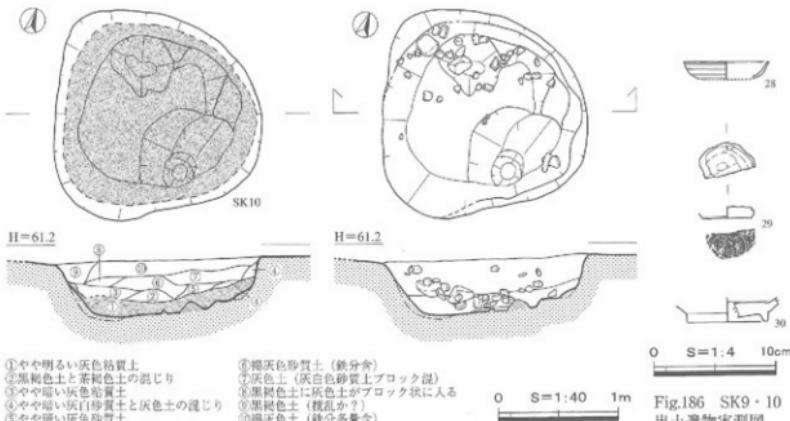
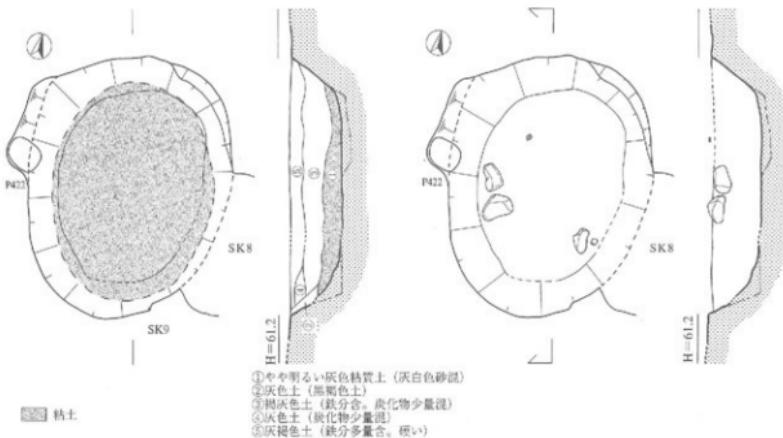


Fig.185 SK9・10 遺構図

Tab.159 SK9・10出土遺物観察表

No.	Fig. PL	遺構名	出土位置	器種	法量(cm)	特徴	粒度	色調	備考
28	Fig.186 PL.62	SK 9	埋土中	土部質土器 直口縁部	口径7.0 △15	口縁部の器壁は薄い。	細粒	桜色7.5YR6.6	約1/3残存
29	Fig.186 PL.62	SK 9	埋土中	土部質土器 底盤	底径 4.0	円形に打ち欠く。外面底部に圓紺糸切 り痕。	細粒	桜色5YR6.6	約1/12残存
30	Fig.186 PL.77	SK 10	上層	白細 高台埋土6.6	器高 △1.5	見込みの縫に輪状に様さざる。	密	灰白色7.5Y7.1	約1/2残存 白泥質陶

SK 6 (Fig.184 Tab.156)

J 11・12グリッドに位置する。調査区の北側にあり、南東にはSK 12がある。不整な長方形状を呈しており、底面からは下層に堆積している石が出土した。南側にピット状の掘り込みがあり、石が確認された。柱穴との重複関係か、柱穴そのものの可能性もある。

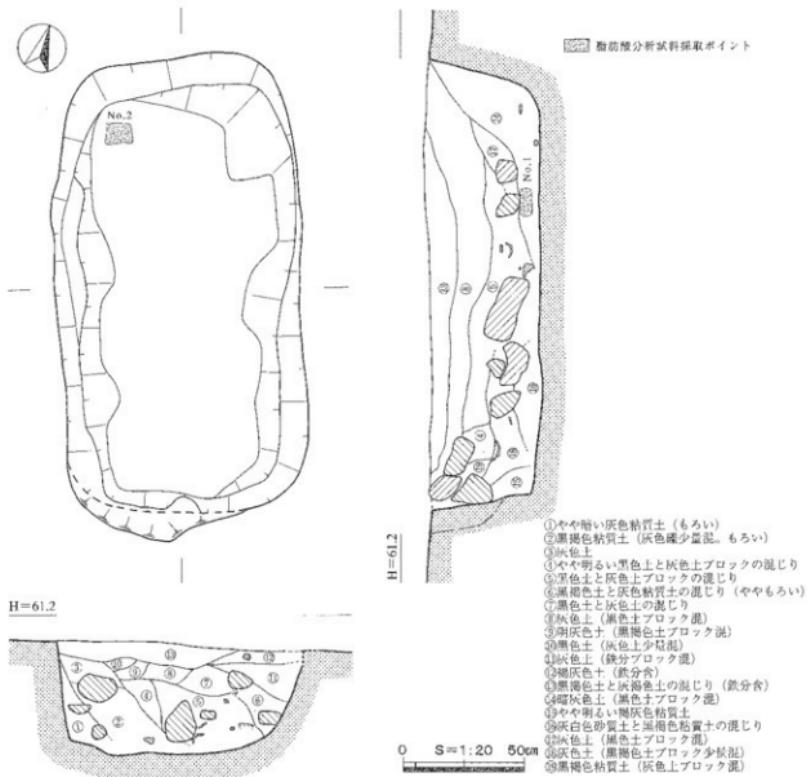


Fig.187 SK11造構図 (1)

SK 7 (Fig.183・184 Tab.156・158)

G10グリッドに位置する。北にSB9、南にSB16、西にSB11がある。やや不整な円形である。断面形は浅い皿状で、底面は平坦で擾乱部を除き緩やかな堆積である。南端付近から須恵器体部26、土師質土器杯底部27が出土した。26は体部を打ち欠き、円盤状に加工している。

SK 8・9 (Fig.184~186 Tab.156・159 PL.53・62)

H10・11グリッドに位置する。SB1・2の西側に位置する。SK8・9は重複しており、SK8が新しい。またSK9とP422は重複しており、SK9が新しい。

SK8の平面形は不整な円形で、底面はやや尖る。遺構内から大量の割石が出土した。円盤状に割られた石は、亂雑に重ねられ、間には土だけではなく空間も存在する。北側のSK13でも同様の石が出土し、これが近世後期の遺構であることから、SK8も同時期の可能性が高い。ただし遺物は土器・陶磁器とともに出土していない。目的は不明ながら、不要な石を割り捨てたと考えることもできる。

SK9は平面形は梢円形状である。底面は平坦で、最大6cmの厚さの粘土が貼り付けられていた。埋土は緩やかではあるが、浮いた状態で石が出土している。遺物は掘り下げ中に土師質土器の皿28と底部29が出土して

Tab.160 SK11出土遺物観察表

No.	Fig. PL.	遺物名	出土位置	器種	法長(cm)	特徴	断土	色調	備考
31	Fig.189 PL.63	S K11 中層～下層	土師質土器 杯	口径 器高 底径	141 5.0 6.4	LJ縁部は内湾しながら立ち上がり、口 縁部は開閉するナデのために外側に 折れる。内面にナデによる凹凸、外側 底部に内輪を切り抜かれている。	砂粒なし。	灰白色10YR8/2	ほぼ完存
32	Fig.189 PL.63	S K11 中層	土師質土器 杯	口径 器高 底径	133 4.9 6.7	LJ縁部は内湾しながら立ち上がり、口 縁部は開閉するナデのために外側に 折れる。内面にナデによる凹凸、外側 底部に内輪を切り抜かれている。	1 mm 以下の 砂粒を含む。	橙色7.5YR7/6	ほぼ完存
33	Fig.189 PL.63	S K11 中層	土師質土器 杯	口径 器高 底径	86.0 4.9 6.7	LJ縁部は内湾しながら立ち上がり、口 縁部は開閉するナデのために外側に 折れる。内面にナデによる凹凸、外側 底部に内輪を切り抜かれている。	砂粒なし。	淡黄褐色7.5YR8/4	LJ縁部2/3欠損
34	Fig.189 PL.63	S K11 中層～下層	土師質土器 杯	口径 器高 底径	140 5.4 6.2	断土は比較的低い。外頂部底部にナデ による凹凸があり、底部外側に断土 縫隙を有する。	1 mm 以下の 砂粒を含む。	に赤い褐色7.5YR7/4	ほぼ完存
35	Fig.189 PL.63	S K11 中層	土師質土器 杯	口径 器高 底径	88.8 4.8 6.8	LJ縁部と底径の差は大きい。底部外側に 断土縫隙があり、外側へ切り抜かれている。	砂粒	外) 棕色7.5YR7/6 内) ぶい黄褐色7.5YR7/6	完存
36	Fig.189 PL.63	S K11 中層	土師質土器 杯	口径 器高 底径	83.3 4.9 6.9	LJ縁部と底径の差は大きい。底部外側は 断土縫隙があり、外側へ切り抜かれている。	1 mm 以下の 砂粒を含む。	外) 棕色7.5YR7/6 内) 淡黄褐色7.5YR8/6	完存
37	Fig.189 PL.63	S K11 中層～下層	土師質土器 皿	口径 器高 底径	91.0 2.6 6.7	LJ縁部と底径の差は大きい。底部外側は 断土縫隙があり、内面に断土縫隙がある。	砂粒なし。	淡黄褐色7.5YR8/4	完存
38	Fig.189 PL.63	S K11 中層～下層	土師質土器 皿	口径 器高 底径	78.0 2.8 4.1	LJ縁部と底径の差は大きい。底部外側は 断土縫隙があり、外頂部底部に断土 縫隙を有する。	1 mm 以下の 砂粒を含む。	淡黄褐色10YR8/4	ほぼ完存
39	Fig.189 PL.63	S K11 下層	土師質土器 皿	口径 器高 底径	81.1 2.3 3.2	LJ縁部と底径の差は大きい。底部外側は 断土縫隙があり、外頂部底部に断土 縫隙を有する。	砂粒なし。	に赤い黄褐色10YR7/4	ほぼ完存
40	Fig.189 PL.63	S K11 下層	土師質土器 皿	口径 器高 底径	76.0 1.9 4.6	LJ縁部と底径の差は大きい。内面中央部 が割れ、断土縫隙が大きめによりむかしに隆起 している。外頂部底部に断土縫隙がある。	砂粒	に赤い黄褐色10YR7/3	ほぼ完存
41	Fig.189 PL.63	S K11 下層	土師質土器 皿	口径 器高 底径	76.0 1.9 4.1	LJ縁部と底径の差は大きい。底部外側は 断土縫隙を有する。	砂粒	外) 淡黄褐色7.5YR8/6 内) 棕色5YR7/6	ほぼ完存
42	Fig.189 PL.63	S K11 中層	土師質土器 皿	口径 器高 底径	68.0 4.2 4.7	LJ縁部と底径の差は大きい。底部外側は 断土縫隙を有する。	砂粒なし。	に赤い黄褐色10YR7/3	完存
43	Fig.189 PL.63	S K11 下層	土師質土器 皿	口径 器高 底径	72.0 4.5 4.5	LJ縁部と底径の差は小さい。底部外側は 断土縫隙を有する。	砂粒なし。	外) に赤い褐色5YR7/4 内) 棕色7.5YR7/6	ほぼ完存
44	Fig.189 PL.62	S K11 上層	陶器 鉢	器高 底径	△ 8.3	外縁ナマらしくは指痕年底あり。内面 にナデがある。	1mmの砂粒 を含む。	外) に赤い褐色5.5YR4/3 内) 黄褐色2.5Y7/7	常滑焼
45	Fig.189 PL.63	S K11 中層	青磁 皿	口径 器高 底径	16.0 7.1 5.5	外縁は無く、外頂部内面にまで施釉さ れてある。内面には花文を有す。内底面か ら立ち上がりで窓を有する。	砂粒	灰褐色6/9	糞山窯系
46	Fig.189 PL.63	S K11 下層	青磁 皿	口径 器高 底径	11.2 2.2 4.7	内面に施釉書きの文様あり。外頂部底 部は施釉。	1 mm 以下の 砂粒を含む。	オリーブ灰褐色2.5GY6/1	同安窯系
47	Fig.189 PL.63	S K11 下層	青磁 皿	口径 器高 底径	11.2 2.0 8.6	内面に施釉書きの文様あり。外頂部底 部は施釉。	1 mm 以上の 砂粒を含む。	オリーブ灰褐色5GY5/1	同安窯系
48	Fig.189 PL.63	S K11 中層	青磁 皿	口径 器高 底径	10.8 1.9 4.8	内面に施釉書きやや薄い文様あり。外 頂部底部中央付近は施釉。外縁部の一部 に中色の付着物あり。	1 mm 以下の 砂粒を含む。	灰褐色7/0	同安窯系
S3	Fig.189 PL.63	S K11 底面上	砥石	長さ 幅 厚さ	10.4 5.5 1.8	長さ：10.4 幅：5.5 厚さ：1.8 重さ：132g 扁平な形状。2面の削磨と研ぎた跡状の痕あり。	砂粒	流紋岩質の凝灰岩。頭の底物。 結晶を有する。	完存

いる。28は薄く深手で、遺跡内では類をみない。29は底が厚く、鎌倉時代の所産であろう。使用目的は底に粘土があることから保水を目的とした蓋然性が高い。

SK10 (Fig.185・186 Tab.156・159 PL.53・77)

G10グリッドに位置する。SK11の南隣である。平面形は不整な方形、底面は粘土層上面は平坦であるが、粘土層除去後は下層の石による凹凸が大きい。SK9と同様に底面に粘土を貼り付ける。埋土は不整な堆積で、石が多く混入している。上層からではあるが、白磁蓮瓣碗30が出土した。内底面の釉薬を輪状に描き取っている。層年代は、概ね13世紀代で、白磁IV・V類碗と青磁の同安窯系と龍泉窯系の間の時期に該当する。使用目的についてはSK9と同様であろう。

SK11 (Fig.187~189 Tab.156・160 PL.卷頭・54・55・62・63・65・69)

H・G10グリッドに位置する。S B1の西側、SK10の北隣にある。P424と重複しており、これよりも新しい。平面形は長方形で、断面形は東側はやや緩やかに落ち込むが、他はほぼ垂直に掘り込まれる。土層は北・南・西側では中央に向かい堆積しているが、西側では側部が低くなり、不整な堆積である。埋土には小石から

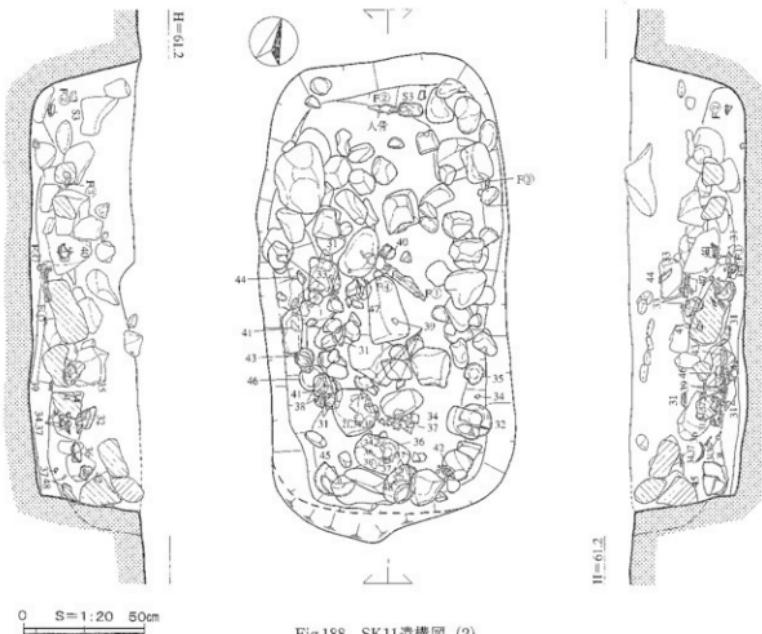


Fig.188 SK11構造図 (2)

人頭大くらいまでの石が中央が低くなるような弓状に検出され、石の下側には漁物が存在した。出土遺物はほとんどが壊れてはいるものの接合の結果ほぼ完存となる。土師質土器の杯31~34、皿35~43、中世陶器の常滑焼片44、青磁碗45、青磁皿46~48、鉄製品の刀F①、刀子F②、刀装金具F③、火打ち金F④、石製品では砥石S3である。

出土した状況は、中央に刀F①が柄を北西方向、切っ先を南東方向に向け、底面からわずかに浮き、2本に折れ、刀の上側から皿40がやや傾いた状況で出土した。また北端では刀子F②が切っ先を北西方向に向け、砥石S3と重なる状態で出土した。刀子の中央部の上面には鏽とともに直径約2.9cmの平坦な人骨片(7)が付着していた。これは原位置を保ち、意図的に置かれたものと考えられる。

土師質土器は、皿35、杯34、32が南東隅付近で、南壁に沿うように東から皿42・37・36・38、杯31・34が、南西隅から西壁に向かい皿38・41・43、杯33が、やや内側から杯31が出土した。中央から北壁付近からは出土していない。いずれも底面から浮いた状態で、石よりも下の位置にある。また杯はいくつかの破片に分かれしており、石や土が入り込んだ際に自然に離れたのか、意図的に壊されたものが入れられたのか判然としない。離れた位置で接合したものは少ないことから、完形で入れられたものが多いと推測したい。土師質土器の杯31~34、皿35~43はいずれも底面に回転系切り痕を残す。形態には口径の大小、器高の高低差はあるものの、概ね鎌倉時代の所産である。なお、錢貨は出土していない。

貿易陶器は、青磁碗45と青磁皿48はともに完存で南壁際に、皿46は完存で西壁際、皿47は口縁部が割れ、中央付近で出土した。青磁は45が龍泉窯系の刻花文碗で46~48が同安窯系の皿である。46の底面には不明瞭ながら墨書がある。47の口縁部には赤色顔料が付着し、これは漆の可能性がある。

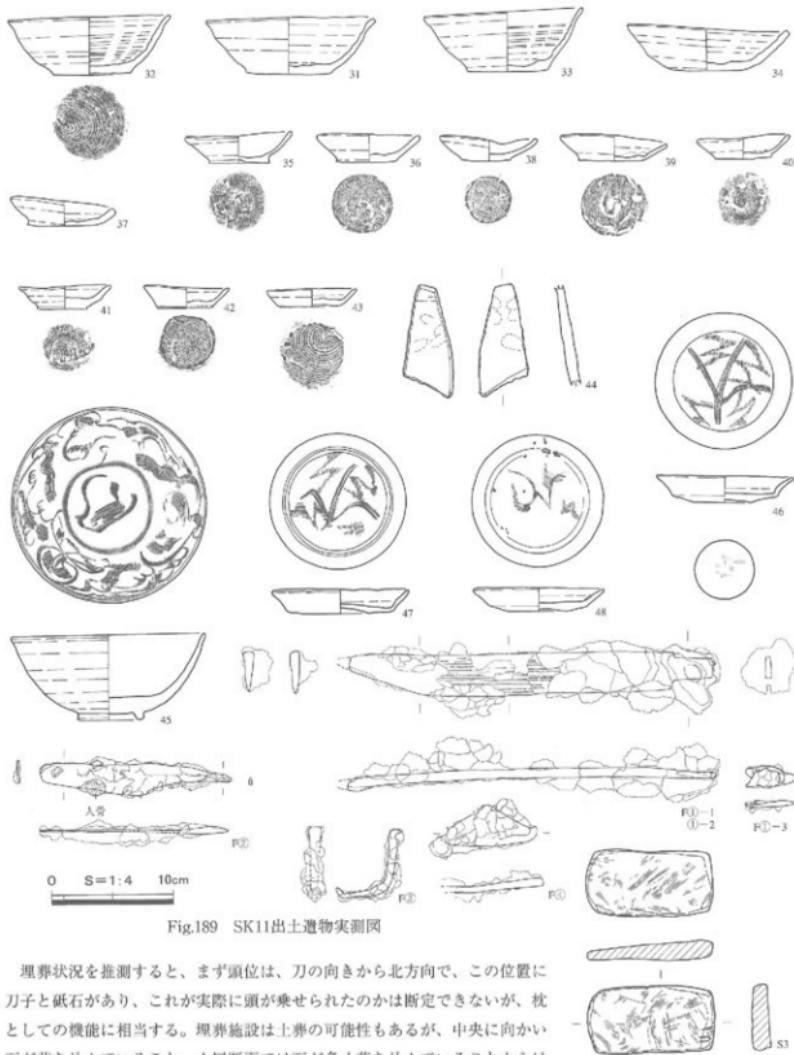


Fig.189 SK11出土遺物実測図

埋葬状況を推測すると、まず頭位は、刀の向きから北方向で、この位置に刀子と砥石があり、これが実際に頭が乗せられたのかは断定できないが、枕としての機能に相当する。埋葬施設は上葬の可能性もあるが、中央に向かい石が落ち込んでいること、土層断面では石が多く落ち込んでいることからはっきりと確認できなかったものの木棺で、腐朽した際に石が落ち込んだものと判断できる。棺の中には足元に青磁碗・皿、右側には青磁皿が置かれ、中央には皿が1点置かれた。また棺内か棺の上かは不明であるが南東隅から南側、西側にかけて弧状に杯と皿が配置され、木棺上面には石が積まれたことが想像できよう。時期は、青磁碗・皿から鎌倉時代（13世紀頃）で、これは在土地器の年代観とともに矛盾しない。集落の中心付近に位置しており、他に墓はみられないことからも典型的な屋敷墓（8）と考えられる。

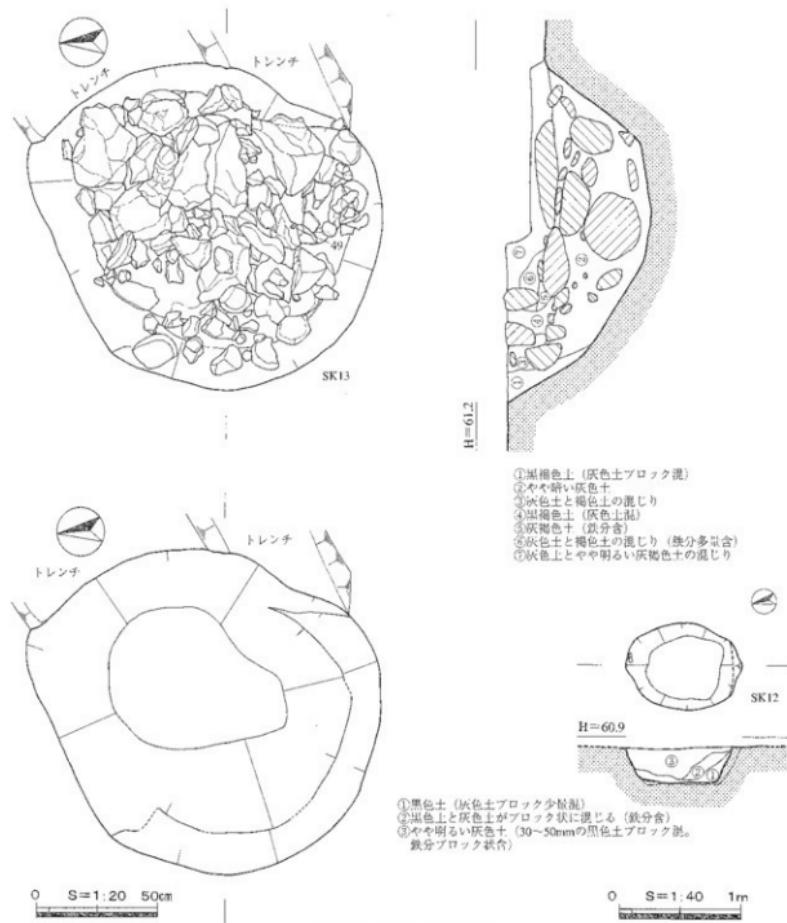


Fig.190 SK12・13遺構図

SK12 (Fig.190 Tab.156)

J12グリッドに位置する。SK6の南東にある。平面形はやや不整な梢円形状、断面形は逆台形状である。土層は北側に向かい堆積する。

SK13・15 (Fig.191~192 Tab.156・161 PL.62・77)

いずれも近世以降の遺構とみられる。

SK13はJ11グリッドに位置する。同時期の遺構とみられるSK8の北側8m付近にある。

平面形は不整な円形、底面は平坦でなくU字状である。人頭大あるいは断面レンズ状の割り石が無秩序に重なる。間に土が入り込むが、空間を有する箇所もある。石を除去中に染付鏡口縁部49が出土した。呉須は淡

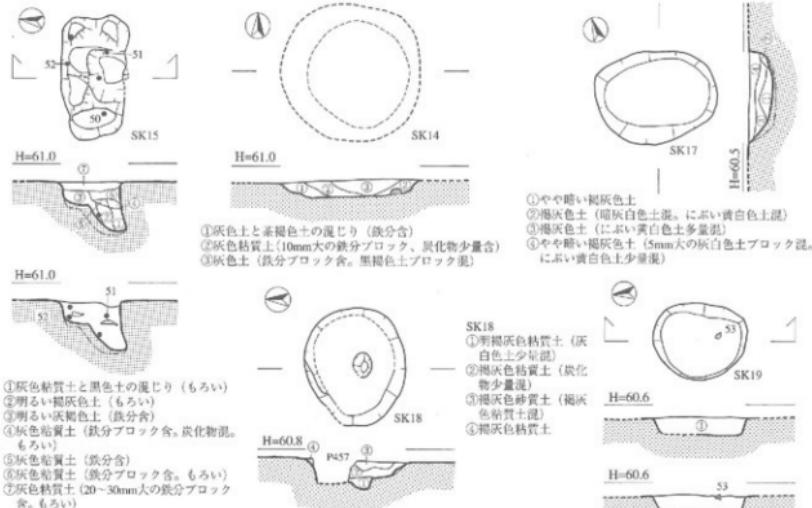


Fig.191 SK14・15・16・17・18・19造構図

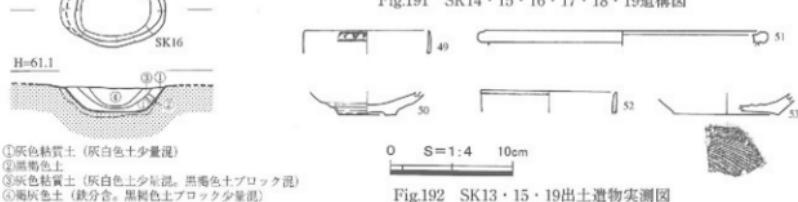


Fig.192 SK13・15・19出土遺物実測図

Tab.161 SK13・15・19出土遺物観察表

No.	Fig. PL	遺構名	出土位置	器種	法進(cm)	特徴	胎土	色調	備考
49	Fig.192 PL77	S K13	中層～下層	陶片 銚口縁部	直径 30.2 縁部付近に2本の平行線と、三角の文 様をもつ。	砂粒なし。	灰白色N8/0	約1/12残存	
50	Fig.192 PL62	S K15	造構後出自	陶器 銚部	直径 19 縁部 高台径 46 か。	白い砂粒が多 量に混じる。	赤褐色25YR7/6	約1/2残存	
51	Fig.192 PL62	S K15	中層	土師質土器 銚口縁部	直径 22.8 口縁部は丸く厚にする。	砂粒なし。	にぶい褐色7.5YR7/4	1/12以下残存	
52	Fig.192 PL77	S K15	中層	土師質土器 銚口縁部	直径 31.2 縁部 高台径 48 か。	外側縁部付近に1本の横方向の縫 合がある。	灰白色N8/0	約1/10残存 器形系か	
53	Fig.192 PL62	S K19	上層	土師質土器 体頸部	直径 36.6 縁部	外側部に静止気味の角切り痕あり。	白い粗砂少 量混じる。	にぶい褐色10YR7/4	約1/3残存

い。肥前系と考えられ、時期は18世紀に該当しよう。遺構の目的はSK8と同様に石の処理であろうか。弥生土器片も出土したが、これは下層のSK40に伴うものである。

SK15はH8グリッドに位置する。同時期の遺構としては、離れてはいるが東にSK8、北東に13がある。平面は不整な長方形で、底面は南辺に深い掘方をもち、柱を立てた可能性もある。中層から検出面上で遺物が出土した。50は陶器碗の底部、51は土師質土器の銚口縁部、52は磁器の碗口縁部である。51は土師質土器の鍋で鎌倉時代。52は肥前系の碗でいずれも近世中～後期の所産。ほかに土師質土器片が出土した。遺構検出時

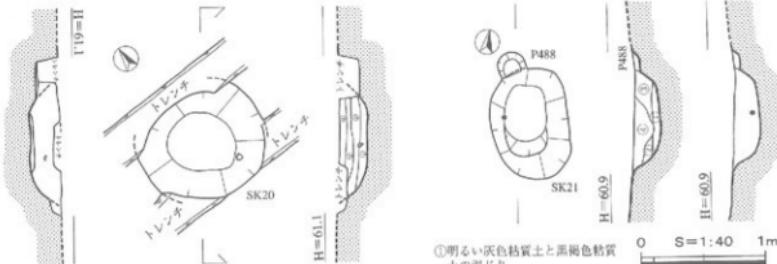


Fig.193 SK20・21遺構図

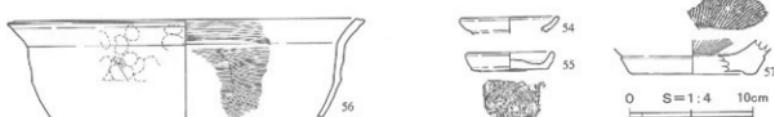


Fig.194 SK21・22・25・37出土遺物実測

Tab.162 SK21・22・25・37出土遺物観察表

No.	Fig. PL.	遺構名	出土位置	器種	法量(cm)	特徴	地土	色調	備考
54	Fig.194 PL.62	SK21	堆土中 直口縁部	土師質上器 器高△ 8.0 口径 △ 12		外表面縁部付近をナダる。 0.5m以下の白い砂粒が 混じる。		褐色5YR7/6	約1/12残存
55	Fig.194 PL.62	SK22	F層	土師質上器 器高△ 6.8 底径△ 6.4		内底面立ち上がりの際を砂粒に強くナ ダる。外表面底部に円錐形切り欠き がある。	1m以下の白 い砂粒混じる。	外: 褐色褐色5YR5/6 内: にせい赤褐色3YR5/4	約1/2残存
56	Fig.194 PL.64	SK25	中層	土師質上器 器高△ 8.0 口径 △ 29.2		内表面縁下半以下横方向のハケ目。外 表面底部から口縁部に堆積付する。	1m以下の白 い砂粒混じる。	にせい赤褐色10YR7/4	約1/8残存
57	Fig.194 PL.64	SK37	中層 壁部	陶器 器高△ 2.8 高台径△ 10.4		外表面底部は削り出し高台。内底放 射状の擦痕。	0.5m以上の白 い砂粒混じる。	にせい褐色25YR5/3	約1/5残存

の状況から、遺構面はさらに上の層が検出面である可能性がある。

SK14・16 (Fig.191 Tab.156)

SK14はF 9 グリッドに位置する。S B 7 の西隣にある。平面形はやや不整な円形、断面形は底面がほぼ平坦で、中央に向かい堆積する。

SK16はG 9 グリッドに位置する。南側にはS B 9 と櫛跡 S A 5 がある。平面形は梢円形状、断面形は底が平坦で土層は中央に向かい堆積する。

SK17・18・19 (Fig.191・192 Tab.156・161 PL.62)

SK17はH 7 グリッドに位置する。調査区の中央北端で、S B 14の東隣にある。平面形は梢円形で、底面は緩やかなU字状となる。中央が盛り上がるやや不整な堆積である。

SK18はG 8 グリッドに位置する。S B 12の北東にあり、P 254・255・258と重複しており、これよりも新しい。平面形は不整な梢円形状で、断面形は中央付近がピット状に窪む。堆積状況は不整である。

SK19はG 5 グリッドに位置する。S B 13の北隣にある。平面形は不整な梢円形状で、断面形は逆台形状である。中央や南側から土師質上器の杯底部53が出土した。底面は静止系切りである。

SK 20・21 (Fig.193・194 Tab.156・162 PL.62)

S K 20はG 9グリッドに位置する。S B11の西隣にある。トレンチにより掘削されているが、平面形は円形、断面形は底がほぼ平坦で水平方向の堆積である。掘り下げ中に土師質土器片が出土した。

S K 21はF 7グリッドに位置する。S B12の東隣で、P79と重複している。中央やや西側から土師質土器の皿54が出土した。鎌倉時代の所産である。

SK 22・23 (Fig.194・195 Tab.156・162 PL.64)

S K 22はG 7グリッドに位置する。P222・226・227と重複しており、これよりも新しい。平面形は不整な方形、断面形は浅いU字状を呈する。中央やや北東部の底面近くから土師質土器皿55が出土した。底部が厚く、口縁部は短く立ち上がる。鎌倉時代の所産である。

S K 23はF 8グリッドに位置する。2・3区の南隣にある。平面形は不整形、断面形は中央部が低く、S K 8・13と同様な形状である。人頭大かそれ以上大きな石が出土した。

遺物は検出面付近もしくは石の間から土師質土器片・陶器残体部片などが出ている。断面形状や石が多いことから、S K 8・13と同様の性格と推測したい。

SK 24・25・26 (Fig.196 Tab.156 PL.64)

S K 24はF 5グリッドに位置する。S B15の西にあたる。中央に向かい狭くなる。遺構の北壁に沿うように石が出土した。堆積が石に向かい傾斜しており、石を入れた後に埋められたと判断したい。

S K 25はH10グリッドに位置する。南隣にP573があるが、周囲に他に遺構はない。平面は長方形、断面は不整で、南隣の落ち込みに向かい下る。掘り下げ中に埋土中層から土師質土器の鍋56が出土した。口縁部は受け口ではなく、くの字状で、内面には横方向のハケ目が堅圍に見える。鎌倉時代の所産である。ほかに須恵器の壺、甕の体部片が出土した。

S K 26はI11グリッドに位置する。付近は掘削が著しく、遺存状況は悪い。平面形は長方形で埋葬施設の可能性もあるが断定はできない。埋土から集落と同時期の遺構と考えられる。

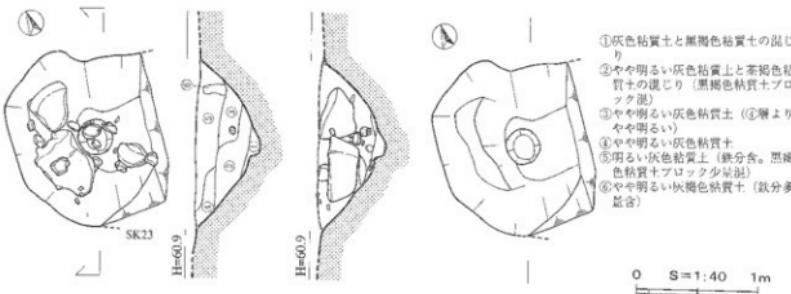
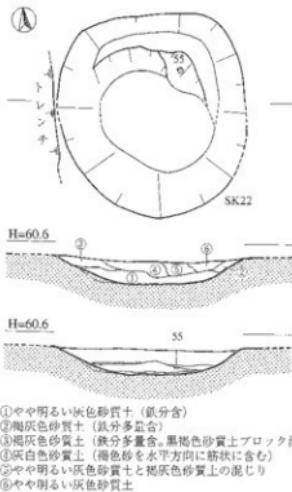
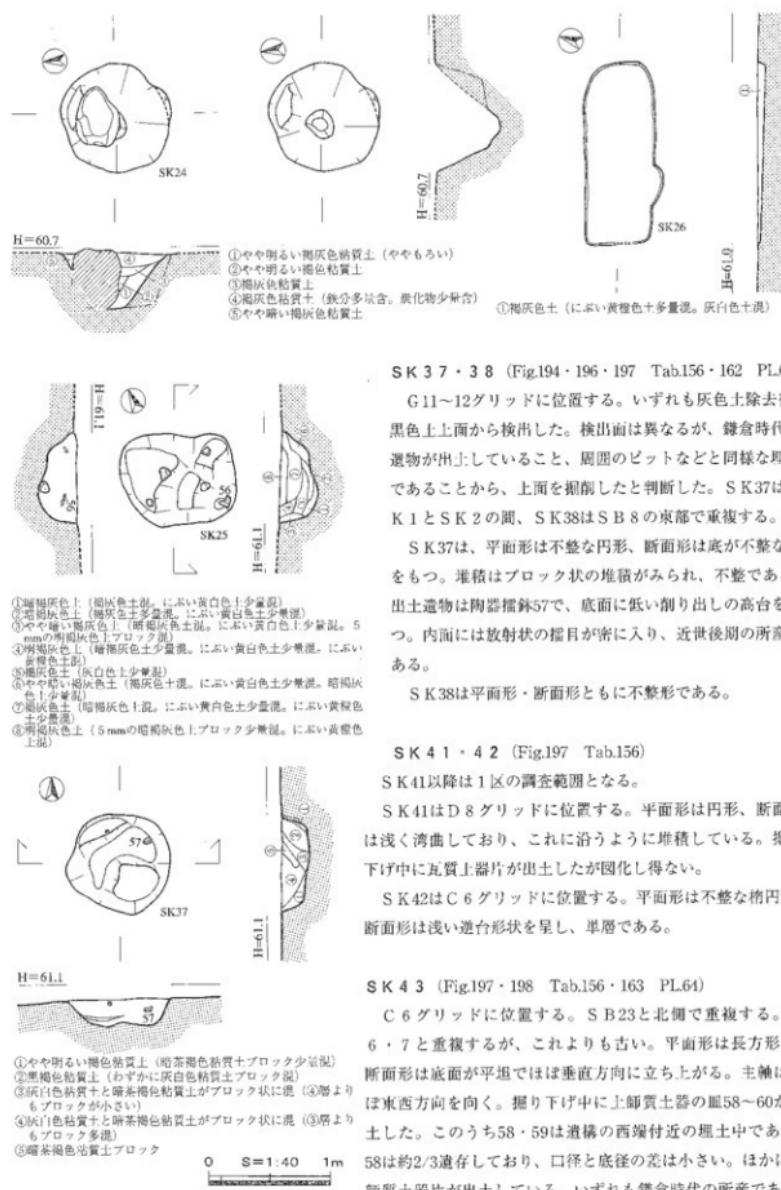


Fig.195 SK22・23遺構図



SK 37・38 (Fig.194・196・197 Tab.156・162 PL.64)

G 11~12グリッドに位置する。いずれも灰色土除去後、黒色土上面から検出した。検出面は異なるが、鎌倉時代の遺物が出土していること、周囲のピットなどと同様な理上であることから、上面を掘削したと判断した。SK 37はS K 1とSK 2の間、SK 38はSB 8の東部で重複する。

SK 37は、平面形は不整な円形、断面形は底が不整な段をもつ。堆積はブロック状の堆積がみられ、不整である。出土遺物は陶器擂鉢57で、底面に低い削り出しの高台をもつ。内面には放射状の掘目が密に入り、近世後期の所産である。

SK 38は平面形・断面形ともに不整形である。

SK 4 1・4 2 (Fig.197 Tab.156)

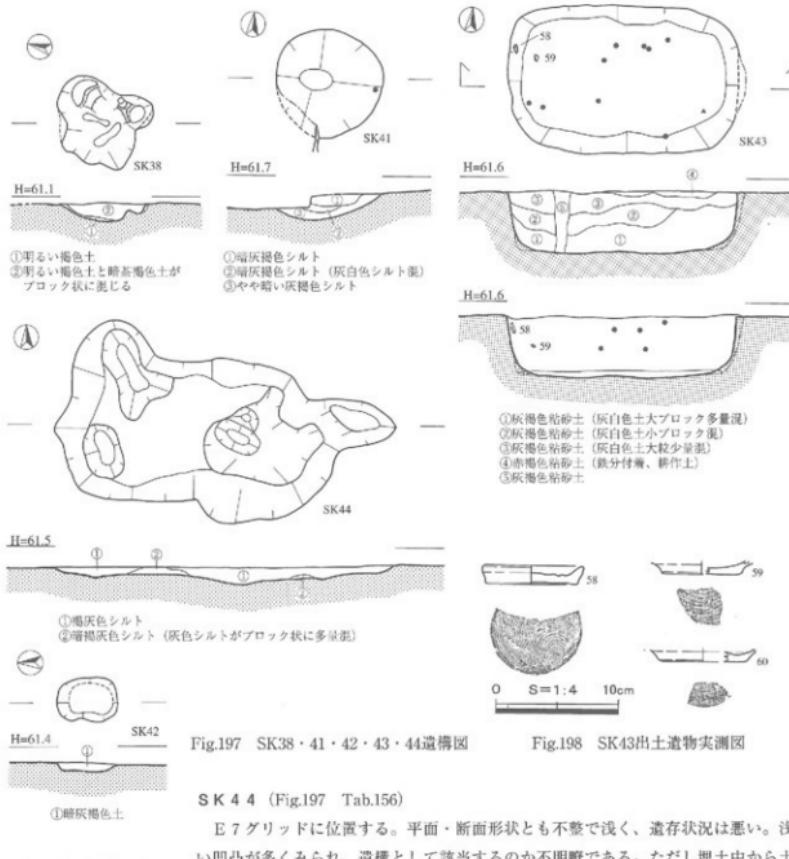
SK 41以降は1区の調査範囲となる。

SK 41はD 8グリッドに位置する。平面形は円形、断面形は浅く湾曲しており、これに沿うように堆積している。掘り下げ中に瓦質土器片が出土したが図化し得ない。

SK 42はC 6グリッドに位置する。平面形は不整な梢円形、断面形は浅い逆台形状を呈し、單層である。

SK 4 3 (Fig.197・198 Tab.156・163 PL.64)

C 6グリッドに位置する。SB 23と北側で重複する。P 6・7と重複するが、これよりも古い。平面形は長方形で、断面形は底面が平坦ではば垂直方向に立ち上がる。主軸はほぼ東西方向を向く。掘り下げ中に上部質土器の皿58~60が出土した。このうち58・59は遺構の西端付近の埋土中である。58は約2/3遺存しており、口径と底径の差は小さい。ほかに上部質土器片が出土している。いずれも鎌倉時代の所産である。図化し得ないが、平安時代とみられる赤色塗彩の土器もある。



SK 4 4 (Fig.197 Tab.156)

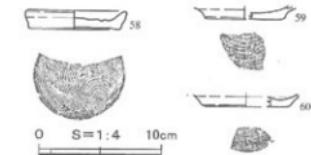
E 7 グリッドに位置する。平面・断面形状とも不整で浅く、遺存状況は悪い。浅い凹凸が多くみられ、遺構として該当するのか不明瞭である。ただし埋土中から土師質土器片が出土している。

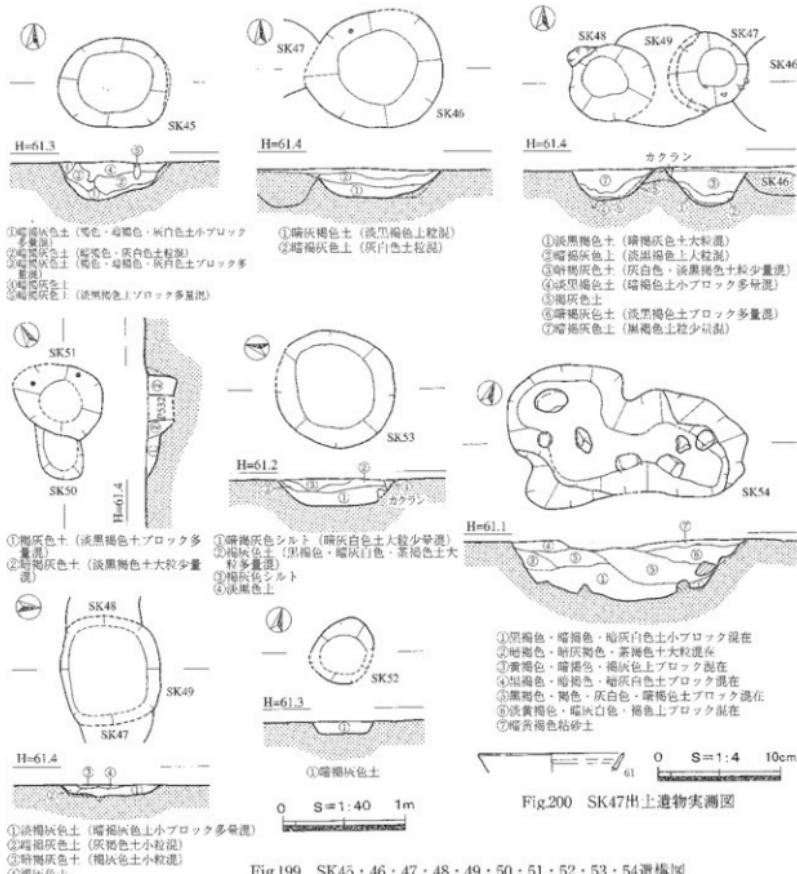
SK 4 5 (Fig.199 Tab.156)

D 6 グリッドに位置する。S B25の東辺にあり、S B25 P 2と重複し、これよりも新しい。平面形は梢円形状、断面形は不整な椀状で、ブロック状の堆積が重なる。埋土掘り下げ中に土師質土器片や弥生土器片が出土したが図化し得ない。

Tab.163 SK43出土遺物観察表

No.	Fig. PL.	遺物名	出土位置	器種	法量 (cm)	特徴	施上	色調	備考
58	Fig.196 PL.64	S K 43	上層	土師質土器 底部	口径 5.1 底径 7.4	口径と底径の差は小さく、底部は厚い。 外側底部に回転糸切り痕あり。	砂粒なし。	淡黄褐色10YR8/4	約2/3残存
59	Fig.196 PL.64	S K 43	中層	土師質土器 底部	唇高 △1.1 底径 7.0	-外側底部に回転糸切り痕あり。	1 cm 以下の 砂粒なし。	外) にぶい黄褐色 10YR7/4 内) 橙色7.5YR7/6	約1/5残存
60	Fig.196 PL.64	S K 43	埋土中	土師質土器 底部	唇高 △1.1 底径 7.0	外側底部に回転糸切り痕あり。	砂粒なし。	にぶい黄褐色10YR7/4	約1/5残存





SK46・47・48・49 (Fig.199・200 Tab.156・164 PL.64)

いずれもC5グリッドに位置する。S B23・25の西側にある。SK47・48が新しく、SK46・49が古いが、これ以外の前後関係は不明である。

SK46の平面形は不整な円形、断面形は浅い逆台形状である。ほぼ水平に堆積する。須恵器片、土師質土器片が出土しているが図化し得ない。

SK47の平面形は不整な円形、断面形は逆台形状である。上師質土器片が出土している。図化し得たのは上師質土器皿の61である。中世須恵器の壺の体部片もある。

Tab.164 SK47出土物観察表

No	Fig. PL	遺構名	出土位置	種類	法量 (cm)	特徴	地上	色調	備考
61	Fig.200 PL.64	SK47	埋土中	土師質土器 皿口縁部	口径 △11.2 盤高 △1.4	口縁部は内側して立ち上がる。	砂なし。	灰白色SY7/1	1/12以下残存

S K48は平面・断面形状ともにS K47に類似する。土師質土器片が出土しているが図化し得ない。

S K49は東西両側がS K47・48に掘削されている。断面形は浅い皿状である。

S K50・51 (Fig.199 Tab.156)

C・D 5グリッドに位置する。S B25の西側にあり、S K50よりもS K51が新しい。またS K51はP 661と重複しており、これより新しい。

S K50の平面形は楕円形、断面は浅い碗状である。S K51の平面形は不整な円形、断面形は切り合いで著しいが、逆台形状か。埋土内から土師質土器片が出土しているが図化し得ない。

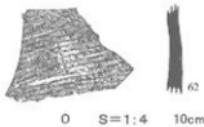
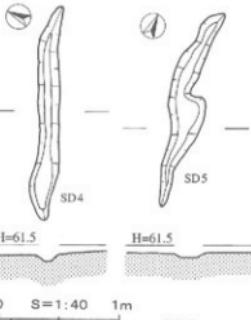


Fig.202 SD1出土遺物実測図

S K52 (Fig.199 Tab.156)

D 5グリッドに位置する。

S B25のP10と重複し、これよりも古い。平面形は円形、断面形は浅い逆台形状。



S K53 (Fig.199 Tab.156)

C 5グリッドに位置する。

平面形はやや不整な円形、断面形は浅い逆台形状である。

S K54 (Fig.199 Tab.156)

C 4グリッドに位置する。

- SD 1
①暗褐色砂
②灰褐色砂
③暗褐色粘砂土（灰褐色土大粒少量混）
④灰褐色砂（暗褐色土小ブロック混）
⑤暗褐色粘砂土（灰褐色土大粒少量混）
⑥灰褐色砂（暗褐色土小ブロック混）
⑦暗褐色粘土（灰褐色土大粒少量混）

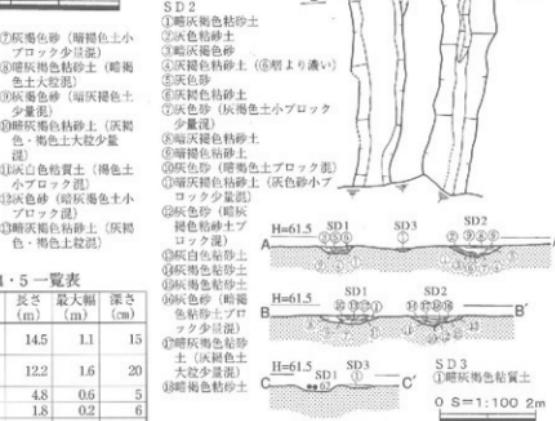


Fig.201 SD1・2・3・4・5遺構図

Tab.165 SD1・2・3・4・5一覧表

SD番号	グリッド名	主軸(°)	長さ(m)	最大幅(m)	深さ(cm)
SD 1	E4～6	N-85-W	14.5	1.1	15
SD 2	D4～6 E5	N-84-W	12.2	1.6	20
SD 3	E5	N-86-W	4.8	0.6	5
SD 4	E7	N-24-E	1.8	0.2	6
SD 5	D7	N-4-E N-9-W	1.7	0.3	4

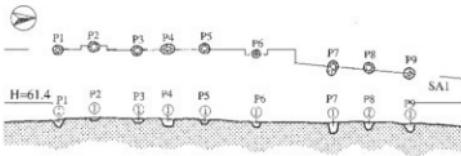
Tab.166 SD1出土遺物観察表

No.	Fig. PL.	遺構名	出土位置	器種	法量(cm)	特徴	断土	色調	備考
62	Fig.202 PL.64	SD 1	埋土中	瓶 底部	器高 △7.2	外表面格子状のタッキ。内部青苔液状の当て具縫不定方向のナメ。	粗緻を含む。	灰褐色75YR6/1	粘土分剖試料 押平・新田田畠

北側にピットが3基あるが、周囲には他に遺構はない。平面形は不整形であるが、断面形は比較的深い椀状で、底には下層の石が露出する。

注

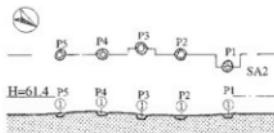
- (1) 柱状高台の里または杯は、県内の
中世遺跡でも出土するが使用目的
などは明らかではない。
- (2) 手づくね成形であり、これが京都
の影響とするならば、回転台を使
用することを前提とした土師質土
器とは異なり、(京都系)土師器
皿と呼称すべきかもしれない。
- (3) 妙見山麓遺跡調査会 1986『神出
古窯址群に関連する遺跡群の調査』
- (4) 倉吉市教育委員会 1979『広瀬廃
寺発掘調査報告書』
- (5) 第3章 3 (6) 注(4) 文獻
- (6) 佐治村教育委員会 1999『大井家
ノドモ遺跡発掘調査報告書』
- (7) 刀子に付着したものが人骨である
ことは、鳥取大学医学部教授、井
上貴央氏の鑑定による。ただしこ
れがどの部位かは明らかでない。
- (8) 橋田正徳 1991『屋敷墓試論』
『中近世土器の基礎研究』Ⅶ 日
本中世土器研究会



Tab.167 SA1ピット一覧表

S A 1 ピット番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P 1	16	16	14.8
P 2	18	16	4.0
P 3	16	14	4.9
P 4	22	16	14.2
P 5	18	16	4.9
P 6	14	12	7.9
P 7	26	18	17.0
P 8	18	16	10.3
P 9	18	16	16.2

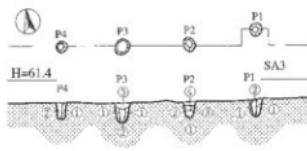
P 1 やや明るい褐色土 (にほい黄褐色土混)
P 2 灰褐色土 (灰白色土多量混)
P 3 暗褐色土 (黒褐色土多量混)
P 4 黄褐色土 (暗褐色土混)
P 5 暗褐色土 (暗褐色土混)
P 6 黄褐色土 (にほい黄褐色土混)
P 7 黄褐色土 (灰白色土多量混)
P 8 暗褐色土 (灰白色土混)
P 9 黄褐色土 (にほい黄褐色土混)
①灰褐色土 (灰白色土少量混)
②灰褐色土 (にほい黄褐色土少量混)



Tab.168 SA2ピット一覧表

S A 2 ピット番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P 1	18	16	8.2
P 2	20	16	7.7
P 3	20	18	9.4
P 4	20	16	6.4
P 5	18	14	5.5

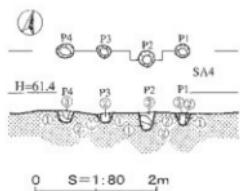
P 1 暗褐色土
P 2 黄褐色土 (にほい黄褐色土混)
P 3 暗褐色土
P 4 やや明るい褐色土 (にほい黄褐色土混)
P 5 暗褐色土



Tab.169 SA3ピット一覧表

S A 3 ピット番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P 1	22	20	31.6
P 2	24	22	26.9
P 3	26	24	32.5
P 4	18	18	30.0

P 1 黄褐色土
P 2 暗褐色土
P 3 暗褐色土
P 4 暗褐色土 (にほい黄褐色土混)
P 5 暗褐色土



Tab.170 SA4ピット一覧表

S A 4 ピット番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P 1	24	20	22.2
P 2	28	26	28.9
P 3	24	20	12.7
P 4	28	24	17.6

P 1 暗褐色シルト (灰褐色土少量)
P 2 暗褐色シルト (灰褐色土混)
P 3 暗褐色シルト (灰褐色土少量)
P 4 暗褐色シルト (灰褐色土少量)
P 5 暗褐色シルト (灰褐色土少量)
①暗褐色シルト (灰褐色土少量)
②暗褐色シルト (灰褐色土少量)
③暗褐色シルト (灰褐色土少量)
④暗褐色シルト (灰褐色土少量)
⑤暗褐色シルト (灰褐色土少量)
P 6 暗褐色シルト (灰褐色土少量)
P 7 暗褐色シルト (灰褐色土少量)
P 8 暗褐色シルト (灰褐色土少量)
P 9 暗褐色シルト (灰褐色土少量)
①暗褐色シルト (灰褐色土少量)
②暗褐色シルト (灰褐色土少量)
③暗褐色シルト (灰褐色土少量)
④暗褐色シルト (灰褐色土少量)
⑤暗褐色シルト (灰褐色土少量)

Fig.203 SA1・2・3・4遺構図

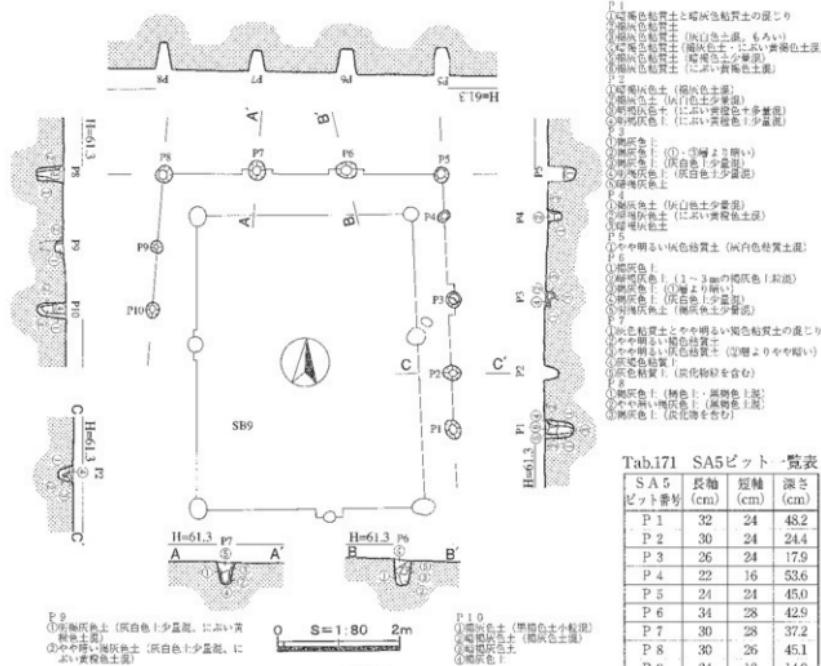


Fig.204 SA5ピット・遺構図

Table.171 SA5ピット・一覧表

SA5 ピット番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P 1	32	24	48.2
P 2	30	24	24.4
P 3	26	24	17.9
P 4	22	16	53.6
P 5	24	24	45.0
P 6	34	28	42.9
P 7	30	28	37.2
P 8	30	26	45.1
P 9	24	18	14.0
P 10	26	24	41.7

(3) 溝状遺構

SD 1・2・3 (Fig.201・202 Tab.165・166 PL.56・64)

いずれもD 5～E 5グリッドに位置する。ほぼ東西方向に向かい主軸をとる。北からSD 1・2が、間にSD 3がある。SD 1とSD 3は重複しており、SD 1が新しい。底面は浅い椀状である。西側には阿弥陀川があり、溝の底は東から西方向に緩く下る。検出面の地形も同様である。

SD 1はわずかに北方向に湾曲する。断面は椀状の堆積を繰り返す。掘り下げ中に須恵器体部62が出土した。外側に格子状のタキを施すが、内面には青海波状の当て具の痕跡があり、比較的焼きがしっかりとしており、やや古い印象を受ける。他の遺物も全て須恵器である。平安時代の所産であろう。

SD 2はほぼ直線状である。幅は東側が広くなる。遺物は須恵器片、土師質土器片が出土した。須恵器は焼成が軟質で、平安時代の所産である。

SD 3はほぼSD 2に並行する。単層で、埋土中から遺物は出土していない。

SD 4・5 (Fig.201 Tab.165)

SD 4はE 7グリッドに位置する。SB 20の南側にあり、主軸がほぼ並行する。建物との関連が想定されるが、断定はできない。

SD 5はD 7グリッドに位置する。南北方向の溝であるが、幅が一定せず、遺存状況は悪い。東側にはピットが横状に並ぶ。断面形は浅い皿状である。

- P 1 ~ P 2
 ①やや明るい褐色粘土上
 ②灰白色粘土と褐色粘土質土がブロック状に混じる
 ③やや暗い褐色粘土質土
 ④やや明るい褐色粘土質土の塊じり
 ⑤やや明るい褐色粘土質土と褐色粘土質土の混じり
 ⑥褐色粘土質土と褐色粘土質土の塊じり
 ⑦やや暗い褐色粘土質土 (鉄分含む)
 ⑧やや明るい褐色粘土質土 (鉄化物を含む)
 ⑨褐色粘土質土
 P
 ⑩灰白色粘土質土 (褐色底色土質)
 ⑪褐色粘土質土 (褐色底色土質)
 ⑫褐色粘土質土 (褐色底色土質)
 ⑬褐色粘土質土 (褐色底色土質)
 P 7
 ①褐色粘土質土 (褐色底色土・灰白色土少量含む)
 ②褐色粘土質土 (褐色底色土質)
 ③やや明るい褐色粘土質土と褐色粘土質土の混じり
 (鉄化物含む)
 ④やや暗い褐色粘土質土 (鉄化物を少量含む)
 ⑤褐色粘土質土と褐色粘土質土の混じり

Tab.172 SA6ピット一覧表

	長軸 ピット番号	短軸 (cm)	深さ (cm)
P 1	※24	22	※40.5
P 2	40	※36	※49.5
P 3	26	24	32.6
P 4	30	26	※48.0
P 5	32	26	43.1
P 6	26	26	35.8
P 7	※17	※16	15.0
P 8	※20	※18	34.0
P 9	32	30	48.5
P 10	29	28	35.7

Tab.173 SA7ピット一覧表

	長軸 ピット番号	短軸 (cm)	深さ (cm)
P 1	38	34	7.4
P 2	40	34	6.9
P 3	58	44	12.6
P 4	24	18	11.5
P 5	28	22	4.0
P 6	26	22	11.3
P 7	34	16	7.8
P 8	62	28	10.7

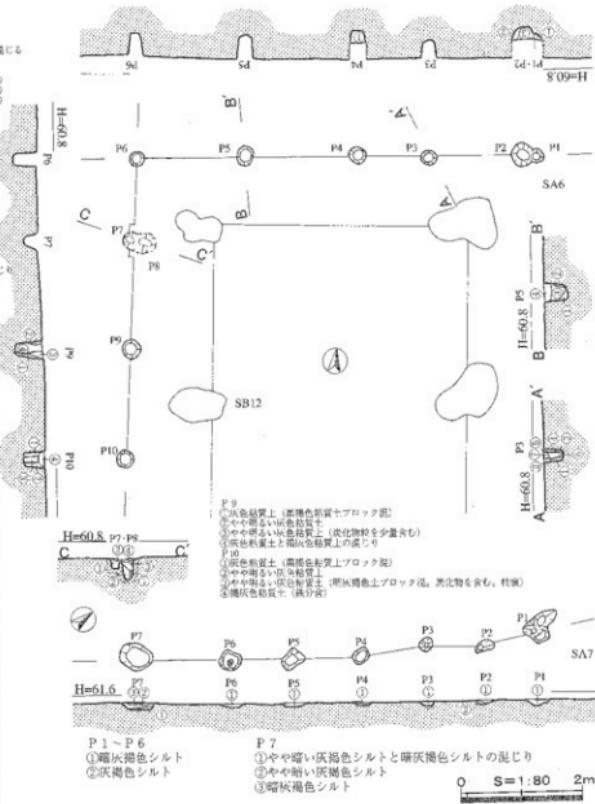


Fig.205 SA6・7構造図

(4) 構跡

構跡を7列検出した。建物の周囲を囲むものと直線状におわるものとがある。また、構跡として設定していないが、SB20・21の南側にピットが集中する箇所があり、構方が存在していた可能性がある。

S A 1・2・3・4 (Fig.203 Tab.167~170)

いずれもF11~H12グリッド付近の建物群周辺に位置する。建物跡と重複したり軸を異にするものが多くみられ、関連はあまり認められない。遺物も出土していないため、時期も明らかではない。

S A 1は南側でSB6と重複する。ほぼ直線状に北東~南北方向に延びるが、P1~6とP7~9ではやや向きが異なる。S A 2はSB1とSB8の間にあるが、建物の軸とは異なる。掘方は浅い。S A 3・4はいずれもSB3の南側、西側にある。東西方向の向きであるが関連は不明瞭である。

S A 5・6・7 (Fig.204・205 Tab.171~173)

S A 5はG9~10グリッドに位置する。SB9の北側と西側に並行する。建物の柱と対応しないことから、

建物の一部ではなく、痕跡として設定した。柱の位置は確認できるものの、柱痕は認められない。

S A 6はF・G 7グリッドに位置する。S B12の西と北側に並行している。建物の柱とは対応しない。P 4には柱痕があり、P 3・10では柱が抜かれたか折り取られた痕跡が確認できた。

S A 7はD 7・8グリッドに位置する。1区のS B19の北西で、軸はやや北方向に振れる。遺存状況は悪い。

(5) ピット群 (Fig.206~212 Tab.174~180 PL.50・64・65・76)

1区91基、2・3区597基のピットを検出した。いずれも第1造構検出面上で、黒色土上層にある褐色の土である。この層の上面には鉄分が付着しており、調査中にも明瞭に面としてとらえることができた。造構の埋

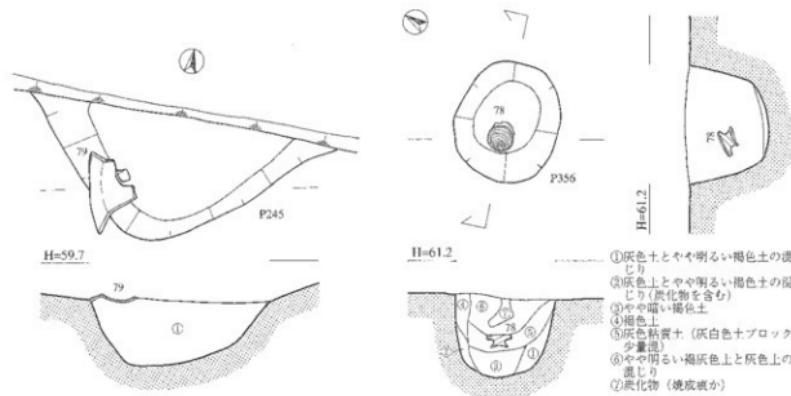
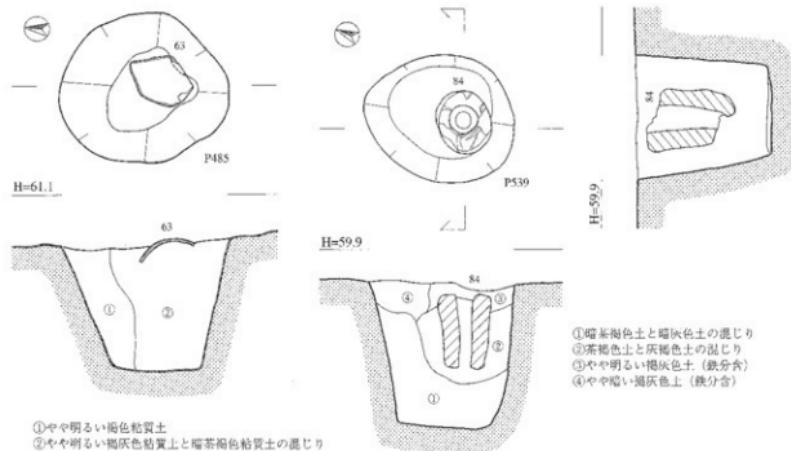


Fig.206 ピット群遺物出土状況図 (1)

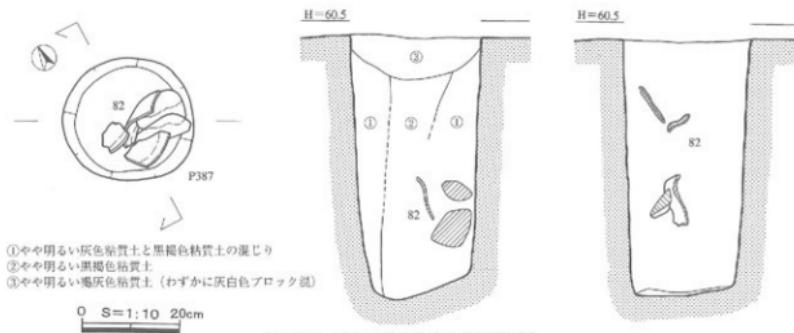


Fig.207 ピット群遺物出土状況図 (2)

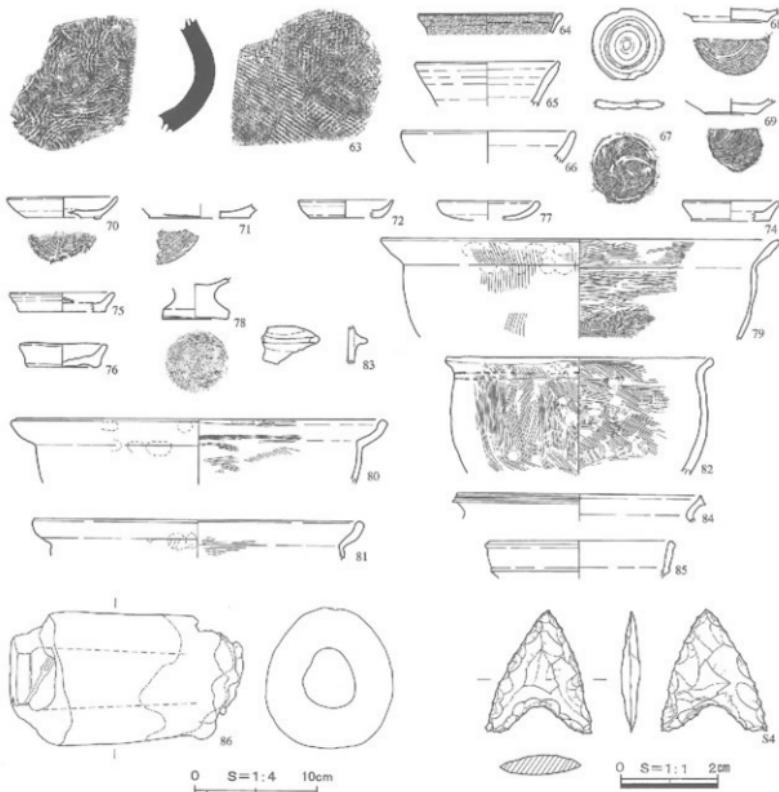


Fig.208 ピット群出土遺物実測図

Tab.174 ピット群出土遺物観察表

No.	Fig. PL	遺物名	出土位置	器種	法量(cm)	特徴	出土	色調	備考	
63	Fig.208 PL64	P 485	上層	土師質器 肩部	器高 △ 22	外縁格子状のタキヨおよび部分前にハクジ目状の底、内面青波状の当て具痕あり。	漆	外) 黄灰色2YS5/1~灰褐色7.5VR5/2 内) 灰5V6/1	-	
64	Fig.208 PL64	P 615	堆土中	土師質土器 肩口部	口径 約11cm 器高 △ 16	L字型縫部の器壁がやや太くなる。内外青波状痕あり。	0.5m以上の砂 2m以下の砂	にぶい褐色7.5VR7/4	1/12以下残存	
65	Fig.208 PL64	P 268	F層	土師質土器 肩口部	口径 約10cm 器高 △ 26	L字型縫部付近の内面をやや強くナゲる。内面口縫部に大きめ痕あり。	0.5m以下の砂 2m以下の砂	にぶい黄褐色10YR7/2	約1/12残存	
66	Fig.208 PL64	P 325	下層	土師質土器 肩口部	口径 約14cm 器高 △ 26	L字型縫部は内凹する。	白い細砂混じる	浅黄褐色7.5YR8/4	約1/6残存	
67	Fig.208 PL64	P 213	上層	土師質土器 肩口部	口径 約8.8cm 器高 △ 26	底部を円形に打ち欠く。内面輪状ナギ。底部内縫部切欠痕あり。	赤褐色5YR5/8	底面充填		
68	Fig.208 PL64	P 688	棱山面上 土師質土器 底部	器高 約11cm 底径 約8cm	底部内縫部のひらがり付近を強く縮状にナギ。外縫部削り切る。	細砂少量混じる	淡黄褐色10YR8/3	約1/4残存		
69	Fig.208 PL64	P 317	堆土中	土師質土器 底部	器高 約12cm 底径 約4.0cm	底部底部に四角形切り欠き。	白い細砂少量混じる	橙色5Y6/8	約1/3残存	
70	Fig.208 PL64	P 551	棱山中 土師質土器 底部	口径 約9.8cm 底径 約6.1cm	L字型と底縫の差は比較的大きく、口縫部に内側にせり立つ。外縫部に2列に各切り欠き。	1m以下の黒 色を含む。	にぶい黄褐色10YR7/4	約1/2残存		
71	Fig.208 PL64	P 659	棱山中 土師質土器 底部	口径 約11cm 底径 約8.0cm	底部底部に四角形切り欠き。	砂粒なし。	にぶい褐色10YR7/3	約1/6残存		
72	Fig.208 PL64	P 388	堆土中	土師質土器 底部	口径 約7.8cm 底径 約6.0cm	L字型部は内凹する。外縫底部に四角形切り欠き。	砂粒なし。	浅黄褐色7.5YR8/4	1/12以下残存	
74	Fig.208 PL64	P 472	中層 (掘成灰土)	土師質土器 底部	口径 約8.8cm 底径 約7.4cm	L字型と底縫の差は小さい。外縫底部に四角形切り欠き。	白い細砂少 外) にぶい黄褐色10YR6/4 内) 褐色5Y6/6	約1/12残存		
75	Fig.208 PL64	P 479	堆土中	土師質土器 底部	口径 約8.6cm 底径 约7.0cm	L字型と底縫の差は大きい。外縫底部に四角形切り欠き。	白い細砂少 量混じる。	にぶい黄褐色10YR7/4	約1/6残存	
76	Fig.208 PL64	P 312	堆土中	土師質土器 底部	口径 約6.8cm 底径 约6.2cm	L字型と底縫の差は小さい。外縫底部に四角形切り欠き。	白い細砂少 量混じる。	灰黄褐色10YR6/2	約1/3残存	
77	Fig.208 PL64	P 109	検出面上 土師質土器 底部	口径 約8.2cm 底径 約1.5cm	手づく成形。口縫部は一段ナギか。 高さ部は底部方向に面をもつ。外縫部に四角形切り欠き。	0.5mの白い 砂粒混じる。	にぶい黄褐色10YR6/4	約1/5残存		
78	Fig.208 PL66	P 356	中層	土師質土器 底部	器高 △ 29 底径 约5.4cm	高さ部は底部方向に面をもつ。外縫部に四角形切り欠き。外縫底部が黑色化する。	漆	にぶい褐色7.5YR7/4	口縫部大損	
79	Fig.208 PL64	P 245	F層	土師質土器 鍋口部	口径 約32.8cm 器高 △ 31	L字型部はくの字状で、器壁は薄い。口縫部以下外縫方向、内縫方向のカキメ。外面体部からL字縫部に付帯する。	1m以下の 白い砂粒混 外) 褐色5YR6/6 内) にぶい黄褐色10YR6/3	約1/5残存		
80	Fig.208 PL64	P 469	検出面上 土師質土器 鍋口部	口径 約33cm 器高 △ 5.3	L字型部は内凹する。底部に水平方向の面をもつ。内面口縫部以下に外縫方向のカキメ。	1m以下の 白い砂粒混	にぶい黄褐色10YR7/4 寸半分析試料 押手 5・在地番	約1/6残存		
81	Fig.208 PL64	P 216	上層	土師質土器 肩部	口径 約36.5cm 器高 △ 3.0	L字型部は内凹する。腹部には水平方向の面をもつ。内面口縫部以下に外縫方向のカキメ。	1m以下の 白い砂粒混	にぶい黄褐色10YR6/4	約1/12残存	
82	Fig.208 PL66	P 387	上層～中層	土師質土器 底部	口径 約22.0cm 器高 9.6cm	この字状の口縫部をもつ。体部外縫部に縮れ方、内面横方向のカキメ。	砂粒を多く 含む。	外) 黑色5V2/1- 暗褐色10YR3/3 内) 棕褐色7.5YR4/3	約2/3残存	
83	Fig.208 PL64	P 355	堆土中	土師質土器 底部	口径 約2.9cm	L字縫やや干すに断面ひび字状の貼り付けをもつ。	にぶい黄褐色10YR7/3	1/12以下残存		
84	Fig.208 PL76	P 329	堆土中	土師質土器 底部	口径 約20.0cm 器高 △ 2.1cm	内面縫部は干すに上に貼り直し、底 部は門縫が確認される。	1m以下の石 英・砂粒混	淡黄褐色10YR8/3	1/12以下残存	
85	Fig.208 PL76	P 213	上層	土師質土器 底部	口径 約31cm 器高 △ 3.1cm	器底はほぼ立ち立つ。器底は外縫部すり減りをもつ。開出部は黒。	1m以下の石 英・砂粒混	にぶい黄褐色10YR7/3	1/12以下残存	
86	Fig.208 PL66	P 539	上層～中層	縫 口	最大長さ15.5cm 最大幅12.6cm	縫合部近に内縫部物置痕。先縫部付近 は5.5cm程度、縫合部付近は4×3.5cmの 孔があり。	1.3mの砂 粒多量に混 じる。	にぶい褐色7.5YR7/3 剥離	先端部約5/6 剥離	
84	Fig.208 PL66	P 126	上層～中層	右側	抜取り長5.5cm/全長26.5cmで、縫合部は16.0cmである。 重さ: 1.6g	縫合部はレンズ状で、連続する縫縫を擁す。	石材: 安山岩	完存		

土はやや赤味がかる灰色で、ほとんどのピットは遺構面上で検出が可能であるが、実際に黒色土の上面まで掘削すると、同じ埋土の遺構が黒色土上面ではっきりと検出でき、いくつかの遺構は上面を掘削したことが判明したものもある。遺物は、意図的に入れられたもの以外はいずれも細片である。なお、遺構面については東側に位置する茶畠六反田遺跡と基本的に同一で、時期は鎌倉時代である。

P 485はH 11グリッドに位置する。須恵器の肩部63が検出面から出土した。中央や南側の内面を下に向ける状況である。外面は格子状のタキヨではあるが、内面は青海波状の当て具痕である。柱痕などは確認できない。

P 245はG 7グリッドに位置する。S B 12のはば中央付近にある。土師質土器の鍋79が出土した。口縫部はくの字状で、内面横方向、外縫方向のカキメが顕著である。鎌倉時代の所産である。

P 539はI 11グリッドに位置する。遺構の中央やや南側から鍋の羽178が接合部を下にした状況で出土した。

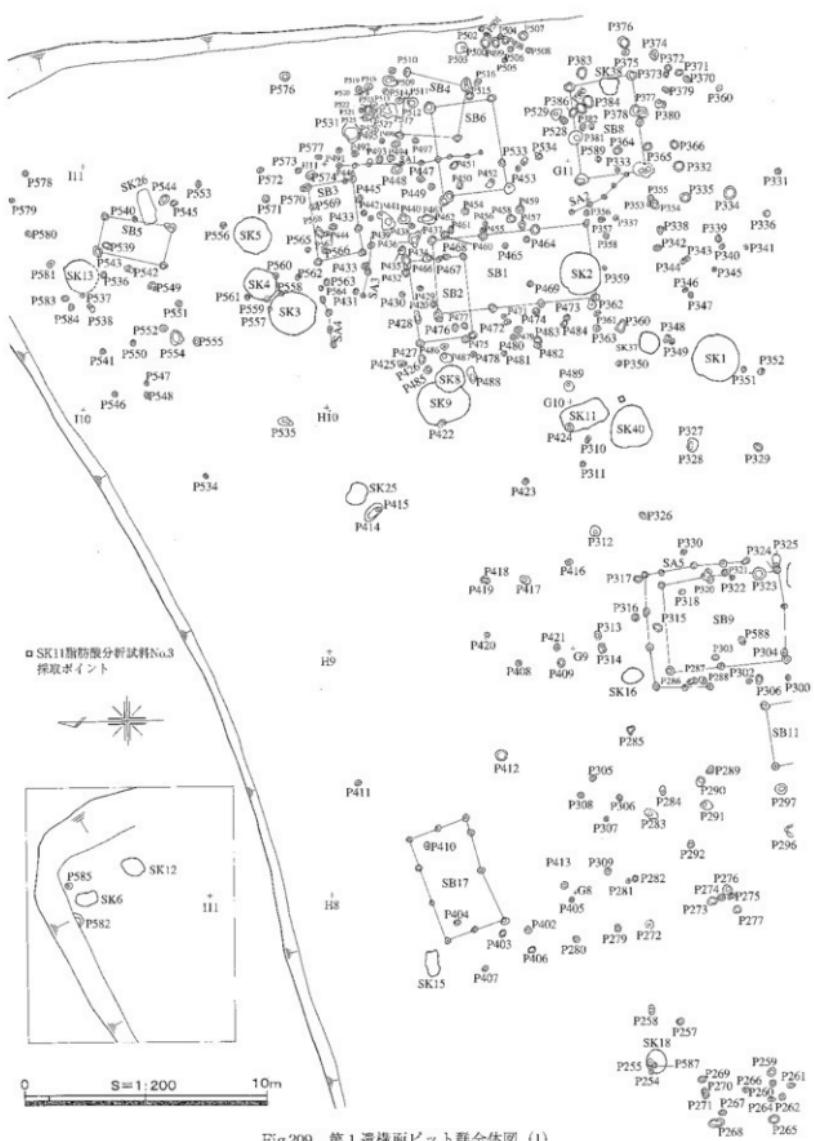


Fig.209 第1遺構面ピット群全体図 (1)

大型の羽口で接合部には溶解物が付着していた。また鉄関連の遺物としてはP392から鉄錆がまとまって出土しており、いずれも鉄関連の遺物をピット状の遺構に意図的に埋納していた様子がうかがえる。

P356はG1グリッドに位置する。中央やや西から柱状高台の底または杯の高台部78が出土した。底面を上に



Fig.210 第1遺構面ピット群全体図(2)

した状況で、口縁部は欠損している。茶畠六反田遺跡や押平弘法堂遺跡の建物の柱穴からは甃が出土しているが、出雲大社境内遺跡で手斧と柱状高台が出土しており、この形状に類似する。時期は、この字豆柱が放射性炭素年代測定法で13世紀前半頃の測定値が出ており(1)、これは本遺跡の年代観とも矛盾しない。

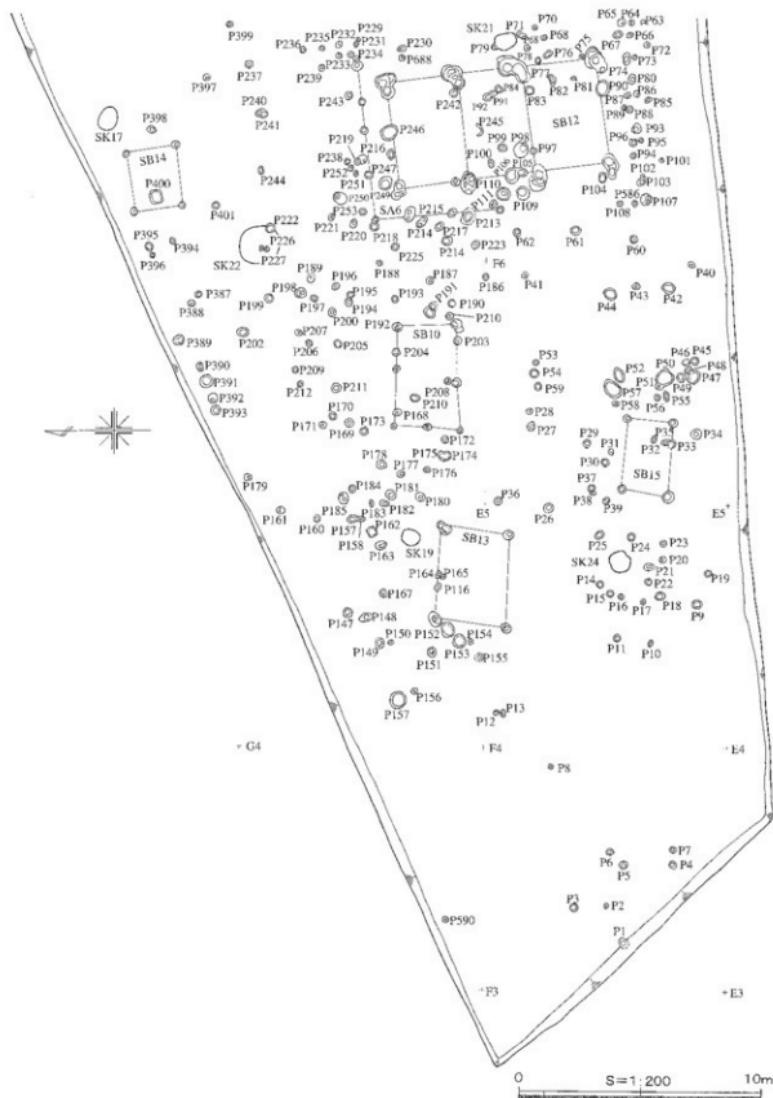


Fig.211 第1遺構面ピット群全体図(3)

P 387から土師質土器の鍋82が出土した。遺構の中央からやや南側で出土した。石もみられるが、これはS B 12の柱穴でもみられるような込めた石と推測する。したがって82は柱が抜き取られた後に入れられたと考えられる。鎌倉時代の所産である。

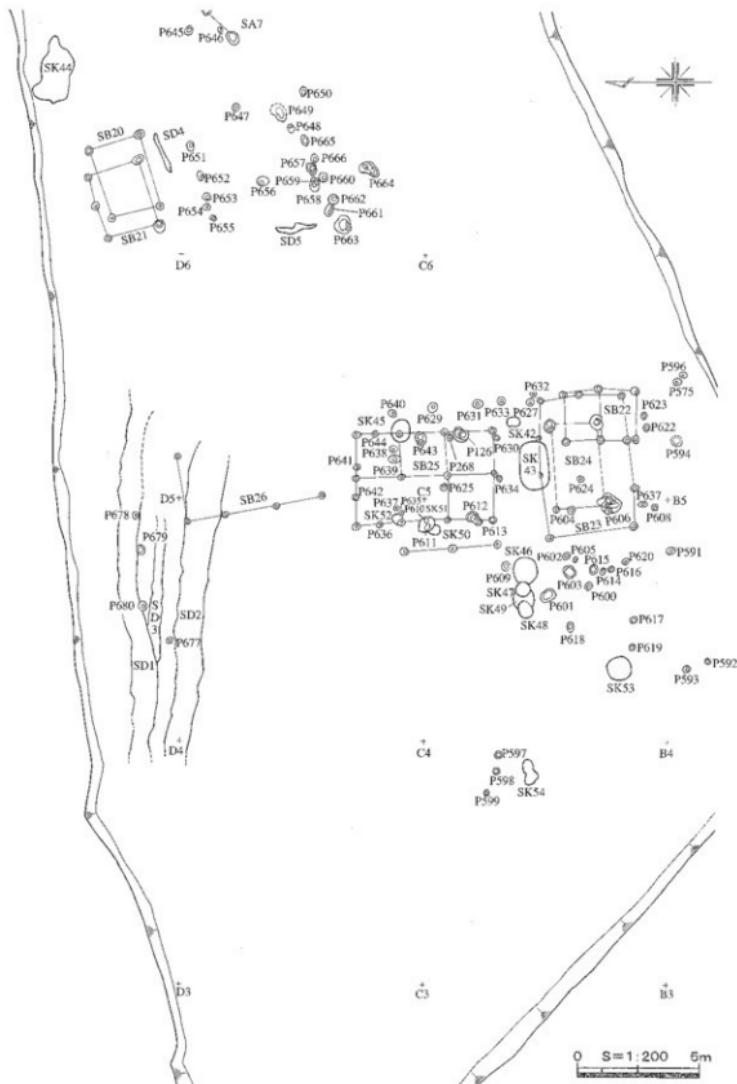


Fig.211 第1造構面ビット群全体図 (4)

その他出土した遺物は、土師質土器の杯64~69、皿70~72・74~77、鍋80・81、突宍文土器83、弥生土器甕84、土師器甕85である。杯は内外面とともに回転ナデの痕跡が残る。67は底部を意図的に打ち欠いたもので、円盤状の製品に加工している。島根県の三田谷I遺跡(2)などで出土例がある。皿は基本的には回転台成形で、口

Tab.175 第1造構面ピット群一覧表(1)

新番号	旧番号	グリッド	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	備考	新番号	旧番号	グリッド	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	備考
1	531	F4	32	※30	55.2		61	569	F7	36	34	39.0	
2	529	F4	22	20	12.0		62	567	F7	34	30	38.8	
3	530	F4	30	30	23.4		63	412	F7	24	20	14.4	
4	140	F4	32	30	65.2		64	505	F7	20	20	26.1	北東隅
5	167	F4	32	30	55.1		65	504	F7	28	※26	34.9	
6	164	F4	28	26	22.8		66	415	F7	22	22	47.3	
7	166	F4	24	22	25.5		67	414	F7	26	24	46.5	
8	174	F4	22	20	23.2		68	433	F7	22	20	46.6	
9	253	F5	36	30	18.0	須應器裏	69	431	F7	38	36	49.0	
10	173	F5	24	18	38.0		70	546	F7	20	20	16.9	
11	224	F5	22	22	44.1		71	432	F7	※30	28	35.5	
12	77	F5	26	22	11.1		72	413	F7	22	20	43.4	
13	74	F5	28	20	52.0		73	416	F7	24	22	44.0	
14	521	F5	30	28	33.7		74	417	F7	50	30	45.0	
15	522	F5	28	28	18.3		75	462	F7	18	14	54.3	
16	292	F5	18	18	52.2		76	434	F7	36	26	9.5	土師質片
17	230	F5	20	18	30.1		77	435	F7	24	22	47.6	
18	310	F5	38	32	33.4		78	489	F7	26	26	38.5	
19	259	F5	28	26	21.7		79	488	F7	※26	24	6.3	
20	540	F5	30	28	55.9		80	419	F7	24	24	46.7	
21	523	F5	46	28	51.4		81	490	F7	20	※20	8.8	
22	266	F5	26	26	40.4		82	436	F7	46	22	8.9	
23	308	F5	28	24	56.9		83	437	F7	38	38	15.3	土師質片付
24	307	F5	32	28	56.4		84	438	F7	30	30	9.9	
25	309	F5	36	28	30.5		85	485	F7	20	20	24.0	
26	526	F5	※40	34	53.7		86	420	F7	28	26	48.3	
27	315	F6	32	24	52.5		87	421	F7	22	20	56.6	
28	316	F6	24	24	40.2		88	422	F7	28	26	53.2	
29	314	F6	28	26	46.2		89	423	F7	18	16	6.4	
30	312	F6	32	30	52.5		90	484	F7	64	54	51.1	
31	313	F6	26	24	18.9		91	439	F7	※34	26	12.4	
32	322	F6	28	20	33.5		92	440	F7	※30	28	15.2	
33	323	F6	※34	28	19.4	発生焼戻し跡	93	483	F7	38	32	44.8	
34	324	F6	42	40	55.0		94	425	F7	24	24	49.0	
35	325	F6	26	20	25.4	瓦質地	95	426	F7	22	22	55.1	
36	331	F6	24	24	55.2		96	427	F7	34	34	51.6	
37	376	F6	28	26	37.8		97	441	F7	24	22	23.2	
38	311	F6	※24	18	11.7		98	442	F7	60	58	15.6	
39	375	F6	26	24	30.9		99	443	F7	36	34	22.1	
40	516	F6	32	24	41.8		100	444	F7	34	24	14.7	
41	476	F6	26	※24	35.7		101	330	F7	※20	18	13.1	
42	517	F6	52	38	9.2		102	428	F7	※22	20	65.7	
43	518	F6	28	22	20.8		103	429	F7	※32	30	54.9	
44	519	F6	50	50	30.3		104	474	F7	36	28	63.5	土師質
45	329	F6	34	32	56.3		105	353	F7	46	36	16.5	
46	382	F6	34	※28	12.8		106	482	F7	58	※50	12.4	
47	380	F6	※60	48	29.4		107	570	F7	44	42	16.4	
48	381	F6	28	※28	30.4		108	430	F7	22	22	30.0	
49	384	F6	38	28	10.1		109	481	F7	56	52	18.5	77
50	378	F6	78	64	19.8		110	480	F7	56	50	22.5	
51	379	F6	32	38	14.1		111	479	F7	40	24	33.3	
52	320	F6	64	34	49.1		112	391	F8	22	20	53.7	
53	319	F6	24	22	28.2		113	393	F8	28	20	45.1	
54	318	F6	34	32	34.5		114	410	F8	28	22	40.9	
55	327	F6	38	30	37.7	83	115	409	F8	32	28	22.5	
56	328	F6	24	20	26.3		116	506	F8	22	20	8.2	
57	321	F6	76	54	12.9		117	507	F8	20	14	11.5	
58	524	F6	22	22	23.7		118	241	F9	36	30	49.0	
59	317	F6	28	24	29.0		119	326	F9	52	52	52.0	
60	571	F7	36	30	29.2		120	243	F9	28	26	39.6	

Tab.176 第1 遺構面ピット群一覧表 (2)

新番号	旧番号	グリッド	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	備考	新番号	旧番号	グリッド	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	備考
121	549	F9	28	26	45.0		180	332	G6	34	28	40.4	
122	241	F9	22	20	40.0		181	333	G6	42	32	46.1	
123	246	F9	24	20	40.9		182	561	G6	38	22	51.1	
124	245	F9	26	18	27.3		183	562	G6	28	20	16.7	
125	411	F9	22	22	28.6		184	572	G6	30	28	56.0	
126	248	F9	36	32	61.0	S4	185	536	G6	42	38	48.6	
127	249	F10	28	26	48.0		186	486	G6	32	30	43.3	
128	250	F10	28	26	43.1		187	377	G6	26	24	33.1	
129	233	F10	24	24	24.5		188	563	G6	24	20	27.5	
130	235	F10	34	28	25.9		189	473	G6	22	22	35.0	
131	100	F10	48	36	6.7		190	372	G6	28	26	44.1	
132	640	F10	24	20	47.8		191	373	G6	※32	20	36.6	
133	653	F10	30	26	62.4		192	374	G6	50	32	61.3	
134	641	F10	24	22	33.5		193	544	G6	24	22	32.3	
135	642	F10	22	10	41.3		194	346	G6	32	30	49.4	
136	639	F10	20	18	42.8		195	347	G6	24	22	41.6	
137	638	F10	22	22	46.5		196	472	G6	18	16	14.9	
138	637	F10	26	24	50.1		197	345	G6	28	26	22.8	
139	644	F10	20	20	30.6		198	344	G6	44	36	47.8	
140	645	F10	22	16	37.8		199	348	G6	34	34	47.2	
141	649	F10	22	18	39.3		200	388	G6	32	30	49.2	
142	650	F10	24	22	40.2		201	543	G6	26	26	31.2	
143	651	F10	38	36	66.6		202	369	G6	42	36	12.5	
144	652	F10	※28	22	49.9		203	458	G6	28	24	36.8	
145	633	F11	26	22	93.5		204	460	G6	30	26	12.3	頭蓋片
146	236	F11	24	24	19.6		205	342	G6	30	28	23.0	
147	532	G5	34	32	68.5		206	341	G6	24	22	22.4	
148	358	G5	48	30	65.7		207	343	G6	22	22	46.2	
149	359	G5	44	30	52.8		208	351	G6	24	24	38.0	65
150	360	G5	20	16	29.0		209	349	G6	22	20	27.3	
151	242	G5	42	32	58.4		210	336	G6	36	32	63.0	
152	136	G5	60	52	16.3	土削質粘子	211	340	G6	36	34	55.9	
153	122	G5	54	50	31.9		212	350	G6	22	22	18.5	
154	510	G5	※22	20	38.0		213	475	G7	64	48	57.5	67~85
155	213	G5	34	24	65.8		214	220	G7	※28	28	25.4	
156	385	G5	22	20	44.3		215	221	G7	※30	28	45.5	
157	528	G5	68	66	17.1		216	493	G7	19	17	32.7	81
158	542	G5	※26	24	64.6		217	352	G7	34	32	54.1	
159	535	G5	※50	30	67.3		218	354	G7	34	32	38.6	
160	541	G5	※30	26	43.7		219	495	G7	25	21	34.6	
161	537	G5	32	30	62.9		220	564	G7	30	26	44.6	
162	168	G5	※48	44	7.0		221	565	G7	22	22	21.3	
163	162	G5	46	32	58.8	R②	222	501	G7	34	32	39.5	
164	386	G5	28	20	32.0		223	477	G7	28	28	28.1	
165	178	G5	20	※18	14.0		224	356	G7	40	34	48.1	
166	121	G5	32	28	45.3		225	500	G7	30	30	42.2	弥生裏片
167	533	G5	30	24	42.6		226	470	G7	22	18	12.0	
168	459	G6	34	32	19.6		227	471	G7	18	※16	21.4	
169	338	G6	36	34	13.4		228	669	G7	20	20	47.0	
170	339	G6	32	30	49.8		229	662	G7	16	14	53.8	
171	545	G6	28	26	47.8		230	656	G7	32	20	48.0	
172	362	G6	30	30	53.2		231	661	G7	22	22	48.4	
173	337	G6	32	30	45.9		232	663	G7	26	20	40.4	
174	335	G6	34	※32	44.8		233	664	G7	26	26	48.1	
175	387	G6	30	※28	38.2		234	660	G7	28	22	49.9	
176	361	G6	24	20	23.8		235	666	G7	22	18	40.5	
177	560	G6	28	28	33.3		236	667	G7	24	24	48.3	
178	334	G6	40	38	55.7		237	680	G7	30	28	62.0	
179	527	G6	※32	26	57.0		238	769	G7	26	26	42.1	

Tab.177 第1造構面ピット群一覧表(3)

新番号	旧番号	グリッド	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	備考	新番号	旧番号	グリッド	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	備考
239	665	G7	26	22	47.3		300	254	G9	20	18	42.6	
240	390	G7	※36	28	47.1		301	255	G9	40	34	48.1	
241	464	G7	34	28	59.4		302	256	G9	22	18	48.9	
242	487	G7	32	32	50.6		303	258	G9	28	28	44.0	
243	466	G7	30	26	42.4		304	252	G9	26	26	47.7	
244	503	G7	32	24	27.1		305	269	G9	24	24	45.4	
245	495	G7	※50	※50	10.8	79	306	270	G9	26	24	48.3	
246	491	G7	70	60	19.6		307	271	G9	20	18	31.4	
247	492	G7	38	20	9.0		308	453	G9	26	22	44.6	
248	468	G7	28	26	66.6		309	424	G9	30	26	49.1	
249	408	G7	54	50	64.4		310	556	G10	26	16	23.6	
250	498	G7	25	25	35.8		311	555	G10	22	20	22.1	
251	496	G7	24	24	12.0		312	218	G10	42	40	47.6	76
252	497	G7	28	22	28.0	土師質焼	313	538	G10	※34	30	51.5	
253	499	G7	56	46	16.1		314	277	G10	38	28	45.4	
254	455	G8	22	20	44.0		315	223	G10	38	30	44.0	
255	457	G8	※48	40	50.0		316	297	G10	30	28	48.2	
256	392	G8	22	20	37.0		317	296	G10	36	28	38.4	69
257	511	G8	26	26	16.5		318	225	G10	24	24	32.4	
258	676	G8	32	24	61.0		319	293	G10	S B9 P8に変更		73	
259	508	G8	28	26	41.6		320	291	G10	28	26	48.2	
260	446	G8	26	22	50.2		321	227	G10	26	24	10.9	
261	445	G8	24	20	22.4		322	228	G10	22	18	11.1	
262	509	G8	22	20	7.1		323	229	G10	52	50	10.7	
263	448	G8	34	32	45.4		324	231	G10	34	30	46.3	
264	447	G8	28	20	32.9		325	232	G10	46	30	34.1	66
265	449	G8	40	36	36.3		326	219	G10	30	24	20.6	
266	451	G8	22	20	24.0		327	215	G10	38	※30	15.0	
267	450	G8	24	22	43.2		328	216	G10	38	※30	15.2	
268	452	G8	64	30	29.7		329	557	G10	34	30	24.6	84
269	454	G8	22	22	29.7		330	772	G10	22	20	49.5	
270	512	G8	24	※22	22.0		331	197	G11	22	20	7.5	
271	513	G8	28	22	10.0		332	192	G11	44	38	19.5	
272	396	G8	※38	36	43.6		333	165	G11	※20	16	8.1	
273	298	G8	40	36	11.0		334	195	G11	50	50	21.0	
274	299	G8	28	26	50.5		335	194	G11	36	32	22.7	
275	300	G8	30	20	56.4		336	196	G11	30	24	18.8	
276	502	G8	40	38	55.3		337	159	G11	22	20	11.2	
277	301	G8	30	30	36.6		338	209	G11	36	30	8.3	
278	514	G8	28	※26	38.1		339	202	G11	28	22	8.0	
279	399	G8	30	26	57.2		340	201	G11	20	16	7.2	
280	401	G8	28	26	60.2		341	200	G11	※16	※16	5.6	
281	397	G9	20	20	23.8		342	208	G11	30	22	11.2	
282	398	G9	24	24	28.8		343	206	G11	20	16	10.5	
283	273	G9	78	36	59.4		344	207	G11	20	20	10.9	
284	272	G9	42	36	46.5		345	203	G11	18	14	4.2	
285	268	G9	40	28	14.4		346	205	G11	20	16	6.8	
286	264	G9	21	※20	40.7		347	204	G11	22	16	11.1	
287	263	G9	26	※24	43.5		348	211	G11	36	20	12.7	
288	699	G9	32	32	55.2		349	210	G11	22	20	7.3	
289	275	G9	34	26	8.0		350	153	G11	20	20	7.3	
290	274	G9	46	30	61.6	土師質片	351	212	G11	20	18	16.4	
291	276	G9	44	40	52.0	上部質焼	352	214	G11	32	28	17.3	
292	279	G9	30	26	42.7		353	791	G11	※18	16	15.2	
293	525	G9	26	22	58.4		354	782	G11	42	36	22.9	
294	383	G9	32	30	53.5		355	783	G11	※36	28	21.5	
295	366	G9	24	24	14.0		356	161	G11	26	22	16.2	78
296	394	G9	52	50	48.5		357	160	G11	24	18	11.4	
297	278	G9	48	42	80.5		358	158	G11	24	※22	16.6	
298	238	G9	※20	※18	32.0		359	157	G11	18	※16	8.2	
299	574	G9	24	22	40.3		360	785	G11	50	34	21.9	

Tab.178 第1 遺標面ピット群一覧表(4)

新番号	旧番号	グリッド	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	備考	新番号	旧番号	グリッド	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	備考
361	155	G11	22	22	18.1		419	551	H10	24	22	-	
362	156	G11	48	30	13.8		420	539	H10	28	※24	43.2	
363	154	G11	28	24	15.7		421	558	H10	26	22	54.3	
364	745	G12	40	34	17.2		422	575	H10	30	26	39.0	
365	191	G12	34	30	20.9		423	237	H10	22	20	26.4	
366	193	G12	32	28	5.7		424	280	H10	38	32	20.1	
367	199	G12	30	28	9.5		425	102	H11	28	※24	18.5	
368	198	G12	48	46	16.3		426	103	H11	24	※24	17.6	
369	185	G12	※26	※24	54.9		427	104	H11	※34	30	17.2	
370	184	G12	30	18	23.9		428	113	H11	42	24	32.6	
371	183	G12	26	26	16.0		429	99	H11	22	20	21.3	
372	180	G12	28	24	15.4		430	101	H11	22	18	23.3	
373	181	G12	26	18	14.7		431	36	H11	22	20	35.0	
374	179	G12	38	30	17.8		432	98	H11	※30	30	21.9	
375	177	G12	28	26	19.6		433	37	H11	24	22	10.4	
376	176	G12	50	46	23.5		434	95	H11	※24	22	26.7	須思器片
377	188	G12	42	40	23.3		435	96	H11	30	24	32.2	
378	187	G12	※42	40	15.4		436	93	H11	※40	※30	37.0	
379	182	G12	32	16	12.2		437	94	H11	※32	26	41.0	上部質片
380	186	G12	42	24	19.0		438	92	H11	24	18	17.3	
381	169	G12	22	※18	9.0		439	90	H11	※60	54	23.7	
382	170	G12	26	24	8.4		440	91	H11	46	38	49.8	
383	743	G12	50	36	18.9		441	89	H11	28	※26	28.3	
384	740	G12	50	42	10.0		442	85	H11	20	20	25.1	
385	741	G12	50	34	10.5		443	39	H11	30	22	29.3	
386	742	G12	38	32	11.1		444	40	H11	※20	16	10.8	
387	371	H6	28	26	53.5	82	445	86	H11	26	24	31.5	
388	370	H6	26	26	68.5	72	446	87	H11	20	20	19.5	
389	389	H6	46	34	14.6		447	124	H11	34	30	25.6	
390	368	H6	40	22	56.5		448	88	H11	40	38	38.1	
391	363	H6	50	48	18.4		449	123	H11	26	22	37.7	
392	365	H6	42	40	23.1	F④	450	125	H11	※26	24	34.6	
393	364	H6	36	34	10.0		451	126	H11	44	24	5.9	
394	403	H7	22	22	20.0		452	128	H11	24	※24	28.0	
395	402	H7	38	30	8.0		453	137	H11	20	20	19.6	
396	357	H7	20	18	38.0		454	130	H11	38	※34	21.7	
397	548	H7	※28	22	49.8		455	131	H11	22	18	9.1	
398	568	H7	34	22	11.0		456	132	H11	22	18	17.8	
399	626	H7	26	24	61.8		457	133	H11	36	30	26.9	
400	405	H7	68	64	9.0		458	134	H11	36	※26	24.8	
401	566	H7	32	30	17.0		459	135	H11	30	30	17.8	
402	302	H8	26	24	33.3		460	117	H11	30	30	21.9	上部質頭
403	304	H8	28	26	10.6		461	118	H11	30	18	20.5	
404	515	H8	24	22	28.3		462	119	H11	34	※34	34.5	
405	127	H8	20	18	51.1		463	120	H11	※40	30	30.3	
406	303	H8	30	28	31.5		464	141	H11	22	20	19.4	
407	688	H8	22	20	58.0		465	142	H11	22	20	18.9	
408	257	H9	28	26	55.4		466	97	H11	38	28	19.0	
409	282	H9	40	30	51.7		467	115	H11	20	18	20.6	
410	288	H9	34	24	52.2		468	116	H11	26	26	28.6	
411	290	H9	24	18	9.9		469	239	H11	22	20	18.6	80
412	281	H9	44	※44	5.8		470	114	H11	24	22	22.9	
413	395	H9	30	26	37.7		471	143	H11	20	18	23.6	
414	573	H10	※56	48	19.0		472	144	H11	28	20	32.2	74
415	576	H10	※50	44	55.3		473	786	H11	26	24	28.2	
416	554	H10	26	24	58.0		474	149	H11	24	22	17.2	
417	553	H10	44	※32	61.8	F④	475	110	H11	32	28	13.2	
418	550	H10	28	※22	-		476	111	H11	26	26	37.7	

Tab.179 第1遺構面ピット群一覧表(5)

新番号	旧番号	グリッド	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	備考	新番号	旧番号	グリッド	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	備考
477	112	H11	22	22	18.7		536	19	I11	22	20	7.7	
478	109	H11	※24	20	22.5		537	18	I11	20	18	9.6	
479	145	H11	32	24	26.2	75	538	33	I11	38	16	15.0	
480	146	H11	22	20	22.6		539	20	I11	32	26	26.8	86
481	147	H11	20	20	13.7		540	57	I11	22	20	22.9	
482	148	H11	26	24	35.6		541	260	I11	20	20	14.1	
483	784	H11	36	※30	36.7		542	17	I11	※24	18	25.9	
484	150	H11	26	18	6.8		543	16	I11	26	24	21.4	
485	105	H11	34	32	37.8	63	544	21	I11	52	32	25.6	
486	106	H11	30	26	33.2		545	22	I11	32	22	8.0	
487	107	H11	56	38	17.3		546	8	I11	20	16	17.3	
488	108	H11	60	34	16.2		547	9	I11	20	18	14.4	
489	151	H11	40	40	18.0		548	10	I11	18	18	15.7	
490	129	H11	※24	20	24.7		549	261	I11	36	30	29.5	
491	59	H12	22	22	29.8		550	32	I11	22	20	17.0	
492	60	H12	24	24	35.9		551	15	I11	24	22	25.0	
493	61	H12	32	28	31.2		552	66	I11	28	26	26.1	
494	62	H12	30	28	28.4		553	23	I11	24	22	23.8	
495	63	H12	18	16	10.9		554	13	I11	64	50	37.9	
496	64	H12	28	26	26.7		555	14	I11	32	24	38.6	
497	75	H12	26	22	22.5		556	24	I11	30	26	29.6	
498	734	H12	32	26	17.2		557	25	I11	24	22	6.6	
499	735	H12	40	28	30.0		558	26	I11	22	22	20.4	
500	736	H12	58	40	24.1		559	27	I11	22	22	6.9	
501	788	H12	20	16	21.9		560	28	I11	24	※24	12.6	
502	789	H12	20	16	16.6		561	31	I11	22	20	10.8	
503	79	H12	58	44	39.7		562	34	I11	26	20	22.8	
504	80	H12	24	20	16.6		563	35	I11	26	24	35.3	
505	81	H12	20	18	14.3		564	732	I11	20	18	35.3	
506	82	H12	20	20	17.0		565	738	I11	22	20	39.2	
507	83	H12	36	30	22.8		566	737	I11	20	20	40.6	
508	84	H12	24	20	22.6		567	41	I11	※26	22	36.7	
509	69	H12	※22	22	20.9		568	42	I11	28	※26	44.3	
510	71	H12	24	20	16.8		569	43	I11	22	22	20.6	
511	72	H12	30	28	12.0		570	38	I11	24	※24	20.6	
512	73	H12	40	38	30.5		571	29	I11	28	28	29.1	
513	68	H12	28	※28	19.4		572	30	I11	22	18	24.5	
514	67	H12	26	24	20.1		573	44	I11	22	20	25.6	
515	76	H12	30	26	27.4		574	45	I11	34	30	26.4	
516	78	H12	26	※24	18.1		575	152	I11	20	18	22.9	
517	65	H12	62	56	28.0		576	46	I12	28	26	34.3	
518	50	H12	32	24	19.8		577	47	I12	22	18	11.1	
519	48	H12	26	22	18.8		578	2	J11	24	24	36.8	
520	49	H12	34	28	24.8		579	3	J11	20	16	13.3	
521	51	H12	18	18	17.1		580	4	J11	24	22	17.7	
522	52	H12	28	※24	29.6		581	5	J11	32	26	30.0	
523	53	H12	28	24	17.1		582	400	J11	66	※50	12.1	
524	54	H12	30	※20	24.0		583	6	J11	26	22	18.5	
525	55	H12	※30	24	22.6		584	7	J11	26	24	21.4	
526	56	H12	※24	※24	25.4		585	1	J12	28	24	9.3	
527	57	H12	※28	22	20.4		586	357	F7	24	24	50.7	
528	171	H12	40	26	11.9		587	456	G8	20	※18	35.7	
529	172	H12	48	42	13.7		588	217	G10	※26	24	23.4	
530	70	H12	58	42	40.4		589	163	G12	24	※20	16.4	
531	58	H12	84	72	25.0		590	534	G4	24	24	51.5	
532	138	H12	28	20	20.3		591	11a	B5	36	26	23.1	
533	139	H12	30	28	27.2		592	1a	B5	22	20	4.0	
534	11	I10	24	18	8.3		593	2a	B5	26	26	24.8	
535	12	I10	62	34	16.0		594	41	B6	46	※42	15.8	

上部質片

Tab.180 第1造構面ピット群一覧表(6)

新番号	旧番号	グリッド	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	備考	新番号	旧番号	グリッド	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	備考
595	35	B6	30	26	46.4		642	131	D6	26	22	43.1	
596	34	B6	28	26	56.2		643	128	D6	54	44	90.0	
597	60	C4	28	28	12.1		644	112	D6	24	22	23.6	
598	61	C4	28	28	26.6		645	71	D7	40	28	8.9	
599	62	C4	24	22	18.5		646	69	D7	24	18	11.5	
600	6a	C5	30	26	21.0		647	14	D7	30	26	*71.2	
601	78	C5	52	40	23.1		648	81	D7	36	26	23.7	
602	58	C5	32	28	58.9		649	80	D7	*64	*42	12.6	
603	59	C5	52	44	26.9		650	13	D7	40	26	40.1	
604	56	C5	34	30	62.4		651	96	D7	32	28	61.6	
605	76	C5	20	14	22.2		652	97	D7	40	28	34.2	
606	54	C5	30	28	51.5		653	98	D7	38	30	81.5	
607	51	C5	28	24	52.1		654	99	D7	34	28	66.8	
608	50	C5	22	22	16.5		655	100	D7	26	20	15.8	
609	124	C5	36	*34	45.2		656	94	D7	42	36	78.9	
610	140	C5	20	18	*31.1		657	87	D7	50	34	37.6	土師質
611	137	C5	34	28	*87.7		658	89	D7	56	48	21.2	
612	127	C5	*46	38	10.6		659	88	D7	30	22	43.7	71
613	126	C5	48	30	81.4		660	84	D7	40	34	11.1	
614	8a	C5	22	20	16.4		661	91	D7	60	30	19.1	
615	7a	C5	36	30	67.0	64	662	85	D7	38	34	10.2	
616	9a	C5	26	20	15.5		663	86	D7	66	66	64.1	
617	4a	C5	28	22	31.2		664	103	D7	86	46	25.2	
618	5a	C5	38	26	30.7		665	82	D7	44	26	10.6	
619	3a	C5	24	22	11.9		666	83	D7	38	26	6.2	
620	10a	C5	28	22	26.3		667	22	D8	18	16	19.6	
621	37	C6	S B22 P2~変更				668	15	D8	22	20	47.7	
622	42	C6	22	22	39.4		669	10	D8	20	18	38.5	
623	43	C6	22	20	39.8		670	11	D8	16	14	17.7	
624	110	C6	26	22	21.3		671	74	D8	26	20	30.3	
625	116	C6	28	28	28.6		672	21	D8	22	18	28.2	
626	129	C6	42	40	89.2		673	20	D8	16	14	22.8	
627	104	C6	30	28	8.9		674	19	D8	16	14	24.8	
628	130	C6	30	24	41.9		675	18	D8	20	18	28.1	
629	108	C6	42	30	59.1		676	13	D8	24	22	37.5	
630	111	C6	30	22	32.7		677	144	E5	28	24	18.0	
631	107	C6	38	34	52.6		678	141	E5	24	22	8.3	
632	105	C6	24	22	40.4		679	142	E5	38	34	12.0	
633	106	C6	30	22	49.2		680	143	E5	44	34	16.2	
634	115	C6	24	20	41.3		681	31	E7	30	28	31.0	土師質片
635	138	D5	21	22	15.1		682	16	E8	28	26	28.9	
636	118	D5	22	22	41.6		683	67a	E8	30	22	6.6	
637	139	D5	*40	*22	35.6		684	5	E10	28	24	32.2	氣泡器片
638	113	D6	38	24	42.3		685	2	E11	22	18	16.7	
639	114	D6	42	32	52.4		686	4	E11	22	22	54.5	土師質片
640	109	D6	32	30	57.2		687	8	E11	16	14	5.2	
641	117	D6	22	20	30.3		688	711	G7	24	22	14.7	68

径と底径の差は小さい。ただし77は手づくね成形である。80・81ははっきりとはしないが、いずれも土師質焼成で受け口状の口縁部をもつ。83は刻み目をもたない。84は赤生の土壙または木棺墓群と同時期、85は口縁部下の突出があまく、古墳時代中期のものか。

注

- (1) 第3章 茶畠六反田遺跡 3(1)注(1)文献。このほか鳥取県埋蔵文化財調査センターの松尾充晶氏の御教示による。
- (2) 建設省出雲工事事務所 鳥取県教育委員会 1999『三田谷I遺跡』(Vol.1)

(6) 包含層・遺構外出土遺物

鎌倉時代の遺構検出面である灰色土の上面には褐灰色土・暗灰色シルトの包含層が堆積し、これが遺構の下限となる。さらに上層には灰色粘質土があり、この上は表土となる。ただし、灰色粘質土から近世の遺物が出土することはほとんどない。

遺物の出土状況は、2・3区については掘削が著しく、耕作土直下が遺構検出面であるため遺物はほとんど出土していない。1区では建物跡の存在する周囲に集中する傾向がみられる。

灰色粘質土包含層 (Fig.213・214 Tab.181 PL.66・77)

耕作土下の包含層である。須恵器は杯蓋87、瓶と考えられる88、鉢89、体部90が出土した。87は奈良時代、89は東播磨系の鉢で編年から12~13世紀に比定される。土師質土器は、杯91・92、皿93。土製品の上鍊94も存在する。曆年代を推測させる資料として、貿易陶器がある。95・96はいずれも青磁の碗で、95は無文で口縁端部がやや太くなるもの、96は外面体部に細かい波をもつものでいずれも室町時代、15世紀頃の所産である。97は焼返しをもつ青磁の香炉で、やはり同時期とみられる。したがって近世の下には中世後期の遺物が出土する層が存在するが、遺物は多くなく遺構も確認されていない。付近に該当する時期の遺構が存在する可能性を示すものであろう。

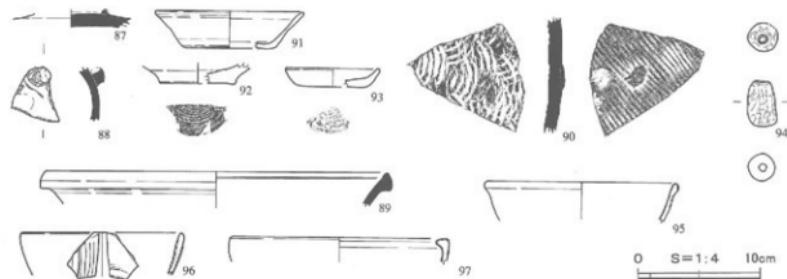


Fig.213 包含層出土遺物実測図 (1)

Tab.181 包含層出土遺物観察表 (1)

No.	Fig. PL.	グリッド	出土状況	器種	法長(cm)	特徴	粘土	色調	備考
87	Fig.213 PL.66	G 7	灰色粘質土包含層 杯底部	器高 △ 15	天井部斜面ヘ切りか。底底のつまみ が付く。	1 mm 以下の 砂粒を含む。	褐色10Y6/1	天井部行透 1/2残存	
88	Fig.213 PL.66	2・3区	灰色粘質土包含層 瓶	器高 △ 43	内外面ともにナデか。	0.5mm 以下の 砂粒を含む。	褐色7.5Y5/1	-	
89	Fig.213 PL.66	2・3区	灰色粘質土包含層 鉢	口径 △ 28.8	口縁部は三角形形状となる。内面底部 下に1mmの凹窓状の痕あり。	0.5mm 大の砂 粒を含む。	褐色5Y6/1	1/12以下残存 東播磨系か	
90	Fig.213 PL.66	C 5	灰色粘質土包含層 体部	器高 △ 9.3	外面平行タキ。内面青海波状の凸 起痕。	砂粒なし。	外) 緩灰色N3/0 (内) 褐色Ns/0	-	
91	Fig.213 PL.66	C 5	灰色粘質土器 上鍊	土師質土器 杯	口径 △ 12.0	外面底部は回転ヘ切り。	砂粒なし。	にぶい黄褐色10YR6/4	約1/6残存
92	Fig.213 PL.66	C 5	灰色粘質土包含層 杯底部	器高 △ 6.0	外面底部は回転系切り。	1 mm 以下の 砂粒混じる。	外) にぶい黄褐色 10YR7/4 内) 棕色5YR6/6	約1/2残存	
93	Fig.213 PL.66	G 9	灰色粘質土包含層 皿	土師質土器 皿	口径 △ 15	口縁と底縁の差は小さい。外面底部に 回転系切り痕。	細粒	褐色7.5YR6/4	約1/4残存
94	Fig.213 PL.66	F 7	灰色粘質土 土鍊	土鍊	最大長 32 最大幅 20	手づくねによる成形。	細粒	褐色10YR4/6	約1/2残存
95	Fig.213 PL.77	G 6	灰色粘質土 土鍊	青磁 碗	口径 △ 16	口縁部は壁状に肥厚する。無文。	青	オリーブ褐色10Y5/2	1/12以下残存 能登島系
96	Fig.213 PL.77	2・3区	灰色粘質土 土鍊	青磁 碗	口径 △ 13.6	外側に細い縦弁文をもつ。	青	オリーブ褐色10Y5/2	1/12以下残存 能登島系
97	Fig.213 PL.77	2・3区	灰色粘質土 土鍊	青磁 香炉	口径 △ 18.0	口縁部に前面三角形の複数しがつ く。	青	灰オリーブ色5Y5/2	約1/12残存

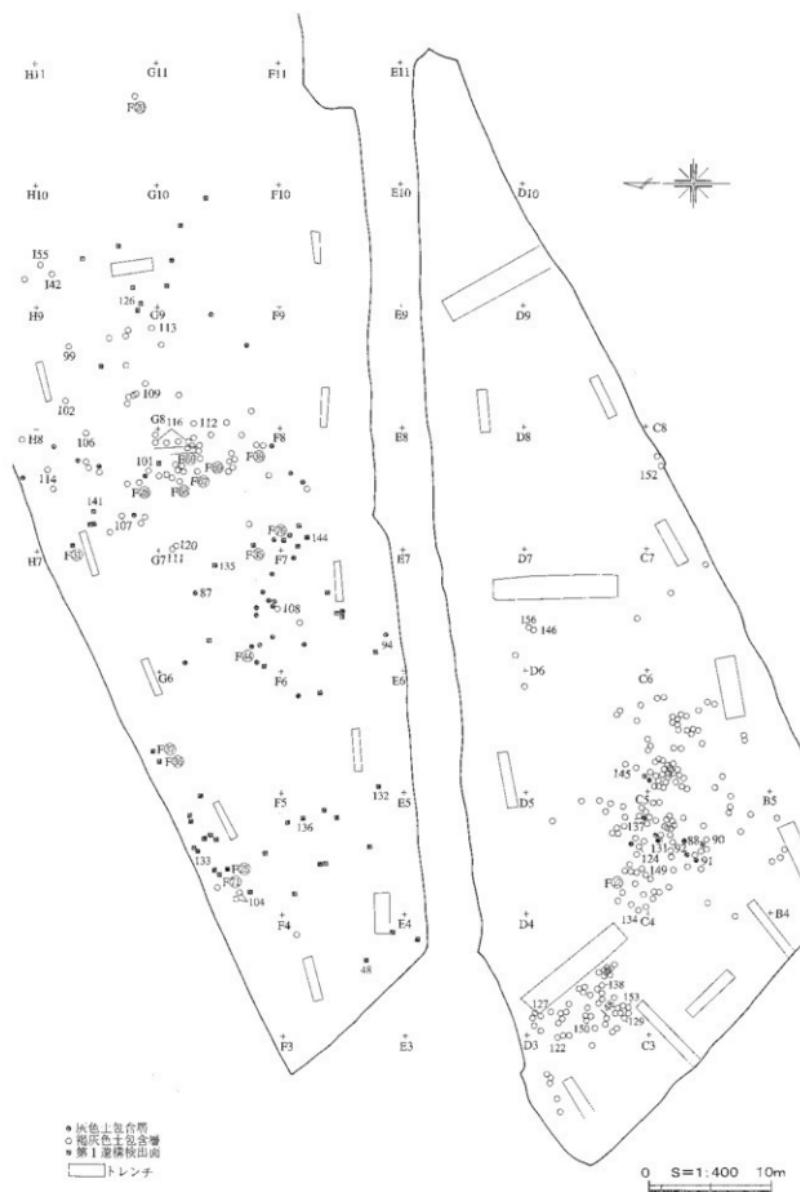


Fig.214 包含層遺物出土状況図

Tab.182 包含層出土遺物観察表（2）

No.	Fig. PL.	タグ#	出土位置	器種	法度(cm)	特徴	船上	色調	備考
96	Fig.215 PL.66	F 4	褐色粘質土 上包合層	須恵器 高台付杯	器高 △ 1.6 最高台径 8.0	外底部は同軸へく切りか。断面四角形のやや曲い縫合を立ち上がりからや内側に取り付けた。	細粒	灰色7.5Y6/1	約1/5残存
99	Fig.215 PL.66	H 9	褐色粘質土 上包合層	須恵器 高台付杯	口徑 △ 1.8 器高 △ 1.8	口縁部はやや外反して丸くおわる。	1 mm以下の 砂粒を含む。	灰色N5/0	約1/10残存
100	Fig.215 PL.66	F 6	褐色粘質土 上包合層	須恵器 高台付杯	口徑 △ 1.8 器高 △ 1.8	口縁部内湾する。	細粒混じる。	に赤い黄褐色10YR7/4	約1/5残存
101	Fig.215 PL.66	G 8	褐色粘質土 上包合層	須恵器 高台付杯	口徑 △ 1.8 器高 △ 1.8	外底部に圓錐形の窪みあり切痕。	砂粒なし。	に赤い黄褐色10YR7/3	底部先存
102	Fig.215 PL.66	H 9	褐色粘質土 上包合層	須恵器 高台付杯	口徑 △ 1.6 器高 △ 1.6	断面二重形状の高台を貼り付ける。内底裏に赤茶色あり。	細粒	明赤褐色5YR5/6	約1/5残存
103	Fig.215 PL.66	G 9	褐色粘質土 上包合層	土師質土器 皿	口径 △ 9.0 器高 △ 1.4 底径 △ 6.2	口縁部はやや大きめ開く。外底部に断続的赤茶色あり。	1 mm以下の 砂粒を混じる。	灰褐色2.5Y6/2	約1/4残存
104	Fig.215 PL.66	G 5	褐色粘質土 上包合層	土師質土器 皿	口径 △ 8.0 器高 △ 1.3 底径 △ 6.0	口縁部はやや開く。底部外面に断続的赤茶色あり。	青	に赤い黄褐色10YR6/4	約1/3残存
105	Fig.215 PL.66	H 8	褐色粘質土 上包合層	土師質土器 皿	口径 △ 7.6 器高 △ 1.6 底径 △ 6.0	口径と底径の差は小さい。底部外面に断続的赤茶色。	青	褐色5YR6/8	約1/3残存
106	Fig.215 PL.66	2・3区	褐色粘質土 上包合層	土師質土器 皿	口径 △ 8.0 器高 △ 1.3 底径 △ 6.4	口縁と底径の差は大きい。底部外面に断続的赤茶色あり後板付。中央に浅底前突孔ある。	青	褐色7.5YR7/6	約1/2残存
107	Fig.215 PL.66	G 8	褐色粘質土 上包合層	須恵器 頭	口径 △ 8.44 器高 △ 7.0	口縁部は強く外反する。口縁以下は外表面縱方向、内面横方向のハケ日。外底部から口縁部に炭化物付着。	細粒混じる。	に赤い黄褐色10YR6/4	約1/12残存
108	Fig.215 PL.66	G 7	褐色粘質土 上包合層	土師質土器 皿	口径 △ 5.0 器高 △ 5.3	口縁部は二の字状に屈曲する。口縁部以下外表面縱方向、内面横方向のハケ日。内面裏面に炭化物付着。	1 mm以下の 砂粒を多く含む。	灰褐色10YR5/2	約1/6残存 胎土分析試料 押手5・在地深
109	Fig.215 PL.66	2・3区	褐色粘質土 上包合層	土師質土器 皿	口径 △ 24.8 器高 △ 5.5	口縁部は二の字状に屈曲する。内面口縁部下半且下輪方向のハケ日。外底部から口縁部に炭化物付着。	1 mm以下の 砂粒を多く含む。	褐色10YR4/4	約1/8残存
110	Fig.215 PL.66	H 6	褐色粘質土 上包合層	土師質土器 皿	口径 △ 25.2 器高 △ 5.2	口縁部は強く外反する。口縁部から全体的に外表面縱方向、内面横方向のハケ日。内外面ともに薄く炭化物付着。	1 mm以下の 砂粒が混じる。	黒褐色10YR3/2	1/12以下残存
111	Fig.215 PL.66	G 8	褐色粘質土 上包合層	土師質土器 皿	口径 △ 27.0 器高 △ 5.0	口縁部は内側傾する。内面横方向、外表面縱方向に炭化物付着。	砂粒なし。	に赤い黄褐色10YR7/4	胎土分析試料 押手8・在地深
112	Fig.215 PL.66	G 8	褐色粘質土 中世須恵器 飾物	須恵器 高台付杯	口径 △ 9.0	外表面格子状のタキ、内面横め方向のカキメ。	内に細砂が 少量化する。(内) 灰色N5/0	褐色10YR6/1 少量化する。(内) 灰色N5/0	胎土分析試料 押手3・龜山産
113	Fig.215 PL.66	H 9	褐色粘質土 上包合層	須恵器 頭	口径 △ 8.4	内外面ともに横方向ナギ。	1 mm脣後の 内に細砂が 少量化する。(内) 褐色10YR5/2	常滑焼10C段半 ~13C前半	
114	Fig.215 PL.66	H 8	褐色粘質土 上包合層	中世須恵器 頭	器高 △ 7.5	内外面ともに横方向ナギ。	1 mmの砂粒少 量と白砂混入。	灰色5Y6/1	-
115	Fig.215 PL.66	H 8	褐色粘質土 上包合層	土器	最大底径 7.2 最大高さ 3.1	中央部が膨らむ円筒形体。ナギによる横方向ナギ。	内に細砂が 少量化する。	に赤い黄褐色10YR7/4	胎土分析試料 押手8・在地深
116	Fig.215 PL.66	G 8	褐色粘質土 上包合層	土器	器高 △ 1.9 底径 △ 7.0	わずかに舟底を削り出す。外底部は底底削され。	砂粒なし。	灰白色N7/0	約1/2残存 白磁V瓶
117	Fig.215 PL.77	2・3区	褐色粘質土 上包合層	白磁 碗	口径 △ 14.6 器高 △ 2.3	口縁部は外反する。	砂粒なし。	灰白色5Y7/1	約1/2残存 白磁V瓶
118	Fig.215 PL.77	2・3区	褐色粘質土 上包合層	白磁 碗	口径 △ 15.0 器高 △ 2.8	口縁部は外反する。	砂粒なし。	灰白色5Y7/2	1/12以下残存 白磁V瓶
119	Fig.215 PL.77	2・3区	褐色粘質土 上包合層	白磁 碗	口径 △ 14.0 器高 △ 1.9	口縁部はそのままおわる。外面部縦 方向のハケ日状の調査後施塗。	砂粒なし。	灰白色5Y6/1	1/12以下残存 白磁V瓶
120	Fig.215 PL.77	G 8	褐色粘質土 上包合層	青磁 碗	器高 △ 3.5	見込みに縞模様がある。内面に鉄花あり。	砂粒なし。	灰白色7.5Y5/1	約1/5残存 底部欠損 腹蓋剥落文鏡

褐色粘質土包含層 (Fig.214・215 Tab.182 PL.66・77)

灰色土と遺構検出面の地山となる灰褐色土層の間にあたる包含層である。ただし構造検出面直上のものとは区別しているが、層位的には同一である。

須恵器は高台付杯98、甕口縁部99である。

土師質土器は、杯100・101、高台付杯102、皿は103~106である。102の高台は断面三角形状、103の口径は比較的大きく、須恵器とともに平安時代のものであろう。皿104~106はいずれも器高が低く、口径も8 cm前後で一定している。皿107~110はいずれも土師質焼成で、受け口になるものはなく、いずれもくの字状に屈曲している。109の器壁はやや厚いが、他は薄手である。いずれも外表面、内面横方向のハケ目を施す。111は土師質の羽釜である。口縁部～甕上面には煤は付着していない。

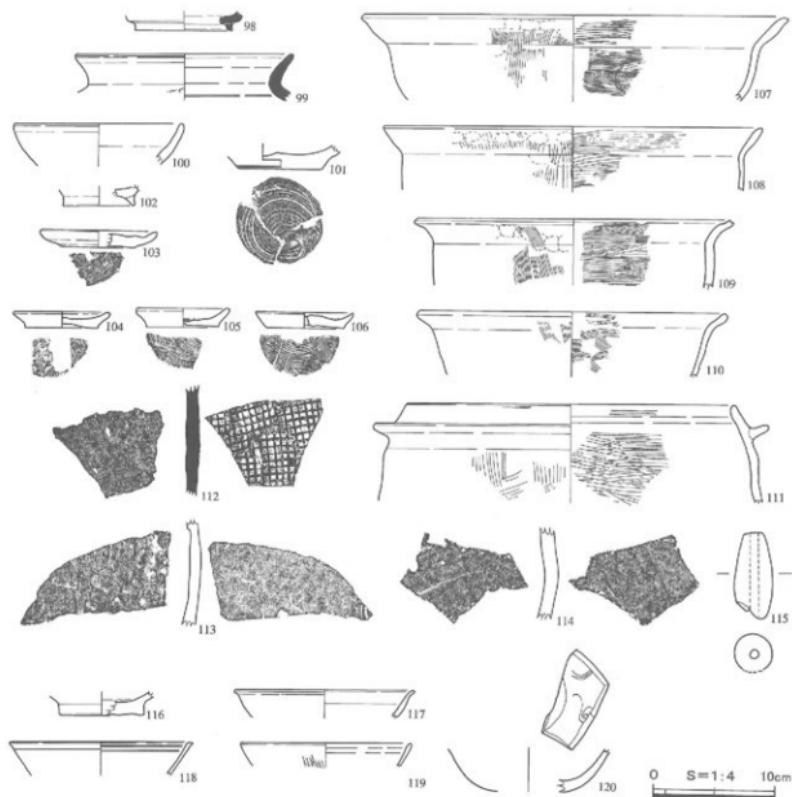


Fig.215 包含層出土遺物実測図(2)

112は外面に格子状タタキをもつ勝間田・亀山系の中世須恵器で、113・114は中世の陶器片である。いずれも常滑焼とみられ、遺構内のSK11からも破片ではあるが出土している。時期的には12世紀後半～13世紀前半と考えられ、これは他の遺物年代観、とくに貿易陶磁器と比較しても矛盾しない。115はやや大きい土錠である。

暦年代を推定させるものとしては貿易陶磁器があるが、116は白磁IV類碗底部、117・118は口縁部が外側に折れるため白磁V類碗、119は外面部にハケ目状の痕があり、やはり白磁V類碗である。120は内面に劃花文をもつ龍泉窯碗の底部付近である。白磁よりも青磁の時期が下るが、概ね12世紀から13世紀の範疇に収まる。

第1遺構検出面 (Fig.214・216~218・220 Tab.83~186 PL.67・76・77)

鎌倉時代の遺構検出面直上で出土した土器である。上面にある灰褐色の層を除去すると鉄分を含んだ遺構面があり、この直上で出土した。

須恵器は、杯身121、杯蓋122、高台付杯123・125~128、杯口縁部124、高台付皿129、口縁部130・131、体部片132、鉢133である。時期幅は広く、122がT K217併行で7世紀前半頃、122・123が奈良時代後半、126~130が奈良時代末から平安時代初頭、133が平安時代後期以降の所産であろう。

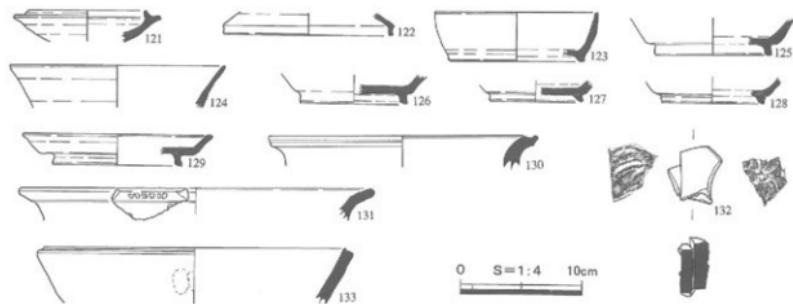


Fig.216 包含層出土遺物実測図 (3)

Tab.183 包含層出土遺物観察表 (3)

No.	Fig. PL.	テラコッタ 名	出土位置	器種	法華 (cm)	特徴	胎土	色調	参考
121	Fig.216 PL.67	2・3区	第1遺構 檢出面上	須恵器 杯・串	口径 □ 9.6 器高 △ 2.5	内外面ともに回転ナデ。	白い繊維 を含む。	灰褐色Y6/1	約1/5残存
122	Fig.216 PL.67	D 4	第1遺構 檢出面上	須恵器 杯等	口径 □ 13.6 器高 △ 1.5	内外面ともに回転ナデ。	砂粒なし。	灰褐色N4/0	約1/10残存
123	Fig.216 PL.67	2・3区	第1遺構 後出土面上	須恵器 高台付杯	口径 □ 13.4 器高 △ 4.0 高台径 ■ 10.9	口縁部はやや内湾す。断面四角形の 高台を立ち上がり付けている。	白い繊維が 多く混じる。	灰褐色N4/0	約1/6残存
124	Fig.216 PL.67	C 6	第1遺構 檢出面上	須恵器 杯口縁部	口径 □ 19.6 器高 △ 3.4	口縁部は僅やかに外反する。	1cm以下の白 い繊維少混。	灰褐色N5/0	約1/8残存
125	Fig.216 PL.67	F 7	第1遺構 檢出面上	須恵器 高台付杯	口径 □ 3.0 器高 △ 3.0 高台径 ■ 9.8	外面直部は回転へり切らし、断面四角 形のやや高い高台を立ち上がりからや 内側に貼り付けた。	砂粒なし。	灰白色N7/0	約1/6残存
126	Fig.216 PL.67	2・3区	第1遺構 檢出面上	須恵器 高台付杯	口径 □ 2.3 器高 △ 2.3 高台径 ■ 8.8	外面底部は回転へり切らし、断面四角 形の高台を立ち上がりからや内側に 貼り付けた。	砂粒なし。	灰褐色N6/0	約1/4残存
127	Fig.216 PL.67	D 2	第1遺構 後出土面上	須恵器 高台付杯 底部	口径 □ 1.7 器高 △ 1.7 高台径 ■ 7.6	外面底部は回転へり切らし、断面四角 形の高台を立ち上がりからや内側に 貼り付けた。	白い繊維少 混じる。	灰褐色N6/0	約1/2残存
128	Fig.216 PL.67	2・3区	第1遺構 後出土面上	須恵器 高台付杯	口径 □ 2.1 器高 △ 2.1 高台径 ■ 8.4	外面底部は回転へり切らし、断面四角 形の高台を立ち上がりからや内側に 貼り付けた。	白い繊維少 混じる。	灰褐色N5/0	約1/5残存
129	Fig.216 PL.67	D 2	第1遺構 後出土面上	須恵器 高台付皿	口径 □ 15.6 器高 △ 2.5 高台径 ■ 12.0	外面底部は上方につまみ上げ、外側に 切欠がくぼむ面をつく。	0.5cm以下の 白い繊維混 じる。	灰褐色N6/0	高台部約1/5残存 口縁部約1/12残存
130	Fig.216 PL.67	H 10	第1遺構 檢出面上	須恵器 杯等	口径 □ 21.7 器高 △ 2.5	口縁部を上方につまみ上げ、外側に 切欠がくぼむ面をつく。	白い繊維少 混じる。	灰褐色Y5/1	1/12以下残存
131	Fig.216 PL.67	1区	第1遺構 檢出面上	須恵器 杯等	口径 □ 24.6 器高 △ 2.6	口縁部は僅やかに外反する。	砂粒なし。	灰褐色N6/0	約1/10残存
132	Fig.216 PL.67	F 6	第1遺構 檢出面上	須恵器 杯等	口径 □ 4.3	外面平行タキ。内面青海波状の凹 部有り。	白い繊維少 混じる。	灰褐色N5/0	-
133	Fig.216 PL.67	G 5	第1遺構 檢出面上	須恵器 鉢口縁部	口径 □ 4.3	口縁部は中央部がくぼむ。内外間に も横方向のナデ。	白い繊維重 じる。	灰褐色N4/0	約1/12残存

土師質土器は、杯134～136、高台付杯137、138、皿139～145である。145は手づくね成形であるが、他は回転台成形である。また144は円盤状に加工しており、中央に貫通しないものの穿孔を試みている。鉢は146・147、甕は148～150、鍋は151である。145の手づくねの皿は、SK5でも糸切りの皿と共に伴せており、概ね鎌倉時代である。146・147の年代がはっきりとしないが、148・149は口縁部が直線状に外反もしくは外傾することから平安時代の甕とみられる。151は受け口の鉢であることから、やはり鎌倉時代と考えられる。

瓦質土器は152の擂鉢、陶器は153の捏ね鉢または擂鉢で、いずれも鎌倉時代の所産である。

貿易陶磁器はいずれも白磁の碗である。154～156は口縁端部が外側に屈曲しており、白磁V類碗であろう。平安時代末から鎌倉時代初頭の範囲内に収まる。

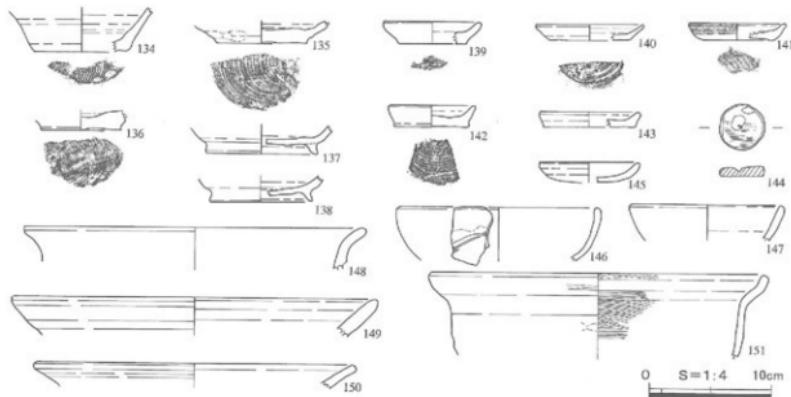


Fig.217 包含層出土遺物実測図 (4)

Tab.184 包含層出土遺物観察表 (4)

No.	Fig. PL.	グリフ名	出土状況	器種	法量 (cm)	特徴	粘土	色調	備考
134	Fig.217 PL.67	I区	碎・遺構 焼成面上	土師質土器 底付	器高 △ 3.6 底径 9.76	外側底部に回転系切り痕あり。	白い細砂葉 じる。	に赤い黄褐色10YR7/4	約1/5残存
135	Fig.217 PL.67	G 7	碎・遺構 焼成面上	土師質土器 底付	器高 △ 1.9 底径 7.4	底部内面に横筋のナデ。外側に回転系 切り痕あり。	青	淡黄褐色7.5YR8/6	約1/2残存
136	Fig.217 PL.67	F 5	第1遺構 焼成面上	土師質土器 底付	器高 △ 1.6 底径 6.6	外側底部に回転系切り痕あり。	青	外) 黄褐色10TR4/1 内) 明赤褐色5YR5/6	約1/2残存
137	Fig.217 PL.67	D 5	碎・遺構 焼成面上	土師質土器 高台付	器高 △ 2.1 高台径 8.4	外側底部は底面が切りか。断面ハの字 形の高台を貼り付ける。	細緻風じる。	に赤い黄褐色10YR7/4	約1/6残存
138	Fig.217 PL.67	D 4	第1遺構 焼成面上	土師質土器 高台付	器高 △ 2.4 高台径 9.0	外側底部は底面が「高台」を貼り付ける。 断面ハの字形の高台を貼り付ける。	砂粒なし。	に赤い黄褐色10YR7/3	約1/6残存
139	Fig.217 PL.67	F 8	第1遺構 焼成面上	土師質土器 底付	口径 9.0 器高 △ 1.8 底径 9.8	口縁部は内凹する。外側底部に回転系 切り痕。	青	に赤い黄褐色5YR7/4	約1/5残存
140	Fig.217 PL.67	F 8	第1遺構 焼成面上	土師質土器 底付	口径 9.0 器高 △ 1.3 底径 9.8	口縁部がやや大きくなっている。外側 底部には回転系切り痕。	白い細砂が 少し混じる。	橙色SYR7/6	約1/5残存
141	Fig.217 PL.67	H 8	第1遺構 焼成面上	土師質土器 底付	口径 8.0 器高 △ 1.4 底径 8.5	口縁部は内凹する。外側底部に回転系 切り痕。	2mm大 きの砂粒有り。	橙色7.5YR7/6	約1/5残存
142	Fig.217 PL.67	H 10	第1遺構 焼成面上	土師質土器 底付	口径 9.8 器高 △ 1.8 底径 9.8	口縁と底径の差が大きい。外側底部は 回転系切り痕あり。	白い細砂が 少し混じる。	外) 黄褐色7.5YR7/6 内) 淡黄褐色5YR7/6	約1/6残存
143	Fig.217 PL.67	G 6	第1遺構 焼成面上	土師質土器 底付	口径 8.2 器高 △ 1.2 底径 7.6	口縁と底径の差は小さい。外側底部に 回転系切り痕。	砂粒なし。	に赤い黄褐色10YR7/4	約1/6残存
144	Fig.217 PL.67	F 8	第1遺構 焼成面上	土師質土器 底付	口径 8.0 器高 △ 1.6 底径 3.6	口縁の底部を丸く打ち欠く。中央からや すく離れた位置に穿孔造成的痕あり。	0.5mm以下の 白い砂粒混 じる。	に赤い黄褐色10YR7/4	完存
145	Fig.217 PL.67	I区	第1遺構 焼成面上	土師質土器 底付	口径 8.0 器高 △ 1.6 底径 3.6	外側底部は深く、内側は浅く、手づ くね。口縁部は段差有り。	1mm以下の 白い砂粒混 じる。	橙色7.5YR7/6	約1/4残存
146	Fig.217 PL.67	D 7	第1遺構 焼成面上	土師質土器 底付	口径 10.0 器高 △ 4.4 底径 12.4	口縁部は内凹する。内外面ともに横筋 のナデ。口縁部は底付有り。	0.5mm以下の 白い砂粒混 じる。	に赤い黄褐色10YR7/4	約1/12残存
147	Fig.217 PL.67	F 8	第1遺構 焼成面上	土師質土器 底付	口径 9.0 器高 △ 4.4 底径 11.0	口縁部は内凹する。内外面ともに横筋 のナデ。口縁部は底付有り。	青	橙色7.5YR6/6	約1/6残存
148	Fig.217 PL.67	D 4	第1遺構 焼成面上	土師質土器 底付	口径 9.28 器高 △ 3.3 底径 11.0	口縁部は大きめで外反する。内外面とも に横筋のナデ。	2~3mmの白 い砂粒混じる。	褐色30YR4/4	1/12以下残存
149	Fig.217 PL.67	D 5	第1遺構 焼成面上	土師質土器 底付	口径 9.0 器高 △ 3.0 底径 11.0	口縁部は直線状で外端する。内外面と ともに横筋のナデ。	2~3mmの砂 粒少混じる。	灰黃色2.5Y5/2	約1/10残存
150	Fig.217 PL.67	D 5	第1遺構 焼成面上	土師質土器 底付	口径 9.26 器高 △ 1.3 底径 11.0	口縁部は直線状で外端する。内外面と ともに横筋のナデ。口縁部外面に炭化 物有り。	細緻風じる。	に赤い黄褐色10YR6/4	約1/12残存
151	Fig.217 PL.67	F 7	第1遺構 焼成面上	土師質土器 底付	口径 8.7 器高 △ 2.8 底径 11.0	口縁部は受け口状になる。内面底部横 筋のハケ目。	1mm以下の 砂粒を含む。	外) 黑褐色2.5Y3/1 内) に赤い黄褐色10YR7/4	約1/12残存

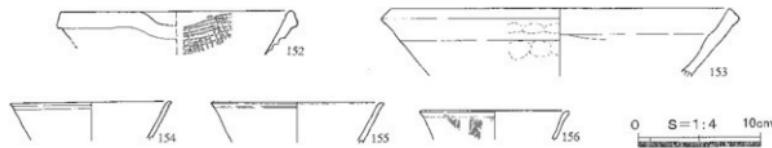


Fig.218 包含層出土遺物実測図 (5)

Tab.185 包含層出土遺物観察表 (5)

No.	Fig. PL	アソシヤ 出土地点	器種	法長 (cm)	特徴	船上	色調	備考
152	Fig.218 PL.67	C 8 第1遺構 横出土上	丸貫十筋 片口縦鋸 口絆部	口径 19.0 口縦高 △ 3.5	口縦部は玉縞状。内面は口縦部まで 模様斜め方向の縫合あり。	砂粒なし。 に赤い黄褐色10YR7/2		1/12以下残存
153	Fig.218 PL.67	D 4 第1遺構 横出土上	陶瓶 片口縦鋸 口絆部	口径 27.8 口縦高 △ 5.5	口縦部は面をもつ。外外面ともにナ チュラル。	砂粒多量 に赤い黄褐色10YR5/4		約1/12残存
154	Fig.218 PL.77	D 4 第1遺構 横出土上	白磁 片口縦鋸 口絆部	口径 13.2 口縦高 △ 3.0	口縦部が外反して内側に面をもつ。	青	灰白色5Y7/2	舟1/12残存 舟白V類似
155	Fig.218, PL.77	D 4 第1遺構 横出土上	白磁 片口縦鋸 口絆部	口径 13.8 口縦高 △ 3.3	口縦部が外反して内側に面をもつ。	青	灰白色7.5Y7/1	舟1/12以下残存 舟白V類似 約1/8残存
156	Fig.218 PL.77	D 7 第1遺構 横出土上	白磁 片口縦鋸 口絆部	口径 12.2 口縦高 △ 2.3	口縦部が外反する。外縁端方向のハ ケ目状の質感あり。	青	灰白色N7/0	舟白V類似

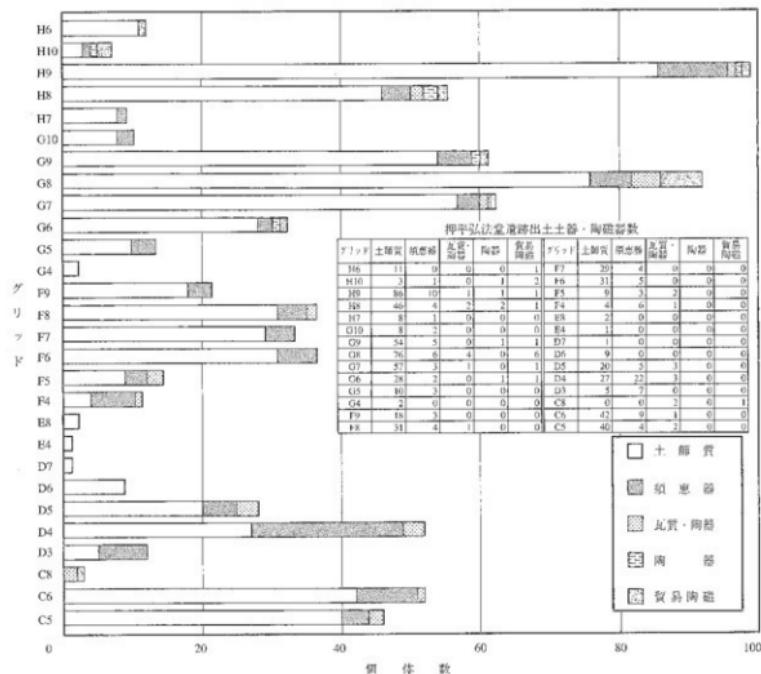


Fig.219 押平弘法堂遺跡出土土器・陶磁器分布図 (包含層)

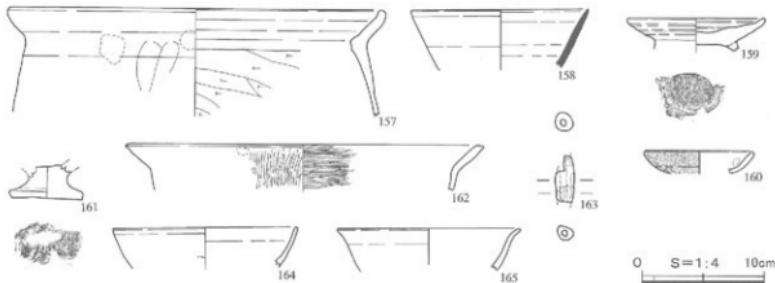


Fig.220 遺構外出土遺物実測図

Tab.186 遺構外出土遺物観察表



1区では一部、黒色土中から遺物が出土する。土師質土器の壺157は平安時代を遡ることも考えられる。茶畠六反田跡でも黒色土から遺物が出土しているが、いずれも縄文時代から弥生時代の土器である。また名和町の大塚塙跡では、黒色土の中から平安時代の遺物が出土しており、黒色土の包含する遺物の年代は一概に弥生時代とは断定できない状況である。

これ以外に出土した遺構外の土器は、須恵器は杯158、土師質土器は高台付の皿159、手づくねの皿160、柱状高台の高台部161、鏡口縁部162、土製品は土鍤163である。貿易陶磁器はいずれも白磁の碗で、164は白磁II類碗、165は白磁V類碗である。159の高台付の皿は、類例が米子市の錦町第1遺跡(1)から出土している。また164は口縁部がわずかに厚く、165は口縁端部が外側に屈曲する。須恵器の杯は平安時代、それ以外はいずれも平安時代末～鎌倉時代の範疇に収まるものと考えられる。

注

- (1) 第3章3(6)注(4)文献、土器溜まりから出土した遺物に類似するものがある。ただしここから出土した遺物はいずれも底面に回転ヘラ切り痕跡を残す。其伴する遺物は土師質土器の杯と皿がある。口縁部の立ち上がりは短く、本遺跡から出土した土師質土器の皿に類似する。ただし底面の手法が異なること、錦町出土資料には貿易陶磁器などの時期の指標となる遺物がないことから、本遺跡より若干遡る可能性がある。

3 第2・第3遺構検出面の調査

黒色土層上面を第2遺構検出面、黒色土除去後に検出された遺構面を第3遺構検出面とする。茶畠六反田遺跡1区においても同様に遺構が検出された。押平弘法堂遺跡では、1区の一部で検出している。

(1) 土坑

SK27 (Fig.222 Tab.190 PL.56)

2区第3遺構検出面上からの検出である。E・F5グリッドに位置する。平面形は不整な梢円形状。断面は袋状で底面の際は溝が周回する。土層はほぼ水平堆積で、いずれも黒褐色系の土が堆積していた。中央やや東と西から浮いた状態で石が出土しているものの、流れ込みと判断できる。掘り下げ中に上器片が出土しているが、細片のため



Fig.221 1区第2遺構面遺構全体図

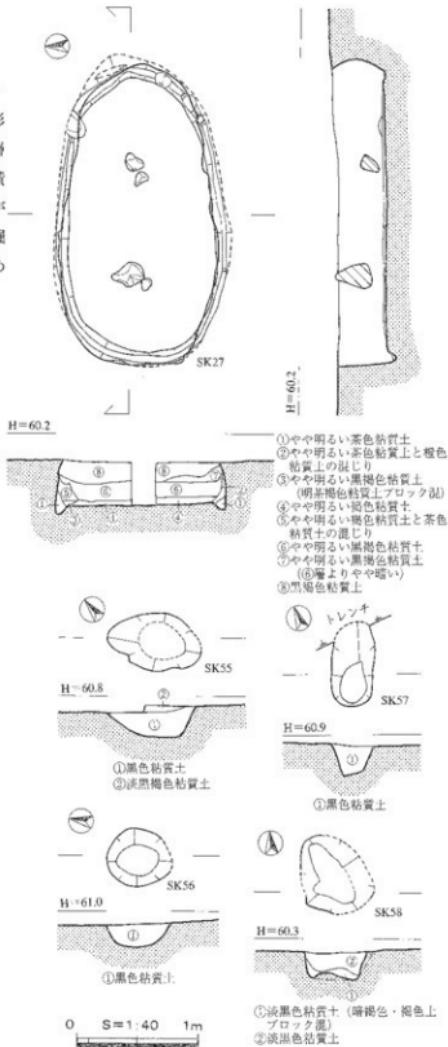


Fig.222 SK27・55・56・57・58遺構図

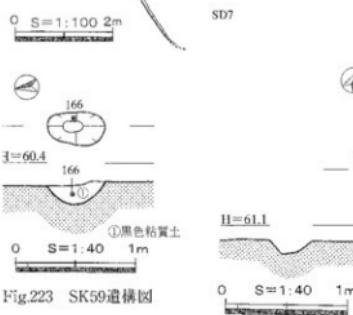
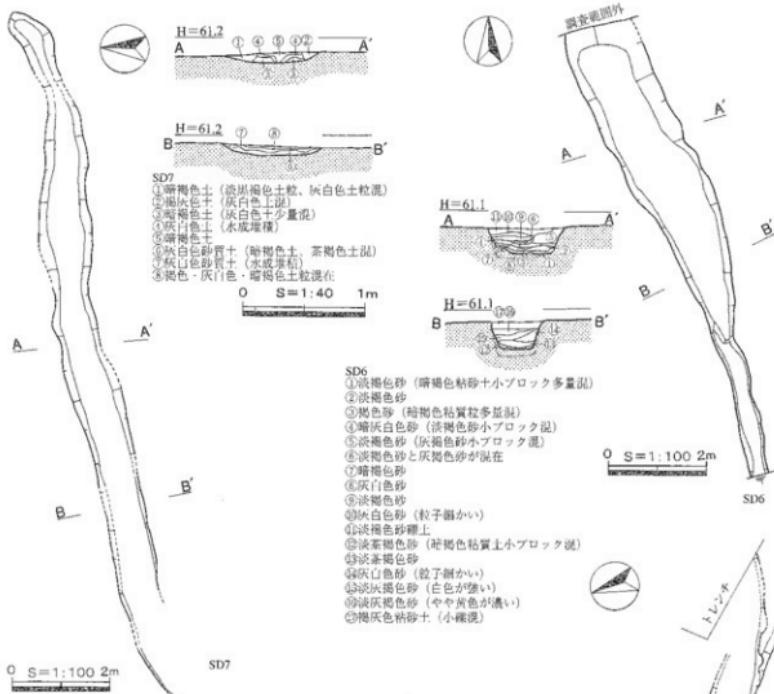


Fig.223 SK59遺構図

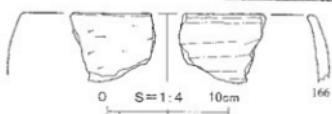


Fig.224 SK59出土遺物実測図

Fig.225 SD6・7・8・9遺構図

Tab.187 SK59出土遺物観察表

No.	Fig PL	遺構名	出土位置	器種	法蓋(cm)	特徴	始上	色調	備考
166	Fig.224 PL76	SK59	底面上	楕円土器 深鉢	L1径 器高△57	口縁部はやや内凹しながら直角方向に立ち上がる。瓶底。	1~2mm程度の白い砂粒が多い。	灰黄褐色10YR6/2	約1/12残存



Fig.226 第2造構面ピット群全体図 (1)

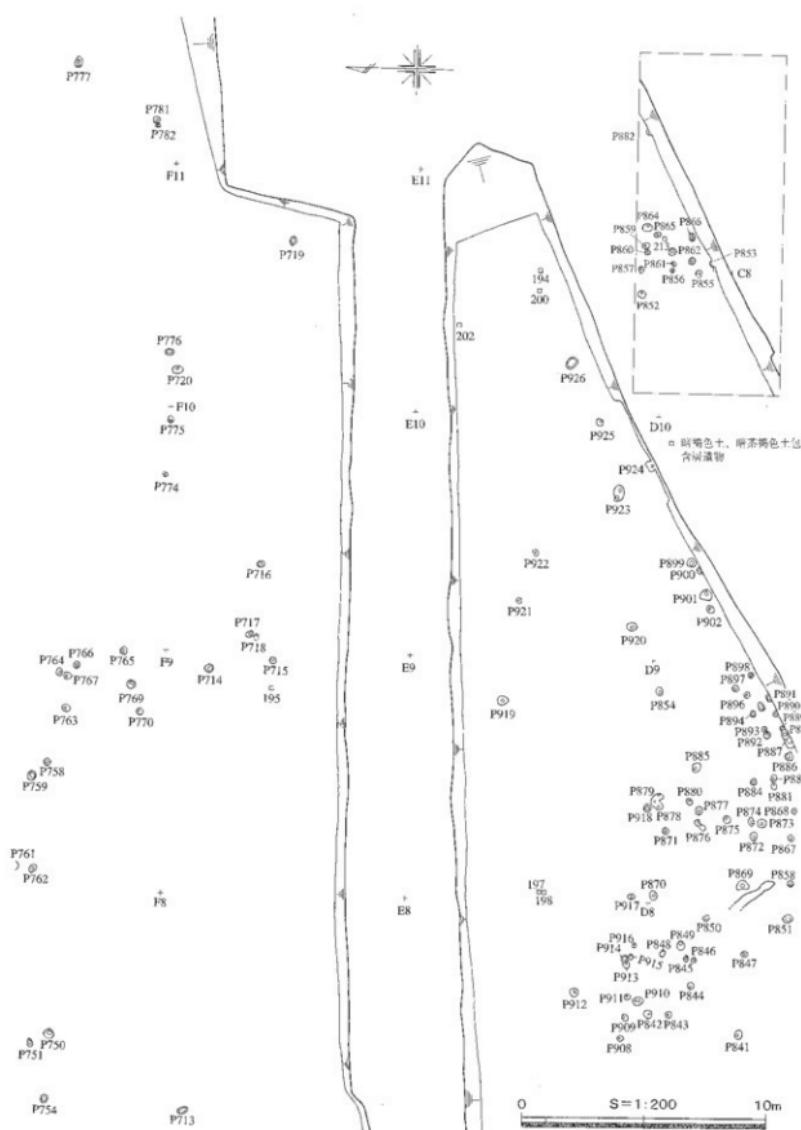


Fig.227 第2構造面ピット群全体図 (2)



Fig.223 第2遺構面ピット群全体図(3)



Fig.229 第2構造面ピット群全体図 (4)

Tab.188 第2・3種構面ピット群一覧表(1)

新番号	旧番号	グリッド	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	備考	新番号	旧番号	グリッド	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	備考
689	605	F3	32	24	19.8		750	672	G8	38	※36	34.2	
690	606	F4	28	26	20.9		751	673	G8	32	24	24.1	
691	781	F4	40	32	27.1		752	674	G8	42	36	15.4	
692	757	F4	36	32	35.9		753	675	G8	30	26	13.5	
693	603	F4	54	52	21.6		754	671	G8	30	24	14.6	
694	602	F4	72	34	33.6		755	670	G8	28	26	27.4	
695	753	F4	※34	28	24.3		756	693	G8	30	26	18.3	
696	601	F4	24	22	36.0		757	716	G9	50	32	33.1	
697	752	F4	26	24	13.6		758	718	G9	24	22	21.5	
698	761	F5	30	24	25.0		759	696	G9	38	32	32.1	
699	780	F5	34	34	25.3		760	695	G9	28	※26	22.2	
700	612	F5	42	32	24.8		761	702	G9	60	32	35.0	
701	209	F5	54	38	33.2		762	694	G9	32	26	13.9	
702	755	F5	40	34	31.0		763	719	G9	30	30	26.2	
703	608	F5	60	38	24.4		764	722	G9	30	22	27.5	
704	759	F6	32	28	32.3		765	721	G9	26	26	26.7	
705	763	F6	48	36	26.0		766	720	G9	22	22	20.5	
706	762	F6	34	32	20.6		767	698	G9	30	28	25.2	
707	760	F6	42	40	49.9		768	709	G9	28	24	25.5	
708	773	F7	28	26	28.9		769	697	G9	38	34	21.8	
709	776	F7	24	22	40.5		770	730	G9	30	26	28.6	
710	774	F7	28	26	30.9		771	701	G9	42	24	28.2	
711	625	F7	36	34	36.1		772	713	G10	38	34	31.4	
712	777	F7	28	26	26.4		773	712	G10	34	30	20.6	
713	627	F8	38	26	14.9		774	584	G10	※16	16	11.4	
714	631	F9	34	30	33.8		775	585	G10	※26	18	28.8	
715	632	F9	24	24	30.4		776	587	G11	※32	26	21.2	
716	647	F10	28	26	13.3		777	748	G12	40	28	7.0	
717	635	F10	28	26	19.0		778	746	G12	34	30	14.1	
718	589	F10	18	18	39.2		779	739	G12	28	26	10.6	
719	621	F11	32	30	23.4		780	744	G12	56	52	15.4	
720	586	F11	40	32	30.1		781	749	G12	26	26	20.9	
721	610	G4	32	26	135.6		782	751	G12	16	14	6.5	
722	754	G4	32	28	15.1		783	770	H6	32	28	26.8	
723	613	G5	38	32	23.4		784	771	H6	22	20	20.2	
724	604	G5	32	30	27.4		785	607	H6	36	34	20.8	
725	611	G5	42	38	14.6		786	778	H7	30	28	28.5	
726	758	G5	32	30	46.0		787	779	H7	30	28	31.3	
727	614	G6	60	40	37.1		788	622	H7	※64	※48	32.6	
728	617	G6	28	28	36.9		789	685	H8	32	28	20.5	
729	615	G6	36	30	31.1		790	687	H8	26	24	29.0	
730	616	G6	26	26	20.5		791	792	H8	24	24	30.0	
731	766	G6	28	24	23.3		792	686	H8	36	30	28.1	
732	765	G6	22	22	21.8		793	756	H8	40	32	27.0	
733	764	G6	28	26	27.1		794	684	H8	38	32	15.4	
734	620	G7	28	26	23.4		795	683	H8	26	20	25.2	
735	618	G7	26	24	24.7		796	682	H8	32	30	28.0	
736	619	G7	30	28	18.5		797	677	H8	34	26	18.5	
737	668	G7	42	36	29.2		798	692	H8	26	24	26.4	
738	655	G7	30	22	11.8		799	691	H8	30	26	18.7	
739	630	G7	26	26	25.8		800	690	H8	30	26	20.6	
740	628	G7	38	32	31.6		801	726	H9	28	28	22.9	
741	654	G7	32	26	32.7		802	725	H9	40	34	41.0	
742	629	G7	36	26	21.3		803	724	H9	36	26	29.4	
743	679	G7	30	※28	18.5		804	723	H9	22	22	20.0	
744	657	G7	32	22	21.4		805	727	H9	36	36	31.4	
745	767	G7	26	24	21.7		806	729	H9	28	26	22.0	
746	624	G7	64	46	20.7		807	728	H9	30	30	16.4	
747	623	G7	26	26	16.5		808	705	H9	28	28	31.6	
748	689	G8	26	20	20.6		809	706	H9	26	24	12.0	
749	681	G8	42	30	25.6		810	703	H9	38	28	18.4	

Tab.189 第2・3造構面ピット群一覧表(2)

新番号	旧番号	グリッド	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	備考	新番号	旧番号	グリッド	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	備考
811	707	H9	48	32	21.1		869	19	D9	50	40	40.9	
812	708	H9	38	36	10.3		870	30	D9	38	32	53.8	
813	710	H10	48	40	32.9		871	15a	D9	30	26	25.9	
814	787	H11	28	22	9.5		872	16a	D9	34	28	45.3	
815	581	H11	26	26	54.5		873	22	D9	38	32	33.8	
816	582	H11	28	22	41.8		874	23	D9	28	22	33.6	
817	580	H11	20	18	30.6		875	24	D9	32	26	34.0	
818	578	H11	22	20	21.0		876	29	D9	54	18	27.9	
819	579	H11	22	22	22.2		877	14a	D9	30	28	25.2	
820	590	H11	18	14	30.2		878	26	D9	26	26	27.5	
821	591	H11	56	48	36.5		879	27	D9	18	14	9.6	
822	592	H11	32	※24	33.1		880	25	D9	24	22	28.4	
823	731	H12	26	24	16.7		881	20	D9	24	22	31.1	
824	794	H12	42	30	43.8		882	83	D9	24	20	13.0	
825	796	H12	※24	22	33.5		883	11a	D9	28	24	33.5	
826	583	I11	26	※24	36.3		884	12a	D9	26	22	16.4	
827	733	I11	28	26	25.5		885	13a	D9	38	32	23.2	
828	596	I12	24	20	11.2		886	10a	D9	38	34	41.9	
829	597	I12	32	22	17.7		887	82	D9	※46	32	17.9	
830	8	C5	※26	22	20.5		888	81	D9	38	26	25.0	
831	6	C5	34	32	13.7		889	80	D9	※26	20	13.0	
832	1	C6	24	22	16.3		890	79	D9	※30	22	17.9	
833	2	C6	36	34	37.5		891	77	D9	28	26	15.0	
834	3	C6	34	28	39.8		892	6a	D9	26	24	34.0	
835	4	C6	32	28	29.5		893	5a	D9	22	22	23.4	
836	5	C6	28	24	33.4	頑忠器片	894	4a	D9	26	20	18.4	
837	9	D5	38	36	38.7		895	78	D9	38	24	19.3	
838	10	D5	32	26	17.1		896	3a	D9	26	22	18.6	
839	12	D5	34	32	32.4		897	2a	D9	26	24	21.0	
840	11	D6	24	24	17.1		898	1a	D9	20	20	12.4	
841	56	D8	34	30	19.0	七郎賀片	899	85	D10	34	32	19.3	
842	73	D8	34	32	48.9		900	86	D10	24	※22	15.5	
843	74	D8	24	22	32.6		901	87	D10	46	44	29.0	
844	75	D8	24	24	27.3	土郎賀片	902	88	D10	28	28	16.2	
845	47	D8	26	22	34.5		903	16	E4	38	32	22.2	
846	76	D8	22	22	20.4		904	17	E4	20	20	51.1	
847	44	D8	26	20	22.9		905	18	E4	46	30	43.2	
848	48	D8	22	18	37.7		906	15	E5	42	36	40.6	
849	46	D8	34	30	35.7		907	13	E6	30	24	29.2	
850	45	D8	※24	26	21.9		908	54	E8	26	20	24.6	
851	43	D8	40	※36	11.5		909	72	E8	28	26	30.7	
852	42	D8	36	32	42.1		910	49	E8	46	32	51.3	土郎賀片
853	84	D9	36	18	17.4		911	52	E8	24	22	39.5	
854	7	D9	28	28	28.5		912	53	E8	34	32	36.9	土郎賀片
855	40	D9	※30	※28	16.6		913	71	E8	※40	32	9.2	
856	38	D9	16	16	17.6		914	71a	E8	30	26	29.1	
857	41	D9	※26	20	25.1		915	51	E8	20	20	29.7	
858	31	D9	26	24	28.4		916	50	E8	16	16	18.5	
859	32	D9	30	24	34.3		917	55	E9	26	18	29.0	
860	33	D9	26	24	16.8		918	28	E9	34	32	29.0	
861	37	D9	20	20	22.8		919	70	E9	44	34	32.6	
862	36	D9	30	28	30.4	土郎賀片	920	89	E10	40	34	35.4	
863	39	D9	26	24	30.8		921	69	E10	24	22	16.2	
864	17a	D9	40	36	29.1		922	68	E10	※24	22	20.4	
865	35	D9	24	20	24.7		923	64	E10	64	38	38.9	
866	18a	D9	28	20	17.8		924	65	E10	42	34	185.9	
867	34	D9	24	22	40.0		925	66	E10	28	24	37.5	
868	21	D9	22	20	27.1		926	67	E11	52	42	10.0	

Tab.190 土坑・土壙墓群一覧表

番号	グリッド名	平面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(cm)
S K27	E5・5	不整な楕円形	2.46	1.24	44
S K28	H1	長方形	1.24	0.60	16
S K29	H1	隅丸長方形	1.08	0.58	10
S K30	H1	長方形	2.18	0.90	24
S K31	H2	長方形	2.32	0.86	46
S K32	H2	不整な長方形	1.78	1.10	14
S K33	H2	長方形	※1.84	0.74	8
S K34	H2	長方形	2.34	0.64	16
S K35	H1	不整形	2.38	※0.86	12
S K36	H2	長方形	2.04	1.00	32
S K39	H1	不整形	△5.45	4.00	20
S K40	H1	不整形	△6.35	2.75	52
S K55	C6	小整な楕円形	0.78	0.48	26
S K56	C5	円形	0.54	0.48	22
S K57	C5	不整な楕円形	※0.72	0.36	28
S K58	E5	不整な楕円形	※0.70	0.50	22
S K59	E4	楕円形	0.48	0.28	20

Tab.191 S D 6・7・8・9一覧表

SD番号	グリッド名	主軸	長さ(m)	最大幅(m)	深さ(cm)
S D 6	D3・4	N-23°-W	9.9	1.6	35
S D 7	C4~6	N-101°-W	13.5	1.1	24
S D 8	C3・4・D3	N-56°-W	10.8	1.0	30
S D 9	D9	N-36°-W	1.7	0.4	12

擾乱により遺構は検出されなかったが、連続する溝状遺構と考えられる。幅は大きく変わることはなく、断面形も浅い皿状を呈する。S D 7 の堆積は波状で不整であり、やはり水が流れていった可能性がある。

S D 9 (Fig.225 Tab.191)

1区第3遺構検出面上から検出した。D 8・9グリッドに位置する。断面は中央に向かい深くなる浅いV字状を呈する。遺存状況は悪く、南東側にはビット状の窓みが検出された。

(3) ビット群 (Fig.226~229 Tab.188・189)

1区97基、2・3区141基のビットを確認した。遺構密度は1区、2・3区ともに構柱がある。1区では調査区の中央やや東に比較的密に存在する。2・3区では中央から西方向にまばらな状態で検出されている。ただし、弥生時代中期後半の土壙あるいは木棺墓群の確認された3区の北東端付近では、グリッド分割して掘り下げたにも関わらずビットはほとんど検出されていない。

ビットの埋土はほとんどが黒褐色土の単層で、柱痕の復元できた例はない。したがって柱が立っていたかどうかは判別しかねる。また埋土は上層の黒・黒褐色土と類似するため、黒色土中での遺構の検出はできなかった。同時期の遺構は、2区の南端に袋状の土坑S K27があり、これは貯蔵施設の可能性があるが、周辺にあるビットのいくつかが居住施設となり得るかについては、焼土や炭化物も検出されず、土器もわずかであるという条件を鑑みれば、可能性は低いといわざるを得ない。したがってこれらのビット群については遺構でない可能性も否定できないが、遺構検出面では黒褐色土の範囲が平面上に検出され、断面も比較的はっきりとした上層が確認できたため、遺構と判断した。遺物の出土したビットは少ない。1区では須恵器片、土器片が出土しているが、上面からの掘り残された遺構である可能性も否定できない。2・3区のビットからは遺物は出土していないが、遺構の埋土は弥生時代の土壙あるいは木棺墓の埋土と類似する。

(2) 溝状遺構

1区のみでの検出である。いずれも平面・断面形ともに不整である。遺物は細片も含め出土していない。

S D 6 (Fig.225 Tab.191)

1区第3遺構検出面上から検出した。北側は調査区外になり、2・3区から連続する遺構は検出されていない。北側に向かい広くなる。断面形は逆台形状で横方向の細かな堆積が繰り返され、砂も混入しており、水が流れていった可能性が高い。

S D 7・8 (Fig.225 Tab.191)

1区第2遺構検出面上から検出した。S D 7 はC 4~6、S D 8 はC 4~D 3グリッドに位置する。S D 7 は北東方向から西方向へ、S D 8 は南東方向から北西方向に向かい、両者の間には

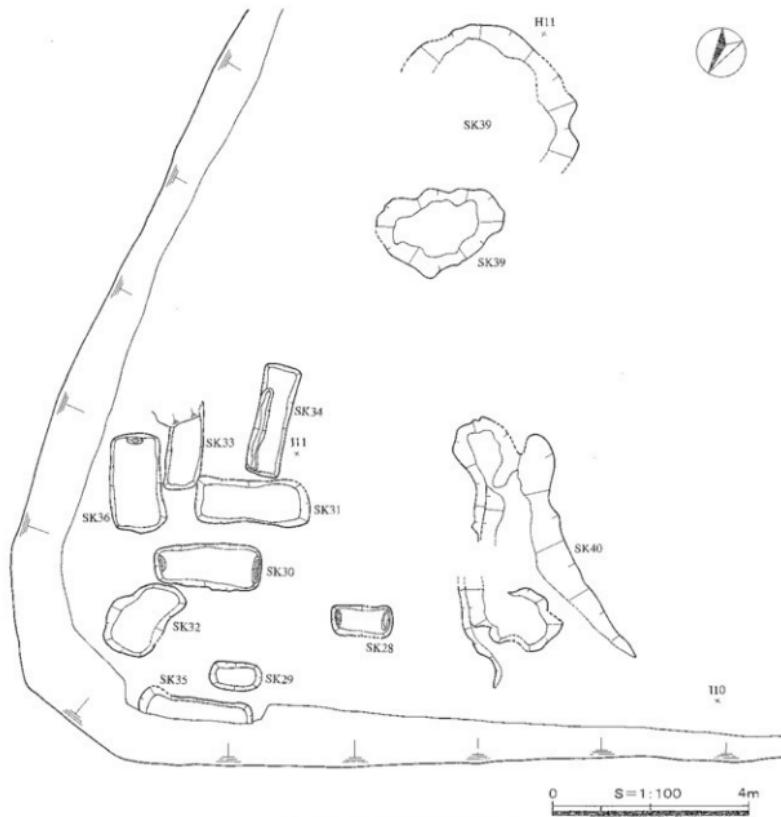


Fig.230 土塙墓群遺構分布図

(4) 土塙墓群

概要

3 区北端付近において 9 基の土塙 S K28~36、および 2 基の浅く不整形な落ち込み S K39・40 を検出した。調査区壁面の土層観察から、これらの遺構は黒色土中から掘削されたものと考えられる。

土塙墓は、底面での長さ 0.83~2.1m、幅 0.4~0.9m であり、底面に溝状の掘り込みを伴うものがあることから、その多くは木棺を使用した埋葬施設と推察される。脂肪酸分析の結果、複数の土塙で遺体の埋葬を示唆する結果を得ている。墓壇の主軸方向が揃うものもみられる。土塙墓群の南側と西側にそれぞれ S K39・40 があり、壇上中から多量の縁とともに弥生土器が出土している。S K40では、ほぼ完形に復元できる壺が隙により押し潰された状態で出土した。土器はいずれも弥生時代中期後半(IV-3 様式)である。土塙墓から遺物は出土していないが、これらの土坑との関連が想定される。

SK28 (Fig.231 PL.58)

平面形が長方形を呈する土塙である。主軸方向は、N-60°-E であり、SK29・30・31 とはほぼ平行関係にあ



Fig.231 SK28・29・30遺構図

S K31 (Fig.232 PL.58)

平面形が長方形を呈する土壇である。主軸は、N-62°-Eである。土壇底面では、長軸2.05m、短軸0.7~0.8m、検出面から底部までの深さは45cm前後を測る。底面はほぼ水平である。埋土は黒色土を呈するが、底部直上、及び隔壁付近には黒褐色土がみられ、木棺材の痕跡もしくは棺の差込み土の可能性もある。埋土の一部を採取し脂肪酸分析を行った結果、比較的多量の動物性ステロール、C20以上の脂肪酸が検出されており、埋葬を示唆するものと考えられる。遺物は出土していない。

S K32 (Fig.232 PL.58)

平面形が不整な長方形を呈する土壇である。主軸は、N-8°-Eである。底面では、長軸1.48m、短軸0.65

m。土壇底面においては、長軸1.12m、短軸はやや幅広い南西側で0.48m、北東側では0.4m、検出面からの深さは、約14cmを測る。底面はほぼ水平である。土壇底面の長軸方向両端には、土壇底面からの深さが4~5cm程度の溝状の掘り込みが認められ、木棺の小口板の痕跡と思われる。

埋土は黒色を呈し、木棺材の痕跡は確認できない。遺物は出土していない。土壇中央付近の埋土を採取し脂肪酸分析を行ったが、遺体の埋葬を肯定する結果は得られていない。

S K29 (Fig.231)

平面形は隅丸長方形を呈し、土壇底面での規模は、長軸が0.83m、短軸は0.38m、検出面からの深さ約7cmを測る。主軸方向は、N-63°-Eである。遺物は出土していない。埋土は黒色土を呈する。土壇中央付近の埋土を採取し脂肪酸分析を行ったが埋葬を示唆する結果は得られてない。

S K30 (Fig.231 PL.58)

平面形長方形を呈する土壇である。底面では長軸2.17m、短軸はやや幅広の南西側において0.8m、北東側では0.6m、検出面から底面までの深さは26cm前後を測り、底面はほぼ水平である。主軸は、N-63°-Eであり、SK28・29・31とは平行する。底面の長軸方向両端部で木棺の小口材の痕跡とみられる溝状の掘り込みを検出した。底面からの深さは5cm前後である。

埋土は黒色土を呈するが、底部直上には黒褐色土がみられる。埋土を採取し脂肪酸分析を行った。動物性ステロールが比較的多量に検出され、埋葬由来するものと考えられる。遺物は出土していない。

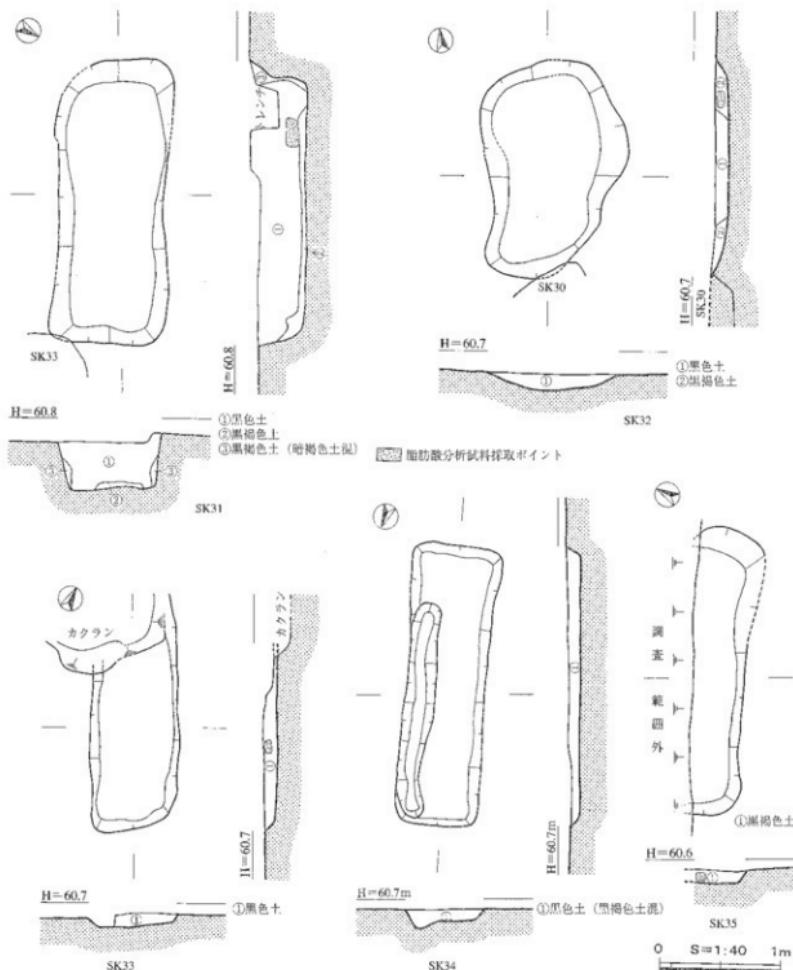


Fig.232 SK31・32・33・34・35遺構図

~0.87m、検出面から底部までの深さは、13cm前後である。底部は中央付近がやや低い。遺物は出土していない。埋土は黒色を呈するが、長軸方向両端部付近には黒褐色土がみられる。埋土の一部を採取し、脂肪酸分析を行ったが、埋葬を示唆する結果は得られなかった。

SK33 (Fig.232 PL58)

平面形が長方形を呈する土壤である。底面では、長軸1.45m以上、短軸0.6m前後、検出面から底部までの深さ10cm前後を測り、底面はほぼ水平である。主軸は、N-26°Wである。埋土は黒色土を呈する。埋土の一部

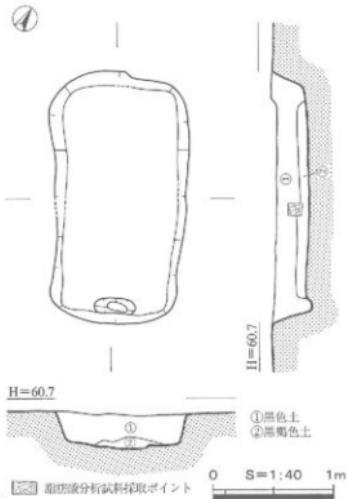


Fig.233 SK36遺構図

ったが、埋葬を示唆する結果は得られていない。

S K36 (Fig.233 PL.59)

平面長方形の土壙である。底面での規模は、長軸1.85m、短軸0.85~0.90m、検出面からの深さは24cm前後を測る。主軸は、N-33°-Wであり、西側に位置するS K30・31の主軸とはほぼ直交する。底部の南東側小口部分において木棺の小口材を挿入したとみられる溝状の掘り込みを検出した。長さ32cm、幅14cm前後、底面からの深さ約4cmを測る。遺物は出土していない。埋土は黒色土であるが、土壙中央付近の底部直上には黒褐色土の堆積がみられる。埋土の一部を採取し、脂肪酸分析を行ったところ、遺体に由来する可能性が指摘される細菌性ステロールが検出されている。

S K39 (Fig.234・235 PL.60・72・74・75・76)

土壙墓群の南側約3mに位置する。長軸2.6m、短軸1.8m、検出面からの深さは最大20cmの平面不整形を呈するが、本来的には南側の浅い落ち込みや上器が出土する土坑北側の礫が集中する部分とともに南北5.5m、東西3.5~4.0m前後の規模が推察される。底面は、浅い皿状を呈するが、堆積土中に包含される礫が露出しており凹凸をなしている。埋土は土壙墓群の埋土と同様黒色土であり、下層には黒褐色土の堆積がみられる。堆積状況からは人為的に掘削されたものか判断できない。

土坑埋土中には、長軸10~30cm程度の礫が多量に認められる。出土状況は散在的であり、人為的な配列、集積を認識することはできない。また、礫には使用した痕跡は認められない。土坑周辺にも同様の礫が散在し、土坑埋土中の礫との差違が認められないことから、これらの礫は元来堆積土中に包含されていたものと判断される。

礫とともに弥生土器の破片が多数出土した。同一個体を排除のうえで口縁部1点を1個体として換算すると、壺1個体(170)、甕5個体(167~169)・

を採取し、脂肪酸分析を行ったところ、動物性ステロール、C20以上の脂肪酸が比較的多産していることから、埋葬施設の可能性が指摘できる。

S K34 (Fig.232 PL.59)

底面での規模は、長軸2.12m、短軸0.5~0.6m、検出面から底面までの深さは、12cm前後を測る平面長方形の土壙である。底部はほぼ水平である。主軸は、N-19°-Wである。底面の東側において、幅20cm前後、底面からの深さ5cm前後の溝状の掘り込みを検出した。西側では確認できないが、木棺側壁材を挿入した痕跡と考えられる。埋土は黒色を呈するが木棺痕跡は認められない。遺物は出土していない。埋土の一部を採取し脂肪酸分析を行ったが、埋葬を示唆する結果は得られていない。

S K35 (Fig.232 PL.59)

調査区北端で検出した。完掘できないが、底面では長軸2.1m、短軸0.4m以上を測り、平面長方形を呈する土壙とみられる。底部はほぼ水平である。主軸は、N-67°-Eである。遺物は出土していない。埋土の一部を採取し脂肪酸分析を行



SK39 ベルト土層断面・遺物出土状況

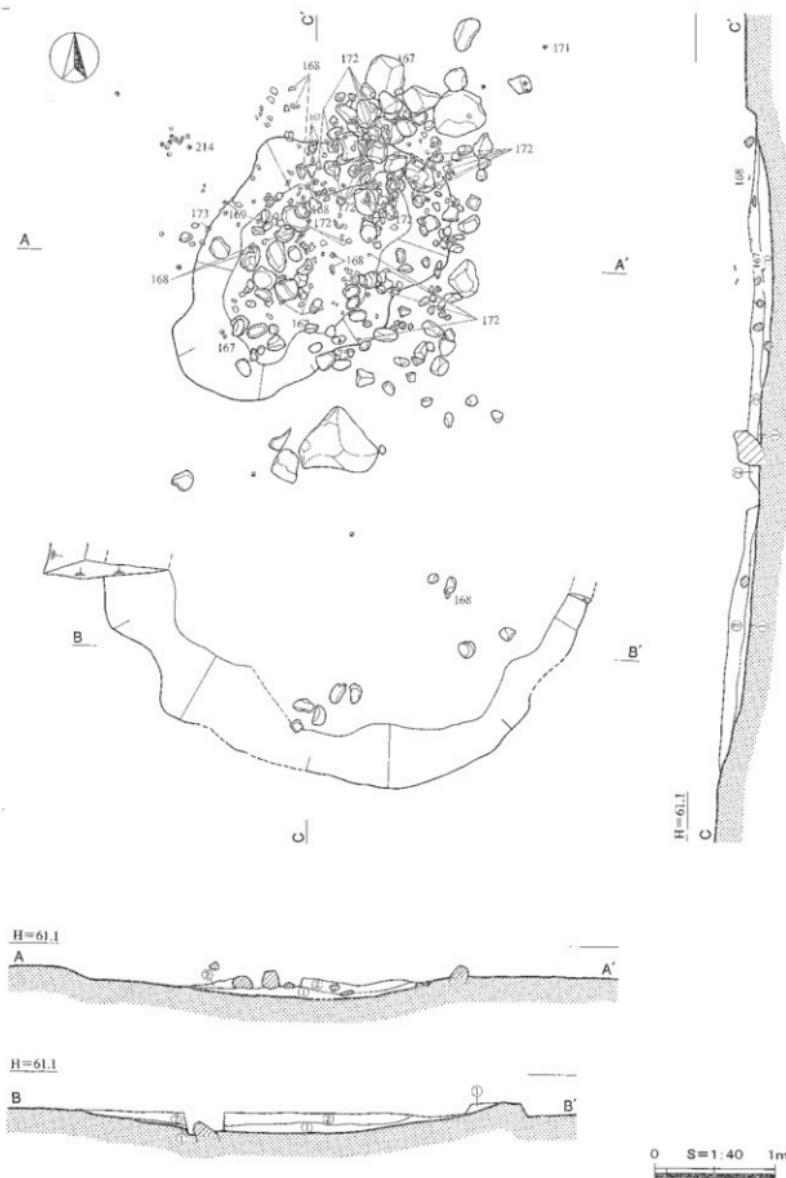


Fig. 234 SK 39 造構図

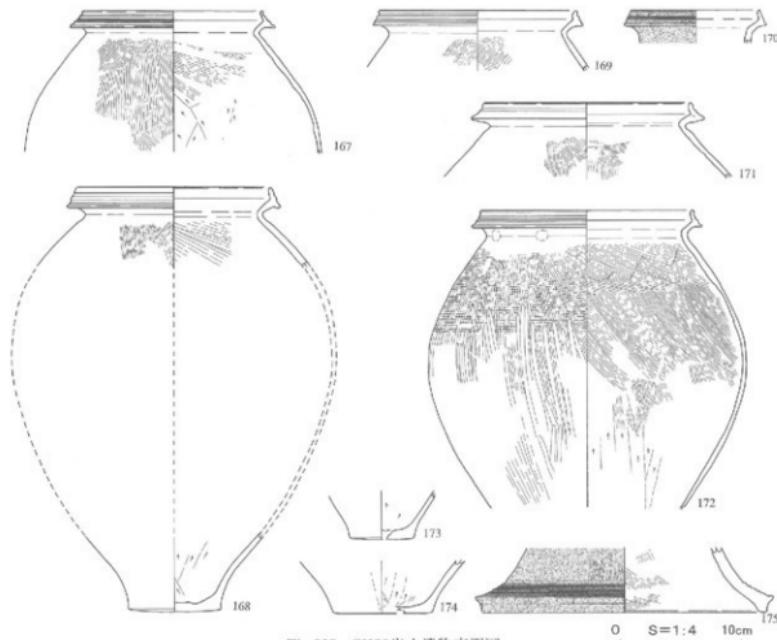


Fig.235 SK39出土遺物実測図

171・172) のほか、脚部の破片(175)が出土している。173の底面は焼成後に穿孔されている。壺170、脚部175の外面は赤色塗彩される。壺172を除くと、器形全体の1/3以上を復元できる個体はない。大半が10cm以下の小片であり、出土状況は散在的である。層位的には、上層の②層に多量に包含され、下層の①層には比較的少ない。接合する破片が比較的接近して出土していること、SK40では数個の罐に直接押し潰された状態の土器が出土していることからみて、意図的に破碎された可能性がある。

SK40 (Fig.236~239 PL.61・72~75)

土塼墓群の西南西側に位置する。北西側の端部は定かではないが、長軸5.5~6.0m、短軸1.5~2.7m程度の平面不整形を呈するものとみられる。検出面からの深さは最大20cm程度である。底面は露出する罐により凹凸をなす。埋土はおもに黒色土であり堆積状況は把握できない。人為的に掘削されたものか否か判断に欠く。

埋土中から多量の罐、弥生土器が出土した。罐は、長軸10~30cm前後のものが主体をなす。分布状況は散在的で人為的な配列、集積はうかがえない。また、加工した痕跡も認められないことから、本来は周囲の堆積層に包含されていたものが露出したか、あるいは人為的に集められたことが考えられる。

罐とともに弥生時代中期後半の土器が出土している。口縁部1点を1個体として換算すると、壺1個体(176)、甕11個体(177~187)となる。7点(181、185~189、191)の底部には、焼成後に穿孔が施され、甕187の胴部には



SK40 遺物出土状況 (北西から)

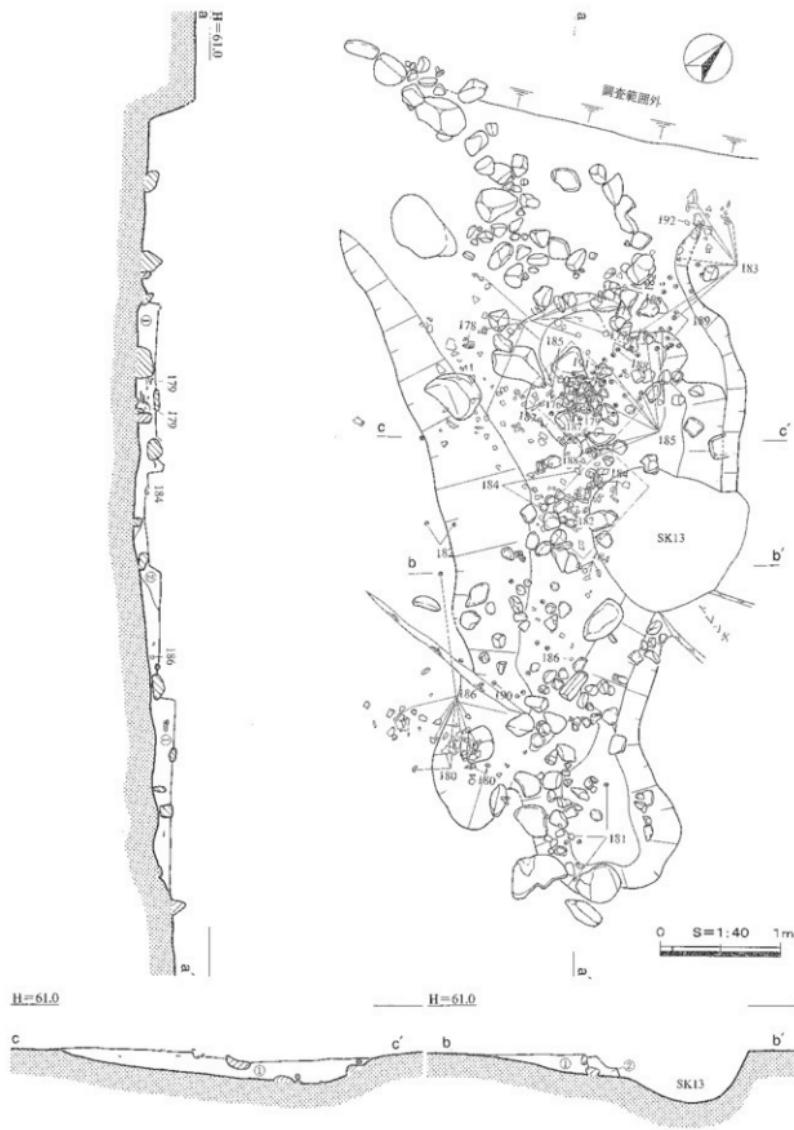


Fig. 236 SK40遺構図

打ち欠きがみられる。壺177には赤彩が施されている。大半が10cm以下の小片であるが、同一個体の破片が接近して出土しており、壺181・184～187はほぼ完形に復元できる。底面直上から出土した壺185は数個の疊に直接押し潰された状況で出土しており、人為的に破碎されたものとみられる。

弥生時代以前の遺構外出土遺物
(Fig.240 PL.76)

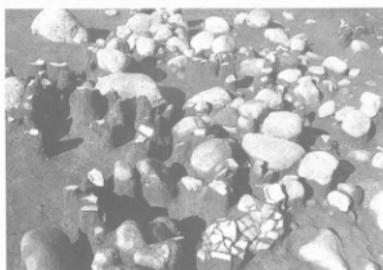
第3遺構検出面(暗褐色土)直上において縄文土器数点が出土している。200は二本の沈鉢内部にRLの磨消繩文を施しており後期前半の特徴をもつ。202は深鉢の肩部とみられるが、半截竹管状の工具で刺突文を施している。底部213の内面は丁寧にミガキが施されており、浅鉢と思われる。他の粗製土器も同様に後期の所産とみられる。このほか、図化していないが1区第3遺構検出面直上より黒曜石製の石器の破片2点が出土している。

弥生土器は、おもに弥生時代の生活面が想定される黒色土中から出土しており、中期後半(V-1～V-3様式)を主体に後期前半(V-2様式)のものがわずかに出土している。

参考文献

清水真一 1992「6因幡・伯耆地域」

『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』 木耳社



SK40 遺物出土状況

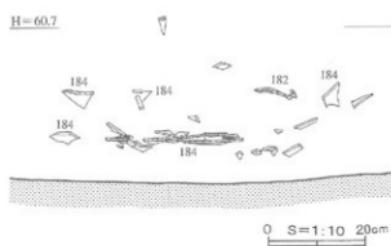
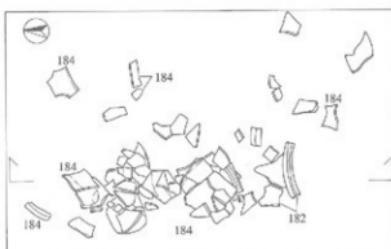
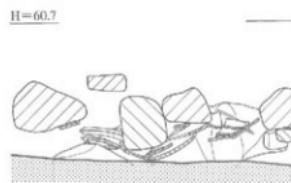
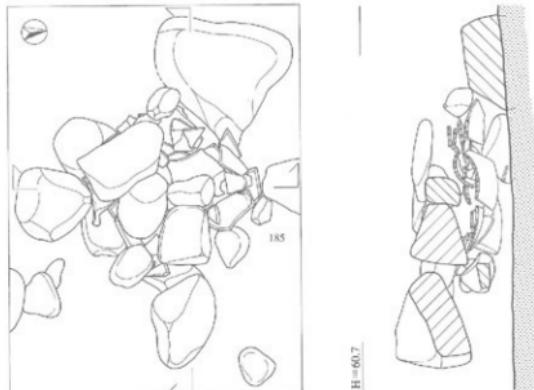


Fig. 237 SK40遺物出土状況図

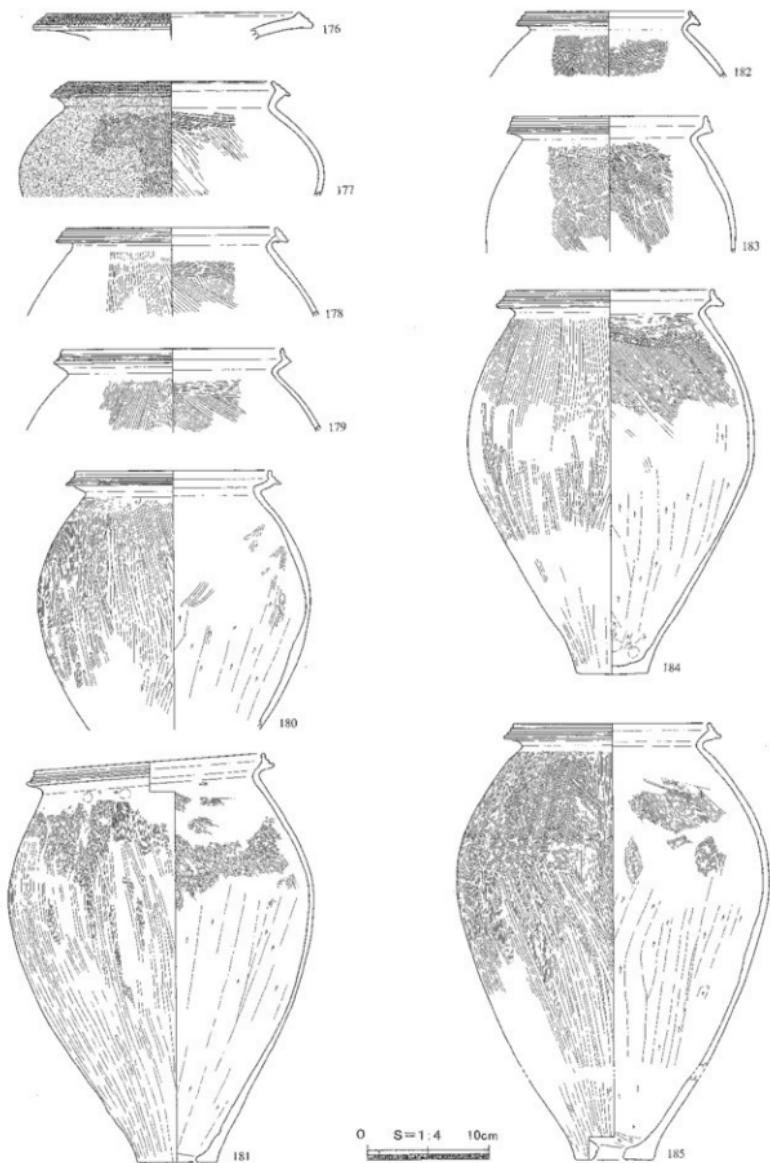


Fig. 238 SK40出土遺物実測図 (1)

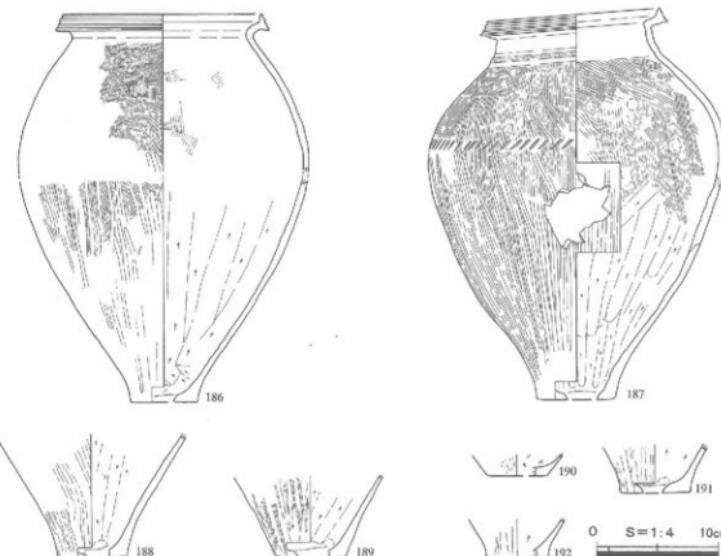


Fig. 239 SK40出土遺物実測図 (2)

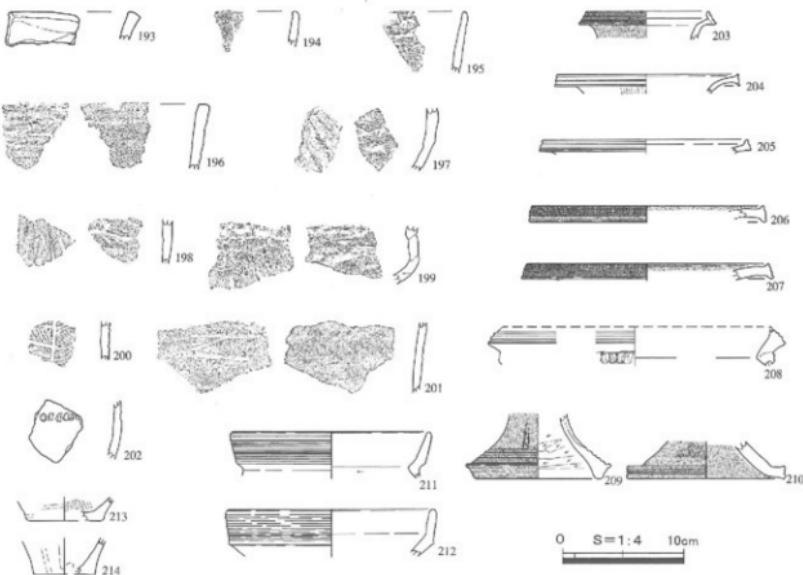


Fig. 240 遺構外出土遺物実測図

Table.192 S K39・40、構造外出土遺物観察表

No.	Fig. PL.	地区	遺物名	器種	法量(cm)	特徵	胎土	色調	備考
167	Fig.235 PL.74	3区	S K39	弥生土器 蓋	口径 #148 口徑 #125	口縁部に4本の凹頭文。外面部調整一輪ハケ。内面部調整一輪ハケ。内面部調整一輪ハケ。	1mm程度の砂 粒少量混入	に赤褐色 に赤褐色	口縁部の約1/2残 口縁部の約3/4、 底残
168	Fig.235 PL.74	3区	S K39	弥生土器 蓋	口径 15.9	口縁部に3本の凹頭文。外面部調整一輪ハケ。内面部調整一輪ハケ。	1mm程度の砂 粒少量混入	に赤褐色 に赤褐色	口縁部の約1/3残 口縁部の約1/4、 底残
169	Fig.235 PL.75	3区	S K39	弥生土器 蓋	口径 #163 底径 #15.4	口縁部に3本の凹頭文。外面部調整一輪ハケ。内面部調整一輪ハケ。	1mm以下の砂 粒多量混入	に赤褐色 に赤褐色	口縁部の約1/3残 口縁部の約1/2残
170	Fig.235 PL.75	3区	S K39	弥生土器 蓋	口径 #108 底径 #10.2	[口縁部に4本の凹頭文。外面部調整一輪ハケ。内面部調整一輪ハケ。内面部調整一輪ハケ。内面部調整一輪ハケ。]外面部調整一輪ハケ。	1mm以下の砂 粒多量混入	に赤褐色 に赤褐色	口縁部の約1/4残 口縁部の約1/4残
171	Fig.235 PL.76	3区	S K39	弥生土器 蓋	口径 #178	口縁部に1本の凹頭文。外面部調整一輪ハケ。内面部調整一輪ハケ。	1mm程度の砂 粒少量混入	に赤褐色 に赤褐色	底付付灰褐色。口縫 部・射出部の約1/2残
172	Fig.235 PL.75	3区	S K39	弥生土器 蓋	口径 #177	[口縁部に4本の凹頭文。外面部調整一輪ハケ後ミガ キ。内面部調整一輪ハケ後ミガキ。]外面部調整一輪ハケ後ミガ キ。内面部調整一輪ハケ後ミガキ。内面部調整一輪ハケ後ミガ キ。	1mm程度の砂 粒少量混入	に赤褐色 に赤褐色	底付付灰褐色。口縫 部・射出部の約1/2残
173	Fig.235 PL.75	3区	S K39	弥生土器 蓋	口径 #34	内面部調整一輪ハケ。底部に燒成痕跡。	1mm以下の砂 粒多量混入	に赤褐色 に赤褐色	底付の約1/2残 底付の約1/2残
174	Fig.235 PL.75	3区	S K39	弥生土器 蓋	口径 #8.2	外面調整一輪ハケ。内面部調整一輪ハケ。	1mm以下の砂 粒多量混入	に赤褐色 に赤褐色	底付の約1/4残
175	Fig.235 PL.75	3区	S K39	弥生土器 蓋	口径 #229	[口縁部に4本の凹頭文。外面部調整一輪ハケ。内面部調整一輪ハケ。内面部調整一輪ハケ。内面部調整一輪ハケ。]外面部調整一輪ハケ。	1mm以下の砂 粒多量混入	に赤褐色 に赤褐色	底付の約1/12残
176	Fig.235 PL.75	3区	S K40	弥生土器 蓋	口径 #207	内面部調整一輪ハケ。	1mm程度の砂 粒少量混入	灰褐色	口縫部の約1/16残
177	Fig.235 PL.75	3区	S K40	弥生土器 蓋	口径 #167	[口縁部に3本の凹頭文。内面部調整一輪ハケ後ミガ キ。内面部調整一輪ハケ後ミガキ。内面部調整一輪ハケ後ミガ キ。]内面部調整一輪ハケ後ミガキ。内面部調整一輪ハケ後ミガ キ。	1mm程度の砂 粒少量混入	赤褐色 赤褐色	口縫部の約1/8残
178	Fig.235 PL.75	3区	S K40	弥生土器 蓋	口径 #173	内面部調整一輪ハケ。	1mm以下の砂 粒少量混入	赤褐色 赤褐色	口縫部の約1/3残
179	Fig.235 PL.75	3区	S K40	弥生土器 蓋	口径 #183	[口縁部に4本の凹頭文。内面部調整一輪ハケ。内面部調整一輪ハケ。内面部調整一輪ハケ。内面部調整一輪ハケ。]内面部調整一輪ハケ。	1mm以下の砂 粒少量混入	赤褐色 赤褐色	口縫部の約1/3残
180	Fig.235 PL.75	3区	S K40	弥生土器 蓋	口径 16.1	口縁部に3本の凹頭文。内面部調整一輪ハケ。	1mm程度の砂 粒少量混入	赤褐色 赤褐色	底付付灰褐色。口縫 部・射出部の約1/2残
181	Fig.235 PL.75	3区	S K40	弥生土器 蓋	口径 #196	[口縁部に3本の凹頭文。内面部調整一輪ハケ後ミガ キ。内面部調整一輪ハケ後ミガキ。内面部調整一輪ハケ後ミガ キ。]内面部調整一輪ハケ後ミガキ。	1mm程度の砂 粒少量混入	赤褐色 赤褐色	全体の約1/2残
182	Fig.235 PL.75	3区	S K40	弥生土器 蓋	口径 #337	内面部調整一輪ハケ。	1mm以下の砂 粒少量混入	赤褐色	口縫部の約1/5残
183	Fig.235 PL.75	3区	S K40	弥生土器 蓋	口径 #127	内面部調整一輪ハケ。	1mm以下の砂 粒少量混入	赤褐色 赤褐色	口縫部の約1/5残
184	Fig.235 PL.75	3区	S K40	弥生土器 蓋	口径 #161	[口縁部に3本の凹頭文。内面部調整一輪ハケ。内面部調整一輪ハケ。内面部調整一輪ハケ。内面部調整一輪ハケ。]内面部調整一輪ハケ。	1mm以下の砂 粒少量混入	赤褐色 赤褐色	口縫部の約2/3残
185	Fig.235 PL.75	3区	S K40	弥生土器 蓋	口径 #315	内面部調整一輪ハケ後ミガ キ。	1mm程度の砂 粒少量混入	赤褐色 赤褐色	全体の約1/2残
186	Fig.235 PL.75	3区	S K40	弥生土器 蓋	口径 16.0	[口縁部に3本の凹頭文。内面部調整一輪ハケ後ミガ キ。内面部調整一輪ハケ後ミガキ。内面部調整一輪ハケ後ミガ キ。]内面部調整一輪ハケ後ミガキ。	1mm程度の砂 粒少量混入	赤褐色 赤褐色	全体の約1/2残
187	Fig.235 PL.75	3区	S K40	弥生土器 蓋	口径 #314	[口縁部に3本の凹頭文。内面部調整一輪ハケ後ミガ キ。内面部調整一輪ハケ後ミガキ。内面部調整一輪ハケ後ミガ キ。]内面部調整一輪ハケ後ミガキ。	1mm以下の砂 粒少量混入	赤褐色 赤褐色	全体の約1/4残
188	Fig.235 PL.75	3区	S K40	弥生土器 蓋	口径 5.7	内面部調整一輪ハケ後ミガキ。	1mm程度の砂 粒少量混入	赤褐色 赤褐色	全体の約3/4残
189	Fig.235 PL.75	3区	S K40	弥生土器 蓋	口径 5.7	内面部調整一輪ハケ後ミガキ。	1mm以下の砂 粒少量混入	赤褐色 赤褐色	底付光澤
190	Fig.235 PL.75	3区	S K40	弥生土器 蓋	口径 #4.9	内面部調整一輪ハケ後ミガキ。	1mm程度の砂 粒少量混入	赤褐色 赤褐色	底付の約1/4残
191	Fig.235 PL.75	3区	S K40	弥生土器 蓋	口径 #5.2	内面部調整一輪ハケ後ミガキ。	1mm以下の砂 粒少量混入	赤褐色 赤褐色	底付の約1/4残
192	Fig.235 PL.75	3区	S K40	弥生土器 蓋	口径 #5.2	内面部調整一輪ハケ後ミガキ。	1mm以下の砂 粒少量混入	赤褐色 赤褐色	底付の約1/4残
193	Fig.240 PL.76	3区	盒合層	陶文土器 蓋	-	口縁部底面取り。外面部調整方南ナ。	1mm程度の砂 粒少量混入	赤褐色 赤褐色	-
194	Fig.240 PL.76	1区	盒合層	陶文土器 蓋	-	口縫部から外側にRし横彎。	1mm以下の砂 粒少量混入	赤褐色 赤褐色	-
195	Fig.240 PL.76	3区	盒合層	陶文土器 蓋	-	外面部調整方南ナ。	1mm程度の砂 粒少量混入	赤褐色 赤褐色	-
196	Fig.240 PL.76	3区	盒合層	陶文土器 蓋	-	口縫部底面取り。外面部調整方南ナ。	1mm以下の砂 粒少量混入	赤褐色 赤褐色	-
197	Fig.240 1区	盒合層	陶文土器 蓋	-	外面部調整一輪ナ。内面部調整一輪ハケ。	1mm以下の砂 粒少量混入	赤褐色 赤褐色	-	
198	Fig.240 PL.76	3区	盒合層	陶文土器 蓋	-	外面部調整一輪ナ。内面部調整一輪ハケ。	1mm以下の砂 粒少量混入	赤褐色 赤褐色	-
199	Fig.240 PL.76	3区	盒合層	陶文土器 蓋	-	外面部調整一輪ナ。取扱は、横方向開口→極端方正化 →削除→一部折損→極端方正化。内面部ナナ溝。	1mm程度の砂 粒少量混入	赤褐色 赤褐色	-
200	Fig.240 1区	盒合層	陶文土器 蓋	-	外面部調整一輪ナ。取扱は、横方向開口→極端方正化 →削除→一部折損→極端方正化。内面部ナナ溝。	1mm程度の砂 粒少量混入	赤褐色 赤褐色	-	
201	Fig.240 1区	盒合層	陶文土器 蓋	-	内面部調整一輪溝。	1mm以下の砂 粒少量混入	赤褐色 赤褐色	-	
202	Fig.240 PL.76	1区	盒合層	陶文土器 蓋	-	外面部竹状工具による鉄向文。外面部ナ。	1mm以上の砂 粒少量混入	赤褐色 赤褐色	-
203	Fig.240 PL.76	3区	盒合層	陶文土器 蓋	口径 #104	口縁部に3本の凹頭文。外面部調整一輪ナ。内面部調 整一輪ナ。外面部ナ。	1mm以下の砂 粒多量混入	赤褐色 赤褐色	口縫部の約1/8残
204	Fig.240 PL.76	3区	盒合層	陶文土器 蓋	口径 #151	口縁部に3本の凹頭文。外面部調整一輪ナ。内面部調 整一輪ナ。	1mm以下の砂 粒多量混入	赤褐色 赤褐色	口縫部の約1/12残
205	Fig.240 PL.76	1区	盒合層	陶文土器 蓋	口径 #171	口縁部に3本の凹頭文。外面部調整一輪ナ。内面部調 整一輪ナ。	1mm以下の砂 粒多量混入	赤褐色 赤褐色	口縫部の約1/9残
206	Fig.240 PL.76	1区	盒合層	陶文土器 蓋	口径 #182	口縁部に3本の西周文化字ギヨ。外面部調整一輪ナ。 内面部調整一輪ナ。	1mm以下の砂 粒多量混入	赤褐色 赤褐色	口縫部の約1/22残
207	Fig.240 PL.76	2区	盒合層	陶文土器 蓋	口径 #202	口縁部に3本の凹頭文。内面部調整一輪ナ。	1mm以下の砂 粒多量混入	赤褐色 赤褐色	口縫部の約1/20残
208	Fig.240 PL.76	3区	盒合層	陶文土器 蓋	口径 #173	口縁部に3本の凹頭文。内面部調整一輪ナ。	1mm以下の砂 粒多量混入	赤褐色 赤褐色	口縫部の約1/22残
209	Fig.240 PL.76	2区	盒合層	陶文土器 蓋	口径 #16.0	口縁部に3本の凹頭文。内面部調整一輪ナ。	1mm以下の砂 粒多量混入	赤褐色 赤褐色	底付の約1/6残
210	Fig.240 3区	盒合層	陶文土器 蓋	口径 #13.0	外面部調整一輪ナ。内面部調整一輪ナ。外面部赤色 斑。	1mm程度の砂 粒多量混入	赤褐色 赤褐色	底付の約1/11残	
211	Fig.240 2区	盒合層	陶文土器 蓋	口径 #16.3	各以上より1単位の焼凹線。外面部調整一輪ナ。 内面部調整一輪ナ。	1mm以下の砂 粒多量混入	赤褐色 赤褐色	口縫部の約1/20残	
212	Fig.240 1区	盒合層	陶文土器 蓋	口径 #17.3	口縫部に1単位の焼凹線。外面部調整一輪ナ。内面部調 整一輪ナ。	1mm以下の砂 粒多量混入	赤褐色 赤褐色	口縫部の約1/24残	
213	Fig.240 PL.76	1区	盒合層	陶文土器 蓋	口径 #6.2	外面部調整一輪ナ。内面部調整一輪ナ。	1mm以下の砂 粒多量混入	赤褐色 赤褐色	底付の約1/4残
214	Fig.240 3区	盒合層	陶文土器 蓋	底径 #5.1	外面部調整一輪ナ。	1mm以下の砂 粒多量混入	赤褐色 赤褐色	底付の約1/4残	

・法量の表示は推定版元数を表す。

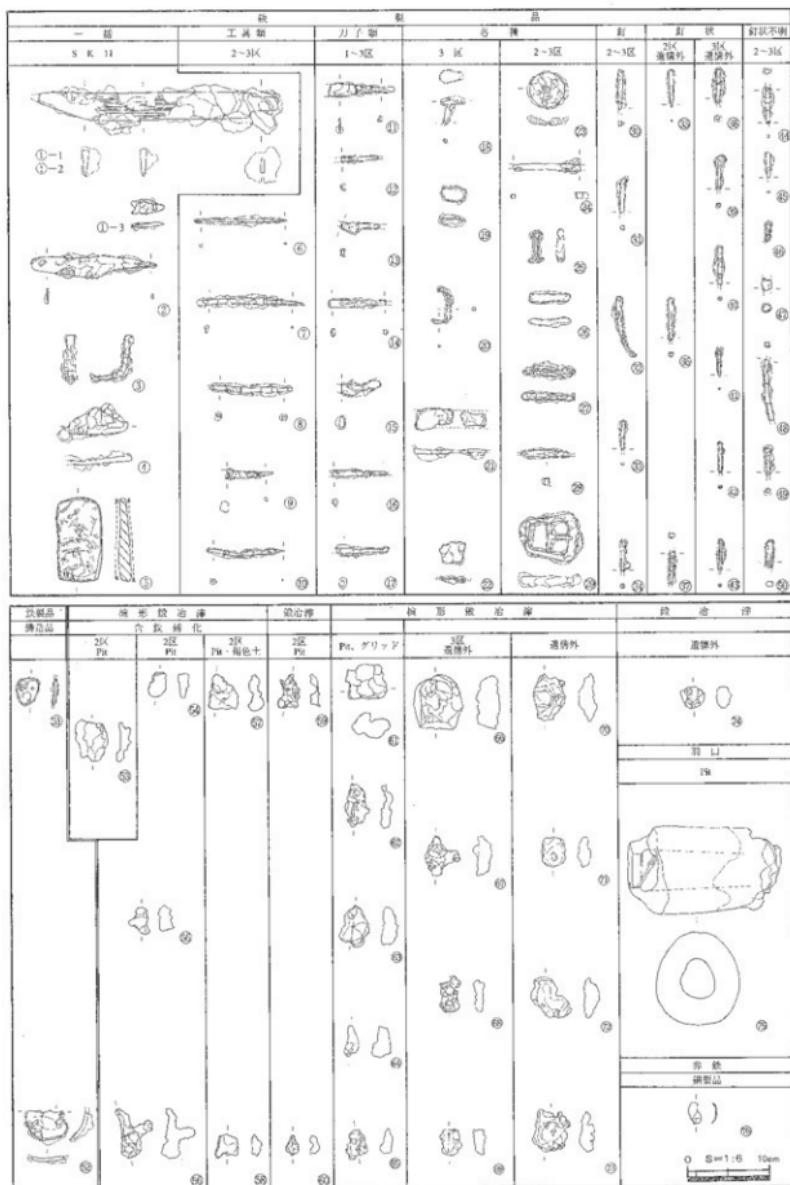


Fig.241 鉄器遺物構成図

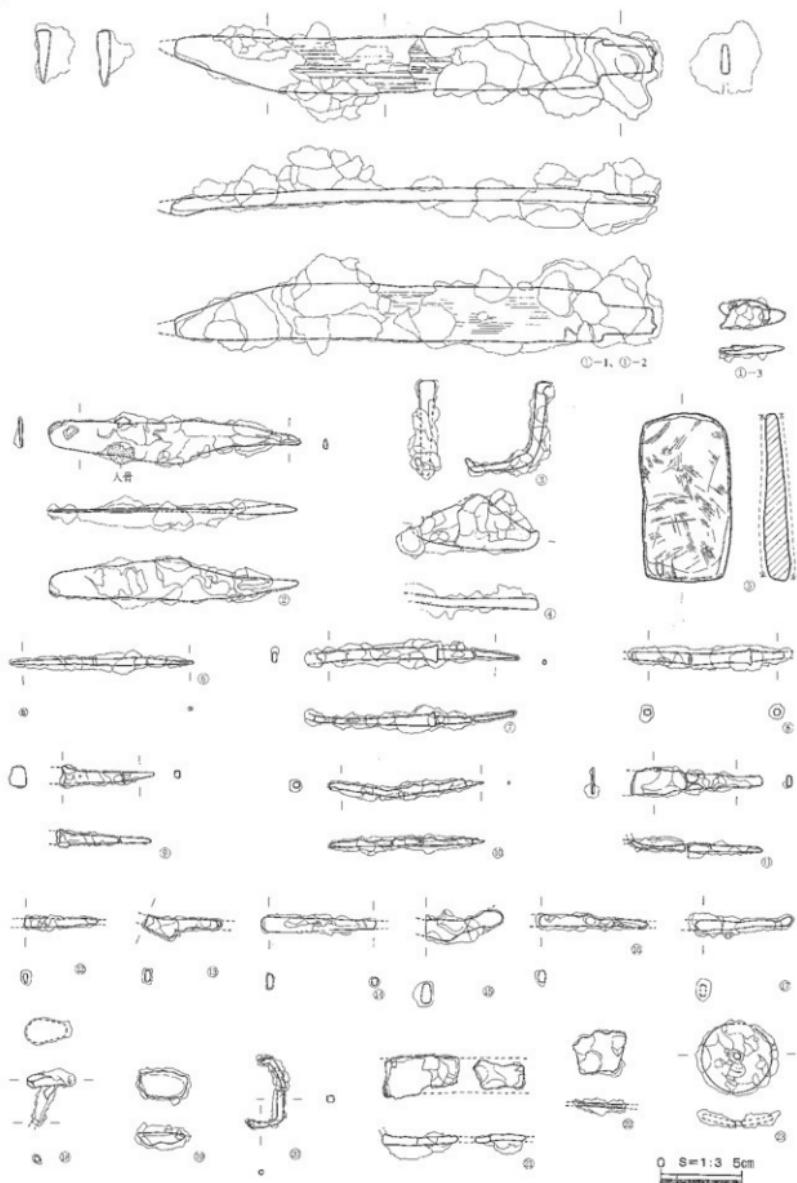


Fig.242 铁闻遗物实测图 (1)



Fig.243 鉄関連遺物実測図 (2)

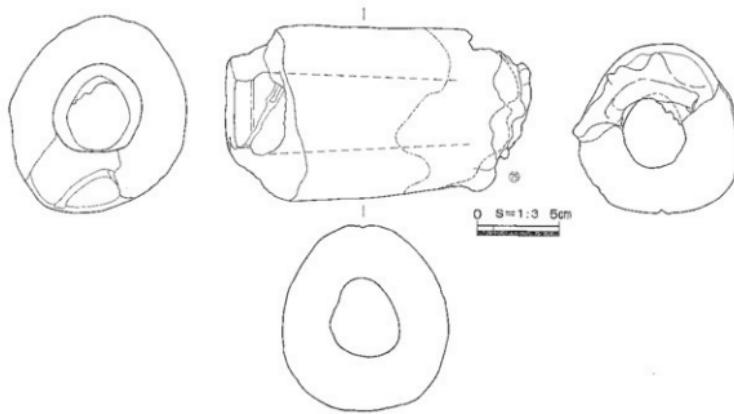


Fig.244 鉄関連遺物実測図 (3)

4 鉄関連遺物

鉄関連遺物 (Fig.240~243 Tab.193~196 PL.68~71)

2・3区を中心として鉄製品が出土した。1区でも遺構内から出土するものもあり、これらは主に鎌倉時代の集落跡に伴うものと考えられる。茶畠六反田跡からもほぼ同時期の鉄製品・鉄滓が出土している。押平弘法堂跡の鉄製品についての詳細は、茶畠六反田跡の鉄製品の記述を行った140頁で合わせて記載している。

Tab.193 鉄関連遺物観察表 (1)

構成 No.	出土地	層位	遺物名	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (kg)	疏密 度	メタル 度	特徴
①-1	S K11	底面上	鉄製品(刀、切先~体部)	28.7	1.1	0.8	?	4	△	丁寧なつくりの刀。刃化により7片に割れているが、個体である。両マチ身幅が広く先端は比較的急にしぼりれている。中後部の刃の側面は欠損。刃先部は鋸歯状で、アーチ形である。はさみの刃など、近年は発見されてない。外刃は柄材に接する部樹林で、柄部分、身部分ともと離されている。なお、3がこの刃の吊り下げ工具と推定される。また、2の刀もそのようにつくられた可能性がある。
①-2			鉄製品(刀、体部)	34				4	△	
①-3			鉄製品(刀、中子)	4.1	1.7	0.5	10.6	5	△	
②	S K11	底面上	鉄製品(刀子)	15.6	2.5	0.1 ~ 0.5	38.4	4	△	短いものであるが、直線のある薄手の刀である。上端中央左右には人字形に突き出している。下端には木棒の板材が方向を決めて固定している。刀子のマチは鋸歯ではない。比較的鋭化が付いている。なお、表面の金属物からみて船底に本資源が供給があり、その上に遺体が廻っていた跡が想われる。
③	S K11	埋土中	鉄製品(刀装金具)	9.1	1.0	0.7	23.4	3	△	L字状に凸があった橢円のある抜群の刀装金具である。頭部はやや横長の方針針に仕上げられ。外側に向かい一旦直くなり、頭が気次第に折り曲げられている。側面部は上方に向かい屈く立ち上がる。L字部の外側から見て、刀装は高さ5cm弱、幅5cm前後であったこと分かる(内函)。したがって木資源の頭部のつくり出しが抜いており、縦に対応した刀の片側に沿った切り下しと判断される。
④	S K11	底面上	鉄製品(火打ち金?)	△ 7.2	3.3	0.6	57.5	4	△	平面、長さの三倍形態の鉄製品である。全体に板状で両端部はやや突起気味である。このため、一種の火打ち金状の形状を示し、頂部はわずかにくぼむ抜けがあり折れされている可能性があろう。ただし裏面中に刀や刀子、さらに石とともに廻らていた遺物のため、刀装具の可能性も残される

Tab.194 鉄閃遺物観察表(2)

構成 No.	出土地	層位	遺物名	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	鉄石 メタル 版	特徴
⑤	S K11	表面	鉄石	10.4	5.5	1.8	132.0	1 なし	きの他の種類の鉄製品。マチはなし。表面が丸く尖っている。上下面に鋸歯状の凹凸があるが、その方が鋸歯よりも鋸面として取り扱った時の鉄石の表面形状が残されている。また、表面の裏面もさりげない仕上げとして用いられている。下面中央付近には、齒を斜めに立たせた粗い目盛りが残されており、それを基準とした表面の高さが約1.8cmである。
⑥	P 417	不明	鉄製品(鉛状)	11.4	0.6	0.5	14.2	3 △	鉄石の鉛状の鉄製品。マチはなし。表面が丸く尖っている。右端部は細かい方抜け状。左端部はやや太めの方抜け。X線追跡ではそうした鉄製品らしい。
⑦	S B12 P 10	下層	鉄製品(鉛) 小型	△ 12.4	1.1	0.8	29.2	6 M (△)	一見鉛状の鉄製品。中丁部がこぼり下したマチにより区別される。表面の体面からわざわざに取り返る形で鋸歯状が残る。マチのつくりはスクートー状に広がるもので、(F)、(G)の資料を参考のとおり、より(F)の方が鋸歯度が高い。刃部側面は欠損。
⑧	3 区	灰色粘質土包含層	鉄製品(鉛状)	△ 9.5	0.7	0.8	27	3 ▲	細かな粒状の鉄製品。刃先部と中子部の先端部は鋸歯によりより大きい欠損。両マチで、スクートー状のつくりはFGに似る。刃部側面から刀部側面はほとんど鋸歯状で細かい欠損がある。一種の刃引目で違うか。なお、体面中央部に鋸歯状が残る。
⑨	P 163	堆土上層	鉄製品(工具柄、中子) 鍔?	△ 5.5	1.1	1.1	5.5	5 △	マチ部を持つ「具柄の中子」である。方型の断面形状である。外周部はわざわざ手で削られた鋸面で構成されている。中子のマチに規定される位置は一枚残されている。奥部はやや長い鉛状である。
⑩	3 区	灰色粘質土包含層	鉄製品(鉛状)	9.5	0.6	0.7	12.4	4 M (△)	細かな粒状の鉄製品。刃先部と中子部の先端部は鋸歯によりより大きい欠損。両マチで、スクートー状のつくりはFGに似る。左端部は鋸面で右端部は右側面に削られた形で、やや折れし印象を受けた。また、X線追跡から工具柄などではないと判断される。
⑪	S K43	灰色粘質土包含層	鉄製品(刀子、または前リベラ)	△ 7.9	1.6	0.3	14.2	7 △	一見崩りやすい鉛状の鉄製品である。刃部の中子部の形状からみて、刀子と考案される。
⑫	D 5 グリッド	上層	鉄製品(中子) 不明?	△ 4.6	0.55	0.3	4.1	2 △	あくまで縦断の中子部の鉄製品範囲。全体に長方形断面に仕上げられ、左端部の裏面にはわずかに刃部らしい痕跡が残す。
⑬	2 区	不明	鉄製品(中子) 不明?	△ 4.7	1.2	0.3	5.1	1 △	やや異常に中子部の鉄製品。刃部が急激に広がり、本体は方錐状の鉄製品か? 中子部は広い直底に仕上げられている。
⑭	3 区	第1避難棟出面	鉄製品(中子) 不明?	△ 7.2	1.0	0.6	10.8	2 △	中子状の鉄製品。縦断の裏面は砂利地で、刃部は平底、中子部は方錐状。
⑮	3 区	灰色包含層	鉄製品(刀子) 不明?	△ 4.8	1.4	1.0	19.6	2 △	刀子またはハサウエの鉄製品。外周部の裏面は砂利地で、刃部側面は被覆。基部側面は可能性低い。
⑯	3 区	灰色包含層	鉄製品(中子) 不明?	△ 6.8	0.8	0.5	8.2	2 △	中子状の鉄製品。刃部は平底。中子部は長方形断面。中子部の裏面は砂利地。
⑰	G 9 グリッド	褐色土上包含層	鉄製品(中子) 不明?	△ 6.1	0.6	0.4	9.8	3 △	中子状の不規則形状。刃部側面は左端部のみが鋸ぐぐく。
⑲	S K3	堆土上層	鉄製品(瓦または飾り釘)	△ 3.1	2.5	0.3	9.6	4 △	丁字形をした留め釘である。瓦面や飾り釘が削り取られた後、左端部の裏面に削られた斜面が裏面部で残っている。裏面側面は削られた斜面でなく裏面部は削られた後斜面である。折り返した裏面の状ではない。磨耗しているのが、比較的新しい印象がある。
⑳	S K13	埋土中	鉄製品(鉛状不明)	2.9	1.7	0.7	12.2	1 △	只鉛塊状の鉄製品を示す。X線追跡によれば、刃部の裏面に無数に刻まれた複数の鉄製品の断片である。必然的に刃部側面に残る。
㉑	S B1 P3付近	不明	鉄製品(鉛)	4.2	0.4	0.4	5.2	5 △	鉄製品の断片である。コの字形に折り重ねられており、一つのものは頭部が鋸歯状である。上方の曲がりは直底。下方の曲がりは直底である。何からかの原因で頭部は削られた後斜面である。折り返した裏面の状ではない。磨耗しているのが、比較的新しい印象がある。
㉒.1	3 区	灰色包含層	鉄製品(鉛状不明)	△ 大4.6	2.4	0.4	—	—	鉄製品の断片である。コの字形に折り重ねられており、一つのものは頭部が鋸歯状である。上方の曲がりは直底。下方の曲がりは直底である。何からかの原因で頭部は削られた後斜面である。折り返した裏面の状ではない。磨耗しているのが、比較的新しい印象がある。
㉒.2	3 区	灰色包含層	鉄製品(鉛)	△ 小4.1	1.8	0.3	24.0	3 △	鉄製品の断片である。コの字形に折り重ねられており、一つのものは頭部が鋸歯状である。上方の曲がりは直底。下方の曲がりは直底である。何からかの原因で頭部は削られた後斜面である。折り返した裏面の状ではない。磨耗しているのが、比較的新しい印象がある。
㉓	3 区	灰色包含層	鉄製品(鉛状不明) 鍔?	2.6	3.1	0.2	7.5	1 △	複数枚の鉄製品断片。鍔ともみられるが刃部と背面の肩身差をもたず、やや變形点多い。
㉔	S B12 P 13	下層	鉄製品(輪軸車) 回転部	4.3	4.3	0.3	24.2	6 △	转动車の回転部である。刃部側と持つと考えられるが丸削している。回転部は浅く直底断面で平面部は円柱状である。内面にわざわざにひだ。
㉕	G 6 グリッド	褐色土上包含層	鉄製品(鉛状不明) 火薬?	△ 8.5	0.6	0.8	23.2	7 特L (△)	丸のよい鉛状の明品である。一見、火薬状で磨耗しているが、内部に鋸歯状で削られた跡がある。
㉖	G 5 グリッド	第1避難棟出面	鉄製品(時計金具)	3.8	1.8	不明	7.4	2 △	時計の金具である。複数に組み立てられたものが裏面に仕上げている。鐘形の底面が複数個の成形部で構成されている。
㉗	F 7 グリッド	第1避難棟出面	鉄製品(鉛状不明)	4.9	1	不明	13.6	3 △	ヘアの鉄製品。はっきりした鍔をもたらす。丸形品の可能性もあり。左季の内部に刃部の痕跡が残る。一種の刃の可能性もある。

Tab.195 鉄関連遺物観察表 (3)

構成 No.	出土地	層位	遺物名	長さ (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 量 (g)	断面 形	メタル 度	特徴
⑩	3区	サブトレ内 褐色土包含層	鉄製品(毛抜き)	6.3	1.2	0.5	19.6	3	△	こつごつした酸化上疊に覆われる、毛抜きである。右端部で折り返している。X線透過法でみるとマチを持ち器状の鐵製品の酸化度が持て、判断と繋いで資料である。毛抜きという意見もあり、一方そちらを治具名としておこが、マチ抜きの工具が酸化した可能性も残す。
⑪	II 8 グリッド	褐色土包含層	鉄製品(合い刃状不明)	△ 5.9	0.8	0.6	15.8	3	II (○)	やや丸みの合い刃状の鉄製品である。両端部がわずかに欠落しており、断面に迷う資料である。断面形はやや横長の方針。
⑫	5区	褐色土包含層	鉄製品(馬具金具)棒頭片	6.6	5.9	0.7	75.5	5	△	バッカス状の馬具である。外周部は台形に仕上げられ、内部に可動金具が組み込まれている。可動金具の端部は平板となった外周部の中央に3.5mmほどのついた型である。鍛造がされいて時期的にはやや新しい可能性がある。
⑬	F 6 グリッド	灰土包含層	鉄製品(釘)	△ 4.9	0.7	0.7	8.5	2	△	鍛造の受けた溝折れ釘である。体部の横断面形は方柱形である。
⑭	II 8 グリッド	第1遺構後出面	鉄製品(釘)	△ 4.1	0.6	0.6	6.9	2	△	頭部を付かない形状の釘である。外見的に間に見えるのは後代のもの。頭部は丸形である。X線透過法では、唐からく頭部が剥離され、頭部が開いてしまっているのが折れ釘である。
⑮	3区	灰色土包含層	鉄製品(釘)	7.6	0.6	0.6	15.0	3	△	頭部が付いた釘である。頭部は太くなっているがはっきりしない。
⑯	II 9 グリッド	褐色土包含層	鉄製品(釘)	△ 3.6	0.4	0.2	3.8	2	△	前者と同様、頭部の付いた釘である。頭部は尖端の可能性が高い。
⑰	3区	灰色土包含層	鉄製品(釘)	△ 3.7	0.4	0.4	4.3	1	△	頭部が付いたない釘である。頭部は丸形で比較的しっかりしている。
⑱	G 8 グリッド	第1遺構後出面	鉄製品(釘状)	△ 4.6	0.6	0.5	6.1	3	△	頭部が付いたない釘である。頭部は丸形で比較的しっかりしている。
⑲	H 6 グリッド	第1遺構後出面	鉄製品(釘状)	△ 5.1	0.7	0.7	7.7	2	△	頭部は丸形である。X線透過法では平底である。
⑳	H 6 グリッド	第1遺構後出面	鉄製品(釘状不明)	△ 3.7	0.4	0.5	5.3	2	△	頭部のやや鋭い釘である。頭部は丸形である。
㉑	3区	灰色土包含層	鉄製品(釘)	△ 4.1	0.3	0.5	9.0	2	△	頭部が付いた釘であるが、頭部が丸形である。
㉒	G 8 グリッド	褐色土包含層	鉄製品(鉗状不明)鉗?	△ 4.2	1.0	1.0	7.3	3	△	見釘状から、X線透過法で頭部が大きく折り曲げられており、頭部が不明瞭としておく。大きさや頭部の大きさは、鉗と大差ない。また、頭部は小さく丸形。
㉓	3区	褐色土包含層	鉄製品(釘状不明)	△ 4.6	0.5	0.6	9.7	2	△	平頭の頭部の鉄製品。外周部にこぶ状の酸化上疊。頭部は小さく丸形。
㉔	3区	灰色土包含層	鉄製品(釘)	△ 3.6	0.5	0.4	3.0	2	△	小鉗状の鉄製品。頭部までが丸形で、頭部は丸みを持った形でされている。小鉗の「櫻」か。
㉕	3区	灰色土包含層	鉄製品(釘状不明)	△ 3.7	0.4	0.3	2.3	1	△	頭部の小さな状の鉄製品。わずかに頭部が残る。横断面形はやや長方形。
㉖	3区	灰色土包含層	鉄製品(釘状不明)	△ 3.9	0.25	0.25	4.2	2	△	丸頭である。頭部は丸形。外観的には酸化上疊が多いため不明瞭が多いが、X線透過法では明らかなる丸頭である。
㉗	G 7 グリッド	灰色土包含層	鉄製品(工具中子状)	△ 4.4	0.9	0.9	9.3	1	△	両マチの工具中子状の鉄製品。中子部は1.2cmと短い。マチ部はスカート状に広がり、体部は細長く、横断面形は円形。
㉘	3区	灰色土包含層	鉄製品(釘状不明)	△ 3.2	0.6	0.6	4.2	3	△	小鉗状不明品。横断面形はやや長方形。楕円もしない。
㉙	3区	灰色土包含層	鉄製品(釘)	△ 2.4	0.6	0.3	2.7	2	△	釘形で頭部は圓錐形が削ぎ落し。全体は半円形に囲む。X線透過法では頭部の部分が噴出される。
㉚	3区	灰色土包含層	鉄製品(釘状不明)	△ 1.7	1.3	0.1	1.1	1	△	形状になった角鉗表面の酸化物と酸化上疊。頭又は体部の酸化部分があらわ。
㉛	3区	灰色土包含層	鉄製品(釘状不明)	△ 2.5	0.6	0.5	12.0	3	H (○)	頭部を全く無し不規則品。尾部側の頭部にマチ部を残す。やや斬らしい可能性あり。頭部に崩壊れた痕跡あり。
㉜	3区	灰色土包含層	鉄製品(釘)	△ 3.5	0.5	0.5	7.5	3	H (○)	丸頭の頭部側である。頭部は半円形と医療的な丸頭である。頭部側は丸形。メタル部が頭部側に残存。幕以前の釘。
㉝	3区	灰色土包含層	鉄製品(釘状不明)	△ 3.5	1.0	0.8	7.3	3	M (○)	丸頭の頭部側である。頭部は半円形と医療的な丸頭である。頭部側は丸形。メタル部が頭部側に残存。幕以前の釘。
㉞	P 152	埋土中	鉄製品(鑄造品)板抜不明	△ 3.2	25	0.3	12.0	4	△	2片が接着。P 82とP 91で接合関係。やや厚みを持つ板状の鐵製品である。外周部は全面酸化と見られるが、上辺は生きる可能性もある。赤手の縁起屋。
㉟	P 83・91	埋土中	鉄製品(鑄造品)錠	△ 3.6	5.0	0.3	15.6	4	○	やや厚みを持つ板状の鐵製品である。外周部は全面酸化と見られるが、上辺は生きる可能性もある。赤手の縁起屋。
㉟	P 33	埋土中	楢形鍛冶炉(含鉄)	4.7	3.9	1.1	38	4	鷹化 (△)	やや厚みを持つ板状の鐵製品である。外周部は全面酸化と見られる。右端部以外に破損。
㉟	P 392	褐色粘質土	楢形鍛冶炉	3.1	2.1	1.3	17.8	3	なし	小形の楢形鍛冶炉。「楢」が残る。前面に向かって傾いてある。本家の楢形鍛冶炉の裏蓋はどこか。
㉟	P 392	褐色粘質土	楢形鍛冶炉	3.5	2.4	1.8	4.4	3	なし	小形圓筒形をした小形の楢形鍛冶炉の裏蓋破片。前面窓部が残る。各面は1cm前後の外観である。
㉟	P 392	褐色粘質土	楢形鍛冶炉	6.1	4.6	2.1	45.6	3	なし	扁平な楢形鍛冶炉が中央部で二つに折れ丸く変形してしまったものである。浮き盤が机の上から手で分離化した状態で取出されたもの生じた外観である。薄い楢形鍛冶炉で、2区ピット上の浮き盤と基本的に同じで、少しあ差異のある楢形鍛冶炉工作。

Tab.196 鉄関連遺物観察表(4)

構成 No.	出土場	部位	遺物名	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	臨界 度	メタル 法	特徴
⑤	P392	褐色粘土質	楕円形鐵治浴	4.4	3.6	1.9	326	6	鈍化 (△)	小形扁平で合鉄鍛造の薄。表面の隠れは合鉄部の影響。横断面形状は浅いV字型。上辺のこの状態部分は上部から剥がれたりとした跡である。
⑥	P392	褐色粘土質	楕円形鐵治浴	2.7	2.8	1.2	12.0	4	鈍化 (△)	P@の底片として最もよくはね込む外観を持つ資料。刃部の端部に凹凸があり、これが刃部を形成する。
⑦	P392	褐色粘土質	鐵治浴	4.1	2.4	0.8	9.3	1	なし	上下に刃部と刃身とよく似た複数の層状の鐵治浴。上部が普通の鐵治浴で、下部が複数の層状の鐵治浴。
⑧	P392	褐色粘土質	鐵治浴	2.5	1.6	1.0	13.8	2	なし	鋸歯状の刃部をもつた複数の層状の鐵治浴。
⑨	P222	下層	楕円形鐵治浴(含鉄)	4.4	4.8	2.4	675	7	鈍化 (△)	やや刃みを持った楕円形鐵治浴の半永久。左側部は破壊され、かつて合鉄部であったのか、表面の凹部は鐵化と共に覆われている。内部に気泡が多く、中央部には結晶化の跡がある。
⑩	S B12 P13	灰色粘土質	楕円形鐵治浴(含鉄)	5.4	3.0	1.2	21.6	3	鈍化 (△)	扁平な両手の楕円形鐵治浴の冒頭部分。上面は緩やかな波形。下面には粉状底。
⑪	G 8グリッド	褐色土色	楕円形鐵治浴	5.2	3.4	1.8	37.0	5	なし	腹部に下方に刃部と刃身とに分かれ、刃部は鐵化と共に覆われた跡である。刃部の端部はV字型で鋸歯化している。
⑫	G 8グリッド	褐色土色	楕円形鐵治浴	3.9	1.5	2.4	17.0	2	なし	圓錐形氣味の楕円形鐵治浴の中間部底片。外側部は全面破損。気泡は外側面で全般に散る。P@の底片の可能性あり。
⑬	G 8グリッド	褐色土色	楕円形鐵治浴(含鉄)	3.7	2.7	1.4	17.2	6	鈍化 (△)	小形の不定形な楕円形鐵治浴。上下に尖端部を持ち、右側面が窪む。まとまりのない楕円形鐵治浴であった可能性大。
⑭	G 8グリッド	第1遺構検出面	楕円形鐵治浴	6.7	6.0	2.9	225.0	5	なし	しつかりした底片で厚さ約3mm程度と厚い。表面は既状で、上面もまたそれに沿っている。表面は微密な浮遊物でシャープな凹凸が複数ある。一見刃みが強いのに刃部が残されている明確のため。
⑮	G 8グリッド	褐色土色	楕円形鐵治浴	5.0	4.4	2.4	33.2	3	なし	小形の楕円形鐵治浴の野町底片。P@とやや傾いた部分が複数あるが、それが後合せだ。上面に二つの鉗跡。左側部と右側部上方に痕跡。表面はやや粗面で鋸歯化。
⑯	G 8グリッド	褐色土色	鐵治浴	4.5	2.7	1.3	16.8	3	なし	短い複数の鐵治浴片。上面は鋸歯化が確認できる。左側部は鋸歯化が確認できる。
⑰	G 8グリッド	褐色土色	楕円形鐵治浴	3.2	2.4	1.5	16.2	2	なし	短い複数の鐵治浴片。上面と左側部は鋸歯化。上面は鋸歯化して開拓部・半幅から下は本状況。気泡は中間に集中し伸び、その他の部分は。
⑱	2・3区	不明	楕円形鐵治浴	5.8	4.0	2.3	55.0	3	なし	やや小形の楕円形鐵治浴。右側部が鐵化。下面が異常に浮遊物で、上面は大部分に刃部からなっている。上面はボクタ基に突出している。密度はやや高い。
⑲	G 5グリッド	第1遺構検出面上	楕円形鐵治浴(含鉄)	3.7	2.9	1.6	22.6	3	鈍化 (△)	鋸歯化跡に覆われた、扁平な小形の底。右側部を除いてはほとんどは鋸歯化が確認できる。
⑳	2・3区	不明	楕円形鐵治浴(含鉄)	5.1	4.2	1.8	46.0	7	鈍化 (△)	やや複数と複数の底面。左側部のみ鋸歯化。上面はやや粗面で下面はトロリと楕円形。
㉑	3区	褐色土色土包帯	楕円形鐵治浴(含鉄)	5.0	4.3	1.8	44.4	5	鈍化 (△)	やや異形の楕円形鐵治浴。発見が近く全体に左へ傾斜している。左側部は直線的な壁面を持つ。鉗跡は傾斜して形成されたのか？ 各面ともやや目立った木筋跡が点在。
㉒	G 10グリッド	第1遺構検出面J:	鐵治浴(含鉄)	2.6	3	1.9	15.8	4	鈍化 (△)	ギザギザ状の小型の鐵治浴。左側部に小破損。全体的に楕円形をしている。
㉓	P539	黒褐色土質上	羽口	18.9	10.7	3.0	1451.0	3	なし	使用歴が残る羽口である。器部は平坦に形成され、下部が部分的に鉄化している。通風孔部は徐々に先端で、横断面は上辺に長いV字型である。外側部も全体でやや高めのむき上げ状である。先端部が鉄化と共に被熱し、その跡は明瞭である。先端部はV字型で、内側は丸く、外側はV字型で、部分的に削り下がっている。前十字山火性のバーニュ類を多量に含み、2~3mm程前の長い棒のスサムも混入されている。通風孔内部は鋸歯化させることなく棒状の工具痕があるとともに2段階鋸かせて用いている。更に刃の角部からV字型の鉗跡は複数ある。工具の刃部はV字型で、これは主に刃用鉄を用いて削り下がった跡である。火口は3区の火口と並んで黑色の楕円形鐵治浴に溶けたる縁を持つ。本羽口は2・3区の楕円形鐵治浴との関係は認められない。なお羽口單体としてみてみるとかなり大きいかと思われる。
㉔	G 8グリッド	第1遺構検出面上	青銅製品(鉛)渡金	2.6	1.3	0.6	1.0	1	△	棒状の創鋸品である。厚みは2.6mm前後の円錐地で内部は青銅、表面は0.1mm程度の鍍金層がまきこまれていて、小形の底片が2片あるが、接合しない。青銅部は完全に酸化して内部が生じ、それに対しても鍍金部分は完全に棒状の鉛部に覆いつけており、全く隙間を残さない。こうした状況は金を金箔を貼り付けるものではないと考へられる。なお、鍍金層の内側にも鍍金層が状態で覆っているが、これは内部から含み込まれた鉛酸化物である。一応、鉛と見ておき、少し細部で空孔部などは接合部をすり摩耗は残されていない。

第5章 富岡播磨洞遺跡の調査

1 富岡播磨洞遺跡の立地と層序

富岡播磨洞遺跡は木本丘陵の北先端部に位置する。周囲は付近は丘陵と低地との境で、北に向かう斜面である。周囲は水はけが悪く、桑やトウモロコシなどを栽培していた。調査区は1~3区に分割され、東の低地が1区、中央の丘陵を中心とした部分が2区、西側の低地が3区となる。いずれも遺構面は1面で、古墳時代、奈良時代、鎌倉時代の遺構が検出された。

1区は30cm程の表土、もしくは部分的に黒色土の堆積があり、その直下が遺構検出面となる。基盤層は基本的に灰色粘土で、さらに下には砂層や黒色粘土などが互層に堆積している。丘陵に沿うように自然流路が検出されており、川が形成した堆積層であると推測する。現代の暗渠排水路が縱横にあり、中には陶器製の管、瓦で箱状に組むもの、ビニール製のパイプを入れるものなどがあつた。

2区は南から北に向かう丘陵で、基盤層は真砂土である。部分的にこの層の上に黒色土が検出される箇所もある。この黒色土には縄文から古墳時代の遺物が含まれており、本来真砂土を覆っていたと考えられる。遺構は黒色土上面もしくは途中から掘り込まれている可能性もあるが、断面でも確認できない。そのため、遺構検出面は黒色土除去後の真砂土上面である。ただし、古墳時代の遺構・古墳の周溝の上層については黒色土が主体である。擾乱が著しく、2区中央付近に桑畠の深い歓が東西方向に並行に掘り込まれ、周囲には肥料穴が掘削されていた。

3区は2区の丘陵に連続しており、西側に向かい斜面となり、低地に至る。西隅付近は付け替え以前の水路により大きく掘削される。部分的に黒色土を検出し、遺物も若干出土している。遺構検出面は2区と同様、真砂土上面となる。

2 発掘調査の成果

(1) 播磨洞古墳群・古墳時代の清状遺構

これまで遺跡の範囲内においては古墳は確認できていなかったが、調査の結果4基の古墳を検出し、これを播磨洞古墳群とした。これらの古墳はいずれも2区の丘陵から低地にかけての境付近に立地している。いずれも円墳である。直径は8~9mから14~18mの規模がある。遺存状況は悪く、煙として使用されていたため、調査前には古墳を推定することは出来なかった。廐葬施設も確認できず、いずれも周溝のみの検出である。そのため、調査時には古墳ではなく、溝状遺構として扱っている。同じ丘陵の南西側には淀江町の向山古墳群が存在する。これは横穴式石室をもつ古墳群で、播磨洞古墳群よりもやや新しい。2区の丘陵上には2・3号墳があり、南側の調査区間からも古墳と同時期の遺物が出土していることから、今回調査した古墳群は向山古墳群の北東隣に位置しているものと推測したい。

Tab.197 古墳一覧表

古墳名	墳形	規模(m)	内部施設	出土遺物(周溝内)	時期	備考
1号墳	円墳	約14	不明。周溝中から角閃石安山岩の板石が数点出土。石棺か。	須恵器杯身2 土師器碗1	6世紀中葉	周溝のみ遺存
2号墳	円墳	約8~9	不明。	須恵器杯身1 土師器碗1・輪1	5世紀後葉	周溝のみ遺存
3号墳	円墳	約8~9	不明。	土師器碗	5世紀末~ 6世紀初頭	周溝のみ遺存
4号墳	円墳	約18	不明。	須恵器杯身1・杯蓋 1・高杯1・壺1 土師器碗・埴輪片	6世紀中葉	周溝のみ遺存

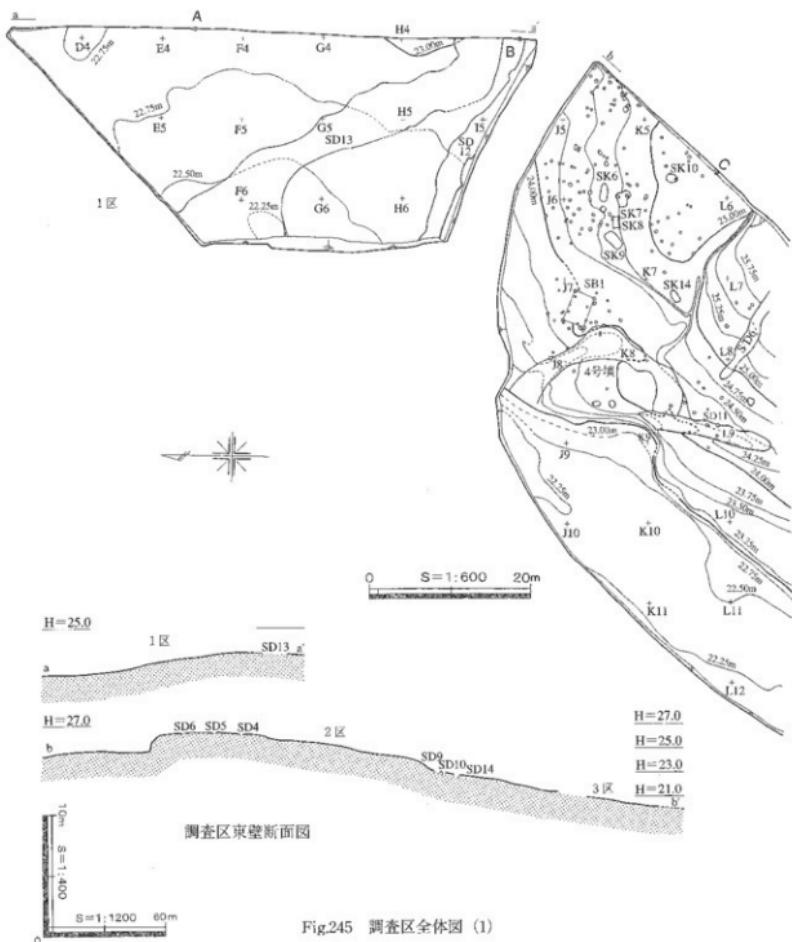
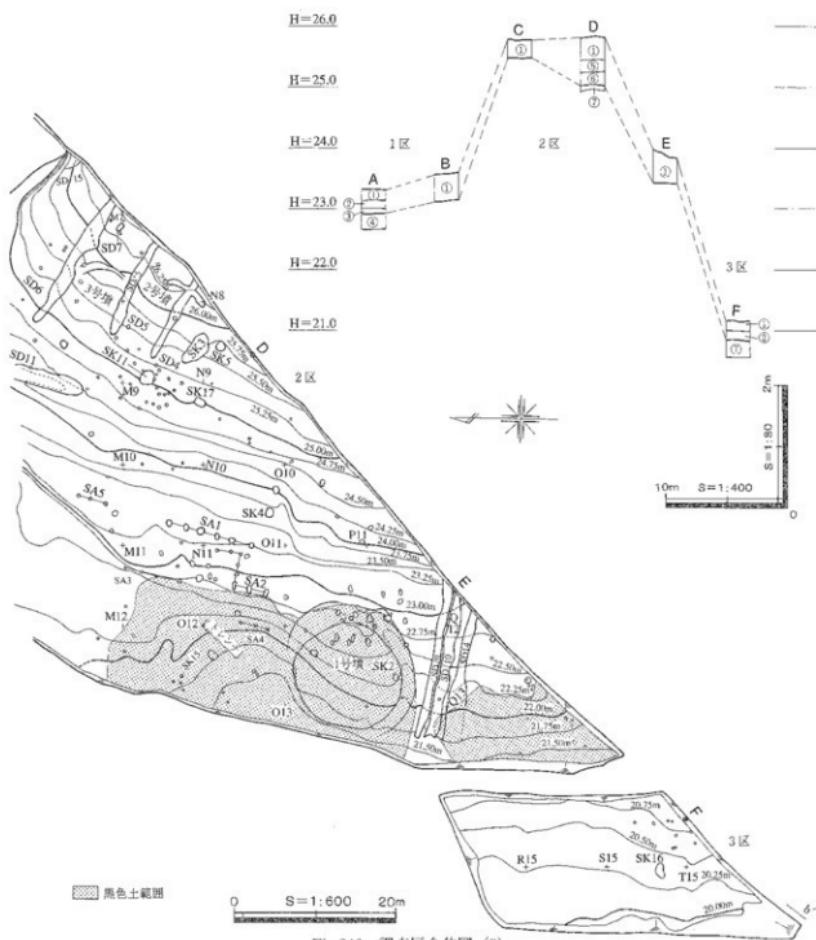


Fig.245 調査区全体図(1)

Tab.198 グリッド座標一覧表(1)

座標名	X	Y	座標名	X	Y	座標名	X	Y
D4	-59180.000	-80420.000	H6	-59220.000	-80440.000	J8	-59240.000	-80460.000
E4	-59190.000	-80420.000	H7	-59220.000	-80450.000	J9	-59240.000	-80470.000
E5	-59190.000	-80430.000	J4	-59230.000	-80420.000	J10	-59240.000	-80480.000
F4	-59200.000	-80420.000	I5	-59230.000	-80430.000	K5	-59250.000	-80430.000
F5	-59200.000	-80430.000	I6	-59230.000	-80440.000	K6	-59250.000	-80440.000
F6	-59200.000	-80440.000	I7	-59230.000	-80450.000	K7	-59250.000	-80450.000
G4	-59210.000	-80420.000	I8	-59230.000	-80460.000	K8	-59250.000	-80460.000
G5	-59210.000	-80430.000	J4	-59240.000	-80420.000	K10	-59250.000	-80480.000
G6	-59210.000	-80440.000	J5	-59240.000	-80430.000	K11	-59250.000	-80490.000
H4	-59220.000	-80420.000	J6	-59240.000	-80440.000	L6	-59260.000	-80440.000
H5	-59220.000	-80430.000	J7	-59240.000	-80450.000	L7	-59260.000	-80450.000



Tab.199 グリッド座標一覧表 (2)

座標名	X	Y	座標名	X	Y	座標名	X	Y
L8	-59260.000	-80460.000	N8	-59280.000	-80460.000	P11	-59300.000	-80490.000
L9	-59260.000	-80470.000	N9	-59280.000	-80470.000	P12	-59300.000	-80500.000
L10	-59260.000	-80480.000	N10	-59280.000	-80480.000	P13	-59300.000	-80510.000
L11	-59260.000	-80490.000	N11	-59280.000	-80490.000	Q12	-59310.000	-80500.000
L12	-59260.000	-80500.000	N12	-59280.000	-80500.000	Q13	-59310.000	-80510.000
M7	-59270.000	-80450.000	N13	-59280.000	-80510.000	Q14	-59310.000	-80520.000
M8	-59270.000	-80460.000	O10	-59290.000	-80480.000	R13	-59320.000	-80510.000
M9	-59270.000	-80470.000	O11	-59290.000	-80490.000	R14	-59320.000	-80530.000
M10	-59270.000	-80480.000	O12	-59290.000	-80500.000	S15	-59330.000	-80530.000
M11	-59270.000	-80490.000	O13	-59290.000	-80510.000	T15	-59340.000	-80530.000
M12	-59270.000	-80500.000	P10	-59300.000	-80480.000	T16	-59340.000	-80540.000

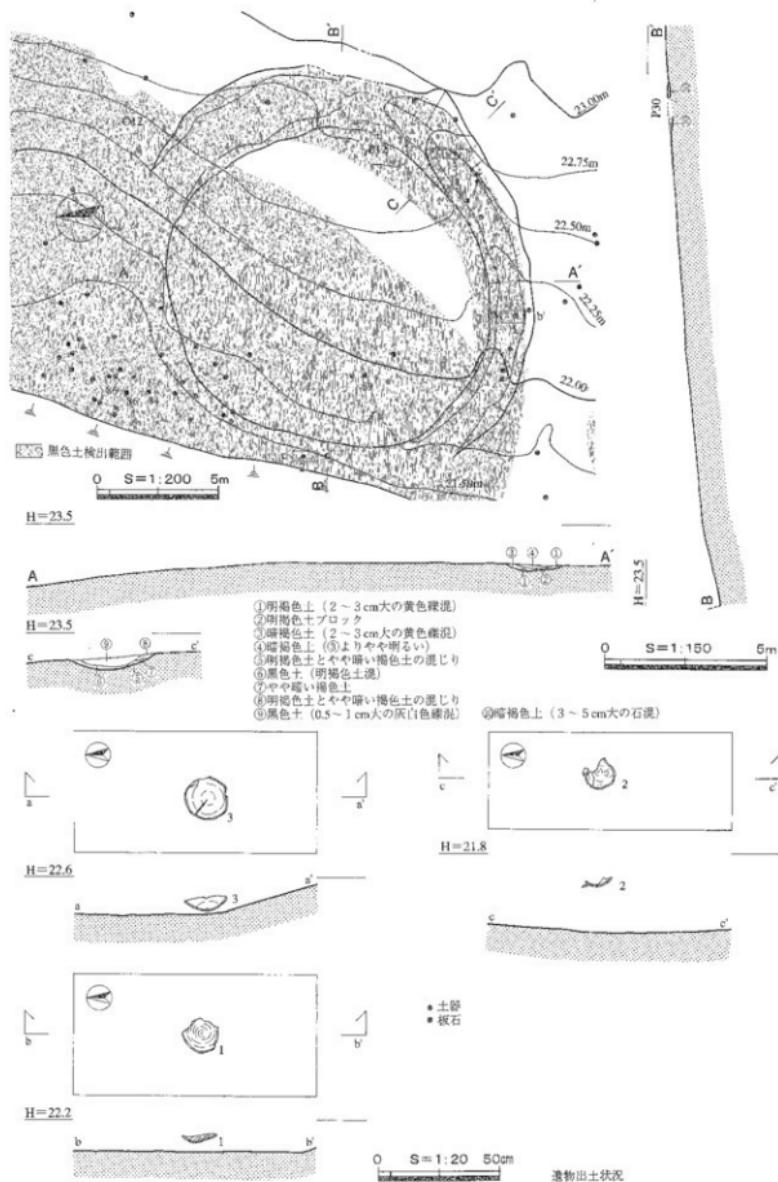


Fig.247 1号墳遺構図

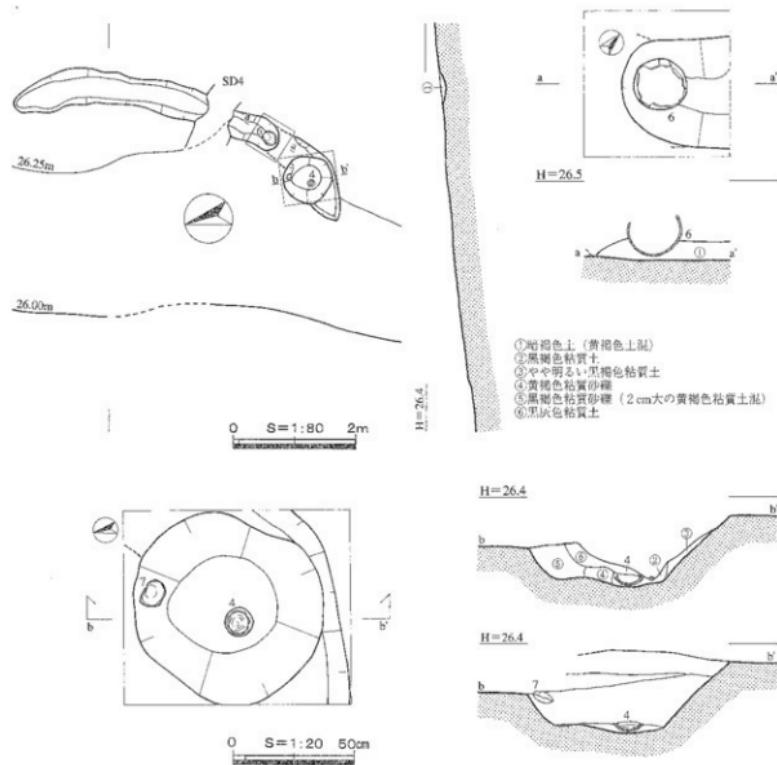


Fig.248 2号墳遺構図

播磨洞1号墳 (SD 1) (Fig.247・250 Tab.197・200 PL.79-79・88)

O 11～P 13グリッドに位置する。周溝下場間の距離は約14mである。溝は周回せずに北～西方向で途切れるが、この部分は斜面の下側にあたり、本来は溝とせずに段状にしていたことも考えられよう。周溝は南東側で一段深く掘られており、そのまま南西方向まで続く。検出時には溝状の遺構として確認され、上面は現代の耕作土により覆われていた。したがって墳丘部分についても平坦に掘削され、本来の墳丘は遺存していない。埋葬施設については痕跡は確認できない。

遺物は周溝内とその周辺から出土している。周溝の南東側、一段深く掘り込まれた底面わずかに浮いた状況で土師器腕3が正位置に置かれ、周溝の南側ほぼ中央からは若干浮いた状況で須恵器蓋1が内面を上にした状況で出土している。意図的に置かれたか転落したかは不明瞭である。須恵器蓋2は古墳の西側、周溝の延長上から出土している。内面を上に向け、底面から浮いた状況であり、完存ではないことから転落遺物の可能性がある。時期は、1・2とともに口縁端部には段の痕跡をわずかに留めることから、TK10併行であろう。曆年代では6世紀中葉に該当するとみられる。そのほか、掘り下げ中に角閃石安山岩の板石片が出土しており、石榴材の可能性がある。埋葬施設は石棺の可能性がある。

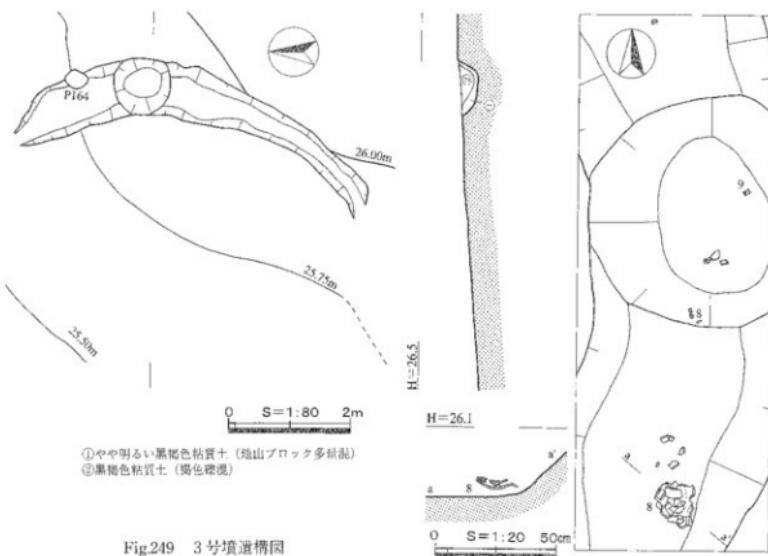


Fig. 249 3号墳遺構図

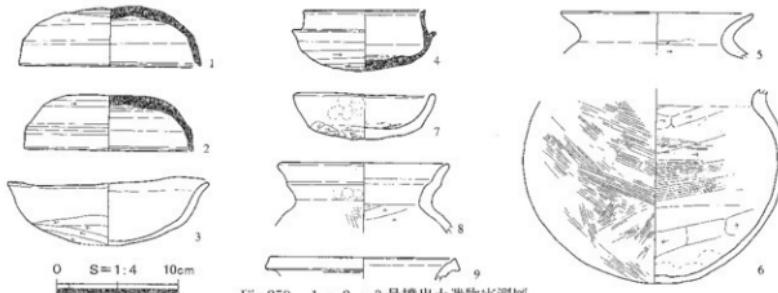


Fig. 250 1・2・3号墳出土遺物実測図

Tab. 200 1・2・3号墳出土遺物観察表

No.	Fig. PL	発掘名	出土位置	面種	法量(cm)	特徴	埴土	色調	備考
1	Fig.250 PL86	1号墳 (S D 1)	埴土下層 杆部	表面器 器高	約150 4.8	木舟部から口縁部に1段の堆。表面 にわざかに沈鉛物の痕みあり。	1~2mmの砂 粒を含む。	淡黄色25Y7/3	L1標部付近 約1/5欠損
	Fig.250 PL88	1号墳 (S D 1)	埴土下層 杆部	表面器 器高	約140 4.5	木舟部から口縁部にかけて1段の後 堆。4段の堆みあり。表面に凹状。	4~6mmの大 粒を含む。	淡黄色25Y7/2	口縫部付近 約1/3欠損
3	Fig.250 PL86	1号墳 (S D 1)	埴土下層 柄	表面器 器高	約165 5.3	口縁部は外側に凹曲する。底面の凹 度は甚しき。内面ナマ。外側削めまたは 横方向のカスリ。	1~2mm程度の 砂粒を多く 含む。	褐色5YR6/8	底面中央付近 のみ欠損
	Fig.250 PL88	2号墳 (S D 2)	底面上 柄部	須磨器 骨身	約100 3.0	受け部の口縁部は内傾して立ち上がる。 表面に明瞭な沈鉛物を入れる。外側 凹曲部へカスリ後で調整。	1~3mm程度 の砂粒を含む。	灰色NA/1	完存
5	Fig.250 PL86	2号墳 (S D 2)	埋中土	四脚器 器高	約158 3.0	口縁部は「く」の字状に外反する。内面 凹曲部に横方向のカスリ。	2mm程度の砂 粒を含む。	に赤い黄褐色10YR7/4	約1/12以下残存
	Fig.250 PL88	2号墳 (S D 2)	埴土下層 茎部	須磨器 骨身	約160 2.4	骨身は不整な建形、内面横方向のカス リ。外側横方向のハックド。付着土。	1~3mm程度の砂粒 を含む。	褐色7.5YR6/6	口縫部付近少損
7	Fig.250 PL88	2号墳 (S D 2)	埴土下層 柄	口縫 器高	約116 3.0	口縫部は極く内溝する。内面無いナダ。 外側横方向の細いカスリ。	1~2mmの砂粒 を含む。	褐色5YR6/8	約1/3欠損
	Fig.250 PL88	3号墳 (S D 3)	埴土下層 奥口部	須磨器 骨身	約140 1.8	口縫部には内段をもつ。外側面とも にコナガ。	2mm以下の砂粒 を含む。	に赤い黄褐色10YR7/4	口縫部へ骨花付近 約1/3残存
9	Fig.250 PL89	3号墳 (S D 3)	底面上	奥口部	約153 1.8	口縫部は下に折垂る。	1mmの砂粒 を含む。	に赤い黄褐色10YR6/4	約1/12以下残存

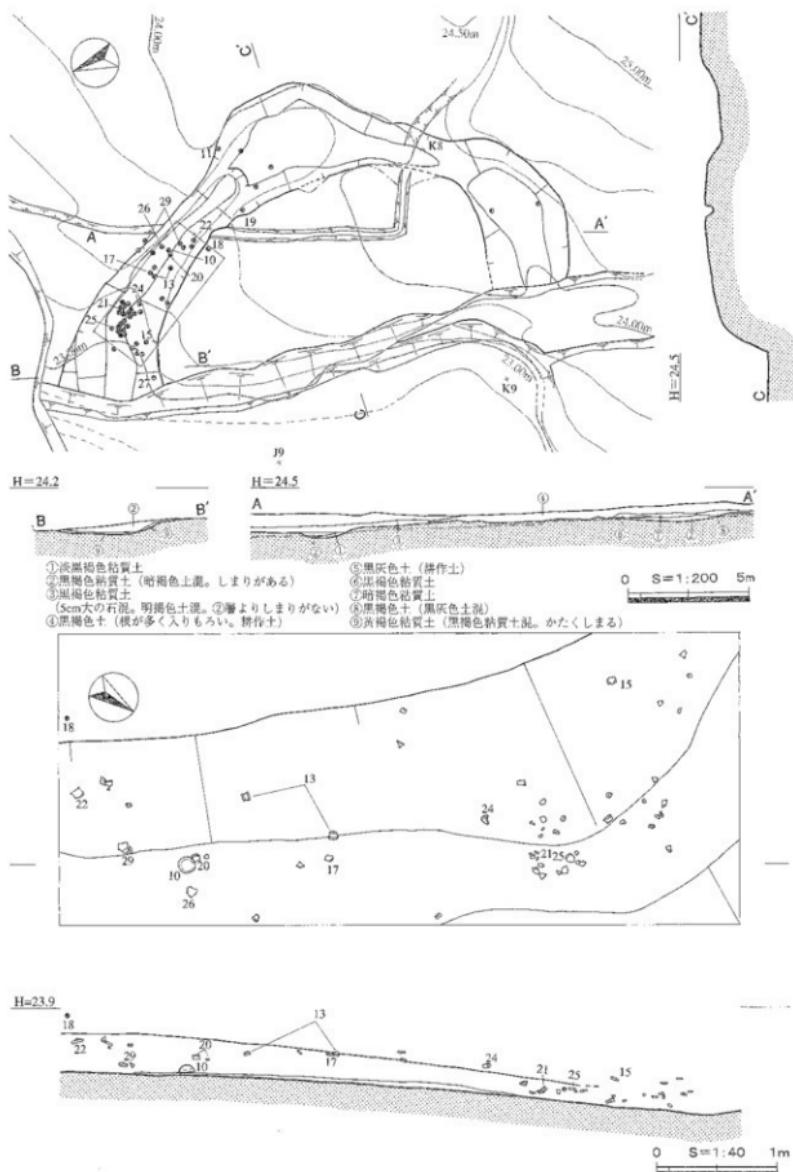


Fig.251 4号墳遺構図

Tab.201 4号墳出土遺物観察表

No.	Fig.	遺物名	出土位置	器種	法量(cm)	特徴	出土	色調	備考
10	Fig.252 PL89 (S D 8)	4号墳 底面上 骨身	口徑 身高	11.6 5.25	立ち上がりはほぼ直立してくじくある。 外底面は圓形で、ツケアリ後方溝跡。	0.5mの砂粒 有り。	灰色SY6/1 灰色SY6/1	立ち上がり 約1/10枚存	
11	Fig.252 PL89 (S D 8)	4号墳 底面上 骨頭部	口徑 身高	11.6 3.2	口部は外側に開けた扇形前面で直角状となる。 外底面は圓形でツケアリ後方溝跡は自然な付着。	細かな白色 砂粒を含む。	灰色SY6/1 灰色SY6/0	約1/2以下残存 柱部約1/5残存	
12	Fig.252 PL89 (S D 8)	4号墳 埋土中 高脚杯	底盤	△ 4.0	4方に透かしがあり。	1mmの砂 粒を含む。	灰色SY6/0	柱部約1/5残存	
13	Fig.252 PL89 (S D 8)	4号墳 埋土上層 蓋	口徑 身高	△ 11.6 △ 5.2	口部部は外側する。蓋部は直角前面で直角状となる。 外底面は圓形で外側面部は自然な付着。	1mmの砂 粒を含む。	灰色SY6/1 灰色SY6/1	約1/3残存	
14	Fig.252 PL89 (S D 8)	4号墳 埋土中 小型直口瓶	口徑 身高	△ 4.2	口部部は外側する。部体内部は横方向の ケリ。	1mmの砂 粒を含む。	灰色SY6/1 灰色SY6/0	約1/8残存	
15	Fig.252 PL89 (S D 8)	4号墳 埋土上層 口縁	口径 身高	△ 26.0 △ 4.2	口部部は扇形付近で外反する。 内面横方向のナデ、外面横方向のケリを含む。 底盤部はみややく傾斜方向のナデ。	0.5mの砂 粒を多く含む。	に bei 黄褐色7SYR6/4 に bei 黄褐色7SYR6/4	約1/2以下残存	
16	Fig.252 PL89 (S D 8)	4号墳 埋土中 口縁部	口径 身高	△ 28.0 △ 4.2	口縫部部は外反し、部体はや外側に 傾む。内面斜面の内ナデ、外面縫 部付近のみややく傾斜方向のナデ。	砂粒の中に 3mmの大砂粒 有り。	に bei 黄褐色10YR7/4 に bei 黄褐色10YR7/4	約1/2以下残存	
17	Fig.252 PL89 (S D 8)	4号墳 埋土上層 口縁部	口径 身高	△ 28.0 △ 3.7	口縫部部は外側する。 内面横方向のナ デ、外面縫方向のケリ後縫部付近 のみややく傾斜方向のナデ。	砂粒を含む。	外)に bei 黄褐色10YR7/3 内)に bei 黄褐色10YR6/4	約1/2以下残存	
18	Fig.252 PL89 (S D 8)	4号墳 埋土上層 口縁部	口径 身高	△ 26.2 △ 4.7	口縫部部は大きく述べて先端部はや や尖る。内面横方向のナデ、外面横方 向のケリ後縫部付近のみややく傾 斜方向のナデ。	1mmの砂 粒を含む。	淡黄褐色10YR6/3 淡黄褐色10YR6/3	約1/2以下残存	
19	Fig.252 PL89 (S D 8)	4号墳 埋土上層 外殻	口径 身高	△ 28.0	断面形状のタガを残り付ける。内面横 方向のケリが顯著に残る。外縫部付 近のハケド。タガはやく傾斜方向のナ デ。	1mmの砂 粒を多く含む。	に bei 黄褐色10YR6/4 に bei 黄褐色10YR6/4	約1/2以下残存	
20	Fig.252 PL89 (S D 8)	4号墳 埋土中層 休部	口径 身高	△ 5.9	内面横方向 ともに方向の タガを残す。	1mm以下の砂 粒を多く含む。	褐色7SYR7/6 褐色7SYR7/5	約1/2以下残存 約1/2以下残存	
21	Fig.252 PL89 (S D 8)	4号墳 埋土下層 休部	口径 身高	△ 5.2	内面横方向 ともに方向の タガを残す。	2mmの砂 粒を多く含む。	褐色7SYR7/5 褐色7SYR7/5	約1/2以下残存 約1/2以下残存	
22	Fig.252 PL89 (S D 8)	4号墳 埋土上層 休部	口径 身高	△ 5.7	内面横方向のタガを残り付ける。タガの 部分は外反する。内面横方向が鏡面が顯 る。外縫部付近のみややく傾斜方向のハ ケド。	1mmの砂 粒を多く含む。	淡黄褐色10YR8/3 淡黄褐色10YR8/3	約1/2以下残存 約1/2以下残存	
23	Fig.252 PL89 (S D 8)	4号墳 埋土上層 休部	口径 身高	△ 4.8	内面横方向のタガを残り付ける。内面横 方向のケリ。外縫部付近のみややく傾 斜方向のタガのみややく傾斜方向のナ デ。	2mmの砂 粒を多く含む。	淡黄褐色10YR8/3 淡黄褐色10YR8/3	約1/2以下残存 約1/2以下残存	
24	Fig.252 PL89 (S D 8)	4号墳 埋土上層 休部	口径 身高	△ 6.1	内面横方向 ともに方向の タガを残す。	0.5~1mmの大 砂粒を含む。	褐色SVR7/8 褐色SVR7/8	-	
25	Fig.252 PL89 (S D 8)	4号墳 埋土上層 休部	口径 身高	△ 6.7	外反する。内面横方向、外縫部は傾 斜方向のナデ。	明黄色10YR6/8 明黄色10YR6/8	-		
26	Fig.252 PL89 (S D 8)	4号墳 埋土上層 休部	口径 身高	△ 7.9	内面横方向の穀いナデ。外縫部方向 のハケド。	0.5~1mmの大 砂粒を含む。	外) 深褐色7SYR7/8 内) 深褐色7SYR5/4	-	
27	Fig.252 PL89 (S D 8)	4号墳 意面下 底盤	口径 身高	△ 22.0 △ 5.6	内縫部は削除する平滑部をもつ。内面横 方向のハケド。外縫部方向のハケド。	0.5~1mmの大 砂粒を含む。	に bei 黄褐色10YR6/3 に bei 黄褐色10YR6/3	約1/2以下残存	
28	Fig.252 PL89 (S D 8)	4号墳 埋土中 休部	口径 身高	△ 18.5 △ 3.2	内縫部は削除する平滑部をもつ。内面横 方向のハケド。	1mmの砂 粒を多く含む。	淡黄褐色10YR6/3 淡黄褐色10YR6/3	約1/8残存	
29	Fig.252 PL89 (S D 8)	4号墳 埋土上層 休部	口径 身高	△ 16.0 △ 4.3	内縫部は削除する平滑部をもつ。内面横 方向のハケド。	1mm以下の 砂粒を多く含む。	に bei 黄褐色10YR7/4 に bei 黄褐色10YR7/4	SI層部一部 約1/4残存	
30	Fig.252 PL89 (S D 8)	4号墳 埋土中 休部	口径 身高	△ 17.0 △ 6.0	内縫部は削除する平滑部をもつ。内面横 方向のハケド。	1~1.5mmの大 砂粒を含む。	淡黄褐色10YR6/3 淡黄褐色10YR6/3	約1/10以下残存	

播磨洞2号墳(SD2)・3号墳(SD3)(Fig.248~250 Tab.197・200 PL79~81・88・89)

いずれも厚さ30~40cm程の耕作土を除去した後に検出された。

2号墳はM7・8グリッドに位置する。周囲は北西に下る丘陵である。丘陵のほぼ中央付近で溝が弓状に検出された。溝は直径約8~9mの円形状になることが推定され、遠縄内から土器も出土したことから古墳に伴う周溝と判断した。出土した遺物は、須恵器の杯身4・土師器壺5・6・壺7である。6は周溝の底部に正位

置で置かれていた。周溝の西端には円形の掘り込みがあり、ここから4・7が出土している。埋土が類似しており、周溝を掘り下げた後に検出したため、切り合の可能性も否定できない。4は底面上に正位で、7は掘方に沿って立ち上がりの縁から出土した。4はT K43併行で、曆年代は5世紀後葉と考えられる。つくりが良いことから搬入されたことも考えられる。

3号墳はL7グリッドに位置する。西隣に2号墳がある。丘陵の中央からわずかに東側

Tab.202 古墳以外の溝一覧表

SD番号	グリッド名	主輪	長さ(m)	最大幅(m)	深さ(cm)
S D 4	M7・8	N - 60° - W	11.0	1.4	20
S D 5	M7・8LB	N - 63° - W	12.8	1.4	15
S D 6	K8L6・8	N - 58° - W	17.5	2.3	50
S D 7	L7, M7	N - 45° - W	1.0	0.5	11
S D 9	P11~13Q11	N - 79° - W	19.1	1.4	25
S D 10	P12・13	N - 78° - W	17.9	1.6	20
S D 11	Q11・12	N - 10° - E	15.9	2.3	38
S D 12	I4・5	N - 63° - W	27.8	3.6	35
S D 13	E5・6, P5・6 G4・5, H4・5	N - 30° - W	44.1	8.6	143
S D 14	Q11~13	N - 76° - W	12.2	2.6	35
S D 15	M6	N - 20° - W	1.3	1.6	21

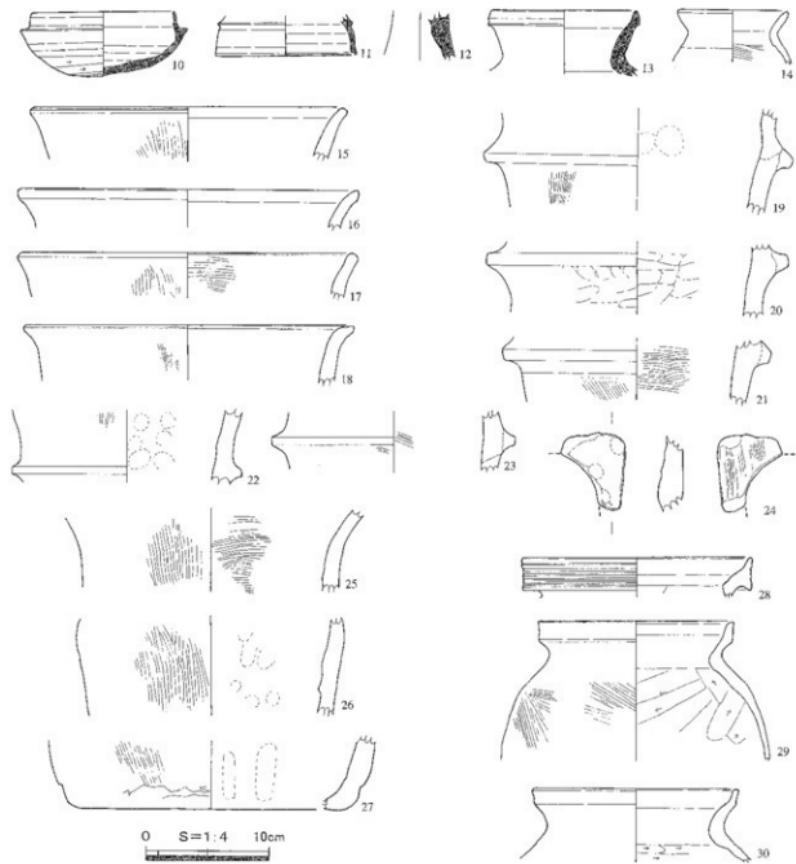
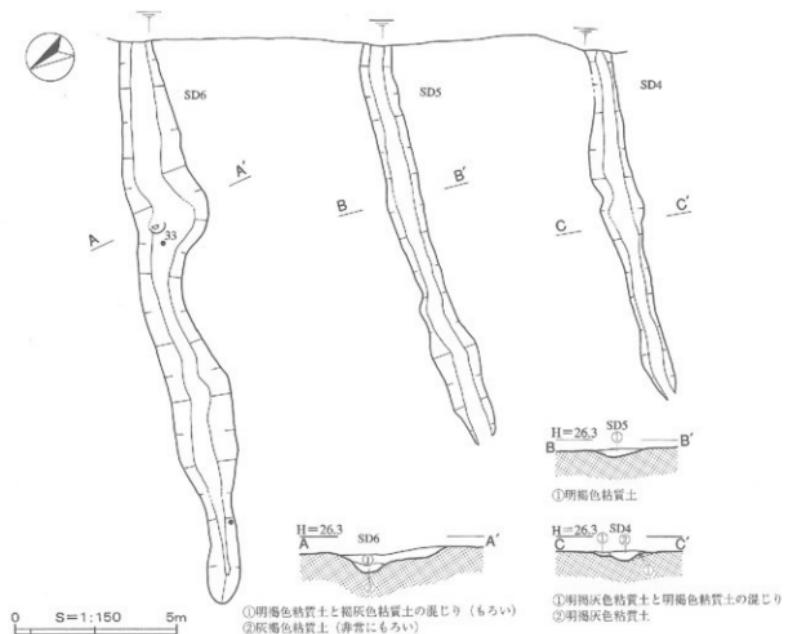
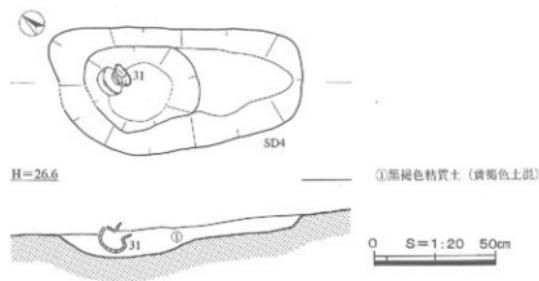


Fig.252 4号墳出土遺物実測図

にはずれた付近で溝が弓状に検出された。直径8~9mの円形状になることが予想され、2号墳と同様に古墳と判断した。周溝内に土坑状の掘り込みが存在する。8・9はこの掘り込みからやや南側で、底面から若干浮いた状況で出土している。体部の形状が不明なため時期の判断は難しいが、複合口縁がほとんど段になり器壁も厚く、口縁部がやや開くことから古墳時代後期初頭に該当しよう。須恵器は出土していないが、TK23~47併行期かややそれよりも下る可能性もある。暦年代では5世紀末から6世紀初頭の範疇になろう。

播磨洞4号墳 (S D 8) (Fig.251・252 Tab.197・201 PL.82・83・88・89)

4号墳はI~K7・8グリッドに位置する。周囲は畠として平坦に掘削されており、北西側は大きく削られる。南側はSD11により掘削される。溝の幅は一定しないが半円状に回る溝状遺構として検出した。周溝下場間の距離は概ね18m程度と推定する。周溝は東側で膨らみ、一旦くびれた後に斜面の下側に向かいやや広くなる。遺物は周溝の東~北方向に集中している。これは斜面の下側にあたり、遺物のほとんどは細片であることが



ら、破壊され転落したと考えられる。須恵器は杯身10、杯蓋11、高杯脚12、壺口縁部13で、10は周溝底面に天地逆の状況ではほぼ完存の状況で出土した。意図的なものか転落かは判断しきる。15~27は埴輪である。15~18は口縁部である。径は円筒部よりも大きく開かず傾きも小さいことから、壺形ではなく、円筒もしくは朝顔形埴輪の先端部と判断した。19~23は体部で断面台形状のタガが貼り付けられる。24は円形の透かし部の一部である。25・26は肩部付近、27は底部である。また28は弥生終末期の甕、29・30は土師器の甕である。10はT K10件行もしくは若干新しいか。暦年代は6世紀中葉が考えられる。埋葬施設は確認できなかった。

SD 7・15 (Fig.254 Tab.202・203 PL.81・84・88・94)

溝状遺構ではあるが、古墳時代の遺物が出土した。SD

7はL・M7グリッドに位

置する。南東-北西に向く

短い溝で、北西側が土坑状

に深くなる。周囲は丘陵の

中央やや東で、3号墳の東

隣にある。須恵器甕31は正

位置ではあるが斜面側にや

や傾いた状況で出土してい

る。底面からは若干浮いて

いるもののほぼ完存してお

り、2号墳においても須恵器

の杯身が周溝内から出土

したことから意図的に

置かれたと判断した。時期

はTK23件行、暦年代は5

世紀末が該当しよう。

SD15はL6グリッド、

2区の丘陵中央からやや東

に下る位置で、耕作により

東側は大きく掘削されてい

る。南側は調査範囲外にな

るが、南側に延びていると

みられる。ほぼ底面上から

須恵器の体部32が出土し

ている。古墳時代中-後期

の所産である。

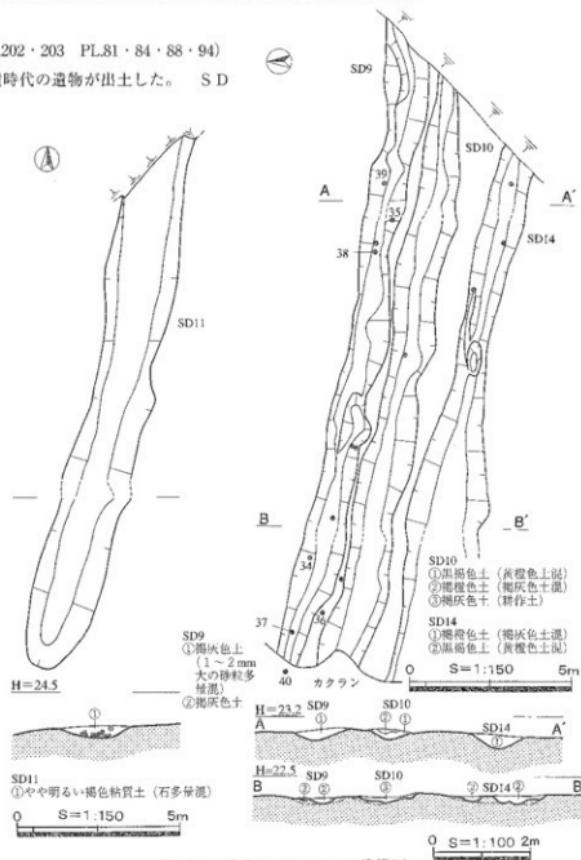


Fig.255 SD 9・10・11・14遺構図

Tab.203 SD 7・15出土遺物観察表

No.	Fig. Pl.	遺物名	出土位置	看種	法量(cm)	特徴	胎土	色調	備考
31	Fig.253 PL.88	須恵器 甕	底面上	須恵器 甕	L径 H高 最大胴径 底径	10.0 10.9 11.9 2.5	標準的な作部で存在。体部中央に3本の横溝。底面下側は横方向のカキ目後波状線。上側カキ目後波状判定文。口縁部中央に断面三形が形状の突起。下端に2本、上側に1本の脚状。	胎土含む。 にぶい黄褐色19YR6/3	口縁部約1.3欠損
32	Fig.253 PL.94	須恵器 甕	底土下層 甕部	須恵器 甕	△	9.3	外側にカキ目後3~4本単位の横方向のハケ目。内面青苔状波状の凹具。	褐色5Y5/1~黒褐色 25Y6/1	-

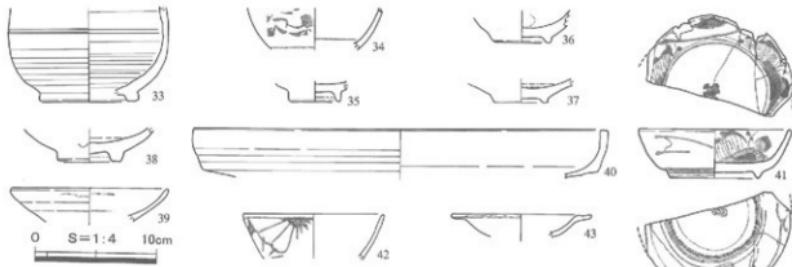


Fig.256 S D 6・9・11・14出土遺物実測図

Tab.204 S D 6・9・11・14出土遺物観察表

No.	Fig. PL.	遺構名	出土位置	器種	法量(cm)	特徴	粘土	色調	備考	
33	Fig.256 PL.32	S D 6	埋土上層	鬲窓 壺形か 底径	高さ △ 77 底径 74	外表面部に2本の深い沈線。断面連合部形状の高台をもち、接地面より内側は直角。内面ともに水引き溝が残る。	密	淡黄色5Y7/3	約1/4残存	
34	Fig.256 PL.77	S D 9	埋土上層	壺形 碗形部	高さ △ 35	外表面に草文文、内面に1条の圓彫があり。	密	灰白色5GY8/1	-	
35	Fig.256 PL.77	S D 9	埋土下層	壺形 碗形部	高さ △ 16 底径 42	内外面にやや青味をかる施塗。高台の接地面のみ露胎。	密	灰白色2.5GY8/1	底部付近完存	
36	Fig.256 PL.77	S D 9	埋土上層	壺形 壺形 底利か	高さ △ 48 底径 48	内面および高台の底面地盤には露胎。高台内側に砂利が残る。	密 砂粒なし	灰白色NB/0	底部付近完存	
37	Fig.256 PL.92	S D 9	埋土上層	壺形 碗形部	高さ △ 20 底径 44	浅い削り出し高台をもつ。足込み部は施塗次に施塗。外底塗付近には無施塗。	砂粒わずか に含む	にぶい黄褐色10YR6/4	底部付近完存	
38	Fig.256 PL.92	S D 9	埋土下層	壺形 壺底部	高さ △ 27	前面方頭の高台をもつ。見込み中央付近が円錐形に深む。底部付近内面側ともに露胎。外面上にわざかに青味をかる施塗。	密 (微細な 砂粒わずか に含む)	にぶい黄褐色10YR6/3	底部付近完存	
39	Fig.256 PL.92	S D 9	埋土下層	壺形 HLL1型漆器	口径 △ 130	内面および外表面に細網のみ露胎。内面口縁部露胎と内底部に輪郭線の施塗。	密	にぶい橙色7.5YR6/4	約1/10残存	
40	Fig.256 PL.92	S D 9	横出土面上	土師質土器 漆器	口径 △ 340 高さ △ 39	L字型の横出土面上に土師質土器と漆器が置かれており、上部は漆器である。漆器は漆器口縁部で固定する。内外面施塗方向のテクスチャ。	1 m 以下の 砂粒を含む。	漆色7.5YR6/6	約1/12以下残存	
41	Fig.256 PL.77	S D 11	堆土中	染付 壺	口径 高さ 底径	125 40 72	前面に圓形状の窓。漆器ののみ無施塗。口縁部には露胎。内側には五瓣花、周辺にはビン具。外表面は青白陶に2条の施塗。口縁部は風景画。中央には墨書き。	密	灰白色5GY8/1	約1/2残存
42	Fig.256 PL.77	S D 14	埋土上層	壺形 壺口縁部	口径 △ 11.6 高さ △ 37	外表面に漆器部下に1条の施塗。以下削り出しの支柱を残す。	密	明緑灰色7.5YR8/1	約1/6残存	
43	Fig.256 PL.92	S D 14	埋土上層	壺形 壺口縁部	口径 △ 11.6 高さ △ 18	外表面は外側に崩し、平底となる。内面及び壺口縁部付近施塗。	密	灰褐色3Y4/1	約1/6残存	

(2) 古墳時代以外の溝状造構

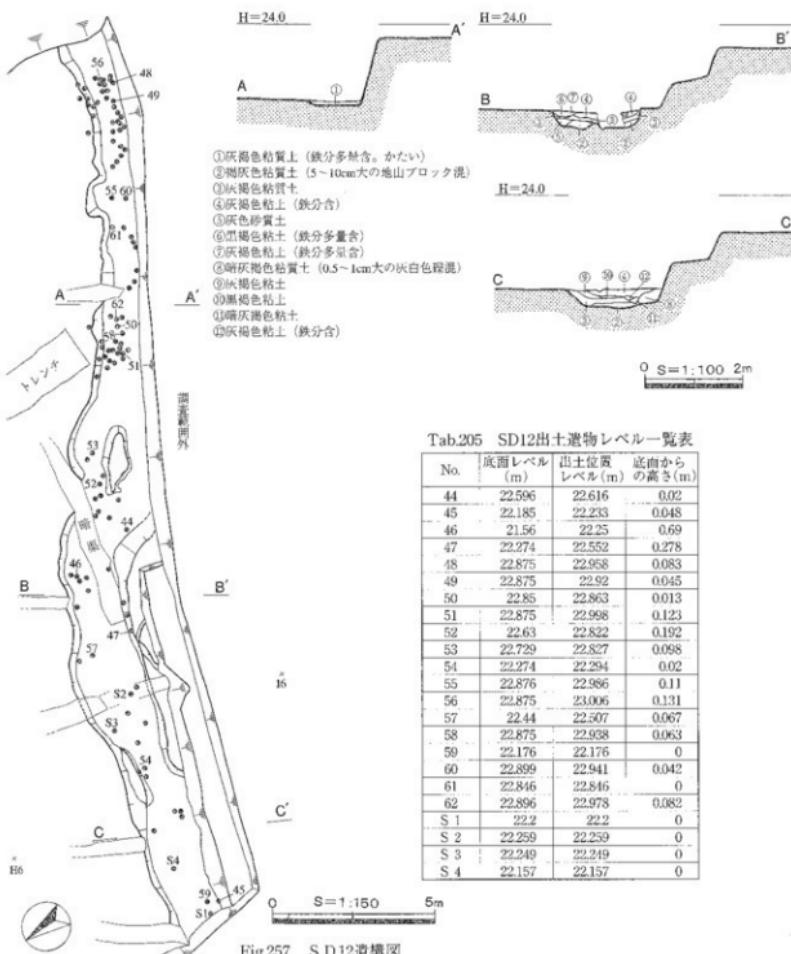
S D 4・5・6 (Fig.253 Tab.202・204 PL.84・92)

K 8～M 7グリッドに位置する。2区の丘陵中央付近にある。いずれの遺構も調査区外まで延びており、等高線に直交するように直線状に延びる。断面はU字形で凹凸は少ない。埋土は分層できるが、いずれもしまりがなく、もろい。S D 6の掘り下げ中に徳利の体部33が出土した。淡い緑色の釉がかかり、近世後期の石州系の陶器であろう。遺構の性格は区画排水、道などとして近年まで使用されたと推測する。

S D 9・10・11・14 (Fig.255・256 Tab.202・204 PL.77・92・93)

P 11～Q 13グリッドに位置する。東西方向に延びる3条の溝で、北から S D 9・10・14がほぼ並行する。付近は東から西方向に向かう緩やかな斜面である。重複関係は認められないが、埋土は類似する。東側は調査区外になるが、遺構は延びる。S D 9から染付碗34～35、徳利とみられる36、陶器鉢37・38、陶器皿39、土師質土器の焼成40が出土した。S D 14からは染付碗42、陶器皿43が出土している。42は肥前系であるが、43は灯明皿で、在地産とみられる。いずれも近世後期以降である。S D 4・5・6と同様に畠間、道、区画などが想定できよう。

S D 11はK 8～L 9グリッドに位置する。2区の丘陵中央から北に向かい傾斜しており、等高線には直交し、北側で4号墳を掘削する。埋土はもろく、拳大の石が混入しており、調査前に存在した道の際に当たることから、



Tab.205 SD12出土遺物レベル一覧表

No.	底面レベル (m)	出土位置 レベル(m)	底面から の高さ(m)
44	22.596	22.616	0.02
45	22.185	22.233	0.048
46	21.56	22.25	0.69
47	22.274	22.552	0.278
48	22.875	22.958	0.083
49	22.875	22.92	0.045
50	22.85	22.863	0.013
51	22.875	22.998	0.123
52	22.63	22.822	0.192
53	22.729	22.827	0.098
54	22.274	22.294	0.02
55	22.876	22.986	0.11
56	22.875	23.006	0.131
57	22.44	22.507	0.067
58	22.875	22.938	0.063
59	22.176	22.176	0
60	22.899	22.941	0.042
61	22.846	22.846	0
62	22.896	22.978	0.082
S 1	22.2	22.2	0
S 2	22.259	22.259	0
S 3	22.249	22.249	0
S 4	22.157	22.157	0

Fig.257 SD12遺構図

道のための暗渠である可能性がある。遺物は掘り下げ中に41が出土した。染付の皿で、内面中央には五弁花がある。肥前系で、19世紀の所産である。付近の開発がこの時期まで遡ると考えられる。

SD12 (Fig.257・258 Tab.202・205・206 PL.86・90・93)

1区 I 4 ~ H 6 グリッドに位置する。2区の丘陵が北西方向に延びるが、低地との境でこれに沿うように蛇行しながら平野に延びる。幅は約 2 ~ 3 m であるが、遺構の南部は調査区外となる。蛇行しながら西流する。断面は浅い榎状で、底面は石が抜けたような穴が随所にあり、凹凸が大きい。縄文から奈良時代まで、幅広い時期の遺物がほぼ全域にわたり出土している。須恵器は杯蓋44、45、土師器は壺46、榎47である。44は飛鳥時代、7世紀の中から後半のものか。45は奈良時代いわゆる環状のつまみをもつ蓋で、口縁端部は欠損するが、かえりは無

Tab.206 S D12・13出土遺物観察表

No.	Fig. PL.	遺構名	出土位置	器種	法量(cm)	特徴	胎土	色調	備考
44	Fig.258 PL.90	S D12	埋土下層	須恵器 杯蓋	口径 11.8 蓋高 △ 3.5	口縁周部付近は下方に向屈する。底面 付近に浅い凹部をもつ。	粗粒の砂粒 を含む。	灰色N6/1	約1/6残存
45	Fig.258 PL.90	S D12	底面上	須恵器 杯蓋	径 24	リム部にのみつまみ状の突起を付ける。口縁 付近はわずかに下を向くが欠損す る。	0.5mm以上の 砂粒を多く含む。	灰色5V6/1	天井部付近約1/4 残存、遺部1/12 以下欠存
46	Fig.258 PL.90	S D12	底面上	土師器 直筒口瓶	口径 11.8 蓋高 △ 3.6	口縁部を横く「」の字形に彫曲する。 外側部とともに横方向のナギ、内側部を 弧状に横方向のナギ。	1mm以上の 砂粒を多く含む。	褐色2.5YR6/8	約1/12残存
47	Fig.258 PL.90	S D12	柱土中層	土師器 縦縫口器	口径 11.2 蓋高 △ 4.3	口縁部に横く「」の字形に彫曲する。 外側部を横方向のナギ、内側部を 弧状に横方向のナギ。	0.5mm以上の 砂粒を含む。	に赤い黄褐色10YR6/4	約1/6残存
48	Fig.258 PL.90	S D12	底面上	帶弦文土器 深腹盤	径 48	縁部からがったる位置に断面が角形状 のやせたさぎの形跡を貼り付ける。	1mm程度の 砂粒を含む。	褐色5YR7/8	—
49	Fig.258 PL.90	S D12	底面上	生土土器 腹尾片	口径 22.0 底径 29	外側に直角三角形の突起を2本貼り付ける。 内側面には不規則な凹部。	1~2mmの砂 粒を含む。	に赤い黄褐色10YR7/3	約1/12以下残存
50	Fig.258 PL.90	S D12	底面上	生土土器 口縁部	口径 15.6 底径 20.0	縁部部分や外反する。剥落が著しく 内外部ともに透視不明瞭。	2mmの砂粒 を多く含む。	褐色10YR4/1	約1/8残存
51	Fig.258 PL.90	S D12	壁上中層	生土土器 口縁部	口径 17.8 底径 22.0	縁部部分が外反する。剥落が著しく 内外部ともに透視不明瞭。	2mmの砂粒 を多く含む。	明黄色10YR7/6	約1/6残存
52	Fig.258 PL.90	S D12	壁上中層	生土土器 口縁部	口径 13.0 底径 19.0	縁部部分は斜め下に内面をもつ。剥 落が著しくいため透視不明瞭。	5mm以下の粉 砂を多く含む。	淡黄色2.5YR8/3	約1/3残存
53	Fig.258 PL.90	S D12	埋土上層	土器 底盤	径 5.8 底径 6.6	底盤から外板部ながら立ち上がる。内 側面には側面を直角に彫刻した小切欠。	1mmの砂 粒を含む。	褐色7.5YR6/8	底部付近存有
54	Fig.258 PL.90	S D12	底面上	生土土器 底盤	径 3.6 底径 6.0	底盤から外板部ながら立ち上がる。内 側面には側面を直角に彫刻した小切欠。	1~2mmの白 色砂粒を含む。	淡黄色2.5YR7/4	底部付近存有
55	Fig.258 PL.90	S D12	底面上	生土土器 底盤	径 4.3 底径 6.6	底盤から外板部ながら立ち上がる。内 側面には側面を直角に彫刻した小切欠。	外) 棕褐色5YR6/6 (内) 淡褐色2.5YR7/3	約1/4残存	
56	Fig.258 PL.90	S D12	埋土下層	生土土器 底盤	径 3.3 底径 6.9	底盤から外板部ながら立ち上がる。内 側面には側面を直角に彫刻した小切欠。	外) 棕褐色5YR6/6 (内) 淡褐色2.5YR7/3	約1/4残存	
57	Fig.258 PL.90	S D12	埋土下層	生土土器 底盤	径 3.2 底径 6.0	底盤から外板部ながら立ち上がる。内 側面には側面を直角に彫刻した小切欠。	外) 棕褐色5YR6/6 (内) 淡褐色2.5YR7/1	約1/3残存	
58	Fig.258 PL.90	S D12	埋土下層	生土土器 底盤	径 4.7 底径 10.0	底盤から外板部ながら立ち上がる。内 側面には側面を直角に彫刻した小切欠。	外) 淡黄色2.5YR7/4	約1/5残存	
59	Fig.258 PL.90	S D12	底面上	生土土器 底盤	径 4.0 底径 9.0	底盤から外板部ながら立ち上がる。内 側面には側面を直角に彫刻した小切欠。	外) 淡黄色2.5YR6/3	約1/4残存	
60	Fig.258 PL.90	S D12	底面上	生土土器 底盤	径 5.3 底径 10.2	底盤から外板部ながら立ち上がる。内 側面には側面を直角に彫刻した小切欠。	外) 淡黄色2.5YR6/3 (内) 淡褐色2.5YR7/1	約1/4残存	
61	Fig.258 PL.94	S D12	底面上	生土土器 底盤	径 4.2 底径 11.0	底盤から外板部ながら立ち上がる。内 側面には側面を直角に彫刻した小切欠。	外) 淡黄色2.5YR6/3 (内) 淡褐色2.5YR7/4	約1/5残存	
62	Fig.258 PL.94	S D12	壁上中層	生土土器 底盤	径 5.7 底径 9.14	底盤から外板部ながら立ち上がる。内 側面には側面を直角に彫刻した小切欠。	外) 淡黄色2.5YR6/3 (内) 淡褐色2.5YR7/4	約1/5残存	
63	Fig.258 PL.94	S D12	埋土中層	打製石器 縦刃部	口径 16.0 底径 4.0	口縁部は下に膨張し、上面には3本 の直路孔をもつ。	1mm以下の砂 粒を含む。	淡黄色2.5YR8/4	約1/10残存
64	Fig.258 PL.94	S D12	埋土上層	打製石器 底盤	径 6.6 底径 2.0	刃先から外反しながら立ち上がる。内 側面には側面を直角に彫刻した小切欠。	1~2mmの砂 粒を多く含む。	褐色7.5YR6/3	約3/4残存
SI	Fig.258 PL.53	S D12	底面上	打製石器	長さ 5.1 幅 1.4 厚さ 0.25	幅1.4cm、厚さ0.25cm、重さ: 620g 呼吸 付近に火候付近と中央付近は欠損する。中央付近 がやや崩れる。前面はやや劈裂。	石材: 網状鉄の入った板状安山岩	基部欠損	
S2	Fig.258 PL.53	S D12	底面上	打製石器	長さ 5.1 幅 6.7~8.7 厚さ 0.31	長さ 5.1cm、幅6.7~8.7cm、厚さ: 0.31mm 側面から外反しながら立ち上がる。内 側面には側面を直角に彫刻した小切欠。	石材: 白堊の粗粒花崗岩	基部欠損	
S3	Fig.258 11.93	S D12	底面上	打製石器	長さ 5.1 幅 8.5 厚さ 0.31	長さ 5.1cm、幅8.5cm、厚さ: 0.31mm 側面から外反しながら立ち上がる。内 側面には側面を直角に彫刻した小切欠。	石材: 白堊の入った板状安山岩	基部欠損	
S4	Fig.258 PL.93	S D12	底面上	打製石器	長さ 5.1 幅 11.0 厚さ 0.31	長さ 5.1cm、幅11.0cm、厚さ: 0.31mm 側面から外反しながら立ち上がる。内 側面には側面を直角に彫刻した小切欠。	石材: 板状花崗岩の発達した四角安山岩	基部欠損	
S5	Fig.258 PL.93	S D13	底面上	石器	長さ 5.1 幅 12.8 厚さ 0.32	長さ 5.1cm、幅12.8cm、厚さ: 0.32mm 側面はレンズ状で、逆説する板状調整。	石材: 黒曜石	基部向左側部欠損	

ないと判断できる。奈良時代後半の所産で、遺構の西端付近で底面直上で出土している。

時期が遅る遺物は、突芯文の深鉢49、弥生土器壺または甌48・50～52、底部53～62、石製品では打製石器もしくは斧S 1～4がある。このうちS 4は板状節理の発達した角閃石安山岩で、節理面を利用して先端に刃を付けている。このように遺構内からは縄文時代晩期から弥生時代前期、弥生時代中期の遺物が出土しており、調査区内では確認できないものの該当する時期の遺構が近くに存在する蓋然性は高いと判断できる。ただし遺構の時期は奈良時代であり、溝の掘削状況からも水の管理を目的としていることがうかがえる。奈良時代の遺構は調査区内ではS D12のみであるが、今後付近に遺構が検出されるものと期待される。

S D 1 3 (Fig.258・259 Tab.202・206 PL.86・93・94)

1区E 5～H 4グリッドに位置する。S D12の北隣りにある。調査区東端で大きく北方向に向きを変え、調査区西端で幅が広くなる。規模が大きく、水が流れた痕があることから、自然流路と考えられる。土層断面を観察すると、中央から東側では一段低い掘り込みがあり、底面南側に砂利の溝が延びていることが分かる。また、北端にも真東から真西方向に底面から一段下がる溝があるが、これはS D13に伴うものではなく、それ以

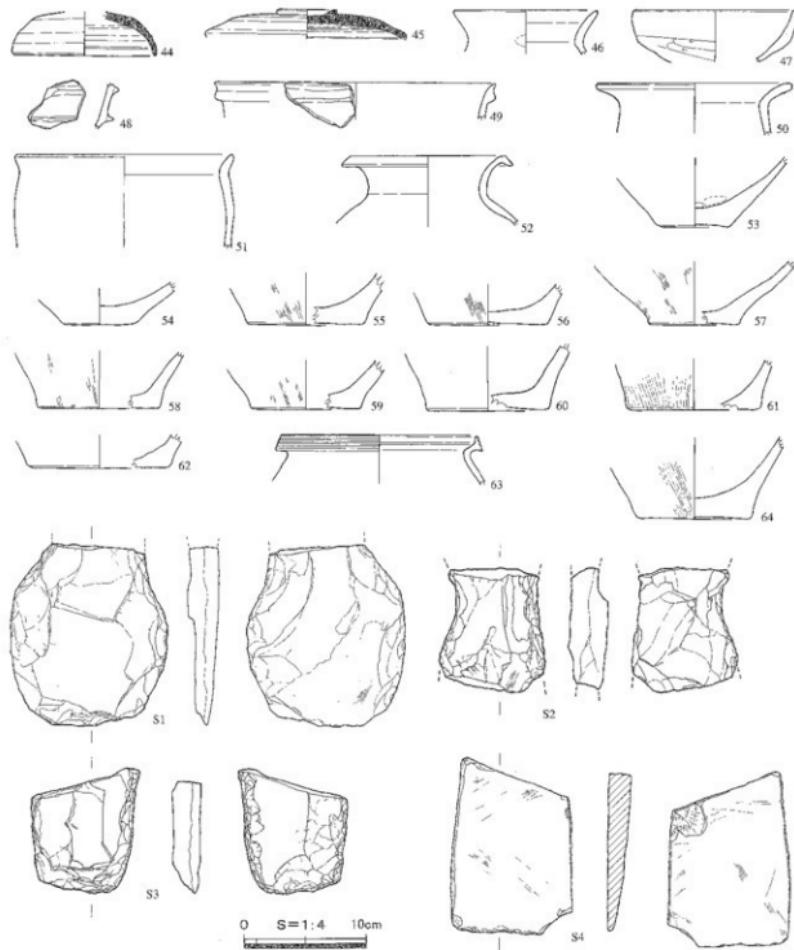
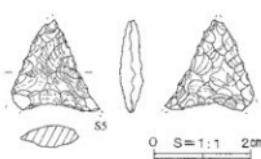


Fig.258 SD 12・13出土遺物実測図

前の流路の痕跡である。またA-A'やC-C'の土層をみても、SD 13の東側と西側で流路が変更されたことが分かる。

SD 13は周囲を含め一時期の流路であり、このようなことが繰り返された状況がうかがえる。SD 13の時期であるが、63の弥生時代中期後半の甕が出土しているがこれは埋土の最上層である。掘り下げ中には64、底面にはS 5があり、これが遺構の年代にちかい。



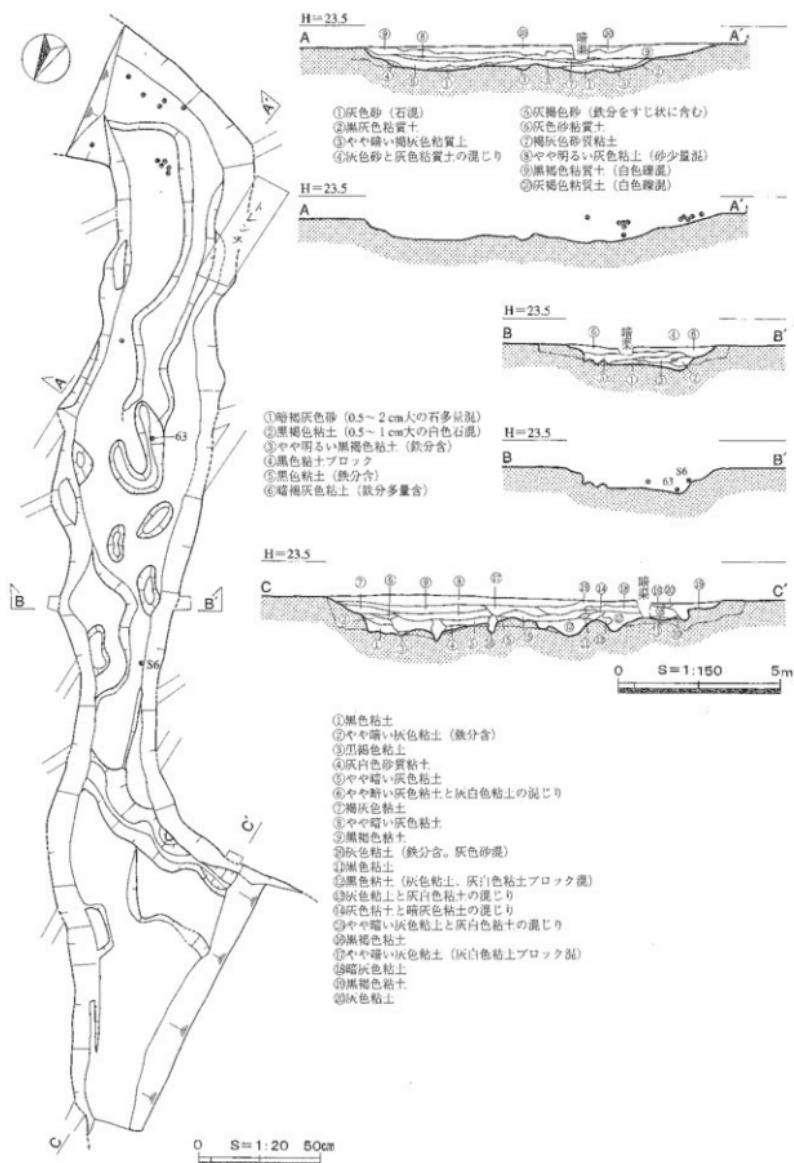


Fig.259 S D 13遺構図

(3) 土坑

調査区内で土坑17基を確認した。時期が明らかなものは古墳時代1基、近世2基であるが、掘方から埋葬施

設の可能性のある土坑2基もある。主に2区の丘陵部中央から東斜面上に散在する。2区の東斜面付近にはピットが比較的密にあり、これと対応する可能性のあるものもみられる。3区からは1基のみ、1区からは検出されていない。

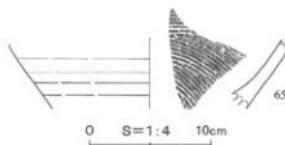


Fig.261 SK 1出土遺物実測図

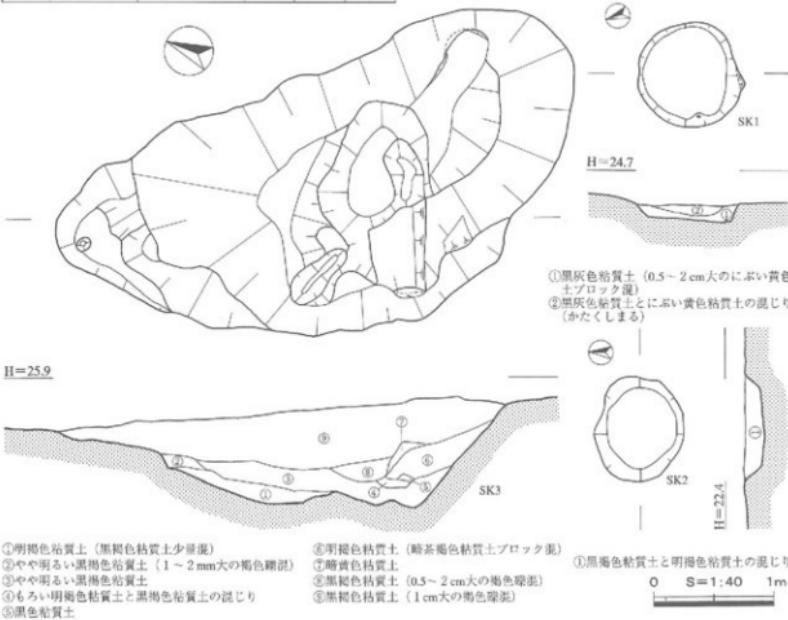


Fig.260 SK 1・2・3・3造構図

Tab.208 SK 1出土遺物観察表

No.	Fig. PL.	遺物名	出土位置	器種	法量(cm)	特徴	埴土	色調	備考
65	Fig.261 PL.92	SK 1	埋土上層	陶器 鉢底部	器高 △ 5.7	外縁横方向のナデ。内面斜め方向の擦目を複数なくす。	砂粒有り。4~6mmの粗粒含む。	に赤褐色10YR5/4	-

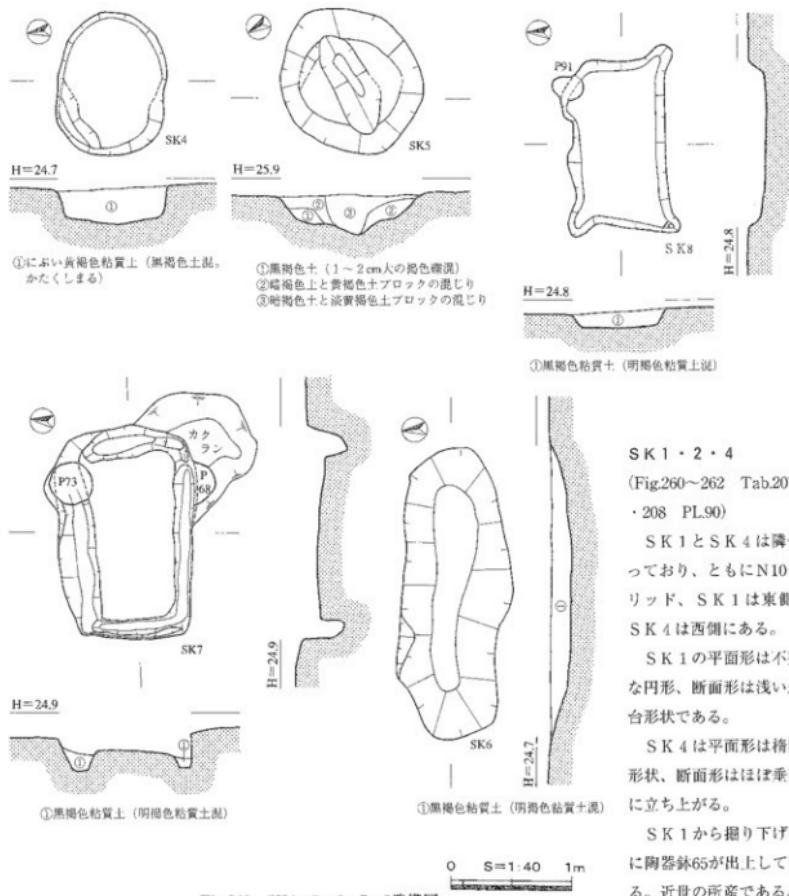


Fig.262 SK4・5・6・7・8構造図

に位置する。1号墳の南側、周溝の内側にあるが、埋葬施設ではない。平面形は不整な円形、断面は浅い逆台形状である。

SK 3・5 (Fig.261・262 Tab.207 PL.82)

M・N8グリッドに位置する。SD4の南側にある。SK3は平面形は不整形でテラス状の部分をもつ。断面形は東側がやや深いが底面付近の凹凸が大きい。土層は中央に向かい堆積している。掘り下げ中に土器片が出土したが図化し得ない。SK5は平面形は不整な円形で、中央付近に不整な梢円形状のくぼみをもつ。

SK 6・7・8・9 (Fig.262・263 Tab.207 PL.84)

J5・6グリッドに位置する。SK6・7・8は東西方向に主軸をもつが、SK9はやや南に振れる。西から

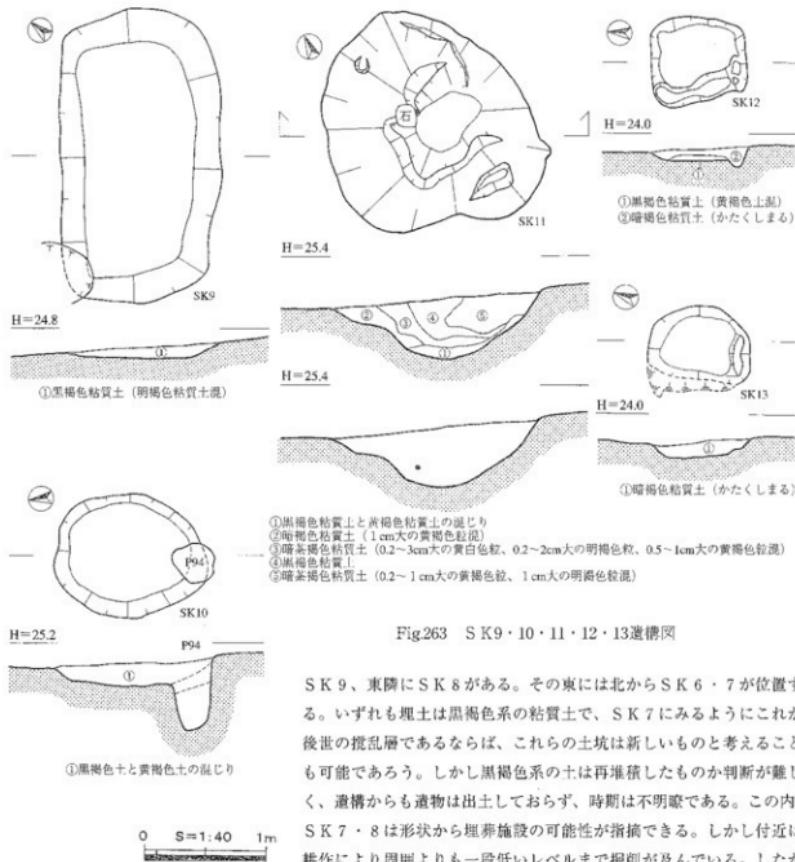


Fig.263 S K9・10・11・12・13遺構図

S K 9、東隣に S K 8 がある。その東には北から S K 6・7 が位置する。いずれも埋土は黒褐色系の粘質土で、S K 7 にみるようにこれが後世の搅乱層であるならば、これらの土坑は新しいものと考えること也可能であろう。しかし黒褐色系の土は再堆積したものか判断が難しく、遺構からも遺物は出土しておらず、時期は不明瞭である。この内、S K 7・8 は形状から埋葬施設の可能性が指摘できる。しかし付近は耕作により周囲よりも一段低いレベルまで掘削が及んでいる。したがって古墳の存在については判断できない。

S K 6 は平面形は不整な楕円形、断面形は浅い皿状で、底面は湾曲する。

S K 7 は P165・204 と重複しており、これよりも新しい。平面形は西側がやや広い長方形である。断面形は底面が平坦で側面に沿って四方に溝がある。また、南東隅の外側に搅乱による土坑状の掘り込みがある。したがって S K 7 は埋葬施設で、石棺材は後世に抜き取られたと考えるのが妥当であろう。

S K 8 は平面形長方形で、南東・南西・北西部に突出部をもつ。断面形は浅い逆台形状で底面は平坦である。埋葬施設の可能性もあるが、断定はできない。

S K 9 は平面形が長方形で、断面形は浅い皿状、底面は平坦である。掘方から埋葬施設の可能性もある。

S K 10 (Fig.263 Tab.207)

K 5 グリッドに位置する。周辺にはピットが散在する。南端で P94 と重複しており、これよりも新しい。平面形は不整な円形で、断面形は船底状である。

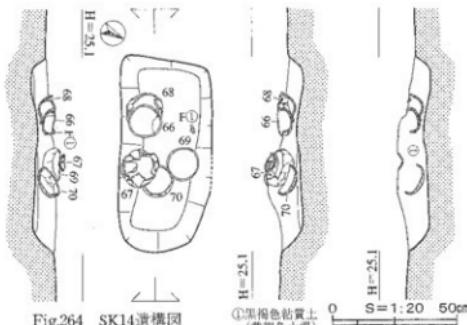


Fig.264 SK14構造図

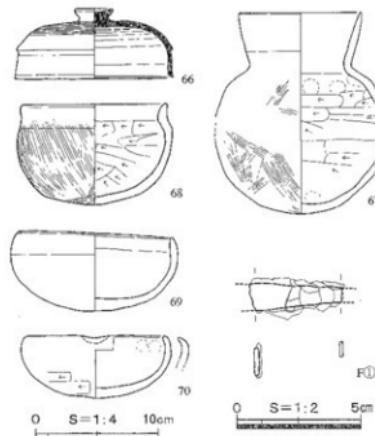


Fig.265 SK14出土遺物実測図

SK11・12・13 (Fig.263 Tab.207)

SK11はM8・9グリッドに位置する。周囲にはピットが密に存在する。南隣にP213・214があるが、重複関係はみられない。平面形は不整な円形、底面は平坦部はほとんどなく、テラス状の段をもつ。

SK12・13はJ8グリッドに位置する。4号墳中央付近にあるが、南北に向かう現在まで使用されていた道の下にあたる。いずれも平面不整な方形で、断面形は浅い逆台形状を呈する。埋土は硬いが表土と類似しており、形状からみても埋葬施設とは言い難い。遺物は出土していないが、近世後期以降の耕作に伴うものと理解している。

SK14 (Fig.264・265 Tab.207・209 PL85・91・94)

K7グリッドに位置する。4号墳の南東にある。付近は耕作により大きく掘削され、最大の深さでも13cm程しか遺存していない。平面形は不整な長方形である。須恵器の有蓋高杯の蓋66、土師器の壺67、楕68～70、刀子F①が出土している。出土状況から置かれた状況を復元すると、西側から蓋66が内面を上にした状況で楕68に重なり、東隣に壺67が正位置にあり、その北側に70・69の順に並ぶ。66はT K23～47併行で、古墳時代中期おわりから後期はじめにかけて、層年代では5世紀末から6世紀初頭とみられる。67は直口壺で口縁端部が尖る。楕68は口縁部が外反するが、69・70はそのままおわる。遺構の性格は埋葬施設とは考えにくく、性格は不明である。

SK15 (Fig.266 Tab.207)

N12グリッドに位置する。周囲は丘陵の先端部で、緩やかに西に下る。平面形は不整な円形で、傾斜変換をし

Tab.209 SK14出土遺物観察表

No.	Fig. PL	遺構名	出土位置	器種	口径(cm)	特徴	粘土	色調	備考	
66	Fig.265 PL.91	SK14	埋土中	須恵器 有蓋高杯 蓋	13.1 28 57	口径 つまみ径 身高	下部は前方のカク付、頂部にボタン状の突起があり、口縁部との間に深い腰をもつ。口縁端部に沈没痕をもつ。 内面に輪郭のナデ痕。	1cm以上の砂 粒を多く含む。 2~4mm大 きな砂砾有り。	灰褐色5/0	完存
67	Fig.265 PL.91	SK14	土脚部 直口壺	土脚器 直口壺	半径 直径14.0 高さ	口径 外周面径および鋸刃方向のケイ目、内面 底面以下に墨付着。	口縫部は内外面ともに鋸刃方向のナデ。体部外 周面は墨付着および鋸刃方向のケイ目、内面 底面以下に墨付着。	1cm以上の砂 粒を多く含む。	明赤褐色25YR5/8~赤 褐色23YR4/6	口縫部付近 約1/2欠損
68	Fig.265 PL.91	SK14	底面上	土脚器 楕	半径 最大径 高さ	12.0 12.8 8.3	口縫部は外側にして丸く終わる。体部外 周面は墨付着および鋸刃方向のケイ目、内面 底面以下に墨付着。	0.5~1cm大 きな砂砾を多 く含む。	淡黄色25Y7/4	完存
69	Fig.265 PL.91	SK14	底面上	土脚器 楕	口径 最大径 高さ	24.6 13.8 6.5	体盤は内凹する。内面横方向のナデ。 外面横または不定方向のケイ目。	2mm以下の砂 粒を含む。	明赤褐色25YR5/8	完存
70	Fig.265 PL.91	SK14	底面上	土脚器 楕	口径 最大径 高さ	11.25 12.4 5.45	体盤は内凹する。内面横方向のナデ。 外面横または不定方向のケイ目。	2mm以下の砂 粒を多く含む。	淡黄色25YR6/8	完存

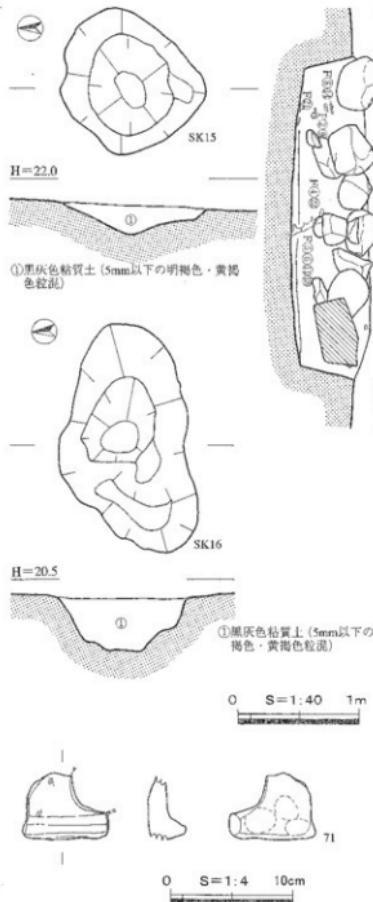


Fig.267 SK17出土遺物実測図

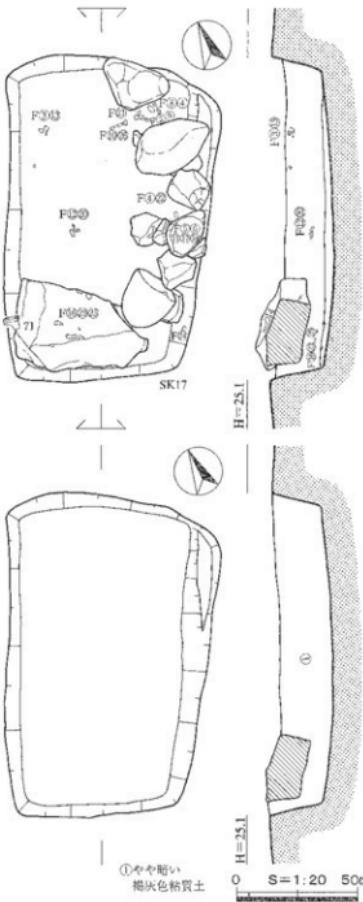


Fig.266 SK15・16・17遺構図

Tab.210 SK17出土遺物観察表

No.	Fig. PL.	遺構名、出土位置	器種	法量 (cm)	特徴	鉢土	色調	備考
71	Fig.267 PL.32	上層 (建塹上層)	円錐埴輪 体部	基高 △ 5.3	透かし部。断面逆台形状の突起を貼り付ける。内面は削られ、外露に縦方向のハケ目がある。	1m 大の砂 のハケ目。	淡黄褐色7.5YR8/6	約1/12以下残存

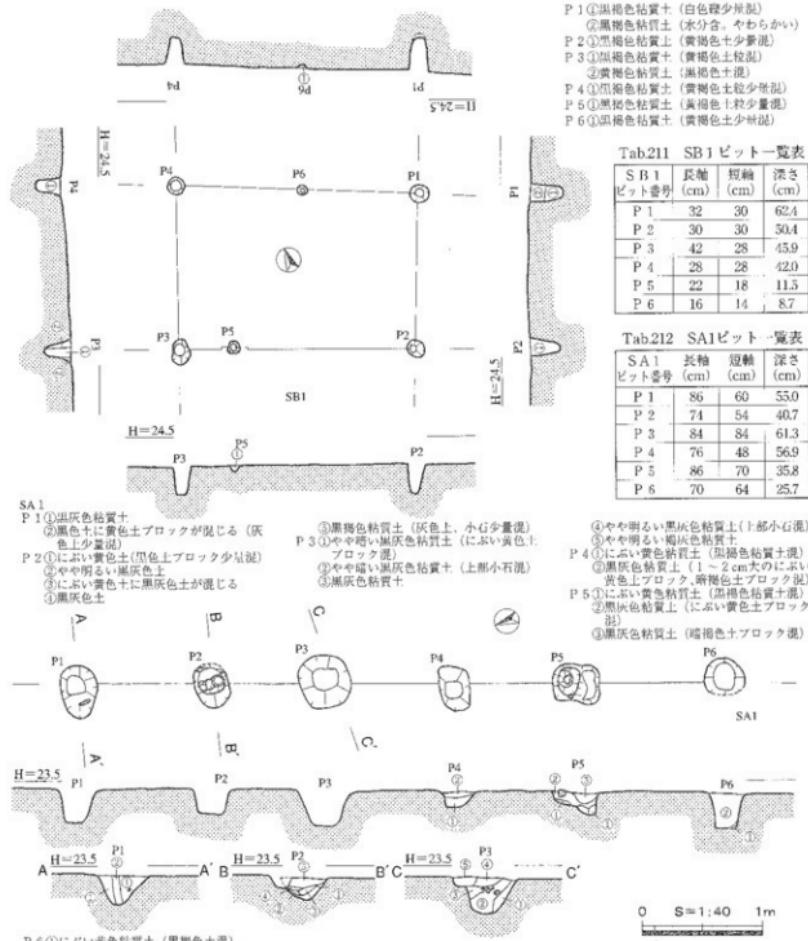
ながら狭い底面に続く。

SK16 (Fig.266 Tab.207)

3区S14~15グリッドに位置する。付近は湧水が著しい。東側には鎌倉時代のピット群がある。平面形は不整形で、テラスをもしながら狭い底面に至る。比較的深く掘方もしっかりとしているが、遺物は出土せず、性格も不明である。

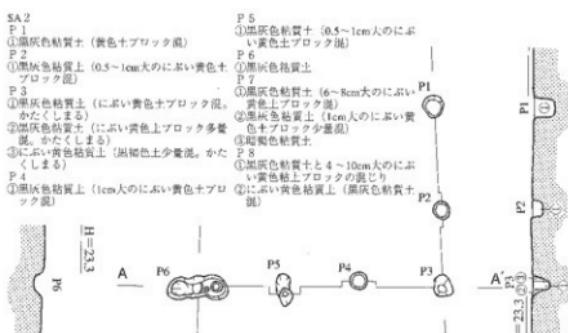
SK 17 (Fig.266・267・279・280 Tab.207・210 PL.92・94)

M 9～N 9グリッドに位置する。平面形は北東側が広くなる長方形で、断面は逆台形状に立ち上がる。遺構検出面からすでに石が散見され、掘り下げたところ遺構の南から東の壁に沿うように人頭大もしくはそれ以上の大きさの石が出土した。石の下から鉄釘が出土した。これらの釘は棺に打ち込まれたと考えられ、木質が良好に遺存しているものが多くみられた。このうちF⑩は北西隅、F⑧・⑨・⑪・⑫は北東隅、F⑬は南東隅、F⑭は南西隅にあり、それぞれ隅付近の釘とみられ、これにより棺の大きさは長軸85～90cm、短軸40～50cm程度と推測する。掘方よりもやや北に振れ、棺はほぼ東北方向となる。また遺構の時期とは大きく離れるが、検出面上の遺構の西隅から埴輪の透かし片71が出土している。遺構の時期は、鉄釘の形状から近世と考えられる。



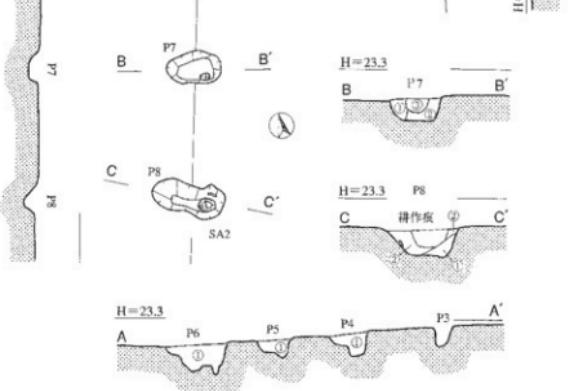
Tab.213 SA 2 ピット一覧表

SA 2 ¹ ピット番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P 1	36	34	36.8
P 2	30	28	19.1
P 3	36	30	36.0
P 4	28	28	41.5
P 5	52	26	27.6
P 6	98	40	53.9
P 7	82	52	57.5
P 8	120	58	58.1



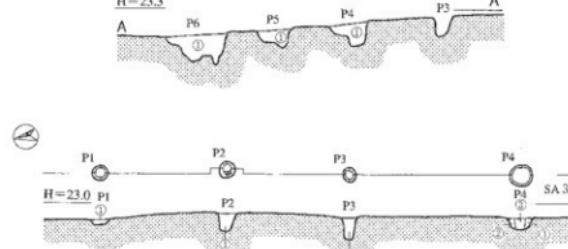
Tab.214 SA 3 ピット一覧表

SA 3 ピット番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P 1	24	22	11.1
P 2	28	26	31.7
P 3	24	20	39.3
P 4	38	34	22.6



Tab.215 SA 4 ピット一覧表

SA 4 ピット番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P 1	28	26	13.0
P 2	26	24	6.2
P 3	26	24	8.7



Tab.216 SA 5 ピット一覧表

SA 5 ピット番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P 1	52	46	45.6
P 2	60	48	27.3
P 3	56	44	32.0

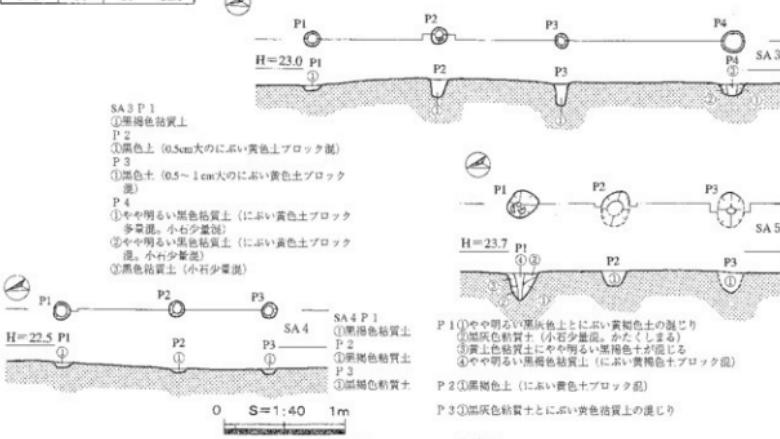


Fig.269 SA 2・3・4・5 遺構図

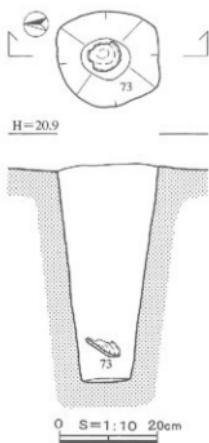


Fig. 271 P290遺物出土状況図

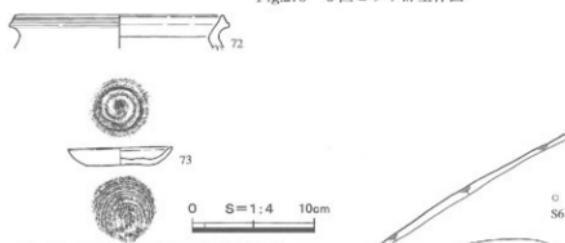
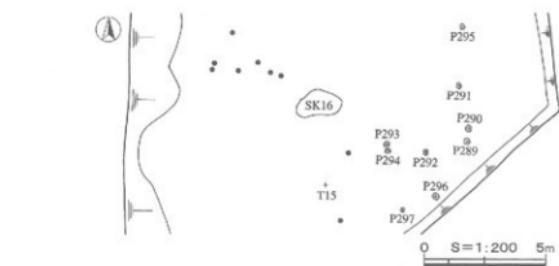


Fig. 273 2区ピット群全体図(1)

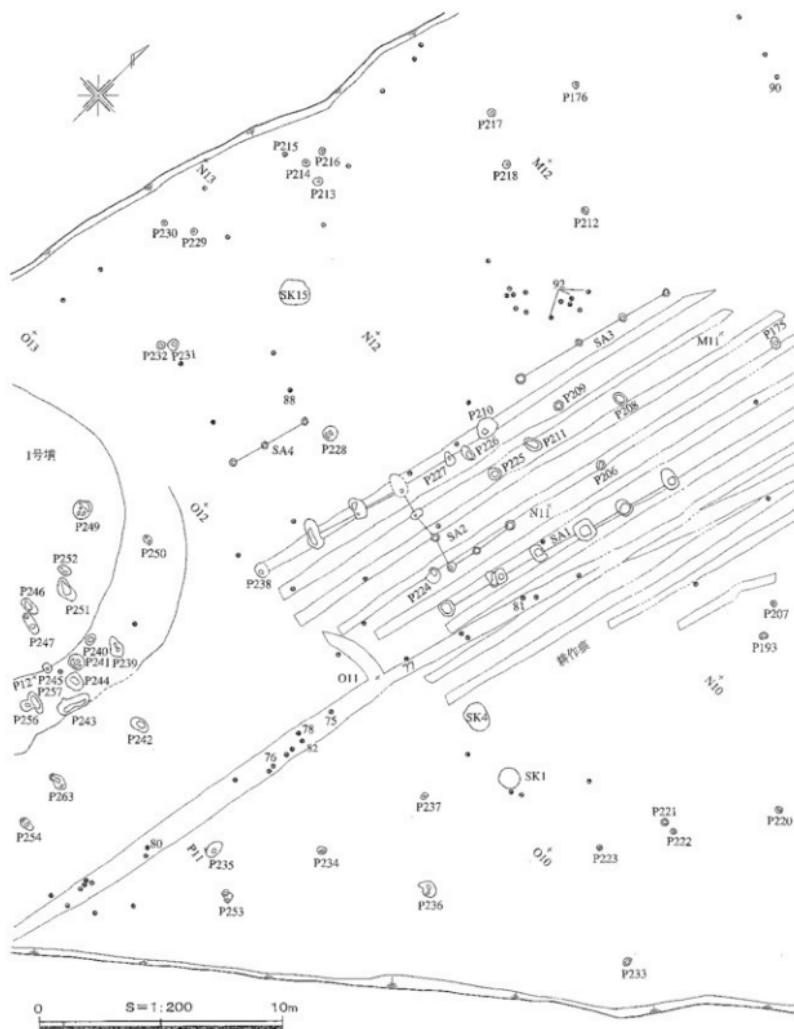


Fig.274 2区ピット群全体図 (2)

Tab.217 ピット群出土遺物観察表

No.	Fig. No.	品 名	山土位臯	等種	法度(cm)	特徴	鉢土	色調	備考
72	Fig.272 PL94	P 206	種土上層	生土器 使用跡	LJ厚17.0 器高2.7	LJ壇底部が下に延長し、面上に2条の横文を有する。内面は横方舟のナガ。	0.5m大の砂 含む。	褐色SYR7/8	約L/12以下残存
73	Fig.272 PL94	P 290	種土下層	土質瓦器 目	LJ厚8.6 器高15 底径7.5	上層部は内面が立ち上がる。内 面裏面は複数のナガ。外表面は凹凸感有 り度。	岩	褐色SYR7/6~浅褐色 7.5TR7/4	口縁部の3~4枚

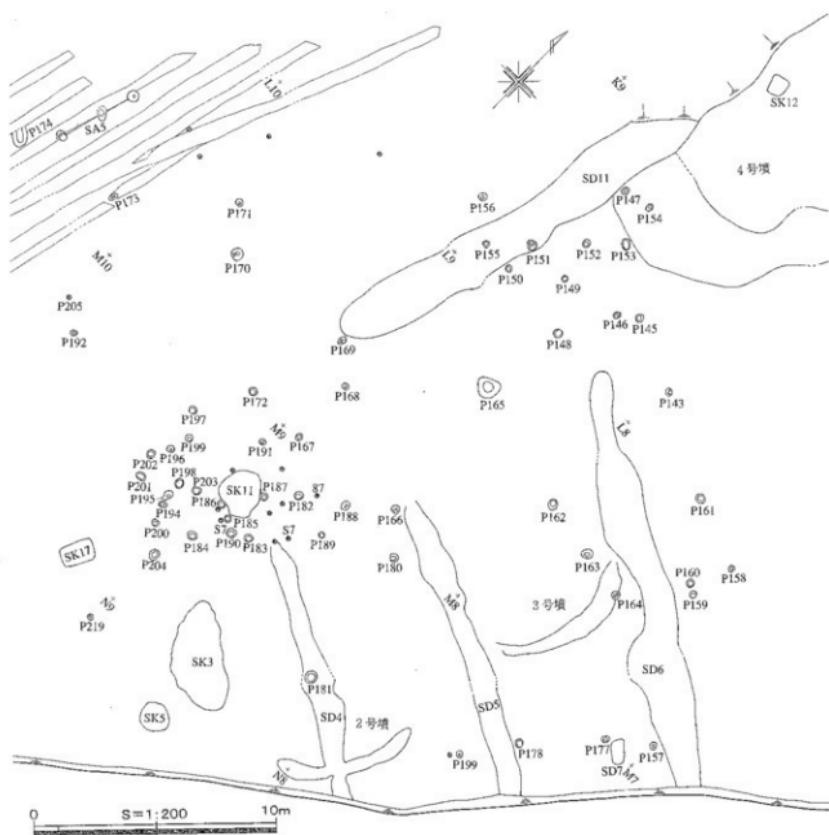


Fig.275 2区ピット群全体図 (3)

(4) 挖立柱建物跡

S B 1 (Fig.268 Tab.211 PL.85)

2区で1棟の掘立柱建物跡を検出した。他にもピットは密に検出されているが復元し得ない。J 7グリッドに位置する。1間×1~2間の掘立柱建物跡である。ほぼ整長方形で、柱の掘方ともに40cm以上で深い。

(5) 構跡

S A 1・2 (Fig.268・269 Tab.212・213)

いずれもM10~N11グリッドに位置する。

S A 1はやや大型の掘方をもつ。柱痕は確認できない。

S A 2はP 1~P 3とP 3~P 6、P 6~P 8は鉤状になる。P 1~6は細く深い掘方に對し、P 6の西側からP 8にかけては浅く広い。P 3では柱痕が確認されており、P 1~6について柱穴と想定できる。

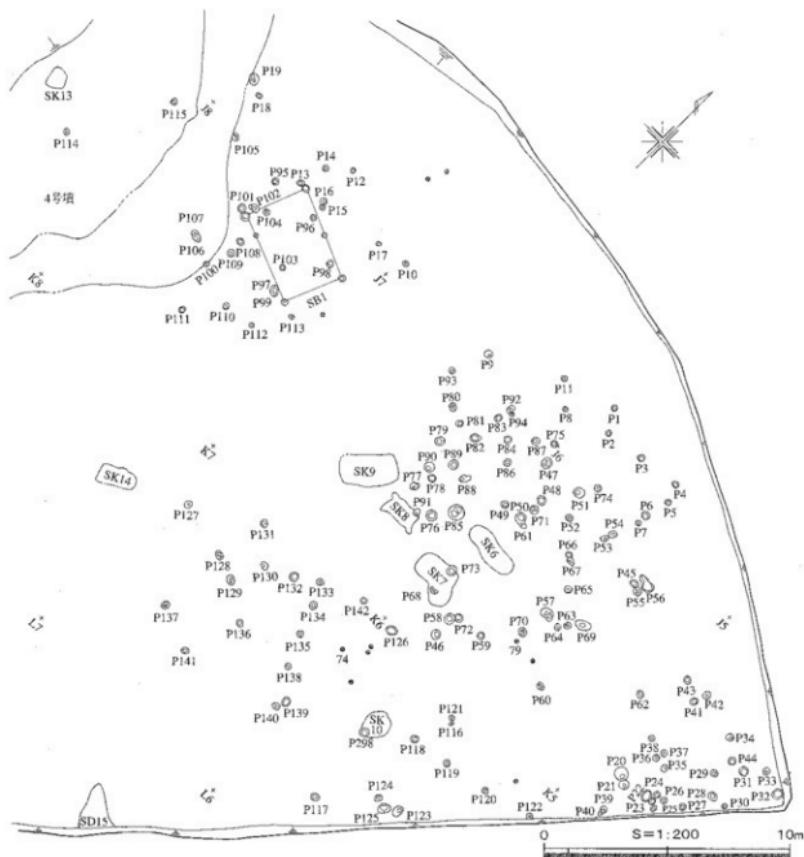


Fig.276 2区ピット群全体図 (4)

SA 3・4・5 (Fig.269 Tab.214-216)

SA 3はM11、SA 4はN11・12、SA 5はL10グリッドに位置する。主軸はほぼ同じで、北から南へSA 5、SA 3、SA 4の順になる。いずれも耕作痕に並行しており、何らかの関連の可能性もある。

SA 3のP 4、SA 5のP 1には柱跡が確認できた。SA 4の遺存状況は悪い。いずれも直線状に並ぶ。埋土中から遺物は出土していないが、もろい土であり、付近の遺構から近世以降と考えられる。

(6) ピット群 (Fig.270~276 Tab.217~220)

2区から3区にかけてピット群を検出した。2区では279基、3区では9基である。これらのピット群は、大きく分けて、①2区の中央から東側の丘陵部、②2区の耕作痕のある一段低い丘陵中央から南側にかけて、③3区のピット群である。これは埋土の傾向にもみられる。

①は黒褐色系の土でしまりがある。耕作土とは明らかに異なる。ただしこの土は黒味が強いため、動いている土なのか判別しがたい。したがって遺物から判断することになるが、時期を示すような遺物は出土していない。

Tab.218 ピット群一覧表(1)

新番号	旧番号	グリッド	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	備考	新番号	旧番号	グリッド	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	備考
1	245	I5	26	22	11.9		61	146	J5	24	22	9.9	
2	246	I5	26	22	13.7		62	148	J5	30	26	15.0	
3	248	I5	28	26	17.0		63	149	J5	28	26	16.6	上器片
4	249	I5	26	24	15.7		64	150	J5	26	22	7.2	
5	250	I5	24	22	14.9		65	151	J5	32	28	14.2	
6	251	I5	34	30	17.8		66	152	J5	26	24	9.2	
7	252	I5	18	16	6.0		67	153	J5	32	20	17.3	
8	254	I6	20	18	12.2		68	165	J5	37	31	23.2	
9	257	I6	32	30	27.3		69	195	J5	66	36	315	
10	258	I6	22	20	22.2		70	196	J5	34	30	30.3	
11	259	I6	26	20	26.4		71	202	J5	34	34	25.8	
12	171	I7	26	22	46.0		72	203	J5	34	30	14.2	
13	173	I7	28	20	14.8		73	204	J5	35	34	32.9	
14	175	I7	24	22	16.8		74	247	J5	26	26	18.0	
15	188	I7	20	20	21.9		75	253	J6	26	26	33.5	
16	189	I7	30	24	13.1		76	98	J6	44	38	34.1	
17	190	I7	20	18	10.2		77	99	J6	38	30	40.6	
18	192	I7	26	24	17.8		78	100	J6	28	28	30.5	
19	244	I7	40	28	14.9		79	101	J6	34	32	35.6	
20	128	J4	54	50	46.6		80	102	J6	30	28	15.7	
21	129	J4	34	34	14.9		81	103	J6	28	28	18.1	
22	130	J4	42	42	51.4		82	104	J6	38	26	21.1	
23	131	J4	28	24	24.9		83	105	J6	30	24	16.8	
24	132	J4	22	22	5.0		84	106	J6	24	24	12.0	
25	133	J4	22	18	14.5		85	107	J6	66	64	42.7	
26	134	J4	28	24	33.4		86	108	J6	28	24	19.6	
27	135	J4	24	24	16.1		87	109	J6	32	30	14.3	
28	136	J4	36	28	26.0		88	112	J6	30	26	51.2	
29	137	J4	28	28	14.6		89	113	J6	40	38	16.5	
30	138	J4	18	16	7.0		90	114	J6	38	34	30.7	
31	139	J4	40	36	29.6		91	166	J6	26	22	17.1	
32	140	J4	42	38	31.8		92	255	J6	34	26	37.6	
33	141	J4	32	26	17.7		93	256	J6	26	22	23.0	
34	142	J4	26	24	10.9		94	260	J6	18	18	11.8	
35	143	J4	30	28	24.5		95	174	J7	28	24	26.7	
36	144	J4	24	20	9.0		96	176	J7	20	20	15.0	
37	145	J4	24	24	14.8		97	178	J7	*30	28	25.3	
38	147	J4	34	22	13.2		98	179	J7	24	20	16.6	
39	162	J4	*28	26	13.0		99	180	J7	*26	26	15.8	
40	163	J4	*20	14	17.6		100	182	J7	22	22	10.2	
41	167	J4	28	24	8.0		101	184	J7	34	32	44.1	
42	168	J4	30	28	13.9		102	185	J7	44	30	21.6	
43	169	J4	26	26	11.7		103	186	J7	26	20	21.7	
44	191	J4	32	30	29.6		104	187	J7	24	22	17.8	
45	121	J5	32	26	21.0		105	191	J7	30	22	7.3	
46	64	J5	32	26	15.0		106	200	J7	*40	28	16.4	
47	110	J5	40	38	21.0		107	201	J7	30	28	21.4	
48	111	J5	34	30	13.0		108	261	J7	30	28	23.9	
49	115	J5	26	24	15.5		109	262	J7	28	28	27.6	
50	116	J5	40	38	15.2		110	263	J7	24	22	29.7	
51	117	J5	40	36	37.1		111	264	J7	24	22	17.8	
52	118	J5	26	26	17.5		112	265	J7	20	18	15.6	
53	119	J5	30	26	20.4		113	266	J7	20	18	31.5	
54	120	J5	36	32	15.2		114	240	J8	26	26	17.8	
55	122	J5	32	30	11.5		115	241	J8	26	24	13.2	
56	123	J5	76	32	14.7		116	159	K5	16	8	24.2	
57	124	J5	54	38	34.5		117	93	K5	34	34	22.0	
58	125	J5	44	38	40.1		118	156	K5	30	28	18.1	
59	126	J5	24	24	31.3		119	157	K5	28	22	17.0	
60	127	J5	28	24	19.8		120	158	K5	24	22	8.7	

Tab.219 ピット群一覧表 (2)

新番号	旧番号	グリッド	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	備考	新番号	旧番号	グリッド	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	備考
121	160	K5	20	16	10.4		181	79	M8	18	18	30.7	
122	161	K5	22	20	19.9		182	206	M8	32	30	41.3	
123	197	K5	40	34	36.9		183	207	M8	34	30	36.5	
124	198	K5	30	20	14.9		184	208	M8	38	32	46.4	
125	199	K5	50	34	31.2		185	213	M8	24	24	27.9	
126	309	K5	46	34	21.3		186	214	M8	26	26	17.6	
127	80	K6	30	20	30.6		187	218	M8	30	30	35.5	
128	81	K6	30	28	61.0		188	219	M8	34	28	34.7	
129	82	K6	40	30	44.1		189	223	M8	24	24	26.6	土番片
130	83	K6	28	26	32.0		190	235	M8	40	32	21.5	
131	84	K6	28	26	38.4		191	217	M9	22	20	18.6	
132	85	K6	30	30	11.5		192	4	M9	24	20	10.1	
133	86	K6	26	24	21.6		193	55	M9	32	22	21.5	
134	87	K6	30	28	31.9		194	164	M9	36	34	34.0	
135	88	K6	26	24	23.3		195	209	M9	48	28	39.1	
136	89	K6	26	24	13.1		196	210	M9	26	24	15.3	
137	90	K6	32	28	41.3		197	211	M9	28	26	19.7	
138	91	K6	24	22	11.7		198	215	M9	34	30	21.7	
139	92	K6	38	32	26.8		199	216	M9	26	24	20.9	
140	154	K6	26	26	12.3		200	220	M9	30	28	11.0	
141	155	K6	32	22	11.0		201	221	M9	38	26	31.0	
142	308	K6	22	22	7.6		202	222	M9	30	28	23.3	
143	75	K7	26	20	38.7		203	234	M9	34	32	19.0	
144	242	K8	26	24	25.6		204	237	M9	40	38	25.2	
145	67	K8	32	30	11.2		205	5	M10	18	16	12.9	
146	68	K8	30	22	16.3		206	18	M10	38	38	31.2	72
147	242	K8	26	24	25.6		207	56	M10	22	20	27.3	
148	70	K8	36	32	39.6		208	11	M11	56	40	15.3	
149	231	K8	24	22	6.0		209	15	M11	32	28	38.8	
150	233	K8	24	22	8.3		210	16	M11	92	72	64.3	
151	236	K8	46	34	53.1		211	17	M11	68	44	27.0	
152	238	K8	32	26	78.2		212	313	M11	28	28	17.2	
153	239	K8	46	24	41.3		213	299	M12	40	34	18.1	
154	243	K8	28	24	10.0		214	302	M12	28	28	33.3	
155	310	K8	22	20	18.4		215	303	M12	20	20	18.1	
156	232	K9	26	22	23.5		216	304	M12	24	22	12.8	
157	97	L6	26	24	28.6		217	311	M12	28	24	31.9	
158	71	L7	22	22	-		218	312	M12	24	20	38.3	
159	72	L7	32	26	18.8		219	63	N9	24	18	54.0	
160	73	L7	30	28	30.4		220	224	N9	24	24	29.9	
161	74	L7	38	36	42.2		221	225	N9	26	26	16.5	
162	76	L7	40	36	44.6		222	226	N9	24	18	21.0	
163	78	L7	27	18	48.2		223	227	N9	18	18	12.7	
164	315	L7	36	30	34.9		224	19	N11	64	44	34.5	
165	298	L8	90	82	46.9		225	20	N11	52	44	12.5	
166	77	L8	34	30	35.3		226	21	N11	60	32	15.0	
167	205	L8	30	28	38.1		227	23	N11	54	34	51.6	
168	229	L8	22	20	14.2		228	294	N11	58	54	31.4	
169	230	L9	32	22	48.7		229	300	N12	22	22	13.3	
170	6	L9	50	44	41.3		230	301	N12	20	20	13.4	
171	58	L9	34	26	21.0		231	305	N12	42	40	33.3	
172	212	L9	34	32	24.0		232	306	N12	34	32	25.7	
173	43	L10	36	22	34.3		233	228	O9	32	30	11.7	
174	10	L10	△66	62	17.0		234	2	O10	38	26	39.4	
175	22	L10	42	34	34.0		235	24	O10	76	42	25.7	
176	314	L12	24	20	15.2		236	53	O10	76	56	54.1	
177	95	M7	30	30	16.4		237	54	O10	30	20	41.0	
178	66	M7	28	28	29.9		238	295	O11	※30	※30	43.9	
179	96	M7	28	24	23.6		239	28	O11	80	50	52.8	
180	65	M8	36	32	55.5		240	29	O11	48	34	25.4	

Tab.220 ピット群一覧表(3)

新番号	旧番号	グリッド	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	備考	新番号	旧番号	グリッド	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	備考
241	30	O11	66	60	57.2		270	269	Q12	26	24	40.4	
242	32	O11	74	46	32.1		271	267	Q12	40	32	25.6	
243	36	O11	138	※60	48.3		272	268	Q12	82	56	38.3	
244	37	O11	74	44	32.1		281	317	Q13	24	22	9.1	
245	38	O11	40	32	25.7		273	271	R12	32	26	39.0	
246	31	O12	70	34	28.3		274	272	R12	36	26	39.6	
247	44	O12	※66	36	51.6		275	276	R12	28	24	17.0	
248	46	O12	48	36	48.4		276	277	R12	38	36	30.6	
249	60	O12	91	76	39.9		277	281	R12	26	24	26.1	
250	62	O12	42	30	27.7		278	282	R12	76	76	14.3	
251	296	O12	106	56	50.7		279	278	R13	30	24	7.8	
252	297	O12	54	32	21.2		280	316	R13	28	28	17.9	
253	1	P10	50	32	21.0		282	274	R13	28	26	15.8	
254	39	P11	58	32	31.0		283	270	R13	36	30	49.5	
255	40	P11	64	46	47.7		284	273	R13	24	22	9.2	
256	41	P11	※56	38	24.7		285	279	R13	26	24	13.7	
257	42	P11	96	※40	48.6		286	280	R13	20	18	28.8	
258	47	P11	58	42	27.2		287	292	R13	24	22	20.5	
259	49	P11	26	24	17.9		288	293	R13	30	28	31.2	
260	50	P11	30	30	17.1		289	283	S14	24	22	36.5	
261	51	P11	86	※46	74.4		290	284	S14	22	20	45.0	73
262	52	P11	40	36	59.6		291	287	S14	20	18	26.3	
263	57	P11	80	38	32.0		292	288	S14	20	16	13.8	
264	33	P12	46	40	38.2		293	289	S14	24	20	16.4	
265	34	P12	※64	62	36.4		294	290	S14	20	20	13.8	
266	35	P12	70	30	43.2		295	291	S14	20	18	26.3	
267	48	P12	54	34	117.2		296	285	T14	24	20	29.8	
268	61	P12	38	28	14.7		297	286	T14	20	18	26.3	
269	275	P13	22	20	23.4		298	94	K 5	34	33	60.0	

①はしまりがなく耕作痕の土に似ている大型のものと、黒褐色土で遺構検出面上層に部分的に検出されているものと同様の層である。後者は掘方が小型のものが多く、P 206の埋土中から弥生土器の甕72が出土した。弥生時代中期後半の所産である。

②は暗茶褐色系の土で、P 290の埋土底面付近から土師質土器皿73が出土した。溝水のため確認できなかつたが、ほぼ完形で、

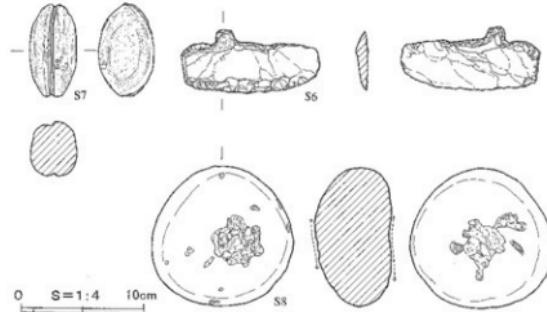


Fig.277 遺構外出土遺物実測図(1)

何らかの意図を持って入れられた可能性がある。同様の遺構は名和町の茶薪六反田跡や押平弘法堂跡にもある。底面は回転糸切りで、口縁部は薄く、内湾しながら立ち上がり、口縁端部は尖る。鎌倉時代の所産である。また3区の南東側からピットがやや密に検出され、調査区外に鎌倉時代の掘立柱建物が存在するとみられる。

Tab.221 遺構外出土遺物観察表(1)

No.	Fig. PL.	グリッド名	出土位置	器種	法蓋(cm)・特徴	紹介	備考
S6	Fig.277 PL.93	O13	里通色 粘土質土	石甕	長さ:△112 幅:38~50 厚さ:10 重さ:50.0g	材質:ガラス質安山岩。良質ではなく、古御殿石が入る。	先端第一部欠損
S7	Fig.277 PL.93	M 8	里通色 粘土質土	石甕	長さ:72~73 幅:3.9~4.4 厚さ:3.7 重さ:125.0g	材質:紫蘇輝石角閃石質安山岩。大山附近の石。	完存
S8	Fig.277 PL.93	2区	調查区内 内	粘土	長さ:11.6 幅:1.4 厚さ:6.0 重さ:1000	材質:黑雲母斜長石角閃石質安山岩。大山附近の石。	完存
C1	Fig.277 PL.93	不明	調查区内 内	焼土	直径:13.8 厚さ:0.2 重さ:143.0g	材質:銅・錫・亞鉛 二段鉢とみられる。発行年は1873~1884年。	完存

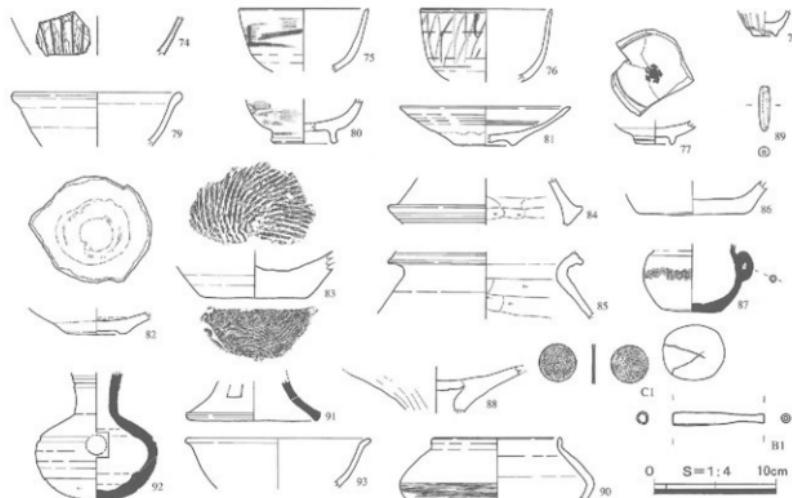


Fig.278 遺構外出土遺物実測図 (2)

(7) 遺構外出土遺物 (Fig.277・278 Tab.221・222 PL.77・88・92~94)

遺構外から出土した遺物は①耕作痕中から出土、②1号墳及びその北側から検出した黒褐色土中から出土、
③表土もしくは出土位置不明のもの、がある。

Tab.222 遺構外出土遺物観察表 (2)

No.	Fig. PL	グリッド番	出土位置	器種	法量 (cm)・特徴	出土	色調	備考
74	Fig.278 PL.77	K 6	耕作痕	平底 碗形部	外面に網目文を施す。	寄	オリーブ灰10Y6/2	-
75	Fig.278 PL.77	O 11	耕作痕	鉢形 碗口部	外面上に風紋の施め付け。浅い茶色。	寄	明緑灰12.5GY7/1	約1/4残存
76	Fig.278 PL.77	O 11	耕作痕	鉢口縁部	外側口縁端部および底部に1条の風紋。間に断節文を施す。	寄	明緑灰12.5GY8/1	約1/4残存
77	Fig.278 PL.77	2区	耕作痕	鉢口縁部	外側高台部および底付近に風紋。内面見込みに1条の風紋。中央には5分点。	寄	灰白色2.5GY8/1	底部付近完存
78	Fig.278 PL.77	O 11	耕作痕	鉢口縫部	外側風紋方向の切り込み多段状り。花瓶様。高台内外面ともに無釉。	寄	灰白色10YR8/1	底部付近完存
79	Fig.278 PL.92	J 5	耕作痕	圓口縫部	口縫部はやや外側に屈曲し、丸く厚壁する。内外面ともに白釉で施す。	砂軸 少量含む。	灰白色5Y8/1	約1/8残存
80	Fig.278 PL.92	P 11	耕作痕	平底	内面透明、外側乳褐色の釉をかける。	寄	におい酸色5YR6/4	約1/2残存
81	Fig.278 PL.92	N 10	耕作痕	鋸刃部	口縫部は丸く内側を削り、薄唇ののみわずかに外側に屈曲する。外側ケツリ出しと高台付近の無釉部。	酸緑な砂粒 立在。	におい酸色5YR6/4	約1/2残存
82	Fig.278 PL.92	O 11	耕作痕	圓口縫部	外側ケツリ出しと高台付近無釉。内底面には輪を隙状に残す。	寄 (砂粒なし)	におい赤褐色5YR5/4	底部付近完存
83	Fig.278 PL.92	M 9	重複色 粘質土	圓口縫部	内面滑凸に短い縦溝。外側底部に回転系切り痕あり。	微緑な砂粒。	におい褐色2.5Y5/3	約1/2残存
84	Fig.278 PL.92	M 8	重複色 粘質土	先生土器 脚部	口縫端部は上下に被張して三角形状になる。	1~1.5mm大の 砂粒を含む。	褐色5YR7/6	約1/6残存
85	Fig.278 PL.92	R 13	重複色 粘質土	先生土器 脚口部	口縫端部は上下に被張し、面に2本の凹窪をもつ。	1~2mmの砂粒 を少量含む。	淡黄褐色10YR8/4	約1/10以下残存
86	Fig.278 PL.92	2区	重複色 粘質土	先生土器 底部	内外面ともに剥落が著しく調整不規則。	1~2mmの砂粒 を多く含む。	におい黄褐色10Y5/4	裏面付近のみ完存
87	Fig.278 PL.92	M 8	重複色 粘質土	脚部	脚部に骨をもつ。上縁部は外反する。半壇に曳紋状を施す。底はやわらかいつぶ円形の平坦面をもち、蓋と本体のハネ記号あり。	1mm以下の 砂粒を含む。	灰褐色GY5/1~灰褐色 5YR5/2	口縫部付近残存
88	Fig.278 PL.92	N 12	重複色 粘質土	高杯形部	内底充填により裏面を複合する。外側底付近被削脱状のハケ目が。内底表面が著しく調節不規則。	1mm以下の 砂粒を含む。	褐色5YR7/8	接合部付近完存
89	Fig.278 PL.92	O 12	重複色 粘質土	土器	西堀が組み。手づくねによる成形。	寄	明赤褐色2.5YR5/2	盤部わずかに欠損
90	Fig.278 PL.92	L 12	遺構外	脚部	口縫端部はわずかに直立する。体部下は横方向の方々傾く。	0.5mmの大 砂粒を含む。	灰褐色10YR6/1	口縫部1/8残存、 盤部1/12以下残存
91	Fig.278 PL.92	L 11	遺構外	脚部	脚部は面をもろわざかに中央が膨らむ透かしあり。	砂粒わずかに含む。	灰褐色5Y6/1	約1/4残存
92	Fig.278 PL.92	J 10 M 11 M 12	遺構外	脚部	体部中位に穿孔。体部やや上に1条の沈線を施す。内部には骨片ナダ。	白い砂粒 混入。	灰褐色10Y5/1	体部約1/4残存
93	Fig.278 PL.93	2区	遺構外	脚部	口縫端部は外反する。内外面ともに早く施す。種かな入骨がある。	微緑な砂粒。	オリーブ灰10Y5/2	約1/5残存

①の耕作痕は、2区の丘陵の下側で北東-南西方向に幅30~70cm程の溝が約50~80cm程の間隔で延びる。また2区の南東側方向に延びているものもあり、調査区外に続く。埋土は灰褐色系の单層でもろい。遺物は青磁碗74、染付碗75~77、猪口78、陶器碗79、白磁猪口80、陶器皿81・82、鉢83がある。74は龍泉窯の細連弁文で、

SK14 鉄製品	SK17 鉄製品一括						グリッド出土 鉄 製 品
	刀子 (直 横)	釘 (直 完 形)	釘 (直 頭 付)	釘 (頭 部 付)	釘 (頭部のみ)	釘 (曲 り)	
	⑦	④	⑥	⑧	⑩	⑨	
	①	⑤	③	⑫	⑪	⑫	
	⑨	⑥	⑦	⑩	⑪	⑩	
	③	⑦	⑪	⑫	⑫	⑩	
							○ S=1:4.5cm

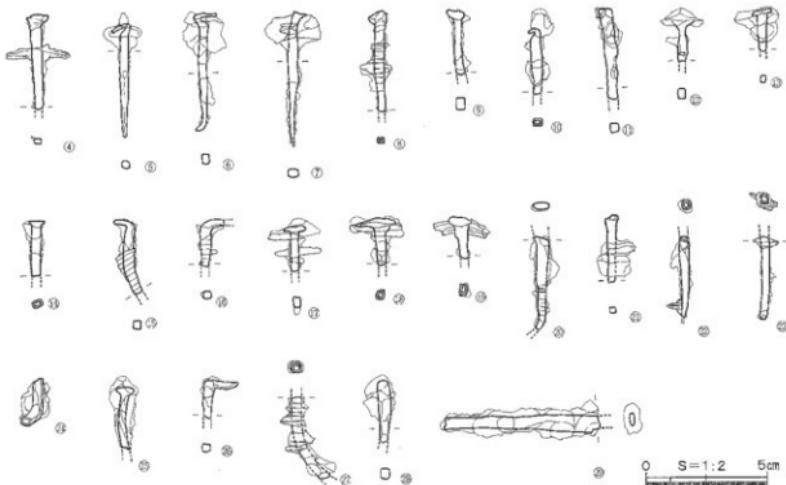


Fig.279 鉄関連遺物構成図・実測図

Tab.223 鉄関連遺物観察表 (1)

種類 No.	出土地	層位	遺物名	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	頭部 形状	メタル 度	特徴	
①	S K17	下層	鉄製品(刀子)木柄付	△ 3.8	1.1	0.2	5.8	1	△	刀子の中央から刃部にかけての片である。木柄の柄に収まっている。部分的に頭部が残る。マチ部は外観的には確認できない。頭部の内側が最も荒んだ部分が刃部との差がある。中子形の頭部がとがれおり、わずかに厚みのある板状。	
②	S K17	下層	鉄製品(釘)2本 木柄付	手前 の釘 3.1 奥の 釘 2.5		0.3 0.3			5.8 3	△	細身の棒状が7mmほど延びて同一方向に打ち込まれたものである。下側に位置する釘はX線透過程の頭部から体部上部にかけての形状に折れ曲がっており、上面に位置する釘は頭部から奥まで直線的に打ち込まれている。頭部は丸く、頭部の内側が最も荒んでいて、頭とF面は頭部の頭部の底面のため頭部が基本で、上面に来る釘はそれを被覆するよう逆形で反対打ち込まれていることになる。あるいは、下面の釘は簡易的に使用されている可能性があり、上面の釘は鋸り釘として使用されているかも知れない。又、同じ釘として同一の種類のものである。頭部に残る木柄と斜めの関係は、横刃方向に伸びる板間に残る木柄と斜めの関係である。木柄が頭部の頭部と奥には直角の頭部は木柄表面に垂直に損傷を受けていることになる。
③	S K17	上層	鉄製品(釘)2本 木柄付	横釘 △ 3.5		0.4 0.2			3.7 2	△	細い刃が折れるように押された形である。頭部は丸く、刃先が丸く折れ曲がっている。頭部の頭部は手前に傾斜するように打ち込まれており、頭部より1cm程度が手前に傾斜するように所附曲がっている。これは横刃方向の釘がX線透過程で打ち込まれたものである。体部は半丸頭領部にかけて頭部から木柄部に傾斜方向で打ち込まれたものである。また前後には頭部が頭部で折れ曲がっている。内側の頭部は頭部に傾斜方向で打ち込まれたものである。頭部の頭部が部分的に頭部と並んで残っている。参考。下記④、⑤は本柄の頭部と並んで残っている部分から出土しており、横刃方向で打ち込まれたことが証明できる。図223を示すと右図の如くF面、④、⑤、⑥が各個別に打ち込まれていることになる。指標か巻きかは確認しがたがおそらく既底である。
④	S K17	下層	鉄製品(釘)木柄付	△ 3.9	0.3	0.2	2.2	2	△	先端部の頭部に折れた頭部の頭部である。頭部は器具の花弁状でなく、一様に鋸り目金を有している器具性であろう。体部は全体的に頭部と頭部も頭部方で、丁寧な仕上げである。頭部から2cm程下側に頭部と頭部と直交する両側に頭部の木質が残存する。	
⑤	S K17	下層～底面	鉄製品(釘)木柄付	4.7	0.3	0.3	2.4	2	△	ほぼ完形の組めの頭部である。頭部は細く尖っていよいよ見えるが、X線透過程によると、頭部は鋸り目金で頭部の頭部は器具の花弁状でない。体部は全体的に頭部で頭部も頭部方で丁寧な仕上げである。頭部の足元はわずかに曲がっており、これは横刃との接合である。	
⑥	S K17	下層～底面	鉄製品(釘)	4.8	0.3	0.3	3.9	2	△	ほぼ完形の組めの頭部である。頭部は頭部方で、頭部に横に木質が残る。頭部は全体的に頭部で頭部も頭部方で丁寧な仕上げである。	
⑦	S K17	不明	鉄製品(釘)木柄付	5.5	0.5	0.26	3.3	2	△	頭部は打ち込まれたままに平面に衝突する。頭部は頭部で欠損し、頭部は中央部であり、頭部の不足から折れた頭部の頭部である。体部は全体的に頭部で頭部も頭部方である。頭部の頭部はX線透過程によびそびや頭部が付いたものである。頭部の頭部はX線透過程によびそびや頭部が付いたものである。頭部は全体的に頭部で頭部も頭部方で丁寧な仕上げである。	
⑧	S K17	中層	鉄製品(釘)木柄付	△ 4.1	0.3	0.2	2.9	2	△	頭部は打ち込まれたままに平面に衝突する。頭部の頭部はX線透過程によびそびや頭部が付いたものである。頭部は全体的に頭部で頭部も頭部方である。頭部はX線透過程によびそびや頭部が付いたものである。頭部は全体的に頭部で頭部も頭部方である。	
⑨	S K17	下層	鉄製品(釘)木柄付	△ 2.6	0.4	0.5	1.9	2	△	頭部はX線透過程によびそびや頭部が付いたものである。頭部は全体的に頭部で頭部も頭部方である。頭部はX線透過程によびそびや頭部が付いたものである。頭部は全体的に頭部で頭部も頭部方である。	
⑩	S K17	底面直上	鉄製品(釘)木柄付	△ 2.8	0.4	0.3	2.6	2	△	頭部の頭部と頭部の頭部がX線透過程によると、これらは頭で、木柄の頭部は残ることはない。頭部は打ち込まれていて、頭部は頭部に平行となり、これに沿うように木質が残っている。体部は全体的に頭部で頭部も頭部方である。頭部はX線透過程によびそびや頭部が付いたものである。頭部は全体的に頭部で頭部も頭部方である。	
⑪	S K17	下層～底面	鉄製品(釘)	△ 3.7	0.4	0.4	2.3	2	△	体部以下が欠損する頭部の頭部である。頭部は横刃で、一種の鋸り目金を有している可能性はある。体部は全体的に頭部で頭部も頭部方である。頭部はX線透過程によびそびや頭部が付いたものである。頭部は全体的に頭部で頭部も頭部方である。	
⑫	S K17	中層	鉄製品(釘)木柄付	△ 1.9	0.3	0.4	1.4	1	△	体部以下が欠損する頭部の頭部である。頭部は横刃で、一種の鋸り目金を有している可能性はある。体部は全体的に頭部で頭部も頭部方である。頭部はX線透過程によびそびや頭部が付いたものである。頭部は全体的に頭部で頭部も頭部方である。	
⑬	S K17	上層	鉄製品(釘)木柄付	△ 1.7	0.25	0.3	1.8	2	△	体部以下が欠損する頭部の頭部である。頭部は横刃で、一種の鋸り目金を有している可能性はある。体部は全体的に頭部で頭部も頭部方である。頭部はX線透過程によびそびや頭部が付いたものである。頭部は全体的に頭部で頭部も頭部方である。	

Tab.193 鉄関連遺物観察表(2)

構成No.	出土地	基盤	造物名	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	破壊度	メタル法	特徴
⑩	SK17	空層	鉄製品(釘)	△2.3	0.4	0.3	0.9	2	△	頭部は横長で、体部以下が欠損する組みの鉗釘である。頭り部の鋸歯をもつて、掌ではあるが簡単なづくりである。裏面は直角方形で中空である。体部から頭部に向かってわずかに屈曲している。
⑪	SK17	埋土中	鉄製品(釘)木部付	△3.1	0.3	0.3	1.9	2	△	頭部が欠損する組みの鉗釘である。頭部は扁平となり、打ち込まれた時にしたときに見える。体部は鉗釘部が頭部に沿うように既に上り上がり、鉗釘部を直角形であると考へられる。裏部には本質と頭部存するがわずかである。裏部の断面は方形で中空である。
⑫	SK17	底面直上	鉄製品(釘)木部付	△1.9	0.3	0.3	1.3	1	△	頭部打ち込みの際に回復し、体部は下に欠損した鉗釘である。頭部は断面が丸で、中空である。屈曲した裏面には頭部が頭部を走るように既に上り上がり、鉗釘部を直角形であると考へられる。裏部には本質と頭部存するがわずかである。裏部の断面は方形で中空である。
⑬	SK17	下層～底面	鉄製品(釘)木部付	△1.8	0.3	0.4	1.7	2	△	体部以下が欠損する組みの鉗釘である。頭部は円形で、一種の側面金具を兼ねている可能性もある。裏部は全体的に頭部で直角面と直角面で丁寧な仕上げである。頭部から1cm程度下側に頭部の本質と同方向に組合せの本質が残存する。
⑭	SK17	下層～底面	鉄製品(釘)木部付	△2.0	0.3	0.3	1.5	2	△	体部以下が欠損する組みの鉗釘である。頭部は直角形状で、裏面の金具を兼ねている可能性もある。裏部は全体的に頭部で直角面と直角面で丁寧な仕上げである。頭部から1cm程度下側に頭部の本質と同方向に組合せの本質が残存する。
⑮	SK17	埋土中	鉄製品(釘)木部付	△1.8	0.45	0.3	1.5	2	△	体部以下が欠損する組みの鉗釘である。頭部は直角形状で、裏面の金具を兼ねている可能性もある。裏部は全体的に頭部で直角面と直角面で丁寧な仕上げである。頭部から1cm程度下側に頭部の本質と同方向に組合せの本質が残存する。
⑯	SK17	中層	鉄製品(釘)	△3.0	0.6	0.3	2.4	3	△	頭部、裏面部が欠損している組みの鉗釘である。頭部は直角形状で、裏面の金具を兼ねている可能性もある。
⑰	SK17	下層	鉄製品(釘)木部付	△2.8	0.5	0.7	2.1	2	△	頭部、裏面部が欠損している組みの鉗釘である。頭部は直角形状で、裏面の金具を兼ねている可能性もある。裏部は直角形状で中空である。鉗釘部分の裏面は中空で、裏面には1穿孔を有する。体部に直角形状の裏面に直接する前向きの木質が残存する。
⑱	SK17	下層	鉄製品(釘)木部付	△3.4	0.35	0.4	1.1	2	△	頭部が欠損している組みの鉗釘である。頭部付近の裏面は直角形状である。鉗釘部分に水平方向に木質が残存する。木質を残していらないことを示している。
⑲	SK17	底面直上	鉄製品(釘)木部付	△3.4	0.35	0.4	1.2	2	△	頭部が欠損している組みの鉗釘である。頭部付近の裏面は直角形状である。鉗釘部分に並行に木質が残存する。体部中位は二方向向の木質が残存する。側面通透部は直角形状に肩舟形、X進縫通透部でなくとも裏面的に直角形状である様子がうがえられる。これは釘本部木質を貫通したために折り曲げられたことを示すものであろう。
⑳	SK17	上層	鉄製品(釘)	1.9	0.4	0.3	1.9	2	△	頭部が欠損する組みの鉗釘である。頭部付近の裏面は直角形状である。頭部付近に直角形状の鉗釘である。体部が「く」の字状に彎曲する。直角形状で中空である。
㉑	SK17	底面直上	鉄製品(釘)木部付	△2.3	0.3	不明	2.2	1	△	頭部および裏面部が欠損する組みの鉗釘である。体部は直角やかに直角に山がある。鉗釘が直角に介して木質が残存する。
㉒	SK17	底面直上	鉄製品(釘)木部付	△3.5	0.5	0.4	2.4	2	△	頭部および裏面部が欠損する組みの鉗釘である。裏面は直角形状である。鉗釘部分は内側に直角に山がある。鉗釘部を直角に山と組み合わせて直角形状に山舟形とする。これが釘本部木質を貫通したために折り曲げられたことを示すものであろう。
㉓	SK17	埋土中	鉄製品(釘)木部付	△1.6	0.3	0.3	1.3	2	△	鉗釘部が欠損し、体部は直角形状で中空である。鉗釘部は直角形状で中空である。裏面部が欠損する。裏面部は直角形状である。鉗釘部を直角に山舟形とする。鉗釘部を直角に山舟形とする。これが釘本部木質を貫通したために折り曲げられたことを示すものであろう。
㉔	M10クリッド	不明	鉄製品(釘)	△2.5	0.4	0.45	3.4	2	△	鉗釘の裏面。裏面部は欠損する。頭部付近は鋼化が施されている。直角形状で中空である。鉗釘部を直角に山舟形とする。鉗釘部を直角に山舟形とする。鉗釘部を直角に山舟形とする。これが釘本部木質を貫通したために折り曲げられたことを示すものであろう。
㉕	2区 造譲外	埋り下げ中	鉄製品(棒状不明)	△6.4	0.7	0.2	10.8	4	L(●)	複数の小形鉄製品。片側は欠損する。X進縫通透部から裏面は方形。やや新しい可能性がある。

16世紀の貿易陶磁器、75～77は肥前系の碗で、76は網目文様を施す。77は内底面に五弁花、78～79・82は在地産か。81は近世初頭の唐津皿、83は近世後期以降の須佐唐津であろうか。いずれにしろ付近は近世後期以降に大きく開発が及んだことが推察される。

②の黒褐色土包含層は、1号墳から北側の緩やかな谷地形に堆積した層で、2区の丘陵上部の中央から西側の斜面上でも検出できた。図化し得たものは、弥生上器高杯脚部84、壺口縁部85、底部86、須恵器把手付椀87、土師器高杯底部88、土錐89である。時期的には弥生時代後期から古墳時代中期まで幅広い。87は丘陵上位の黒褐色土中の出土である。T K23～T K47併行期で、5世紀末～6世紀初頭の所産であろう。これは2号墳やS D 7の時期と矛盾しない。石製品ではS 6の石匙、S 7の石鍬が出土している。S 6は縄文時代で安山岩製、1号墳付近の黒色土除去中に出土した。S 7は弥生時代の所産であろうか。2区の丘陵部で、やはり黒色土の

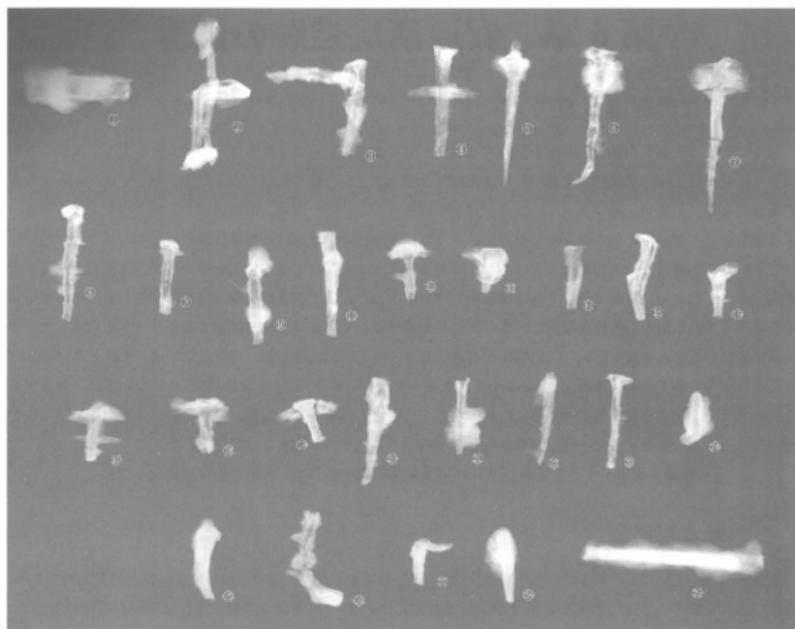


Fig.280 鉄関連遺物X線写真

除去中である。このように黒褐色土は縄文～古墳時代にかけての包含層と理解される。

③は遺構外からの出土である。須恵器の短頸壺90、高杯脚部91、甕92、青磁の無文93、石製品では敲石S8、金属製品では煙管B1、明治時代の錢貨C1がある。92はTK209併行で概ね6世紀末頃と考えられる。93は15～16世紀のいわゆる端反腕C1は二銭硬貨で発行期間は明治6～17年である。

(8) 鉄関連遺物 (Fig.279・280 Tab.223・224 PL.94)

調査区内、主に近世墓SK17から出土した鉄釘を分類している。基本的に棺に打ち込まれた釘である。遺構外からは釘F②と棒状鉄製品F③が出土している。SK17は鉄釘の出土から木棺と考えられる。釘はほぼ直線状に出土しており、これらを結ぶと四方に開いた形がみられる。羽合町の長瀬高浜遺跡、SX'28(2)でも鉄釘が多数出土しており、木棺が復元されている。とくに骨が明瞭に遺存している。これによると横臥屈葬で、四隅には木杭を配し、やや浮いた状況で底板がある。また鳥取市の桂見遺跡(2)でも良好な出土例があり、ここで木棺を復元している。これによると底板は平坦で、平面形が長辺が約70cm、短辺が約50cm前後の長方形であり、座棺として復元されている。釘は小口方向から打ち込まれている。釘の遺存状況から、全てを検出しているとは言い難いが、概ね形状は類似すると考えられる。

注

- (1) 財團法人 鳥取県教育文化財團 1983『長瀬高浜遺跡Ⅳ』
- (2) 鳥取市教育委員会 1984『桂見墳墓群』

第6章 安原溝尻遺跡の調査

1 調査の経過と方法

調査に先立ち、調査開始前の状況を記録するべく、業者委託によってラジコン飛行機による空中写真撮影を実施した。発掘調査は、平成13年4月10日の重機による表土剥ぎから着手した。表土剥ぎにおいては、大山町教育委員会による試掘結果に基づき（1）慎重な掘り下げを行った。その結果、遺構面である粘土層まで圃場整備による擾乱が及んでいることが明らかとなった。さらに、調査区の中央部には圃場整備時に埋められた小河川が存在していた。当初はこの河川を掘り上げてしまう方針を立て、重機によって作業を進めたが、土量や漏水などで問題点が生じたため、南側3分の2程度は掘り上げを中止した。表土剥ぎ終了後、業者に委託して国土座標第V系に基づく10m方眼の調査杭を設置し、この調査杭を基準として調査地全体を網羅するグリッドを設定した。作業員は4月17日から稼働を開始し、遺構検出および掘り下げを順次実施した。遺構としては、土坑1基（SK-1）と遺物を含む5つの自然河川（SD-1～5）を確認した。このうちSD-1およびSD-4については、包含する遺物の量はトレンチを設定して掘り下げた結果からごく僅かと判断されたため、トレンチによる土層堆積状況の確認をもって調査を終了した。発掘調査は地形測量の完了した6月9日をもって終了した。

註（1）「安原所在遺跡・平第2遺跡」『大山町内遺跡発掘調査報告書』大山町教育委員会 1990

2 基本層序

調査区は圃場整備事業の終了した水田内に位置するが、農道を挟んだ北側の水田とは2m以上の標高差があり、遺構は上部がかなり削平されていることが推測される。Fig.283「調査区南東壁土層断面図」の①層は耕作土、②層は水田床土で合わせて30～50cm程度の厚さがあり、その下に地山の③層灰色粘土が存在している。



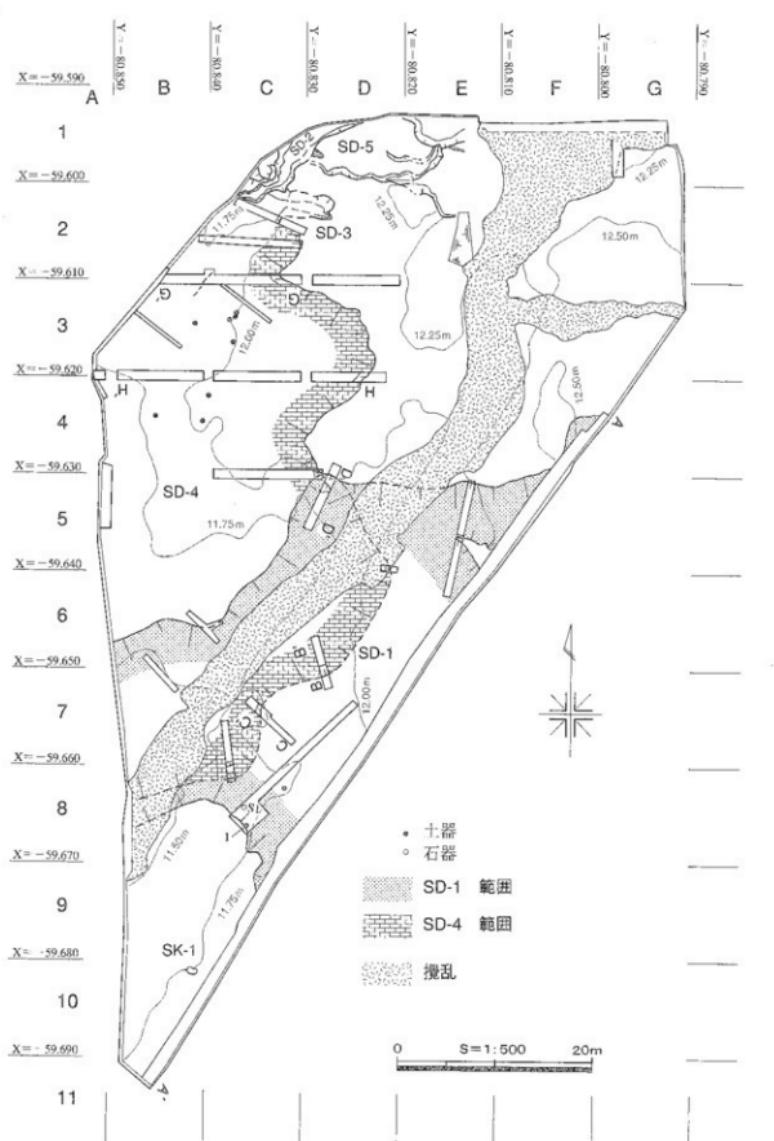
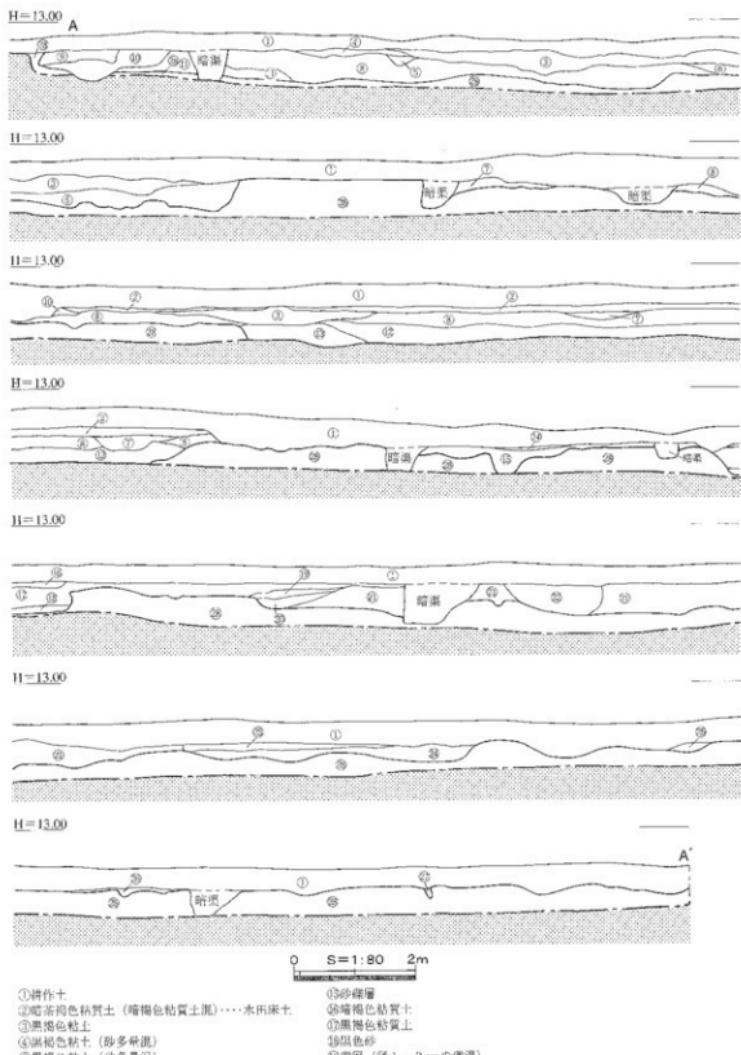


Fig.282 安原港沉跡遺構全体図



- ①耕作土
- ②暗茶褐色粘質土（暗褐色粘質土層）…水田底土
- ③黑褐色土上
- ④深褐色粘土（砂多量混）
- ⑤黑褐色粘土（砂1～5cmの雜混）
- ⑥黑褐色粘土（暗茶褐色粘土・砂混）
- ⑦黑褐色粘土（暗茶褐色粘土・砂混）
- ⑧淤泥（暗灰褐色土・径5～10cmの雜多量混）
- ⑨淤泥（暗灰褐色土・砂多量混）
- ⑩淤泥（暗灰褐色土・径1～5cmの雜混）
- ⑪淤泥（暗灰褐色土・砂多量混）
- ⑫淤泥（暗茶褐色土・砂多量混）
- ⑬淤泥（暗茶褐色土・砂多量、黒褐色粘土ブロック混）
- ⑭淤泥（暗茶褐色土・砂多量）

Fig.283 调査区南東盤土層断面図

3 発掘調査の成果

(1) 土坑

SK-1 (Fig.284 PL.95)

B-10グリッド北東隅に位置する。北東側がややいびつではあるが、平面形はほぼ楕円形状を呈する。長軸55cm、短軸37cm、検出面からの深さは最大で15cmである。

埋土は2層とも均質な粘土質の土質であり、自然堆積と推測される。遺物は出土しなかった。

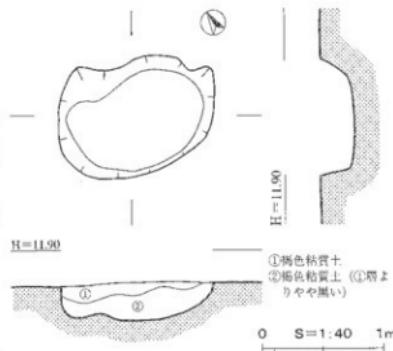


Fig.284 SK-1 遺構図

(2) 溝状遺構

SD-1 (Fig.282・283・286 Tab.225 PL.95・96)

F-4グリッドからB-7グリッド方向にのびる自然河川であり、地形から考えて東から西方向に流下している

たと推測される。E-5グリッドには支流と本流の合流部分が存在している。調査区東側で幅約40m、西側では残存部で15mの幅が存在するが、開場整備によって上部がかなり削半されていると推測されるため本来の深さは明確ではないが、検出面からはFig.286の土層断面図では約60cm存在しているもの、Fig.283の調査区南東壁の土層断面図では30cm程度であり、横に折がった形状を呈するものである。

埋土は黒色系粘土質と疊層からなるもので、通常は粘土の堆積する弱い流れであるが、時には多量の疊を押し流す激しい流れが発生することを繰り返していたことが推測される。

遺物のうち陶化できたのは弥生土器の壺1、底部を回転糸切りした須恵器の杯2、石鏡S1・2である。このうち、1は頭部形態は明確ではないが口縁端部が下垂するので、妻木晩田遺跡縦年2期A2類に相当する。2は口縁形態が不明なため明確な判断は出来ないが、底部糸切りが用いられていることから、陰田遺跡縦年10期以降のものである。

2の存在からSD-1は奈良時代の遺構と推測されるが、河川内の流入遺物であるため上限を奈良時代と考えるべきであり、下限については遺物がほとんど出土していないため判断ができない。

註「妻木晩田遺跡発掘調査報告」大山スイス村埋蔵文化財発掘調査団・大山町教育委員会 2000

〔陰田〕米子市教育委員会 1984

加藤和枝「山陰地方中部における横穴墓出土の糸切り痕のある須恵器について」『考古学と技術』 1988

SD-2 (Fig.287~289 Tab.225 PL.96・97・99・100)

調査区の北端に沿うように位置し、緩やかに南側に屈曲する自然河川。地形から考えて東から西方向に流下していたと推測される。途中が調査区外になり確實には繋がらないが、全長は約25m程度である。SD-2の周間にSD-3およびSD-5も一部切り合うように位置しているが、Fig.288によりSD-3がSD-2の上部に位置することが明らかであり、SD-2とSD-5についても、SD-5の底面からSD-2を検出していることからSD-5が新しいことが分かる。

埋土はFig.288に見るようく黒褐色の粘土が中心であるが、底部には疊層が存在している。これらの層中には植物遺体が多く認められた。そのため、Fig.288の②・④層の土および木片を採取し、花粉分析および樹種同定を実施した。詳細については附論に譲るが、周辺地城にはシイ・カシ類と共にクスノキ科が生育していたことが推定されている。

遺物のうち陶化できたのは3~5の3点の土器である。3は外面に条痕を施す口縁部である。4は内外面ともに条痕後に粗くナデを施す深鉢・器壁は薄い。5は口縁端部に接して刻みを施さない突審を貼り付ける突審文系土器で、弥生時代前期前半の時期にあたる。

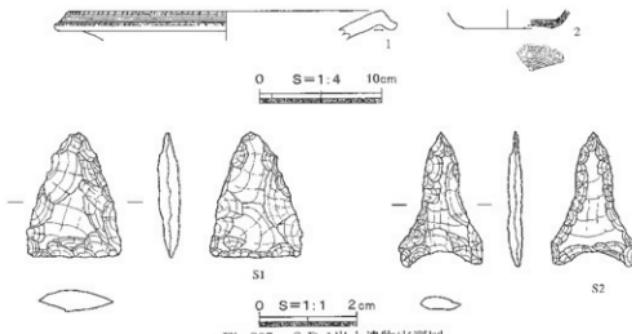


Fig.285 S D-1出土遺物分布図

S D-1 土色

①黒褐色粘質土 (練混)

②膠質 (径1~8cmの堆積)

③暗灰褐色シルト

④灰褐色粘質土

⑤褐色粘質土 (黒褐色粘土混)

S D-4 土色

⑥黒褐色粘土

⑦灰褐色粘土

⑧黑褐色粘土

⑨灰褐色粘質土 (練混)

⑩黒灰褐色粘土

⑪暗灰褐色粘質土 (練・砂混)

⑫膠質 (黒褐色粘土・径1~4cmの堆積)

⑬灰褐色シルト

⑭暗灰茶褐色粘質シルト (暗褐色土・暗褐色膠)

⑮黑褐色粘土 (暗褐色土・暗褐色膠)

⑯暗灰褐色粘質土 (白色練・砂混)

⑰灰褐色粘土 (練混)

⑱黑茶褐色粘土 (練混)

⑲膠質 (暗褐色土・暗褐色膠混)

⑳灰褐色土 (白色練混) ···· 墓山

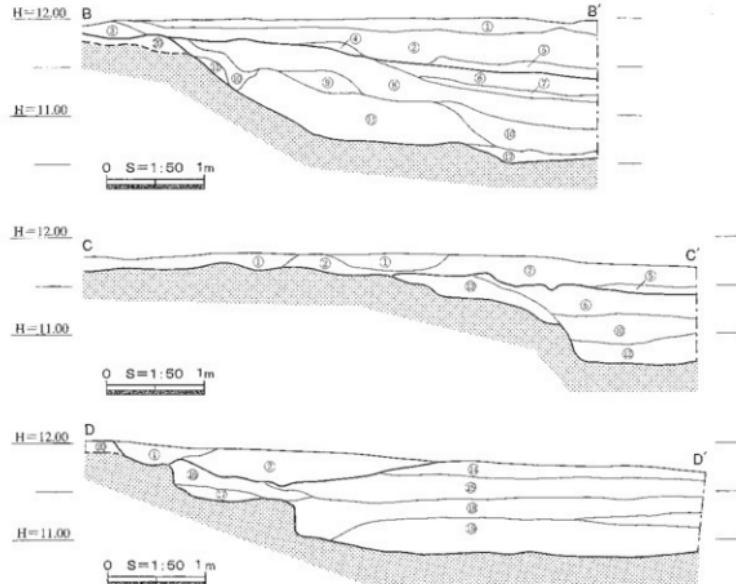


Fig.286 S D-1~4 土層断面図

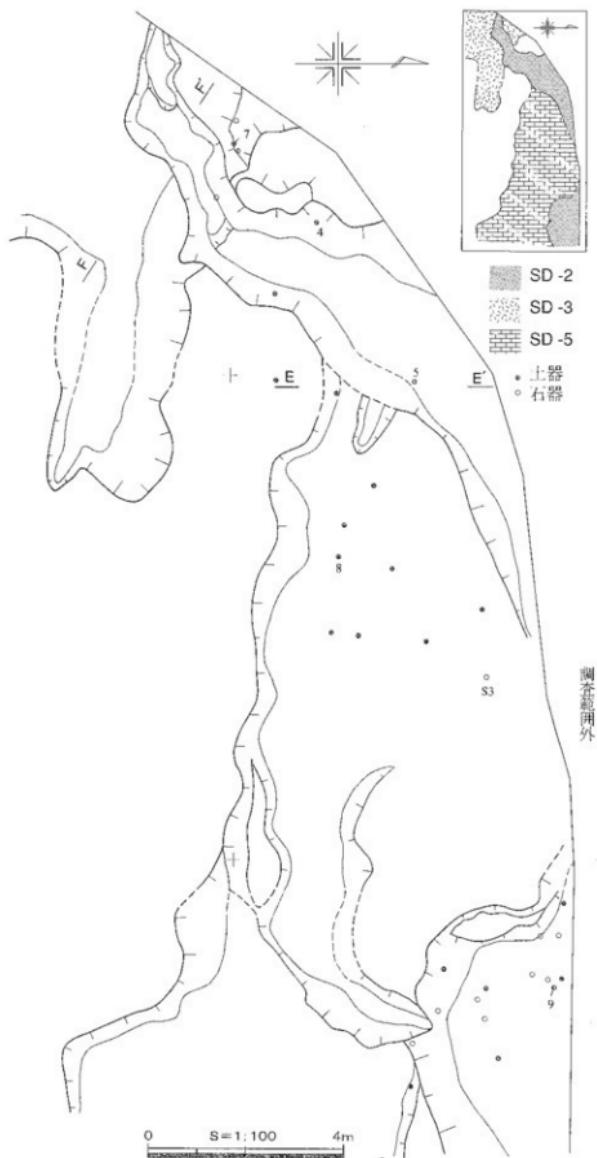


Fig.287 SD-2・3・5遺構図

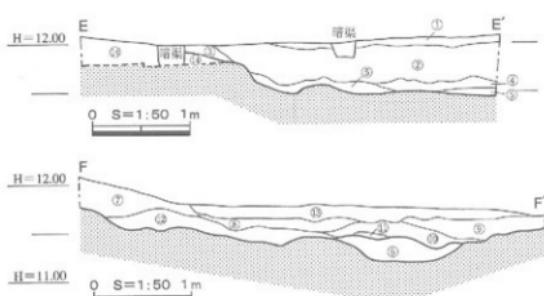


Fig.288 SD-2・3土層断面図

- SD-2・3土層**
- ①黒褐色粘質土
 - ②黒褐色粘土（部分的に粘質砂混、植物遺体多量混）
 - ③褐層（暗褐色土色・径1~5cmの縦溝）
 - ④褐層（暗褐色土・径5mm以下の縦・植物遺体混）
 - ⑤褐層（暗褐色土・径1~3cmの縦・植物遺体混）
 - ⑥縦層（暗灰褐色土・径1~10cmの縦溝）
- SD-3土層**
- ⑦暗褐色粘質土
 - ⑧暗褐色粘質土（径0.5~1cmの縦溝）
 - ⑨暗褐色粘質土（径1~4cmの縦溝）
 - ⑩暗褐色粘質土（黒褐色粘土ブロック・径0.5~1cmの縦溝）
 - ⑪暗褐色粘質土上（褐色粘質土・径1cm程度の縦溝）
 - ⑫暗褐色粘質土
 - ⑬暗褐色粘土（水田床土）
 - ⑭明灰褐色粘質土（堆山）

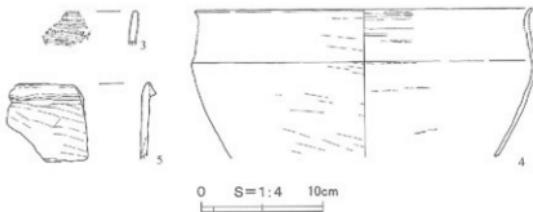


Fig.289 SD-2出土遺物実測図

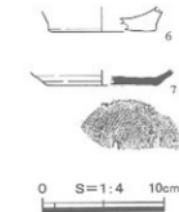


Fig.290 SD-3出土遺物実測図

SD-2は5の存在から弥生時代前期半を上限とする遺構である。

註 濱田吉彦「『久美遺跡における縄文時代晩期末から弥生時代前期の土器について』『久美遺跡V・VI』財團法人米子市教育文化事業団 1998

SD-3 (Fig.287・288・290・291 Tab.225 PL.97~99)

調査区北西端のC-2グリッドを中心位置する。D-2グリッドからC-2グリッドに向けて東西方向に延びてから南側に湾曲して調査区外に続く自然河川。地形から考えて東から西側に向けて流下していたと考えられるもので、東側は削平のために遺存していないのであろう。全長は約10mである。前述したSD-2を切るとともに、Fig.291に見るように後述するSD-4も切っている。

遺物のうち図化できたのは6・7の2点である。6は内外面とも風化しており調整は明確ではないが、平底の底部である。7は底部が糸切りされた須恵器杯である。

時期については、7が全体形は不明であるが、底部糸切りの須恵器杯であることから陰田遺跡編年10期以降の遺物であり、奈良時代ないしそれ以降に形成されている。

『陰田』米子市教育委員会 1984

加藤和枝「山陰地方中部における横穴墓出土の糸切り痕のある須恵器について」『考古学と技術』 1988

SD-4 (Fig.282・291・292 PL.98)

調査区西側のB-C-2~7グリッドを中心位置する自然河川と推測されるもの。トレントによる上層確認の結果、遺構の西側輪郭は把握が出来たが、東側の輪郭については調査区外に統一しているため確認が出来なかつた。しかし、Fig.291では地形の立ち上がりが確認できることから、調査範囲外のあまり離れていないところに西側の端が存在すると考えられる。確認できる全長は約60m、幅は最小でも23mは存在する。底部は凸円のほとんど無い平坦状となっており、検出面からの深さはほぼ1mである。また、南側部分は前述したSD-1によって、

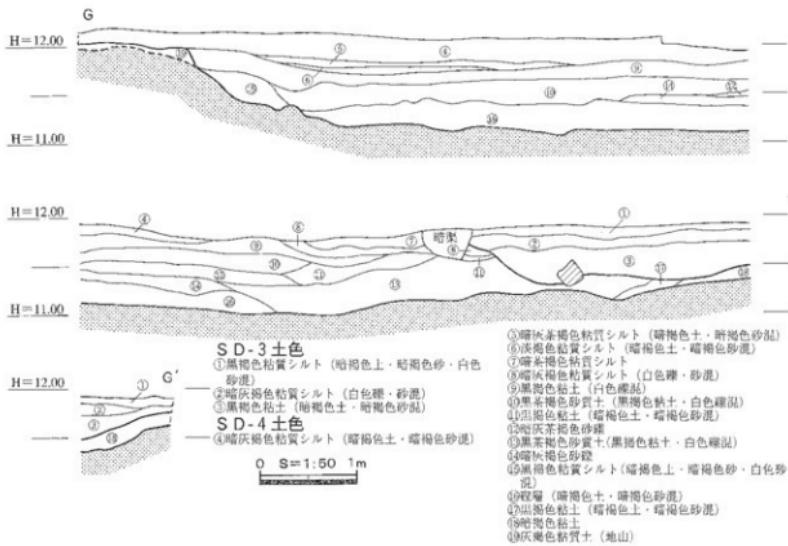


Fig.291 SD-3・4土層断面図

北側部分はSD-3によって切られている。

図化できる遺物はないが、トレンチ掘り下中に黒曜石片が出土した。

時期については、遺構の切り合い関係からSD-1およびSD-3よりも古く形成されているが、明確な時期は判断できない。

SD-5 (Fig.287・293 Tab.225 PL.95・97・99・100)

調査区北端のD-1グリッドを中心として位置している。前述したSD-2の上部にあり、E-1グリッドからD-1グリッドに向けて延びる自然河川と推測される。北側が調査区外のため確実ではないが、SD-1のように広く浅い形態を呈するようであり、検出部分で全長は約16m、幅約10mの規模があり、検出面からの深さは約40cmを測る。底部は平坦状となっている。

遺物のうち図化できたものは縄文土器の口縁部8・9、黒曜石の石錐S3の3点である。

時期は、縄文土器が出土しているが弥生時代前期前半を上限とするSD-2を切っていることからそれよりも新しく形成されたものである。

(3) 遺構外出土遺物

遺構外出土遺物 (Fig.294 Tab.225 PL.99・100)

遺構外からも僅かではあるが遺物が出土した。須恵器壺10・11、提瓶の把手と考えられる12、底部糸切りらしい須恵器杯13、捕鉢14、土鍤15～18、五輪塔の火輪S4、水輪S5、地輪S6・7である。このうち、12は短いカギ状把手であり、大谷分類(1)のウ型に当たるものである。

註(1) 大谷亮二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集 1994

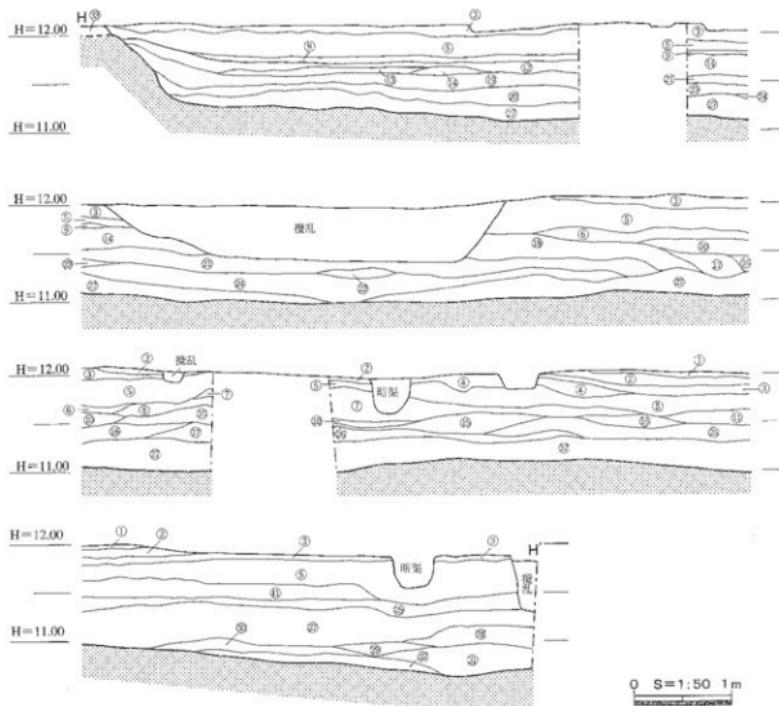


Fig. 292 S D-4 土層断面図

- ①純灰褐色粘質シルト（暗褐色土・暗褐色砂混）
 ②暗褐色土
 ③暗灰褐色粘質シルト（暗褐色土・暗褐色砂混）
 ④暗灰褐色粘質土
 ⑤暗灰褐色粘質土（暗褐色土・暗褐色砂混）
 ⑥暗灰褐色粘質土（白色泥・砂混）
 ⑦暗灰褐色粘質土（白色泥・砂混）
 ⑧暗灰褐色粘質土（砂多量混）
 ⑨淡褐色粘質土（白色泥）
 ⑩暗褐色粘質土（白色泥・砂混）
 ⑪暗褐色砂（暗褐色土・暗褐色砂混）
 ⑫暗褐色砂
 ⑬窓堀
 ⑭擾乱
 ⑮窓堀
 ⑯窓堀
- ①黒茶褐色粘土上
 ②暗灰褐色粘質シルト（白色泥多量混）
 ③暗灰褐色粘質シルト（暗褐色土・暗褐色砂混）
 ④暗灰褐色粘質土（暗褐色土・暗褐色砂混）
 ⑤暗灰褐色粘質土（白色泥）
 ⑥暗灰褐色粘質土（白色泥・砂混）
 ⑦暗灰褐色粘質土（白色泥・砂混）
 ⑧暗灰褐色粘質土（白色泥・砂混）
 ⑨暗灰褐色粘質土（白色泥・砂混）
 ⑩暗灰褐色粘質土（白色泥・砂混）
 ⑪暗灰褐色砂
 ⑫窓堀
 ⑬窓堀
 ⑭窓堀
 ⑮窓堀
 ⑯窓堀

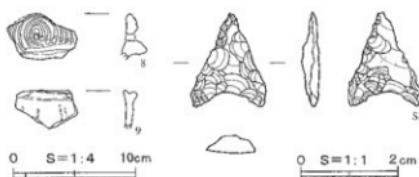


Fig. 293 S D-5 出土遺物実測図

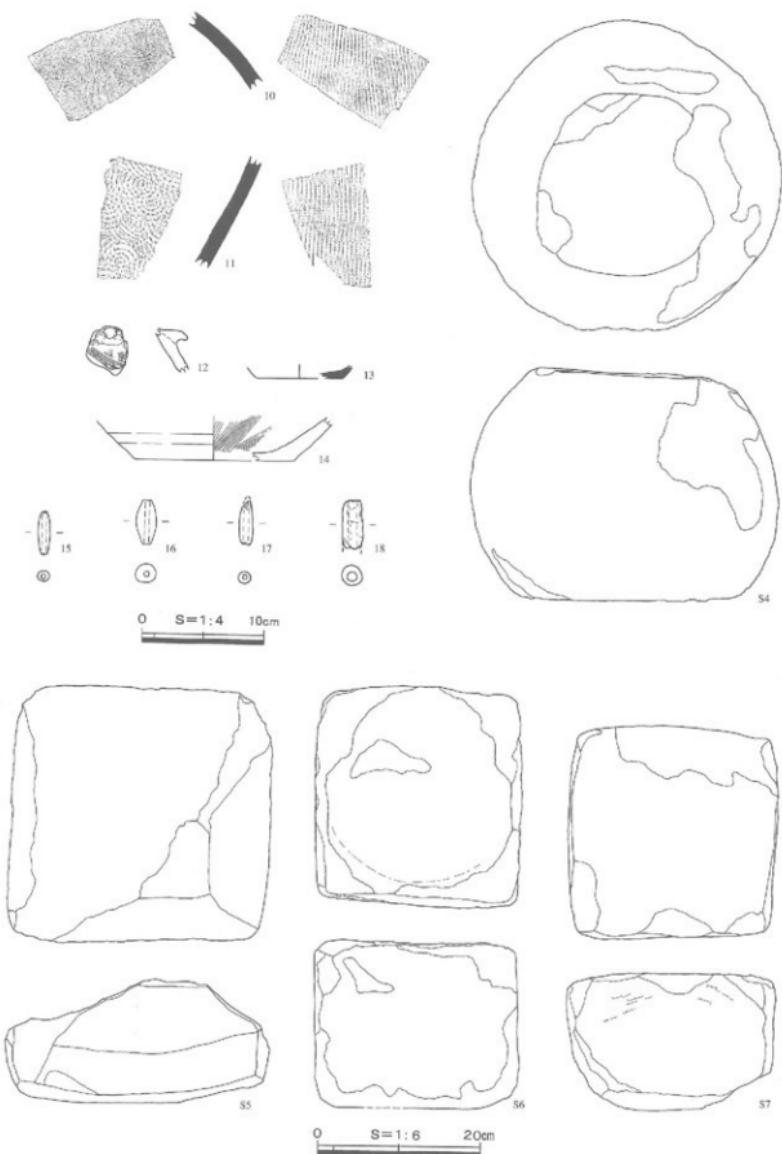


Fig.294 遺構外出土遺物実測図

Tab.225 (1) 土器・石器観察表

No.	Fig. PL.	遺構名	種類	法量(cm)	特徴	胎土・焼成	色調	備考
1	Fig.285 PL.99	S D-1	弥生土器 壺	高さ26.0 口径△ 24	口縁外側に3条の凹線を施し、後に 別み、外側面調整不明	2mm程度の砂粒を多 く含む・良	淡黄色25Y7/4	約1/4残存
2	Fig.285 PL.99	S D-1	弥生器 壺	高さ △ 15	外縁回転ナダ。底面丸切り。内面角 底面深さ 7.1	密・良	灰白色10Y7/1	底部約1/4残存
3	Fig.289 PL.99	S D-2	櫛文土器 鉢	器高 △ 28	外縁傾斜ナダの直腹。炭化物付着。内 面ナダ	密・良	外) 棕色5Y4/1 内) 深灰色10Y8A/1	
4	Fig.289 PL.99	S D-2	櫛文土器 鉢	器高 △ 12	外縁傾斜部へ2.3ガキ。底面ナダ	1mm程度の砂粒を含 む・良好	浅黄色25Y7/3	約1/35残存
5	Fig.289 PL.99	S D-2	突葉文十唇 深鉢	器高 △ 6.3	外側面とも条状模ナダ。調整不明瞭	1~2mm程度の砂粒 を含む・やや不良	淡黄色25Y7/3	
6	Fig.290 PL.99	S D-3	陶文土器 (底部)	器高 △ 2.0	内外面ともにナダか?	1mm程度の砂粒を多 く含む	外) に近い黄色25Y6/3 内) 黒褐色2.5Y3/1	底部約1/8残存
7	Fig.290 PL.99	S D-5	須恵器 杯	器高 △ 13	外縁回転ナダ。底面疎止切りか?。 底面深さ 8.9	密・良	明青灰色10PG7/1	底部約1/4残存
8	Fig.290 PL.99	S D-5	櫛文土器 深鉢	器高 △ 38	溝底の沈姫。中央部に孔。内面ナダ	1mm程度の砂粒を多 く含む・良好	に近い黄褐色10Y8E/3	
9	Fig.290 PL.99	S D-5	縄文十唇 鉢	器高 △ 31	口縁端部に1金の浅彫。底面口縁 内面ナダか?	1mm程度の砂粒を多 く含む・良好	に近い黄褐色10Y8S/3	
10	Fig.294 PL.100	遺構外	埴輪器 火	器高 △ 6.3	外縁タキ。内面タキ後火ナダか?	密・良好	外) 灰白色10Y7/1 内) 明緑褐色10G7Y7/1	
11	Fig.294 PL.100	遺構外	埴輪器 壺	器高 △ 9.2	外縁タキ。内面同心円タキタキ	密・良好	灰色N/	
12	Fig.294 PL.100	遺構外	須恵器 壺	器高 △ 3.6	外縁タキ。内面カキ。短いカギ状把 手を行きまる。内面不明	外) 不明 内) オリーブ灰色2.5GY6/1		
13	Fig.294 PL.100	遺構外	須恵器 舟	器高 △ 14	外縁回転ナダ。底面丸切りか?。内 面ナダ	密・良好	オリーブ灰色5G6/1	底部約1/6残存
14	Fig.294 PL.100	遺構外	須恵器 舟	器高 △ 3.7	外縁回転ナダ。底面ナダ。内面ナダ 後7名単位の縦目	密・良好	灰色NS/	底部約1/10残存
15	Fig.294 PL.100	遺構外	土製品 土罐	最大径 36	下づくね	0.5mm程度の砂粒を 含む・良好	に近い黄褐色10Y8/4	完存
16	Fig.294 PL.100	遺構外	土製品 土罐	最大径 1.0	下づくね	0.5mm程度の砂粒を 含む・良	に近い褐色7.5YR7/4	
17	Fig.294 PL.100	遺構外	土製品 土罐	最大径 3.7	手づくね	1mm程度の砂粒を含 む・やや不良	褐色5YR6/6	完存
18	Fig.294 PL.100	遺構外	土製品 土罐	最大径 4.0	手づくね	0.5mm程度の砂粒を 含む・良	に近い黄褐色10Y8/4	

Tab.225 (2) 土器・石器観察表

遺物番号	Fig. PL.	遺構名	種類	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重
S 1	Fig.285 PL.100	S D-1	石鏡	ガラス質安山岩	2.6	1.9	0.4	2.0 g
S 2	Fig.285 PL.100	S D-1	石鏡	ガラス質安山岩	2.8	1.8	0.3	1.1 g
S 3	Fig.293 PL.100	S D-5	石鏡	黒曜石	20	1.6	0.4	0.7 g
S 4	Fig.294 PL.100	遺構外	火輪	大山系角閃石安山岩	31.7	32.1	△ 15.3	16.8 kg
S 5	Fig.294 PL.100	遺構外	水輪	大山系角閃石安山岩	38.3	38.2	28.6	50.0 kg
S 6	Fig.294 PL.100	遺構外	地輪	大山系角閃石安山岩	27.2	25.1	20.7	21.6 kg
S 7	Fig.294 PL.100	遺構外	地輪	大山系角閃石安山岩	26.4	25.8	△ 17.0	16.0 kg

第7章 考察

1. 遺物

(1) 在地土器 (Fig.295・296・297・298)

今回の調査では縄文時代から近世・現代に至るまでの遺物が出土しているが、とくに出土量の多いのは平安時代と鎌倉時代の遺物であり、溝状造構や集落などと直接関連する。そこでこの古代末から中世前期にかけての土器・陶磁器・鉄製品などについて若干の検討を行う。

茶畠六反田遺跡の溝状造構のうち、ある程度まとまりのあるものはSD 2・4・12・15の出土遺物がある。造構はSD 4を除いて概して浅く、上部は掘削されていると考えられる。埋土はいずれも砂が中心で層の上下関係は不明瞭である。出土遺物をみると、須恵器のほか、回転台で成形された醸化焼成の土器があり、いわゆる土師質土器に該当する。底部の切り離しを観察すると、回転ヘラ切りによる切り離しをもつものと回転糸切りによる切り離しをするものに大別でき、さらにヘラ切りには、①回転ヘラ切り後に指による押圧を加えるもの、②切り離し後に板に押し当てるものの、③切り離しで終わるものに分けられる。糸切りについてはいずれも切り離し後に調整を加えるものは存在していない。

これを遺構毎に確認すると、SD 12・15はヘラ切りのみ、SD 4はヘラ切りと糸切り、SD 2は糸切りのみで構成される。これが造構による差なのか時期差か問題になる。

SD 15は須恵器の杯・薬壺・土師質土器の壺が共伴している。須恵器の杯は島根県松江市の古吉志遺跡群で確認された窯跡出土のものに類似し、胎内分析の結果(I)を見ても、ほぼ附近から搬入されていることが明らかである。またSD 12の土器もSD 15に類似し、やはり須恵器の杯が出土しているが、ここから綠釉陶器片257が出土している。これは焼成が軟質で黄緑色の釉薬で、中にわずかに濃緑色の紋を含んでおり、9世紀後半から末頃の京都産と考えられる。土師質土器はヘラ切りのみで、手法は①が主体で②・③は確認していない。高台付の杯も1点出土しているが、高台は立ち上がりよりも内側に貼り付けられている。

SD 4はやや深い造構で規模も大きく、遺物についても須恵器は飛鳥時代から平安時代初頭まで遡るものがある。主なものは土師質土器で、杯はヘラ切りと糸切りがみられ、ヘラ切りには①・②・③がある。共伴する遺物は京都産の綠釉陶器224と蘇窯須恵器187で、224はやや焼きがしっかりとしているが醸化炎焼成で、外面に磨きを残し、黄緑色の釉薬をかける9世紀末の京都産である。187は胎土が在地産の須恵器とは明らかに異なり精緻で、10世紀前半のものである。他に高台付の杯もあるが、高台は外底面の立ち上がりの際に貼り付けられる。

SD 2とSD 30の 出土遺物は形状が類似する。いずれも底面には回転糸切り痕跡を残す。口縁部は内湾して立ち上がる。高台をもつものが無い物よりも多い。ただし、高台部を意図的に打ち欠いているとみられるものが多々みられ、内底面に「レ」字状の焼成前の



Fig. 295 遺跡位置図

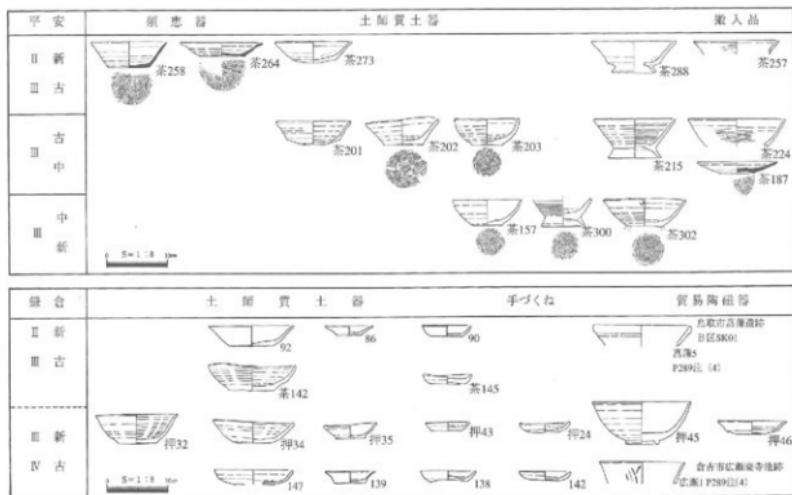


Fig. 296 古代・中世の土器 (1)

ヘラ記号をもつものが多く認められる。

これまでの編年鏡をみると、伯耆国庁ではヘラ切りから糸切りへの変化を認めている。これによると国庁の土器は平安時代初頭から中期、10世紀の前葉まで3つの様式期に区分(2)している。これと今回確認された搬入遺物と合わせて検討した結果作成したのがFig.296である。これに対応させると今回調査された資料は伯耆国庁の第Ⅱ様式期の終わりから第Ⅲ様式期を経て、さらにその後の段階まであるとみられる。これを近年の編年観に当てはめると、平安二期の終わりからⅢ期にかけて(3)ということになる。今回の成果としては、これを推測させる搬入品が出土していることで、これから上記のような暦年代を推測することがある程度可能である。

傾向としては、須恵器が次第に消滅すること、底部の調整がヘラ切り後に押圧を加える方法から板に押しつけたり無調整になり、回転糸切りに変化していることが分かる。また器形は口縁部が内湾あるいは外反するものが出現し、高台も貼り付け位置が内側から外側に変化する。また回転台による器壁の凹凸をより顕著に残すものが目立つようになる。

これらと共に伴する煮炊具の暦年がFig.297である。甕は口縁部が体部と大きな角度で外傾あるいは外反しているものが、次第に角度が小さく屈曲が弱くなる傾向がみられる。体部の変化は不明瞭である。S D 2 出土の170のように、鍋と呼称するべきか判断が難しい器種も出土する。

次に集落の中心時期である鎌倉時代の様相を検討する。

中世Ⅱ期の末からⅢ期にかけて、土師質甕・皿の器形には形態上の大きな差異は認め難く、これが在地の土器暦年を難しくしている一因である。それに加え、暦年代を付与する資料に乏しく、暦年の裏付けが貿易陶磁器や国産陶器などの一部の搬入品に頼らざるを得ない点に問題がある。しかしこの時期の在地土器の暦年を整備しなければならないことは事実であり、以上のような搬入品の傾向をみながら作成したのがFig.296である。貿易陶磁器は白磁IV類碗→青磁劃花文碗・同安窯系青磁皿→龍泉窯系青磁碗に併行する在地土器を抽出して作成したのがFig.296である。また主な中世遺跡での一括出土遺物の平均法量を示したFig.298(4)と合わせて検討する。

菖蒲遺跡B区S K01の資料は、杯と皿、壺の一括廃棄土坑である。おそらく祭祀行為に使用されたものを廃棄したのである。土師質土器の杯は口縁部が直線状に外傾する。皿は口縁部が長いものと短いものがある。

茶烟六反田遺跡1区のP 800出土土器は一括埋納されたもので、陶磁器類は共伴していない。杯の口縁部は内

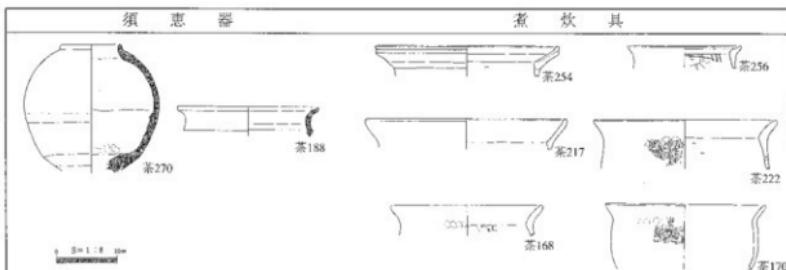


Fig. 297 古代・中世の土器 (2)

溝し、皿は器高が低く口径と底径の差が小さいものに限られる。同様の形状をもつ土器は、やや離れるが羽町町の長瀬高浜遺跡や米子市錦町第1遺跡(5)にみられる。遺構の状況からいずれも白磁のIV類頃とほぼ併行するとみられる。杯の形状から菖蒲跡よりやや新しいものと理解した。

押平弘法堂遺跡のSK11はいわゆる屋敷墓で、ここから土師質土器の杯・皿と貿易陶磁器が共伴する。杯には深浅があり、深いものは口縁端部が外側に曲がる。共伴している青磁碗を模した形状であろうか。皿は口縁部が長いものと短く立ち上がるものがある。24についてSK5出土資料であるが、共伴している在地土器の皿がSK11と類似している。

倉吉市の広瀬廃寺跡の資料は、ある程度の時期幅を考慮するとしても白磁がなく、青磁の蓮弁文碗を中心とする組成で、青白磁が加わる。手づくねと回転糸切りがあり、杯は手づくねのものは扁平で口径・器高ともに小さい。皿は手づくね、回転台成形とともに法量の大きな差は認められない。

まとめると、中世Ⅱ期末からⅢ期(12世紀末から13世紀)にかけての在地土器の形状は、杯は直線状の口縁が丸く、概して浅くなり、皿は底径が小さく口縁部が長いものと、口径と底径の差が小さく立ち上がりの短いものとあり、手づくねの皿もみられるようになる。個々での杯や皿分類は難しいが、他の遺物と共に伴していることも多く、煮炊具や調理具、搬入品など幅広い視野での時期決定の手続きが必要となるだろう。

注

- (1) 第8章 特論 三辻利一「茶畠六反田遺跡出土土器の蛍光X線分析」本書p.305~307
- (2) 黄淳一郎 1983「古代庶民生産の展開－西日本を中心にして－」『文化財論叢』同朋舎
- (3) 八幡興 2000「山陰における平安時代の土器・陶磁器について」中近世土器の基礎研究XV
- (4) 八幡興 1998「山陰における中世土器の変遷について」中近世土器の基礎研究XIII の掲載図を一部改変。また菖蒲跡、広瀬廃寺の実測図についても転載している。
- (5) 参考文献は、長瀬高浜遺跡は本文p.298、錦町第1遺跡は本文p.119に記載。

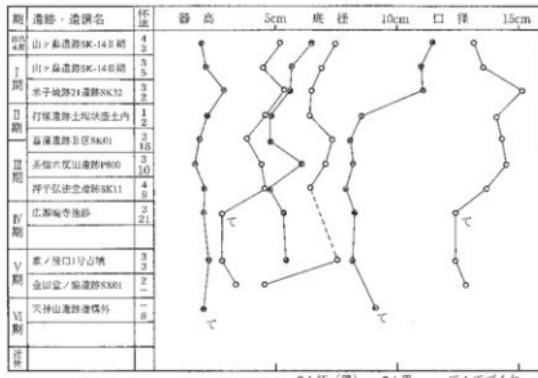


Fig. 298 土師質皿・杯の法量推移図

○: 杯(皿) ●: 皿 て: てづくね

◎: 杯(皿) ●: 皿 て: てづくね

(2) 墨書き土器・ヘラ書き土器 (Fig.299-300 Tab.226)

伯耆国においても伯耆国守や国分寺跡のほか、近年では大御堂廃寺から160点あまりの墨書き土器が出土している。Fig.299-300はこれを除いた伯耆における主な墨書き土器の実測図である。

まず東伯耆であるが、倉吉に国府が置かれ、ここを中心として概ね西郷、羽合町・東伯町付近の郡衙や寺など公的な施設、あるいは莊園などが推測される位置からの出土がある。ここから出土する墨書き土器は須恵器もあるが、多くは酸化炎焼成で回転台を使用したいわゆる土師質土器に記されている。墨書きの位置はほとんどが外底面で、いくつか側面や内底面のものもみられる。ヘラ書き土器は僅かである。墨書きの内容は判読不明のものが多いが、「久米寺」や「三宅」をはじめ、地名の可能性のある「長」がある。このほか人名や物の名前、暦に関するものや吉慶を願うとみられる文字がある。

次に西伯耆は、糸子を中心におおよそ淀江・名和までの範囲で出土する。ここからはほとんどが須恵器の杯蓋・杯・高台付の杯に記されている。蓋は内面、杯は外底面に記されていることが多い。ただし上福方遺跡から出土した墨書き土器は土師質土器の杯で、内底面に記されている。墨書きの内容は地名を示す可能性のある「奈」(奈

Tab.226 伯耆出土の墨書き土器一覧表

遺跡名	所在地	土器・器種	墨書きの文字(?)はヘラ書き文字
1 広瀬廃寺跡	倉吉市広瀬	土師質土器	不明1
2 梶田・久戸遺跡	倉吉市梶田	土師質杯	西
3 中坐遺跡	倉吉市国府	土師質皿	不明1
4 伯耆国分尼寺跡	倉吉市国府	土師質蓋・皿・杯	福大一ノ福, 指?・蔓・花・し・口・古・不明5
5 伯耆国衙跡	倉吉市国府	須恵器杯・風字碗 土師質杯・皿・蓋	井川村久, 夫事事2厨, 荘园2, 2厨, 2瓶, 2紙, 五月口院陶, 古园2, 1-, 木人森谷, 会福, 南 新?, 米口流?, 畠, □□□口2諸, 葉, 詔, 言, 十, 千, 年, 不明, (墨書き) 3
6 松ヶ坪遺跡	倉吉市肱経寺町	須恵器杯	久米寺
7 立造東古墳群	倉吉市鴨河内	土師質杯	大・不明1
8 不人岡遺跡	倉吉市不入岡	土師質高台付皿	三宅
9 大原寺	倉吉市大原	土師質杯	不明3
10 国府春日地区 (国分寺北遺跡 2次調査)	倉吉市国府	土師質高台付皿・杯	大吉丸花紋
11 大御堂廃寺	倉吉市肱経寺町	須恵器杯・高台付杯・钵 土師質土器杯, 高台付杯 円白模, 転用鏡	88(唐書)正□寺6, 広□部内, 廿, 上□2, 久寺14, 久米寺3, 伸吉2, 東印, 私行, 介, 和大(重字), 清, 私, 器, 指など数的約160点 施印土器「久寺」2印面陽文印, 文字瓦「井」
12 ウナ谷塙B地区	閑金町松河原	須恵器円筒鏡	-
13 長瀬高浜遺跡	羽合町長瀬	土師質杯・皿・高台杯	大2, 1, 家否?, 否?, ○家, (山片) □□ 二不明2, 長2, 長2, 井□藏か少
14 向野遺跡	人榮町龟谷	須恵器杯	塙?
15 楠水	東郷町福永	須恵器杯, 土師質蓋	□(不明), 小野又は山野
16 麻藤第1・第2遺跡	東伯町麻藤	土師質杯	大
17 水道り・駄籠塙場遺跡	東伯町櫛下	土師質杯	編?・革?・口福
18 斎尾塙場跡	東伯町斎尾	土師質皿・土師質片	東2, 守?, 1, 不明4
19 大高野遺跡	東伯町斎尾	土師質杯	也?
20 人塙塙場遺跡	名和町人塙	土師質杯	是も有□2
21 蒼池六代田遺跡	名和町莘畠	須恵器杯, 土師質杯	□□山右か上その他
22 塚ヶ平ほか	淀江町山崎・深山	須恵器蓋, 刻書土器	新家本
23 上淀鬼寺	淀江町上淀	文字丸・へラ記号瓦	癸未年, 亂, 大, ×, - (ヘラ記号)
24 福岡御行遺跡	淀江町福岡	須恵器杯, 刻書土器	寺3
25 謙訪遺跡群	米子市謙訪	墨状炭化物	腹衣埋納(土師器裏に施2-刀子・和同開跡3)
26 上福万葉跡	米子市上福	土師質盤	奈
27 陰田広瀬遺跡	米子市陰田町	須恵器蓋, 円筒鏡	里宅?, 内面鏡にはヘラ記号か
28 山山廃寺1区	米子市新山	須恵器高台付杯	□
29 陰田第6遺跡	米子市陰田町	須恵器杯身	吉2
30 岩山小豆田遺跡	米子市陰田町	須恵器蓋・皿・高台付杯	鏡□, 田知, 不明5
31 岩尻鬼神遺跡	米子市陰田町	須恵器高台付杯	十山□か田1
32 目久美遺跡V・VI	米子市目久美	須恵器皿・杯, 萬	堀または挖人來または大家, 上(?)
33 吉谷鬼神遺跡	米子市吉谷	須恵器蓋	○?
34 今在家下井ノ上遺跡	米子市今在家	須恵器杯・身ほか	田井(外側面)□2

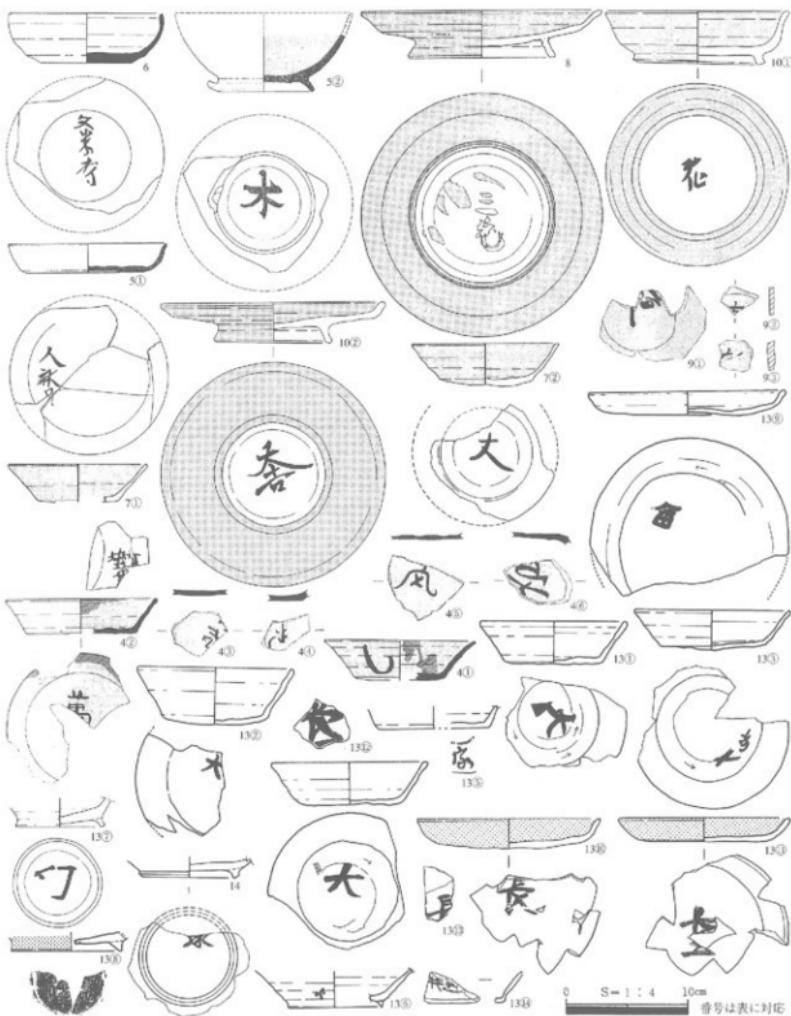


Fig. 299 伯耆出土の墨書土器（1）

和か) や建物を表すとみられる「館」などがあるが、多くは判読が難しい。上淀庵寺付近からは「寺」のヘラ書き土器が出土している。また、淀江町内での条里造構の調査により「新家」や「大十」のヘラ書き土器が出土している。

茶畑六反田遺跡で出土した墨書土器は、須恵器の高台付の杯の内面に「□□田」の墨書があり、これは地名の可能性がある。またヘラ書き土器やヘラ記号を有する土器は、いずれも杯の内底面で、中には「右里」や「上」などのように判読可能のものもあるが、多くは「レ」字状のヘラ記号とみられる。ただし、淀江町の条里造構からヘラ書き土器が出土していることは、この土地区画の東端が想定されていることと合わせて、今後の検討課題となろう。

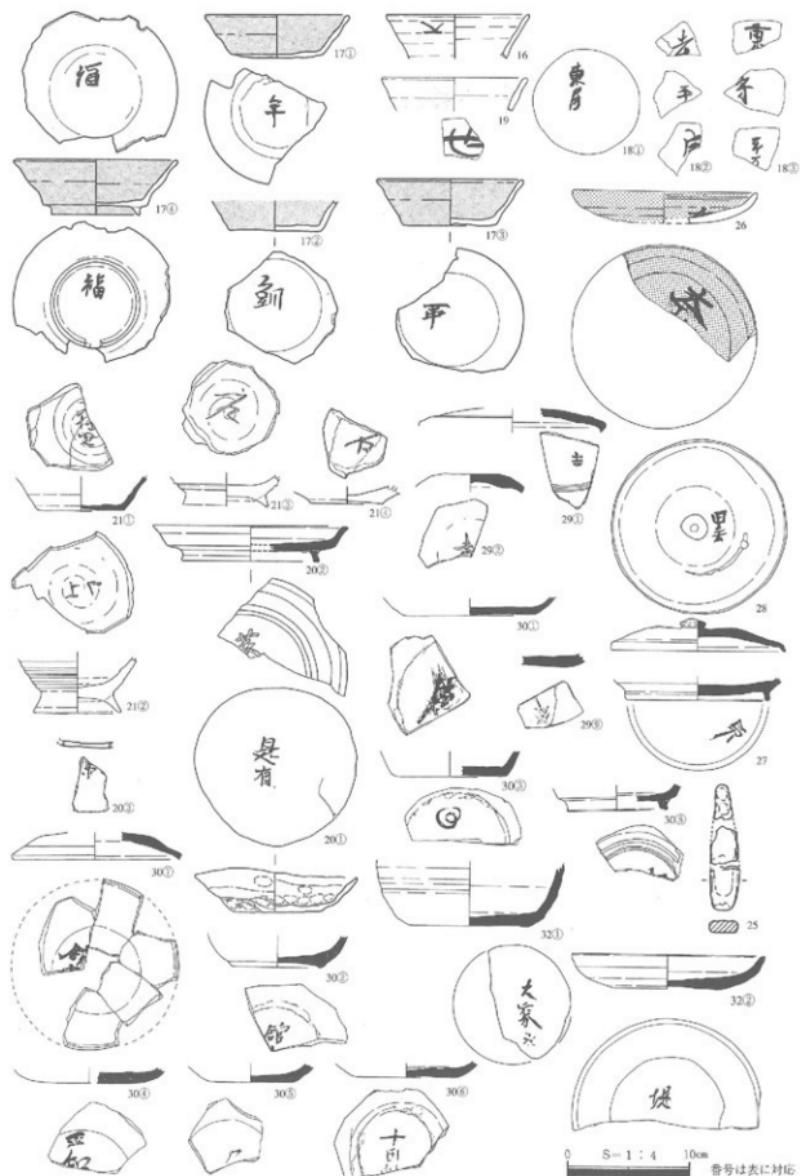


Fig. 300 伯耆出土の墨書き器 (2)

一覧表は、鳥取県埋蔵文化財センター1989鳥取県埋蔵文化財シリーズ4『歴史時代の鳥取県』を基に、伯耆国に限りその後出土した資料を、管見の及ぶ範囲で加えたものである。引用文献は下記の通りである。

1.倉吉市教育委員会1979『広瀬廬跡発掘調査報告書』 2.倉吉市教育委員会1971『横田・矢戸遺跡発掘調査概報』 3.倉吉市教育委員会1975『中峰遺跡発掘調査概報』 4.倉吉市博物館1983『伯耆國分寺』・倉吉市教育委員会2000『法華寺跡環境整備事業報告書』 5.倉吉市教育委員会1979『伯耆國行跡発掘調査概報(第5・6次)』 6.倉吉市教育委員会1984『倉吉市内遺跡分布調査報告書』 7.倉吉市教育委員会1992『立道東古墳群発掘調査報告書』 8.倉吉市教育委員会1995『不人國遺跡群発掘調査報告書』 9.倉吉市教育委員会1998『史跡 大原廬寺発掘調査報告書』 10.倉吉市教育委員会2001『倉吉市内遺跡分布調査報告書11』 11.倉吉市教育委員会2001『史跡大御堂廬寺発掘調査報告書』 12.鴨籠町教育委員会1995『ウナ谷遺跡B地区発掘調査報告書』 13.鳥取県教育文化財団1981~1983・1997・1999『長瀬高浜遺跡III~IV』 14.大栄町教育委員会1984『向野遺跡・後ろ谷遺跡発掘調査報告』 15.鳥取県埋蔵文化財センター1985『トビックス東郷町福永で墨書き土器発見』・『鳥取埋文ニュース10』 16.東伯町教育委員会1987『森藤第1・森藤第2遺跡発掘調査報告書』 17.東伯町教育委員会1988『水滸り・鶴籠据場遺跡・森藤第3遺跡発掘調査報告書』 18.東伯町教育委員会1990『斎尾廬寺範囲確認発掘調査報告書』 19.東伯町教育委員会1993『東伯町内遺跡発掘調査報告書(大高野遺跡)』 20.名和町教育委員会2001『大塚塚根遺跡・古御堂遺跡・文珠羅屋敷遺跡発掘調査報告書』 21.本報告書 22.淀江町1985『淀江町史』 23.淀江町教育委員会1995『上淀廬寺』 24.淀江町教育委員会2002『福岡柳谷遺跡A区』『平成13年度埋蔵文化財発掘技術研修会<県内遺跡発表資料>』 25.米子市教育委員会1982『源訪遺跡群III』 26.鳥取県教育文化財団1985『上福万遺跡・日下遺跡・石州府第1遺跡・石州府古墳群』 27・28.米子市教育文化事業団1994・1998『山田遺跡』・『陰田広畑遺跡』・『董原・奥陰田I・II』 29・30・31.鳥取県教育文化財団1996『陰田遺跡群』 32.米子市教育文化事業団1998『日久美遺跡V・VI』 33.米子市教育文化事業団2001『吉谷鉢神遺跡I』 34.米子市教育文化事業団2002『今在家下井ノ上遺跡』

(3) 中世須恵器・陶器・貿易陶磁器 (Fig.301 Tab.227)

勝間田・亀山系須恵器

白石氏により胎土分析が行われ、このうちいくつかの資料がそれに該当するという結果を得ている(1)。また山陰地方としての比較検討資料として、松江市に位置する別所遺跡と天満谷遺跡についても比較している。

別所遺跡は松江市大井に位置し、窯跡の存在が指摘されている遺跡である。ここから調査中に多数の壺・鉢・鑓などが出土している。この時期、中世の集落遺跡から出土する壺・鉢・鑓などは、いずれも数十点以内、多くても百点を超える遺跡ではなく、特異である。白石氏による胎土分析の結果、一つのまとまりをなすことから生産遺跡である蓋然性が高いとの判断を受けた。天満谷遺跡は出雲の代表的な中世集落で、出雲国守内にあり、ある意味では国守の下限を示す中心的な集落であろう。ここでは別所遺跡と同じ窯のほか、勝間田・亀山と類似する胎土をもつものも出土している。また窯は別所遺跡と同じ胎土をもつものもみられる。

壺はやや軟質焼成のものが多いで硬質によく焼けたものもある。外面のタキ目や格子目の大きいもの、小さいものがある。内面のカキメはあまり大きな差はみられないが、当て具痕を残すものもあり、これは元来の須恵器手法でタキを施めた後にカキメを施していくことを想像させるものである。カキメを施す原因は明らかではないが、ここでは器壁を薄く焼く。

流通を前提とした軽い製品を大量に作るためと考えられる。

鉢は口縁部が玉縁状になるものや平坦面をもつもの、あるいは上下にやや拡幅するものなどがあり、これが個体差か時期差なのか判然としないが、ここでは時期差とみておきたい。

Tab.227 中世須恵器・陶磁器一覧表

	白磁								青白磁		勝間 山系
	II類 碗	IV類 碗	V類 碗	禮碗	II類 鏡	II類 片	四耳 壺	合子			
茶烟六反田遺跡	-	6	2	1	1	1	4	1	1	4	29
押平弘法堂遺跡	1	3	9	-	-	-	5	3	-	-	15
青磁											
	割花 文碗	輪葉 方碗	細葉 方碗	雷文 碗	無文 碗	香炉 1	青磁 片	中国 常滑	越前	備前	
茶烟六反田遺跡	3	4	-	1	4	1	2	3	4	16	
押平弘法堂遺跡	3	1	1	-	1	1	1	10	1	1	

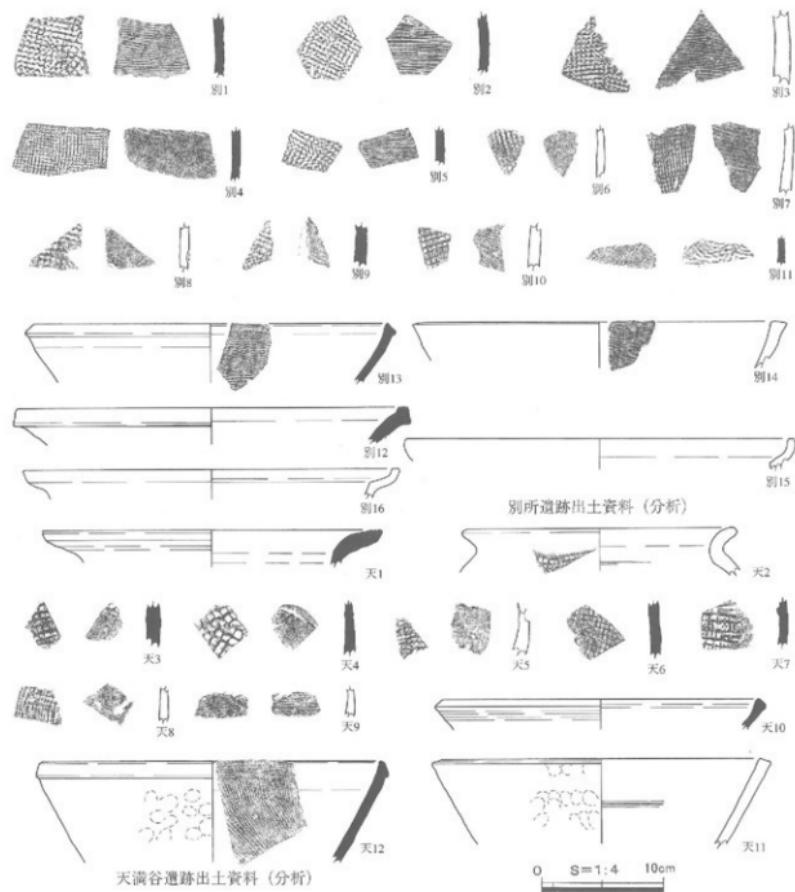


Fig. 301 胎土分析資料実測図

鍋はいざれも受け口状で軟質の焼成である。個体数は最も少ないものの定量存在しており、やはり焼成されていた可能性はあるとみられる。出雲では天満谷遺跡やそのほかの中世遺跡においても口縁部はいわゆる「く」の字状で内外面ともに粗い横向方向のハケ目を施すものが一般的である。また出雲では羽釜がほとんど出土していないことに特徴が認められる。胎土分析の結果、茶烟六反田遺跡・押平弘法堂遺跡の鍋・羽釜と茶烟六反田遺跡・天満谷遺跡・別所遺跡の二つのまとまりに分かれることが明らかにされた。このことから生産遺跡の可能性がある別所遺跡の鍋が消費遺跡である天満谷遺跡や茶烟六反田遺跡まで及んでいた可能性を示すものである。

中世陶器

常滑焼・越前焼・備前系陶器が出土している。このうち、鎌倉時代の集落から常滑焼と越前焼が、中世後期の包含層から備前系陶器が出土している。常滑焼は茶烟六反田遺跡・押平弘法堂遺跡のほか、県内では鳥取市の大瀬遺跡(2)、米子市の錦町第1遺跡などで出土例がある。いざれも中世前期の集落あるいは畠跡である。越前焼

は、中世前期は茶畑六反田遺跡・押平弘法堂遺跡のほか、中世前期では佐治村の大井聖坂遺跡(2)、米子市觀音寺古墳群(3)などで出土例がある。中世後期以降は城館遺跡などを中心に出土遺跡が増加し、近世後期では堀柵墓にみられる。備前系陶器は、県内では中世後期から近世にかけて広範に出土している。

貿易陶磁器

いずれも中国産である。集落跡を中心に中世前期のものが大半で、中世後期のものも若干含まれる。

中国産の白磁・青磁・青白磁のほか圓化し得ないが陶器片とみられる細片もある。Tab.226の一覧表によると押平弘法堂遺跡では屋敷墓から完形の青磁碗・皿が出土しているほか、白磁の碗や四耳壺もある。ただし鍋池弁文碗はわずかである。茶畑六反田遺跡では青白磁の合子や白磁口禿の瓦類・青磁の鍋蓋弁文碗やさらに時期の下る雷文碗もある。

ここで、屋敷墓が集落の創設時に近い時期につくられたという考え方をすれば、青磁の碗・皿を供えた時期に白磁も使用していたことになろう。これは倉吉市の広瀬廢寺跡から出土した貿易陶磁器にほとんど白磁がなく、青磁の鍋蓋弁文碗を中心としている(4)ことと比較できる。また中世後期の貿易陶磁器も出土しているが、これらは茶畑六反田遺跡の耕作痕を覆う包含層からの出土であり、集落の廃絶後、近世に至るまで付近が耕作地として使用されていることを示すものである。

注・参考文献

- (1) 白石 純 2002「中世龜山・勝間田系須恵器の胎上分析」本書p308-313
- (2) 佐治村教育委員会 1990「大井聖坂遺跡」
- (3) 米子市教育委員会 1990「鳥取県米子市觀音寺古墳群発掘調査報告書」
- (4) 八峰 興 2001「鳥取県における中世前期の貿易陶磁器－鳥根県と比較して－」日本貿易陶磁器研究会第22回研究集会資料集「近年出土の初期貿易陶磁器」

(4) 鉄製品 (Fig.302・303)

茶畑六反田遺跡・押平弘法堂遺跡とともに工具・生活用具などを中心に鉄製品が出土している。このうち、釘などの用具を除いた鉄製品について、主に山陰地方の中世前期を前後する遺跡から出土した遺物と比較検討する。

まず防錐車であるが、円盤の中央に穴があり、軸を差し込む形状である。F1は共伴遺物から平安時代中期に遡るとみられる。F2はほぼ完存しており、茶⑤のほかF3や押②など、円盤のみの出土例もある。火打ち金は平面三角形状で、両端がやや突出する。F4と押平弘法堂遺跡の屋敷墓に入れられた押④がある。鎗は茶畑六反田遺跡のS B12の柱穴から茶⑩がある。ほかに押⑨がある。鎗は押平弘法堂遺跡のS B12から押⑦が、鍔は押⑥・⑩が出土している。茶⑪は大型である。F5・F6は鉋であろうか。また先端が平坦な工具F7・F8があり、鉋状の使用方法が想像される。鍔F9・F10はいずれも埋葬施設からの出土である。鎌は比較的出土例はあるが完存しているものは少ない。埋葬施設に入れられたF11がある。馬具もあり、押⑪とF12は絞め具である。ほかに毛抜きF13、押⑫や梢運搬用の環状の鉄製品F14などもある。

刀・刀子類であるが、刀F15・押①・F16・F17はいずれも反りが無く刀身は直線状である。ただし共伴遺物からF16は時期が下るとみられる。刀子は片マチの押②と両マチのF18がある。ただしF18は共伴遺物からやや時期が下るとみられる。

金具類は、共伴遺物から平安時代中期に遡る資料ではあるが、飾り釘F19や留め金具F20や掛け金具とみられるF21がある。鎌倉時代のものとして飾り釘押⑬、留め金具茶⑭、肘壺の押⑮、鎌の押⑯がある。

武具は鉄鎌がある。共伴遺物からF22は時期的に遡るものである。先端が菱形のF23もあるが、出土例が多いのは雁足鎌で、F24・F25・F26・F27がある。今回の調査においても茶⑪が出土した。ほかに共伴遺物からやや時期が下るとみられるF28がみられる。

鉄鏃は口縁部がいわゆる受け口状になるものが多い。鳥根県頃原町の森V遺跡やF29・F30・F31、茶⑪がこれ

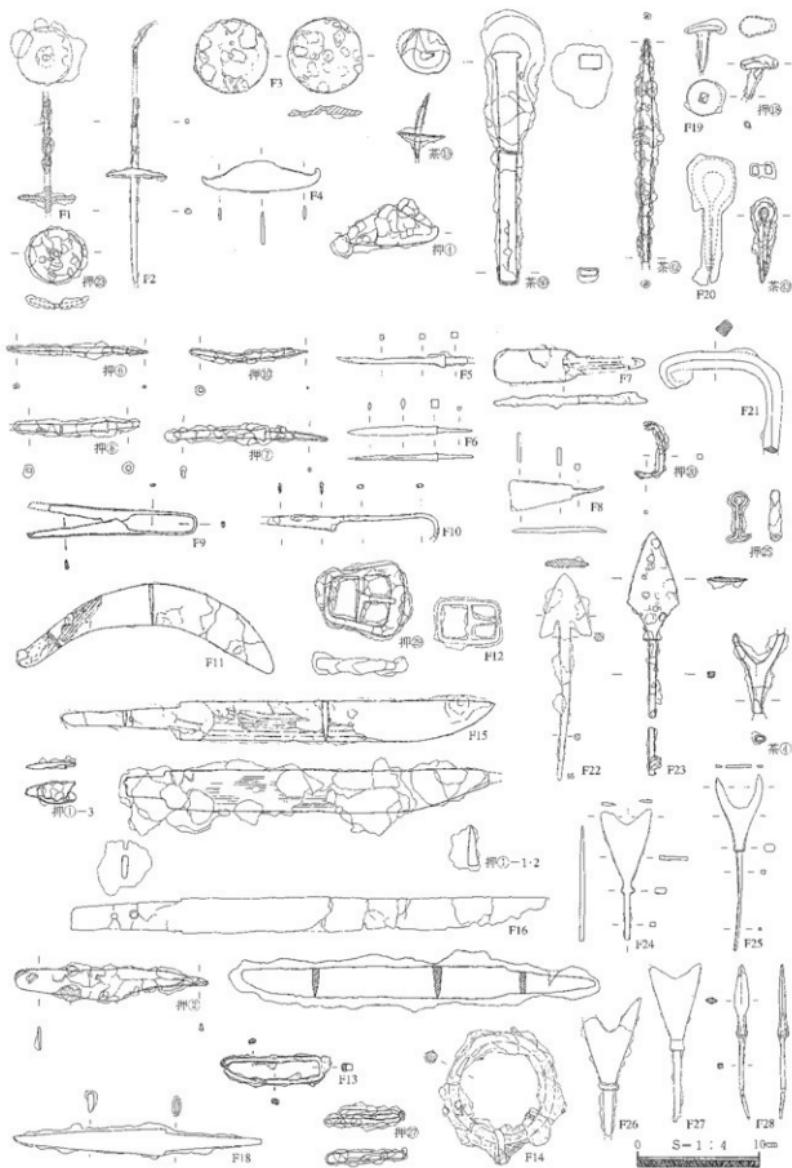


Fig. 302 山除中世の鉄製品（1）

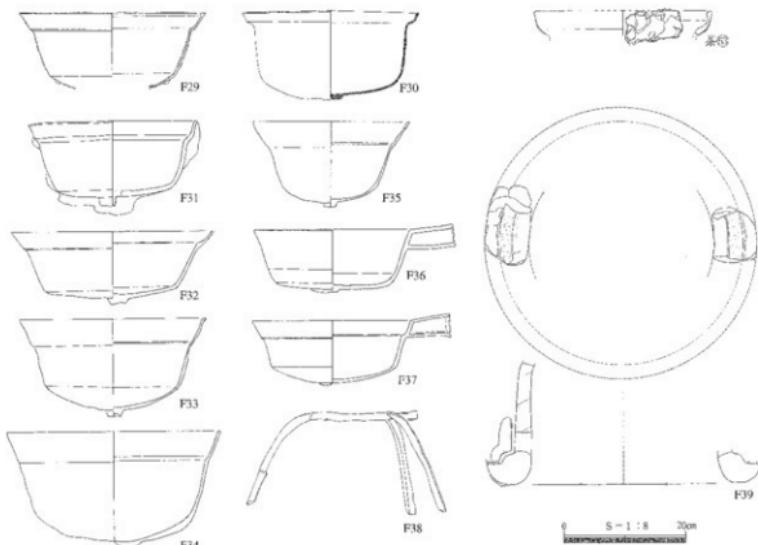


Fig. 303 山陰中世の鉄製品 (2)

に該当する。鉄鍋に土師質土器杯を入れ、三足を被せて埋納している。土師質土器の年代観から、今回の調査の対象時期である鎌倉時代よりは下るものと考えられる。このほか、鳥取市の円護寺遺跡では鎌倉時代の鋳造遺構が検出されており、F39の他にも鉄鍋の型が出土している。

これまでの鉄製品は、多くは埋葬施設からの出土が主であるが、一般的とみられる集落の調査においても比較的多くの鉄製品や鉄滓が出土すること、柱穴などに鉄製の工具などを意図的に入れる例が出土人社だけでなく一般的な集落においてもなされていること、山陰地方の鉄製品を相互比較しても意外と地域差は大きくななく、同時期における鉄製品はかなり形状が類似している。また鋳造遺跡の調査により、鉄製品を供給していた遺構の調査も行われ、今後は生産地・消費地、もしくは原料の生産に至るまでの一貫した鉄生産・流通・消費のあり方が明らかになることが期待される。

引用文献

- F1・22建設省松江国道工事事務所・島根県教育委員会1997『浜山池遺跡・原ノ前遺跡』 F2・F3・F10.島根県教育文化財団1999『長瀬高浜遺跡Ⅲ』 F4・F5・F6・F8・F24・F25.島根県教育委員会ほか1999『三田谷I遺跡vol.3』 F7・F11・F15.川原和人・桑原真治1987『島根県斐川町西石橋遺跡の中世墓』『古文化叢叢』第18集 F9.津和野町教育委員会1994『有福寺遺跡発掘調査概要報告書』 F12.玉湯町教育委員会1994『蛇喰遺跡』 F13.島根県教育委員会1977『背木遺跡発掘調査報告書Ⅱ』 F14.島根県教育文化財団1998『御内谷遺跡群』 F16・F32~F38.頃原町教育委員会ほか2001『森V遺跡』 F17.浜田市教育委員会ほか1997『横路遺跡(土師上地区)』 F18.松江市教育文化振興事業団ほか1997『小無田II遺跡発掘調査概報』 F19・F20・F21.本次町教育委員会1995『妙見山遺跡』 F23・F29.島根県教育文化財団1997『鶴田墓ノ上遺跡・鶴田大道端遺跡・鶴田中峰山遺跡』 F26・F27.本次町教育委員会ほか1998『的場尾遺跡・社日山城跡』 F28.島根県教育委員会ほか1999『蔵小路西遺跡』 F30.岸本町教育委員会1984『長者原遺跡群発掘調査報告書Ⅲ』 F31.島根県教育委員会ほか1997『福富I遺跡・尾形1号墳』

2. 遺構

(1) 平安時代の溝状遺構 (Fig.304・305)

茶畠六反田遺跡で須恵器・土師質土器を多数含む溝状遺構を検出した。これには「□□田」と記された墨書き土器やヘラ書き土器、縁軸陶器も含まれている。墨書き土器の文字は、調査区内に「六反田」・「塚田」がみられるほか、周囲にも「原田」・「少田」など出の付く字名が多く見られることなどから地名と推測している。遺構は東から3区のS D 2、2区のS D 15・4・12、1区のS D 30が該当する。S D 2・15・4・30は南北方向に主軸をもち、ほぼ54~55m間隔で並行する。S D 12はS D 4の西側にあり、東西方向に主軸をもち、ほぼ直交する。

これらの溝が周囲の現況とのどのような関係にあるかを示したのがFig.305である。ほぼ109~110mの正方形が連続し、東西に2分される半折型の条里がなされていることが予想できる。

今回調査された遺構をみると、S D 2の北側に西から東に下る棚田の段が存在する。S D 15は周囲には延びないがS D 4とのほぼ中央に位置する。2区のS D 4は、これに沿うように現代まで使用されている水路が存在するが、この南側に水路が延びる。S D 30に対応する溝は存在しないが、S D 4のほぼ54~55m西側に並行する。S D 15・30は地割の半折の位置にある。押平弘法堂遺跡ではいざれも調査区を境とする道や1・2・3区を挟む水路のため調査が行われていないが、平安時代の遺物も出土しており、鎌倉時代の集落とは別に付近に平安時代の遺構の存在をうかがわせる。周囲をみると付近は淀江町の条里遺構の東端に位置し、岩永実氏(1)や日野尚志氏(2)がこれらを条里区画として復元(Fig.304参照)している。

これら溝状遺構からは単なる集落とは考えにくい遺物が出土している。周囲の土地利用をみるとスクリーンローンのような南北方向に折り目をもつ半折形をしているものがみられる。ただしS D 30の西側は、南北方向は概ね109~110m程度であるが、東西方向が若干広い。そのため坪場が岩水案の区画よりも若干東にずれているが、これが路状の幅であるのか、あるいは区画の変更などにより生じた結果なのかは判断できない。ただし平安時代中期に東西・南北方向を基本とした溝状遺構が存在していたことが明らかで、実際に水が流れていたと考えられる。これ以外にも押平弘法堂遺跡の1区と2・3区の間に現代まで使用されている水路が存在する。

注

(1) 岩永 実 1973『鳥取県地誌考』岩永実先生記念論文集刊行会

(2) 日野尚志 1991「伯耆国の中世の駅路について」『研究論文集 第38集 第2号(I)』佐賀大学教育学部

(2) 中世の集落 (Fig.306・307)

今回中世集落が検出された2遺跡、茶畠六反田遺跡・押平弘法堂遺跡はいざれも北下がりの扇状地にあり、東西方向の直線距離で約0.5km程東西方向に離れている。出土遺物からほぼ同じ鎌倉時代の集落遺跡であるが、そのあり方は若干の違いが認められる。

茶畠六反田遺跡

建物跡を復元すると大きく分けて2つないし3つの建物群が形成される。

一つは2区の西側の建物群で、1×1間もしくは1×2間程度の建物が東西方向に列をもち、これが並行しながら3つの列を形成する。周囲には区画するような同時期の溝や柵跡は存在しない。これをA群とする。建物の規模は小さいが密度は高く、主軸もほぼ東西あるいは南北方向で一致している。



Fig. 304 名和町条里推定図（岩永案）



Fig305. 名和町条里復元図(案) 名和町地形図No.10-11 (1/2500) を1/5000に縮小

周囲には上坑も多く造られる。これらには大きく2つのまとまりがみられ、建物と重複するもの、建物群の北側にまとまるものに分けられる。形状は円形、楕円形、方形、長方形などで、建物や土坑同士切り合う例も多い。いずれの土坑も使用方法は不明瞭であるが、SK38のように中央部上面に使用痕をもつ石を据えている作業用土坑もある。遺物は埋土中に鉄釘や土師質土器の皿、木製の容器などを伴うものもあるが少數で、ほとんどが流れ込みとみられ、廃棄土坑や使用時のものは確認できない。

ただしどこかの中にはP800のように土師質土器の杯や皿を埋納した遺構や建物の柱穴に盤を入れているものもあり、祭祀的な目的を想起させる。

このA群は、南北に帯状に長い範囲で建物や土坑が検出されており、これは集落以前、平安時代中期(10世紀

前半頃)の溝状遺構の区画にはほぼ一致する。この区画は条里遺構と推測されており、このA群は条里の半折の東側に沿うような位置に成立したと考えておきたい。

茶畠六反田遺跡におけるA群以外の建物跡は、1区の西側と2区の東側にある。これらは1×2・3間の建物が西側では単独、東側では何棟かのまとまりをもちらながら散在する。いずれも周囲に土坑はほとんどなく、柱穴から遺物は出土していない。A群との関係は、層位的にはほぼ同一かあるいはやや新しい可能性もある。西側の建物は耕作痕跡により遺構の上面が掘削されている。これらをB群とする。

押平法堂遺跡

建物跡は粗密があるが調査区内のはば全域に存在する。茶畠六反田遺跡と異なる点は、いくつかでまとまりを成すことである。これは1棟の主屋となる建物跡のほかに、周囲にそれよりもやや規模の小さな、小屋ともいいくべき建物跡が1~2棟程度存在する。主な建物は2×3間程度の総柱建物や、1×2間程度のものもあるが、いずれも主屋となる建物は南北方向に主軸をもち、小屋となる建物は1×1間が多く、主に東西方向に主軸をもつ。このまとまりをC群とする。S B25の柱穴には土師質土器の杯と皿が1点ずつ埋納されているが、これは柱が抜き取られた後に入れられている。また建物の周囲あるいは柱の間には土坑があり、それには水溜を目的としたものの、性格不明の円形・不整形の土坑のほか、屋敷墓SK11がある。

このSK11は3区の東端建物群の一画に位置し、調査区内で検出された墓としては唯一である。豊富な副葬品をもち、刀や刀子、土師質土器の杯・皿の他、青磁の碗・皿も入れられている。このC群はA・B群の建物跡に比べ、建物の集まりというより屋敷としてのまとまりがある。

また3区では、8×4mという特別に規模の大きなSB12がある。柱穴の規模は他の建物跡に比べ格段に大きい。単に住居として使用されたのか、あるいは貯蔵、祭祀などの性格も想起される。1回の建て直しが行われ、その際に柱痕に沿って築が入れられている。これをD群とする。

このほかビット群には、縁の洞口を埋納したものや、柱状高台の皿もしくは杯、鉄滓などを意図的に入れたものがあり、祭祀的な様相を示すものが多く認められる。鍛冶も行われていたであろう。ただし铸造遺構など、直接大きな生産に関わるような遺構は検出しておらず、主な生業は農業あるいは林業などの一般的な集落であることが予想できる。

存続時期

いずれも鎌倉時代(中世Ⅲ期・13世紀代)の集落である。いずれも1回程度の建て直しがみられ、その時期幅は両遺跡の遺物を比較してみても、いずれも中世前期の貿易陶磁器を指標にするならば、白磁から青磁の織蓮弁文碗が隆盛する直前の間である。搬入品も勝間田・亀山系須恵器、常滑焼・越前系陶器で、在地土器にしてもそれぞれ上記の範囲内で収まる。

したがって、遺物から見る限りではこれらの集落はほぼ同時期に存在したと考えて大過なかろう。しかしそれの集落の性格は、茶畠六反田遺跡がB群という高密度の建物群があるのに対し、押平法堂遺跡ではC群で屋敷墓も有していること、性格は不明ながらD群という特別の建物があるということで様相は大きく異なる。

まとめると、両遺跡では鎌倉時代にそれまでの土地区画を階級してA群とC群・D群の集落が形成され、B群のように若干の移動や建て直しが認められた後、最終的には、ほぼ一齊に移動もしくは別の地区に集村したものと理解したい。この点、茶畠六反田遺跡で検出された耕作痕跡は主にB群の建物が廃絶した後とみられるることは示唆的である。また現在の集落の位置は、Fig.305をみると、茶畠六反田遺跡の南東側、押平法堂遺跡の南東側の条里の坪に当たる位置に集村している。もちろん直接ここに移動したかは判然としないが、何故短い期間で集落が移動したのか、何処に移動したのか、他の地域に比べてどのような相違点があるのか、今後より広い視野での集落研究の進展に期待したい。

参考文献

佐久間貴士 2001「二村と町 概説・1 西日本の集落」『図解・日本の中世遺跡』東京大学出版会

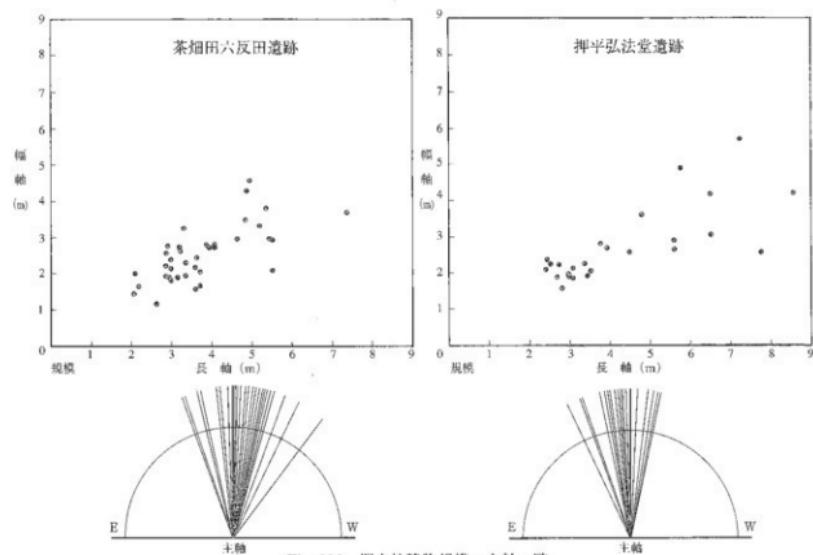


Fig. 306 捜立柱建物規模・主軸一覧

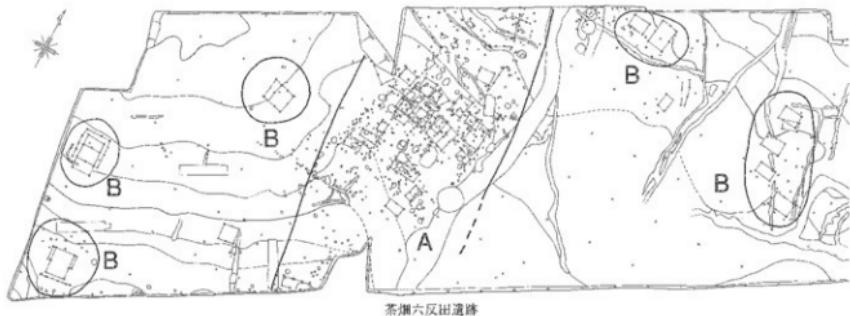


Fig. 307 集落概念図

(3) 中世の埋葬施設 (Fig.308・309 Tab.228-229-230-231)

今回の調査により押平弘法堂遺跡において屋敷墓が検出された。これまで県内での中世における埋葬施設調査は南前氏(1)が、因幡地方の湖山池周辺において牧本氏が集成(2)を行っている。これに対し、伯耆は長瀬高浜遺跡での調査後、次第に資料も増加しつつあるため、伯耆の中で押平弘法堂遺跡の屋敷墓がどのような位置にあるのかを確認するため、管見の及ぶ範囲ではあるが集成と分類を試みた。なおここでは中世の範囲を慨ね11世紀から16世紀までとし、墓とは遺骸もしくは骨を直接あるいは間接に埋葬する施設としてとらえている。

まず、埋葬施設の分類を試みる。中世における埋葬方法は、古代からの延長上、大きく土葬と火葬に分けられる。ただし因幡・伯耆ではこれらの墓のための施設をもつものが存在するため、埋葬施設としての墓をⅠ類、墓のための施設をもつものをⅡ類とした。

次に埋葬方法であるが、A：土葬は、①：直接遺骸を墓壙に埋葬する ②：木棺または石棺 ③：座棺 ④：土器棺 などがある。B：火葬は、⑤：火葬の位置と埋葬の位置が同一の茶毬墓 ⑥：石棺もしくは石焼いを設ける ⑦：遺骨を壺や甕などの蔵骨器に納める ⑧：火葬とは異なる場所に骨を移動する に分けられる。また、Ⅱ：墓のための施設を持つものとしては、C：積石基壇をもつ D：方形墳丘をもつ E：集石 F：区画溝 G：地下式横穴 がある。次に個々の埋葬方法・施設について検討する。

I A①は中世を通じて一般的にみられる埋葬方法である。人骨が遺存している例をみるとほとんどが横臥屈葬である。縊状の繊維でくるんだり下に敷く、あるいは上にかけるもの、刀や土器・陶磁器・鏡、あるいは六文銭を副葬するものもある。また鉄鍋が内面を下側にして出土している鶴田中峯山遺跡の例もあり、断定はできないが鉄鍋を被せる埋葬方法の可能性もある。ほかに長者原古墳群の周溝内土壙からも正位置ではあるが鉄鍋が出土している。墓に供えた可能性があろう。近世ではあるが、陶器の鉢を被せたとみられる例もある。

I A②は①に比べるとその性格上、確認できる数は少ない。鉄釘や土層の状況から木棺を判断しているため、あるいは釘を使用しない組み合わせ式の棺や、釘が錆化することを考えると、当然木棺の率はこれよりも多いことが予想できる。確認された埋葬姿勢は①と同様であり、これも両者の識別を困難にしている要因の一つであろう。今回押平弘法堂遺跡で調査した屋敷墓も鏡状の鉄製品が出土しているため、木棺と判断した。ここでは埋葬の状況は木棺の中あるいは上面に副葬品を入れ、上に拳から人頭大の石を載せている。このほか、わずかではあるが石棺をもつもの(ただし古墳時代の様な施設ではなく、簡易的に板石を立てたもの)や木棺のさらに外側を板石で囲むものなどがある。長瀬高浜遺跡と不入園遺跡で確認された例であるが、いずれも古墳時代中～後期にかけて古墳群が營まれており、周囲には使用できる板石が存在していたことが予想できる。

I A③は土器の棺に埋葬する方法で、近世では多くみられる。長瀬高浜遺跡のS X-12でみられる。

I A④も時期的には近世が主であるが、金田堂ノ脇遺跡のS X-01は座棺の可能性がある。人骨は遺存していないがほぼ立方形状の棺で、周囲に五輪や人頭大の石を込め、四方に棺運搬用の環状の鉄製品が4点ある。豊富な副葬品をもち、瀬戸香炉や中國産の青磁碗などから15世紀の半ばの埋葬とみられる。このほかに平面形が方形

時代・曆年代	12c	IA				IB				II C	II D	II E	II F	II G
		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧					
平安	12c													
鎌倉	13c													
南北朝	14c													
室町	15c													
	16c													

Fig. 308 伯耆における中世墓の変遷

あるいは円形状の土壙で、掘方の際に五輪を入れている例が散見され、座棺の裏込めも考えておく必要がある。

I B⑤は長瀬高浜遺跡で顕著に確認されている。ただし報告でも指摘しているとおり、火葬した場所と埋葬場所と同一なのか、あるいは火葬の場のみに留まり、骨は拾われ別の場所に持ち去られたのかは即断できない。

I B⑥は火葬の時に石棚をもつものである。これは主に円環・角環・板石などを用いて周囲を囲むものである。壁で底面・四方を囲むものや底面のみ敷くもの、あるいは板石で囲むものなどさらに細分できる。また木棺に入れて焼いたためとみられる鉄釘が出土する例もある。

I B⑦は焼骨を骨蔵器に入れるものであるが、検出例は少ない。中世前期には勝間田・龜山系須恵器壺が、中世後期には不入岡遺跡のS X04のように備前系陶器の壺が出土する。

I B⑧は、集骨して置いて遺存していればある程度の判断は可能であろうが、散骨している場合は断定は難しい。この場合、人骨のみ出土して焼けた痕跡が見あたらないことやごく狭い範囲に人骨が集中する場合などが想定できる。また同じ土壙で、長瀬高浜遺跡のS F12やS F70のように窓構の中央付近にピット状の掘り込みをもち、ここに人骨を寄せるという、いわゆる集骨ピットとみられる例もある。

次にII：墓に伴う埋葬施設であるが、基本的に埋葬のための施設を有しているものに限る。

II Cは積石塚あるいは基壇をもつものである。米子市の青木遺跡は勝間田系、日下古墳群のものは龜山系の骨蔵器を有し、後者は五輪塔を建てていたものとみられる。

II Dは方形の墳丘をもつもので、本來、五輪塔をもつとみられる。倉吉市や大栄町など、伯耆でも東側で比較的多くみられる。打塚遺跡のものは規模がやや大きい。埋葬方法は木棺が多く、出土遺物から判断しても中世全般にわたりみられる。また因幡・湖山池付近の布勢墳墓群(3)でも調査が行われている。

II Eは塚を設げずに集石のみ行う例で、古市宮ノ谷山遺跡で確認されている。このような例は検出することが難しいが、本來、類例は多いものと考えたい。五輪塔をもつものもみられる。

II Fは区画する溝のみをもつものである。墓域を区切るための目的でなされるものもある。

II Gは垂直に掘り下げた後に横穴をもつ埋葬方法である。西伯耆である米子市周辺から確認されている。鎌倉時代に遡る例が報告されている。古墳時代に造られた横穴墓を転用しているものもある。

以上、埋葬施設の変遷をみると、平安時代は土葬が多く、木棺墓もあろうが検出は難しい。火葬は多くが骨蔵器に骨を納める方法であろう。ほかに方形の墳丘をもつ例も打塚遺跡で確認されている。

鎌倉時代にも引き続い土葬が主であるが、火葬墓も多く検出されるようになる。茶匙墓・石櫃がこれに当たる。また中世集落に丘陵墓が出現し、豊富な副葬品をもつ。米子市周辺では横穴を掘り埋葬する例や、積石塚がつくられ、龜山系須恵器の骨蔵器が納められるものもある。

室町時代になると五輪塔が一般的にみられるようになる。座棺による埋葬も行われており、金田堂ノ脇遺跡 S X-01も屋敷墓の可能性がある。豊富な副葬品のほか、棺の裏込めとして五輪が墓壙に入れられる。東伯耆や因幡では方形の墳丘をもつ埋葬施設がみられる。ただし因幡の例は小丘陵のやや高い位置に集団で墓を営み、手づくねの土師器皿や錢貨を入れている。概ね16世紀頃のものが目立つ。

画面をみると、平安時代から鎌倉時代にかけて茶匙や石櫃の火葬墓が広がると、鎌倉時代の末から室町時代には五輪塔が広く出土するようになること、近世にかけて横穴墓から座棺や壺棺による埋葬が主となる3つの変遷期があげられる。また地域的な特色としては、方形の墳丘をもつ埋葬施設は因幡・東伯耆で一般的で、横穴墓や積石塚は鎌倉時代以降の西伯耆でみられ、東伯耆と西伯耆で様相が異なるようである。なお、これらが近世の埋葬施設にどのように連続するのかについて今後の課題としたい。

注

(1) 南前孝明 1996「山陰の中世墓」『季刊文化財第84号』

(2) 牧本哲雄 1996「第4節 中世墓について」『西桂見遺跡・倉見古墳群』鳥取県教育文化財団

(3) 鳥取市教育福井振興会 1998「布勢墳墓群」

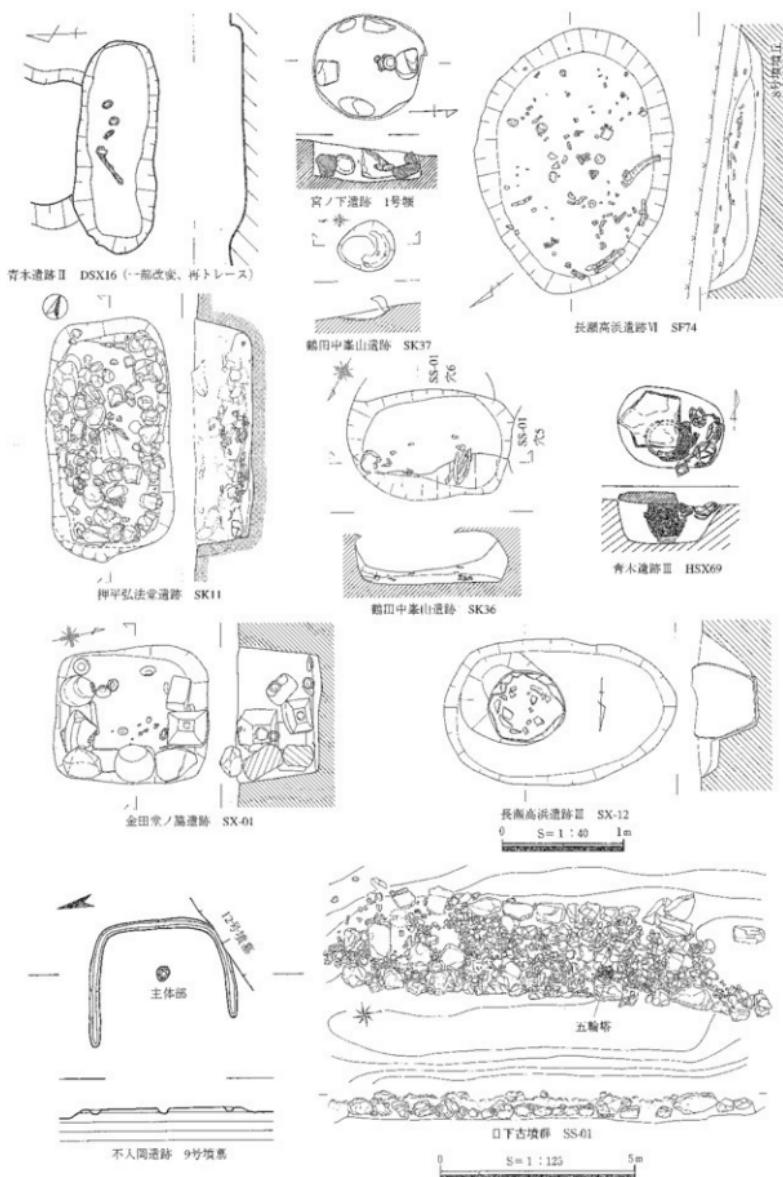


Fig.309 伯耆における中世の堀柵施設

Tab.228 伯耆の中世墓集成(1)

遺跡名	遺物名	地點名・形態・長さ(cm)	平面形	剖面形	長軸方位	出土遺物	備考	分類
1) 背木塗装目 道標1 P1.8~18	S X' 16 S X' 02 S X' 03 S X' 04 S X' 05 S X' 06 S X' 07 S X' 08	170×65~15 北東方に並んで立 て置かれる。高さ 約98cm	楕丸形 楕円形 楕丸形 楕丸形 楕丸形 楕丸形 楕丸形 楕丸形	平底造形 楕円形 方形(A) 方形(B) 楕丸形 楕丸形 楕丸形 楕丸形	N.84° W	土師質小皿3・白磁・純鉄器物・瓦抜き 小皿 土師質小皿6	庭に散在なし。	I A I A
宮ノ下道跡 4段区 宮ノ下道跡 6段区	E'外群 E'外群 (1) 二段掘り (2) 二段掘り	90×84~27 E'外群 E'外群	楕円形 方形(A) 方形(B)	盛状か 盛状か 盛状か	-	上部器皿2・土師質片・小皿4・甕・ 瓦質片2・瓦質片・鐵質 土師質小皿2・土師質片7・小皿8・甕・ 瓦質片・細縁器	方形状器	I A
2) 宮ノ下道跡 4段区 宮ノ下道跡 6段区	S X' 01 S X' 02 S X' 03 S X' 04 S X' 05 S X' 06 S X' 07 S X' 08	不明 楕円形 楕円形 楕円形 楕円形 楕円形 楕円形 楕円形 楕円形	- - - - - - - - -	遺位北面 遺位北面 N.35° E 遺位北面 遺位北面 遺位北面 N.36° E N.33° E	人骨 人骨・漆器片・鉄刀1 人骨(65~67cm)で埋 人骨 人骨 人骨 人骨 人骨	病臥忌器 病臥忌器 病臥忌器 病臥忌器 病臥忌器 病臥忌器 病臥忌器 病臥忌器 病臥忌器	病臥忌器 病臥忌器 病臥忌器 病臥忌器 病臥忌器 病臥忌器 病臥忌器 病臥忌器 病臥忌器	I A① I A② I A③ I A④ I A⑤ I A⑥ I A⑦ I A⑧
3) 長瀬高浜道跡群	S X' 09	170×70~25	長方形	-	N.45° E	人骨・ガラス小玉65(数珠か) 漆器白玉1	佛具群	I A①
	S X' 10	252×135~20	楕丸形	造形	N.5° W	人骨・鉄刀・白磁片・鉄刀・馬の頭 片・白磁片・白磁片・鉄刀・馬の頭	木棺を板石で囲む。 木棺底面 漆器・漆器・漆器・漆器	I A② I A③
	S X' 11	210×180~30~30	楕丸形	造形	-	骨片・白磁片・鉄刀・馬の頭	木棺を板石で囲む。	I A②
	S X' 12	150×116~16~16	楕円形	盛状か	N.90° E	骨片・陶器器	2段階・土器群	I A③
	S X' 13	30×20	方形か	造形	遺位北	人骨	横臥器・船式石枕か	I A②
4) 長瀬高浜道跡群	S X' 14	117×100~30	楕丸形	造形	N.30° E	人骨・ガラス小玉6・珠片1	横臥器・船式石枕	I A①
5) 長瀬高浜道跡群	S X' 15	105×70~29	楕円形	造形	N.43° E	骨片・南・絆縫・鉄	横臥器	I A②
	S X' 16	-	-	-	-	人骨	横臥器	I A③
	S X' 17	50×40~28	楕円形	造形	N.72° E	土器器	十字状の右端か	I A②
	S X' 18	115×53~50	長方形	造形	N.25° E	人骨	横臥器	I A①
	S X' 19	170×60~20	楕円形	造形	N.0° E	人骨	横臥器	I A②
	S X' 20	95×55~28	楕円形	U字形	N.0° E	人骨	横臥器	I A①
	S X' 21	137×72~62	楕円形	造形	N.0° E	骨片	横臥器	I A②
	S X' 22	-	-	-	-	-	残存状態悪い。	I A①
	S X' 23	110×70~30	楕丸長方形	U字形	N.0° E	人骨	横臥器	I A①
	S X' 24	120×88~17	楕円形	造形	N.0° E	-	-	I A
6) 長瀬高浜道跡群VI	S X' 25	100×80~30	楕円形	造形	N.30° W	人骨	横臥器	I A①
	S X' 26	100×90~15	楕円形	造形	-	人骨	横臥器	I A①
	S X' 27	95×75~45	小円形	造形	-	人骨	横臥器	I A①
	S X' 28	150×100~100	楕丸形	造形	N.55° W	人骨・鉄刀・須恵器片・土師質片	木棺底・横臥器・漆器	I A②
	S X' 29	150×100~25	長方形	造形	N.20° E	-	木棺底・横臥器・漆器	I A③
	S X' 30	95×45~30	楕丸長方形	造形	N.12° E	人骨・土師質片	形状から木棺底か	I A①
	S X' 31	70×70~35	円形	造形	N.27° E	人骨	横臥器	I A①
	S X' 32	80×70~35	方形	造形	N.40° E	上睡器片	横臥器	I A①
	S X' 33	71×58	長椭指円形	造形	N.13° E	人骨	小骨器	I A①
	S X' 34	110×50~15	楕円形	造形	N.3° W	-	-	I A
	S X' 35	82×56~15	楕丸長方形	造形	N.34° W	-	-	I A
	S X' 36	94×66~64	楕円形	造形	-	-	-	I A
	S X' 37	82×75~22	小堅方	造形	N.15° W	人骨・上睡器・須恵器	石棺軟か	I A②
7) 長瀬高浜道跡群VII	S X' 38	115×70~18	楕圓形	造形	N.73° W	人骨・上睡器・須恵器	石棺軟か	I A③
	S X' 39	54×47~26	不規則形	一般形状	-	土壁器片	石棺軟か	I A
	S X' 40	100×77~30	楕円形	U字形	-	白磁片2	石棺軟か	I A
	S X' 41	128×90~90	楕圓形	U字形	-	鉄	石棺軟か	I A
8) 湖跡1号第	-	-	-	-	-	鏡片・陶片・石片	方形状器	II D
別所中原1号 塗付古塚	1) 1段 312(m)	-	-	-	-	-	-	II G
	玄室 馬8×板65~高12 胡室 馬14×幅12~高15	-	-	-	-	-	-	II G
9) 別所中原2号 塗付下塚	2) 1段 47×20~7 玄室 馬15×板65~高17	-	-	-	-	-	-	II G
別所中原3号 地下式塚	3) 1段 47×20~8 玄室 馬25×19~16~1	-	-	-	-	-	-	II G
10) 長瀬中古塚	-	6×5mの方形周溝	-	-	-	土師質片2・皿・土師質皿・五輪塔 鉄網	方形埴溝	II D
11) 美濃口1号 古塚	-	正方形の区域(24× 24m×22×4.3m) 下段	-	-	-	土師質片3・3D・古酒呑御・鏡片・鉄刀 鏡片・残鏡6	方形埴溝・木棺底か II D②	II D③
12) 打保遺跡	上段	9×84×高50.5(m)	3.2mのウド形 下段 7×6.8×高さ3.5m	造形	-	土師質片3・古酒呑御・皿2・柱状高合 3・鏡・鏡・鉄刀・鉄網・熱湯はか	方形埴溝・木棺底か	II D②
13) 長瀬原古墳群	13) 塙周溝	2段階掘りか 内上塚	楕円形	造形	N.39° W	瓦質羽釜・青磁鉢・鏡片・五輪塔 台座	方形埴溝・第Ⅲ期 II D	II D
	A S K-01	100×40~45	門形	造形	N.47° E	鏡片・残鏡6	方形埴溝・第Ⅲ期 II D②	I A③
14) 旗塚遺跡	A S K-03	90×75~33	楕丸長方形	造形	N.37° E	熱網片	方形埴溝・木棺底か	I A②
	A S K-04	71×48~29	楕丸長方形	造形	N.47° E	鏡片6	方形埴溝・木棺底か	I A①
15) 妻狭古塚	S X' 1	170×112~72	楕円形	造形	N.55° W	瓦質羽釜・青磁鉢・鏡片・五輪塔 台座	方形埴溝・第Ⅲ期 II D	II D
	S X' 2	-	-	-	-	-	方形埴溝・第Ⅲ期 II D	II D
	1号古塚	4×8m・高さ6m 石羽石5.5×45~45	長方形	造形	N.13° W	鉄片・五輪火輪	方形埴溝・木棺底 II C②	II C②
16) 楠本家ノ古塚	2号古塚	120×80~20	楕丸長方形	造形	N.68° W	鉄片	方形埴溝・木棺底 II C③	II C③
	3号古塚	105×66~25	楕円形	造形	N.6° E	-	積石・木棺底か	II C④
17) 向山古墳群	1) 台形 3) 3段 4) 4段 7号壙	5基	-	-	-	-	西側 積石・木棺底か・青磁 マウンドあり・南側	I A① I A② III C
	8号(高麗・馬石)	6基	-	-	-	-	堆積	II C
	配石	-	-	-	-	-	瓦質中位に川原石による石列を外 系統に富む。	II C

Tab.229 伯耆の中世墓集成(2)

通称名	通称名	長さ×直径×深さ(cm)	平面形	断面形	長軸方向	出土遺物	備考	分類
18 福岡遺跡	S X-01	126×36×71	隅丸長方形	平底圓角形	N:28° W	人骨・骨頭・鉄針3・木製子・木製筒 2種火炎(東・神)	遺骸の下に植物遺体	I A①
19 大下遺跡	S X-01	280×25×25	正方形	平底圓台形	N:22° W	土師器・灰・須恵器・鐵範・小理	堆土式横穴墓	I G
20 百草原5遺跡	S X-02	293×21×186	正方形	中底圓内角形	N:60° W	須恵器・土器・青銅鏡・青銅鏡片	堆土式横穴墓か	I G
	S K-20	140×100×50	隅丸方形容	連合形	N:82° S	-	-	I A
	S K-21	150×120×85	隅丸方形容	高内形	N:68° S	人骨・鋼製刀身・劍銅頭・鍔火炎	成人・座標	I A③
	S K-22	115×70×60	隅丸方形容	連合形	N:37° W	-	-	I A
	S K-23	120×70×30	隅丸方形容	連合形	N:41° W	-	-	I A
	S K-24	110×70×70	隅丸方形容	連合形	N:32° W	骨片	-	I A③
	S K-25	130×105×50	隅丸方形容	連合形	N:13° W	-	-	I A
21 難田遺跡6遺跡	S K-26	110×70×60	隅丸方形容	連合形	N:47° W	鍔火炎(不明6)	-	I A③
	S K-27	105×100×60	円形	連合形	-	鐵鏡(舟形透貫2・元治通寶・熙寧通 寶4・聖元通寶・水丞通寶)	-	I A①
	S K-28	90×80×25	隅丸方形容	連合形	N:83° W	骨片	-	I A①
	S K-29	115×100×65	隅丸方形容	連合形	N:17° W	-	-	I A①
	S K-30	130×80×75	隅丸方形容	連合形	N:10° W	-	-	I A
	S K-31	110×80×30	隅丸方形容	連合形	N:11° W	鍔火炎(不明6)	-	I A③
山区1号墳墓	100m南西 2.5m×2.5m	-	-	-	-	-	-	II D
山区2号墳墓	130×70×30	-	-	-	-	-	-	I A②
山区3号墳墓	馬鹿塚3.0~5.0(?)	-	-	-	-	-	-	II D
BK-S X-06	560×300×180	-	-	-	-	-	-	I A
C区3号墳墓	深さ40~50cm	-	-	-	五輪塔40以上(李朝製)	不入函の右石と同時 期か(承和元年(375))	II D	
C区4号墳墓	馬鹿塚	-	-	-	自然石の墓石	-	-	II D
C区5~8	-	-	-	-	-	-	-	II D
10~11号墳墓	-	-	-	-	-	-	-	II D
C区12号墳墓	24.8m	-	-	-	-	-	-	II D
22. 不人間遺跡群	(C区13) 墓場	-	-	-	-	-	-	II D
	埋葬施設	-	-	-	-	-	-	II D
	(C区11) 116×62×10	円形	-	-	北	須恵器蓋	-	I A
	(C区 S-20) 37×47×40	小笠形	-	-	西北	自然石	-	I A
	(C区 X-20) 48×35×13	円形	-	-	西北	自然石	-	I A
	(C区 S-25) 51×37×70	長方形	-	-	西北	自然石	-	I A
	(C区 X-20) 110×78×78	小笠形	-	-	西北(南東)	自然石	-	I A
	(C区 S-47) 66×72×30	長方形	-	-	北東(南東)	自然石	-	I A
	(C区 X-20) 112×82×20	円形	-	-	北東(南東)	自然石	-	I A
	(C区 X-20) 118×100×54	長方形	-	-	北東(南西)	自然石	-	I A
	(C区 X-71) 98×80×30	不整圓形	-	-	北東(南西)	自然石	-	I A
	弓背石	-	-	-	-	自然石	-	I A
	弓背石7番	-	-	-	-	自然石	-	I A
23 下内野遺跡	弓背石	17×72	-	-	-	鐵火・自然石(30×30cm)	-	I A
	弓背石	0.5~0.7、深 0.1~0.3mの所	北近10・車近7・東近4mの斜状の溝	-	-	上部器蓋・自然石(直径80cm)	II Fか	II F
	S K-01	71×45×25	長方形	連合形狀	N:50° W	-	-	I A
	S K-02	103×47×50	長方形	連合形狀	N:34° S	-	-	I A
	S X-03	64×49×41	円形	1字状	-	上部に覆瓦	-	I A
	箭石集石	2.18×2.01m	-	-	石垣・闕・覆瓦・帶	-	-	II E
	箭石3石	14×2.2~3.3m	3箇所	-	-	五輪塗火輪・水輪・輪・輪・輪	-	II C
	箭石1石	10×4m	-	-	-	-	-	II E
	箭石2石	100×75~19	長方形	連合形狀	N:33° E	八輪塗火輪7・板石(40×30.)	-	I A②
	S K-20	119×80×30	隅丸方形容	連合形	N:17° E	鐵鏡	-	I A①
	S K-37	47×41×12	円形	-	-	鐵鏡	鍔火炎を被せる蓋状か	I A①
	S K-38	130×90×60	隅圓形	鉢状	N:40° E	人骨・一体	須恵器蓋・成人女性	II G①
	S X-7	122×100~100	隅丸方形容	平底逆台形	N:40° E	人骨・土器質直	-	I A①
	S X-8	115×83~40	隅丸方形容	連合形	N:64° W	-	-	I A
	S X-9	155×122~51	隅丸方形容	連合形	N:28° E	人骨・鍔火炎(弘安通寶3・元経通寶・ 経聖元寶・生瀬元寶)	-	I A①
	S X-10	104×59~36	隅丸方形容	連合形	N:36° E	上部質直	-	I A①
	S X-11	63×48×41	楕円形	連合形	N:17° E	-	-	I A
	S X-12	65×48×41	円形	連合形	N:9° E	-	-	I A
	S X-13	114×65~51	不整形	なま連合形	N:70° E	-	-	I A
	S X-14	92×73~40	円形	なま連合形	-	-	-	I A
	S X-15	118×109~90	円形	連合形	-	-	-	I A
	S X-16	122×90~63	長方形	平底逆台形	N:40° W	五輪塗火輪・鍔火炎(元経通寶・□ 字・青・馬頭・通口・経聖元寶・伴君通 寶・不整)	-	I A①
	S X-17	127×78~36	椭円形	平底逆台形	N:65° E	人骨・土器質直	須恵器蓋(得谷元寶2・元経通寶2・ 経聖元寶)	I A①
	S X-18	深さ50	-	-	-	鍔火炎(淳化元寶・元経通寶2・大紙通 寶)	-	I A①
	S X-19	深さ33	-	連合形	-	-	-	I A①
	S X-20	165×67~36	隅丸方形容	平底逆台形	N:21° E	上部質直・小皿	-	I A①
28. 福上塚遺跡	S X-01	115×83~35~42	長方形	平底逆台形	N:28° W	人骨・土質質直・小皿3・鍔火炎(元経 通寶・青・馬頭・通口・経聖元寶・伴君通 寶・人骨・通鑿・桂府通寶・不整2)	横臥屈坐・木棺蓋か	I A②
	S X-02	130×92~47~48	長方形	平底逆台形	N:26.5° W	上部質直2・小皿2・青・通鑿・源(?)・ 鉢・人骨2・鐵火輪2・人骨大の石	横臥屈坐・木棺蓋か	I A②
29. 金田堂ノ協御塚	S X-01	124×111~67	方形容	平底連合形	-	須恵器5片	-	II G③
	S X-02	130×95~70	隅丸長方形	-	-	五輪塗火輪・鍔	-	I A
	S X-03	100×100~50	円形	-	-	-	-	I A
	S X-04	90×55~45	隅丸長方形	-	-	-	-	I A
	S X-05	110×65~65	楕円形	-	-	-	-	I A
	S X-06	尾根上2層65~30	椭円形	-	-	-	-	I A
31. 沼平法弘法道跡	S K-11	185×102~47	圓形	平底逆内形	N:20° W	土面質杯3・小皿1・青・通鑿1・青・通 鑿1・鉢1・刀子・鉢石・青・通鑿片・門鑽	木棺墓か	I A②
32. 青木遊跡Ⅲ	H S X-09	30×25~50	椭円形	連合形	-	青・十輪質直17・銅鏡	木棺墓か	I P②

Tab.230 伯耆の中世墓集成(3)

遺跡名	遺構名	長様×短様×深様(cm)	平面形	断面形	長軸方向	出土遺物	備考	分類
2 宮ノ下遺跡3区	石塁1	北東方向に伸びる歩道	-	-	-	小標	底に焼面あり	I B
	P2-7	遺跡を走る車輪印	-	-	-	-	-	I B
	土塁1	約86×15	円形	皿状	-	灰片	-	I B
	土塁2	81×76×14	円形	-	N-10°-E	骨片・灰片・板石	-	I B
	S F 01	99×76	円形	-	N-76°-W	人骨・灰片	-	I B
	S F 02	[100]×68×13	円形	平底逆台形	N-76°-W	骨片・灰片	-	I B
	S F 03	85×70	円形	-	-	骨片・灰片	-	I B
	S F 04	85×60	豎な円形	-	N-74°-W	骨片・灰片	-	I B
	S F 05	128×80	円形	-	N-75°-E	骨片・灰片・鐵鏡(改元通寶)	-	I B
	S F 06	97×67	方形	平底逆台形	北か	骨片・灰片・板石・円錐多數	右横状配石	I B
	S F 07	118×95	三角形	-	-	骨片・灰片	打鍛鋳14-16	I B
	S F 08	[150]×103×37	方形	逆台形	N-10°-E	人骨・灰化物	板石散配石	I B
	S F 09	120×130	えんだ円形	-	-	骨片・灰化物・凹面6	-	I B
	S F 10	[105]×90×9	えんじょう円形	平底逆台形	N-16°-W	骨片・灰化物	-	I B
	S F 11	7×81	えんじょう円形	-	N-28°-E	骨片・灰化物・鍵6	-	I B
	S F 12	143×110(中央辻 85×70×10-70+壁)	えんじょう円形	-	N-6°-W	骨片・灰化物・角鍬	角鍬数孔	I B
	S F 13	7×55	えんじょう円形	-	N-57°-W	骨片・灰化物・角鍬6	-	I B
	S F 14	80×80	えんじょう円形	-	-	骨片・灰化物・石6	-	I B
	S F 15	155×2	えんじょう円形	-	N-60°-W	骨片・灰化物	-	I B
	S F 16	(不明)	えんじょう円形	皿状	N-18°-E	骨片・灰化物・角鍬1	-	I B
	S F 17	175×140-17	えんじょう円形	皿状	N-18°-E	骨片・灰化物・角鍬10	底面に角鍬を數く	I B
	S F 18	(不明)	えんじょう円形	皿状	-	骨片・灰化物・角鍬10	底面に角鍬を數く	I B
	S F 19	7×60	えんじょう円形	皿状	-	骨片・灰化物・灰6	-	I B
	S F 20	72×56×15	えんじょう円形	逆台形	N-22°-W	骨片・灰化物・接合器具・角鍬	鍬を中央に置く	I B
	S F 21	112×92-7	円形	逆台形	-	骨片・灰化物・多數	-	I B
	S F 22	90×90×22	えんじょう円形	逆台形	-	骨片・灰化物	-	I B
	S F 23	95×80×8	えんじょう円形	逆台形	-	骨片・灰化物	-	I B
	S F 24	87×60×7	円形	U字形	-	骨片・灰化物	角鍬を平面的に配置	I B
	S F 25	90×70	円形	平底逆台形	N-15°-W	骨片・灰化物	-	I B
	S F 26	-	円形	-	-	骨片・灰化物(0~30)大の角鍬	角鍬で中央を囲む	I B
	S F 27	-	円形	-	-	骨片・灰化物	板石散配石	I B
	S F 28	80×80	えんじょう円形	平底逆台形	-	骨片・灰化物	-	I B
	S F 29	67×52×18	えんじょう円形	逆台形	-	骨片・灰化物	網目	I B
	S F 30	[160]×95×20	不整じょう円形	逆台形	N-60°-W	灰化物	接合器具・U字	I B
	S F 31	95×70×10	円形	U字形	-	骨片・灰化物	-	I B
	S F 32	90×76×18	円形	平底逆台形	N-30°-W	骨片・灰化物	-	I B
	S F 33	121×93×22	えんじょう円形	逆台形	K-77°-W	人骨・灰・板石・角鍬	-	I B
	S F 34	87×84	えんじょう円形	平底逆台形	K-70°-W	骨片・灰化物	板石・灰散在	I B
	S F 35	(不明)	円形	U字形	-	鐵鏡・灰多量・円錐多數	石と石重	I B
	S F 36	105×63×30	丸方土塁	逆台形	-	燒造灰・灰土・鐵鏡	石組植樹	I B
	S F 37	(115)×65×33	丸方土塁	平底逆台形	N-20°-W	骨片・灰・鐵鏡・鐵鏡(改元通寶・景應天寶)	板石右側	I B
3 水郷高浜遺跡V	S F 38	95×7×12	えんじょう円形	平底逆台形	N-4°-W	骨片・灰化物	-	I B
	S F 39	100×72×20	円形	U字形	N-6°-W	燒造灰・灰多量・板石	板石・板石・角鍬・板石灰	I B
	S F 40	110×60×10	不整じょう円形	逆台形	-	骨片・灰化物	-	I B
	S F 41	-	圓錐形	圓錐形逆台形	-	骨片・灰化物	圓錐形底	I B
	S F 42	85×80×15	えんじょう円形	逆台形	-	骨片・灰化物	-	I B
	S F 43	104×(60)-15	円形	U字形	-	骨片・灰・鐵鏡・板石・灰・角鍬	石多量散在	I B
	S F 44	90×70×25	円形	逆台形	-	骨片・灰化物	板石・角鍬石	I B
	S F 45	60×60×5	円形	逆台形	-	骨片・灰化物	角鍬石と石塊	I B
	S F 46	150×117×33	円形	浅い平底	N-29°-W	灰化物	板石・角鍬散在	I B
	S F 47	-	-	-	-	骨片	-	I B
	S F 48	95×80×38	円形	U字形	-	-	圓錐形底	I B
	S F 49	93×34×20	円形	U字形	N-35°-E	骨片・灰片・板石・円錐	板石・板石	I B
	S F 51	90×91×14	長脚円形	逆台形	N-17°-W	骨片・板石・圓錐形・灰・圓錐形	灰面・圓錐形片	I B
	S F 52	124×105×20	円形	逆台形	N-45°-W	骨片	底面・円錐形	I B
	S F 53	93×74×12	円形	逆台形	N-30°-W	骨片・灰片・鐵鏡・十脚腳・板石・角鍬	底面平石	I B
	S F 54	108×108×15	円形	平底逆台形	-	骨片・灰片・鐵鏡・減空穿輪・板石	板石で底石	I B
	S F 55	110×90×20	円形	平底逆台形	-	骨片・灰片・板石	上蓋蓋板石	I B
	S F 56	100×80×15	長脚円形	逆台形	N-6°-W	多くの骨片・灰片・石材底石	-	I B
	S F 57	210×120×34	丸方土塁	U字形	N-5°-W	骨片・灰片・板石・上面に板石	-	I B
	S F 58	170×110×25	圓錐形	平底逆台形	-	骨片・灰片・大小板石	-	I B
	S F 59	72×65×10	円形	逆台形	N-18°-E	骨片・灰片	-	I B
	S F 60	37×99×20	円形	U字形	N-60°-W	骨片	-	I B
	S F 61	82×75×12	円形	平底逆台形	N-80°-E	骨片・灰片	-	I B
	S F 62	142×114×20	丸方土塁	U字形	N-4°-E	骨片・灰片・板石	-	I B
	S F 63	63×45×18	長脚円形	逆台形	N-35°-W	骨片	-	I B
	S F 64	174×134×12	円形	平底逆台形	N-80°-E	骨片・灰片・十脚腳・小圓錐	上部板石	I B
	S F 65	70×70×30	円形	U字形	-	灰面	上部板石	I B
	S F 66	22×69×30	長脚円形	U字形	N-36°-W	骨片・灰片・板石	-	I B
	S F 67	170×110×15	円形	逆台形	-	骨片・灰片	上部板石	I B
	S F 68	115×35×20	円形	逆台形	N-5°-W	骨片	-	I B
	S F 69	125×75×35	円形	逆台形	N-26°-E	骨片	石質底面	I B
	S F 70	300×80×5	不整じょう円形	逆台形	-	燒造灰・灰土・鐵鏡	中火に上塗	I B
	S F 71	169×136×23	円形	逆台形	-	骨片・灰片・繩多數	-	I B
	S F 72	-	-	-	-	骨片・灰片・板石	-	I B
	S F 73	80×45×14	円形	逆台形	N-14°-E	骨片・灰片・板石	上部板石	I B
	S F 74	220×161×22-30	円形	逆台形	N-48°-W	骨片・灰片・十脚環2・圓3・劍1	-	I B
	S F 75	147×57	円形	-	-	骨片・灰片	-	I B
	S F 76	60×30×30	円形	逆台形	-	骨片・灰片・十脚環4(内高付2)	-	I B
	S F 77	90×87×29	円形	U字形	N-70°-E	骨片	-	I B
	S F 78	62×58×17	円形	逆台形	N-87°-E	骨片・灰	-	I B
4 長瀬高浜遺跡III	S S 01	南北3m×東西11m・高さ0.6m	-	-	-	火葬骨・灰・灰土・鐵鏡10・火瓶3・茶瓶3・施主骨・曾器蓋(龜山系)	積石壇壇	II C ⑦
	S S 02	南北3.4m×東西1.6m	-	-	-	-	積石壇基盤	II C ⑦

Tab.231 伯善の中世墓集成(4)

墓跡名	埋葬式	長方形・楕円形・圓形[cm]	平面向	側面形	長軸方向	出土遺物	備考	分類
BIS-X-04	骨被葬(直前姿)	-	-	-	-	-	-	I B(2)
BIS-X-05	115×71×30	-	-	-	-	-	-	I B(2)
CIS-X-03	鹿島高浜遺跡29-31-34	79×62×28	-	-	-	-	-	I B(2)
CIS-X-02	54×42×18	不規則形	-	-	-	-	-	I B(5)
CIS-X-03	130×84×12	長方形	-	-	-	-	-	I B(6)
CIS-X-08	95×60×17	長方形	-	-	-	-	-	I B(6)
CIS-X-123	104×63×11	不規則形	-	-	-	-	-	I B(6)
CIS-X-119	-	-	-	-	-	-	-	I B(6)
22 不人間遺跡群	-	-	-	-	-	-	-	-
CIS-X-16	40×34×14	椭円形	-	-	-	-	-	I B(6)
CIS-X-25	91×74×58	不規則形	-	-	-	-	-	I B(6)
CIS-X-38	42×32×24	長方形	-	-	-	-	-	I B(6)
CIS-X-45	70×42×18	長方形	-	-	-	-	-	I B(6)
CIS-X-53	44×32×12	不規則形	-	-	-	-	-	I B(6)
CIS-X-31	51×37×12	ビット状の埋込み	-	-	-	-	-	I B(6)
24 宇代寺中庭跡	-	-	-	-	-	-	-	-
S-X-01	95×91×39	不規則形	進合形状	-	-	上部袋窓・小皿2・鉢2(青漆通貫)	石鏡(火を受ける)	II C(6)
S-X-02	122×85×49	長方形	進合形状	-	-	人骨・蝶形7・轆2・鍵	-	I B(5)
26 箱田中峯山遺跡	-	-	-	-	-	-	-	-
S-K35	上段107×60×12 下段10×34×12	直立な横円形	不定形	-	-	人骨片・骨片	一段掘・焦土塊	I B(5)
S-X-21	80×50	-	-	-	-	-	-	I B(6)
S-X-22	60×55	-	-	-	-	-	-	I B(6)
S-X-23	60×30	-	-	-	-	-	-	I B(6)
S-X-24	15×45	-	-	-	-	-	-	I B(6)
S-X-25	150×30	-	-	-	-	-	-	I B(6)
S-X-26	88×65×27	長方形	平底進合形	N-44°-W	-	火葬骨・土師質	振り込みあり	I B(6)
S-X-27	140×62×27	不規形	進合形	-	-	人骨片	振り込みあり	I B(6)
S-X-28	80×30	-	-	-	-	-	-	I B(6)
S-X-29	60×30	-	-	-	-	-	-	I B(6)
S-X-30	132×91×16	椭円形	進合形	-	-	火葬骨・埴輪(シイノキ葉)	振り込みあり	I B(6)
S-X-31	109×82×20	長方形	進合形	N-18°-W	-	人骨片・土師質	振り込みあり	I B(6)
S-X-32	172×89×15	不規形	進合形	N-29°-E	-	火葬骨	振り込みあり	I B(6)
S-X-33	76×72	-	-	-	-	-	-	I B(6)
27 楠成早原遺跡群	-	-	-	-	-	-	-	-
櫛状1集石53	110×60	-	-	-	-	-	-	I B
櫛状1集石64	120×60	-	-	-	-	-	-	I B
櫛状1集石75	140×100	-	-	-	-	-	-	I B
櫛状1集石86	160×100	-	-	-	-	-	-	I B
尾根1集石77	90×30	-	-	-	-	-	-	I B(6)
楕円1集石85	85×50	-	-	-	-	-	-	I B
弧形1集石79	250×150	-	-	-	-	-	-	I B
34 尾高御建山遺跡	方彫頭塚	-	-	-	-	上部質	若干の盛り土	II D
-	辺約0.5m	-	-	-	-	-	-	-
35 滝ノ坂遺跡	第1古事	200×80×60	椭円形	進合形	N-55°-W	石	盛り土あり	II D
第2古事	180×100×50	長方形	やや袋状	N-87°-W	鏡(電灯時代か)	盛り土あり	II D	

引用文献・参考文献

- 1・32.鳥取県教育委員会1977・1978『青木遺跡発掘調査報告書Ⅱ・Ⅲ』 2.倉吉市教育委員会1977『宮ノ下遺跡発掘調査報告』 3~7.鳥取県教育文化財団1981~1983『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書Ⅲ~VI』・鳥取県教育文化財団ほか1999『長瀬高浜遺跡Ⅲ・図6遺跡』 8~10.米子市教育委員会1981・1982『諭訪遺跡群発掘調査概報Ⅱ・Ⅲ』 11.倉吉市教育委員会1987『ごりょう塚古墳他発掘調査概報』 12.倉吉市教育委員会1983『打塚遺跡発掘調査報告書』 13.岸本町教育委員会『長者原遺跡群発掘調査報告書Ⅲ』 14.米子市教育委員会ほか1984『除田』 15.大榮町教育委員会1985『妻波古墓-発掘調査報告書-』 16.倉吉市教育委員会1992『福本家ノ古墓発掘調査報告書』 17.淀江町教育委員会1990『向山古墳群』 18.鳥取県教育文化財団ほか1992『福岡遺跡』 19.鳥取県教育文化財団ほか1994『天下塙遺跡』 20.鳥取県教育文化財団ほか1995『百塚第5遺跡・小波狭間谷遺跡・山上経前遺跡』 21.鳥取県教育文化財団ほか1996『除田遺跡群』 22.倉吉市教育委員会1995『不人間遺跡群発掘調査報告書』 23.倉吉市教育委員会1996『下野西遺跡発掘調査報告書』 24.鳥取県教育文化財団1996『鶴田荒神ノ峯遺跡・鶴田堀ヶ谷遺跡・宇代横平遺跡・宇内寺中遺跡』 25.倉吉市教育委員会1997『中峯古墳群発掘調査報告書』 16.鳥取県教育文化財団1997『鶴田墓ノ上遺跡・鶴田大遺跡遺跡・鶴田中峯山遺跡』 27.鳥取県教育文化財団1998『福成早原遺跡』 28.中山町教育委員会1998『細工塚遺跡Ⅱ』 29.鳥取県教育文化財団1998『御内谷遺跡群』 30.鳥取県教育文化財団2002『古市宮ノ谷山遺跡』 31.本報告書 32.倉吉市教育委員会1986『東山田1号墳発掘調査報告書』 33.米子市教育委員会・日下古墳群調査会1992『日下古墳群発掘調査報告書』 34.鳥取県教育文化財団ほか1994『尾高御建山遺跡・尾高古墳群』 35.名和町教育委員会1978『名和遺跡群発掘調査報告書』 中森 祥 2001.11「出土した五輪塔・宝鏡印塔-鳥取県西部を中心に-」『来待石を中心とした日本海文化』石造物研究会・来待ストーン客員研究会